OUKA
Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 中国と日本の変身譚の歴史的変遷に関する考察 ：狐、蛇、虎、犬、亀を中心に |
| Author(s) | 王, 貝 |
| Citation | 大阪大学, 2016, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/55711 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

**2015** 年度博士学位申請論文

# 中国と日本の変身譚の歴史的変遷に関する考察

## ――狐、蛇、虎、犬、亀を中心に――

大阪大学大学院言語文化研究科

言語文化専攻

王貝

# 凡例

一、本論文の章立ては、以下のような単位により構成された（単位の大きい順）。

| 単位 | 表記スタイル | 表記例 |
|---|---|---|
| 章 | **ゴシック、太字、14pt** | **第１章** |
| 節 | **ゴシック、太字、12pt** | **4.1** |
| 小節 | **ゴシック、太字、11pt** | **3.1.1** |
| 小々節 | **ゴシック、太字、10.5pt** | **3.1.3.6** |
| 項目 | **明朝、太字、10.5pt** | **狐の変身譚における道教の修行の思想の浸透** |
| 小項目 | 明朝、10.5pt、山かっこ付き | ＜李氏によるまとめ＞ |

二、引用した中国の資料の出典は、基本的に、『書名』・巻数または巻名・通し番号・「題目」の順で表示した。巻数は一律にアラビア数字で表した。なお、通し番号または「題目」のない場合は、これらの情報を省略した。

三、引用した日本の資料の出典は、基本的に、『書名』・巻数（上・中・下を含む）または巻名（通し番号のある場合は「巻数―通し番号」）・「題目」の順で表示した。巻数と通し番号はアラビア数字で表示した。「題目」のない場合は、「題目」を省略した。説経節および御伽草子は、「説経節/御伽草子『題目』」で表示した。

四、上記の中国の資料の書名・題目はすべて繁体字に統一した。日本の書名・題目はすべてもとの表記に従った。

五、話の要約に付随する〔　〕にある番号は、付録の資料の整理番号に対応するものである。

［例］　〔4.1.2-1〕は、付録の表 4.1.2 の 1 番目の話を指す。

六、本論文では、変身譚を**話**で数える。ただし、1 話の変身譚に、人が動物に変身する話と動物が人に変身する話が同時に存在する場合、もしくは明らかに 2 つの話が混じっている場合は、この 1 話の変身譚を 2 **例**と数える。例えば、抽出した虎の変身譚は話数で数えると 66 話であるが、例数で数えると 68 例となる。本論文では、変身譚を集計する際に、基

本的に「例」で数える。

七、参考文献においては、中国語の文献における著者の名前は、すべて常用漢字に統一した。論文の題目・本の題目・出版社などの情報は、もとの表記（簡体字もしくは繁体字）に従った。

# 目次

凡例 i

第 1 章 序論 1

1.1 研究背景と研究目的 1

1.1.1 本研究における変身譚の定義 1

1.1.2 研究背景 1

1.1.3 研究目的 1

1.2 研究対象 2

1.2.1 予備調査 2

1.2.2 選定基準 2

1.3 研究方法 4

1.3.1 研究材料 4

1.3.2 研究手法の手順 6

1.3.3 仏教要素が織り込まれた話の判断基準 6

第 2 章 先行研究および本研究の位置づけ 7

2.1 先行研究 7

2.1.1 中国の変身譚および志怪史に関する先行研究 7

2.1.2 日本の変身譚に関する先行研究 9

2.1.3 変身譚の比較研究 10

2.1.4 その他の関連研究 11

2.2 本研究の位置づけと意義 11

第 3 章 狐の変身譚 13

3.1 中国における狐の変身譚 13

3.1.1 中国における狐の変身譚の概観 13

3.1.2 中国における狐が変身した人の性別上の割合の変遷 14

3.1.3 狐が人間に変身することができる条件の変遷 20

3.1.4 狐の人間味 41

3.2 日本における狐の変身譚 49

3.2.1 日本における狐の変身譚の概観 49

3.2.2 日本における狐が変身した人の性別上の割合の変遷 50

3.2.3 狐が人間に変身することができる条件の変遷.....55
3.2.4 狐の人間味.....58
3.3 狐の変身譚の歴史的変遷の日中比較.....61
3.3.1 性別の割合の変遷の比較.....61
3.3.2 変身することができる条件の特徴の比較.....61
3.3.3 狐の人間味の日中比較.....62
第4章 蛇の変身譚.....65
4.1 中国における蛇の変身譚.....65
4.1.1 中国における蛇の変身譚の概観.....65
4.1.2 蛇が人間に変身するパターンについての考察.....70
4.1.3 人間が蛇に変身するパターンについての考察.....78
4.2 日本における蛇の変身譚.....83
4.2.1 日本における蛇の変身譚の概観.....83
4.2.2 蛇が人間に変身するパターン.....88
4.2.3 人間が蛇に変身するパターンについての考察.....95
4.3 蛇の変身譚の歴史的変遷の日中比較.....103
4.3.1 両国における蛇が人間に変身するパターン.....103
4.3.2 両国における人間が蛇に変身するパターン.....103
第5章 虎の変身譚.....105
5.1 中国における虎の変身譚.....105
5.1.1 中国における虎の変身譚の概観.....105
5.1.2 虎が人間に変身するパターンについての考察.....109
5.1.3 人間が虎に変身するパターンについての考察.....122
5.2 日本における虎の変身譚.....136
5.2.1 『新語園』に紹介された中国の虎の変身譚.....136
5.2.2 物語の中の共通的なパターン.....142
第6章 犬の変身譚.....143
6.1 中国における犬の変身譚.....143
6.1.1 犬が特定の人に変身する話の変遷.....143
6.1.2 犬が人間に変身するパターン.....146

6.1.3 人間が犬に変身するパターン ..... 148
6.2 日本における犬の変身譚 ..... 150
6.3 犬の変身譚の歴史的変遷の日中比較 ..... 155
第 7 章 亀の変身譚 ..... 158
7.1 中国における亀の変身譚 ..... 158
7.2 日本における亀の変身譚 ..... 170
7.3 亀の変身譚の日中比較 ..... 174
第 8 章 横断的考察 ..... 176
8.1 狐の変身譚の独特な要素――「内丹を錬成する」 ..... 176
8.2 動物の変身譚における皮による変身 ..... 179
8.3 日中両国における動物が女性に変身する話の変遷 ..... 181
8.3.1 中国における動物が女性に変身する話の登場と変遷 ..... 181
8.3.2 中国における動物が女性に変身する話の登場と変遷の背景 ..... 188
8.3.3 日本における動物が女性に変身する話の登場と変遷 ..... 196
8.4 日中両国における動物が人間へ、人間が動物へ変身する両パターンの割合 ..... 200
8.4.1 日中両国における両パターンの割合の比較 ..... 200
8.4.2 中国における虎の変身譚の両パターン ..... 202
8.5 日中両国における変身譚の中の仏教要素 ..... 203
8.5.1 狐・蛇・犬・亀の変身譚に、仏教要素が織り込まれた話の割合の日中比較 203
8.5.2 中国における虎の変身譚における仏教要素 ..... 205
8.5.3 日本の変身譚と仏教説話 ..... 206
8.5.4 日中両国における仏教が変身譚に与えた影響 ..... 207
参考文献 ..... 210
【日本語文献】 ..... 210
【中国語文献】 ..... 212
謝辞 ..... 215
【付録】本論文で使った変身譚の資料 ..... - 1 -

# 第１章 序論

## 1.1 研究背景と研究目的

### 1.1.1 本研究における変身譚の定義

日中両国において、動物が人間に変身する、あるいは人間が動物に変身するというような話は古くから数多く語られてきた。本来、「変身譚」という用語は人間と動物の間の変身の物語のみならず、人間と人間以外のものの間の変身の物語の全般をさしている 。本研究では、人間と動物の間の変身の物語を研究対象とするため、人間と動物の間の変身譚を「変身譚」と略称する。また、人間と人間以外のものの間の変身譚の全般を指す際に、「広義の変身譚」と呼ぶことにする。

### 1.1.2 研究背景

変身譚は、その時代の人々の動物に対するイメージの一種の現れであり、物語が誕生した時代の文化や思想を反映している。社会文化や思想が時代とともに変化していくのと同様に、動物と人間の間の変身の話も時代の流れとともに変遷していく。人間と動物の間の変身譚が登場してから、現在に至るまで、中国の場合では 2 千年、日本の場合では数百年の間に、どのような歴史的変遷があるのか。この問いに答えるために、変身譚にとって歴史的変遷に関する考察、つまり時代の流れを考慮した通時的な変身譚の研究が極めて重要だと考えられる。一方、日中両国においては、変身譚の歴史的変遷に関する研究は少ない。岡田（2010）、永藤（2000）、夏（2007）のように、時代もしくは類書を切り口として変身譚を分析した研究はいくつか存在するが、これらの研究は変身譚を通時的に考察するものではない。従来は変身譚の通時的研究が十分になされていない。

### 1.1.3 研究目的

本研究では、研究対象となる動物の変身譚を幅広く調査し、各動物の変身譚を性別の割合、変身の原因・目的、変身の条件などの角度から、日中両国においてこれらの動物の変身譚の歴史的変遷について考察を行う。また、日中両国の変身譚の歴史的変遷の特徴を比較し、歴史的変遷に影響を与えた中国と日本の文化的要素について、その共通性と異質性を明らかにする。

## 1.2 研究対象

### 1.2.1 予備調査

中国の変身譚について、予備調査として『太平御覧』の巻 881～巻 951（「神鬼部」「妖異部」「獣部」「羽族部」「鱗介部」）から、変身譚を抽出した。その結果、52 種類の動物にまつわる 119 例の変身譚があることがわかった。日本においては、中村(1984)の付録「動物名索引」によれば、変身譚に登場した動物は 92 種類ある。日中両国において、さまざまな動物が変身譚に登場したことがわかる。

変身譚に登場した動物の出現回数について、『太平御覧』の巻 881～巻 951 を調査した結果、変身譚の中に出現回数がもっとも多い動物は虎（16 回）であることが分かった。その他、出現頻度の高い動物として、狸（8 回）、犬（8 回）、狐（7 回）、鹿（5 回）、魚（5 回）、蛇（5 回）が挙げられる。また、亀類（黿や鼈、亀）も 5 回出現した。

中村（1984）表序－3[1]「日本昔話における人から動物への変身」 および表序－4[2]「日本昔話における動物から人への変身」を合わせて、変身譚の中に出現回数の多い動物として、キツネ（30 回）、タヌキ（13 回）、トリ（21 回）、ヘビ（14 回）が挙げられる。

また、日本の変身譚においてどのような動物が登場の時代が早いかについては、中村（1984）表 1-1「『古事記』『日本書記』『風土記』における動物から人への変身」および表 1-2「『古事記』『日本書記』『風土記』における人から動物への変身」を参考した。日本において、奈良時代にすでに変身譚に登場した動物として、ヘビ、カメ、イヌ、白トリ、ムジナ、ワニ、タツ、ウ、シカが挙げられる。

### 1.2.2 選定基準

本研究は、動物の変身譚を通時的に考察するため、研究対象となる動物に関する変身譚の数と各時代における分布が重要である。また、日本側の資料については、変身譚の日中比較を行うために、可能な限り中国からの影響を排除する。日本における変身譚の初登場が早い動物を優先的に考察する。そのほか、日中両国において、家畜に対するイメージが異なると考えられるため、その代表として変身譚の数（以下、例数）が多い家畜を 1 種類選び、研究対象に加える。

1.2.1 の予備調査は、日本については『日本昔話』、中国については『太平御覧』の出現

[1] 中村（1984）、p.11 序章の表 3。
[2] 中村（1984）、p.12 序章の表 4。

頻度を調査した。その結果、狐は『日本昔話』において出現頻度がもっとも高い動物であるため、研究対象とした。『太平御覧』において出現頻度がもっとも高い虎は、中国の変身譚の全体像を見る参考になると考え、研究対象とした。

また、日本において登場が早い動物の中の蛇と亀（亀類）は『日本昔話』と『太平御覧』のいずれにおいても出現頻度が比較的高いため、研究対象とした。

家畜動物として、『太平御覧』に出現回数が比較的に多く、日本の変身譚において登場の早い犬を選定した。

上記のように、研究対象として選出した動物は狐・蛇・虎・犬・亀（亀類）である。

## 1.3 研究方法

### 1.3.1 研究材料

変身譚の記述のある文献のジャンルは多岐にわたるため、資料の網羅性が重要だと考えられる。そのため、複数の情報源から資料を収集する。

**中国側の資料**

中国側の場合は、類書の『太平御覧』と『太平廣記』[3]を主な資料として、変身譚を抽出した。また、必要に応じて、1725年に成立した『古今図書集成』[4]を補足資料として使用した。そのほか、宋以降の資料の補足として、先行研究で言及された物語を手作業で調査した。なお、先行研究を手掛かりとし、手作業で調査した文献は、以下のとおりである。

狐の変身譚を抽出する際に、『夷堅志』・『湖海新聞夷堅志』・『獪园』・『閱微草堂筆記』・『醉茶志怪』を調査した。清代において、狐の変身譚が非常に多く書かれたが、本論文においては、主に『閱微草堂筆記』と『醉茶志怪』を中心に調べた。この2つの作品を中心に調べた理由として、以下の2点が挙げられる。①『閱微草堂筆記』は狐の変身譚の収録数がもっとも多い作品である。李（2002）は、清代において、狐の怪異の話が、「乾隆帝と光緒帝の時代に集中している。（これらの作品の）中でも、『閱微草堂筆記』は、（狐の怪異の話）に関する記載がもっとも多い[5]」と指摘している。②光緒帝の時代の1892年に成立した『醉茶志怪』は、『聊齋誌異』などの作品の影響を受けたとされている[6]。この作品は成立時代が清代の末期で、その前の清代の狐の変身譚の影響を受けたため、清代の狐の変身譚の全体像を反映した作品となる。上記の2つの理由をもって、『閱微草堂筆記』と『醉茶志怪』は清代の狐の変身譚の代表的な作品として、清代の狐の変身譚を研究するための相応しい材料であると考えられる。そこで、本研究では、清代の狐の変身譚について、『閱微草堂筆記』と『醉茶志怪』を中心に調べた。

また、蛇の変身譚を抽出する際に、『夷堅志』・『剪燈新話』・『古今說海』・『警世通言』・『西湖佳話』・『閱微草堂筆記』・『聊齋誌異』を調査した。虎の変身譚を抽出する際に、『閱

[3] 中国哲学書電子化計画データベース、2015年3月24日付更新データを利用。http://ctext.org/zh/。
[4] 古今図書集成全文資料庫データベース、2003年10月6日付更新データ（Version 1.0.1）を利用。http://210.60.55.29/book/。
[5] 李剣国（2002）、p.296では、「集中在乾隆、光绪二期。就中《阅微草堂笔记》所记最多」と述べている。
[6] 李剣国（2002）、p.320では、「《醉茶志怪》四卷，李庆辰作于光绪壬辰十八年（1892）。作者自叙开头即提到《聊斋志异》和《阅微草堂笔记》，说明作者是接受此二书影响写作本书的」と述べている。

微草堂筆記』を調査した。犬の変身譚を抽出する際に、『閑微草堂筆記』・『醉茶志怪』を調査した。

**日本側の資料**

日本の場合は、上代、中古、中世、近世に渡る 87 作品を収録したジャパンナレッジの「日本古典文学全集」データベース[7]を主な資料として利用し、変身譚を抽出した。補足資料としては、大系本文古典文学データベース[8]を使用した。また、先行研究で言及された変身譚を手作業で調査した。先行研究を手掛かりとし、手作業で調査した文献は、以下のとおりである。

狐の変身譚を抽出する際に、『法華驗記』、『和名類聚抄』、『古事談』、『御伽草子』、『玉藻前の草子』、『室町物語草子集』、『室町時代物語大成』、『説経節　山椒太夫・小栗判官他』、『本朝食鑑』、『老媼茶話』、『新著聞集』、『三州奇談』、『三州奇談後編』、『耳袋』を調査した。蛇の変身譚を抽出する際に、『法華驗記』、『神道集』、『三州奇談』、『老媼茶話』、『諸国百物語』、『想山著聞集』、『室町時代物語大成』、『説経節』、『御伽草子』を調査した。虎の変身譚を抽出する際に、『新語園』を調査した。

データベースを用いて検索する場合、キーワードの設定にあたっては、対象動物の異名および異体字の存在を配慮する必要がある。そのため、対象動物のそれぞれの名前、異名をキーワードとして検索した。狐の場合では「狐」をキーワードとして検索した。蛇の場合では、日本と中国両方において、「蛇」、「虵」をキーワードとして検索した。また、日本の場合、「おろち」、「まむし」をキーワードとして追加して検索した。虎の場合では、「虎」以外に、「大虫」で検索した。犬の場合では「犬」と「狗」をそれぞれキーワードとして検索した。亀の場合では、日本と中国両方において、異体字の「龜」、亀類の「黿」・「鼈」をキーワードとして検索した。

なお、網羅性に配慮した資料の収集を行ったが、資料としては網羅的ではなく、抜け落ちた資料が存在する可能性がある。本研究で取り扱った資料は、大まかな傾向を示すための資料とする。

[7] http://japanknowledge.com/lib/search/koten/。2014 年 4 月付更新データを利用。
[8] http://base3.nijl.ac.jp/。2014 年 6 月 27 日付更新データを利用。

### 1.3.2 研究手法の手順

まず、データベースを利用して狐・蛇・虎・犬・亀の変身譚を収集し、手作業で資料の範囲を広める。

次に、前述の５つの動物に対して、性別の割合、変身の目的・理由、変身の条件などの角度から日中両国における変身譚をそれぞれ時代ごとに分析し、その歴史的変遷について考察を行う。

さらに、中国側と日本側の分析結果を比較し、中国と日本における変身譚の共通性と異質性を明らかにし、その原因について考察を行う。

最後に、研究対象となる動物の変身譚に対して、次の２点を通して、横断的な考察を行う。①独特な要素を有する動物に対して、その独特な要素について考察を行う。②日中両国の各動物の変身譚に対して、比較を行い、歴史的変遷に影響を与えた、中国と日本の文化的要素における共通性と異質性を明らかにする。

### 1.3.3 仏教要素が織り込まれた話の判断基準

変身譚においては、仏教要素がしばしば見られる。特に、蛇の変身譚や犬の変身譚には、仏教の影響が色濃く見える（本論文 4.2.3.2 および 6.3 参照)。本研究では、仏教要素の有無を判断する際に、以下の基準を持って判断する。変身譚の構成上重要なポイント（変身原因・変身する人または変身先の人・退治方法・物語の構成）において、仏教の因果応報・僧や和尚・仏経・六道輪廻が明記されている場合は仏教要素が織り込まれた物語と判断する。

なお、変身の原因の面において、民間俗信・道教にも仏教の因果応報、輪廻転生に類似する「報い」、「死んだ後の変身」の考え方が存在する。このような場合には、物語が発生した場所（寺)・関わりのある人（和尚や僧)・仏教の教えがあるといった条件と合わせて、これらの面においても仏教に関する要素があった場合は仏教要素の織り込まれた物語と判断する。

第８章では、上記の判断基準に基づいて、日中の仏教要素が織り込まれた話の割合について考察を行う。

# 第 2 章 先行研究および本研究の位置づけ

## 2.1 先行研究

### 2.1.1 中国の変身譚および志怪史に関する先行研究

#### 2.1.1.1 中国の変身譚に関する先行研究

変身譚を対象とする研究のうち、時代に着目した代表的な研究として、富永（1978）、岡田（2010）が挙げられる。岡田（2010）では、先秦時代の広義の変身譚を概観し、その特徴が論じられている。特に先秦時代の広義の変身譚における変身の理由に着目し、死が介在する再生の変身が圧倒的に多いほか、刑罰・遺恨といった受動的な変身が多いと結論づけている。富永（1978）は、「二　六朝説話に見える変身談」において、六朝時代の変身譚全般を「異類から人に変わる話」と「人間が異類に変わる話」に分け、それぞれの中の主要なパターン（例えば：異類から人に変わる話の中の異類婚姻譚、人間が異類に変わる話の中の神話、ものの謂[9]を説明する変身譚、仙術による変身譚、老人の変身譚など）について例を挙げて紹介した。

また、『太平廣記』などの類書における変身譚についての研究も多い。例えば、夏（2007）は『太平廣記』の中の虎の変身譚を分析した。張美娟、張美華（2007）は『太平廣記』の中の虎・狐・狼と女性の間の変身譚について考察を行った。

中国の変身譚全般を対象とする研究としては、岡田（2001）が挙げられる。岡田（2001）は、変身譚の発生と発展を支える思想的要素、すなわち中国における変化に対する観念の角度から、中国の変身譚を考察した。また、岡田は中国の変身譚を「動物への変身――神話・仙話」、「動物への変身――人間」に分け、それぞれ変身の原因に注目して論じている。さらに、各時代の変身譚の大まかな特徴にも言及している。岡田の研究においては、変身譚の特徴を説明する際に、文化的背景も絡めて論じたため、本研究では、岡田の研究成果を考察の助けとする。岡田（2001）の第 2 の部分において、「変身術」の角度から、六朝と唐代の「化虎譚」[10]を①仙人・道士の方術による変身、②他者を虎に変身させる術、③神罰や罪業、あるいは変身を伴う疾病、④異民族の妖術という 4 つの「変身術」のパターンにまとめたが、虎の変身譚の歴史的変遷に言及していない。

#### 2.1.1.2 中国の志怪史に関する先行研究

[9] 富永（1978）、p.6 より。人間が異類に変身する話の 1 つのパターンを指す。
[10] 岡田は、人間が虎に変身する話を「化虎譚」と称している。

中国において、変身譚は小説史[11]の研究、特に志怪[12]・伝奇小説[13]史の研究の中で言及されることが多い。小説史に関する代表的論考としては、魯迅の『中国小説史略』が挙げられる。志怪・伝奇小説史に関する代表的な論考としては、李剣国の『唐前志怪小説史』、『唐五代志怪伝奇叙録』、『宋代伝奇叙録』が挙げられる。李の一連の研究書では、各時代の志怪小説・伝奇小説の作品を通覧し、考証を行った上で、それぞれの時代の作品の特徴を分析している。本研究では、変身譚を時代ごとに考察する際に、上記の魯・李の研究における志怪小説、伝奇小説をはじめ小説の発展プロセス（志怪史）、および社会・文化背景についての論考を参考にする。

なお、李は上記の一連の研究において、各時代における志怪小説・伝奇小説の特徴を通時的に考察しているが、変身譚については言及する程度にとどまり、変身譚の歴史的変遷については論じていない。

以下では、中国の志怪史について整理しておく。

変身の物語は古くから「怪異」と見做され、変身譚は「志怪」と呼ばれる怪異の記録に属している[14]。上古から先秦時代、漢代にかけて、怪異の記録は独立したジャンルとして成立しておらず、そのほとんどは思想書や地理博物誌、歴史書に記載されていた。この段階は志怪小説が成立する前の段階であり、怪異についての記述は短くてあまり文学性が見られないが、記録された怪異のことはその後の志怪小説の材料として用いられた。

魏晋南北朝に入ると、宗教と迷信が流行していた社会文化背景の下で、志怪小説という

---

[11] 本研究における小説史の取り扱い対象については、魯迅と李剣国の小説史研究を参考にした。小説史の取り扱い対象として、上古の神話伝説、地理博物誌、両漢の雑史と雑伝、志怪小説、伝奇小説などが含まれている。

[12] 「志怪」という語の初出は『荘子』であるが、怪異を記録するという意味で使われた。六朝時代になると、「志怪」は書名として使われるようになり、のち志怪書の通称となった。唐の段成式から、「志怪」を一種の小説とし、『酉陽雑俎序』では「志怪小説之書」とされる。「志怪小説」という名称は魯迅の『中国小説史略』ではじめて定着した。志怪小説史の研究対象は、上古の神話伝説、地理博物誌、両漢の雑史と雑伝、魏晋南北朝の志怪小説、および唐伝奇と併存していた一部の志怪小説（例えば『廣異記』,『獨異誌』）である。（李剣国『唐五代志怪伝奇叙録』、pp. 25-26）

[13] 魯迅『中国小説史略』第八篇によると、「伝奇」と「志怪」は、創作意識と審美特徴の面において異なるとされる。「伝奇」を志怪と筆記小説と区別し始めたのは、南宋の謝采伯『密齋筆記』である。（李剣国（1993）、p. 7。）「志怪小説」から「伝奇小説」へと移り変わる糸口は南朝志怪小説集の『續搜神記』（『搜神後記』とも呼ぶ）にすでに見受けられる。しかし、しばらくの間、六朝志怪の継続である唐代志怪は唐伝奇と併存していた。とはいえ、志怪の中の美学的要素が目立つようになってきた。美学的要素が目立つようになることにつれ、六朝志怪小説と唐以前の歴史伝記小説（例えば『穆天子傳』など）の総合影響の下で、唐伝奇が登場した。宋代にも伝奇小説が存在するが、宋伝奇と呼ぶ。（李剣国（1993）、p. 17-18。）

[14] 岡田（2001）、pp. 84-85 では、「怪異の素朴な記録ともいうべき、六朝志怪から出発した中国の古典小説は、唐代に至って飛躍的な発展を遂げた（中略）続く宋代、変身譚は再び怪異の記録としての性格を強め…」と述べている。

怪異の話を取り扱う独立したジャンルが成立しはじめた[15]。志怪小説の成立と発展は、唐代の伝奇小説の成立と発展の基礎となった。唐に入ると、経済の発展とともに、大衆文学に対する需要が増加した。この社会背景の下で、仏教と道教の隆盛に伴って、志怪小説の発展も加速した。その結果、中唐以降[16]、より文学性の高い唐代伝奇が数多く書かれた。宋代・明代になると、志怪小説は衰退した。魯迅は『中国小説史略』で、宋代の志怪小説について、以下のように述べている。「宋一代の文人が作った志怪は、平板なうえに文彩に乏しい。その伝奇もまた多くは往事に託して近聞を避け、古を真似て遠く及ばず、それ以上に言うべきほどの独創すらない。[17]」つまり、宋代の志怪は前の時代を引き継いだが、新しい発展がない。

### 2.1.2 日本の変身譚に関する先行研究

日本の変身譚の全般を対象とする研究書としては、中村（1984）が挙げられる。中村は古代から近世に至る変身譚を概観し、日本人の動物観の歴史を辿っている 。中村は、動物の種類に拘らず、変身譚全般を①古代の変身譚、②中古・中世の変身譚、③近世の変身譚に分けて、それぞれの時代の変身譚の例数を集計し、変身譚の特徴と社会背景について述べている。

日本の変身譚全般を取り扱う研究としては、他に、岡田(2003)が挙げられる。岡田(2003)は、中村（1984）の論考を踏まえ、日本の変化観[18]との変身譚中の「変身術」に着目した。主要な結論として、以下の 4 つが挙げられる。①上古の文献において、変身現象を支える自然観や宗教意識についての記載が見当たらないが、アニミズム（精霊信仰）的な自然信仰の中で、人と動物・動物神との間に交流しあう通路があった。②中古・中世において、変身譚が輪廻転生･因果応報の思想の強力な磁場に吸い寄せられていた。③近世において、動物から人への変身譚の数は増えたものの、総じて中国の多彩さには及ばない。少数派と

[15] 志怪小説という独立したジャンルが形成した原因として、李剣国（2001）は①宗教と迷信広がって盛んになったこと、②知識人の間に語り合うことが風潮になったこと、③知識層が文学作品の創作に励んだことという 3 つの原因を挙げている。（李剣国（2011）、p.267「魏晋南北朝志怪小说之所以繁荣和取得进步，最根本的原因是此期宗教迷信的昌炽及其影响广泛；其次谈风的盛行，促使了志怪故事的产生、传播和集中；另外，文人著述的活跃和文学创作的发展对志怪小说的创作和艺术进步也起着十分重要的推动作用。」）

[16] 安史の乱（763 年）以降。

[17] 魯迅『中国小説史略』上海古籍出版社、1998 年、p.71 は「宋一代文人之为志怪，既平实而乏文彩，其传奇，又多托往事而避近闻，拟古且远不逮，更无独创之可言矣。」と述べている。訳は魯迅著　中島長文訳注『中国小説史略 1』（全 2 巻）、平凡社、1997 年、p.307 による。

[18] 岡田は、「変化に対する観念」を「変化観」と称している。

なった人から動物への変身は、因果応報の転生譚が中心を占めている。④変身術の面において、神の変身能力・幻術がある。ただ日本の幻術には、人を動物に変身させる術は本来なく、また薬物や植物による変身という発想もなかった。

本研究では、上記の 2 つの研究における変身譚全般の考察から得られた時代的特徴と文化的背景を参考にし、上記の 2 つの研究と異なる視点から変身譚の歴史的変遷を見ていく。日中の変身譚を比較するために、共通の視点から、日中両国の変身譚を分析・考察する。

日本においては、特定の作品に注目し、その中の変身譚を類型化する研究が多数を占めている。例えば、永藤（2000）は、『今昔物語集』における異類変身譚の「場所」という要素に着目し、川や橋などの境界的な場で起こった「境界型」と、大物主の話のようなうつぼ状の密閉空間で起こった「密閉型」という 2 つの類型に分けた[19]。これらの研究の中では、変身譚の歴史的変遷について言及していない。

### 2.1.3 変身譚の比較研究

変身譚の比較研究では、西洋と日本の変身譚を比較する研究が多い。

中村（1984）は序章で、岩波文庫版『グリム童話』と柳田国男・他編『日本昔話記録』に基づき、西洋と日本の動物に対する考え方を比較した。この研究においては、「動物は隔絶した存在であるかどうか」を尺度としており、西洋では人間と動物の隔絶観（支配する・支配される関係）が明確であるのに対し、日本人は人と動物が隔絶した存在ではないとする動物観を持っていると結論付けている。

また、太田伸広（2012）は、①『日本の昔ばなし』では人間が動物に変身した後、人間には戻らないが、グリム童話では基本的に人間に戻る。②『日本の昔ばなし』における変身譚は神罰などがあるにもかかわらず宗教的でないが、グリム童話における変身譚は神様が登場しないのに宗教的である。③『日本の昔ばなし』における動物の人間への変身は、動物が人間に変身し、その後もう一度動物に戻るが、グリム童話では本当の動物が人間に変身する話は 1 話しかない。④『日本昔ばなし』は動物を人間として迎え入れ、子供ももうけるが、グリム童話にはそのような話は 1 話もないという 4 つの考察結果を提示し、西洋人の動物への視線は「蔑み」であるのに反し、日本では動物と人間を隔てる壁は低いと指摘している。

[19] 永藤（2000）、p. 31。

上記 2 つの研究において、日本と西洋の間でこのような差異が生じた理由について、中村（1984）は、①ヨーロッパ神の世界の一神教と日本人における多神教および仏教思想の相違、②前者の牧畜生活の肉食の伝統、後者の農耕生活と米食の伝統の相違という 2 点を挙げている。太田も文化的・宗教的相違が存在するため、日本と西洋の変身譚が異なると述べている 。つまり、日本と西洋の変身譚に差異が生じた原因として、両研究はともに宗教的背景が異なるということを指摘している。

一方、日本と中国の変身譚は、日本と西洋に比べ、仏教など似たよう宗教的背景が存在している。そのため、日中の変身譚を比較する際に、日本と西洋の変身譚の比較尺度をそのまま適用することができない。

日本と中国の変身譚の比較研究は少ないが、代表的なものとして、李鵬飛（2010）が挙げられる。李鵬飛（2010）は、日本の奈良時代と平安時代の変身譚のうち日本の独創と考えられる要素（妖怪の視点からの叙述、ストーリーの流れや描写が詳細など）に注目し、分析を行っている。このように日本と中国の変身譚の比較研究では、ある時点に着目した共時的研究が多数を占めており、通時的な研究が十分に行われていない。

### 2.1.4 その他の関連研究

動物を考古学、宗教民俗学、芸術などの視点から考察する研究、すなわち文化の中の動物に関する研究も存在する。代表的な研究として、吉野（1979）、吉野（1980）、李（2002）、汪（2007）が挙げられる。しかし、吉野（1979）、吉野（1980）、汪（2007）は変身譚への言及があるが、通時的には考察していない。特定の動物の文化を通時的に考察している研究は李（2002）のみである。

## 2.2 本研究の位置づけと意義

日本と西洋の変身譚の比較研究においては、日本と西洋の代表的物語集（『日本昔話記録』、『グリム童話』など）を対象とし、これらの作品に収録された変身譚を扱う比較研究が多い。そして、両国の文化的宗教的背景がかなり異なるという結論を導き出すのは一般的である。

しかし、中国と日本の変身譚には似たような文化的要素（仏教など）が存在しているため、上記の研究手法では、両者の相違点を見出すことは難しいと思われる。そのため、本研究では、狐・蛇・虎・犬・亀という 5 つの動物に対して、それぞれ特定の動物の変身譚

の歴史的変遷を比較することで、日中両国の同一・類似する動物に対する考え方の類似点と相違点を見ることができる。

また、中国と日本おいて、時代の流れを考慮する通時的な考察、つまり変身譚の歴史的変遷に着目した研究は少ない。また、中国と日本における同一・類似する動物の変身譚に関する比較研究も少ない。

そこで、本研究は、研究対象を 5 つの動物に絞り、それぞれの動物の変身譚の歴史的変遷を考察する。その際、統一した視点から日中比較をし、これらの動物の変身譚の歴史的変遷における日中間の共通性と異質性を分析する。また、この分析結果をもとに、これらの変遷に影響を与えた文化的要素を推測する。

# 第 3 章 狐の変身譚

## 3.1 中国における狐の変身譚

中国において、狐の変身譚は数多く存在している。特に狐が人間に変身する話が圧倒的に多い。

本節では、狐が人間に変身する話の変遷を、①狐が変身した人の性別上の割合の変遷、②狐が人間に変身することができる条件の変遷（すなわち、どのような条件を満たせば狐が人間に変身できるか）③狐の人間らしい感情・行動が描かれた話の変遷という 3 つの角度から考察する。

3.1.1 では、狐の変身譚を概観する。具体的に、各時代の変身譚の数を提示する。

3.1.2 では、狐が変身した人の性別上の割合の変遷を考察する。具体的には、狐が変身した人の男女の割合の時代的変化を分析し、変化の原因について考察を行う。

3.1.3 では、狐が人間に変身することができる条件の変遷について考察を行う。

3.1.4 では、各時代における狐の人間味が描かれた話について考察を行う。

### 3.1.1 中国における狐の変身譚の概観

データベースおよび手作業で調査した結果、漢代から清代までの間に書かれた計 152 例の狐の変身譚を抽出した。狐の変身譚の全体像を把握するために、抽出した各時代の狐の変身譚の例数を表 3.1.1 に示す。

表 3.1.1　各時代の狐の変身譚の例数

| 時代 | 例数 |
|---|---|
| 漢代 | 1 |
| 晋代 | 6 |
| 南北朝 | 2 |
| 唐代 | 30 |
| 五代 | 1 |
| 宋代 | 15 |
| 元代 | 6 |
| 明代 | 11 |

| | |
|---|---|
| 清代 | 80 |
| 合計 | 152 |

表 3.1.1 から、以下の 3 点が見て取れる。

①狐の変身譚が初めて登場したのは漢代である。南北朝は志怪小説の集大成の時期であるにもかかわらず、狐の変身譚はあまり書かれていない。各時代の狐の変身譚が書かれた数から見ると、漢代から南北朝時代までは、狐の変身譚の「萌芽期」と言える。

②唐代になると、狐の変身譚の数が急増した。唐代は狐の変身譚の成長期と言える。

③清代は狐の変身譚がもっとも多く書かれた時代であり、狐の変身譚の成熟期と言える。

### 3.1.2 中国における狐が変身した人の性別上の割合の変遷

抽出した 152 例の変身譚には、狐が人間に変身した後の様子（例えば、「美人」や「老人」など）に関する記述が含まれるものが多数存在している。変身後の性別が明示されていない 6 例を除く、すべての話で、変身後の性別がわかる。

本節では狐が変身した人の性別上の割合の変遷を考察する。なお、男女の両方に変身する話がいくつか存在するが、男女の両方に変身する話は、単に狐が自在に変身できることを表し、変身後の性別自体に意味がないため、男女の両方に変身する場合および変身後の性別が不明な場合は「その他」にする。「その他」の例をいくつか挙げよう。

『抱樸子』内篇巻 3「對俗」[20]には、狐の変身について、以下の内容がある。

> 狐・狸・山犬・狼は、皆寿命が八百歳である。満五百歳になると、しばしば人の姿に変化する。〔3.1.1-3〕

上記の記述においては、狐が人間に変身するとしているが、性別については言及していないため、変身後の性別を「その他」とする。

また、『閱微草堂筆記』巻 2「景城有劉武周墓」[21]の話の要約は以下のとおりである。

> 劉炫の墓に、昔から狐がいて、時に酔っぱらった人をからかった。里に、陳雙とい

[20] 王明著『抱樸子内篇校釋』、新編諸子集成、中華書局、1996 年、p. 48。現代日本語訳は筆者による。
[21] 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、pp. 30-31。

う酒好きな人がいた。このことを聞いて、怒って、「この獣、よくもそんなことを」と言った。陳雙は墓の所を訪ね、数えたてて責め罵った。その時、墓の付近で農作をしていた人が、皆陳雙の父親が墓の横に座って、陳雙が跳梁して大声で叫んでいるのを見た。農作をしている人たちが陳雙に、「あなたは酔っぱらってここに来て、かえって自分の父親を罵るのだ」と彼を叱った。陳雙がよく見ると、確かに自分の父親だった。彼は恐れて叩首してお詫びした。父親はすぐに小走りに家に帰った。陳雙は父親を追いかけながら、許しを乞うた。村の外まで追いかけて、ひれ伏いて事情を述べはじめた。突然彼は婦人たちに囲まれて、「陳雙はなぜ自分の妻を跪いて拝んでいるのか」と笑われた。陳雙は顔を上げて上を見ると確かに自分の妻であった。彼はびっくりして、ぼんやりと立った。妻もすぐに小走りに家に帰った。陳雙はあわてて家に帰った。父親と妻は家から出ていなかった。陳雙は、先ほどのことは全部狐が悪ふざけして化かしたのだと知った。陳雙は恥ずかしくて、数日家から出ることがなかった。〔3.1.1-76〕

この話において、狐は陳雙の父親と陳雙の妻に変身した。前述のように、この話において、狐は男女の両方に変身するが、単に狐が自在に変身できることを表し、変身後の性別自体に意味がないため、このような男女の両方に変身する場合を「その他」の項目に入れる。

「その他」に入れた、変身後の性別が示されていない例、および男女ともに変身する例は合計 25 例ある。

### 3.1.2.1 時代別狐の変身後の性別の割合の変遷

「その他」の例を除き、狐が人間に変身した後の性別に関する記述が含まれる 127 例の中で、女性に変身した例は 85 例あり、67%を占める。つまり、狐の変身譚の中では、狐が女性に変身する例が 2/3 と多い。では、変身後の性別の割合は、時代とともにどのように変化したのか。時代別に変身後の性別数と割合を以下の表 3.1.2.1 に示す。

**表 3.1.2.1 狐が人間に変身した後の性別（括弧内は変身譚の例数）**

| 時代 | 男性 | 女性 | その他 |
|---|---|---|---|
| 漢代 | 100%（ 1） | 0%（ 0） | 0%（ 0） |

| | | | |
|---|---|---|---|
| **晋代** | 33%（ 2） | 33%（ 2） | 33%（ 2） |
| **南北朝** | 50%（ 1） | 50%（ 1） | 0%（ 0） |
| **唐代** | 43%（13） | 37%（11） | 20%（ 6） |
| **五代** | 0%（ 0） | 100%　（ 1） | 0%（ 0） |
| **宋代** | 13%（ 2） | 87%（13） | 0%（ 0） |
| **元代** | 16%（ 1） | 68%（ 4） | 16%（ 1） |
| **明代** | 27%（ 3） | 46%（ 5） | 27%（ 3） |
| **清代** | 24%（19） | 60%（48） | 16%（13） |
| **合計** | 28%（42） | 56%（85） | 16%（25） |

表 3.1.2.1 に示したように、漢代から唐代までは、狐が男女のいずれに変身するかについては、特に傾向が見られないが、男性に変身する話がやや多い。宋代になると、状況が一変し、狐が女性に変身する変身譚が急激に増え、狐はほとんど女性に変身する。その後は、狐が女性に変身する変身譚の割合は宋代よりは低くなったが、元・明・清においても、依然として女性に変身する話の割合が高い。

### 3.1.2.2 性別の割合の変化の原因

李（2002）は、「狐は顔が美しい。狐の顔は三角形であり、優しい女性の顔に似ている…このように、審美上、狐と美女は同じものと認める心理を築きやすい」[22]と指摘している。全体的に見て、狐の変身譚において、狐が女性に変身する話が多いことは、李が指摘している狐の特徴に関わっている可能性がある。

唐代以前に、男性に変身する話がやや多いことは、詩経における雄狐に関する記述と関連がある。中塚(1999)は「そもそも狐が淫蕩であるという考えの誕生は古い。『詩経』において“雄狐”は淫蕩な男、女を誘う男に喩えられている[23]」と述べている。『詩経』における雄狐の話は、『詩経』「斉風・南山」の「南山崔崔 雄狐綏綏 魯道有蕩 齊子由歸 既曰歸止 曷又懷止[24](南山はうねうねと　雄狐はぶらぶら　魯への道は平らか　齊の姫さまお嫁

[22] 李(2002)、p.73 では、「狐的面容是美丽的，狐面呈三角形，颇似柔媚的女人脸……这样在人的审美心理上，很容易建立起狐和美女的心理认同关系。」とされる。
[23] 中塚(1999)、p.74。
[24] 日本語訳は白川静訳注『詩経国風』、東洋文庫 518、平凡社、1990 年、p.301 を引用した。白川は「構成」で、「雄狐は女を伺う男」とし、「語釋」で、「雄狐　ものほしげな男をたとえる」と述べている。

入り　もう歸いでしもうたのよ　どうしてそんなに慕うのか)」を指している。唐代以前の狐の変身譚では、狐が男性に変身する話がやや多い原因として、春秋時代に成立した『詩経』において、狐が男性と結びつけられたことに影響されたことが挙げられる。

時代が下るにつれ、女性に変身する話の割合が高くなってきた原因として、「女色禁忌」[25]の思想の影響力が強まってきたということが挙げられる。このような思想的背景の下で、「女性に変身した狐が男を惑わす」というモチーフが、「女色禁忌」の思想を表すもっとも都合のいいモチーフとなった。

この考えは、「阿紫」の話から始まるものとされている。晋代に書かれた狐が女性に変身する話として、女性に変身した狐が男を惑わす『搜神記』巻 18（425）「阿紫」[26]の話が挙げられる。話の要約は以下のとおりである。

> 西海都尉の陳羨の部曲[27]王靈孝が、理由もなく逃走した。陳羨は、これは妖怪（魅[28]）の仕業に違いないと言い、猟犬を連れて捜したところ、墓穴の中にいる王靈孝を発見した。墓穴の中の化け物が人と犬の音を聞いて、逃げた。捕まえられた王靈孝は、狐の姿に似ており、ただ「阿紫」と泣き叫んだ。十日余り後、王靈孝は正気に戻った。彼は、「家の鶏小屋付近に、阿紫と自称する美しい婦人が現れ、私を招いた。このようなことが何回も起って、ふと彼女について行ってしまった。私は彼女を妻とし、夕暮れになると、一緒に彼女の家に帰った。犬に遇っても気づかなかった。」と語った。道士は、「これは山の魅だ」と言った。『名山記』には、「狐は千古の淫婦である。その名を阿紫と言い、狐に変身した。故にその化け物の多くは阿紫と自称する」とある。〔3.1.1-6〕

李（2002）は、「狐が女性に変身して男性を惑わすことは、六朝時代に新たに出現した新

[25] 美しい女性は恐ろしいものであり、いったん女色に溺れると、自分自身に災いを招いてしまうというような考え方を指す。
[26] 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985 年、pp. 222-223。
[27] 古代の中国の私有民や私兵などの身分を意味する。
[28] 「魅」には、いくつかの意味が内包されている。例えば、堀（1990）は、p. 129 で「「狐魅」とは狐のしでかす妖魅・邪魅の類をいう語である」とし、また、p. 131 で「「狐魅」なる語は美貌の婦人を指す隠語の如く使われたかもしれない」と述べている。中塚（1999）は、「狐魅」は「狐の化け物」といった意味以外に、「蠱惑」の意味があると指摘している(p. 73)。狐の変身譚の中に使われる「魅」が動詞として使われる場合は、基本的に「化けて惑わす」という意味である。ここでは名詞として使われ、「妖怪」を指す。

しい狐妖の観念である[29]」と指摘している。晋代以降に書かれた狐が女性に変身する話は、ほとんどがこのモチーフの話である。上記の「阿紫」の話は、はじめて狐が「淫婦」のイメージと結びつけられた話である。

狐の「淫蕩」・「淫蕩な女性」のイメージについて、中塚(1999)は、「そもそも狐が淫蕩であるという考えの誕生は古い。…『搜神記』巻十八「山魅阿紫」では、『名山記』曰、として、「狐者、先古之淫婦也。其名曰‘阿紫’、化而為狐。(狐は千古の淫婦である。その名を‘阿紫’と言う。化けて狐となる)という文を挙げている。そもそも狐は淫婦が変身したものだというのである。ここでは正体と変化後の順序が逆になっているが、狐と女性の関係が深いということは十分に証明できよう。後には狐は必ず女性に変身するという説も出てくる。」[30]と指摘している。中塚（1999）が指摘したように、前掲の「阿紫」の話が書かれた晋代に、狐が「女性に変身して男性を惑わす」話の登場とともに、狐は淫婦と結びつけられはじめた。

李（2002）は、上述の「阿紫」の話は、「女色禁忌」の思想の反映であると述べている[31]。その後の狐の「淫婦」というイメージの発展について、李（2002）は、「狐妖を美女・淫婦と結びつけ、もっとも淫蕩なものを婦人と結びつけた要因として、深層的な文化的要素がある。それは、男性社会における性差別と女性に対する偏見である。女性に対する観念が狐に対する観念の形式で表れている（中略）概して言えば、これは一種の女色禁忌観念であり、女性の色香を観賞するという概念――すなわち「尤物」の観念[32]――の負の側面から生まれた観念である[33]」と指摘している。さらに、李は、「唐代以前は、「雄狐」から発生した観念に大きく影響されていたため、淫狐は主に雄狐であった（中略）女性を尤物・化け物とするのは、女色禁忌の観念が強化されたことを表している。このような観念が狐妖観念・狐媚観念に浸透した場合、狐妖は人間「尤物」の象徴となったことに間違いがない。（中略）それ以降の狐妖・狐媚の観念の発展において、唐代の人のこの観念（女性に変身した狐が人を惑わす観念）は絶えず強調されており、女性に変身した狐が人を惑わす話が

[29] 李(2002)、p.71-72 では、「雌狐变女淫男是六朝时期出现的一个新的狐妖观念」とされる。
[30] 中塚(1999)、p.74。
[31] 李(2002)、p.72-73 では、「上述狐妖故事中，孙岩被狐妻截发，王灵孝被狐妻同化，正是女色禁忌观的反映」と述べている。
[32] 「尤物」は美人を指す。
[33] 李(2002)、p.72 では、「把狐妖与美女、淫妇联系在一起，把至淫之物与妇人联系在一起，这里有着深层文化原因，即男性社会的性别歧视和女性偏见，女性观以狐性观的形式表现出来。（中略）概括起来这是一种女色禁忌观念，是从女色赏玩观念——即“尤物”观——的负面发出的观念。」と述べている。李姗姗(2010)、p.84 も同じような観点を示した。

狐妖の話の主体となるに至った[34]」と指摘している。つまり、晋代に狐が淫婦と結びついた後、唐代にこのイメージがより一層強化されて定着した。その上で、唐代の女色禁忌の思想が強化されるにつれ、女性に変身した狐の話が数多く書かれるようになった。言い換えると、唐代においては、「女色禁忌」の観念および狐の「淫婦」のイメージは、狐が女性に変身する話の創作を促したと言える。

宋代に書かれた狐が女性に変身する話のほとんどは、美しい女性に変身した狐が男性を誘惑する話である。李(2002)は、「唐代の狐の雌化[35]する傾向が、宋代になると、大いに強化された。その社会的・文化的な原因は、女色禁忌の心理と女性の色香を観賞する心理がさらに強化されたことであると言えよう[36]」と指摘している。

女色禁忌の考え方の強化は、おそらく宋代における儒教の発展と関係がある。なお、儒教の発展は蛇や犬などの動物が女性に変身する変身譚にも影響を与えたため、第 8 章で詳しく論じる。

「女色禁忌」観念の影響の下で、女色に溺れないように戒めるために、狐の化け物が女性とより一層強く結びつけられた。男性を誘惑した美女は狐の化け物であり、男性に害をもたらすという考え方が発展した。

例えば、『夷堅支乙』巻 9「宜黄老人」(2 話) [37]の要約は以下のとおりである。

> 雌狐が美女に変身して、県知事と副県知事のところに行ったり来たりする。彼女の左側のほほに豆ほど大きな黒子がある。彼女に惑わされて死んだ人は何人もいる。彼女はよく副県知事の碧瀾堂にいて、人の声を聞くと身を隠す。祝君という人が副県知事になった後、ある日碧瀾堂で 1 人で寝て、彼女に出会い、喜んだ。そして彼女と一緒に寝た。その後祝君と彼の子供が次々と命を落とした。〔3.1.1-45〕

この話おいては、美女に変身した狐と交わった男性が死んでしまう。それだけでなく、

---

[34] 李(2002)、p.106-110 では、「唐代以前，由于“雄狐”原型观念的巨大影响，淫狐主要是雄狐（中略）以女性为尤物为妖孽，表明女色禁忌观念的强化。当把这种观念渗入狐妖观念、狐媚观念时，狐妖分明成为人间“尤物”的象征。（中略）当十六国时代后赵主石勒说曹孟德（操）、司马仲达（懿）父子“狐媚以取天下”时，狐媚所指为男性的欺骗迷惑，而唐人骆宾王在著名的《讨武曌檄》中说“狐媚偏能惑主”时，则是指武则天这个“人中狐”的美色惑人了。在以后狐妖狐媚观念的发展中，唐人这种观念不断得到强调，以致女狐媚人成为全部狐妖故事的主体。」と述べている。

[35] 「雌化」は狐が女性に変身することを指す。

[36] 李(2002)、p.141 では、「可以说唐代狐妖雌化倾向在宋代大大加强了，此中的社会文化原因，乃是女色禁忌心理和女色赏玩心理的进一步强化」と述べている。

[37] 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第二冊、中華書局、1981 年、p.861。

男性の子供も命を落とした。女色に溺れた人が自分自身だけでなく、自分の家族にも害を招くという話である。この話は、女色に惑わされると、命を落とす恐れがあるというような女色の恐ろしさを表している。

同じように美女を好んで女色に溺れて害を招く話として、『夷堅三志壬』巻 3「張三店女子」[38]が挙げられる。この話においては、女性に変身した狐と交わった男性が、精神状態がぼんやりして、飲食もしなくなった。〔3.1.1-53〕

これらの美女を狐と結びつけ、美女の色香に溺れると自分自身だけでなく、家族までも害を招く話は、狐の変身譚を用いて、女色に溺れないようにという戒めを表している。

その後の元・明・清においても、唐代・宋代の話を受け継ぎ、狐が女性に変身する傾向は維持されてきた。

本節をまとめると、以下のようになる。まず、狐は、全体的に女性に変身する傾向が強いのは、顔が女性を思わせるためだと考えられる。ところが、唐代以前においては、狐が男性に変身する変身譚がやや多かった。これは、春秋時代の『詩経』における「雄狐」がものほしげな男にたとえる記述に影響されたと考えられる。また、時代が下るにつれ、女性に変身する話の割合が増えたことは、「女色禁忌」観念の強化と関係している。「女色禁忌」の観念および狐の「淫婦」のイメージは、唐代からは、狐が女性に変身する話の創作を促すものになった。

「女色禁忌」観念の強化は、儒教思想の発展と関わりがある。「女色禁忌」観念と儒教の関係については、第 8 章で詳しく論じる。

### 3.1.3 狐が人間に変身することができる条件の変遷

狐の変身譚において、狐が人間に変身することができる条件は、「狐が五十歳になると人間に変身することができる」や、「狐は修行[39]を積めば人間に変身することができる」など、さまざまに存在している。これらの条件は、時代とともにどのように変遷してきただろうか。本節では、狐の変身譚の歴史的変遷を、狐が人間に変身することができる条件という角度から考察する。すなわち、各時代において、狐が人間に変身することができる条件の登場と発展について考察を行う。

[38] 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第四冊、中華書局、1981 年、pp. 1489-1490。
[39] 本章では、「修行」は、道教において法術を習得や仙になるための修行を指す。なお、中国語では「修練」という表記が存在するが、日本語の「修練」とはニュアンスが多少異なる。

### 3.1.3.1 人間に変身することができる条件の登場——「夢の中」から「物老為怪」へ

狐が人間に変身する記述は、漢代から文献に現れるようになった。清代の紀昀は、『閲微草堂筆記』巻10で、狐が「幻化人形，見於漢代[40](人間に変幻することは漢代に見られる)」と述べ、その根拠として、漢代[41]の『西京雑記』を挙げている。『西京雑記』巻6（131）「記冢中事【七】」[42]の話は、以下のとおりである。

> 欒書の墓の中で、棺と副葬品がすべて朽ち果てた。一匹の白狐がいて、王を見ると驚いて走った。左右の人が直ちに狐を追いかけて叩き、捕まえられなかったが、その左足に傷を負わせた。その夜、王は、髭と眉毛が白色の一人の男性がやって来て、彼に「なぜわしの左足を傷つけた」と問い、杖で王の左足を叩いた夢を見た。王が目覚めると、足は腫れて痛んで、できものができていた。死ぬまで治らなかった。〔3.1.1-1〕

この話では、白い狐が人間に傷つけられた後、復讐として自分を傷つけた王の夢に現れた。王の夢の中に現われたのは、髭と眉毛が真っ白の人である。つまり、この話の中で、狐が人に変身することは、夢の中で起こった幻のように描かれている。この変身は、夢の中で起こった変身であるため、変身の条件を「夢の中」とする。

『太平廣記』巻447引『玄中記』「説狐」[43]の話は、以下のとおりである。

> 狐は五十歳になると、婦人に変身することができる。百歳になると、美女や神巫に、あるいは成年の男に変身して女と交わり、遥かに離れたところの事を知ることができる。よく人を誑かし惑わす。人を惑わし智を失わせる。千歳になれば、天に通じ、天狐となる。〔3.1.1-2〕

この話においては、狐が人間に変身する条件として、五十年の年月を経ることが必要とさ

---

[40] 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、p. 216。
[41] 『西京雑記』の成立時代について、前漢と後晋という 2 つの異なる意見が存在するが、本研究では『閲微草堂筆記』に従い、成立時代を前漢とする。
[42] 無名氏撰・程毅中點校 葛洪撰『燕丹子 西京雑記』、古小説叢刊、中華書局、1985 年、p. 42。現代日本語の要約は筆者による。
[43] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第九冊、p. 3652。現代日本語の要約は筆者による。

れる。また、「百年」の条件を満たすと、美女・神巫・男になれるほか、人を惑わすことや遥かに離れたところの事を知る能力を有するようになる、という狐の妖力についての描写も加えられた。さらに、狐は千年の条件を満たすと、天狐になれる。狐の変身の条件として、変身することができるようになる年齢という時間的な要素が現れた。

3.1.2で挙げた『抱樸子』内篇巻3「對俗」では、狐の人間に変身することができる条件は一段高くなり、狐は五百年を経てはじめて人間に変身することができるようになるとされる。

その他、晋代に書かれた『搜神記』巻12（300）「五氣變化」[44]には、狐が美女に変身する条件は千歳であるとされる。〔3.1.1-4〕

上記の3例では、それぞれ五十歳、あるいは百歳、五百歳、千歳といった条件を示している。具体的な年齢の高さは異なっているが、いずれにおいても、「長い年月を経る」という条件が強調されている。

晋代に、年齢という時間的な要素が、狐が変身することができる条件として出現し、そして流行したのは、中国古来の「物老為怪（長い年月を経たものは怪異を為す）」の思想から影響を受けたことに原因があると考えられる。

「物老為怪」の思想は、漢代にすでに存在した。漢代の王充は『論衡』巻22「訂鬼篇第六十五」に、すでに「鬼者、老物精也。夫物之老者，其精為人[45]（鬼というのは、長い年月を経たものの精である。長い年月を経た物の精は人間に変身する）」と述べている。ここの「鬼」は、広い意味を持っており、化け物も「鬼」の中に含まれる[46]。すなわち、王充は、長い年月を経たものは人間に変身することができるという考え方を示した。

漢代にすでに存在したこの「物老為怪」の思想は、それより200年あまり後の晋代の『玄中記』や『抱樸子』に取り入れられた。岡田（2001）も、以上で言及した晋代に書かれた『搜神記』にある千歳の狐の記述に、「物老為怪」の思想が反映されていると指摘している[47]。それだけでなく、「物老為怪」の思想は、その後も変身譚の中に生き続けてきた。

---

[44] 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985 年、p. 146。
[45] 黃暉撰『論衡校釋』第三冊（全四冊）、新編諸子集成（第一輯）、中華書局、1990 年、p. 934-935。現代日本語訳は筆者による。
[46] 李（2002）p. 61 では、「《订鬼》中的鬼是一个宽泛的概念，包含妖怪在内；所谓妖怪也是个宽泛的概念，既指“地反物为妖”之类的反常现象—即妖怪的初义，也指物老为怪的“老物精”妖怪，也正是《说文》所说的“老物精”—魅」と述べている。つまり、ここでの「鬼」は、広い意味での妖怪を指していると理解することができる。
[47] 岡田（2001）p. 72。

以上のように、狐の変身譚の出現に伴い、狐が人間に変身することができる条件の登場について考察した。狐の変身することができる条件として、漢代から夢の中の変身の登場が始まり、晋代になると、「物老為怪」の思想が狐の変身譚に影響を与え、変身することが出来るようになる条件として、「年齢」という時間的な要素が新たに登場した。

### 3.1.3.2 晋代から南北朝までの狐が人間に変身することができる条件

晋代に書かれた『搜神記』には、狐の変身譚が4例存在する。

3.1.3.1で挙げた巻12（300）「五氣變化」では、狐は千歳になると美女に変身することができるとされている。これは『搜神記』より早く書かれた『玄中記』の「狐は百歳になると美女に変身することができる」という記述に影響されたと考えられる。『搜神記』の序文に、『搜神記』の内容について、「考先志於載籍，收遺逸于當時[48]（以前の書き留めた記録を書物から調べ、当時の逸文を収録する）」と述べている。つまり、『搜神記』の中の一部分の内容は、先人の書物に載せられた話を収集して記録したものであることを示している。また、李（2011）は、「(『搜神記』の、筆者注）現存の遺文の大部分は以前の記載の採録である。採録された先人の本は数十種類あり、主要なものとして、『左伝』（中略）『玄中記』などがある[49]」と述べている。

『搜神記』の「千歳」という条件は、『抱樸子』の「五百歳」の条件と同じように、時間的な条件である。成立時代から見れば、『抱樸子』の方がやや早いが、『搜神記』が、『抱樸子』の影響を受けたかどうかは断言しにくい。『晉書』巻72「葛洪」に、『搜神記』の作者である干宝は司徒右長史を務めたときに、『抱樸子』の作者である葛洪とはなじみが深く、葛洪を「散騎常侍」の官職に推挙した[50]という記述がある。この記述から、両者は同時代の人物であることがわかる。両作品の中には内容が似た話が存在する[51]ことから、少なくとも、『搜神記』と『抱樸子』が書かれた時代の知識人の間には、共通の認識が存在していたと考えられる。長い年月を経た狐が人間に変身することができるという考え方も共有された晋代の認識であろう。

---

[48] 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985 年、p. 2。現代日本語訳は筆者による。

[49] 李（2011）、p. 369 では、「在現存遺文中，大部分是采录前载，采录的前人书有数十种，主要有《左传》（中略）《玄中记》等」と述べている。

[50] 『晉書』巻 72「葛洪」に、「干寶深相親友，薦洪才堪國史，選為散騎常侍，領大著作，洪固辭不就」と記している。（房玄齢等撰『晉書』、中華書局、1974 年 p. 1911）

[51] 例えば、魏の文帝と火浣布の話が挙げられる。

上記の『搜神記』と『玄中記』、『抱樸子』の関係についての考察から、以下の結論が導き出される。狐が変身できる年齢について、『搜神記』における「千歳」、および同時代の『抱樸子』における「五百歳」という設定から、晋代の知識人の間には、長い年月を経た狐が人に変身できるという認識が共有されていたと推測できる。

晋代には、「狐は本来人間に変身する能力を備えているものである」という狐の属性を示す話も出現した。3.1.2.2に挙げた『搜神記』巻18（425）「阿紫」の話において、狐に惑わされた王靈孝は正気に戻った後、「家の鶏小屋付近に、阿紫と自称する美しい婦人が現れ、私を招いた」と語って、道士は、「これは山の魅だ」と言った。この話においては、狐が変身できる年齢などの条件や変身の方法などが一切示されておらず、ただ狐は美しい女性に変身したというように記述している。この話では、狐を変身できる動物と捉え、狐は本来変身する能力を備えているものであるという狐の属性が示されていると理解することができる。

では、なぜ狐にはこの特別な変身の能力が備わっているのか。「阿紫」の話においては、『名山記』を引用し、狐はもともと「変身」と強く結びつけられているからだと解釈している。「阿紫」の話についての分析は多いが、ここでは、そのうち代表的な坂井田（1996）の考察を挙げる。

坂井田は、「また同巻〈山魅阿紫〉では、《名山記》を引用して、“狐というのは、上古の淫婦である。その名は阿紫と言い、それが狐にばけた。その怪物は阿紫と自称した。”とある。つまり、紫という名の人間の淫婦が狐になって、男を誘惑するというのであるが、ここでは逆に人が狐になったという発想があり、人が狐に変身するのか、狐が人に変身するのか、いずれにしても「変身する」という観念はすでに確固たるものになっている。」[52]と述べている。

また、今村（2008）は、「どちらにせよ、〈狐＝化ける〉という観念は確固たるものになっていた[53]」と述べ、上記の坂井田と同じような観点を示している。

このように、そもそも狐は淫婦が変身したものであって、正体と変化後の順序が逆になってはいるが、狐は一種の変身する能力・人を誘惑する能力を備えた動物であるという観念はすでに確立されていたと言える。

上記の「阿紫」の話においては、狐が変身しうる条件について示されていない。「狐が

[52] 坂井田（1996）、p.7(1324)。括弧などは原文の表記である。アンダーラインは筆者による。
[53] 今村（2008）、p108。

人を惑わす能力を備えている」という、狐の属性を示しているに過ぎない。このような狐の属性に関する変身は、変身できる条件への言及がないため、以下では、このような変身しうる条件への言及がない話を、「条件」の考察から排除する。

『搜神記』巻18（428）「胡博士」[54]の話は、年を取った狐が胡博士と称される書生に変身し、人間の弟子を教授した話である。話の要約は以下のとおりである。

> 吳中に一人の書生がいる。髪の毛が真っ白で、胡博士と称され、若い人たちを教授していた。突然姿を消した。9月9日に士人たちが山に登って遊覧する時に、講義をしている声を聞いた。下男をやって探してみると、空っぽの塚の中で、狐の群れがいて、人を見るとはや足で逃げた。ただ一匹の老いた狐はそこから離れなかった。それは髪の毛が真っ白の書生であった。〔3.1.1-7〕

この話は、若い人たちを教授した胡博士は、実は塚の中で狐たちに講義している老いた狐だったという話である。千歳などの具体的な年齢への言及はないが、変身した狐について、「老狐（老いた狐）」と描写していることから、この話も「物老為怪」の思想の影響を受けていたことがわかる。また、この話では、狐は講義をするというような描写があり、胡博士を学識のある狐と描写している。狐を学識と結びつけたのは、狐は賢い動物であるというイメージが存在したからだと考えられる。

「胡」という姓の発音は、中国語では「狐」の発音と同様であるため、狐の変身譚では、狐が人間に変身した場合、しばしばこの姓を使っている。例えば、『異苑』巻8[55]の「胡道洽」、『太平廣記』巻449引『廣異記』「李元恭」[56]の「胡郎」、『剪燈餘話』巻3「胡媚娘傳」[57]の「胡媚娘」は、すべて「胡」の姓を使っている狐である。

上記をまとめると、晋代の狐の変身譚では、「百歳」や「千歳」など、変身できる年齢が強調される場合もあれば、ただ「老いた狐」と記述される場合もある。これらの記述から、晋代において、「物老為怪」の思想の影響が広く存在しており、この考え方が狐の変身譚に大きな影響を与えたことがわかる。

---

[54] 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985 年、pp. 224-225。現代日本語の要約は筆者による。
[55] 劉敬叔撰　陽松玠撰・範寧點校『異苑　談藪』、古小說叢刊、中華書局、1996 年、p. 83。
[56] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第九冊、pp. 3671-3672。
[57] 李昌祺編撰・黃正位訂定『剪燈餘話』、古籍、年代不詳、第三冊、コマ番号：32-37。

南北朝時代は志怪小説の集大成の時期であるが、狐の変身譚は少ない。『捜神後記』において、狐に関する話は3例あるが、3例とも変身への言及はなかった。南北朝時代における代表的な志怪小説、例えば、『齊諧記』、『續齊諧記』、『幽明錄』においても、狐の変身譚は存在しない。調査した結果、南北朝時代の狐の変身譚は、『異苑』巻8、『太平廣記』巻447引『洛陽珈藍記』「孫巖」[58]の2例のみである。

『異苑』巻8の話の要約は以下のとおりである。

胡道洽は、音楽と医術を好んだ。体は生臭いにおいがするため、常に香料を持ち歩いていた。彼は、猛犬を嫌っていた。彼は自分の死期を知っており、弟子に、「私が息絶えたら、ただちに埋葬せよ。犬に私の死骸を見せてはいけない」と言った。彼が死んだ後、弟子たちは彼の死骸を棺に入れて持ち上げたところ、棺が空っぽであることに気づいた。ただちに棺を開けてみると、死骸がない。人々は、胡道洽は狐が変身したものに違いない、と言った[59]。〔3.1.1-8〕

『太平廣記』巻447引『洛陽珈藍記』「孫巖」の話の要約は以下のとおりである。

孫巖という人は、妻と結婚して3年になった。妻はいつも服を脱がないで寝るため、孫巖は不思議に思った。妻が寝ている間に、彼女の服を脱がせた。すると、3尺の狐のような尻尾があらわれた。孫巖は怖くて、妻を追い出そうとした。妻は家を出る時、孫巖の髪の毛を切り取って走り出した。隣人が彼女を追いかけたが、彼女は一匹の狐になって逃げた。〔3.1.1-9〕

上記の2例では、いずれも変身の条件について言及していない。南北朝時代にも、「狐は本来変身する能力を備えている」という狐の属性に対する認識が存在していたと考えられる。

### 3.1.3.3 唐代から五代までの狐が人間に変身することができる条件

唐代の狐の変身譚は、変身する条件の面において、2 つの特徴がみられる。1 つ目の特徴

[58] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第九冊、p. 3655。
[59] 現代日本語の要約は筆者による。

は、「物老為怪」の思想が受け継がれていることである。具体的な年齢など、時間の長さについての言及はあまりないが、「老いた狐」という条件がしばしば見られる。また、晋代と同様に、老いた狐は女性・若い男・老人の姿に変身することができる。唐代の狐の変身の条件としての「老いた狐」という条件は、「物老為怪」の思想の影響の下で登場した晋代の狐の変身の条件の継承だと考えられる。

例えば、『太平廣記』巻 449 引『廣異記』「李元恭」[60]では、老いた狐が若い男に変身した〔3.1.1-17〕。『太平廣記』巻 450 引『廣異記』「王苞」[61]では、老いた狐が婦人に変身した〔3.1.1-19〕。『太平廣記』巻 455 引『奇事記』「咎規」[62]では、老いた狐が老いた男性に変身した〔3.1.1-34〕。

もう 1 つの特徴は、唐代になると、「髑髏をかぶることで変身することができるという変身の仕方を知っている狐」という変身の条件が現われたことである。この変身の条件には、変身の仕方についての説明も含まれている。

唐以前の狐の変身譚には、変身の仕方への言及は存在しない。

『太平廣記』巻 451 引『集異記』「僧晏通」[63]においては、この変身の仕方について、以下のように描写されている。

> 月夜に、（中略）狐が墓地にやって来て、髑髏を拾って、頭にかぶった。頭を振って、髑髏が落ちると、また別の髑髏を選んだ。振っても落ちないものをかぶって、そのうえで木の葉や草花を体につけ、衣服に変化させた。しばらくすると、狐は婦人に変身して、優雅に歩き去った。〔3.1.1-31〕

狐が髑髏をかぶることによって人間に変身できるようになる理由について、李(2002)は、2 点を挙げた。①髑髏の中に人間の精気が残っている、②中国の古代の人は、獣が人間に変身する場合、体の各部分は対応して変身すると考えた。狐の頭と人間の頭の形はかなり異なっているため、狐が人間の頭になるためには、人間の髑髏をかぶる必要がある。[64]

---

[60] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第九冊、pp. 3671-3672。
[61] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第九冊、p. 3677。
[62] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第十冊、pp. 3717-3718。
[63] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第十冊、p. 3691。現代日本語の要約は筆者による。
[64] 李(2002)、p. 84 では、「认为死人头骨尚有灵气，所以狐妖戴而化人。（中略）即借骷髅变人的脸面。想来狐化人形，头脸最为首要，必得借死人头骨加于狐首方能象人之形。古人对于兽类化人有一种朴素的对应转化观念，即头变头，体变体，四肢变四肢，变其他物事亦遵循对应原则。（中略）狐头虽和人头对应，

『太平廣記』巻 454 引『酉陽雜俎』「劉元鼎」[65]では、髑髏を頭にかぶるだけでなく、かぶって北斗を拝む必要があるとされる。北斗を拝むことについて、李(2002)は、これは古代の人が北斗を崇拝したことと関係があると指摘し、理由として、『捜神記』にある記述を挙げている。『捜神記』巻 3(54)「管輅【二】」に、「所有祈求，皆向北斗」[66]の記述があり、「何かを祈り求めるときに北斗を拝む」という意味である。李（2002）は、「狐が北斗を拝むのはなぜか。これは、古代の人が北斗を崇拝したことと関連がある。『捜神記』巻三に「所有祈求，皆向北斗」と述べている。狐が人間に変身する時に北斗を拝む原因は、北斗に願いを叶えるように加護を求めるからである。あるいは、狐が北斗を拝むのは、北斗の気を得て、変化の助けとするのである[67]」と述べている。しかしながら、北斗を拝むという変身の方法は、蛇や虎・犬・亀には見られない。これは、狐は夜行性の動物で、賢いイメージが存在していたことと関係があると考えてよかろう。狐は賢い動物であるため、変身の助力を得る方法を知っていた。そして狐は夜行性の動物であるため、夜に北斗を拝む方法で助力を得たと考えられる。

明代になると、北斗を拝むことは、月を拝むことになった。月を拝むことについては、明代の狐が変身する条件の節で述べる。

五代の変身譚は 1 例しかない。その例、『北夢瑣言』逸文巻 4「犬逐狐」[68]の要約は以下のとおりである。

> 犬に追われた婦人が木に登ったが、木から落ちた。婦人は犬にかみ殺された。すると一匹の老いた狐が現れた。〔3.1.1-40〕

この話では、狐が変身できる条件は「老いた狐」である。

上記をまとめると、唐代・五代においては、「物老為怪」の思想の影響の下で登場した「老いた狐」という変身の条件が受け継がれた。また、新たに出現した条件として、「髑髏をかぶる・髑髏をかぶって北斗を拝むという変身方法を知っている狐」が挙げられ

---

但二者相去甚远，所以必须借助死人髑髅」と述べている。

[65] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第十冊、p. 3709。

[66] 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985 年、p. 34。

[67] 李(2002)、p. 83 では、「狐为何礼拜北斗，这和古人的北斗崇拜有关。《搜神记》卷三说：“有所祈求，皆向北斗。”（筆者注：李さんの引用はこのまま）原来狐化人形时之所以拜北斗，是求北斗保佑它如愿。或者说，狐礼拜北斗，是要得北斗之气，以助幻化」と述べている。

[68] 孫光憲撰・賈二強點校『北夢瑣言』、歷代史料筆記叢刊・唐宋史料筆記、中華書局、2002 年、pp. 442-443。現代日本語の要約は筆者による。

る。この条件は、変身方法でもある。狐の変身方法についての言及は、唐代になってはじめて現れた。

### 3.1.3.4 宋代から元代までの狐が人間に変身することができる条件

宋代から元代までの狐の変身の条件の面においては、2 つの特徴が見られる。1 つ目は、宋代においては、「老いた狐」という変身の条件が引き継がれたが、唐代と比べ、「老いた狐」という変身の条件に言及する話が少なくなったことである。宋代にこの条件に言及した変身譚は、『夷堅支乙』巻 9「宜黄老人」(1 話)[69]、『夷堅支庚』巻 6「譚法師」[70]のみである。ところが、元代の狐の変身譚の数は少ないにもかかわらず、「老いた狐」という条件に言及する話が半分を占めている。宋代・元代において、「狐は本来変身する能力が備わっている」という狐の属性に対する認識は広まったが、「物老為怪」の思想も受け継がれ、その影響力は依然として存在していることがわかる。

2 つ目は、元代の狐の変身譚において、新たな変身の条件が出現したことである。それは、「尻尾から一本の毛を抜くことで人間に変身することができるという方法を知っている」というものである。この変身の条件も変身の仕方と合わせて提示されている。『湖海新聞夷堅續志』後集巻 2「精怪門· 狐虎」「剝皮狐狸」[71]の話に、狐の変身について、以下のような描写がある。

> 大きな狐が来て、椅子の上に坐った。左から一本の毛を抜くと、明かり 1 つ、下女 1 人が出てきた。右から一本の毛を抜くと、また明かり 1 つ、下女 1 人が出てきた。尻尾の毛を一本抜くと、美しい婦人に変身した。そして、狐の毛皮は衣服に変わった。2 人の下女と階上より降りて、町に行って男性を惑わす。〔3.1.1-59〕

この話の中では、狐が尻尾の毛を抜くことで変身することができた。このような変身の条件に言及する狐の変身譚は上記の 1 例のみである。その後、毛を抜くことは、狐の変身の条件として出現することがなかった。

上記をまとめると、宋代においては、「物老為怪」の思想の影響の下で登場した「老

[69] 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第二冊、中華書局、1981 年、p. 861。
[70] 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第三冊、中華書局、1981 年、pp. 1180-1181。
[71] 元好問撰・常振國點校　無名氏撰・金心點校『續夷堅志 湖海新聞夷堅續志』、古體小說叢刊、中華書局、2006 年、pp. 250-251。現代日本語の要約は筆者による。

いた狐」という変身の条件が引き継がれたが、唐代ほど多くはなかった。この変身の条件は、一時退行したように見えるが、元代においては、この条件が引き継がれ、変身譚の数は少ないにもかかわらず、この条件に言及する話は半分を占めている。また、元代になると、「尻尾から一本の毛を抜くことで変身するという方法を知っている」という変身の条件が新たに現れた。この変身の条件は変身の仕方でもある。

### 3.1.3.5 明代における狐が人間に変身することができる条件

**明代の狐の変身の条件**

明代の狐の変身することができる条件については、3 つの特徴が挙げられる。

1 つ目は、「物老為怪」の思想の影響の下で登場した「老いた狐」という変身の条件が引き続き継承されてきたことである。

2 つ目は、唐代の「髑髏をかぶる・髑髏をかぶって北斗を拝むという変身方法を知っている狐」という条件に似たような変身の条件が存在することである。しかしながら、唐代の「北斗を拝む」は、明代になると「月を拝む」になった。この変身の仕方に言及している話として、『獪園』巻 14「狐妖一」[72]が挙げられる。この話の要約は以下のとおりである。

> 老いた狐が髑髏を取って頭にかぶって、月を望んで数百回拝み終わった。真夜中以後、美しい婦人に変身する、もしくは美しい少年に変身する。(中略) 夜が明けると、また狐の形に戻る。〔3.1.1-67〕

この話の中には、「老いた狐」という記述もある。だが、狐が変身できた直接の原因は髑髏をかぶって月を拝んだことであるため、この話の変身の条件は複合型の条件であると考える。

また、同じく髑髏をかぶって月を拝むことによって、狐が人間に変身する話として、『剪燈餘話』巻 3「胡媚娘傳」[73]が挙げられる。この話においては、狐が人間に変身する場面について、以下のように描かれている。

---

[72] 銭希言撰『獪園』、長塘鮑氏知不足斎、古籍、参照 URL: http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko19/bunko19_f0191/bunko19_f0191_0007/bunko19_f0191_0007_p0054.jpg、現代日本語訳は筆者による。

[73] 李昌祺編撰・黄正位訂定『剪燈餘話』、古籍、年代不詳、第三冊、コマ番号：32-37。現代日本語の要約は筆者による。

一匹の狐が髑髏を拾って、かぶって月を拝んだ。たちまち十六、七歳の美しい女性に変身した。〔3.1.1-62〕

李（2002）は、「狐が月を拝むことで変身するという説は明代から始まった」[74]と述べている。このような変身の条件の登場について、同氏は「おそらく元代・明代の、壇を設置し、線香をあげ、月を拝んで願い事を陳述する民俗と関係がある」[75]と述べている。つまり、北斗を拝むことから月を拝むことに変わったのは、明代において、月を拝むという民俗が存在していたからである。明代において、月を拝むことは民俗であり、北斗を拝むことより受け入れられやすかったと推測できる。

筆者は、月を拝むという条件の出現は、月の「変化」と「再生」というイメージと関係していると考える。姫ら（2010）・趙ら（2007）は、古代の人々は、月には再生の力を有すると考えたことを指摘している[76]。姫ら（2010）は、「古代の人々は、月の満ち欠けに対して不思議に思い、月が死んだ後また再生できるから、月は不思議な力を有すると考えた」と述べている。つまり、月の満ち欠けという形の「変化」に対して、古代の人々は、それを月の「再生」と理解した。言い換えると、「月」は古くから、「変化」・「再生」のイメージと結びついていた。このような月に対する「変化」・「再生」のイメージは、李（2002）が指摘している「人が月を祭る」民俗の土台にもなると思われる。一方、狐の変身は一種の変化であり、また、この変身を「狐の体を消して、人間の形態として再生する」と理解する場合、月の再生のイメージに合致しているであろう。すなわち、変化と再生を象徴する月と、狐の形態の転換とは似たようなコンセプトであり、狐の変身の助力となりうる。ところが、月を拝むという変身の条件は、清代に 1 例も見当たらない。これは、李(2002)が指摘しているように、月を祭る民俗は主に明代に存在したことと関係があろう。

月を拝むという変身の方法は、管見の限り、狐にしか存在しない。このことは、おそらく以前狐の変身譚に存在していた「髑髏をかぶって北斗を拝む」という変身の仕方が、月を祭る民俗と融合して形成したものであると推測できる。また、狐は夜行性の動物であり、狐が月あかりの下を歩く姿がよく見かけられたため、「月を拝む」という民俗と結びついて

[74] 李（2002）、p.83 では「拜月之说起于明世」と述べている。
[75] 李（2002）、p.83 では「这种说法大概同元明流行的设供焚香、拜月陈愿的民俗有关」と述べている。
[76] 姫ら（2010）は p.49 で、「原始先民古人不解月圆、盈缺，而视月有死而复生，或是有不死的神力」と述べている。趙ら（2007）は p.60 で、「这上古神话的内容显然是讲月亮有死而复生的永恒能力，“死则又育”、不死药之类观念名目，实是原始初民对月光的明而转暗、暗而复明的观察而作出的富有永久意味的解释」と述べている。

いた可能性も存在する。

3 つ目は、「人間の寝息を吸うことで人間に変身することができる」という方法を知っている狐が登場したことである。この記述も、変身する条件であると同時に、変身の仕方を示している。この変身の仕方の具体的な描写は、『七修類稿』巻 48「狐狸」(1 話)[77]に記されている。この話の要約は以下のとおりである。

> 狐はしばしば夜中に貧しい家に潜り込み、人のベッドのところ行って、人の寝息を吸い取る。人は目が覚め、狐の息を嗅ぐと、恐れ驚いて、「狐を捕らえよう」と言う。しかし、狐はすでに逃げ去っている。狐はこのようなこと（人間の寝息を吸うこと）をして、長い時間を経ると、体を小さくすることができるようになり、地面の入れないところにも入れるようになる。もっと長い時間を経ると、変化することができるようになる。すると、人間の男性や女性と交わりを為す。男性に変身した場合は女性を探し、女性に変身した場合は男性を探す。〔3.1.1-64〕

**狐の変身譚における道教思想の影響**

上記のような「人の寝息を吸い取る」という変身の方法は、道教の養生・修行法から由来したものである。明代になると、道教の養生・修行法は狐の変身譚に取り入れられるようになった。具体的に、以下の話に見受けられる。

明代の狐の変身譚において、狐が変身して人間と交わりを為す 1 つの目的として、内丹を錬成する[78]ことが挙げられる。狐にとって、人間の精気は内丹の原材料であるため、人間の精気を吸うことで原材料を得る。例えば、『五雑俎』巻 9 「物部一」[79]において、「其魅人者多取人精氣，以成内丹（人を惑わす狐の多くは人の精気を取り、それで内丹を作り出す)」と記されている。〔3.1.1-72〕

また、『剪燈餘話』巻 3「胡媚娘傳」において、美女に変身した狐が男性と交わりをなす目的は「奪其精氣（その精気を奪い取る)」こととされている。つまり、人間の精気は狐にとって内丹を作る材料であるため、人間から精気を奪うのである。

---

[77] 郎瑛著『七修類稿』、歴代筆記叢刊、上海書店出版社、2001 年、pp. 509-510。現代日本語の要約は筆者による。
[78] 道教の考え方である。己の体内において、気・精を集めて錬成することより、内丹を作り出すということを指す。
[79] 謝肇淛撰『五雑俎』、歴代筆記叢刊、上海書店出版社、2001 年、p. 173。現代日本語訳は筆者による。

人間と交わることで精気を奪い取るのとは異なり、前掲の狐が人の寝息を吸い取る話においては、狐はひそかに人間の寝息を吸い取り、吸い取った寝息を積み重ねてはじめて人間に変身することができるようになる。しかしながら、人間から「気」を吸い取るという点が共通しており、両者は同じく「気」の考え方から派生したものである。「気」を体内で配合・循環・錬成・純粋化するなどは、道教の養生の身体技法から由来した考え方である。上記のような「寝息を吸い取る」に関する狐の変身する条件が出現した原因は、道教の考え方および養生・修行法が狐の変身譚に流用されたからである。すなわち、明代になると、狐の変身の条件の面において、道教の影響を受けたと言える。

明代の「内丹を錬成する」に言及した話は、すべて狐が人間と交わることで人間の精気を吸い取り、そして内丹を錬成する話である。つまり、明代の狐の変身譚においては、「内丹」を錬成する術として、交わることで精気を吸い取るという 1 つの術しか存在しない。また、「内丹を錬成する」という考え方は、ほかの動物の変身譚に見られず、狐の変身譚にしか存在しない、狐の変身譚の独特な要素である。狐の変身譚に取り入れられた「内丹を錬成する」という考え方については、第 8 章で詳しく論じる。

明代において、道教の修行の考え方は狐の変身譚に織り込まれてはいるが、狐にとって内丹を作り出す目的ははっきりしていないように見える。

上記をまとめると、明代においては、「老いた狐」という変身の条件が引き続き継承されてきた。また、「髑髏をかぶって月を拝むという変身方法を知っている狐」という条件が「北斗を拝む」に代わって新たに出現した。その他、道教の修行の考え方および修行法が狐の変身譚に流用されはじめ、変身の条件の面において、「人間の寝息を吸うことで人間に変身することができる」という方法を知っている狐」という条件が登場した。

### 3.1.3.6 清代における狐が人間に変身することができる条件

**清代の狐の変身の条件**

清代の狐の変身の条件の面では、2つの特徴が見られる。

1つ目は、狐の変身の条件についての言及が少なくなったことである。その代わりに、変身の条件を言わずに、「狐には本来魅の能力を備えたものである」という狐の属性による変身が圧倒的に多い。

2つ目は、「煉形（身体上の修行、形態上の修行）」のような修行を通して人間に変身することができるようになる話が登場した。「煉形」は、狐が人間の姿になるための修行に

使う術を指す。「煉形」で人間に変身する話として、『閲微草堂筆記』 巻1 獻縣周氏僕周虎[80]「吾煉形已四百餘年（私はもう400年あまり煉形してきた)」〔3.1.1-73〕、『閲微草堂筆記』 巻9　束州邵氏子[81]「吾服氣煉形，已二百餘歲（私は服氣煉形してからもう200年あまりが経った)」〔3.1.1-93〕、『閲微草堂筆記』 巻12 清遠先生[82]「我本狐女（中略）煉形數百年（私はもともと狐女である（中略）数百年煉形してきた)」〔3.1.1-105〕が挙げられる。この3例の話は、いずれも狐が数百年の「煉形」を通して、人間の姿に変身することができるようになる話である。

「煉形」の度合いによって、狐が人間に変身するレベルと、本物の人間になるレベルが存在する。例えば、『閲微草堂筆記』 巻15 哈密屯軍[83]の話においては、狐が修行を積み重ね、「煉形」・「服気（気をのみこむこと)」を通して、「蛻形（狐の体から抜け出る)」することができ、本物の人間になった。〔3.1.1-118〕

**狐の変身譚における道教の修行の思想の浸透**

「煉形」は道教の修行に使う術である。明代から狐の変身譚に「内丹を錬成する」という道教の養生・修行に関する考え方が取り入れられた後、清代になると、より多くの道教の修行に関する考え方が狐の変身譚に浸透した。その中に、もっとも顕著に見られるのは、道教の代表的な思想、すなわち修行を通して仙[84]になる思想が、狐の変身譚に流用されたことである。

以下では、道教の修行を通して仙になる思想が、清代の狐の変身譚にどのように現れているかについて考察を行う。

李（2002）は、『閲微草堂筆記』を主な資料として、狐の修行の方法について考察し、まとめている。『閲微草堂筆記』では、狐の修行の方法についての記述として、以下の4つが挙げられる。李によるまとめも、主にこの4つの記述に基づいたものである。

＜『閲微草堂筆記』における狐の修行の方法についての記述＞

[80] 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、p. 4。現代日本語訳は筆者による。
[81] 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、p. 181。現代日本語訳は筆者による。
[82] 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、pp. 270-271。現代日本語訳は筆者による。
[83] 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、p. 381-382。
[84] 「仙」は修行を積み重ねることによって、不思議な能力を獲得したものを指す（人を指す場合もある)。戦国時代から神仙信仰が形成し、広まった後、仙は神と同じように、不思議な力を持ち、時空に束縛されないため、神と結びつけられ、「神仙」と称する場合もある。

『閲微草堂筆記』 巻10 人物異類 に、

（狐は）「すべての狐が修道する事ができるが、もっとも霊性のあるものは貔狐という種類の狐である。このことは、まさに農家の家では読書人が少なく、学者の家では読書人が多いことと同じである。」と言った。（人は）「貔狐は皆生まれつきの霊性を持っているのか。」と聞いた。（狐は）「これは、その種類と関係がある。得道[85]していない狐が生んだ狐は、普通の狐である。得道した狐が生んだ狐は、変化することができる。」と言った。人は「得道した狐は、永久に若いだろう。小説の中の狐は、翁もいれば、媼もいる。これはなぜだろう。」と聞いた。狐は「得道というのは、人間になる道である。飲食の欲求と性欲、生老病死は人間と同じである。修行して仙境に昇ることは別である。何千何百人中、1人か2人が官僚になろうとしている。煉形服気は[86]、まさに学問を積んで名を成すことと同じである。人を惑わし精気をとって己の身を補益することは、まさに近道を行くことと同じである。しかし、仙島に遊び、仙になることは、必ず煉形服気によってできることである。人を惑わし、精気をとる場合では、多くの人を傷つけることもあり、よく天の律法を犯してしまう。」と言った。[87]〔3.1.1-98〕

また、『閲微草堂筆記』 巻3 何勵庵先生言 に、

（狐は）「私たちは皆仙になるために修行をしているものである。狐が仙になるために、2つのルートがある。1つ目は精気を採り、星を拝み、徐々に変化することができるようになる。その後、修行を重ねて、本当の悟りを得る。これは妖から仙になるルートである。しかし、邪な道に踏み込むこともある。その場合は天の律法を犯してしまう。このルートは近道ではあるが危うい。2つ目のルートは、まず形態を修行して（煉形）人間の形態になる。人間の形態になってから、内丹を得るための

[85] 「得道」は、道教において、道教の真理を理解できたことを指す。この話においては、人間になることを指す。
[86]「煉形」は、形態上の修行を指す。「服気」は、気をのんで体内に取り入れることを指す。
[87] 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、pp. 216-217。原文の中国語訳は纪昀著・邵海清等译『白话全本阅微草堂笔记』、十大文言短篇小说今译丛书、上海古籍出版社、1995 年、p. 292 を参考にした。現代日本語の要約とアンダーラインは筆者による。

技術を習う[88]。これは人から仙になるルートである。吐納（呼吸法）により体内の気を巡らせる修行は、短い時間でできるものではないが、長い間頑張って続けると、自然に良い成果が得られる」と言った。[89]〔3.1.1-78〕

『閲微草堂筆記』 巻12 郭石洲言　に、

（狐は）「これは修行の深さによって異なる。修行が浅いものは、人の形に変身できるのみで、酔っ払ったり、寝入ったり、あわただしく驚き恐れたりすると、狐の姿に戻る。修行が深いものは、脱形[90]することができる。これは仙人の尸解[91]と似ている。すでに人間そのものになり、本来の姿は人間であって、どうして変化などしようか」と言った。[92]〔3.1.1-106〕

『閲微草堂筆記』 巻18 冠瀛久困名場 に、

（狐は）「霊力のある狐であれば、皆修行によって仙人になろうとする。霊力がもっとも強いものは、呼吸を調整して精神を修行し、陰陽・水火の相生相剋の内容を説く。天地の精気を吸い取り、日・月・星の精華を食べ、これらの物を配合して体内で金丹を作り上げる。狐の体から抜け出し、天に昇って仙になる。このような場合は、仙人からの教えが必要であり、仙になる才能も必要である。このようなことは、私にはできない。2番目の方法は、容成子と素女の術[93]を修行し、美女もしくは美男子に変身して人間を惑わし、人間と交わることで人間の精気を吸い取る。内部と外部が互いに作用しあって、丹を作り出すこともできる。しかし、吸い取った精気が少なければ、丹が作れない。精気を多く吸い取ると、人を殺害して己を利する

[88] 原文は「講習内丹」である。直訳すると、「内丹を得るための技術を習う」となるが、ここでは、内丹を錬成することを指す。
[89] 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、pp. 51-52。原文の中国語訳は纪昀著・邵海清等译『白话全本阅微草堂笔记』、十大文言短篇小说今译丛书、上海古籍出版社、1995 年、p. 71-72 を参考にした。現代日本語の要約とアンダーラインは筆者による。
[90] 「脱形」は、前述の「蛻形」と同様に、狐の体から抜け出ることを指す。
[91] 仙人になる段階である。自分の死後、肉体を消滅させ仙人になることを指す。
[92] 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、pp. 276-277。原文の中国語訳は纪昀著・邵海清等译『白话全本阅微草堂笔记』、十大文言短篇小说今译丛书、上海古籍出版社、1995 年、p. 373 を参考にした。現代日本語の要約とアンダーラインは筆者による。
[93] 房中術を指す。

ことになってしまい、冥府の処罰を犯さなくても、必ず天罰がある。このようなことは、私にはする勇気がない。故に、私は盗む方法で（精気を）奪い取る。人が寝ているうちに、その寝息を吸い取るのである。このことは、ミツバチが花から蜜を吸うことと同じように、花を傷つけないで、だんだん積み重ねれば、丹を凝らすことができるようになる。この方法で霊魂が散らないようにすることもできる。長い年月を経ると霊に通じることができるようになる。私たちはこの方法を使っている。」と言った。[94]〔3.1.1-153〕

＜李によるまとめ＞

李は、清代の狐が修行を通して仙になるという考え方は、以下の4点の内容が含まれていると指摘している。

①仙になる術を修める条件について、「すべての狐ができる」とされている。これは道教のすべての人間が修行を通して仙になれるという考え方と同様である。ただし、狐の種類によって、仙になりやすい種類とふつうの狐が存在する。

②狐から仙になるために、2つのルートがある。1つ目は、狐から直接に仙になるルート、2つ目は、狐からまず本物の人間になり、そして人間から仙になる。「煉形」と「蛻形」は、後者に属する。「煉形」を積み重ねると「蛻形」ができるようになる。「蛻形」した狐は本物の人間になる。「蛻形」の段階に達していない狐は、人間の姿になることができるが、死んだ後、または酔っぱらった後のような状況においては、また狐の姿を現す。「蛻形」して本物の人間になった狐は、呼吸法や瞑想によって内丹を錬成し、人間の状態から「蛻形」して仙になることを目指して修行し続ける。「煉形服気」、「講習内丹[95]」によって人間、または仙になるのは正しい道である。

③狐が直接に仙になるルートは、精を取り、北斗を拝むことで仙になるルートである。このルートは、まず人間になって、それから仙になるルートより速いが、邪な道に入りやすい。狐は仙になるのに、内丹を錬成する必要がある。呼吸法（吐納）などで錬成するのは時間がかかるため、狐は妖の性質により、よく女性に変身して男性と交わることで男性の精気を吸い、その精気を原材料として使って内丹を錬成する。男性の精気を取る場合、

[94] 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、pp. 463-464。原文の中国語訳は纪昀著・邵海清等译『白话全本阅微草堂笔记』、十大文言短篇小说今译丛书、上海古籍出版社、1995 年、p. 634 を参考にした。現代日本語訳とアンダーラインは筆者による。

[95] 直訳すると、「内丹を得るための技術を習う」となるが、ここでは、内丹を錬成することを指す。

しばしば男性に害を与えるため、天罰が下される可能性がある。

④狐は修行を通して、「大丹[96]」を錬成できると、仙になる。[97]

本研究では、上記の②③について議論できるところが2つあると考えられる。1つ目は、2つのルートを比較してみると、狐がどのように人間に変身する能力を獲得するかの面においては、矛盾がある点である。もう1つは、修行の結果を左右するのは、どちらのルートを選んだかとは関係がなく、修行で使った術と関係がある点である。

以下では、上記に2点について詳しく説明する。

まず、2つのルートを比較してみると、修行を通して初めて人間に変身する狐もあれば、もともと人間に変身できる狐もある。②は、狐がまず本物の人間になり、そして仙になるというルート（以下、「狐→本物の人間→仙」）である。このルートにおいては、狐が人間に変身するには、「服気煉形」という修行が必要である。しかしながら、③の狐が直接に仙になるルート（以下、「狐→仙」）においては、人間と交わる狐は修行なしで人間に変身することができる。

また、②③から見ると、修行の結果（すなわち無事に仙になるか否か）を左右するのは、仙になるためのルートではなく、修行で使った術である。「狐→仙」の場合では、呼吸法（吐納）のような術と、女性に変身して、性交渉によって男性精気をとって己の身を補益する術（以下、「房中術」）という 2 種類の修行の術がある。「房中術」を使った場合のみが天罰を受け、修行が中断されるおそれがある。つまり、無事に仙になれるか否かは、「呼吸法（吐納）」や「煉形服気」のような術を使って修行するか、それとも「房中術」によって修行するかによって決められる。後者の場合は、修行が中断される可能性が伴う。

上述の2点を考慮に入れ、筆者は、修行の結果を決めるもっとも決定的な要素である修行の術をもとに、狐の修行の方法を分類した。

＜筆者による分類＞

狐は内丹を錬成するために修行をする。修行に使う術によって、修行の方法は、

ア.「房中術」を使って修行する

イ.「房中術」以外の術（例えば「煉形服気」「吐納」など）を使って修行する

[96] 李(2002)が使用した言葉である。最高品質の内丹を指す。
[97] 李(2002)、p. 232-252。

という2種類に大別できる。この2種類の修行の方法の内容は以下のとおりである。

①狐は、基本的に変身する能力を有する。アの場合には、狐はまず変身の能力を駆使し、女性に変身して「房中術」で「内丹」の材料となる男性の精気を吸い取る。イの場合には、狐は変身する必要がなく、「煉形服気」や「吐納」などに専念し、修行の成果として、外観上自然と人間の姿になることがある。

②アであれ、イであれ、「内丹」を錬成し、仙になることを目的とする。アは近道であるが、邪な道でもあり、人間の男性に害を与えた場合は天罰が下される可能性があるため、狐にとって、途中で中断されることで仙になれないおそれがある。イは、長い年月の修行が必要である。「煉形」以外の術を使う場合、「内丹」を錬成できると、仙になれる。「煉形」の術を使う場合、その途中で狐の体から抜け出て、本物の人間になる段階がある。本物の人間になってから、その上で修行を積み重ねると、やっと「内丹」を得ることができ、仙になれる。

＜清代の狐仙＞

3.1.3.5で述べたように、明代に、狐が交わることで人間の精気を吸い取る、「内丹」という道教の考え方が狐の変身譚に取り入れられた。ただ、明代の狐の変身譚において、「内丹」を作り出す目的についての言及はない。清代になると、その目的は仙になることであるとされるようになった。

また、「内丹」を作り出すために、明代においては、「房中術」を使うが、清代になると、「服気煉形」や「呼吸法（吐納）」などの道教の養生・修行法が狐の変身譚に取り入れられるようになった。

では、なぜ清代になると、狐が道教の修行を通して、仙になるという考え方が登場したのか。

その理由として、以下の3点が挙げられる。

1つ目は、李(2002)が、清代から始まった狐仙を崇拝する観念は唐代の天狐崇拝から発展してきたものであると述べている[98]ことである。具体的には「唐代に天狐に対する信仰と天狐に対する崇拝が形成された。宋代・元代になると、ほとんど影もかたちもなくなった。（中略）狐仙の観念は唐代から始まったが、唐代にはまだ「狐仙」の概念がなかっ

[98] 李(2002)、p.199-207 を参照。

た。明代中期・後期に、狐が仙道[99]を修行するという観念がだんだんと強化され、「狐仙」の観念が正式に出現した。清代になると、ようやく日々に影響が広がる狐仙に対する崇拝が形成された[100]」と述べている。

2つ目は、清代の人は、「狐は霊性のある物である」というような考え方を持っていたことである。『閱微草堂筆記』巻10では、「人物異類，狐則在人物之間（人間と物は異類であるが、狐はその間にある)」[101]という記述がある。この記述は、清代において、狐は人間と物の間の存在であり、物より人間に近いというような考え方が存在したことを示している。人間に近い狐は、人間と同じように修行を通して仙になることを目指すこともありうるだろう。また、清代に、狐が人間に変身する話が数多く書かれてきたことも、狐は物より、人間に近いというような考え方が存在したことと関わりがあるかもしれない。

3つ目は、明代から、狐の変身譚は道教思想（養生・修行法）と結びつけられたことである。管見の限り、道教の養生・修行法を取り入れた動物の変身譚は、狐の変身譚しか存在しない。その原因は、狐の古来の「淫蕩」のイメージと関わりがある。この点については、第8章で詳しく論じる。

### 3.1.3.7 まとめ

以上のように、漢代から清代までの狐が変身することができる条件について検討した。簡単にまとめると、狐が変身することができる条件の歴史的変遷は以下とおりである。

狐の変身の条件として、漢代から夢の中の変身の登場から始まり、「物老為怪」の思想の影響によって、前晋時代から「長い年月を経る」という時間的な要素が新たに登場し、晋代に流行した。「物老為怪」の表し方は2通りある。1つ目は具体的に変身できるようになる年齢を示す（例えば、五十歳・百歳など）ことである。2つ目は具体的な年齢を示さないで、「老狐（老いた狐)」という記述で表すことである。それ以外に、晋代に、「狐は本来変身の能力が備わっている」という狐の属性に対する認識が登場した。この狐の属性は変身の条件ではないが、この属性に対する認識の広がりによって、特に唐代以降、狐の変身の条件についての描写が少なくなってきた。

---

[99] 仙人になるための修行法を指す。

[100] 李(2002)、p. 204 では、「唐世形成天狐信仰和天狐崇拜。宋元时期基本销声敛迹。（中略）狐仙观念始于唐，但唐代尚无“狐仙”概念。在明代中后期有关狐修炼仙道的观念渐次强化，并且正式出现了“狐仙”概念，到了清代终于形成影响日见广泛的狐仙崇拜」と述べている

[101] 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、pp. 216。

唐代・五代になっても、「物老為怪」の思想の影響はまだ強い。また、髑髏をかぶる・髑髏をかぶって北斗を拝むという変身の条件が登場した。

宋代・元代にも、引き続き「物老為怪」の思想の影響が存在している。元代に入ると、「尻尾の毛を抜く」といった新たな変身の条件が出現した。

明代にも、「物老為怪」の思想の影響は依然として存在している。そして、髑髏をかぶる変身の仕方の発展として、髑髏をかぶって月を拝むという変身の仕方が出現した。また、道教の修行に関連する「人間の寝息を受ける」という変身の条件が登場した。このような条件の登場から、明代に、道教の修行の考え方および修行法が狐の変身譚に流用されたことがわかる。

清代になると、「物老為怪」の思想の影響が依然として存在している一方、道教の修行の思想がさらに狐の変身譚に浸透し、「煉形」という道教の考え方にもとづく狐の変身する条件が登場した。変身する条件以外に、道教が清代の狐の変身譚に与えた影響は、狐が仙になるための修行の方法にも色濃く表れている。

### 3.1.4 狐の人間味

狐の変身譚において、狐は形態上だけ人間に変身した場合もあるが、人間の道徳を知る狐・理想の妻・友達など、人間味のあるキャラクターとして描かれる場合もある。つまり、形態上の人間化だけでなく、心の人間化、すなわち人間味[102]が描かれる話が存在する。本節では、各時代における狐の人間味が描かれた話について考察を行う。

漢代および魏晋南北朝時代において、狐の変身譚には短編のものが多く、これらの話の記述は簡潔であり、狐の形態上の人間化だけが描かれる。魏晋南北朝時代に書かれたもっとも長い狐の変身譚は、『搜神記』巻 18（421）「張茂先」[103]である。この話の要約は以下のとおりである。

ある斑の狐が、千年の年月を経て、変化することができるようになった。そして、狐は 1 人の書生に変身して、張華という高官と知恵比べをしようとした。樹齢千年の

[102] 人間の心を感じさせるような言動を指す。例えば、人間らしい感情をもつこと、あるいは人間らしく行動することが挙げられる。

[103] 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985 年、pp. 219-220。現代日本語の要約は筆者による。

華表[104]がこのことを聞いて、書生に変身した狐を止めようとしたが、止められなかった。書生に変身した狐は張華のところに行って、自分の博識を披露した。しかし、容姿も学識も優れる若い書生は、かえって張華の疑いを招いた。若い書生はきっと幽霊もしくは狐であろうと張華は思った。張華は人をやって華表を切り、持って帰った。華表を燃やし、書生を照らすと、それは一匹の狐であった。張華は狐を煮殺した。〔3.1.1-5〕

この話においては、学問に通暁し、人間の知力を持つ狐の博識が描写されているが、狐の人間味についてはあまり描写されていない。

唐代になると、狐の変身譚が長くなり、屈折に富んだ物語が多数書かれるようになった。それにともなって、狐の人間味についての描写が現れるようになった。代表的な作品として、唐代中期に書かれた「任氏」(『太平廣記』巻 452「任氏」)[105]が挙げられる。話の要約は以下のとおりである。

韋崟という人がいて、酒好きであった。彼のいとこの婿である鄭六も酒と女色が好きで、2 人はいつも一緒に遊びまわった。鄭六は貧しくて家を持っていないため、妻の親類のところに身を寄せていた。ある日、鄭六は 1 人の美女と出会って、美女の家に招かれた。この美女は美女に変身した狐であり、名は任氏である。その後、鄭六は、任氏が狐であることを知ったが、一緒に暮らし始めた。韋崟は任氏の美しさを見て、暴力をふるって任氏と交わることを強要したが、任氏は鄭六に対する貞節を守ろうと必死に逃れた。任氏は鄭六を助け、彼を裕福にさせた。その後、鄭六は武官に任ぜられた。彼は任氏を連れて行こうとしたが、拒まれた。鄭六と韋崟が一緒に任氏を説得したため、任氏は仕方なく、鄭六と一緒に行った。道中、任氏は猟犬に遭遇し、狐の姿を現した。狐は逃げようとしたが、猟犬に捕まえられ殺された。鄭六は狐を手厚く埋葬した。〔3.1.1-28〕

この話の最後に、作者は以下のような評注をつけている。

[104] 墓の入り口に立てる装飾用の柱を指す。
[105] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第十冊、pp.3692-3697。現代日本語の要約は筆者による。

「異類の情ではあるが、人の道がある。暴力に遭っても貞節を守り、人に従うために死に至った。今の婦人でも、彼女に及ばない者がいるだろう。惜しいのは、鄭生[106]は聡明な人ではなかったことである。ただ彼女の美しさを好んで、彼女の情意がわからなかった。博識な人であれば、必ず変化の道理がわかり、神と人間のめぐり合わせを察し、美しい文章を書き、繊細で美しい感情を伝える。ただ彼女の美しさを観賞することにとどまらなかったであろう。[107]」

作者の評注のように、この話の中に描かれた任氏は、狐の化け物ではあるが、人間味がある。鄭六のために必死に貞節を守り、最後に鄭六のために死んで、情を重んじる狐と描かれた。また、鄭六が任氏は狐であることを知った後、任氏と引き続き付き合いたいと言った後、任氏は、「若公未見惡。願終己以奉巾櫛。（もしあなたが私を嫌いでなければ、私は一生あなたの妻になりたい。）」と語った。任氏は狐ではあるが、鄭六に対する感情は人間のようであり、人間味に富んだ狐であると言える。

「任氏」の話は、唐以降の狐の変身譚に大きな影響を与え、人間味のある狐が数多く描かれるようになった。

唐代において、男性に変身した狐の場合でも、人間味のある狐の話が存在する。『太平廣記』巻 455 引『奇事記』「昝規」[108]の話の要約は以下のとおりである。

昝規という人が母親を亡くし、家が火災に遭った。財産を全部焼かれ、貧乏になった。6 人の子供はまだ幼く、彼らを養うこともできなくなった。昝規の妻は昝規に、「私は、自分を人に売って、そのお金であなたと子供たちを養い育てたい」と言った。昝規は仕方なく同意した。ある日、1 人の老いた男が訪ねてきた。昝規の家の事情を聞いて、長い間悲しく思い、昝規の妻を買って、銭十万を昝規に渡した。そして彼は昝規に、「もし子供たちが母親のことを思ったら、藍田の山の下に来てください。子供たちを母親と会わせるから。」と言った。三年後、子供たちは皆亡くなり、昝規もまた貧乏になった。昝規は老人の話を思い出して、藍田の山の下に行って、老人を尋ねた。老人は食べ物を出して、昝規に食べさせ、昝規の妻を呼び出した。昝規の妻は、

[106] 鄭六を指す。
[107] 現代日本語の要約は筆者による。
[108] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、1986 年、第十冊、pp. 3717-3718。現代日本語の要約は筆者による。

子供が死んだことを聞いて、号泣して死んでしまった。老人はこれを見て、大いに怒り、昏規を殺そうとした。昏規は老人の家から走り出て、振り返ってみると、老人の邸宅が消え、妻が古い塚の前で死んでしまったことを知った。その古い塚の隣に穴がある。昏規が塚を掘り出すと、1 匹の老いた狐が走り出た。昏規は自分の妻はこの狐に買われたことがわかった。〔3.1.1-34〕

この話において、老人に変身した狐は、①昏規の家の事情を聞いて、長い間悲しく思い、②昏規の妻を買った後、「もし子供たちが母親のことを思ったら、子供たちを母親とあわせる」と言った、③昏規が尋ねに来た時、食べ物を出して昏規に食べさせたという描写から、この狐は人間味のある狐として描かれたことがわかる。

また、「任氏」と似たような話として、『宣室志』巻 10(135)「許貞狐婚」[109]が挙げられる。女性に変身した狐が許貞と結婚し、妻として 20 年間許貞と子供たちに尽くした。病気で死にかけた際に、許貞に自分の名残惜しい気持ちを伝え、そして子供たちを心配する気持ちを語った。彼女は死んだ後、狐の姿に戻ったが、許貞は彼女を手厚く埋葬した。〔3.1.1-38〕この話は、人間と結婚して、人間のために尽くすという点において、「任氏」の話と似ており、狐は人間味のある狐として描かれている。

唐代において、狐の人間味について詳しく描写される話の出現は、唐代小説の発展と関わりがある。富永(1989)は、「単に怪を志した六朝志怪と違って、「叙述宛転、文辞華艶」と魯迅が評する（『中国小説史略』第八篇唐之伝奇文上」）ようになった唐代小説においては、狐の話もこのように複雑多岐になるのは当然であろう」[110]と述べている。また、坂井田(1996)も、「狐の多芸多才や愛情などをはっきりと書き分け、悪を懲罰し善を讃え、人類と友好的に付き合う友としての狐の姿が描き出されている。これについて魯迅は、唐人は初めて意識して狐を小説にした、と述べており、まさに狐の妖怪変化（へんげ）の芸術的成熟は、唐代伝奇小説の発展と同進暢[111]と言え、これは「志怪」と「伝奇」の結合と言える」[112]と述べている。

つまり、唐代において狐の人間味が描写されるようになった原因は、狐の変身譚が、魏

[109] 李冗撰 張讀撰・張永欽 侯志明點校『獨異誌　宣室志』、古小說叢刊、中華書局、1983 年、pp. 135-137。現代日本語の要約は筆者による。
[110] 富永(1989)、p. 195。
[111] 原文の誤字である。
[112] 坂井田(1996)、p. 9(1322)。括弧の部分は原文によるものである。

晋南北朝時代の「怪異の記録」から、唐代にはだんだんと「小説」に移行したことである。このような移行に伴い、狐の変身譚も内容的に豊富になった。

宋代において、人間味のある狐が描写された話は 1 例ある。その例『云齋廣錄』巻 5「西蜀異遇」[113]の要約は、以下のとおりである。

> 李褒という地方官の息子の達道は、ある日、年十四、五歳の美しい女性と出会った。その女性の名前は宋媛である。2 人は意気投合したため、その日から、宋媛が毎晩達道の家に来て、暁になると去るようになった。1 ヶ月くらいを経て、ある日、達道の夢の中に、李二秀才と自称した人が現れ、宋媛が狐の化け物であることを知らせ、護符を 1 枚達道に渡した。目が覚めると、護符が机の上にあった。達道がこの護符を持つと、宋媛は近づくことができなくなった。宋媛は達道を恋しく思い、『蝶恋花』[114]を一編書いて、その『蝶恋花』が書かれた紙を達道に拾ってもらった。達道は感動して、護符を破って、2 人は再び一緒に暮らすようになった。その後、2 人の間に 1 人の子供ができた。ある日、宋媛は突然悲しみに襲われ、泣きながら達道に、「私とあなたとの出会いは偶然のことではなかった。今、別れの日がきた」と言った。そして、勉学に励むなど、いろいろと達道を励んだ。翌日の朝、宋媛と子供はいなくなった。〔3.1.1-41〕

この話は、「任氏」と似ており、主人公の男性は、相手が狐であることを承知した上で、女性に変身した狐と交際した。そして、女性に変身した狐も、男性に対して、真摯な愛を持っていた。

元代・明代の狐の変身譚は、人間味のある狐を描く面において、新たな発展が見られない。坂井田(1996)は、宋代・元代・明代の狐の変身譚について、「中国では、宋・元・明三代においては、狐精物語に目新しい作品は生まれず、ほとんど停滞時期であった。先に紹介した『任氏伝』が切り開いた狐精文学の新伝説は後代の狐精文学に大きな影響を与えたのではあるが、しかしその後は見るべきものはなく、多くの作品は依然として志怪の古い道に戻ってしまった」[115]と述べている。

---

[113] 李獻民撰・程毅中 程有慶點校『云齋廣錄』、古小說叢刊、中華書局、1997 年、p. 25-32。現代日本語の要約は筆者による。
[114] 宋代の「詞」の形式の一種である。「詞」は、韻文の一種である。
[115] 坂井田(1996)、p. 23(1308)。

清代になると、狐の変身譚が全盛期を迎えた。人間味のある狐が数多くの変身譚の中に登場し、しかも人間と通婚するだけでなく、人間の友達になる話も数多く書かれた。これらの話において、人間はそれが狐であることを承知した上で狐と交流をし、狐を人間として見ている。例えば、『閱微草堂筆記』 巻 1 獻縣周氏僕周虎[116]において、女性に変身した狐が、人間の男性と 20 年以上一緒に生活した。この話の要約は以下のとおりである。

周虎という人が、女性に変身した狐と 20 年以上一緒に生活し、2 人は夫婦のように暮らしてきた。女性は周虎に、「私は前世の因縁のためあなたと一緒に暮らしてきた。縁がなくなった時は、別れの時だ」と言ったことがある。ある日、彼女は嬉しそうに笑ったが、また悲しそうに涙をこぼし、周虎に「今月の 19 日は別れの日である。あなたの嫁になる女性が見つかった。彼女を嫁にもらいなさい。」と言った。そして、お金を周虎に渡し、嫁をもらう準備をさせた。その後、女性は泣きながら周虎と別れた。〔3.1.1-73〕

この話においては、女性に変身した狐が、男性のために結婚相手を見つけ、男性に嫁をもらうためのお金を与えたこと、また、男性と別れる時に泣いたなど、狐の人間味がよく描写されている。

また、『閱微草堂筆記』 巻 5 沈觀察夫婦并故[117]においては、善良な心を持つ情を重んじる狐が描かれている。話の要約は以下のとおりである。

ある未亡人が病気で床に就いて、自分で食事を作ることさえできなくなった。隣人のおばあさんに、代わりに食事を作ってもらうことを頼んだが、おばあさんもときどき来られないことがあった。ある日、突然 1 人の少女がやって来て、「私は新しく引っ越ししてきた近所の娘である。あなたは食べ物がないことで困り苦しんでいることを聞いて、平然としてはいられない。両親に、あなたの看病をして、食事を作りたいと告げた」と言った。それから彼女は毎日未亡人の家にやって来て、3、4 ヶ月が経っ

[116] 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、p. 4。原文の中国語訳は纪昀著・邵海清等译『白话全本阅微草堂笔记』、十大文言短篇小说今译丛书、上海古籍出版社、1995 年、p. 4-5 を参考にした。現代日本語の要約は筆者による。

[117] 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、p. 81。原文の中国語訳は纪昀著・邵海清等译『白话全本阅微草堂笔记』、十大文言短篇小说今译丛书、上海古籍出版社、1995 年、p. 110-111 を参考にした。現代日本語の要約は筆者による。

た。未亡人は病気が治って、少女の両親にお礼を言おうとした。少女は涙をこぼし、未亡人に、「私は狐である。昔あなたの主人と仲がよかった。昔の情を忘れずに感謝し、またあなたが苦しい中でも節を固く守ることに同情し、他人の名義を借りてやってきたのである」と言った。そして、お金を残して、嗚咽しながら去った。〔3.1.1-81〕

この話は善良な心を持つ情を重んじる狐が人間を助けた話である。この話において、少女に変身した狐が昔の情を重んじ、苦しい中でも節を固く守ることに同情するというような描写は、狐の人間味を表している。

『閱微草堂筆記』 巻 17 族姪竹汀言[118]においては、昔交際していた男が死んだ後、その男の両親の世話をする狐も登場した。〔3.1.1-124〕

上記の話と似たような、死んだ相手の両親の世話をする話として、『醉茶志怪』 巻 4 「樊英」[119]が挙げられる。話の要約は以下のとおりである。

狐が樊英という女性に変身し、劉という書生と意気投合して、交際していた。劉は数年後病気になり、樊英は彼の看病をした。その後、劉は亡くなった。劉が埋葬された時、樊英は彼の妻のように礼を尽くした。その後、樊英は劉のお母さんに 1 つの袋をのこして、「これからもお母さんを養う。もし何かが必要でしたら、この袋の中を探してください」と言った。その後、劉のお母さんは米・衣服などが必要な時に、それらのものを袋から取り出し、一生衣食に困ることがなかった。〔3.1.1-152〕

その他、人間と友達になった狐の話もある。例えば、『醉茶志怪』 巻 3 「林承嗣」[120]の話の内容は以下のとおりである。

林承嗣という人が老いた男に変身した狐と忘年の交わりとなった。林承嗣は、老人が狐であることを承知した上で、老人と長く交際してきて、胸の内を全部話した。そして、林承嗣は老人にお金を借りようとしたが、断られた。老人は、「裕福な生活を

[118] 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、p. 415。
[119] 李慶辰著『醉茶志怪』、歷代筆記小説叢書、斉魯書社、2004 年、pp. 216-217
[120] 李慶辰著『醉茶志怪』、歷代筆記小説叢書、斉魯書社、2004 年、pp. 156-157。現代日本語訳は筆者による。

している人は、その多くは前世と関わりがある。あなたは前世が知識人であり、功もなければ、罪もなかったため、今世は裕福な生活を無理に求めてもできないのだ」と彼に言って、そして彼を連れて、彼に自分の目で確認させた。〔3.1.1-150〕

この話において、林承嗣は老人が狐であることを承知した上で、老人と意気投合して友達になった。このような描写から、人間は狐を人間として見て、狐と対等に交際したことがわかる。

清代においても、前の時代の影響を受け、狐が人間に変身して、人を惑わし、害を与える話も存在するが、上記のように、狐の人間と同じような道徳心・狐の人間味が細かく描写された話が数多く書かれてきた。また、このような人間味のある狐は、話の中では、妻・友達・隣人・息子の恋人など、さまざまな役割で登場し、人間を助け、あるいは人間と対等に交際した。人間味のある狐が数多く創り出されたことから、清代に狐の変身譚が大きな発展を遂げたと言える。

各時代の人間味が描かれた狐の変身譚から見ると、変身譚の中の狐はだんだんと人間味に富んだ人物になっていき、外観上人間にそっくりなだけでなく、人間と同じような道徳心および感情を持つようになってきた。それだけでなく、話の中で、人間が、相手が狐と分かったうえで、交際したり、結婚したり、友達になったりするようになった。話の中の人間が、狐を人間として見て、共存するようになった。このような傾向は、唐代にすでに現れていたが、清代になると大きな発展を遂げた。人間味に富んだ狐の変身譚は、清代が全盛期と言える。

## 3.2 日本における狐の変身譚

中国と同じように、日本においても、狐の変身譚の中で、狐が人間に変身する話は圧倒的に多い。日本における人間が狐に変身する話は、江戸時代に書かれた『新著聞集』10－17「人活ながら狐となる」[121]の 1 例しか存在しない。そのため、本章では、主に狐が人間に変身する話に対して考察を行う予定である。

本節では、狐が人間に変身する話の変遷を、①狐が変身した人の性別上の割合の変遷、②狐が人間に変身することができる条件の変遷、③狐の人間らしい感情や行動が描かれた話の変遷という 3 つの角度から考察する。

3.2.1 では、狐の変身譚を概観する。具体的に、各時代の変身譚の数を提示する。

3.2.2 では、狐が変身した人の性別上の割合の変遷を考察する。具体的に、狐が変身した人の男女の割合の時代的変化を分析し、性別要素変化の原因について考察を行う。

3.2.3 では、狐が人間に変身することができる条件の変遷について考察を行う。

3.2.4 では、各時代における狐の人間味が描かれた話について考察を行う。

### 3.2.1 日本における狐の変身譚の概観

データベースおよび手作業で調査した結果、平安時代から江戸時代までの間に書かれた計 31 例の狐の変身譚を抽出した。31 例の中に、人間が狐に変身する話は本章冒頭で掲示した 1 例のみあり、歴史的変遷の考察対象としないため、以下の「狐の変身譚」は「狐が人間に変身する変身譚」を指す。狐が人間に変身する変身譚は 30 例ある。抽出した各時代の狐の変身譚の例数を以下の表 3.2.1 に示す。

**表 3.2.1　各時代の狐の変身譚の例数**

| 時代 | 例数 |
|---|---|
| 平安時代 | 10 |
| 鎌倉時代 | 3 |
| 室町時代 | 3 |
| 江戸時代 | 14 |
| 合計 | 30 |

[121] 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫第 47 編、博文館、1903 年、pp. 141-142。

上記の表から、以下の 2 点が見て取れる。

①狐の変身譚の初出は平安時代である。この点については、中村（1984）も言及している[122]。また、中村は、日本における狐の変身譚の登場について、以下のように述べている。「九世紀初期には、特定の氏族がキツネを始祖とするという伝えが巷間に流布しており、それはキツネの変身説話をともなっていた。しかしそれは、おそらく渡来系の氏族をめぐる伝承であり、（中略）広く大きな力をふるうことはなかった[123]。」また、中村は、「キツネが大王家や中央の大豪族の祖神とみなされていたならば、やはりなんらかの形でこれらの書目（『古事記』『日本書紀』『風土記』を指す、筆者注）に記載されていたはずであるが、現実にはそうなっていない[124]」と述べている。さらに、中村は、「前後して中国から入った狐妖譚[125]が始祖伝承系の変身説話に混交し、そのうえ時代をへるにしたがって狐妖譚の要素が強化されていく傾向があった[126]」と指摘し、「『今昔物語集』が編集された一二世紀には、九世紀ごろにくらべて、キツネが人をだまして惑わせる話がより多く流布していたと思われる[127]」と述べている。

上記をまとめると、奈良時代において、狐を始祖とする信仰が、民間に流布していた可能性はあるが、まだ広まっていなかった。それにもかかわらず、奈良時代の狐の始祖信仰は、のち、日本における狐の変身譚の成立と発展の土台となった。平安時代になってから、狐の始祖信仰にかかわる狐の変身譚が広まっただけでなく、中国から移入した狐の変身譚に影響された。

②狐の変身譚は、登場して以来、江戸時代までの間にかけて絶えず書かれてきた。そのうち、もっとも多く書かれた時代は平安時代と江戸時代である。狐の変身譚が数多く書かれたことから、狐は日本で登場して以来、変身することができる動物として広く受け入れられ、受け継がれてきたことがわかる。

### 3.2.2 日本における狐が変身した人の性別上の割合の変遷

#### 3.2.2.1 時代別狐が変身した人の性別の割合

[122] 中村（1984）、p. 87 では、「キツネが人に変身する説話は、『古事記』『日本書紀』『風土記』には一例も見られなかった」と述べている。
[123] 中村（1984）、p. 96。
[124] 中村（1984）、p. 91。
[125] 中村（1984）、p. 96 中国の「人に化する狐妖譚」を指す際に、この言葉を使っている。
[126] 中村（1984）、p. 96。
[127] 中村（1984）、p. 96。

30 例には、狐が人間に変身した後の様子（例えば、「美人」や「老人」など）に関する記述が含まれるものが多数存在している。特に変身後の性別がわかる、もしくは推定できる物語は 28 例あり、全体の約 93%を占めている。なお、中国と同じように、変身後の性別が示されていない例、および男女の両方に変身する例は、「その他」の項目に入れる。「その他」の例は 5 例ある。

**表 3.2.2.1 狐が人間に変身した後の性別（括弧内は変身譚の例数）**

| 時代 | 男性 | 女性 | その他 |
|---|---|---|---|
| **平安時代** | 10%（1） | 80%（8） | 10%（1） |
| **鎌倉時代** | 33%（1） | 33%（1） | 33%（1） |
| **室町時代** | 0%（0） | 100%（3） | 0%（0） |
| **江戸時代** | 50%（7） | 29%（4） | 21%（3） |
| **合計** | 30%（9） | 53%（16） | 17%（5） |

表 3.2.2.1 に示したように、合計から見ると、狐が女性に変身する例が多い。

各時代から見れば、江戸時代以前までは、狐が女性に変身する話がほとんどであり、男性に変身する話も存在するが、数が極めて少ない。江戸時代になると、男性に変身する例が増え、女性に変身する例より 3 例多い。

平安時代・鎌倉時代・室町時代において、狐が女性に変身する話のほとんどは、女性に変身した狐が人間の男性と婚姻関係を結ぶ話、もしくは人間の男性を誘惑する話・害を与える話である。中村(1984)は、これらの話は中国から伝来した狐の妖異譚が日本の古来の狐の始祖伝承系の説話に混交して、作り出された話であると指摘している[128]。

平安時代・鎌倉時代の狐が男性に変身する話は、『法華験記』上-25「叡山西塔春命」[129]と『古今著聞集』巻 17－606「大納言泰通、狐狩を催さんとするに、老狐夢枕に立つ事」[130]である。前者は、狐が妙法と宝螺を聞いた功徳に依って、今世人間に生まれ変わった話である〔3.2.1-3〕。後者は老いた狐が人の夢に来て、大童子[131]の姿に変身して、自分の子供

[128] 中村（1984）、p.91-96 を参照。
[129] 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系 7、岩波書店、1974 年、p.524。
[130] 橘成季撰・西尾光一、小林保治校注『古今著聞集』下、新潮日本古典集成第 76 回、新潮社、1986 年、p.293-296。
[131] 年をとった童子を指す。

と孫たちの代わりに謝罪をし、「お詫びをするために、御守りとして、お家にいいことがあれば必ず予告する」と言った話である〔3.2.1-13〕。

また、平安時代・鎌倉時代に書かれた、「その他」に分類された 2 例の話は、『今昔物語集』巻 27-32「民部大夫頼清家女子語第三十二」[132]と『宇治拾遺物語』巻 3-20「狐家に火つくる事」[133]である。前者は狐の悪戯の話であるが、人間に危害を与えなかった〔3.2.1-7〕。後者は狐の復讐の話で、狐は家を燃やし、人間に危害を与えた。〔3.2.1-12〕

上記のように、平安時代・鎌倉時代・室町時代において、狐が女性に変身した場合、人間の男性と交わるが、狐が男性に変身した話においては、人間の女性と交わることはない。つまり、人間と婚姻関係を結ぶ、もしくは人間を誘惑する話は、狐が女性に変身する場合のみに存在していた。

江戸時代に書かれた女性に変身した狐の話は 5 例あるが、「その他」に分類した説経節『信太妻』[134]において、狐はまず和尚に変身して保明に報恩をし、その後女性に変身して保明と結婚したという 2 つの部分がある。以下では、この話の中の後半部分、すなわち女性に変身した狐と人間の異類婚姻譚の部分をも、狐が女性に変身する話の考察範囲に入れる。

江戸時代に、男性に変身する話が増えるにつれ、男性に変身した狐が悪戯したり、人間の助けを求めたり、人の主人に変身したり、復讐したりするようなさまざまな話が展開された。

### 3.2.2.2 性別要素変化の原因

江戸時代以前は主に狐が女性に変身する中国の変身譚、特に唐代もしくは宋代の変身譚に影響されたと考えられる。中村（1984）は、日本の中古において、狐の人への変身説話のある種のものは、中国の狐妖異譚の影響を受けていると指摘している[135]。中村は、『法華験記』下-127「朱雀大路野干」[136]の話を挙げ、その中の「女性に変身した狐と交わる男性は死ぬ」といった要素に注目し、「日本におけるキツネの人への変身説話のある種のものは、

[132] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注、訳『今昔物語集』④、新編日本古典文学全集 38、2008 年、pp. 102-104。
[133] 小林保治、増古和子校注、訳『宇治拾遺物語』、新編日本古典文学全集 50、小学館、2008 年、pp. 144-145。
[134] 荒木繁・山本吉左右編注『説経節　山椒太夫・小栗判官他』、東洋文庫 243、1988 年、pp. 275-303。
[135] 中村（1984）、p. 88。
[136] 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系 7、岩波書店、1974 年、p. 567。

中国のキツネ妖異譚の影響をうけている。(中略) キツネが人の男と婚したのち男の無理をいれたため命を捨てるという点で、沈既済の有名な『任氏伝』(唐代) はこれと一致している[137]」とし、この要素は中国から流入したものと指摘している。また、中村は、上記の「朱雀大路野干」の話について、「中国の狐妖の話が日本に流入し、この国に以前から存在したと思われるキツネ女房の話と合流したのち形成された説話」と解釈している。

中村が言う「以前から存在したと思われるキツネ女房の話」は、奈良時代に、民間に流布していた狐を始祖とする伝説を指している。『日本霊異記』上-2「狐爲妻令生子縁」[138]の話には、日本において以前から存在した狐を始祖とする伝承が反映されている。この話の要約は以下のとおりである。

> 三乃の国大乃郡の人が、妻を探しに出かけた。野原で美しい女に出会って、その女に「私の妻になってくれないか」と聞いて、許可をもらった。2 人は結婚して、女は 1 人の子供を産んだ。家に飼っている犬もその時子犬を産んだ。この子犬はいつも女に向かって吠えた。女はおびえて、「犬を殺してください」と夫に頼んだが、夫は犬を殺さなかった。ある日、女性が臼のある部屋に入った時に、その犬に追いかけられ、吠えられた。女性は驚き恐れ、狐の姿をあらわして籠の上に飛び乗った。男はそんな女を見ても愛情を持って語りかけ、「いつでもおいで、一緒に寝よう」と言った。その後狐はやって来て、彼と一緒に寝た。夫は、2 人の間にできた子の姓を「狐の直」とした。これが、三乃の国の狐の直等の由来である。〔3.2.1-1〕

狐が残した子供が、「三乃の国の狐の直等の由来」であるため、この話は、狐の始祖信仰の影響を受けたことがわかる。奈良時代から民間に流布していた狐の始祖信仰と混じった変身譚は、おそらくこのような「氏族の祖先は狐妻と人間の間にできた子供であった」というような話であると考えられる。また、長野 (1969) は「犬に吠えられ正体をあらわした」といった部分に注目し、「ついでにどうして犬がこんなところで用いられるのかと考えると、(中略) 白楽天遺文の「任氏行」に狐が女に化けて男に嫁したが、猟に行く時連れて行ったよき犬が、「コノ女ノキツネナル事ヲ知テ、トビアガリテクヒ (ヲ) トシテケリ。」と

[137] 中村 (1984)、p. 88。
[138] 中田祝夫校注、訳『日本霊異記』、新編日本古典文学全集 10、小学館、1995 年、pp. 28-29。

あって、とにかく中国から流入した観念と知られるのである[139]」と述べ、狐が変身した人は犬を恐れるという観念は中国から流入した観念であると指摘している。そのため、上記の「狐爲妻令生子縁」の話については、民間に流布していた狐の始祖信仰を反映していると同時に、中国の狐の変身譚の影響も受けていたことが推測できる。

中村と長野の意見によると、①日本において、古来、狐の始祖伝承系の説話（狐妻と人間の間に子供ができた話）が民間に流布したことは、中国の狐の変身譚が受け入れられる基盤となった。②平安時代に書かれた狐の変身譚の中には、すでに「人間に変身した狐は犬を恐れる」、「狐の変身した女性と交わると、男性は死ぬ」といった中国から流入した要素が見られる。この時点では、日本における狐の変身譚はすでに中国からの影響を受けていた。

上記の 2 点をふまえると、日本において、狐が女性に変身する話の登場したきっかけについて、以下の推論ができる。日本には、古来、渡来氏族の中に、狐を始祖とした伝承があった。奈良時代には、渡来氏族の勢力が弱かったため、このような伝承は典籍に記載されていなかった。とはいえ、平安時代に書かれた「狐爲妻令生子縁」の話から見ると、狐を始祖とした伝承は、おそらく「狐爲妻令生子縁」のような狐妻が人間の男と子供を産む話であろう。平安時代になると、渡来氏族の勢力が強くなり、さらに狐が女性に変身する中国の話も日本に伝来し、狐の始祖伝承にも混入した。従来の始祖伝承系の説話において、狐の女性との結びつきはすでに存在していたため、中国から移入された狐が女性に変身する話も受け入れられやすかったと考えられる。このように、日本においては、日本古来の狐に対する考え方と、中国から移入された狐が女性に変身する話がともに狐の変身譚に影響を与えたため、狐は基本的に女性に変身することが定着してきた。

江戸時代になると、狐の説話は数多く書かれただけでなく、その内容にもさまざまな展開が見られる。中国から流入した「狐の変身した女性と交わると、男性は死ぬ」および「人間に変身した狐は犬が苦手」といった 2 点の要素のある話は、2 例しか存在しない（『本朝食鑑』巻 11「狐」[140]、『老媼茶話』36「狐」[141]）。ただし、「稲荷の使い」、「若狐が化け損じる」、「狐が結婚のなかだちをする」のような日本独自の要素が見られる。つまり、時代が

[139] 長野（1969）、p. 19。
[140] 丹岳野必大千里著『本朝食鑑』、平野氏傳左衛門・平野屋勝左衛門、元禄 10 年（1697 年）、古典籍、国立国会図書館デジタルコレクション、12 巻[11]、コマ番号 23-24。付録〔3.2.1-18〕参照。
[141] 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫第 47 編、博文館、1903 年、pp. 367-368。付録〔3.2.1-19〕参照。

下るにつれ、日本における狐の変身譚には、中国からの影響が残っている一方、独自の発展も見られる。このような発展とともに、狐が変身後の性別に、変化が生じることもありうるだろう。

### 3.2.3 狐が人間に変身することができる条件の変遷

本節では、狐の変身譚の歴史的変遷を「狐が人間に変身することができる条件」という角度から考察する。

日本の狐の変身譚においては、狐が人間に変身することができる条件について、「老いた狐」などの限定条件に言及することが少ない。「狐は本来変身の能力が備わっている」といったことを狐の属性として認識されていることが変身譚の大半を占めている。以下では、このような狐の属性に関する変身譚を排除し、狐がそれぞれの時代に、人間に変身することができる条件の登場と発展を検討する。

平安時代において、狐が人間に変身することができる条件がはじめて登場した話は、『和名類聚抄』巻18「狐」[142]である。内容は以下のとおりである。

> 孫愐の『切韻』は、「狐が妖怪になることができる。百歳に至ると女に変身する」という。〔3.2.1-2〕

この話は、中国の『切韻』を引用して、「百歳」という狐の変身の条件を示した。平安時代において、中国の「物老為怪」の思想によって形成されたものである、「狐が変身することができるようになる年齢」という時間的な要素が日本にも伝わってきたことがわかる。

平安時代において、上記のような時間的な要素以外に、仏教関係の変身の条件も登場した。『法華験記』上-25「叡山西塔春命」の話の要約は以下のとおりである。

> 春命という僧が経を唱えることに励んでいた。毎日寝ないで、暁まで経を唱えた。ある日、突然天女が現れ、彼に、「あなたの前世は狐である。西塔の法華堂に住んでいた。よく妙法と宝螺を聞いた功徳に依って、今世人間に生まれ変わった」と

[142] 源順撰『和名類聚抄』、那波道円、元和 3、古典籍、国立国会デジタルコレクション『和名類聚抄』20 巻[10]、コマ番号 45。現代日本語の翻訳は筆者による。

語った[143]。〔3.2.1-3〕

この話において、狐が人間に変身できた条件は「功徳」である。

鎌倉時代に書かれた狐の変身譚の中に、狐が人の夢の中で人間の形を現わす話が登場し、「夢の中」という変身の条件が登場した。『古今著聞集』巻17－606「大納言泰通、狐狩を催さんとするに、老狐夢枕に立つ事」において、人間に変身した狐は「老い狐」であると記しており、変身の条件として、「老いた狐」と「夢の中」が同時に存在している。故に、この話における変身の条件は複合型の条件であると考えられる。この話の要約は以下のとおりである。

> 大納言泰通の屋敷は古い家である。狐がよく化けて出ていた。最初は特に被害はなかったのだが、ますます狐が化けることが多くなってきた。泰通は狐狩をして狐を一掃しようと考えた。狐狩当日の明け方に、泰通の夢に、1人の老人（大童子）が現れた。老人は子供・孫たちの代わりに謝罪をし、今後はお家に吉事があれば必ず予告を発すると約束した。夢から目覚めると、夢の中で老人がいた場所に、老いた狐が一匹いて、その狐は泰通を見てから去っていった。その後、狐が化けた物はいなくなり、家中に吉事がある時には、予め狐が告げ知らせるようになった[144]。
> 〔3.2.1-13〕

この話には、老いた狐の子供・孫たちが「つねにばけゝり」と記されているが、人間に変身したかどうかは、話の内容から判断しにくい。話の中に明記された人間に変身したのは、大童子に変身した老いた狐である。老いた狐が人間の形で人の夢に現れた。これは、3.1.3.1で挙げた中国の漢代に書かれた『西京雑記』巻6（131）「記冢中事【七】」と似ており、狐が人の夢の中で人間の形を現したため、変身の条件を「夢の中」とする。また、「老いた狐」の記述も存在しているため、複合型の条件である。

室町時代に書かれた御伽草子『玉藻の草子』[145]において、鳥羽院を惑わした玉藻の前は、百歳の狐である〔3.2.1-16〕。この話においては、中国の「物老為怪」の思想の影響

[143] 現代日本語の要約は筆者による。
[144] 現代日本語の要約は筆者による。
[145] 京都大学附属図書館所蔵 ［玉藻の前（冊子体）］ 古典籍。あらすじは http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/otogi/tamamo/tamamo.html を参照した。

が見受けられる。狐が変身できる条件は「老いた狐」である。

江戸時代に、「老いた狐」に言及する話も存在する。『三州奇談後編』巻3-1「七窪の禅狐」[146]において、人間に変身した狐について、「夫こそは此野邊に年経る黄蔵主と云ふ黄狐ならん」とある〔3.2.1-23〕。この狐の変身の条件は「長い年月を経た狐」であると考えられる。

また、『耳袋』巻4「美濃国弥次郎狐の事」[147]において、人間に変身した狐について、「美濃国に弥次郎狐とて年を経し老獣ある由」とある。話の要約は以下のとおりである。

> 美濃国に弥次郎狐という老いた狐がいた。出家した人物に化けて、しばしば古い話を語った。特に紫野の一休和尚の事を常に語った。「一休和尚は道徳堅固な和尚ということを聞いて、彼が道徳堅固な和尚であるかどうかを試したかった。その時寺の門前に娘と母親が暮らしていた。若い娘が婿をとったが、若い夫婦の間、また親子の間の仲が悪かったため、若い夫婦が離縁した。私はその若い娘に変身して、一休のところに来て、寺に泊めてもらうように頼んだが、断られた。しかし、しつこく頼んで、台所の隅に泊めてもらった。その夜に一休をいたずらするために、彼の寝室に忍び入ったが、扇子のような物に背を打たれ、ひどく痛かった。一休は確かに道徳心が高い人である。」と語った。〔3.2.1-26〕

この話において、出家した人物に変身して昔のことを語る狐は老いた狐であるが、この狐が昔一休和尚の道徳心を試すために若い女性に変身した時に、すでに長い年月を経た狐であったかどうかが判断しにくい。「老いた狐」という描写はあるが、話の内容から、狐の変身の条件が「老いた狐」であるかどうかが判断しにくいのである。

上記の6例を除き、すべての話は狐には本来変身の能力が備わっているため、起こった変身である。

日本における狐が人間に変身できる条件についての考察を通して、以下の結論が得られる。

①日本においては、「狐は本来変身の能力が備わっている動物である」というような狐の

[146] 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫第 47 編、博文館、1903 年、pp. 901-903。
[147] 根岸鎮衛著・鈴木棠三編注『耳袋』1、東洋文庫 207、平凡社、1972 年、pp. 285-286。現代日本語の要約は筆者による。

属性に対する認識は狐の変身譚が登場した当初の平安時代にすでに存在していた。そしてこのような認識は広く受け入れられ、その後も引き継がれた。狐の変身の条件についてあまり書かれていなかったことも、おそらくこのような広まった認識が早い時代に定着したことと関係しているだろう。

②中国における「長い年月を経た狐が変身することができる」というような条件は、平安時代に日本にも流入したが、顕著には現れなかった。老いた狐に言及する話は各時代にしばしば現れるが、あまり強調されていない。中国の「物老為怪」の考え方は、日本の狐の変身譚に影響を与えたが、その影響は一定程度にとどまったことがわかる。

③日本の狐の変身譚においては、独特な変身できる条件として、「功徳」が挙げられる。この変身の条件は、仏教思想の影響の下で誕生した条件であると考えられる。

### 3.2.4 狐の人間味

日本においては、狐の変身譚が初登場した平安時代に、すでに人間の感情を持ち、人間味に富んだ狐が変身譚の中に描かれた。

『法華験記』下-127「朱雀大路野干」の話の要約は以下のとおりである。

> ある男が朱雀大路を歩いていた。夕暮れの時に、1人の美しい女性と出会った。男は女性と性交しようとしたが、女性は、「もし私と交われば、あなたは死んでしまう。奥さんと子供さんもいるし、富裕な人生も送っているし、一時の快楽を求めるせいで命を落とすのであればもったいない」と、男を拒んだ。その後、男があまりにもしつこいので、女性は仕方なく、男の要求を受け入れた。女性は、男に、「私はあなたの代わりに死んで、あなたの命を守る。私を苦から救い出すために、法華経を写して供養してください」と言った。男は同意した。そして2人は一夜ともにした。その翌朝に、男は、1匹の狐が武徳殿の中で死んでいたのを発見した。男は約束通り狐のために法華経を写して供養した。その後、彼女は男の夢に来て、自分は男のおかげで、忉利天に再生でき、この恩を永遠に忘れないと告げた[148]。〔3.2.1-4〕

この話において、女性に変身した狐は、男性に無理やり性交を求められたが、男性の命を

[148] 現代日本語の要約は筆者による。

守るために、代わりに自分の命を捨てた。男性の無理な要求を受け入れたため命を捨てたという面においては、3.2.2.2 で述べたように、中村は、この話は『太平廣記』巻 452「任氏」[149]（本論文 3.1.4 参照）の話と似ていると指摘している。男性を説得する際に、女性は「あなたには妻と子供がいるし、一時の快楽を求めるために命を落とすのはもったいない」と諭し、また、男の命を守るために自分の命を捨てるというような描写は、狐の人間味を感じさせる。この話の中の狐は人間のような感情を持ち、人間味に富んだ狐として描かれている。

日本の狐の変身譚において、狐の人間味についての描写は、女性に変身した狐と人間の男との交際や性交に関する話に集中している。室町時代に書かれた御伽草子『木幡狐』[150]において、女性に変身した狐の人間味が細かく描写されている。話の要約は以下のとおりである。

> 木幡の里に、稲荷の使者である老いた狐がいた。その狐の娘であるきしゆ御前は、ある日、稲荷の山から眺めた時に、美しい中将殿の姿を見て、恋に落ちた。すると、きしゆ御前は美しい女性に変身して、都に行った。彼女は中将殿と偕老の契りを結んで、1 人の子供を産んだ。子供が 3 歳の誕生日のお祝いに、犬が献上された。これを知ったきしゆ御前は、「ここを去るしかない。中将殿、若君への名残はいかがしたら良いのか」と涙を流して言って、名残惜しい気持ち抱きながら、父狐の住む古塚に帰った。きしゆ御前は、その後、嵯峨野に行って、庵室を結んだ。その庵室で、きしゆ御前は都を恋しく思いながら暮らしていた。彼女は子供を遠くから見守って、子供の元気な様子に喜んでいた。〔3.2.1-14〕

この話において、女性に変身した狐が、①中将殿の姿を見て恋に落ちた、②夫や子供と別れる際に名残惜しい気持ちを抱いて、涙を流した、③庵室で都を恋しく思い、子供の元気な様子を見て喜んだという描写から、人間味に富んだ狐であることがわかる。

江戸時代に書かれた説経節『信太妻』[151]の話も、女性に変身して人間と婚姻を結んだ狐の人間味について詳しく描写している。その中の変身譚の部分の話の要約は以下のとおり

---

[149] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第十冊、pp. 3692-3697。
[150] 市古貞次校注『御伽草子』、日本古典文学大系 38、岩波書店、昭和 33 年、pp. 148-160。
[151] 荒木繁・山本吉左右編注『説経節　山椒太夫・小栗判官他』、東洋文庫 243、1988 年、pp. 275-303。現代日本語の要約は筆者による。

である。

安倍保名は、つね平の勢子に追われた子狐を助けた。この狐は、まず僧侶に変身して、つね平と戦い捕まえられた保名を救った。次に、若い女に変身して、保名と結婚した。7 年の歳月が過ぎ、2 人の間に子供ができた。ある日、彼女が庭で菊を眺めていた時、我を忘れて狐の姿をあらわした。その時、子供は母の姿を見てしまった。彼女は、涙をこぼし、名残惜しい気持ちを抱いて、夫や子供と離れて森に帰ることを決心した。保名が留守の時、彼女は、自分は信太の森に棲む狐であり、報恩のために保名と結婚したこと、子供に狐の姿を見られたため、別れなければならないことと、子供をよく育てるようにと伝言を残して、去った。〔3.2.1-17〕

女性に変身した狐が、①夫や子供と別れることを決心した時に、名残惜しい気持ちを抱いて涙を流した、②別れる際に、保名に、子供をよく育てるように依頼したというような描写から、狐の人間味が感じられる。

上記の 3 つの話においては、いずれも狐の人間味に対する描写がある。しかし、同時に、これらの話では、人間に変身した狐は、本当の姿が主人公に知られた後、去っていったという描写もある。つまり、狐はあくまで狐であるという切なさもこの 3 つの話から読み取れる。

## 3.3 狐の変身譚の歴史的変遷の日中比較

### 3.3.1 性別の割合の変遷の比較

日中両国の狐の変身譚において、全体的に、狐が女性に変身する割合は男性に変身する割合より多い。その原因として、3.1.2.2 で述べたように、李（2002）が主張した、狐は顔が優しい女性の顔に似ているため、女性（特に美女）と結びつけられやすかったことが挙げられる。

ところが、中国の狐の変身譚においては、唐代まで、狐は変身後の性別に偏りがなく、男性と女性のどちらにも変身できるが、五代以降に、女性に変身する傾向が強くなってきた。それに対し、日本の狐の変身譚において、室町時代まで狐は女性に変身する傾向が強かったが、江戸時代になるとこのような傾向が弱まってきたように見える。このことから、日中両国の狐の変身譚において、狐が変身した後の性別の割合の変遷が異なることがわかる。

中国では、時代が下るにつれ、女性に変身する話の割合が増えた原因として、①晋代に書かれた『搜神記』巻 18（425）「阿紫」の話が後世に与えた影響が大きいこと、②「女色禁忌」の観念が、狐が女性に変身する話の創作を促したことという 2 点が挙げられる。

一方、日本の狐の変身譚の下地となるものは、奈良時代に民間に流布していた狐妻と人間の間に子供ができたという狐を始祖とする伝説である。つまり、日本において、従来の始祖伝承系の説話では、狐はすでに女性と結びつけられた。さらに、平安時代に、日本の狐の変身譚は、中国の狐が女性に変身し、男性を惑わす話に大きく影響された。このように、日本従来の狐に対する考え方、および中国から移入された狐が女性に変身する話が影響した結果、日本の狐の変身譚における狐は、どの時代でも女性との結びつきが強い。江戸時代になると、狐の説話は数多く書かれ、その内容も多様化した。中国からの影響が残っている一方、日本独自の要素がしばしば見られる。そのため、江戸時代には、狐が女性に変身する話の割合も減るようになった。

### 3.3.2 変身することができる条件の特徴の比較

中国の狐の変身譚では、狐が変身できる条件にしばしば変化が見られる。漢代に登場した「夢の中」という条件から、魏晋南北朝時代になると「物老為怪」の考え方に影響され、「老いた狐」という条件が登場した。その後、髑髏をかぶるなどの変身の条件が登場した。明代・清代になると、道教の修行の考え方および修行法・養生術が狐に流用され、変身の

条件がさらに種類を増やした。中国の狐の変身譚において、狐の変身できる条件にもっとも大きな影響を与えたのは、「物老為怪」の思想、および道教の修行に関する考え方である。前者は、魏晋南北朝時代に登場して以来、伝承され続けてきた。後者は、明代に狐の変身譚に取り入れられはじめ、清代の「狐仙」に関する一連の話の誕生を促した。

それに対し、日本においては、狐が変身できる条件についての言及が少ない。日本には、「狐は本来変身の能力が備わっている動物である」というような狐の属性に対する認識が狐の変身譚が登場した当初の平安時代にすでに存在した。このような認識は、中国から流入したものなのか、それとも日本に以前から存在したものか、判定しにくいが、このような認識はその後も日本の狐の変身譚の中で生き続けてきた。狐の変身の条件についてあまり書かれていなかったことも、おそらくこのような共通認識が早い時代に定着したことと関係しているだろう。また、中国における「老い狐」というような条件は、平安時代に、日本にも流入した。老いた狐に言及する話は各時代に時折見受けられる。これは、中国の「物老為怪」の考え方が、日本の狐の変身譚にも影響を与えたことを示している。日本の狐の変身譚に特有の変身できる条件として、「功徳」が挙げられる。この変身の条件は、仏教思想の影響下で誕生した条件であると考えられる。坂井田(1996)は、日本と中国の狐精物語の相違について言及する際に、日本における狐の変身譚の仏教的な思想背景に言及し、「中国の狐精物語は、概念的、浪漫的、高唐無稽（筆者注：原文はこのまま）であり、詼諧玩世の精神に富んでいるのに対して、日本のは情趣的、現実的であり、因果応報などの仏教的な思想が背景にあって、物語を作り上げている。」と述べている。

### 3.3.3 狐の人間味の日中比較

中国において、狐の変身譚が登場した当初、話の中の狐は形態上だけが人間に変身し、人間味はあまり描かれていなかった。唐代になってから、小説の発展とともに、狐の変身譚は文学性のある作品に向かいはじめ、人間味に富んだ狐の話が作り出された。清代になると、人間の道徳を知る狐・理想的な妻・人の友達・隣人・息子の恋人など、さまざまな人物で登場し、人間を助け、あるいは人間と対等に付き合った。このような狐は、人間らしい感情や行動を持っている。それだけでなく、話の中では、人間は、相手が狐と分かったうえで、交際したり、結婚したり、友達になったりするようになった。このような傾向は、唐代にすでに現れていたが、清代になると大いに発展した。人間味に富んだ狐の変身譚は、清代が全盛期と言える。

日本においては、狐の変身譚が初登場した平安時代に、すでに人間の感情を持ち、人間味に富んだ狐が変身譚の中に描かれた。この点は、中国における段階的な発展とは異なっている。

日本において、人間味に富んだ狐が突然現れた原因としては、①中国の唐代の狐の変身譚の影響を受けたこと、②日本において、人間味のある狐の伝説などが、狐の変身譚が文字化されていない時代にすでに民間に流布されていたことという 2 点が推測できる。

まず、前掲の平安時代に書かれた狐の人間味が描かれた「朱雀大路野干」の話について、3.2.2.2 で述べたように、中村は、「朱雀大路野干」の話における「女性に変身した狐と交わる男性は死ぬ」といった要素に注目し、この要素は中国から流入したものであると指摘している。つまり、「朱雀大路野干」が書かれた平安時代に、日本の狐の変身譚はすでに中国の人間味が描かれた狐の変身譚からの影響を受けていた。中国の人間味のある狐に影響され、日本においても、このような話が作りだされた可能性がある。

また、日本において、狐の変身譚がまだ文字化されていない時代（奈良時代）に、狐の始祖信仰が存在していた。3.2.2.2 で述べたように、この始祖信仰はおそらく「氏族の祖先は狐妻と人間の間にできた子供であった」という信仰である。この信仰は、狐を氏族の母親とする信仰であり、狐を人格化した信仰である。このような信仰が存在していたため、奈良時代に、人間味のある狐の伝説などがすでに民間に流布された可能性がある。平安時代に狐の変身譚が文字化されはじめると、民間に流布された人間味のある狐の伝説が書目の中に記載されるようになり、文献から見ると、突然現れるように見える。

日中の人間味が描かれた狐の変身譚を比べると、異なる点がもう 1 点ある。それは、中国と比べ、日本における狐の人間味が描かれた話は、多様性に欠けていることである。

狐の人間味についての描写は、主に女性に変身した狐と人間の男との交際や性交の話に集中している。さらに、話の中では、人間が狐とわからない状態で狐と交際しはじめ、狐の身分が知られた後、狐の方が去っていく。中国のような、はじめから狐と分かっていて交際する話が存在しない。中国においては、狐の身分が知られた後で交際を中止した話も存在すれば、はじめから狐と分かっていて交際する話も存在している。

上記の日本における狐の人間味が描かれた話の特徴から、以下のことが推測できる。①日本における狐の人間味が描かれた話は、主に唐代の「任氏」の話の影響を受けて、作り出された話である。②日本では、中国のように、狐を人間と同一視したことがなかった。日本の場合には、話の中の狐は、人間味に富んだ狐であっても、中国のように人間と共存

することができない。この点から見ると、中国と比べ、日本においては、狐と人間との間の隔たりが大きいと言えよう。

# 第 4 章 蛇の変身譚

## 4.1 中国における蛇の変身譚

本節では、「蛇が人間に変身するパターン」を①変身後の性別上の割合、②蛇の妖力の増加、③変身の目的という 3 つの角度から、また「人間が蛇に変身するパターン」を①変身前の性別上の割合、②変身の原因という 2 つの角度から、中国における蛇の変身譚の歴史的変遷を考察する。

4.1.1 では、蛇の変身譚を概観する。具体的には、各時代の変身譚の数を提示する。4.1.2 では、蛇が人間に変身するパターンについて考察し、4.1.3 では、人間が蛇に変身するパターンについて考察する。

### 4.1.1 中国における蛇の変身譚の概観

蛇の変身譚の全体像を把握するために、まず 4.1.1.1 で変身の 2 つのパターンの判断基準、類話の処理について述べる。次に、4.1.1.2 では各時代の蛇の変身譚の例数を提示する。

#### 4.1.1.1 基礎的情報

データベースおよび手作業で調査した結果、晋代から清代までの間に書かれた 39 例の蛇の変身譚を抽出した。

**蛇の変身譚の変身パターン**

蛇の変身譚において、蛇が人間に変身する・人間が蛇に変身するという 2 つの変身の方向が存在する。この 2 種類のパターンは、変身する方向が異なるだけでなく、変身の原因にも差異が存在するため、蛇の変身譚を検討する際に両者を区別して考察する必要があると思われる。ゆえに、本節では、蛇の変身譚を蛇（蛇の姿の神や鬼を含む）が人間に変身するパターンと人間が蛇に変身するパターンという 2 つのパターンに分類する。この 2 つの変身パターンについて、変身の方向が明示されている場合もあるが、前後の内容で判断せざるを得ない場合もある。なお、話の内容から変身パターンが判断しにくい場合は「不明」に分類する。

話の中で人間が蛇に変身することが明示された例として、『太平御覽』巻 934 引『廣五行

記』「東方飛龍」[152]の話が挙げられる。話の要約は以下のとおりである。

東方飛龍という人が重病を患って、自分が黒い蛇になった夢を見たことを妻に告げた。彼が死んだ後 1 匹の大きな黒い蛇が家に入り棟に上った。子供たちが、それを殺そうとしたので、妻は、その蛇は父親だと言ったが、子供たちは耳をかさず、蛇を殺してしまった。すると、太陽の光が消え、激しい雨が降り出したので、子供たちは皆父の棺の前で震え死んだ。〔4.1.2-3〕

この話では、夫が自ら黒い蛇になる夢を見たことを妻に話していたため、夫の死後家に入って来た黒い蛇は死んだ夫であることがわかる。ゆえに、この話は人が蛇に変身するパターンに分類した。

話の中で提示された推測できる証拠などで判断する例としては、『太平廣記』巻 458 引『博異志』「李黄」[153]の第 1 話が挙げられる。話の要約は以下のとおりである。

李黄という人が、転任のために一時的に長安に泊まった。暇のうちに長安の東市に行って、白衣の美女に目を奪われた。聞いてみると、彼女は袁家の娘であるが、李家に嫁入りし、夫を亡くしたばかりとのことである。李黄が絹織物を買い与えたため、代金返しに荘厳寺の側にある美女の自宅まで誘われた。夜に李黄は美女の自宅に行き、一緒に飲食した。その後三日間美女の家に泊まり込み、歓楽を尽くした。四日目に李黄がそこを辞して帰ろうとすると、従者は李黄の体が生臭いことに気づいた。家に帰ると身体が重く、めまいがしたため、布団をかぶって寝た。妻と話はしているものの、布団の下で身体が消えていくように感じた。（妻は）布団を挙げてみると、空しく水が流れているだけで、頭だけを残していた。家族が驚いて供をした下男に話を聞きその場所に行くと、そこは人気のない園（にわ）だった。近所の人の話では、この付近には時々白い大蛇が木の下に現れるだけだという。女が「袁」と名乗ったのは、空園を姓としたにすぎない。〔4.1.1-7〕

[152] 李昉等撰『太平御覧』〈全四冊〉、中華書局、1995 年、p.4152。現代日本語の要約は筆者による。
[153] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第十冊、pp.3750-3752。現代日本語の要約は筆者による。括弧内の内容は筆者による補足説明である。

この話は男が美女に変身した蛇に誘惑され、殺された話である。ただ、話の中に、最初に登場した美女はすでに人間への変身を遂げた蛇であり、蛇から美女に変身する過程は話の中には出てこない。蛇が人間に変身する段階は省略されているが、家に帰ってきた李黄の体が異様に生臭く、のち体が水になったという怪異、また美女の自宅のところは人気のない園で、時々白蛇が現れるだけなどの描写から、この美女は蛇が変身したものであると推測できる。ゆえに、この話は蛇が人間に変身するパターンに分類する。

物語の中で、蛇から人間へ変身する過程が省略され、人の姿で登場した蛇が、後に蛇の姿を現わすというような構成がよく見られる。このような構成は、物語の書き手が読者興味をもてるように工夫した部分であり、変身譚の文学性が増し、変身譚の文学作品としての性質を反映しているのである。

話の中に明示された変身の方向、もしくは話の中で提示された証拠にもとづいて蛇の変身譚を分類した結果、蛇が人間に変身するパターンは 22 例、人間が蛇に変身するパターンは 14 例、話の内容で変身の方向が判断しにくい例は 3 例である。

判断しにくい例は、『太平御覧』巻 388 引『世説』[154]の話およびその類話である。

> 荊州の刺史の杜預が、襄陽の宴席で酔っぱらった。書斎の扉を閉めて 1 人で眠っていたが、書斎の中で嘔吐している声が聞こえた。その声がぞっとするような声だったので、ある小役人が扉を開けて見たところ、ベッドの上にいた 1 匹の大蛇が頭をたれて嘔吐しているのが見えただけで、人は見えなかった。〔4.1.3-1〕

杜預は歴史上実在の人物であり、この話の骨子は『晋書』巻 34 にも記載されている。しかし、上記の記載と『晋書』の記載のいずれにおいても、杜預がもともと蛇であり、酔っぱらって蛇の姿を現したのか、あるいは杜預は人間であり、酔っぱらって蛇になったのか判断がつかない。そこで、この話の変身パターンは「不明」とする。

**類話の処理**

方針：話の中の主人公の名前および話の内容が似ている場合は類話と見做す。これらの

[154] 李昉等撰『太平御覧』〈全四冊〉、中華書局出版、1995 年、p. 1793。同書の巻 497 に簡潔な記述がある。杜預の伝は『三国志』の中の『魏書』巻 16、及び『晋書』巻 34 に見える。この話は晋書に記載されているが、魏書には記載がない。『晉書』に記載されている話のあらすじはこの話と同様である。

類話は、示された出典がもとの物語とは異なる、もしくは出典が示されていないが、話に登場した人物の名前はもとの物語と同じであり、内容もほぼ同じであるため、もとの物語とは同じ物語であると思われる。類話は新たに作り出された話ではなく、ただ前の時代の話を引用しただけであるため、本章において性別の割合および変身する目的・原因を考察する際に、集計については、もっとも早く出現したもとの話だけを対象として扱い、それ以降に出現した類話は除外する。ただし、内容については類話も含めて考察する。

蛇が人に変身するパターンの中に類話は 3 例ある。明代に書かれた『古今說海』巻 75 に収められた「白蛇記」[155]の 2 例は、『太平廣記』巻 458 引『博異志』「李黄」の 2 例の類話であり、『西湖佳話』は、明代の『警世通言』 巻 28「白娘子永鎮雷峰塔」[156]の類話である。

変身方向が不明なパターンの中に、類話は 2 例ある。『太平御覧』巻 933 引『晉書』[157]の杜預に関する話、および『太平廣記』巻 456 引『劉氏小說』「杜預」[158]は、『太平御覧』巻 388、巻 497 引『世説』[159]の杜預に関する話の類話である。

類話を除き、蛇の変身譚は 34 例である。

### 4.1.1.2 各時代の蛇の変身譚の例数

以下では、各時代における蛇が人間に変身するパターン・人間が蛇に変身するパターンおよび変身方向が不明なパターンの例数を表 4.1.1.2 に示す。

**表 4.1.1.2　各時代の蛇の変身譚の例数**

| パターン / 時代 | 蛇が人間に変身する | 人間が蛇に変身する | 不明 | 時代別合計 |
|---|---|---|---|---|
| 晋代 | 2 | 1 | 0 | 3 |
| 南北朝 | 2 | 1 | 1 | 4 |
| 隋代 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| 唐代 | 6 | 7 | 0 | 13 |

[155] 陸楫編『古今說海』: 永瑢 紀昀等纂修、『景印文淵閣四庫全書』子部雜家類 183、臺灣商務印書館、1986 年、pp. 524-526。付録〔4.1.1-16〕〔4.1.1-17〕参照。
[156] 馮夢龍撰『馮夢龍全集 2 警世通言』、鳳凰出版社、2007 年、pp. 418-446。付録〔4.1.1-18〕参照。
[157] 李昉等撰『太平御覧』<全四冊>、中華書局出版、1995 年、p. 4146。付録〔4.1.3-2〕参照。
[158] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第十冊、pp. 3727-3728。付録〔4.1.3-3〕参照。
[159] 李昉等撰『太平御覧』<全四冊>、中華書局出版、1995 年、p. 1793・p. 2275。付録〔4.1.3-1〕参照。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| **五代** | 1 | 3 | 0 | 4 |
| **宋代** | 3 | 0 | 0 | 3 |
| **明代** | 2 | 0 | 0 | 2 |
| **清代** | 3 | 1 | 0 | 4 |
| **合計** | 19 | 14 | 1 | 34 |

中国において、蛇の変身譚が登場するのは晋代であり、漢代にすでに変身譚が登場していた狐や虎よりも遅い。合計から見ると、蛇が人間に変身するパターンと人間が蛇に変身するパターンを比べると、前者が多いことがわかる。また、晋代から五代までの間は、人間が蛇に変身するパターンは、各時代に分布しており、さらに蛇が人間に変身するパターンより 2 例多い。しかし、宋以降は、蛇が人間に変身するパターンの例数は人間が蛇に変身するパターンの例数を上回るようになる。宋代から清代までは、蛇が人間に変身するパターンが 8 例あるのに対して、人間が蛇に変身するパターンは 1 例しか存在しない。人間が蛇に変身するパターンは唐代・五代に集中している。

上記の表の中に、1 つの話を 2 例として数えた話が 2 つある。1 つ目は『太平廣記』巻 456 引『瀟湘錄』「王真妻」[160]の話である。話の要約は以下のとおりである。

> 華陰県の長官、王真の妻趙氏は容姿が美しかった。この半年の間、急に 1 人の若者が、王真が出かけるたびに頻繁に趙氏の寝室にやってきて、趙氏と密通していた。ある日、王真が家に帰ってくると、この若者が趙氏と同席して酒をくみかわし笑うさまを見た。大いに驚きあやしんでいるところで、趙氏が突然倒れ、息が絶えた。その若者は大きな蛇になって出し抜けに去って行った。王真は下女をやって趙氏を助け起こしたが、たちまち趙氏も一匹の蛇になって一緒に逃げ去った。王真は蛇の後を追ったところ、後の蛇は前の蛇の後ろについて華山に入り、見えなくなった。〔4.1.1-10〕〔4.1.2-10〕

この話の中には、若者に変身した蛇が王真の妻を誘惑する話と王真の妻が蛇になる話という 2 つの変身譚が存在する。少年に変身した蛇の話を蛇が人間に変身するパターンとし、

[160] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第十冊、pp. 3732-3733。現代日本語の要約は筆者による。

また、王真の妻が息を引き取った後に蛇になった話を人が蛇に変身するパターンとする。

2 例として数えたもう 1 話は『太平廣記』巻 459 引『玉堂閒話』「張氏」[161]である。話の要約は以下のとおりである。

杜判官の妻張氏は杜判官と結婚してから十数年経ち、60 歳を過ぎて亡くなった。彼女の棺は家に置かれていたが、数十日後に外に埋葬された。出棺の際に、棺が揺れ動いたため、彼女が生き返ったと言った人がいた。棺を切り裂いてみると、張氏は大蛇に変身したのを見た。しばらくすると、大蛇はゆっくりと林の中に入り、去って行った。〔4.1.2-12〕

又、元静寺の尼である王三姑も棺の中で大きな蛇になった。その杜判官の妻は、晩年夫の世話をしなかったため、夫が凍え飢えて死んでしまった。人は、張氏が蛇になったことはその報いであると言っていた。〔4.1.2-13〕

この 1 話の中に、張氏が蛇になった話と王三姑が蛇になった話という 2 例の蛇の変身譚が存在しており、張氏の話の後に「又」とし、王三姑の話を張氏の話と区別し別の話であることを示している。王三姑の話の後に、杜判官の妻張氏の話についての補足説明が見られるが、上記の理由でこの話を 2 例として数え、それぞれ人が蛇に変身するパターンに分類した。

### 4.1.2 蛇が人間に変身するパターンについての考察

本節では、蛇が人間に変身するパターンを①変身後の性別の割合の変遷、②妖力の増加、③蛇が人間に変身する目的の変遷という 3 つの角度から考察する。

#### 4.1.2.1 蛇が人間に変身するパターンの変身後の性別の割合の変遷

蛇が人間に変身するパターンの 19 例の中では、全体的に男性の割合がやや多い。すなわち、蛇が人間に変身する場合、男性に変身する話がやや多いということである。では、変身後の性別の割合は、時代とともに変化することがあるのだろうか。表 4.1.2.1 に、時代別に変身後の性別数と割合を示す。

1 例の中に男女の両方ともに変身する例、および変身後の性別が不明な例はともにない。

[161] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第十冊、p.3757。現代日本語の要約は筆者による。

**表 4.1.2.1　蛇が人間に変身するパターン（括弧内は変身譚の例数）**

| 時代 | 男性 | 女性 |
|---|---|---|
| 晋代 | 100%（ 2） | 0%（ 0） |
| 南北朝 | 100%（ 2） | 0%（ 0） |
| 唐代 | 67%（ 4） | 33%（ 2） |
| 五代 | 100%（ 1） | 0%（ 0） |
| 宋代 | 33%（ 1） | 67%（ 2） |
| 明代 | 50%（ 1） | 50%（ 1） |
| 清代 | 33%（ 1） | 67%（ 2） |
| 合計 | 63%（12） | 37%（7） |

表 4.1.2.1 に示したように、合計から見ると、蛇が男性に変身する変身譚はやや多いが、その多くは晋代から唐代の間に書かれたものである。唐以降になると、蛇が男性に変身する変身譚はあまり書かれなくなっている。それに対し、晋代・南北朝において、蛇が女性に変身する例は存在しない。唐に入ってはじめて蛇が女性に変身する変身譚が出現し、宋以降にやや多くなる傾向がある。蛇が女性に変身する変身譚は、宋代になってから男性に変身する変身譚を上回ったことが見られる。つまり、唐・五代を境目とし、それ以前は蛇が主に男性に変身するが、五代以降になると、女性に変身する変身譚が多くなり、男性に変身する話を上回るようになった。

唐代に出現した蛇が女性に変身する 2 例の変身譚は、『太平廣記』巻 458 引『博異志』「李黄」の 2 つの話である。李黄が美女に変身した蛇に誘惑され、体が水になってしまった第 1 話は、4.1.1.1 で言及した。第 2 話[162]は第 1 話と同様に、男が美女に変身した蛇の妖力で死んでしまった話である。唐代に初出した蛇が女性に変身する上記の 2 話において、2 人の男は共に女色に迷ったため美女に変身した蛇に殺された。徐（2010）は、「蛇が象徴する邪悪な女色が、人を死地に追いやるという物語は、男性に色欲を慎ませる警鐘となった[163]」とする。つまり、唐代になると、男性に色欲を慎ませるようという訓戒を教えるのに、蛇が女性に変身し男性に死をもたらす話が用いられるようになった。

[162] 第 2 話は、第 1 話の後ろに、「復一說」として付けられている話である。付録〔4.1.1-8〕参照。
[163] 徐（2010）p.7 に「到了唐传奇里（中略）蛇所象征的邪恶女色置人于死地的故事成为劝诫男人节制欲望的警钟」と述べている。

#### 4.1.2.2 変身譚の中の蛇の妖力の増加

晋代の蛇が人に変身する話においては、蛇は変身できるが、蛇と関わった人に対して病気や死のような危害はもたらさない。また、人間が蛇を退治したり、殺したりすることもない。

ところが、晋代以降の話の中では蛇が人を惑わす要素が多くなり、それに伴って人間に対する危害が大きくなる傾向が見られる。一方、人間も蛇を退治したり、殺したりするようになり、宋代・明代・清代には、蛇の妖力が強く、それを退治するには道士や和尚の力が必要とされるようになった。つまり、晋代の蛇は変身できるが、その妖力の強さについてあまり言及されていない。南北朝以降になると、蛇の妖力が強調されるようになった。この妖力の強さの変化は、①蛇と関わった人にどのような危害をもたらすか、②人はどうやって蛇を退治するかという 2 つのポイントの変化から見られる。

＜蛇の危害＞

晋代の話では、蛇が変身して人間になった者は、人間を助ける・人間に助けを求めるという形で人間と関わったが、人間に危害はもたらさない。

南北朝になると、『太平廣記』巻 457 引『廣古今五行記』「薛重」[164]では、蛇が他人の妻と姦淫し、彼女の夫に殺された後、神のもとで自分を殺した夫を誣告した。〔4.1.1-4〕

唐代になると、蛇の妖力が強調されるようになる。『太平廣記』巻 456 引『集異記』「朱覲」[165]は、男性に変身した蛇に化かされ、治療を受けても治らなかった美女の話である。最後に蛇は朱覲という人によって殺されたため、美女も正常に戻った。この話の中で、蛇は妖力で人の精神を惑わした。

前掲の『太平廣記』巻 458 引『博異志』の「李黄」の中にも、蛇の妖力の強さが見られる。第 1 話の要約は 4.1.1.1 ですでに挙げたが、ここではこの中の蛇の妖力に注目したい。話の中に、女性に変身した蛇は「絕代之色（絶世の美貌）」の持ち主であり、男と交わった後、男の体を水に変えてしまう能力を持ち、かなりの妖気が漂う存在である。第 2 話では、男は女性に変身した蛇の家に一夜寄宿しただけで頭痛になり、帰宅後頭が裂けて死んでしまう。この話の中では蛇の妖力がさらに強く描かれていることがわかる。

宋代になると、蛇の妖力についての描写も存在している。人間に変身した蛇の相手は必

[164] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第十冊、pp. 3735-3736。
[165] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第十冊、p. 3733。

ず死ぬとは限らないが、人間に変身した蛇は人にさまざまな害をもたらす。例えば、男性に変身した蛇が人間の女性を惑わせ、精神を朦朧とさせて瀕死の状態にした話（〔4.1.1-12〕『夷堅丁志』巻 20「巴山蛇」[166]）、書生が女性に変身した蛇と交わった後、身体が徐々に衰弱した話（〔4.1.1-14〕『夷堅志補』巻 22「錢炎書生」[167]）がある。また、女性に変身した蛇は、入浴をのぞき見て正体に気づき、床を別にしようとした夫の疑いを晴らすため、同衾することを強いたため、夫は恐れて心身安らかではなくなり、病気になって 1 年もたたぬうちに死んだ話（〔4.1.1-13〕『夷堅支戊』巻 2「孫知縣妻」[168]）もある。

清代の『聊齋誌異』巻 5「花姑子」[169]の話では、蛇は男性の知り合いの女性の姿に変身して男性を騙し、舌で男性の鼻の穴を舐めて彼を殺した。〔4.1.1-21〕

上記をまとめると、蛇が妖力で人に危害をもたらす面から見ると、以下のような変化が見られる。晋代の話では、蛇が人間に危害はもたらさない。南北朝になると、蛇が他人の妻と姦淫するようになったが、妖力についてはあまり強調されていない。唐代以降、蛇の妖力が強調されるようになり、蛇はこの妖力で人を惑わし、人を衰弱させたり、殺したりするようになった。

＜蛇の退治＞

晋代の話では、蛇は人によって退治されたり、殺されたりすることはない。蛇を退治する人として登場するのは、宋代以前は普通の人だったが、宋代以降になると道士や和尚となった。例えば、前掲の「巴山蛇」と「錢炎書生」においては、蛇を撃退したのは道士である。

明代の『警世通言』巻 28「白娘子永鎮雷峰塔」の中に登場する人間に変身した蛇は千年の白蛇であり、道士は護符で退治しようとしたが撃退され、和尚の力でやっと退治できた。

上記をまとめると、蛇の退治の面から見ると、以下のような変化が見られる。南北朝から唐代・五代の間、蛇は普通の人によって退治もしくは撃退された。宋代になってからは、普通の人の力で退治することができず、道士と和尚の力を借りる話が登場した。この点から見ると、蛇の妖力が強くなったためであると考えられる。

---

[166] 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第二冊、中華書局、1981 年、pp. 705-706。
[167] 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第四冊、中華書局、1981 年、pp. 1755-1756。
[168] 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第三冊、中華書局、1981 年、pp. 1062-1063。
[169] 蒲松齡著・朱其鎧等校注『全本新注 聊齋志異』、中國古典文學讀本叢書、人民文學出版社、1989 年、pp. 636-641。

晋代に人に危害を加えることがなかった蛇が、南北朝になると死をもたらす邪悪な存在、唐代になると死をもたらす妖力が強い存在とされるようになったのはなぜだろうか。以下その要因と思われるものについて考えてみたい。

第一は、文化における蛇そのものに対するイメージの変化である。

徐（2010）は、「『山海経』に、中国にはトーテムを信仰する部落は 58 個あり、中に蛇をトーテムとする部落は 8 つあると記載されている。本の中の夸父・大人・載天・延淮などの神は、人面蛇身もしくは両手に蛇を握り、蛇を守護神とし、いずれも蛇の形象と密接な関係にあった[170]」と述べている。徐によると、先秦文学における蛇は、トーテムとして信仰され、「守護神」と密接な関係にあった。

トーテムという言葉は、「北アメリカのオジブワ族の ototeman(彼は私の一族のものだ)という語に由来する[171]」とされる。原始社会には、自分たちの氏族集団・血縁集団の共同体と特別な関係を持っている特定の動植物あるいは事物に対して、崇拝や宗教的感情が存在していた。具体的に言うと、氏族集団・血縁集団は特定の種の動植物あるいは事物を氏族の祖先・守護神と見做し、これらのものには一族を守る力があると信じた。このようにして祖先・守護神として選ばれたものをトーテムと称する。トーテムを信仰の対象とし、崇拝する信仰の形態は「トーテム信仰（トーテミズム)」と呼ばれ、信仰の対象として選ばれたものについて、「トーテムとなるものには動植物が多い[172]」とされている。趙（2007）は、「トーテム崇拝は、自然崇拝と祖先崇拝の観念が結合して形成した、民族を問わず普遍的に存在していた原始的な宗教形式であり、人格化した自然崇拝の観念である」[173]と指摘している。

一方、「自分のトーテムは殺したり採集したり、食べたりしない、あるいは見たり触ることすらしないという禁忌も存在している[174]」とされ、トーテム信仰の中では、禁忌が存在している。禁忌の持つ意味について、「尊敬する神物の使用をゆるさないというものです。なぜならこうした神物は「神聖」または「聖潔」という性質を持っており、勝手に使うの

---

[170] 徐（2010)、p.3 では、「《山海经》记载中国有 58 个信奉图腾的部落，其中有 8 个是以蛇为图腾。书中的夸父、大人、载天、延淮等神，或者是人面蛇身，或者是双手操蛇，以蛇做守护神，均与蛇形象密切联系……这是图腾崇拜的原始状态。」と述べている。

[171] 石川栄吉、梅棹忠夫、大林太良、蒲生正男、佐々木高明、祖父江孝男『文化人類学事典』、弘文堂、1991 年、p. 529。

[172] 同上。

[173] 趙（2007)、p.59 では、「图腾崇拜是自然崇拜和祖先崇拜观念相结合的一种普遍存在于各个民族的原始宗教的宗教形式，是一种人格化的自然崇拜观念」と述べている。

[174] 石川栄吉、梅棹忠夫、大林太良、蒲生正男、佐々木高明、祖父江孝男『文化人類学事典』、弘文堂、1991 年、p. 529。

は一種の冒瀆行為だからです。この禁忌に違反すると不幸を招き、この禁忌を遵守すれば幸福がやってくるのです[175]」と解釈されている。つまり、祖先・守護神となったトーテムに不敬な行いをすると、その行為を実施した個人や氏族には罰が科されることがある。そうでない場合は、むしろ守護神であって、危害を加えるものではない。

要するに、トーテムとしての蛇に対して、不敬な行為さえしなければ、危害が加えられることはない。このような場合、蛇は守護神としての役割を果たすのである。

先秦時代においてトーテムとして信仰された蛇は、魏晋南北朝時代の志怪小説になると、徐々に衰退していく傾向にあった。

徐（2010）は、「『搜神記』・『搜神後記』・『拾遺記』・『博物志』・『殷芸小説』・『異苑』・『幽明録』・『洛陽伽藍記』・『列異伝』等の志怪小説の中で、大量の蛇の物語が記載されている。筆者の概算統計によると、大体 60 あまりの話がある。物語の中の蛇は、ほとんどすべては「獣」のイメージ――すなわち現実生活の中の蛇のイメージとして出現した。蛇が人類の生産・生活を脅かす話がある（中略）人と蛇の間の手に汗を握るような争いをえがくものもある[176]」と述べている。つまり、魏晋南北朝時代の志怪小説になると、不敬な行為さえしなければ、氏族を守ってくれるというようなトーテムとしての蛇のイメージは、人間の生産・生活を脅かすただの害獣としてのイメージになる傾向が見られる。

上記をまとめると、中国の文化において、蛇に対しては、南北朝以前においては原始時代の蛇のトーテム信仰の影響を受け、「祖先・守護神」のようなイメージが強かったが、南北朝になってからはそのイメージが弱まり、害獣のイメージに取って代わられるようになった。

このような文化の中に生じた蛇に対するイメージの変化と対応するように、変身譚でも、晋代の変身譚において人間に変身した蛇は人に危害を加えなかったが、南北朝以降の話では人間に変身した蛇が人間に危害を加えるようになった。一方、蛇の変身譚が登場したことも、トーテム信仰と関係があると思われる。趙（2007）が指摘した「トーテムは人格化した自然崇拝の観念である」ことと関わり、トーテム崇拝の名残として、蛇は変身できる動物であることが受け入れられ、晋代から蛇の変身譚が登場したと考えられる。

---

[175] 陶立璠著、佐野賢治監訳、上野稔弘訳『中国民俗学概論』、勉誠社、1998 年、p. 341。

[176] 徐（2010）、p. 5 では「《搜神记》、《搜神后记》、《拾遗记》、《博物志》、《殷芸小说》、《异苑》、《幽明录》、《洛阳珈蓝记》、《列异传》等志怪小说中记载了大量蛇故事。据本人不完全统计，大概有六十余则。故事中的蛇几乎全以“兽”形象——即现实生活中蛇的形象出现。有写蛇威胁人类生产生活的（中略）有的文章详细描写了人蛇之间惊心动魄的斗争」と述べている。

4.1.2.1 で述べたように、唐代に出現した女性に変身した妖力の強い蛇の話は、教訓の話としての色が濃い。「李黄」の 2 つの話の中の主人公は、共に富貴な家で育った子弟で、1 人は妻がいるにもかかわらず、市場で出会った女性の女色に迷い、もう 1 人は「不知檢束（慎み知らず)」、路上でであった容姿の美しい女性の後ろについて行き、2 人とも女色を好んでいるというように描かれている。富永（1987）は、この話について、「この話も貴人の一族の好色漢が女に溺れて破滅したことに、蛇害をからめて創作された作品と考えた方がよさそうである」[177]と述べている。このような人を戒めるために作られた話では、蛇の妖力を大げさに描写することも自然なことであると思われる。

第二の要因は宗教的背景と関係している。宋代以降、道教と仏教は自己の力を誇示するために、蛇の妖力を強調した。すなわち、蛇の妖力を抑えることができるのは、宗教のみである点ということを示すために、かえって蛇の妖力を強調したのである。

宋代以前では、人に変身した蛇を退治したのは普通の人であったが、宋になると、前掲の『夷堅丁志』巻 20「巴山蛇」の話と『夷堅志補』巻 22「錢炎書生」の話のように、蛇が最後に道士の護符によって封印される、あるいは道士によって退治されるようになった。このことから、宋代になると、蛇が人間に変身する変身譚の中に、道教の要素が取り入れられたことがわかる。富永（1987）は、このような話は「道教が蛇怪を鎮圧できることを宣伝する話」[178]だと指摘している。明代になると、仏教の和尚が人に変身した蛇を退治する話が登場する。『警世通言』巻 28「白娘子永鎮雷峰塔」の話では、道士が白蛇を退治しようとしたが、蛇に撃退され、最後に蛇退治に成功したのは仏教の和尚である。謝（2005）は、この話は「明らかに仏教の立場から西湖の白蛇の伝説を発展されたのである」[179]とする。すなわち、この話の中に道士の話を配した目的は、おそらく仏教の力が道教より大きいということを示すためであろう。普通の人はもちろん、道士でさえも白蛇を退治することができないということにより、白蛇の妖力の強さが強調されている。言い換えると、宋代以降、蛇の妖力の強さが維持されてきた原因の 1 つとして、現世の宗教がその力を誇示するために蛇の変身譚を利用したと言えよう。

---

[177] 富永（1987)、p. 28。
[178] 富永（1987)、p. 32。
[179] 謝（2005)、p. 59 では「很显然是从佛教的立场来演绎西湖白蛇传说的」と述べている。「西湖白蛇传说（西湖の白蛇の伝説)」は、西湖の白蛇が白娘子に変身する一連の民間の文学（口承文学と記載文学両方を含む）を指す。

#### 4.1.2.3 蛇が人間に変身する目的の変遷

蛇が人間に変身する場合、何かの目的を持つこともあれば、目的が明示されていないこともある。変身の目的の中で、もっとも多いのは男女の交わりである。そのほか、人の助けを求めるために変身するパターンもある。変身の目的が明示されておらず、話の内容からも推測できない場合は、「不明」のパターンに分類する。以下の表 4.1.2.3 では、蛇が人間に変身する目的を①男女の交わり、②人の助けを求める、③不明という 3 つのパターンに分け、各パターンの例数を時代ごとに示す。

表 4.1.2.3　蛇が人間に変身する目的

| 目的 / 時代 | 男女の交わり | 人の助けを求める | 不明 | 時代別合計 |
|---|---|---|---|---|
| 晋代 | | 男 1 | 男 1 | 2 |
| 南北朝 | 男 2 | | | 2 |
| 唐代 | 男 2、女 2 | 男 1 | 男 1 | 6 |
| 五代 | | | 女 1 | 1 |
| 宋代 | 男 1、女 2 | | | 3 |
| 明代 | 女 1 | | 男 1 | 2 |
| 清代 | 女 2 | | 男 1 | 3 |
| 合計 | 男 5、女 7 | 男 2 | 男 4、女 1 | 19 |

上記の表から、以下の 3 点が明らかになった。

① 人の助けを求めるために人間に変身するパターンの出現は早いが、晋代に初めて登場する 1 例を除けば、唐代に 1 例しか存在しない。このパターンはあまり受け継がれていなかったと考えられる。

② 蛇が人間に変身するもっとも多い目的は男女の交わりである。このパターンは各時代に分布しており、さらにどの時代においてもその割合が大きい。

③ 男女別に見ると、宋代以前では蛇が男性に変身して人間の女性と交わる話が多かったが、宋代以降では女性に変身する蛇の話が大部分を占める。

また、上記の③の補足として、唐代から、蛇が女性に変身する場合、その目的はほぼ男女の交わりであることが挙げられる。そして、美女に変身した蛇に惑わされた人間の男性

は、蛇と関わったために身体が衰弱したり、病気になったり、死んでしまったりする場合が多い。例えば、4.1.2.2 で述べた「李黄」の第 1 話およびその類話である「白蛇記」の第 1 話・「巴山蛇」・「錢炎書生」は、いずれもこのような話である。そのほか、これらの変身譚と類似する話として、清代の『聊齋誌異』巻 5「花姑子」[180]が挙げられる。これは、蛇は男性が心を寄せる女性（花姑子）の姿に変身し、彼を殺したという話である。その後、男は花姑子によって助けられ、生き返ったが、下半身不随となった。花姑子の話に従って、男性の家族はその蛇を殺し、蛇の血を男性に飲ませた。半年後男性はやっと起きることができるようになった。〔4.1.1-21〕

唐代から、美女に変身した動物が人間の男を誘惑し、加害する話が多数書かれたことは狐と虎の変身譚にも見られる。このような話は変身譚の中でも好まれた題材となった。その理由として考えられるのは、当時の思想的背景、文人の好みなどの要素である。動物が女性に変身するパターンの変遷の思想的背景については、第 8 章で詳しく論じる。

### 4.1.3 人間が蛇に変身するパターンについての考察

本節では、蛇の変身譚中の人間が蛇に変身するパターンを①変身前の性別の割合の変遷、②人が蛇に変身する原因の変遷という 2 つの角度から考察する。

#### 4.1.3.1 人間が蛇に変身するパターンの変身前の性別の割合の変遷

人間が蛇に変身する 14 例の女性と男性の割合はほぼ半々である。すなわち、人間が蛇に変身する変身譚の中では、全体的に見れば、男女の片寄りはない。表 4.1.3.1 は、時代別に変身前の性別を示したものである。変身前の性別が不明な例はない。

**表 4.1.3.1 人間が蛇に変身するパターン（括弧内は変身譚の例数）**

| 時代 | 男性 | 女性 |
|---|---|---|
| 晋代 | 100%（ 1） | 0%（ 0） |
| 南北朝 | 100%（ 1） | 0%（ 0） |
| 隋代 | 100%（ 1） | 0%（ 0） |
| 唐代 | 29%（ 2） | 71%（ 5） |

[180] 蒲松齢著・朱其鎧等校注『全本新注 聊齋志異』、中國古典文學讀本叢書、人民文學出版社、1989 年、pp. 636-641。

| | | |
|---|---|---|
| **五代** | 0%（ 0） | 100%（ 3） |
| **清代** | 100%（ 1） | 0%（ 0） |
| **合計** | 43%（ 6） | 57%（ 8） |

表 4.1.3.1 に示しているように、女性が蛇に変身する話は、晋代から隋代にかけて 1 例も存在しておらず、唐代になってはじめて登場した。唐・五代になると、女性が蛇に変身する話は男性が蛇に変身する話より多く書かれるようになる。しかし、女性が蛇に変身する話は、唐代と五代にしか存在しない。宋代と明代においては、人間が蛇に変身するパターンは見当たらず、清代には男性が蛇に変身する話が 1 例あるのみである。

### 4.1.3.2 人間が蛇に変身する原因の変遷

中国においては、狐の変身譚とは異なり、蛇の変身譚には人間が蛇に変身するパターンが多数存在する。人間が蛇に変身する原因には、各時代に新しく登場した理由もあれば、前代から継承した理由も存在するため、人が蛇に変身する物語の変遷を考察するための重要な手掛かりになると考えられる。そこで、以下では人が蛇に変身する原因の変遷について考察を行う。

原作の記述に基づき、変身の原因を 3 つに分類する。話の中に、「応報」や「報」、「罰」などのような表現がある場合は、悪事の報いで蛇になった話に分類する（以下、悪事の報い）。また、内容から人に対する愛着が原因で蛇になったと推測できる話を「執着」の項目に分類する（以下、執着）。また、「沈疴[181]」や「病」などが原因で蛇になった話を「病気」の項目に分類する（以下、病気）。話の中に変身の原因が示されていない場合は、「不明」とする。

「不明」の例として、『搜神記』巻 3（53）「管輅[一]」[182]に記載されている老いた書佐[183]が蛇に変身した話が挙げられる。

（管輅は曰く、筆者注）「筆を口にくわえた大蛇は、老いた書佐にすぎない。燕と

[181] 頑固な病気を指す。
[182] 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985 年、pp.32-33。現代日本語訳は筆者による。
[183] 中国古代の文書を処理する役人。

闘った烏は老いた鈴下[184]にすぎない」。(中略) 後に、同郷の人である劉原[185]が管輅に、「昔王府君のために怪について論じたときに、君は『老いた書佐が蛇となり、老いた鈴下が烏となった』と言ったが、彼らはもともと人間であったのに、なぜ微賤なものに変身したのだろう」と尋ねた。管輅は、「…万物の変化は、決まった形がない。人の変化には、決まった形態がない。大きなものが小さなものに変化するか、あるいは小さなものが大きなものに変化するかには、本来優劣がない。」と述べる。〔4.1.2-1〕

管輅は書佐の変身を万物の変化の 1 つとして捉えており、特に変身の原因について言及していない。そのため、この話においては、変身の原因を「不明」とする。

**表 4.1.3.2　人間が蛇に変身する原因の変遷**

| 原因 / 時代 | 執着 | 悪事の報い | 病気 | 不明 | 時代別合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 晋代 | | | | 男 1 | 1 |
| 南北朝 | | 男 1 | | | 1 |
| 隋代 | | | 男 1 | | 1 |
| 唐代 | 女 1 | 男 1、女 4 | | 男 1 | 7 |
| 五代 | | 女 1 | 女 1 | 女 1 | 3 |
| 清代 | | 男 1 | | | 1 |
| 各パターンの集計 | 女 1 | 男 3、女 5 | 男 1、女 1 | 男 2、女 1 | 14 |

上記の表 4.1.3.2 に示しているように、隋代・唐代になると、変身の原因が増え、執着による変身が新たに現れ、「悪事の報い」による変身も引き継がれている。しかし、執着による変身は唐代以外には現れず、悪事の報いによる変身のみが継承されてゆく。

人が悪事の報いで受動的に蛇に変身する話が圧倒的に多い。悪事の報いによる変身の初出は南朝に著された『高僧傳』巻 1「安清」[186]である。話の要約は以下である。

[184] 貴者の侍従護衛の兵卒を指す。
[185] 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985 年、p.33 の注によると、「乃太原」は「劉原」という人の名前である。「劉」の字が間違って「乃太」と記されたのである。
[186] 慧皎撰『高僧傳』、『趙城金藏』本、古籍、コマ番号：3-4、参照 URL：http://ctext.org/library.pl?if=gb&file=88272&page=3

安清という高僧の昔の同窓の者が、瞋恚[187]のため、死後醜い姿にされるはずである（中略）瞋恚の報いで廟神となった（中略）廟神が床の後ろから頭を出した。それは大きな蛇であった[188]。安清が蛇に経を唱え聞かせ、蛇の財宝を使って寺を建てたため、蛇の姿の廟神は死んで再び人の姿に生まれ変わることができた。〔4.1.2-2〕

この話は瞋恚の報いで死んだ後、蛇の姿の廟神になった話である。

この話の中で、余話として、蛇の姿の廟神が安清の助けをうけ、寺を建てることでまた人間として生まれ変わったとされている。つまり、この話の中の変身は 2 回あり、1 回目は悪事の報いで受動的に蛇の身に堕ち、2 回目は寺を建てることで人間に生まれ変わったのである。仏教の輪廻転生の影響を受けた人から蛇へ変身する話の中に、このような余話が頻繁に現れる。

唐代・五代の報いのパターンとしては、以下の話がある。

『太平廣記』巻 340 引『通幽錄』「盧頊」[189]では、女性は生前非常にあくどいことで罰せられ、蛇の身になった。〔4.1.2-5〕

『太平廣記』巻 459 引『奇聞錄』「僧令因」[190]では、女性は業が深かったため、突然頭は人間のまま体だけが蛇に変化した。〔4.1.2-6〕

『太平廣記』巻 107 引『報應記』「吳可久」[191]では、女性は「邪見」（仏教と異なる見解）を持った報いで、死後蛇になった。〔4.1.2-7〕

『太平廣記』巻 94 引『原化記』「華嚴和尚」[192]では、僧は怒りの報いで死んだ後蛇になったが、和尚の助けで人間に生まれ変わることができた。〔4.1.2-8〕

『太平廣記』巻 459 引『原化記』「衛中丞姊」[193]では、女性は性格が残酷で、下男下女を鞭で殺したことの報いで、突然病気になり、蛇になった。〔4.1.2-9〕

前掲の『太平廣記』巻 459 引『玉堂閒話』の「張氏」では、妻が夫の世話をしなかった報いで、死後蛇に変身した。

---

[187] 仏教用語である。十悪の一つ。自分の心に逆らうものを憎み怒ることを指す。
[188] 原文では、「而性多瞋怒。命過當受惡形（中略）以瞋恚故墮此神報（中略）神從床後出頭。乃是大蟒。」と述べている。
[189] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第四冊、pp. 2695-2698。
[190] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第十冊、P. 3753。
[191] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第一冊、p. 727。
[192] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第一冊、pp. 624-625。
[193] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第十冊、pp. 3753-3754。

清代の悪事の報いの 1 例は、『閱微草堂筆記』巻 1 の呂四という人についての話[194]であり、この話は、呂四は悪事をやりつくした報いで死後蛇の身となった話である。〔4.1.2-14〕

上記をまとめると、「悪事の報い」のパターンにおいて、仏教の因果応報、及び仏教の因果応報以外の悪事の報いの話が含まれていることがわかる。

執着の 1 例は、4.1.1.2 で挙げた「王真妻」の話である。王真の妻は若者に変身した蛇と交わり、そして「若者が趙氏と同席して酒をくみかわし笑う」から、王真の妻がこの若者とかなり意気投合したことがわかる。最後に蛇になった王真の妻がその若者に変身した蛇の後ろを追って山に入ったのは、おそらく王真の妻はこの若者を愛し、彼と一緒にいたいという願望があるからだと推測できる。王真の妻は若い男に変身した蛇に愛着を抱いたことにより蛇に変身したため、この話を執着による変身とする。

変身の原因が病気の話は 2 例ある。1 つ目は 4.1.1.1 で言及した隋代「東方飛龍」の話である。2 つ目は五代に書かれた『太平廣記』巻 459 引『玉堂間話』「徐坦」[195]である。話の要約は以下のとおりである。

> 李孤竹という人の妻は重病を患って、1 年あまり長引いたが治らなかった。ある日妻は突然李孤竹に、自分を峠に運ぶように頼んだ。峠についた後、妻が蛇になった。〔4.1.2-11〕

以上のように、人間が蛇に変身するパターンにおける変身の原因では、悪事の報いによる変身の出現がもっとも早く、南北朝時代に登場し、後の時代まで受け継がれた。隋代・唐代になると変身の原因が多様化し、執着・病気による変身が登場したが、悪事の報いによる変身ほど多くはならなかった。悪事の報いによる変身が圧倒的に多い理由として、中国において、「人の行為に応じて、その報いがある」という考え方が古来から存在していたことが挙げられる。仏教が伝来した後も、仏教の因果応報の思想が中国に古くからあった思想と一致しているため、受け入れられやすかった。この報いの思想については、5.1.3.2 でもう一度論じる。

---

[194] 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、p.3。
[195] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第十冊、pp.3758-3759。現代日本語の要約は筆者による。

## 4.2 日本における蛇の変身譚

本節では、日本の変身譚を中国と比較するために、中国と同じように、「蛇が人間に変身するパターン」を①変身後の性別上の割合、②蛇の神格化と神格の喪失、③変身の目的という 3 つの角度から、「人間が蛇に変身するパターン」を①変身前の性別上の割合、②変身の原因という 2 つの角度から、歴史的変遷を辿ってゆく。

4.2.1 では、蛇の変身譚を概観し、各時代の変身譚の数を提示する。4.2.2 では、蛇が人間に変身するパターンについて考察し、4.2.3 では、人間が蛇に変身するパターンについて考察する。

### 4.2.1 日本における蛇の変身譚の概観

本節では、まず 4.2.1.1 で、変身の 2 つのパターンの判断基準、類話の処理について述べる。次に、4.2.1.2 では、各時代の蛇の変身譚の例数を示す。

#### 4.2.1.1 基礎的情報

データベースおよび手作業で調査した結果。奈良時代から江戸時代までの間に書かれた 49 例の蛇の変身譚を抽出した。

**蛇の変身譚の変身パターン**

日本の蛇の変身譚は、中国と同様に、蛇（蛇の姿の神を含む）が人間に変身するパターンと、人間が蛇に変身するパターンという 2 つのパターンが存在している。本節では、中国の蛇の変身譚を分類する際と同一の基準に従い、日本の蛇の変身譚を「蛇（蛇の姿の神を含む）が人間に変身するパターン」と「人間が蛇に変身するパターン」という 2 つのパターンに分類する。分類に当たっては、前後の文脈および話の中に提示された変身状態の変化についての手がかりを利用し、変身のパターンを推測する。以下、例を挙げて説明する。

まず、話の中で、変身の方向は明示されている例としては、『古今著聞集』巻 20-720「或僧の妻嫉妬して蛇と化し夫の件物に喰付く事」[196]が挙げられる。この話は、題目にも示されているように、僧の妻が蛇に変身した話である。

[196] 橘成季撰・西尾光一、小林保治校注『古今著聞集』（下）、新潮日本古典集成第 76 回、新潮社、1986 年、pp. 408-409。付録〔4.2.2-22〕参照。

次に、変身の方向が明示されていないが、話の前後の文脈などで推測できる例としては、『風土記』「常陸国風土記」([八]那賀の郡)[197]が挙げられる。話の内容は以下の通りである。

ぬかひめという女性のところに、姓も名もわからない人が訪れてきた。それから、その人が常に来て、ぬかひめに求婚し、夜やって来ては昼帰って行った。結局ぬかひめと夫婦となり、一晩でみごもった。その後、ぬかひめはついに小さい蛇を産んだ。蛇の成長が速いため、ぬかひめは養育しきれない。するとぬかひめはその蛇に、「器量をみると、あなたは神の子であることがわかる。私はあなたを養育しきれないため、父親の所に行きなさい」と告げた。蛇は「私は一人では父の所に行くことはできない。お供を一人つけて下さい」とぬかひめに頼んだ。ぬかひめは蛇の要求を断った。すると、蛇は怒って、恨みをもち、伯父を殺してから天に昇ろうとした。ぬかひめが盆を蛇に投げると、蛇は盆に触れられたために天に昇ることができず、峰にとどまった。〔4.2.1-4〕

上記の話では、ぬかひめのところを訪れた男は何者であるかは明示されていないが、①ぬかひめの生んだ子供は蛇である、②ぬかひめは蛇を「神の子」とした、③蛇に「父親のところに行きなさい」と告げると、蛇は天に昇ろうとする、という 3 つのポイントから、おそらくぬかひめと一晩交わった男性は、蛇と関わりのある神だと推測できる。さらに、同時代に書かれた『日本書紀』の中に、このような蛇の姿の神（大物主神）が人間の女性と交わる話がすでに存在[198]していることを併せて考えると、ぬかひめと交わった男性は蛇の姿の神である可能性が高いと言えよう。つまり、この話は、蛇の姿の神が人間の姿に変身する話であると考えられるため、蛇（蛇の姿の神を含む）が人間に変身するパターンに分類する。また、上記の『日本書紀』の中の蛇の姿の神（大物主神）が人間に変身した話もこのパターンに分類できる。この話の中では、大物主神は最初は人の姿で登場し、本当の姿を見たいとの願いを受け、蛇の姿を現す。中国と同様に、蛇が人間に変身するパターンの中で、蛇が人に変身する過程が省略され、人間に変身した蛇は最後に蛇の姿を現すと

[197] 植垣節也校注・訳『風土記』、新編日本古典文学全集 5、小学館、2006 年、p. 404。現代日本語の要約は同書の現代日本語訳を参考した。

[198] 『日本書紀』巻 5「御間城入彦五十瓊殖天皇　崇神天皇」(〔三〕四道将軍と武埴安彦の反逆、三輪山伝説）に、大物主神（蛇の姿の神）が人に変身して、人間の女性と交わる話がすでに存在した。(小島憲之　直木孝次郎　西宮一民　蔵中進　毛利正守校注・訳『日本書記』①＜全三冊＞、新編日本古典文学全集 2、小学館、2006 年、p. 282-283)

いった構成がよく見られる。このような話は、いったん人間に変身した蛇が、再び蛇の姿に戻るというような構成を通して、人に変身したのは蛇であることを示す。

話の中に明示された変身の方向、もしくは話の中で提示された推測できる証拠にもとづいて、蛇の変身譚を分類した結果、蛇が人間に変身するパターンは 19 例、人間が蛇に変身するパターンは 30 例であった。

**類話の処理**

話の中の主人公の名前および話の内容が似ている場合は、類話と見做す。

例えば、『今昔物語集』巻 16-16「山城国女人依観音助遁蛇難語第十六」[199]と『法華験記』下-123「山城国久世郡女人」[200]は蟹満多寺の起源についての話である。話の要約は以下のとおりである。

> 山城国の久世郡にある女の人は慈悲深く、ある日、蟹を放生した。その後、この女の人の父親は、畑で耕作をしている時、蛇がヒキガエル（『今昔物語集』巻 16-16 では「蝦」とする）を追うところを見た。彼はヒキガエルを助けるために、蛇に向かって、もしヒキガエルを許してやってくれれば、蛇を自分の婿として受け入れると冗談半分に約束した。すると、人間に変身した蛇が夜に訪れにきた。父親は、3 日後に来るようにと蛇に告げた。3 日後、女性は倉の中に身を隠した。人間に変身した蛇が訪れに来て、倉を見て怒り、蛇の姿を現してその倉を巻き付いた。しかし、娘に助けられた蟹をはじめ、千万の蟹が集まってきて、この蛇を刺殺した。娘は、蛇の苦を救い、蟹の罪を償うため、その場所で寺を建てた。その寺は蟹満多寺という。〔4.2.1-5〕〔4.2.1-8〕

この 2 つの話の筋書はほぼ同様である。『法華験記』が著された時期は『今昔物語集』よりおよそ 60 年早い。『今昔物語集』の中に、この話は『法華験記』に基づくものであるなどの記載はないが、話が発生した場所や登場人物、話の流れはほぼ同様であるため、この話を『法華験記』下-123「山城国久世郡女人」の類話と見做すことができる。

---

[199] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』②、新編日本古典文学全集 36、2003 年、pp. 207-211。
[200] 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系 7、岩波書店、1974 年、p. 565。

類話は、4.1 と同じように扱う。つまり、性別の割合および変身する目的・原因を考察する際に、集計については、もっとも早く出現したもとの話だけを対象として扱い、それ以降に出現した類話は除外する。ただし、内容については、類話も含めて考察する。

蛇が人間に変身するパターンの中に、類話は 2 例ある。上記の『今昔物語集』巻 16-16 以外に、平安時代に書かれた『今昔物語集』巻 14-17「金峰山僧転乗持法花知前世語第十七」[201]は、『法華験記』下-93「金峰山転乗法師」[202]の類話である。

人間が蛇に変身するパターンの中に、類話は 8 例あり、平安時代に集中している。以下では、これらの類話を挙げる。

『今昔物語集』巻 20-16「豊前国膳広国行冥途帰来語第十六」[203]は、『日本霊異記』上-30「非理奪他物為悪行受悪報示奇事縁」[204]の類話である。

『今昔物語集』巻 20-24「奈良馬庭山寺僧依邪見受蛇身語第二十四」[205]は、『日本霊異記』中-38「因慳貪成大蛇縁」[206]の類話である。

『今昔物語集』巻 12-36「天王寺別当道命阿闍梨語第三十六」[207]は、『法華験記』下-86「天王寺別当道命阿闍梨」[208]の類話である。

『今昔物語集』巻 14-3「紀伊国道成寺僧写法花救蛇語第三」[209]は、『法華験記』下-129「紀伊国牟婁郡悪女」[210]の類話である。

『今昔物語集』巻 14-3「紀伊国道成寺僧写法花救蛇語第三」[211]は、『法華験記』下-129「紀

---

[201] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集 35、1999 年、pp. 450-452。付録〔4. 2. 1-7〕参照。
[202] 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系 7、岩波書店、1974 年、p. 554-555。付録〔4. 2. 1-6〕参照。
[203] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』③、新編日本古典文学全集 37、小学館、2008 年、pp. 78-82。付録〔4. 2. 2-10〕参照。
[204] 中田祝夫校注・訳『日本霊異記』、新編日本古典文学全集 10、小学館、1995 年、pp. 99-100。付録〔4. 2. 2-2〕参照。
[205] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』③、新編日本古典文学全集 37、小学館、2008 年、pp. 102-103。付録〔4. 2. 2-11〕参照。
[206] 中田祝夫校注・訳『日本霊異記』、新編日本古典文学全集 10、小学館、1995 年、pp. 227-228。付録〔4. 2. 2-3〕参照。
[207] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集 35、1999 年、pp. 269-274。付録〔4. 2. 2-12〕参照。
[208] 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系 7、岩波書店、1974 年、p. 551。付録〔4. 2. 2-4〕参照。
[209] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集 35、1999 年、pp. 406-412。付録〔4. 2. 2-13〕参照。
[210] 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系 7、岩波書店、1974 年、p. 568-569。付録〔4. 2. 2-5〕参照。
[211] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集 35、1999 年、pp. 406-412。付録〔4. 2. 2-14〕参照。

伊国牟婁郡悪女」[212]の類話である。

『今昔物語集』巻 13-42「六波羅僧講仙聞説法花得益語第四十二」[213]は、『法華験記』上-37「六波羅密寺定読師康仙法師」[214]の類話である。

『今昔物語集』巻 13-44「定法寺別当聞説法花得益語第四十四」[215]は、『法華験記』上-29「定法寺別当法師」[216]の類話である。『今昔物語集』巻 14-1「為救無空律師枇杷大臣写法花語第一」[217]は、『法華験記』上-7「無空律師」[218]の類話である。

上記の類話を除き、蛇の変身譚は 39 例ある。

### 4.2.1.2 各時代の蛇の変身譚の例数

以下では、各時代における蛇が人間に変身する、人間が蛇に変身するという 2 パターンの例数を表 4.2.1.2 に示す。

表 4.2.1.2 各時代の蛇の変身譚の例数

| パターン / 時代 | 蛇が人間に変身する | 人間が蛇に変身する | 時代別合計 |
|---|---|---|---|
| 奈良時代 | 4 | 1 | 5 |
| 平安時代 | 4 | 11 | 15 |
| 鎌倉時代 | 1 | 4 | 5 |
| 室町時代 | 5 | 1 | 6 |
| 江戸時代 | 3 | 5 | 8 |
| 合計 | 17 | 22 | 39 |

[212] 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系 7、岩波書店、1974 年、p. 568-569。付録〔4.2.2-6〕参照。
[213] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集 35、1999 年、pp. 389-391。付録〔4.2.2-15〕参照。
[214] 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系 7、岩波書店、1974 年、p. 528。付録〔4.2.2-7〕参照。
[215] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集 35、1999 年、pp. 395-398。付録〔4.2.2-16〕参照。
[216] 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系 7、岩波書店、1974 年、p. 525。付録〔4.2.2-8〕参照。
[217] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集 35、1999 年、pp. 401-403。付録〔4.2.2-17〕参照。
[218] 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系 7、岩波書店、1974 年、p. 517。付録〔4.2.2-9〕参照。

日本では、蛇が変身譚の材料として使われるようになったのは早く、奈良時代である。2 つのパターンの合計を比べると、人間が蛇に変身するパターンのほうが多い。

時代別にみると、奈良時代に蛇が人間に変身するパターンが多かったが、平安時代からは人間が蛇に変身するパターンが多く書かれるようになる。特に平安時代においては、人間が蛇に変身するパターンは圧倒的に多い。

上記の表の中に、1 話に 2 つの変身譚が含まれるものが 1 話ある。この話は 2 例として集計する。それは、『法華験記』下－129「紀伊国牟婁郡悪女」である。話の要約は以下のとおりである。

若い僧が熊野へ参詣する途中、紀伊国牟婁郡で、あるやもめの家に泊まった。夜に、若い僧はそのやもめに言い寄られたが、断って、帰りに寄ることを約束した。しかし、その後、若い僧は帰りに別の道で帰った。このことを知ったやもめは激怒し、家に帰ると大きな蛇となり（『今昔物語集』巻 14-3 ではやもめは死んで蛇になった）、若い僧を追った。僧は道成寺に逃げ込み、道成寺の僧たちに助けられ、鐘の中に身を隠した。蛇は道成寺に入り、その鐘に巻きついた。鐘は蛇の毒の熱で焼かれ、中にいた僧は灰になった。数日後、道成寺の老僧の夢に、大きな蛇が来て、蛇は、「私は鐘の中の僧であり、悪女に支配されて、その女の夫となった。自分も女と同様にこの悪身を受けた」と言って、老僧に 2 匹の蛇のために写経をしてくれないかと頼んだ。老僧は写経、布施をし、蛇を供養した。供養が終わったその夜に、老僧の夢に若い僧 1 人と女の人 1 人が来て、供養のおかげで蛇身を脱し、善所に赴くことができたとのことを告げた[219]。〔4.2.2-5〕〔4.2.2-6〕

この話の中に、①やもめは怨恨で蛇になった、②僧はやもめに支配され、蛇になったという 2 つの変身譚がある。そのため、この話を 2 例として数えることにする。

### 4.2.2 蛇が人間に変身するパターン

本節では、蛇が人間に変身するパターンを①変身後の性別の割合の変遷、②神格化した蛇と神格の喪失、③蛇が人間に変身する目的の変遷という 3 つの角度から考察する。

[219] 現代日本語の要約は筆者による。

#### 4.2.2.1 蛇が人間に変身するパターンの変身後の性別の割合の変遷

蛇が人間に変身する 17 例の中では、全体的に男性の割合が女性の割合より多い。すなわち、全体的に見れば、蛇は男性に変身する傾向がやや強いと言える。では、変身後の性別の割合は、時代とともに変化するのだろうか、表 4.2.2.1 に、時代別に変身後の性別数と割合を示す。

1 話の中に男女の両方ともに変身する例、及び変身後の性別が不明な例はない。

**表 4.2.2.1 蛇が人間に変身するパターン（括弧内は変身譚の例数）**

| 時代 | 男性 | 女性 |
|---|---|---|
| 奈良時代 | 75%（ 3） | 25%（ 1） |
| 平安時代 | 75%（ 3） | 25%（ 1） |
| 鎌倉時代 | 100%（ 1） | 0%（ 0） |
| 室町時代 | 60%（ 3） | 40%（ 2） |
| 江戸時代 | 33%（ 1） | 67%（ 2） |
| 合計 | 65%（11） | 35%（ 6） |

表 4.2.2.1 に示したように、合計では蛇が男性に変身する例が多い。蛇が女性に変身する変身譚は鎌倉時代を除き、すべての時代に少数ながら存在している。江戸時代になると、蛇が女性に変身する変身譚が男性に変身する変身譚を上回るが、差は 1 例のみであり、全体的に蛇は男性に変身する傾向が強い。

#### 4.2.2.2 神格化した蛇と神格の喪失

奈良時代の蛇が人間に変身するパターンの中には、蛇の姿の神が人間の姿に変身するという話が存在する。例えば、4.2.1.1 で挙げた『風土記』「常陸国風土記」の「那賀の郡」の話、および『日本書紀』巻 5 における大物主神に関する話は、このような話である。また、『古事記』中つ巻「垂仁天皇」（〔三〕本牟智和気の御子）[220]の肥長比売に関する話も蛇の姿の女神が人間の姿に変身する話である。話の要約は以下のとおりである。

[220] 山口佳紀　神野志隆光校注・訳『古事記』、新編日本古典文学全集 1、小学館、2007 年、pp. 208。現代日本語の要約は筆者による。

垂仁天皇の子はある夜肥長比売と交わった。その時、彼が肥長比売をそっと見ると、彼女は蛇であったため、彼は恐れて逃げた。肥長比売は海原を照らして、船で彼に追い迫った。彼はますます恐れて、途中で陸に上がって逃げた。〔4.2.1-1〕

この話において、肥長比売が垂仁天皇の御子を追いかける際に、「光海原(海原を照らす)」という記述がある。この表現は、肥長比売が光を放つ能力を有するということを表わしていると考えられる。ゆえに、肥長比売は神であると明言されてはいないが、光を放つ能力を持つことから、神に近い存在であることが推測できる。中村（1984）も、肥長比売について、「海神に関係がないとはいいきれない」[221]と述べている。

上記の奈良時代に書かれた 3 例の話から見ると、奈良時代には、蛇は神聖視され、蛇に神の要素が混在しており、蛇と神の間の境界が明確ではないことがわかる。

上古時代の蛇と神の間の境界が明確ではない原因について、上古時代に蛇信仰の存在を指摘する研究者が多い。吉野（1979）は、蛇信仰は日本において、縄文時代からすでに見られると指摘している。中村（1984）は、蛇信仰が発生した原因について、「ヘビはその異様な形態と習性、および人の食用になりにくいという特性で、神の象徴として出発点から潜在的に有利な立場になっていた」[222]と指摘している。また、この動物神が人格神に発展する可能性について、中村（1984）は、「氏族の祖神の成立が人格神の誕生のきっかけになったのであり、その祖神の原型はしばしば自然神であった」[223]と述べ、さらに自然神である蛇神が氏族の祖神として選ばれた理由について、「ヘビ神は水神としての機能をいちじるしく発揮していたため、祖神としての資格をえやすく、したがって人格化しやすかったのである。」[224]と指摘している。

上記の理由により、蛇はまず動物神と見做され、奈良時代、もしくはそれより早い時期に人格神に発展した。また、その過程で、動物神の蛇は人の姿に変身する能力を獲得したと考えられる。

しかし、奈良時代以降は、上記のような神に近い存在である蛇のイメージは、徐々に薄れていった。つまり、蛇の神格が喪失し始めたのである。蛇の神格の喪失は、2 つのポイントに表われている。第一に、蛇神のイメージが含まれる話が少なくなったこと、第二に、

[221] 中村（1984）、p. 28。
[222] 中村（1984）、p. 61。
[223] 中村（1984）、p. 64。
[224] 中村（1984）、p. 66。

蛇神のイメージが含まれる話において、蛇神が人間に助けられる立場になったことが挙げられる。

平安時代以降、話の中に蛇神のイメージが含まれるものは、平安時代に書かれた『今昔物語集』巻 16-15「仕観音人行竜宮得富語第十五」[225]、鎌倉時代に書かれた『平家物語』巻 8「緒環」[226]、室町時代に書かれた御伽草子『俵藤太物語』[227]のわずか 3 例しか存在せず、蛇神の話は、奈良時代には 4 例中 3 例あるのに対して、平安時代以降には 13 例中 3 例しか存在しない。つまり、蛇神のイメージが含まれる話は、平安時代以降になるとあまり書かれていないのである。

平安時代以降に書かれた蛇神のイメージが含まれる上記 3 例のうち、『今昔物語集』巻 16-15 と御伽草子『俵藤太物語』は蛇の姿の竜王の娘（あるいは竜女）が人間の姿に変身する話である。竜女は人格化した蛇神に近いが、2 つの話の中で、竜女は人間に恩返しをするため、あるいは人間の助けを求めるために人間に変身している。ゆえに、この 2 例では、蛇は人間よりも上の存在である神のイメージが薄いと言えよう。つまり、竜女は蛇神の名残と理解できるが、人間との関わりかたから見ると、神としてのイメージが弱くなっている。特に、室町時代の御伽草子『俵藤太物語』の中で、竜女は、人に変身し化け物退治を人間の男に頼んでいる。蛇の姿の竜女は人に変身する能力を持っているが、化け物退治には人間の助けを求めないといけない立場になってしまうため、神としてのイメージは薄らいだと言えよう。

蛇が神格を喪失した理由としては、以下の 2 点が考えられる。

第一点は、仏教思想が蛇の変身譚に大きな影響を与えたことである。仏教思想の中では、動物は畜生道に属し、人より下の存在である。蛇もその例外ではない。

平安時代の『法華験記』下-93「金峰山転乗法師」では、蛇は法華経を聞き、人に転生した。また、室町時代の御伽草子『法妙童子』[228]では、僧が念仏を唱えると、菩薩が現れ、大蛇は罪業が解けて若者となって浄土へ往生する。この 2 例は、いずれも蛇が仏教のおかげで人になれた話である。

---

[225] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』②、新編日本古典文学全集 36、2003 年、pp. 200-207。付録〔4. 2. 1-10〕参照。
[226] 市古貞次校注・訳『平家物語』②＜全 2 冊＞、新編日本古典文学全集 46、小学館、2006 年、pp. 113-115。付録〔4. 2. 1-11〕参照。
[227] 松本隆信校注『御伽草子集』、新潮日本古典集成（第三四回）、新潮社、1980 年、pp. 89-111。付録〔4. 2. 1-13〕参照。
[228] 横山重、松本隆信編『室町時代物語大成』第十二（全十四巻）、角川書店、1984 年、pp. 380-383。付録〔4. 2. 1-16〕参照。

では、人が蛇に変身するパターンおいては、仏教の影響はどのように表われるのであろうか。中村（1984）は、「人が悪業の報いで死後動物に転生する説話は九世紀にしられており（中略）中国・インドの仏経説話の影響が明瞭にみられる」[229]としている。つまり、仏教の考え方においては、人が動物に変身することは悪業の報いなのである。

以上をまとめると、人間が悪行で蛇に変身するのであろうと、蛇が仏教の救済で人間に変身するのであろうと、仏教の考え方においては、蛇は人間より下の存在である。仏教の中で、蛇は人より下の存在といった考え方が日本へ流入するにつれ、蛇を神として神聖視する日本土着の考え方に衝撃を与えた。仏教思想の影響は、蛇の神格の喪失につながっていると考えられる。

第二点は、蛇信仰が狐信仰に取って代わられたことである。

人と動物とのあいだの変身譚の基礎は、古代における人間の動物信仰にあるとされる[230]。

日本では、『古事記』・『日本書紀』・『風土記』の成立した奈良時代において、変身譚の主流は爬虫類（蛇・鰐・亀）の変身譚であり[231]、狐の変身譚は存在しない。これは、当時の中央文化（支配階級の文化）における蛇信仰と関係があると考えられる。ただし、中村（1984）は、「八世紀初期にすでに、ヘビ信仰は盛期をすぎ、この動物は嫌悪されはじめた[232]」と述べている。

平安時代に入ると、狐の変身譚が大陸から伝来されるとともに、狐信仰も渡来した。狐信仰は、8 世紀に、狐信仰を持つ渡来族秦氏の勢力の拡張および唐から帰朝した空海の活動によって広がりはじめた。中村（1984）は、「九世紀初頭には、キツネとの異類婚姻譚が日本にはじまっていた。その機縁になったのは、ある地方族の大陸からの帰化移住であったろう。ここでキツネは農耕神またはその手先であった[233]」と述べている。そして、中世以降、「伏見稲荷の縁起はまた、稲荷を主轄する動物がヘビからキツネに転換していった[234]」と中村氏が指摘しているように、もともと蛇を対象とした稲荷信仰も、狐信仰に圧倒されるようになったのである。

衰弱しつつある蛇信仰はこのように狐信仰に取って代わられ、蛇も神聖視されなくなっ

---

229 中村（1984）、p. 116。
230 中村（1984）、p. 272 は、「動物から人への変身説話は、古代における動物神と人との神婚伝承からはじまる。あるいはこれに、人の姿をかりた動物神の託宣・告知の伝承も加えるべきかもしれない」と述べている。
231 中村（1984）、p. 25 表 1－1、表 1－2 を参照した。
232 中村（1984）、p. 69。
233 中村（1984）、p. 115-116。
234 中村（1984）、p. 158。

たと考えられる。

### 4.2.2.3 蛇が人間に変身する目的の変遷

蛇（蛇の姿の神）がどのような目的をもって人に変身したのかは、蛇が人に変身する物語の変遷を研究するための重要な手掛かりと考えられる。また、量的な観点から見ても、蛇が人間に変身する変身譚における変身目的に関する記述があるものは多く、17 例中 11 例を占めている。そのため、以下では蛇が人に変身する理由の変遷について論じ、その背景にある文化的要素について考察を行いたい。

蛇が人間に変身する変身譚について、奈良時代に出現したもっとも早い物語は前掲の『古事記』「垂仁天皇」に記載された肥長比売の話である。この物語においては、蛇は男女の交わりのために肥長比売に変身したと推測される。平安時代になると、蛇が人に変身する話が増えており、変身の目的も多様化している。その中には、報恩の話（以下、報恩）や、人の助けを求めるために人に変身した話（以下、人の助けを求める）も登場している。

上述のように、奈良時代から江戸時代までの蛇が人に変身する変身譚は、変身の目的による分類すると、その大部分が①男女の交わり、②報恩、③人の助けを求めるという 3 パターンに分けられる。なお、上記の 3 パターン以外にも、蛇が仏経を聞いて人間に生まれ変わるというような受動的な変身も存在する。このような変身はその目的が示されていないため、「不明」の項目に分類する。「不明」の項目は、すべて念仏を聞いたことで起こった受動的な変身である。以下の表 4.2.2.3 に、時代別に変身目的別の例数を示す。

**表 4.2.2.3 蛇が人間に変身する目的のパターン**

| パターン / 時代 | 男女の交わり | 報恩 | 人の助けを求める | 不明 | 時代別合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| **奈良時代** | 男 3、女 1 | | | | 4 |
| **平安時代** | 男 2 | 女 1 | | 男 1 | 4 |
| **鎌倉時代** | 男 1 | | | | 1 |
| **室町時代** | 男 1、女 1 | | 女 1 | 男 2 | 5 |
| **江戸時代** | 男 1、女 2 | | | | 3 |
| **合計** | 男 8、女 4 | 女 1 | 女 1 | 男 3 | 17 |

表 4.2.2.3 から、日本における蛇が人間に変身する目的について、以下の 2 点が見てとれる。

①男女の交わりのパターンがもっとも多く、各時代に存在している。また、蛇が男性に変身する目的はほぼ男女の交わりである。

②男女の交わり以外の報恩・人の助けを求めるパターンは平安時代・室町時代にそれぞれ一度出現したのみで、その後は受け継がれなかった。

吉野（1979）は、「縄文人が蛇によせた情熱、信仰にまでたかめられたその思いの源はどこに求められるのか（中略）まず蛇の形態が何よりも男根を連想させること[235]」と指摘し、日本において、古くから蛇が信仰対象になった要因の 1 つとして、蛇の形態が男根を連想させることを挙げている。おそらくこのような考え方が強く根付いていたため、蛇が容易に男性と結びつけられたのであろう。

男女の交わりのパターンにおいて、4.2.2.2 で述べたように、奈良時代の話では、蛇神が人に変身して人間と交わりをなすが、その後、蛇の神性が失われ、蛇は邪悪のイメージとして出現し、人に危害を加えるようになった。その典型的な例として、4.2.1.1 で示した『法華験記』下-123 の蟹満多寺の起源についての話が挙げられる。また、奈良時代の蛇神との神婚譚と類似した『今昔物語集』巻 31-34「大和国箸墓語第三十四」[236]の中に、蛇は神ではなくなり[237]、蛇と交わった皇女も最後に死ぬという話がある。『新著聞集』巻 10-26「蛇變じて人に交り懐胎して初て知る」[238]も類似した話であり、男性に変身した蛇は人間の女性を妊娠させ、女性は最後に「蛙の子に齊しき物」を産んで死ぬ。

4.2.2.2 で述べたように、蛇神の神性の喪失は、仏教の影響と関わりがあり、日本における蛇が人間に変身するパターンは、仏教に影響されていることがわかる。すなわち、仏教の影響は日本における蛇が人間に変身するパターンの歴史的変遷の考察に重要であると言える。

---

[235] 吉野（1979）、p. 24。
[236] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』④、新編日本古典文学全集 38、2008 年、pp. 575-577。付録〔4.2.1-9〕参照。
[237] 話の中において、男に変身した蛇は自分の身分を説明する時に、「我レハ此ノ近キ辺ニ侍ル也」と言ったことについて言及した。ただし、男が蛇の姿の神であることを示す記述はない。
[238] 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫第 47 編、博文館、1903 年、pp. 146-147。付録〔4.2.1-18〕参照。

### 4.2.3 人間が蛇に変身するパターンについての考察

本節では、蛇の変身譚の中の人間が蛇に変身するパターンを①変身前の性別の割合の変遷、②人間が蛇に変身する理由の変遷という 2 つの角度から考察する。

#### 4.2.3.1 人間が蛇に変身するパターンの変身前の性別の割合の変遷

人間が蛇に変身する 22 例の中では、全体的に男女の比率が半々である。時代別に変身前の性別数と割合を以下の表 4.2.3.1 に示す。

表 4.2.3.1 人間が蛇に変身するパターン（括弧内は変身譚の例数）

| 時代 | 男性 | 女性 |
|---|---|---|
| 奈良時代 | 100%（ 1） | 0%（ 0） |
| 平安時代 | 73%（ 8） | 27%（ 3） |
| 鎌倉時代 | 0%（ 0） | 100%（ 4） |
| 室町時代 | 100%（ 1） | 0%（ 0） |
| 江戸時代 | 20%（ 1） | 80%（ 4） |
| 合計 | 50%（11） | 50%（11） |

表 4.2.3.1 に示したように、全体的には、男女の比率が半々である。また、奈良時代と平安時代において、蛇に変身したのはほとんどが男性である。女性が蛇に変身する話は平安時代に初登場したが、同時代の男性が蛇に変身するパターンより圧倒的に少ない。鎌倉時代以降は、逆に女性が蛇に変身するパターンの例数は男性が蛇に変身するパターンを上回る。

日本における人間が蛇に変身するパターンにおいて、概して言えば、平安時代以前に、男性が蛇に変身する割合が多いが、鎌倉時代以降に逆転している。

#### 4.2.3.2 人間が蛇に変身する原因の変遷

狐の変身譚とは異なり、蛇の変身譚には人が蛇に変身するというパターンが存在する。このパターンにおいては、なぜ人が人間の姿から脱して蛇に変身するのか。つまり蛇に変身する原因は、人が蛇に変身する物語の変遷を研究するための重要な手掛かりなると考えられる。また、量的な観点から見ても、人間が蛇に変身するパターンにおける変身の原因

に関する記述があるものは多く、22 例の中で 21 例を占めている。そのため、以下では人が蛇に変身する原因の変遷について論じ、その背景にある文化的要素について考察を行いたい。

人が蛇に変身する変身譚のうち、奈良時代に出現したもっとも早い物語は『日本書紀』巻 11「大鷦鷯天皇　仁徳天皇」（〔八〕新羅との紛争、蝦夷の反逆）[239]に記載された、蝦夷に殺された田道が死後蛇に変身し、蝦夷に復讐した話である。この部分の内容は以下のとおりである。

> 五十五年に、蝦夷が叛いた。田道を遣わして撃たせたが、蝦夷に敗れて、伊寺水門で死んだ。この時、従者がいて、田道の小手を取り、その妻に与えた。するとその小手を抱いて縊死した。時の人は、これを聞いて涙を流した。この後、蝦夷がまた襲って、人民を略奪した。そうして、田道の墓を掘った。すると大蛇がいて、目を怒らせて墓から出て来て咬みついた。蝦夷はみな蛇の毒をうけ、多くは死亡し、免れることのできたのはほんの一人か二人だけであった。そこで時の人は、「田道はすでに亡くなったけれども、ついに仇に報復」した。どうして死人に知覚がないと言えようか」と言った。〔4.2.2-1〕

という記述から、この話においては、田道が恨みのために蛇に変身したと推測される。

平安時代になると、人間が蛇に変身する話が突然増加し、変身の原因も多様化する。その中には、恨みで蛇に変身した話と類似する、怒りや嫉妬で蛇に変身した話（以下、恨みの話と合わせて怨恨という）も現れた。また、怨恨の話以外にも、悪事の報いで蛇になった話（以下、悪事の報い）、および実世界に存在するものや人に対する執念で蛇になった話（以下、執着）も登場する。

上述のように、奈良時代から江戸時代までの人が蛇に変身する変身譚を、変身の原因により分類すると、その大部分が①怨恨、②執着、③悪事の報いの 3 パターンに分けられる。なお、上記の 3 パターンに分類できない話は 1 例あり、「不明」の項目に分類する。この話は、4.2.1.2 で紹介した、僧が蛇に変身した女性に支配されて蛇に変身した話である（『法華験記』下-129「紀伊国牟婁郡悪女」）。以下の表 4.2.3.2 に、時代別に変身原因別の例数

[239] 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守校注・訳『日本書記』①＜全三冊＞、新編日本古典文学全集 2、小学館、2006 年、pp. 64-66。現代日本語訳は同書 p. 65-67 による。

を示す。

表 4.2.3.2 人間が蛇に変身する原因の変遷

| パターン / 時代 | 怨恨 | 執着 | 悪事の報い | 不明 | 時代別合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 奈良時代 | 男 1 | | | | 1 |
| 平安時代 | 女 1 | 男 2、女 1 | 男 5、女 1 | 男 1 | 11 |
| 鎌倉時代 | 女 2 | 女 1 | 女 1 | | 4 |
| 室町時代 | | | 男 1 | | 1 |
| 江戸時代 | 女 1 | 男 1、女 2 | 女 1 | | 5 |
| 合計 | 男 1、女 4 | 男 3、女 4 | 男 6、女 3 | 男 1 | 22 |

表 4.2.3.2 から、人間が悪事の報いで受動的に蛇に変身するパターンがもっとも多く、9 例あることがわかる。また、執着による変身も多く、7 例存在する。この 2 パターンは、人間が蛇に変身するパターンの半分以上を占めている。その他、怨恨のパターンは 5 例ある。

時代ごとにこれらのパターンを見ていくと、悪事の報いのパターンは平安時代に登場し、この時代の変身譚の大半を占めている。怨恨と執着のパターンはそれぞれ奈良時代、平安時代に登場し、その後も受け継がれた。江戸時代になると執着のパターンの割合が最も大きくなっていった。

悪事の報いのパターンには、仏教思想の影響が顕著に表われている話が存在する。

『法華験記』上-29「定法寺別当法師」とその類話『今昔物語集』巻 13-44「定法寺別当聞説法花得益語第四十四」の要約は以下のとおりである。

定法寺の別当の僧が、「僧の姿はしているが、仏・法・僧の三宝を敬わず、因果の道理がわからず、つねに碁や双六を好み、その方面の者を集めては遊び戯れていた。また多くの遊女や傀儡などの歌女を招いて遊ぶのを日常のこととしていた。しかも、仏への供え物を勝手気ままに私用に使い、いささかの善行をもすることなく、肉食し

たり酒□で日を送るという生活ぶりであった[240]」。これらの悪業で報いを受け、死んだ後蛇になった。妻と子供による写経供養で、彼は苦しみを受けることから救われた。〔4.2.2-8〕〔4.2.2-16〕

『法華験記』下-86「天王寺別当道命阿闍梨」とその類話『今昔物語集』巻 12-36「天王寺別当道命阿闍梨語第三十六」の要約は以下のとおりである。

ある男は生前に殺生し、仏の物を勝手に使うなどの悪業で報いを受け、地獄に堕ちて苦しみを受けた。だが、法華経を聞いたため、地獄の苦を免れ、軽い苦を受けることになり、蛇身に生まれ変わった。法華経をさらに聞いた蛇は蛇の身から脱し、天上に生まれ変わることができるようになった[241]。〔4.2.2-4〕〔4.2.2-12〕

『沙石集』巻 7-3「繼女ヲ蛇二合セムトシタル事」[242]は、継母が継娘を沼の主である蛇に嫁がせようとしたが、失敗して、報いで彼女自身が蛇に纏い付かれ、蛇になってしまった話である。話の要約は以下のとおりである。

ある女が、何回も 12、3 歳の継娘を大きな沼のところに連れて行き、沼の主である大蛇に「この娘を差し上げる」と言った。その後、大蛇が家に来て、娘を取ろうとした。娘の父は、蛇に向かって、「この娘は私の娘である。母は継母である。私の許しがないのに、どうして娘を取れるだろう。継母の話に依ってではなく、妻は夫に従うものなので、継母を好きにしなさい。取りなさい。」と言った。すると、蛇は継母に纏いついた。蛇に巻き付かれた継母は蛇になってしまった。〔4.2.2-24〕

話の最後は「人ノ爲ニ腹惡キハ、軈テ我身ニヲイ侍ルニコソ。因果不可疑フ」と結ばれており、悪い行いをするとその報いは自分の身にくるという仏教の因果応報の道理が語られている。

[240] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集 35、1999 年、pp. 395-396 の現代日本語訳を引用した。
[241] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集 35、1999 年、pp. 271。現代日本語の要約は筆者による。
[242] 渡辺綱也校注『沙石集』、日本古典文学大系 85、岩波書店、1961 年、pp. 279-298。

継母が継子をいじめる話として、上記の「繼女ヲ蛇二合セムトシタル事」以外に、説経節の『愛護若』[243]が挙げられる。話の要約は以下のとおりである。

愛護若は、継母である雲井の局の讒言で汚名をきせられ、自殺してしまった。真相を知った父は、後妻とその侍女を殺害した。継母は淵に沈められ、死後蛇になった。〔4.2.2-26〕

この話では、愛護若の父は真相を知った後、「愛護が敵目の前にありけるを、知らでくらす無念なり」と言い、愛護若が自殺した原因は継母の行いにあると表わされている。継母は愛護若を迫害した悪い行いで、死んだ後蛇になるという報いを受けたと考えられる。この話は、前掲の報いによる変身と異なり、仏教の教えや僧などの仏教要素が織り込まれていない。

上記の悪事の報いによる変身の例から、以下の 2 点がわかる。①報いを受ける原因となる「悪事」は、2 種類あり、1 つは自分の行いを慎まず仏に対して不敬な行為をすること、もう 1 つは他人を害することである。②悪事の報いのパターンには、仏教の因果応報の教えや僧、念仏などの仏教要素が織り込まれた話もあれば、そうでない話もある。

怨恨のパターンの 5 例のうち、男性が蛇に変身する例が 1 例、女性が蛇に変身する例が 4 例である。男性が蛇に変身する例は、前掲の奈良時代の『日本書紀』巻 11 に記載された蝦夷に殺された田道が死後蛇に変身し、蝦夷に復讐した話である。この話は怨恨で蛇になり、復讐に成功した話であるが、それ以降の怨恨のパターンでも蛇になって復讐する話は、ほとんどの場合復讐に成功している。おそらくこれは、人の蛇に対して畏怖のイメージを抱いていたからであろう。

以下では、怨恨のパターンの田道以外の話について考察を行う。前に述べたように、田道以外の話は、すべて女性が蛇に変身する話である。まず、平安時代の 1 例は、4.2.1.2 で述べた『法華験記』下-129 の道成寺の物語である。これは、約束を破った僧を恨んで蛇になり、僧に復讐するやもめの話である。

鎌倉時代には次の 2 例がある。1 つ目は、『古今著聞集』巻 20-720「或僧の妻嫉妬して蛇と化し夫の件物に喰付く事」である。話の要約は以下のとおりである。

[243] 荒木繁・山本吉左右編注『説経節　山椒太夫・小栗判官他』、東洋文庫 243、1988 年、pp. 190-191。現代日本語の要約は筆者による。

とある僧の妻は嫉妬深く、その生霊が蛇と化し、他の女のところに通った僧の男根に噛みついた。〔4.2.2-22〕

2 つ目は『宇治拾遺物語』巻 4-5（57）「石橋下の蛇の事」[244]である。この話では、ある女性がある人を恨めしいと思ったために蛇の身に生まれ変わり、石橋の下で長い年月を過ごした。江戸時代の 1 例は、『新著聞集』巻 12-12「恨婦蛇となる潜妾家を去る」[245]の話である。妻が夫を恨んだため蛇になって、家に身を隠した。夫がその後妾を家に連れてきたが、翌日に妾はこの家から逃げ去った。おそらくその夜に何か恐ろしいことが起きただろうという話である。

では、このような怨恨で蛇に変身する話は、なぜ出現したのだろうか。その理由として、中国の仏教に関する文学「僧伝文学[246]」の「怨恨で蛇に変身する」といったモチーフが日本に影響を与えたことが考えられる。

仏教文学において、蛇に変身する理由として、恨み・怒りは古くから存在する。漢訳仏経の中で、恨み・怒りと蛇に変身することとの関わりについて、項（2005）は、「仏教史において、大体仏経が漢訳され始めた頃から、恨み・怒りと蛇に変身することとの間に一定のパターンが形成され始めたのである」[247]と述べている。つまり、このモチーフは中国土着のものでもなく、もともとはインドの仏経の中のモチーフである可能性がある。時代的に非常に早く中国に受け入れられた。項（2005）は、少なくとも 2 世紀[248]には、中国にこのモチーフが僧伝文学に受け入れられていたと指摘している。さらに、恨み・怒りで蛇に変身するパターンは日本にも影響を与えたことについて、項（2005）は道成寺の物語を挙げ、「このような蛇と恨み・怒りに関する物語・『蛇に変身する」といった物語は最後に日本にも影響を与えた[249]」と述べている。つまり、日本における人が怨恨で蛇に変身するパ

---

[244] 小林保治、増古和子校注・訳『宇治拾遺物語』、新編日本古典文学全集 50、小学館、2008 年、pp. 152-157。

[245] 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫第 47 編、博文館、1903 年、pp. 166-167。

[246] 僧侶の伝記を指す。

[247] 项（2005）、p. 131 では、「在佛教史上，几乎是在汉译佛经一开始，这种嗔恚与变蛇之间的固定联系就开始形成了」と述べている。日本語訳は筆者による。

[248] 项（2005）p. 132 では、「当然，以上佛教史料并不能说明“蛇与嗔怒”的化形原则最早传入中国的时间就是公元 224 年。实际上，此种信仰应该在更早的时间就影响到了中国民间，起码在安世高活跃的年代（公元二世纪）里，关于他降服庐山山神巨蟒的传说，就表明此种信仰已经渗透到大众中来了。」と述べている。公元 224 年は「三国吴时（224）译出的《法句譬喻经》卷三：“ 毒蛇言：‘ 嗔恚最苦。毒意一起，不避亲疏。亦能杀人，复能自杀。’ 」を指している。アンダーラインは筆者による。

[249] 项（2005）、p. 132 では、「这种蛇与嗔怒、“化形为蛇”的故事最终还影响到了日本」と述べている。日本語訳は筆者による。

ターンは、中国の僧伝文学に由来することが指摘されている。

執着のパターンは人が物や人に執着するため蛇になる、あるいは恋焦がれて蛇になる話である。

『法華験記』上-37「六波羅密寺定読師康仙法師」とその類話『今昔物語集』巻 13-42「六波羅僧講仙聞説法花得益語第四十二」では、僧が橘の木に執着し、死後蛇に変身したが、寺の僧に供養された後、蛇道から離れ浄土に生まれ変わることができた。『今昔物語集』巻 13-43「女子死受蛇身聞法花得脱語第四十三」[250]の話はこの話と似ており、ある女性が木に執着したため、死後蛇になったが、法花経を聞いた後浄土に生まれ変わることができた。

人に執着するため蛇になった話として、『沙石集』巻 7-2「妄執ニヨリテ女蛇ト成ル事」[251]の話が挙げられる。この話の中では、ある娘が稚児に恋焦がれて、死後蛇になった。稚児が狂死した後、蛇は稚児の棺に入り、稚児と一緒に埋葬された。『諸国百物語』巻 2-12「遠江の国堀越と云ふ人、婦に執心せし事」[252]の話では、息子の嫁に執着し、蛇になって看病してくれた息子の嫁に巻き付いて淵に沈んだ。また、『新著聞集』巻 10-28「二蛇頸をまとひ人家淵に變ず」[253]の話では、男に執着したため、女性の執心が蛇になって男の首に纏いついた。

上記の各時代の執着による変身の話を概観すると、以下のことがわかる。平安時代の話は、すべて供養された後、あるいは経を聞いた後、浄土に生まれ変わることができるようになったといった余話がついており、これは仏教の輪廻転生の思想が反映していると考えられる。それ以降の執着による変身の話として、上記の鎌倉時代の『沙石集』7-2 が挙げられる。この話には、浄土に生まれ変わるといったような余話はないが、話の最後に、「執着愛念ホドニ恐ルベキ事ナシ。生死〔ノ〕[254]苦ノ久ク、流轉ノヤミガタキ、只此愛欲ノイタス所ナリ。佛神ニモ祈念シ、聖教ノ中ノ對治ヲモ尋テ、此愛欲ヲタチ、此敵ヲ打テ、眞實ニ解脱ノ道ニ入リ、自性清淨ノ體ヲ見ルベキナリ。愛執ツキザレバ、欲網ヲ不出。可恐々々。」[255]といった仏教の教えと見られる部分がついている。

前掲の江戸時代の『諸国百物語』巻 2-12「遠江の国堀越と云ふ人、婦に執心せし事」と

[250] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集 35、1999 年、pp. 392-395。
[251] 渡辺綱也校注『沙石集』、日本古典文学大系 85、岩波書店、1961 年、pp. 296-297。
[252] 高田衛編・校注『江戸怪談集』(下)、岩波文庫 30-257-3、岩波書店、1989 年、pp. 32-34。
[253] 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫第 47 編、博文館、1903 年、pp. 147-148。
[254] 「〔ノ〕」は原文テキストにある表記である。
[255] 渡辺綱也校注『沙石集』、日本古典文学大系 85、岩波書店、1961 年、pp. 296-297

『新著聞集』巻 10-28「二蛇頸をまとひ人家淵に變ず」の 2 例においては、輪廻転生に関わる部分もなく、仏教の教えもない。

ところが、執着のパターンに分類された江戸時代の『諸国百物語』巻 3-4「江州、白井介三郎が娘の執心、大蛇になりし事」[256]は、やや異色の話である。結ばれない宿命の男女が心中したが、男は助けられ女は死んだ。死んだ女は執心を持っていたため、死後蛇の姿になった。蛇の姿になった女性は、また執心のため人間の女性に変身して、昔愛し合った男性と結婚し、子供も産んだ。最後に蛇の姿を現して池に戻った。この話の中に、同時に①人が執着で蛇に変身する話、および②蛇が女性に変身して男性と結婚し、最後に蛇の姿を現したといった 2 つの話が存在する。しかし②は①の余話であり、変身人物も同一の人物である。そのため、本研究ではこのような話に対して変身パターンの分類を行う際に、先に発生した変身（上記の例では女性が蛇に変身した）をもとに変身パターンを決める。

上記をまとめると、執着による変身の話において、平安時代の話では、輪廻転生に関わる部分が見られ、仏教の影響が色濃く反映されている。鎌倉時代においても、輪廻転生の部分はないが仏教の教えの影響は見られる一方で、江戸時代になると仏教の影響が薄くなっていった。

人間が執着によって蛇に変身する話は、平安時代に登場して以来、江戸時代まで受け継がれた。これは、当時の人々は、蛇に対して「執着」といったイメージを抱いていたからだと考えられる。また、このイメージが形成された原因は、蛇の生態に対する認識にある。日本において、蛇が執念深さ・執着心の象徴になる理由について、近藤（2012）は、①蛇は簡単に死なない、②かえるを狙うときにじっとする生態[257]といった蛇の生態から説明した。

以上論じてきたように、怨恨・執着・悪事の報いによって変身した人間が蛇に変身する話に、仏教の影響が色濃く見える。日本における人間が蛇に変身するパターンは、仏教の影響を大いに受けたことがわかる。

[256] 高田衛編・校注『江戸怪談集』（下）、岩波文庫 30-257-3、岩波書店、1989 年、pp. 52-57。
[257] 近藤（2012）、p. 5 では、「へびは、われわれにおいては、ときに、このような「執念深さ」の具象化された存在となる。そうみなされることになったのは、ひとつには、さきに触れたように、へびが簡単に死なないからであろう（中略）かえるを狙うへびは、これを襲うチャンスをまって、いつまでもじっとしていることがある」と述べている。

## 4.3 蛇の変身譚の歴史的変遷の日中比較

日中両国において、総数から見ると、蛇が人間に変身するパターンと人間が蛇に変身するパターンの割合に差異が見られる。中国においては蛇が人間に変身するパターンが多いが、日本においては人間が蛇に変身するパターンが多い。

それぞれ中心となるパターンの時代における変遷について、まず、中国では、蛇が人間に変身するパターンが多いのは晋代・南北朝・宋代・明代および清代である。つまり、中国では、蛇が人間に変身するパターンは最初に多かった（晋代・南北朝）が、一時期少なくなり（隋代～五代)、また多くなった（宋代以降）のである。

日本では、人間が蛇に変身するパターンが多いのは、平安時代・鎌倉時代・江戸時代である。つまり、日本では、人間が蛇に変身するパターンは最初は少なかった（奈良時代）が、一時期多くなった（平安時代・鎌倉時代)。その後また少なくなり（室町時代)、江戸時代になると回復したのである。

では、日中両国においては、上記の 2 つのパターンの内部に、どのような異同があるのか。以下の 4.3.1 では、両国の蛇が人間に変身するパターンについて比較し、4.3.2 では人間が蛇に変身するパターンについて比較する。

### 4.3.1 両国における蛇が人間に変身するパターン

日中両国における蛇が人間に変身するパターンの類似点と相違点は､以下のようである。

類似点:①両国において､蛇が男性に変身する話が多い｡②蛇が人間に変身する目的は､男女の交わりが多い。

相違点：①中国では、五代以降、蛇はほぼ女性に変身するようになった。それに対し、日本では､江戸時代を除き､蛇は基本的に男性に変身する｡②変身目的が不明な話を除き、日本では、蛇が女性に変身する目的の種類が中国より多い（中国では変身目的は男女の交わりの一種のみ)。

### 4.3.2 両国における人間が蛇に変身するパターン

総数から見ると、中国においては、男性・女性特にどちらかが蛇に変身しやすいというような傾向は見られないが、日本においては、男性が蛇に変身する割合が大きい。

変身する原因の共通するパターン――悪事の報い、怨恨、執着：

①中国においては、悪事の報いのパターンが圧倒的に多く、それ以外のパターンは非常

に少ないのに対し、日本では、悪事の報いのパターン以外に、執着による変身の話と怨恨による変身の話も多い。

②中国においては、悪事の報いのパターンは女性が多いのに対し、日本における悪事の報いのパターンは男性が圧倒的に多い。つまり、中国においては、報いを受けたため蛇に変身するのはほとんど女性であるのに対し、日本においてはほとんど男性である。

③悪事の報いのパターンの中に、中国の場合においては、仏教の因果応報とそれ以外の報いが存在するが、日本においては、ほとんどが因果応報である。中国と比べ、日本のほうは仏教の影響が色濃く見える。

中国と比べ、日本の動物の変身譚には、仏教要素が織り込まれた話が多く、仏教の影響がより色濃く反映されている。第 8 章の横断的考察にて、この差異について詳しく考察する。

# 第 5 章 虎の変身譚

## 5.1 中国における虎の変身譚

中国では、人間と虎の接触は上古時代にまで遡る。また、虎の変身譚の出現も早く、漢代にすでに現れていた。本節では、「虎が人間に変身するパターン」を①変身後の性別上の割合、②虎が女性に変身する話の登場と変遷、③変身の目的、④話の中の主人公と虎の心理的距離の変化という 4 つの角度から、また、「人間が虎に変身するパターン」を①変身前の性別上の割合、②変身の理由、③虎になった人間がまた人の姿に戻る方法という 3 つの角度から考察を行う。

5.1.1 では、中国における虎の変身譚を概観する。具体的には、各時代の変身譚の数を提示する。

5.1.2 では、虎が人間に変身するパターンについて考察を行う。

5.1.3 では、人間が虎に変身するパターンについて考察を行う。

### 5.1.1 中国における虎の変身譚の概観

データベースおよび手作業で調査した結果、漢代から清代までの間に書かれた 66 話の虎の変身譚を抽出した。虎の変身譚の全体像を把握するために、まず 5.1.1.1 では、変身の 2 つのパターンの判断基準について説明する。次に 5.1.1.2 では、各時代の虎の変身譚の例数を提示する。

#### 5.1.1.1 変身パターンの判断基準

**虎の変身譚の変身パターン**

虎の変身譚は、蛇の変身譚と同じように、虎が人間に変身するパターンと人間が虎に変身するパターンという 2 つのパターンが存在する。この 2 つのパターンの差異は、変身前後の状態のみならず、変身の理由の面にも存在するため、虎の変身譚を変身パターン別に考察する必要があると考えられる。なお、話の内容から変身パターンが判定しにくい場合は、その話を「不明」に分類する。

変身するパターンを判断する際に、変身前後の状態が明示される場合もあるが、話の内容を手がかりとして変身のパターンを推測すべき場合もある。変身前後の状態が明示され

ている例として、『瀛涯勝覽』「滿剌加國」[258]が挙げられる。この話の中に、「人間に変身して市場に入って、人にまぎれて行く虎がいる。それを見極められる人がその虎を捕まえて殺す」という記述がある〔5.1.1-21〕。この記述から、この話は虎が人間に変身する話であることが分かる。

話の前後の内容から変身のパターンを判断する際の考え方について、1 例を挙げてみよう。南北朝に書かれた『異苑』巻 3 の徐桓という人に関する話[259]であるが、要約は以下のとおりである。

> 徐桓という人が出かけた際に、一人の女と出会った。2 人は意気投合したため、その女は草の中に入ろうと徐桓を誘った。徐桓はこの女の美しさに魅せられ、彼女に従った。この女は突然虎になり、徐桓を背負って山の中に行った。十日後、虎はまた徐桓を城門の外まで送った。〔5.1.1-4〕

この話の内容からは、人から虎への変身か、それとも虎が女性に変身したかということが判断しにくい。汪（2007）はこの話について、「これは、美しい女性が虎に変身できることを意味している。女色に溺れないように人を戒める。後世には、このような話がかなり多く、しかもこれらの話にはなんらかの示唆が含まれている」[260]と述べ、人間が虎に変身するパターンとして扱った。ところが、この話の内容から見ると、男性は美しい女性と交際したが、この交際によるマイナスの影響が一切ない。つまり、この話からは、汪が主張している「男性を戒める」意味があまり感じられないのである。また、この話は南北朝時代に書かれた話であり、汪が言っているような、美しい女性を恐ろしい化け物と結びつけ、男性を戒める話は、実は唐代になってはじめて現れたのである。この点については、第 8 章で詳しく説明する。つまり、上記の話が書かれた南北朝時代において、男性を戒める変身譚はまだ登場していなかった。一方、『異苑』巻 3 におけるこの話の前後の話を見ると、前後の話は虎がさまざまな怪異をなすというような話であるため、この話は、虎が女性に変身して人間の男性と交わることができるということを示す話として収録された可能性が

[258] 馬歡原著 萬明校注『明鈔本瀛涯勝覽校注』、海洋出版社、2005 年、pp. 40-41。現代日本語訳は筆者による。
[259] 劉敬叔撰・範寧點校『異苑　談藪』、古小說叢刊、中華書局、1996 年、p. 16。現代日本語の要約は筆者による。
[260] 汪玢玲（2007）、p. 240 では、「这是说美貌女子可以变为虎，戒人勿贪色。后世这类故事甚多，皆有寓意」と述べている。訳文は筆者による。

高いと考えられる。また、南北朝には、女性に変身した動物が人間の男性と交際・交わって、最後に動物の姿を現し人間と別れるというようなシーンは、動物が人間に変身するパターンの中では頻出していた。そのため、この話を女性に変身した虎が人間と交わる話と理解したほうが妥当ではないかと考えられる。したがって、この話を虎が人間に変身するパターンに分類する。

**変身パターンが 2 つ存在する話について**

抽出した 66 話の中に、虎が人間に変身するパターンと人間が虎に変身するパターンが同時に含まれる話が 2 話存在する。この 2 話を簡単に紹介する。

①晋代に書かれた地理博物誌『博物志』[261]（『太平御覧』巻 888 引『博物志』）の要約は以下のとおりである。

> 楊子江と漢水の流域には、「貙人」という部族があり、この部族の人は虎に変身することができる。虎が人に変身すると、好んで海老茶色の衣服を着ると言われている。足のかかとがなく、5 本指がある者は、虎である[262]。〔5.1.1-1〕〔5.1.2-3〕

上記の話は変身のパターンの特殊な例であり、話の中には、人間が虎に変身する話と虎が人間に変身する話の両方とも存在するため、この話を 2 パターンのどちらにも計上する。

②『太平廣記』巻 430 引『傳奇』「王居貞」[263]の要約は以下のとおりである。

> 王居貞という人が科挙試験に落第し、洛の潁陽に帰ろうとした。京から出て、とある道士と同行した。道士は、一日中食事を一切せず、「咽気術である」と言っていた。彼は毎晩王居貞が眠りについた後、明かりが消えると、布の嚢の中から 1 枚の皮を取り出してかぶって出かけ、夜が明ける前にまた帰ってきた。王居貞はある日、寝たふ

[261] 李昉等撰『太平御覧』〈全四冊〉、中華書局、1995 年、p. 3944。
[262] 現代日本語の要約は筆者による。原文は「其足無踵有五指者皆貙也」と記しており、「貙」について、『太平御覽』巻 172 引『郡國志』の注として、「貙，小虎也。（貙は小さい虎である）」という一文がある。（李昉等撰『太平御覧』〈全四冊〉、中華書局 1995 年、p. 838）また、『太平御覧』巻 908 引『爾雅』の注として、「郭璞曰今貙虎大于虎豹文如貍…（郭璞曰、貙虎は虎・豹より大きい、模様は貍の如く）」（（李昉等撰『太平御覧』〈全四冊〉、中華書局 1995 年、p. 4025）という記述がある。これらの記述によると、貙は虎の一種であると考えられる。
[263] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第九冊、P. 3495。現代日本語の要約は筆者による。

りをして、その嚢を奪って道士に聞いた。道士は、「私は人間ではない。かぶったものは虎皮である。毎晩村に食べ物を求めに行く。虎皮をかぶると、一晩で 500 里[264]の距離が走れる」と、王居貞に告げた。王居貞は長い間、実家に帰ったことがないため、家に帰りたかった。道士に「かぶってもいいか」と聞いて、許可をもらった。王居貞は虎皮をかぶって実家に帰った。夜中のため、王居貞は家に入ることができなかったが、近くにいる豚を一匹捕まえて食べた。食べ終わった後、王居貞は道士のところに帰って虎皮を道士に返した。その後王居貞は実家に戻った。家の人の話によると、王居貞の次男が夜に出かけた時に、虎に食べられたそうだ。それはいつのことかと聞くと、王居貞が虎皮をかぶって帰ってきた日であった。王居貞はその日に豚を食べた後、一日二日腹がいっぱいであって、何も食べなかった。〔5.1.1-14〕〔5.1.2-28〕

この話の中にも、虎が道士に変身する話と王居貞が虎に変身する話という 2 つの話が含まれている。道士は王居貞に、自分が虎だと明確に言ってはいなかったが、自分が人間ではないこと、そして毎晩虎皮をかぶって、食べ物を求めに行くことを告げた。道士は人間ではなく、そして虎皮を持っていることから、この道士はおそらく虎が変身した道士であると推測できる。また、王居貞は虎になったというような記述がないが、実家の外で近くにいた生き物を豚と思って食べた後、次男がその日に虎に食べられたということを家族によって知らされたという流れから、虎になった王居貞は自分の息子を豚と見間違い、捕まえて食べたと推測できる。つまり、この話の中には、虎が虎皮を脱ぐことで道士になった話と王居貞が虎皮をかぶることで虎になった話の、2 つの変身の話が存在する。そのため、前掲の『博物志』の話と同様に、この話を 2 つの変身のパターンのどちらにも数え入れる。

上記の「王居貞」のような、虎が虎皮を脱ぐことで人間に変身する、もしくは人間が虎皮を被ることで虎になるという虎皮による変身が、虎の変身譚の特徴である。この点については、第 8 章で考察を行う。

上述の 2 つの特殊な話が存在するため、本章では、抽出した虎の変身譚 66 話を、68 例と見做す。

話の内容に沿って虎の変身譚を分類した結果、虎が人間に変身するパターンは 22 例、人間が虎に変身するパターンは 43 例、変身の方向が不明な話は 3 例であった。

[264] 「里」は長さの単位である。1 里は 0.5 キロメートルに相当する。

### 5.1.1.2 各時代の虎の変身譚の例数

各時代における虎が人間に変身する、人間が虎に変身するという 2 パターンの例数を以下の表 5.1.1.2 に示す。

表 5.1.1.2　各時代における虎の変身譚の例数

| 時代 | 虎が人間に変身 | 人間が虎に変身 | 不明 | 時代別合計 |
|---|---|---|---|---|
| 漢代 | 0 | 2 | 0 | 2 |
| 晋代 | 1 | 5 | 0 | 6 |
| 南北朝 | 3 | 11 | 0 | 14 |
| 隋代 | 1 | 1 | 1 | 3 |
| 唐代 | 11 | 13 | 2 | 26 |
| 五代 | 1 | 1 | 0 | 2 |
| 宋代 | 3 | 7 | 0 | 10 |
| 明代 | 1 | 2 | 0 | 3 |
| 清代 | 1 | 1 | 0 | 2 |
| パターン別合計 | 22 | 43 | 3 | 68 |

中国において、虎の変身譚はかなり早い時代に現れた。もっとも早い虎の変身譚として、前漢の地理博物志の『括地図』と思想書の『淮南子』に記載された、人間が虎に変身する話が挙げられる。虎が人間に変身するパターンの出現は、それより遅く、晋代である。

合計から見ると、虎の変身譚の第一次ピークは南北朝時代である。唐代になると、虎の変身譚の数が飛躍的に増加した。宋代にも虎の変身譚は多かったが、唐代と南北朝時代ほど多くはなかった。宋代以降、虎の変身譚は減る一方であり、あまり書かれなくなった。

## 5.1.2 虎が人間に変身するパターンについての考察

本節では、虎が人間に変身するパターンを①変身後の性別の割合の変遷、②虎が女性に変身する話の登場と変遷、③虎が人間に変身する目的の変遷、④話の中の主人公と虎の心理的距離の変化という 4 つの角度から考察を行う。

### 5.1.2.1 虎が人間に変身するパターンの変身後の性別の割合の変遷

虎が人間に変身する 22 例では、全体的に男性の割合が多い。以下の表 5.1.2.1 では、変身後の性別の割合を時代順に示す。なお、性別が示されていない場合、もしくは変身後、男女の両方になる場合は、「その他」の例として数える。

表 5.1.2.1 虎が人間に変身するパターン（括弧内は変身譚の例数）

| 時代 | 男性 | 女性 | その他 | 時代別合計 |
|---|---|---|---|---|
| 晋代 | 0%（0） | 0%（0） | 100%（1） | 1 |
| 南北朝 | 67%（2） | 33%（1） | 0%（0） | 3 |
| 隋代 | 0%（0） | 100%（1） | 0%（0） | 1 |
| 唐代 | 73%（8） | 27%（3） | 0%（0） | 11 |
| 五代 | 0%（0） | 100%（1） | 0%（0） | 1 |
| 宋代 | 67%（2） | 0%（0） | 33%（1） | 3 |
| 明代 | 0%（0） | 0%（0） | 100%（1） | 1 |
| 清代 | 0%（0） | 100%（1） | 0%（0） | 1 |
| 合計 | 55%（12） | 32%（7） | 13%（3） | 22 |

表 5.1.2.1 に示したように、虎が男性に変身する例は女性に変身する例より多い。時代的分布から見ると、虎が女性に変身する話は、男性に変身する話と同様に南北朝に現れ、唐代にもっとも多く書かれた。例数については、唐代において、虎が女性に変身する話は、男性に変身する話より少なかった。

虎が男性に変身する傾向が強い原因として、虎の男性的なイメージが強いことが挙げられる。

虎というと、通常、勇猛や力強さ、危険など、男性的なイメージが浮かび上がるだろう。

虎の変身譚が登場する前の春秋時代に、すでに人を虎に喩える用法が存在していた。人を虎に喩える用法においては、虎のイメージはすべて男性的なイメージである。例えば、春秋戦国時代の『文子』では、虎は生まれつきの勇猛さを有すると同じように、賢人も生まれつきの才能を有する[265]とし、虎の勇猛さが強調された。それと同様に、春秋戦国時代

[265] 『太平御覧』巻 402 引『文子』: 虎豹之駒未成，而有食牛之氣。鴻鵠之翼未合，而有四海之心。賢者之生亦然也。（李昉等撰『太平御覧』〈全四冊〉、中華書局、1995 年、p. 1858）。句読は筆者による。

の『春秋左氏傳』では、力強い人が虎に喩えられ、虎が力強い動物であると認識された[266]。

また、漢代においては、始皇帝の凶暴・残忍さおよびその野心を「虎狼心」に喩える用法[267]も現れた。

魏晋南北朝時代では、前代と同じように、虎の力強さ[268]が強調された。上記の春秋時代から魏晋南北朝にかけての虎の比喩用法から、虎のイメージにおいては、力強さや凶暴など、男性的なイメージが主流であり、虎と男性の結びつきが強いということがわかる。

### 5.1.2.2 虎が女性に変身する話の登場と変遷

では、なぜ南北朝時代に、虎が女性に変身する話が登場したのか。

虎が女性に変身する話の誕生は、魏晋南北朝の異類婚姻譚の発達、およびその中の女性に変身した動物が人間の男性と交際・交わるというようなモチーフの発達と関わりがあると考えられる。魏晋南北朝時代に、志怪小説の繁栄とともに、『搜神記』をはじめ、異類婚姻譚が数多く書かれてきた。女性に変身し、人間の男性と交わる動物として、鳥・鹿・狸・狐・鼠・豚・獺[269]などが挙げられる。前述のように、魏晋南北朝において、女性に変身して人間の男性と交際・交わる動物がさまざまな種類の動物にまたがっているため、女性に変身した動物が人間の男性と交際・交わるというモチーフは、当時には、好まれたモチーフであることがわかる。このモチーフが虎に流用されることもありうる。南北朝にはじめて登場した虎が女性に変身する話（5.1.1.1 で挙げた『異苑』巻 3 の「徐桓」の話）は、異類婚姻譚の構造[270]に当てはまる。

---

[266]『春秋左氏傳』「襄公十年」：晉荀偃，士□（亡＋勹、筆者注）請伐偪陽。（中略）狄虎彌建大車之輪而蒙之以甲以為櫓，左執之，右拔戟，以成一隊。孟獻子曰：「詩所謂『有力如虎』者也。」（『春秋左傳集解』（全五冊）、 上海人民出版社、1977 年、第 1 冊、p. 865）。アンダーラインは筆者による。『春秋左氏傳』に引用された「有力如虎」は、『詩経国風』「邶風・簡兮」の「碩人悁悁 公庭萬舞 有力如虎 執轡如組」である。白川静訳注『詩経国風』、東洋文庫 518、平凡社、1990 年、p. 153 の訳は以下のとおりである。「舞人はおおどかに　公庭に萬舞する　虎のような力強さ　手綱さばきのみごとさよ」。

[267]『史記』巻 6「秦始皇本紀」：繚曰：「秦王為人，蜂準，長目，摯鳥膺，豺聲，少恩而虎狼心，居約易出人下，得志亦輕食人。我布衣，然見我常身自下我。誠使秦王得志於天下，天下皆為虜矣。不可與久游。」（司馬遷撰 （索引）司馬貞 （正義）張守節『史記』（全十冊）、中華書局、1959 年、第 1 冊、p. 230）。アンダーラインは筆者による。

[268]『太平御覧』巻 386 引王隱『晉書』：王隱，晉書曰，吳彥宇士則，吳郡人有文武才幹，長八尺餘，膂力如虎。（李昉等撰『太平御覧』〈全四冊〉、中華書局、1995 年、p. 1784）。アンダーライン・句読は筆者による。

[269] 富永（1978）、pp. 3-4 を参照。鳥：『異苑』巻 8 、『幽明錄』、『搜神後記』巻 9 。鹿：『搜神後記』巻 9。狸：『異苑』巻 8、『搜神記』巻 18、『述異記。狐：『玄中記』、『搜神記』巻 18。鼠：『幽明錄』。豚：『搜神記』巻 18。犬：『異苑』巻 8、『搜神後記』巻 7。獺：『異苑』巻 8、『幽明錄』、『搜神記』巻 18。

[270] 異類婚姻譚の構造について、富永（1978）は「異類婚姻譚の＜異類→女（男）→結ばれる→破局＞という単純化されたパターン…」と述べている。アンダーラインは筆者による。富永氏の挙げた例から見ると、「結ばれる」は必ずしも婚姻関係を結ぶとは限らず、「一夜を共にする」の場合も含まれている。

隋代・唐代に入ると、女性に変身した虎が人間と結婚する話が登場した。

隋代の『太平廣記』巻 426 引『五行記』「袁雙」[271]の話の要約は以下のとおりである。

袁雙という貧しい人がいて、ある日の日暮れに、家へ帰る途中で、歳十五、六の美しい女に出逢った。直ちに妻とし、家に連れ帰った。五、六年後、家は豊かになって、2 人の子供も生まれた。やがて村の中で新たに死んだ者があって、葬儀を行い墓に埋めた。その夜、袁雙の妻は家を出て墓所へ行った。衣を脱ぎ、かんざしをはずして木の枝に掛け、虎に変身した。虎は人の屍骸を食べた。食べ終わった後、人の姿に戻り、家へ帰ったが、それを人に見られていた。目撃した人はひそかに袁雙に言った。「あなたの妻は人ではない。この目で見たから確かだ。このままでは、あなたはきっと害に遭う」。袁雙は信じなかったが、その後、また死んだ者があって、女性はまた死骸を食いに行った。ひそかに尾行した袁雙はすべてを目撃した。その後、妻は県境を越えた地で死人を食べるようになった。〔5.1.1-5〕

この話において、袁雙は妻が虎であることを知ったが、妻と別れることがなかった。

女性に変身した虎と人間の婚姻譚について、似たような話として、唐代の『太平廣記』巻 433 引『集異記』「崔韜」[272]が挙げられる。話の要約は以下のとおりである。

虎が人間と通婚するために虎皮を脱いで女性に変身し、人間の男性と結婚して、子供を産んだ。その後、男と出会ったところを通りかかった時に、女性はもとの虎皮を着て、虎の姿に戻って、主人と子供を食って立ち去った。〔5.1.1-9〕

この話では、女性に変身した虎が人間の男性と結婚して子供を産んだというところまでは「袁雙」の話に似ている。しかしながら、最後に虎の姿に戻った女性が主人と子供を食って立ち去ったところから、この話においては、虎の人食いのイメージが強く感じ取れる。なお、この話において、虎が皮の脱着によって虎と人の姿を切り替える部分は、5.1.1.1 で挙げた「王居貞」の話と似ており、この話も「虎皮」の脱着による変身の話である。

[271] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第九冊、p.3467。現代日本語の要約は筆者による。
[272] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第九冊、p.3514-3515。

『太平廣記』巻 429 引『河東記』「申屠澄」[273]の話も虎が女性に変身して人間と結婚する話である。話の要約は以下のとおりである。

虎が人間と通婚するために虎皮を脱ぎ、女性に変身した。人間と結婚して子供を産んだ後、山林を恋しく思った。彼女は虎皮を着て、虎の姿に戻って山林に帰った。〔5.1.1-10〕

この話では、①女性に変身した虎が人間の男性と結婚して子供を産んだ、②虎が皮の脱着によって虎と人の姿を切り替えるという部分は「崔韜」の話に似ている。しかしながら、この話においては、最後に虎は元の姿に戻って主人と別れたが、人食いはしていない。

『太平廣記』巻 427 引『原化記』「天寶選人」[274]の話においては、虎は人間と通婚しようとしたため女性に変身したのではなく、女性の姿で熟睡中に、脱いでおいた虎皮が人間の男に取られてしまったため、男と結婚せざるをえなくなった〔5.1.1-11〕。故に、この話の中では、虎が虎皮を脱いだため女性に変身し、人間の男性と結婚して、最後に昔の虎皮を着て虎の姿に戻り、人食いせずに立ち去ったところは、前掲の「申屠澄」と似ている。ただ、この話の中では、虎が女性に変身した動機については、はっきりと書かれていない。

上記の隋代・唐代に書かれた一連の話から見ると、隋代・唐代においては、虎が女性に変身する話はすべて人間と通婚する話であることがわかる。また、「虎が皮を脱いで女性に変身する→人間の男性と婚姻を結ぶ→昔の虎皮を着ることで虎の姿に戻る→男性と離れる」というような話の流れは、女性に変身した虎と人間の婚姻譚の中に定着している。このような状況から、魏晋南北朝時代に盛んになった異類婚姻譚のモチーフは、隋代・唐代になると、虎の変身譚に流用されたことが推測できる。

ところが、虎が女性に変身する物語がもっとも多く書かれた唐代においても、虎が女性に変身する話の例数は、全体の 3 分の 1 に達していない。五代およびそれ以降、虎が女性に変身する話はさらに少なくなり、通婚のモチーフも見られなくなった。5.2.2.1 で述べたように、虎には、従来の男性的なイメージが強かったため、魏晋南北朝時代の異類婚姻譚のモチーフの影響力は限られていると考えられる。

五代に、女性に変身した虎が人を訓戒する話が 1 例存在する。この話は、虎が女性に変

[273] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第九冊、p. 3486-3487。
[274] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第九冊、p. 3479。

身する話の中では、異質な存在であると考えられる。話の要約は、以下のとおりである。

（『太平廣記』巻 433 引『錄異記』「姨虎」[275]）

「十八姨」と自称する 50 代の女性がよく民家を訪ね、飲食もせず、人に「よい行いをし、神の道理に逆らわぬ。日常生活の中で仲睦まじく、孝行を重視せよ」と教誨した。みんなは、この女性が虎であることを知っていたため、女性を怖がりながら敬った。〔5.1.1-17〕

虎は人を訓戒し、そして人々は虎を怖がりながら敬ったことから、この話においては、虎が人間より上の存在だと描かれていることがわかる。では、なぜ虎がこのような女性と結びつけられたのだろうか。

この話の登場は、①虎が風に関連していたこと、②「風（封）十八姨」という風の女神が存在することという 2 点に関わりがあると考えられる。

『易・乾』「文言」において、虎が風に関連していることに言及した内容は以下のとおりである。

声が同じであるものは互いに応じ、気が同じであるものは互いに求める。水は低湿のところに流れ、火は乾燥しているところに傾く。雲は龍に従い、風は虎に従う。聖人が作って、万物が仰ぐ。天にあるべきものは上に親しみ、地にあるべき者は下に親しむ。すなわちそれぞれはその類に従う。[276]

この文は、同類のものが互いに感応するという原理について述べている。風と虎の間に関連性があり、同類、もしくは性質が近いということを示している。

唐代においては、風の神を「封十八姨」と称する。銭（1979）は「封十八姨」の名称の由来について、「「封」と「風」の字音が同じであり、耳に入るとわかる；「十八姨」は、根源として『易・説卦』「巽為木、為風、為長女」に依拠する。唐の国姓「李」を予言する言

[275] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第九冊、P. 3514。現代日本語の要約は筆者による。

[276] 「同聲相應，同氣相求。水流濕，火就燥，雲從龍，風從虎，聖人作而萬物覩。本乎天者親上，本乎地者親下，則各從其類也。」（周振甫譯注『周易譯注』、中國古典名著譯註叢書、中華書局、1991 年、p. 5）アンダーラインは筆者による。現代日本語訳は、周振甫譯注『周易譯注』、中國古典名著譯註叢書、中華書局、1991 年、p. 6 を参考にした。

葉は「十八子」であり、「木」を分けると「十八」になり、「長女」を「姨」と見做した。[277]」と解釈した。また、銭は虎と「十八姨」の関係について、「虎を「十八姨」と称することができる理由は、『易・乾』の「風従虎」があるため、虎は風の名称に従うからだ。」[278]と指摘している。

上記をまとめると、虎が風と同類であることと、風の神が女性の「封十八姨」であることにより、虎は風の女神である「封十八姨」と結びつけられた。また、風の女神「封（風）十八姨」という言い方は唐代から始まったため、上記の虎が「十八姨」と自称した女性に変身する話は、唐代以降の五代になってからはじめて登場した。

上記の虎が女性に変身する一連の話に関する分析をまとめると、以下の結論が得られる。

①南北朝から異類婚姻譚のモチーフの影響で、虎が女性に変身する話が現れた。その内容のほとんどは、虎が女性に変身し、男性と通婚するものである。

②五代に登場した、虎が女性に変身する話の中では、虎が変身した女性は人間より上の存在である。この話の登場は、虎が古来風と関連していることと唐代に「風（封）十八姨」という風の女神が存在したことと関わりがある。

③虎は従来の男性的なイメージが強いため、上記の 2 つの文化的背景が虎の変身譚に与えた影響はいずれも一定程度にとどまった。

### 5.1.2.3 虎が人間に変身する目的の変遷

虎が人間に変身するパターンにおいては、虎が何かの目的、動機をもって変身する話が多い。以下では、各時代に新しく登場した虎が人間に変身する目的、および前代から継承したものについて考察を行う。

虎が人に変身するパターンのうちもっとも早く出現したものは、晋代の『博物志』に記載された「貙虎が人に変身することができる」という話である。話の中で、虎が人間に変身できることは、楊子江と漢水の流域の特別な風土として捉えられ、変身の目的については言及されていない。このような変身の目的が示されていない話は、変身の目的が不明な話とする。なお、虎が人間に変身する 22 例のうち、変身の目的が不明な例は 7 例ある。

---

[277] 銭鐘書『管錐編』第 2 冊、中華書局、1979 年、p.813 は、「“封”谐“风”音，入耳心通；“十八姨”者，隐本《易・说卦》：“巽为木、为风、为长女”，唐国姓“李”之谶曰“十八子”，“木”析为“十八”，“长女”视作“姨”。」と述べている。現代日本語訳は筆者による。

[278] 銭鐘書『管錐編』第 2 冊、中華書局、1979 年、p.813 は「虎可称“十八姨”者，《易・乾》：“风从虎”。故虎亦从风称」と述べている。現代日本語訳は筆者による。

人間に変身した虎が人間と婚姻関係を結ぶ、もしくは人間と交わるというような話は、原則的に「男女の交わり」という変身の目的に分類する。ただし、話の中で、虎の変身が交わるための変身ではないことが明示される場合は、変身の目的を「男女の交わり」と判断しない。例えば、『太平廣記』巻 427 引『原化記』「天寶選人」の話においては、女性に変身した虎は、虎皮を男性に取られ、仕方なく男性と結婚したため、この話における虎の変身の目的を「不明」に分類する。前述の判断基準にもとづいて、虎が人間に変身する 22 例のうち、虎が「男女の交わり」を目的とする人間に変身するものは 6 例ある。

虎が人に助けを求めるために人間に変身する場合は「人の助けを求める」という変身の目的に分類する。このような話は 4 例ある。例えば、『搜神後記』巻 9（96）「虎卜吉」[279]は、虎が人間に占いを頼むために人間に変身した話であるため、「人の助けを求める」に分類する。

そのほかにも、「人間を助ける」ために人に変身する話（『太平御覧』巻 165 引『敦煌實錄』[280]）、「人間と飲食する」ために人に変身する話（『太平廣記』巻 434 引『傳奇』「甯茵」[281]）、「人を騙し食おうとする」ために人に変身する話（『太平廣記』巻 429 引『傳奇』「馬拯」[282]）、「人を教誨する」ために人に変身する話（『太平廣記』巻 433 引『錄異記』「姨虎」）、「人の世界に紛れこむ」ために人に変身する話（『瀛涯勝覽』「滿剌加國」）がそれぞれ 1 例ある。

以下の表 5.1.2.3 では、各時代における虎が人に変身する目的を男女別に示す。

**表 5.1.2.3　虎が人に変身する目的**

| 目的 / 時代 | 男女の交わり | 人の助けを求める | 人間を助ける | 人間と飲食する | 人を騙し食おうとする | 人を教誨する | 人の世界に紛れ込む | 不明 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| **晋代** | | | | | | | | その他 1 | 1 |
| **南北朝** | 女 1 | 男 1 | 男 1 | | | | | | 3 |
| **隋代** | 女 1 | | | | | | | | 1 |

[279] 陶潛撰・汪紹楹校注『搜神後記』、古小說叢刊、中華書局、1981 年、p. 57。
[280] 李昉等撰『太平御覧』〈全四冊〉、中華書局、1995 年、p. 804。
[281] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第九冊、p. 3525-3527。
[282] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第九冊、p. 3492-3494。

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| **唐代** | 男 2<br>女 2 | 男 1 | | 男 1 | 男 1 | | | 男 3<br>女 1 | 11 |
| **五代** | | | | | | 女 1 | | | 1 |
| **宋代** | | 男 1<br>その他 1 | | | | | | 男 1 | 3 |
| **明代** | | | | | | | 男 1 | | 1 |
| **清代** | | | | | | | | 女 1 | 1 |
| **目的別の合計** | 6 | 4 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 7 | 22 |

表 5.1.2.3 の目的別の合計から見ると、虎が人に変身する目的では、量的には「男女の交わり」がもっとも多いが、変身の目的の種類は多岐にわたる。

性別の分布から見ると、男女の交わりを目的とする変身において、虎の変身後の性別は特に一方に集中する傾向がない。ただし、人の助けを求める目的で人に変身する場合は、ほとんど男性に変身するというような特徴が見られる。

以下では、各時代における新たに登場した変身の目的について説明する。

南北朝時代に書かれた『搜神後記』巻 9（96）「虎卜吉」[283]では、虎が人間に占いを頼むために人間に変身したという描写から、変身の目的は人間の助けを求めることであることがわかる。〔5.1.1-2〕

南北朝に書かれた『太平御覧』巻 165 引『敦煌實錄』[284]の話は、虎が人に変身し、人間に声をかけ、遷都の目的地を教えた話である。この話においては、虎は助けを求めるのではなく、人間を助けるために変身したのである。〔5.1.1-3〕

また、5.1.2.2 で提示した虎が女性に変身して男性を誘う話も南北朝時代に登場した。虎が女性に変身する一連の話の変遷について、5.1.2.2 で考察したため、ここでは説明を省略する。

虎が人間に変身する主たる目的は、「男女の交わり」と「人の助けを求める」である。上記のように、南北朝時代の虎の変身譚おいて、虎は人間に変身して、人間と交わったり、人間を助けたり、人間に助けを求めたりした。虎が人間に変身する主たる目的のパターン

[283] 現代日本語の要約は筆者による。
[284] 現代日本語の要約は筆者による。

は、南北朝時代に登場したことがわかる。

5.1.2.2 で述べたように、唐代に、虎が女性に変身して人間と通婚する話が登場した。それ以外に、虎が男性に変身して、人間と通婚する話もこの時代に出現した。『太平廣記』巻 427 引『廣異記』「虎婦」[285]の話の要約は以下のとおりである。

男性に変身した虎は人間の女性と結婚し、山の中に住んでいた。2 年を共に過ごしたが、妻は夫が虎であることを知らなかった。その後、突然、2 人の客がお酒を持ってきた。夫は家に来た客と飲酒し、妻に見ないように言い聞かせた。しばらくすると、夫と来客は酔っ払って寝てしまった。妻は見に行くと、みんな虎であった。妻は驚いたが、言う勇気がなかった。長い時間を経て、虎はまた人の姿に戻った。その後、妻は、実家に帰りたいと言った。十日後、妻は夫と一緒に実家に帰る際に、夫に「なぜあなたの後から虎の尻尾が出ているの」という冗談を言った。夫は恥ずかしくなり、その場から去って二度と帰ってこなかった。〔5.1.1-6〕

虎が男性に変身して人間の女性と夫婦として過ごすという話として、『太平廣記』巻 431 引『瀟湘錄』の「趙倜」[286]も挙げられる。話の要約は以下のとおりである。

趙倜という男性が出かけている間、虎は彼と偽って、彼の家に帰った。そして彼の妻とともに百日あまりを過ごした。趙倜が帰ってきたためこのことがばれてしまい、（この虎は）元の姿に戻って逃げ去った。〔5.1.1-15〕

この話においては、女性の主人に変身して既存の婚姻関係を利用して女性と交わっている。

唐代の話において虎が人に変身する目的は、男女の交わり以外に、種類が多岐にわたる。『太平廣記』巻 434 引『傳奇』「甯茵」の中では、人間に変身した虎と牛が甯茵を訪ね、一緒に飲食し、雑談をした。この話において、虎の変身の目的は人間と飲酒、雑談することである。〔5.1.1-12〕

『太平廣記』巻 430 引『傳奇』「馬拯」においては、虎が老いた僧に変身して、人間を騙

[285] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第九冊、P.3475。現代日本語の要約は筆者による。
[286] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第九冊、P.3501。

して食おうとしたが、人によって殺された。〔5.1.1-13〕

『太平廣記』巻 431 引『瀟湘錄』「周義」[287]の話の中では、虎は周義に助けを求めるために若い男に変身し、周義によって助けられた。百日あまりが経ち、周義に聞かれたため、若い男は自分が虎であることを告げ、虎の姿に戻って走り去った。数ヶ月後、この男は夜に周義の家に入り、金の枕を遺し、これを以って恩返しすると告げ、また虎の姿に戻って立ち去った。この話は、虎の恩返しの話でもある。〔5.1.1-16〕

上記のように、唐代に書かれた虎から人間への変身譚においては、複数の変身の目的が登場した。そのうち、男女の交わりを目的とする変身がもっとも多い。また、南北朝に登場した人間の助けを求めるパターンが受け継がれ、人間に助けられた虎が恩返しする話も登場した。

宋代になると、人間の助けを求めるための変身のみが受け継がれた。唐代と同じように、人間に助けられた虎が恩返しをする話がある。

『茅亭客話』「虎化為僧」[288]の要約は以下のとおりである。

罠にかかった虎が、脱出するために、老いた僧侶に変身して村の人に助けを求めた。罠から解放された後、直ちに虎になって逃げた。〔5.1.1-18〕

この話は以下の一文で締めくくられている。「獣ではあるが、人の言葉で助けを求め、窮境から脱することができたことから、獣の知恵が見える」。この記述から、この話においては、虎が人間に助けを求めるために変身したことがわかる。

宋代における虎が人間に変身する話の中に、人間に助けを求める話はもう 1 例ある。『湖海新聞夷堅續志』「虎謝老娘」[289]の話の中においては、人間の産婆に助けを求めるために虎が人間に変身した。話の要約は以下のとおりである。

ある日の夜に、2 人の輿を担ぐ力者が産婆の家に来て、門を叩いた。そして、赤子

[287] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第九冊、P.3502。
[288] 東京大学東洋文化研究所所蔵漢籍善本全文影像資料庫、『茅亭客話』一巻（舊小説所収）、舊小説丁集宋、p.93、参照 URL：http://shanben.ioc.u-tokyo.ac.jp/main_p?nu=B2813100&order=rn_no&no=00416&im=0100050&size=small&pg=4 現代日本語の要約は筆者による。
[289] 元好問撰・常振國點校　無名氏撰・金心點校『續夷堅志 湖海新聞夷堅續志』、古體小說叢刊、中華書局、2006 年、pp.252。

を取り上げることを産婆に頼んだ。産婆は輿に乗って、立派な邸宅に到着した。そこに産婦がいて、産婆は産婦を助けて 1 人の男の子を取り上げた。産婆が家に帰ってきたその夜に、虎の鳴き声を聞き、次の日にドアを開けると、豚肉と牛肉があった。考えると、これは虎の恩返しである。〔5.1.1-20〕

この話の中では、産婆を迎えに来た 2 人の輿を担ぐ力者、および産婦はともに人間に変身した虎だと考えられる。

明代における虎が人間に変身する話は 1 例しかなく、「人間に変身して市場に入って、人にまぎれて行く虎がいる。」というような記述となる。虎が人間に変身した後、人と交わったり人の助けを求めたりする行為がなく、人が多いところである市場に入って、そして人にまぎれて行くのである。このような記述から、おそらく虎が人間に変身する目的は人間の世界に紛れこむことであると推測できる。

以上をまとめると、虎が人間に変身する主たる変身の目的は、「男女の交わり」と「人の助けを求める」である。この 2 つの変身の目的は南北朝時代に登場した。唐代になると、複数の変身の目的が登場した。そのうち、男女の交わりを目的とする変身がもっとも多い。また、人に助けられた虎が恩返しするという話も登場した。唐代に新たに出現した変身の目的は、その後受け継がれておらず、宋代の変身譚においては、人の助けを求めるという目的のみが受け継がれた。明代に、人間の世界に紛れ込むという目的が登場した。

#### 5.1.2.4 話の中の主人公と虎の心理的距離の変化

本節では、虎の変身譚において、虎と人間の付き合いの度合いを尺度として、虎が人間に変身するパターンの中に見られる人間と虎の心理的距離の変化について考察する。

晋代に初登場した地理博物誌に記された虎の変身譚は、楊子江と漢水の流域の特別な風土として記されていた。その記述はごく簡潔であり、人間に変身した虎は、人間との接触などがない。

南北朝になると、虎と人間の言葉のやりとりが現れた。南北朝に登場した虎が人間に変身する話は 3 例である。虎が人間に遷都の目的地を教えた話においては、人間に変身した虎が李暠に呼びかけた。虎が人間に占いを頼んだ話においては、虎は人間に話しかけて占いを頼んだ。女性に変身した虎の話においては、虎は人間の男性と話し合って、意気投合した。これらの話から、南北朝時代には人間と虎の間の心理的距離が晋代より近かったこ

とがわかる。しかしながら、虎に呼びかけられた李暠は、ただちに弓を構えて、人の姿に変身した虎を射ようとした。また、虎と人間は意気投合したが、婚姻には至っていない。これらのことから、人間と虎の間の心理的距離がまだ遠いことがわかる。

以上をまとめると、南北朝の虎が人間に変身する話においては、虎は言葉で人間とやりとりするようになった。しかしながら、人間に変身した虎はまだ人間から警戒されており、婚姻の話が存在しないことから、南北朝時代に人間と虎の間の心理的距離が晋代よりは縮まったが、まだ遠いことがわかる。

隋代・唐代になると、人間と虎が結婚する話が登場し、人間との心理的距離が縮んだように見える。例えば、人間と虎が結婚して長い間一緒に生活する話や、人間と虎の間に子供ができる話が現れた。また、婚姻譚以外の話においても、人間に変身した虎と人間との言葉のやりとりが多く描写され、虎であることを知っても怖くない人が登場した。これらの話から、人間と虎の間の心理的距離が魏晋南北朝より縮んだことがわかる。

宋代における虎が人間に変身する話は、主に上代からの継承であり、人間と虎の間の心理的距離が維持されている。唐代と比べて異なる点は、宋代の虎の変身譚においては、虎と人間との間に信頼関係を示す 1 話が現れたことである。それは、『續夷堅志』巻四「荊南虎」[290]の話である。話の要約は以下のとおりである。

荊南というところは、虎が多く、昼でも人を襲う。ある日、張四という人の家に一匹の虎が入った。張四はただちに家屋の梁の上に登った。虎が張四を見つけず、虎皮を脱いで、1 人の男性に変身した。男性は、「私は天符[291]にしたがい、あなたを捕まえる」と言って、家の中と外を探した。張四は男性が家の中にいないうちに、ひそかに梁からおりて、男性の虎皮を取って、また梁の上に登った。男性が帰って来て、自分の虎皮がなくなったことに気づいた。男性は「私は天符に従い、名簿に書かれた 17 人を食う。今 16 人を食った、残ったのはあなただけだ。私の皮を返せば、名簿からあなたの名前を消す。」と言った。張四は、「虎皮を返すと、直ちにあなたに食べられる。これはいかにすべきか」と言った。男性は、「私は異類ではあるが、約束はちゃんと守る」と言った。男性は張四を名簿から消した。張四は虎皮を返した。男性は虎

[290] 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第四冊、中華書局、1981 年、pp. 1586-1587。
[291] 原文では、「吾奉天符取汝（私は天符に従ってあなたを捕らえる）」と記している。天符は天の命令を指すと思われる。

皮を着て、虎の姿に戻って去った。〔5.1.1-19〕

この話の中では、張四は自分が虎皮を返すと、直ちに虎に食べられることを心配した。それに対し、虎は自分が異類ではあるが、約束をちゃんと守るということを示した。このような記述により、人間と虎の間の信頼関係が示されている。宋代においても、人間と虎の間の心理的距離は近いと言えよう。

上記をまとめると、魏晋南北朝以降、変身譚の中では、虎と人間の間の距離は近づいてくる傾向が見られる。

### 5.1.3 人間が虎に変身するパターンについての考察

人を虎に喩える記載は春秋時代まで遡れる[292]が、人間が虎に変身する話の出現はそれより下った漢代である。

人間が虎に変身する話は、漢代においては記述が簡潔であったが、南北朝になると、志怪小説の隆盛につれ、話の内容が豊富になる傾向が見られる。具体的には、変身の理由についての言及がしばしば現れることと、一度虎に変身した人間がまた人の姿に戻るというような話の登場が挙げられる。後者の場合は、虎が人に戻る方法についてしばしば言及される。

そこで、本節では、人間が虎に変身するパターンを①変身前の性別の割合の変遷、②人間が虎に変身する理由の変遷、③虎になった人間がまた人の姿に戻る方法という 3 つの角度から考察する。

#### 5.1.3.1 人間が虎に変身するパターンの変身前の性別の割合の変遷

人間が虎に変身する 43 例を、変身前の性別で分類すると、全体的に男性の割合が圧倒的に多い。以下の表 5.1.3.1 では、変身前の性別の割合を時代順に示す。なお、話の内容から性別が判断できない場合は、「その他」に数え入れる。

[292] 『太平御覧』巻 402 引『文子』: 虎豹之駒未成而有食牛之氣鴻鵠之翼未合而有四海之心賢者之生亦然也。(李昉等撰『太平御覧』〈全四冊〉、中華書局、1995 年、p. 1858)。アンダーラインは筆者による。

表 5.1.3.1 人間が虎に変身するパターン（括弧内は変身譚の例数）

| 時代 | 男性 | 女性 | その他 | 時代別合計 |
|---|---|---|---|---|
| 漢代 | 50%（ 1） | 0%（ 0） | 50%（ 1） | 2 |
| 晋代 | 60%（ 3） | 0%（ 0） | 40%（ 2） | 5 |
| 南北朝 | 73%（ 8） | 9%（ 1） | 18%（ 2） | 11 |
| 隋代 | 0%（ 0） | 100%（ 1） | 0%（ 0） | 1 |
| 唐代 | 100%（13） | 0%（ 0） | 0%（ 0） | 13 |
| 五代 | 0%（ 0） | 100%（ 1） | 0%（ 0） | 1 |
| 宋代 | 43%（ 3） | 43%（ 3） | 14%（ 1） | 7 |
| 明代 | 100%（ 2） | 0%（ 0） | 0%（ 0） | 2 |
| 清代 | 0%（ 0） | 0%（ 0） | 100%（ 1） | 1 |
| 合計 | 70%（30） | 14%（ 6） | 16%（ 7） | 43 |

表 5.1.3.1 に示したように、人間が虎に変身するパターンにおいては、男性が虎に変身する話がほとんどである。男性が虎に変身するパターンの初登場はかなり早く、漢代である。男性が虎に変身するパターンは、割合から見ると、もっとも多く書かれた時代が唐代・明代である。ただ、明代の人間が虎に変身する話は 2 例しかないため、割合および総数から見ると、もっとも多く書かれた時代は唐代である。

女性が虎に変身する話の初出は男性の話より遅く、南北朝に現れた。その後もそれほど書かれなかった。また、虎が女性に変身する話は、割合から見ると、もっとも多く書かれたのは宋代である。

5.1.2.1 で述べたように、虎は古くから力強い・勇猛などのような男性的なイメージを持ち、男性との結びつきが強かった。人間が虎に変身するパターンにおいて、男性が虎に変身するものが圧倒的に多い原因は、おそらく虎は古来、男性的なイメージを持っているからだと考えられる。また、虎が人間に変身するパターンと比べ、人間が虎に変身するパターンのほうが、男性の割合が高い。これは、人間が虎に変身するパターンには女性に変身した動物が人間の男性と交際･交わるというようなモチーフが織り込まれ難く、さらに、人を虎に喩える用法が古くから存在していたことと関係があると考えられる。

### 5.1.3.2 人間が虎に変身する理由の変遷

人間が虎に変身するパターンの初登場は、漢代に書かれた『太平御覧』巻 892 引『括地圖』[293]である。この話の中では、人が虎に変身できることを、「越俚」という地域の特別な風土というように解釈したため、変身の理由を「風土」とする（以下、風土)。

「転病」や「狂病」など病気にかかって虎になった話の変身の理由を「病気」とする（以下、病気)。

仏教的な宿罪（前世の罪）や罪・業により虎に変身した場合は、変身の理由を「罪」とする（以下、罪)。

廟神・社公（土地神）などの神に罰せられ、あるいは指示されることよって虎に変身した話は、変身の理由を「神罰」とする（以下、神罰)。「罪」や「業」による変身には、仏教の影響が見られる。それに対して、神罰による変身には、道教あるいは民間信仰の影響が見られる。

人間が虎と同じような嗜好を持っていることや、虎の絵が好きで虎になった話は、変身の理由を「趣味・嗜好」とする（以下、趣味・嗜好)。

虎に変身する法術を知り、法術で虎に変身した話は、変身の理由を「法術」とする（以下、法術)。

変身の理由として出現回数が 1 回限りのものは、後代への影響が見られないため、すべて「その他」に入れる（以下、その他)。このような話は 4 例ある。それぞれ、①牛肉を食べたことによって虎になった話（『太平廣記』巻 426 引『齊諧記』「牧牛兒」[294])、②倀鬼（チョウキ）[295]の仕業によって虎になった話（『太平廣記』巻 431 引『廣異記』「荊州人」[296])、③死後精が虎になった話（『吳地記』[297])、④嫉妬で虎になった話（『夷堅志』補巻第六「葉司法妻」[298]）である。

突然虎になって、その変身の理由が不明な話は「不明」入れる（以下、不明)。このような話は 8 例ある。この 8 例はそれぞれ

---

[293] 李昉等撰『太平御覧』<全四冊>、中華書局出版、1995 年、p. 3960。
[294] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第九冊、P. 3468。
[295] 倀鬼:トラに食われた人の霊魂はトラの配下となって使役される、これを「倀鬼（チョウキ)」と称した。
[296] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第九冊、P. 3499-3500。
[297]『吳地記』では、「吳越春秋云」とし、この話は『吳越春秋』から引用したものであると述べているが、『吳越春秋』にこの話はない。(陸廣微撰『吳地記』、江蘇地方文獻叢書、江蘇古籍出版社、1999 年、p. 62。)
[298] 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第四冊、中華書局、1981 年、pp. 1608。

『水經注』巻 37「葉榆河」引『交州記』の役人が突然虎になった話[299]、〔5.1.2-5〕

『異苑』巻 8 の小役人が突然三足の虎に変身した話[300]、〔5.1.2-15〕

『太平廣記』巻 426 引『述異記』「封邵」の郡の長官が突然虎になって人間を食った話[301]、〔5.1.2-16〕

『太平廣記』巻 426 引『五行記』「黃乾」の黄乾の妹が廟を通った時に草むらに入って虎になった話[302]、〔5.1.2-19〕

『太平廣記』巻 429 引『續玄怪錄』「張逢」の張逢が野原で一睡して虎に変身した話[303]、〔5.1.2-26〕

『太平廣記』巻 430 引『聞奇錄』「張昇」の章という人が、山に入って虎になった話[304]、〔5.1.2-32〕

『茅亭客話』「葭萌二客」の任という小役人と妻が虎に変身して人を食おうとした話[305]、〔5.1.2-35〕

『七修類稿』巻 50「人化虎」の王三という人が夜に虎に変身した話[306]〔5.1.2-37〕である。

人間が虎に変身する理由は多岐にわたる。以下の表 5.1.3.2 では、変身の理由の初出と後代への影響を把握するために、これらの変身の理由を時代順に示す。

**表 5.1.3.2　人間が虎に変身する理由の変遷（時代順）**

| 理由 / 時代 | 風土 | 病気 | 罪 | 神罰 | 趣味・嗜好 | 法術 | 自ら虎皮を着る | その他 | 不明 | 時代別合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| **漢代** | その他 1 | 男 1 | | | | | | | | 2 |
| **晋代** | その他 2<br>男 1 | | | | | 男 1 | | | 男 1 | 5 |

[299] 酈道元原著・陳橋驛 葉光庭 葉揚譯註『水經注全譯』中國歷代名著全譯叢書、貴州人民出版社、1996 年、p.1265。
[300] 劉敬叔撰　陽松玠撰・範寧點校『異苑　談藪』、古小說叢刊、中華書局、1996 年、p.83。
[301] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第九冊、P.3466。
[302] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第九冊、P.3470。
[303] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第九冊、P.3490-3491。
[304] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第九冊、P.3494。
[305] 東京大学東洋文化研究所所蔵漢籍善本全文影像資料庫、『茅亭客話』一巻（舊小説所収）、舊小説丁集宋、p.92-93、参照 URL:http://shanben.ioc.u-tokyo.ac.jp/main_p?nu=B2813100&order=rn_no&no=00416&im=0100050&size=small&pg=4
[306] 郎瑛著『七修類稿』、歷代筆記叢刊、上海書店出版社、2001 年、p.534

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| **南北朝** | | 男 1 | 男 1<br>女 1 | 男 3<br>その他 1 | | 男 1 | | その他 1 | 男 2 | 11 |
| **隋代** | | | | | | | | | 女 1 | 1 |
| **唐代** | | 男 1 | | 男 5 | 男 2 | | 男 1 | 男 2 | 男 2 | |
| **五代** | | | 女 1 | | | | | | | 1 |
| **宋代** | | 男 1<br>女 1 | | 女 1 | 男 1 | | | 女 1 | 男 1<br>その他 1 | 7 |
| **明代** | | | | | | | 男 1 | | 男 1 | 2 |
| **清代** | | | その他 1 | | | | | | | 1 |
| **パターン別合計** | 4 | 5 | 4 | 10 | 3 | 2 | 2 | 4 | 9 | 43 |

表 5.1.3.2 に示したように、「風土」と「病気」による変身の出現はもっとも早く、漢代である。晋代になると、「風土」による変身が受け継がれ、「法術」による変身が新たに出現した。

まず、「風土」による変身について考察する。「風土」の出現は、昔の漢民族の異民族に対する無知や恐怖感と関わりがある。漢代に初登場した変身譚は、「越俚」の地域の特別な風土として記されている。晋代の「風土」による変身は、楊子江と漢水の流域の特別な風土として記されている。「越俚」および楊子江と漢水の流域の人は、当時の中華の人々にとって、南方の異民族である。富永(1978)は、この話および晋代の「風土」による変身の話を挙げ、「化虎の幻想は、中国人と文化を異にする異民族に対しても二重写しされる[307]」と指摘している。岡田（2001）は、晋代の「風土」による変身の話は、南方の異民族と関わっている話であると指摘し、さらに「生活習慣を全く異にし、呪術的世界に閉ざされて生きる異民族は、中華の人々にとって蔑視と同時に恐怖の対象でもあった」[308]と述べている。ただ、南北朝以降にこの変身の理由による変身の話は書かれなくなった。これは、国の開発によって、異民族に対する無知と恐怖感が弱まったことと関わりがあると考えられる。漢代と晋代において、国の政治・経済・文化の中心は黄河流域にあり、「越俚」および楊子江と漢水の流域は当時の都の文人にとって、遠くて未知の地域であった。晋代の末期頃に、

[307] 富永（1978）、p. 9。
[308] 岡田（2001）、p. 89。

北の人が南へ遷移しはじめ、南北朝になると、長江以南の開発が一挙に進み、この地域に対する知識も増えた。隋、唐代になると、国の統一および異民族間の交流が盛んになった。このように、南北朝以降、異民族に対する無知と恐怖感が弱まり、虎の変身譚の中においては、「風土」は他の変身の理由に取って代わられた。

次に、「病気」による変身について考察する。漢代に著された『淮南子』巻 2「俶真」[309]においては、牛哀という人が「転病」で虎に変身し、兄を攻撃して殺した話がある。話の要約は以下のとおりである。

昔、牛哀という人が転病にかかった。七日間経って虎になった。彼の兄はドアを閉めて様子をじっとうかがった。すると、虎が彼を捕まえて、殺した。〔5.1.2-2〕

「転病」について、漢代の許慎は、『淮南子』の注で「転病は、変化の病気である。楊子江と淮水の間に、変化の病気が存在する。虎に化する。これは、中原の狂病に似ている病気である。時には発作を起こす。」[310]と解釈した。許慎の注によると、要するに、転病は変化の病気であり、「狂病」に似ている。この病気にかかると虎になる。この注から、漢代において、病気にかかって虎になるという変身の理由は、すでに文人の中で知られていたことがわかる。「風土」とは異なり、「病気」による変身は南北朝以降にも受け継がれてきた。

さらに、晋代に新たに出現した「法術」による変身の話は、『太平廣記』巻 11 引『神仙傳』「欒巴」[311]の話である。この話の要約は以下のとおりである。

欒巴という人は、太守の要望に応じて、法術を披露した。欒巴は坐っているままに壁の中に入った。壁の外の人は、一匹の虎を見て、驚いた。虎は欒巴の家に帰った。人々が、欒巴の家に行ってみると、その虎が欒巴であった。〔5.1.2-6〕

この話の中では、欒巴は虎と人の姿の間を自在に切り替える法術と壁抜きの術を披露した。

上記をまとめると、漢代・晋代において、「風土」・「病気」・「法術」による変身が出現し

[309] 何寧撰『淮南子集釋』(上冊)、新編諸子集成 (第一輯)、中華書局、1998 年、p.99-100。
[310] 原文は「轉病，易病也。江淮之間，有易病，化為虎。若中國有狂疾者，発作有時也」、現代日本語訳は筆者による。
[311] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第一冊、p.75-76。現代日本語の要約は筆者による。

た。「風土」は、異民族に対する無知と恐怖感から生まれた変身の理由であるため、南北朝以降異民族に対する恐怖感が弱まるにつれ、この変身の理由も消えた。

南北朝になると、「病気」・「法術」による変身が受け継がれたほか、「罪」と「神罰」による変身が新たに出現した。この 2 つのパターンはいずれも受動的な変身である。罪による変身には、「宿罪」や「僧」などの仏教に関する言葉があり、仏教の影響が見られる。

「罪」と「神罰」が新たに出現した理由として、南北朝における仏教と道教の隆盛が挙げられる。李（2011）は、「漢代に道教が始まり、仏教もはじめて渡来してきたが、（これらの宗教は）魏晋南北朝時代になると世の中に大いに流行し、社会の各階層に影響を及ぼした[312]」と指摘している。このような社会背景の下で、仏教の応報転生や道教における神が人の行いを裁くというような考え方が変身譚に影響を与えた。

まず、「罪」による変身の例を挙げてみよう。『太平廣記』巻 426 引『齊諧記』「吳道宗」[313]の話の中では、変身の理由について、「宿罪があるため責められ、変化することがあろう[314]」と述べている〔5.1.2-10〕。つまり、変身の理由は「宿罪」である。宿罪は前世の罪を指し、この言葉自体は仏教に由来した言葉である。この話の変身の理由には、仏教要素が見られる。

また、『太平廣記』巻 433 引『高僧傳』「僧虎」[315]の話においては、変身の理由について、「自ら悪い行為を為し、生きているままに虎になった。業力がこれほど大きくなければ、こんなことはないだろう[316]」とされる〔5.1.2-18〕。「業力」は仏教から由来した言葉であり、虎に変身した人も僧であるため、この話には仏教からの影響が顕著にみられる。

次に、「神罰」による変身の例を挙げてみよう。『異苑』巻 5 の觀亭江神祠[317]に関する話の要約は、以下のとおりである。

> 宿縣の外に観亭の江神の祠壇があり、そこを通り過ぎて江神に不敬な行いをすれば、必ず発狂し、走って山に入り、虎に変身する。〔5.1.2-12〕

---

312 李剣国（2011）、p.267、「汉代道教始兴，佛教初传，到魏晋南北朝咸得大行于世，影响及于社会各阶层」。翻訳は筆者による。
313 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第九冊、P.3467-3468。
314 原文は「宿罪見譴，當有變化事」、現代日本語訳は筆者による。
315 南朝・梁　釋慧皎の『高僧傳』に、この話は記されていない。
316 原文は「自為不善，活變為虎。業力之大，無有是者」、現代日本語訳は筆者による。
317 劉敬叔撰　陽松玠撰・範寧點校『異苑　談藪』、古小説叢刊、中華書局、1996 年、p.41。現代日本語の要約は筆者による。

『異苑』巻 8 の桓闡という人に関する話[318]の要約は、以下のとおりである。

桓闡という人が犬を殺して山に祭るが、肉に火がよく通っていなかったため、神が怒った。罰として、桓闡に生肉を食べさせると神は巫を通して告げた。その年、桓闡は突然虎になった。虎になるとき、桓闡に斑の虎皮をかぶらせると、直ちに跳びあがって歯ぎしりして走るのが見えた。〔5.1.2-14〕

上記の 2 例は、いずれも神に不敬なことをして神罰が下された話である。それ以外に、悪い行いをしたため、神罰が下された話も存在する。『太平御覧』巻 910 引『述異記』[319]の話の要約は以下のとおりである。

伍考という人は妊娠した猿を捕まえて殺したため、夢の中で神に罵られた。その後、伍考は病気になった。虎の爪と歯が出てきて、徐々に虎の姿になり、ついに走って山に入り、形跡がなくなった。〔5.1.2-17〕

この話においては、神罰が下された原因は、妊娠した猿を殺したという悪い行いである。

「病気」による変身は、漢代の『淮南子』に受け継がれているが、虎になった原因については、「転病」であるかどうかは示されておらず、病気にかかって虎になったことのみが記述されるようになった。例えば、『太平廣記』巻 426 引『齊諧記』「師道宣」[320]の話においては、師道宣という人が虎になって数年後、虎から再度人間に戻った。彼は自分の変身を回顧する時に、「私はかつて病気で発狂し、ついに虎になって人を食べた[321]」と述べた。〔5.1.2-9〕

上記のように、人間が虎に変身する主たる理由[322]は、南北朝までにすべて登場した。南北朝の虎の変身譚における変身の理由をまとめると、まず、仏教と道教の影響の下で、「罪」・「神罰」による変身が出現した。また、「病気」と「法術」による変身が受け継がれたが、「病気」による変身においては、かかった病気は「転病」ではなくなった。

---

[318] 劉敬叔撰　陽松玠撰・範寧點校『異苑　談藪』、古小説叢刊、中華書局、1996 年、p. 83。現代日本語の要約は筆者による。
[319] 李昉等撰『太平御覧』〈全四冊〉、中華書局、1995 年、p. 4033。
[320] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第九冊、P. 3468。
[321] 原文は「吾嘗得病發狂。遂化作虎啗人」、現代日本語訳は筆者による。
[322] 話が 4 例以上ある。

唐代・五代になると、「病気」・「罪」・「神罰」による変身が受け継がれ、「趣味・嗜好」による変身の話が新たに出現した。

新たに出現した「趣味・嗜好」による変身の話は、『太平廣記』巻 432 引『廣異記』「范端」[323]の話である。この話の要約は以下のとおりである。

> 范端という人が豚や牛の生肉を好んで、その上、肥満している人を見るたびに、その人を食べたかったが、仲間がなかったためにできなかった。その後、彼は 2 頭の虎に付いて、牛などの家畜を捕まえて分けて食べるようになり、彼自身も虎になった。〔5.1.2-22〕

この話では、人間が虎のように、豚や牛の生肉が好きで、とうとう虎になっている。

その他、虎の絵が好きで虎になった話も存在している。『太平廣記』巻 430 引『瀟湘記』「楊真」[324]の話では、楊真という人が虎の絵を好んで、死んだ後虎になった。〔5.1.2-30〕

唐代の「病気」による変身の話は、南北朝のこのパターンの話と同じように、「転病」の記述がない。つまり、『淮南子』以降、「病気」による変身の話においては、「転病」であるかどうかは示されておらず、病気にかかって虎になったことのみが記述されるようになった。

上記をまとめると、唐代において、虎の主な変身の理由が受け継がれたほか、「趣味・嗜好」による変身の話が新たに出現した。

宋代以降の人間が虎に変身する理由は、ほぼ前の時代を引き継いだものである。

「神罰」による変身は、もっとも多く書かれたパターンである。これは、中国では、古来から報いの観念が存在していたことと関わりがあると考えられる。例えば、『易・坤』の文言に、「善を積む家には必ず余慶があり、不善を積む家には必ず余殃[325]がある[326]」という記述がある。このような思想的背景の下で、人間が神罰を受け、動物に変身するというような話が多く書かれた。

---

323 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第九冊、p. 3506-3507。
324 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第九冊、P. 3494-3495。
325 「余慶」は祖先の徳のおかげで得られる子孫の幸福を指す。「余殃」は先祖の悪事の報いが子孫に残る災難を指す。
326 原文は「積善之家，必有餘慶；積不善之家，必有餘殃」（周振甫譯注『周易譯注』、中國古典名著譯註叢書、中華書局、1991 年、p. 16）、現代日本語訳は筆者による。現代日本語訳は同書 p. 17 の現代中国語の訳文を参考した。

なお、仏教が伝来した後も、仏教の因果応報の思想がこの古来の報いの思想と一致しているため、抵抗なく受け入れられた。この点について、岡田（2001）は、「後漢末に、中国に渡来した仏教の主要教理となる輪廻転生の思想と因果応報の思想は、道教にも取り入れられて浸透した」と述べている[327]。そこで、第 8 章では、仏教要素が織り込まれた話を考察する際に、このような状況を念頭において考察を行う。

以上の内容をまとめると、以下の 4 点となる。

①人間が虎に変身するパターンにおいては、例数から見ると、主な変身の理由（4 例以上）として、「神罰」・「病気」・「風土」・「罪」が挙げられる。

②「病気」・「風土」の出現がもっとも早く、漢代である。「神罰」と「罪」は、南北朝に出現した。つまり、主な変身の理由は、南北朝までにすべて出現した。

③「神罰」・「罪」の登場は、南北朝の仏教と道教の隆盛と関わりがある。全体的に、「神罰」はもっとも多く書かれたパターンである。これは、中国では、古来から報いの観念が存在していたという思想的背景に関わりがあると考えられる。

④「病気」による変身の話においては、初出の『淮南子』では「転病」とされたが、それ以降、「転病」であるかどうかは示されなくなった。

#### 5.1.3.3 人の姿に戻る方法

5.1.3 の冒頭部分で述べたように、人間が虎に変身するパターンの中に、一度虎になった人が、また人の姿に戻る話が存在する。その中では、虎が人間に戻る方法に言及する話があり、これらの方法にはいくつか主要なパターンが存在する。以下では、虎が人の姿に戻る方法のパターンについて考察を行う。

##### ① 術を使う

術を使うことで人と虎の姿の間を自在に切り替える話が存在する。例えば、5.1.2 で紹介した『太平廣記』巻 11 引『神仙傳』「欒巴」の話では、欒巴は虎と人の姿の間を自在に切り替える法術と壁抜きの術を披露した。人の姿に戻るのも欒巴の法術の一部だと考えられる。

また、法術に関わる道具を使って自在に変化することも可能である。『搜神後記』巻 4（47）

[327] 岡田（2001）、p. 82。

「虎符」[328]の話は、蠻人の虎符で虎と人の姿の間を自在に切り替える話である。

尋陽県の北山の中の蠻人は、人を虎に変身させる術を会得している。周畛という人の下男は、虎に変身し、また人間に戻ることを妻と妹の前で披露した。このことは周畛に知られた。周畛は下男に酒を飲ませ、熟睡させた後、下男の髪から虎符を一枚手に入れた。下男が目覚めた後、周畛が下男に聞いてみると、それは蠻人から学んだ術であることを知った。〔5.1.2-8〕

この話では、「欒巴」の話とは異なり、虎符という変身の道具を使っているが、この 2 つの話はともに法術によって体を自在に変化させる話である。

**②虎皮から脱する**

虎に変身した人間が虎皮から脱することにより、人間の姿に戻る話も数多く存在する。これらの話は、「他者によって虎皮を剥がされる」と「自ら虎皮を脱ぐ」という 2 種類に大別できる。

『異苑』巻 8 の鄭襲という人の馬丁[329]の話は、他者によって虎皮を剥がされる例である。

鄭襲という太守の馬丁が土地神に、虎になれと命じられた。馬丁は、神に斑の皮をかぶせられて虎となったが、「鞭を使う職業の者なので、虎のようにほえて跳びあがることができない」と断った。すると神は腹が立ち、斑の皮を剥ぎ取らせた。しかし、皮はもう肉についていたので、馬丁は肌が傷つき破れて、ひどく痛かった。十日後、やっと治った。〔5.1.2-13〕

この話の中では、虎になった馬丁は、神に皮を剥がされたことで、また人の姿に戻った。『太平廣記』巻 433 引『高僧傳』「僧虎」は、上記の話と似ている話である。虎になった僧侶が、自分の悪行に気づき、懺悔すると、虎皮が突然剥がれて、人の姿に戻った。〔5.1.2-18〕

---

328 陶潜撰・汪紹楹校注『搜神後記』、古小說叢刊、中華書局、1981 年、p. 28。現代日本語の要約は筆者による。

329 劉敬叔撰　陽松玠撰・範寧點校『異苑　談藪』、古小說叢刊、中華書局、1996 年、pp. 82-83。現代日本語の要約は筆者による。

上記の 2 例はともに受動的に虎皮から脱することにより、人の姿に戻る話である。自ら虎皮から脱する話として、以下の例を挙げてみよう。

『太平廣記』巻 426 引『五行記』「黄乾」の話の要約は以下のとおりである。

> 黄乾の妹である小珠は、神廟を通りかかった時に、廟に入って、家に帰ろうとしなかった。そして、草の中に入った。その後、彼女の夫は、夜に廟の中で雨宿りするときに、廟に入った虎が虎皮を脱ぎ、小珠となったことを目撃し、小珠を家に連れ戻した。しかし、家に連れ戻された後、生肉を食い、間もなくまた虎になって、人に打ち殺された。〔5.1.2-19〕

この話の中では、虎になった小珠は自ら虎皮を脱ぐ方法で人に戻った。

また、『太平廣記』巻 427 引『廣異記』「費忠」[330]においても、神罰で虎になった老人が、自ら虎皮を脱着することで人の姿と虎の姿の間を自由に切り替えられる。老人は虎皮を脱ぎ、人の姿で寝て、また虎皮を着て虎の姿で人を食うのである。〔5.1.2-21〕

『太平廣記』巻 426 引『解頤錄』「峽口道士」の話も自ら虎皮を脱ぐ方法で人に戻った話である。神罰よって虎になった道士は、虎皮を脱ぐことで人の姿に戻り、またそれを着ることで虎の姿になることができる。〔5.1.2-24〕

『古今圖書集成』博物彙禽蟲典虎部外編引『説聴』の陳十三老人に関する話においては、陳十三老人は虎皮の脱着によって何回も人の姿に戻った。〔5.1.2-41〕

そのほか、虎皮を脱ぐことで人の姿に戻る話として、5.1.1.1 で紹介した『太平廣記』巻 430 引『傳奇』「王居貞」の話が挙げられる。この話の中では、王居貞は道士の虎皮を借りて、着る・脱ぐことで虎と人の姿の間を自在に切り替えたが、最後に人の姿に戻った。〔5.1.2-28〕

上記のように、虎皮から脱することで、人に戻れるという点から見ると、虎皮は変身上重要な道具であることがわかる。

なお、もともとは虎であり、虎皮を脱いで人間に変身する話も存在する。例えば、5.1.2.2 で紹介した「崔韜」や「申屠澄」など、隋代・唐代に書かれた皮を脱いで女性に変身した虎が人間と通婚する一連の話が挙げられる。これらの話では、女性に変身した虎が人間の

[330] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第九冊、P.3474-3475。

男性と結婚した後、また昔の虎皮を着ることで虎の姿に戻る場合が多い。つまり、このよう一連の話は、虎が虎皮を脱着することによって、人間の姿と虎の姿を切り替える話である。これらの話は、虎から人間への変身であり、上記の人間から虎への変身と方向が異なっている。しかしながら、虎皮の脱着によって虎と人間の姿を切り替える点では共通している。虎皮は、変身の方向に関わらず、変身上重要な道具であると言えよう。本論文で扱った狐・蛇などの動物の変身譚では、皮の脱着による変身は見当たらない。この変身方法は、虎の変身譚における独特な変身方法だと言える。なぜこの変身方法が虎の変身譚にしか存在しないのかについては、第 8 章で論じる。

**③特定の人を食うという条件を満たす**

『太平廣記』巻 432 引『原化記』「南陽士人」[331]の話においては、南陽士人は神の指示によって虎になったが、また神の指示を受けて王評事を食べた後、人間に戻った。〔5.1.2-25〕

似たような話として、『太平廣記』巻 429 引『續玄怪錄』「張逢」が挙げられる。話の要約は以下のとおりである。

> 一睡して虎になった張逢は、意識朦朧の中で、福州の鄭錄事[332]を食べるべきだと自分に言い聞かせた。そのため、虎に変身した張逢は、裏道で身を隠して鄭錄事を待った。鄭錄事を迎えに来た人と鄭錄事の使人が先に来て、鄭錄事の名前は鄭璠であり、緑色の服を着ているということを話した。虎に変身した張逢はこれを聞いて、鄭錄事の様子を知った。しばらくすると、緑色の服を着た肥満した人がやってきた。虎に変身した張逢は彼を銜えて山中に入って食べた。鄭錄事を食べた後、張逢は突然自分が虎の姿であるべきではないと悟り、虎になった時に一睡したところに行き、また一睡すると、人間に戻り、元の衣服を着て去った。〔5.1.2-26〕

上記の 2 例の話は、特定の人を食うという条件を満たすと、人の姿に戻った話である。

一度虎になった人がまた人の姿に戻る話は、主に南北朝と唐代に集中している。特に唐代には多数書かれた。

上記をまとめると、一度虎に変身した人間が、また人間の姿に戻る話は南北朝・唐代に

[331] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第九冊、p.3504-3506。
[332] 「錄事」は役職名である。記録をする文官である。

多数書かれた。人間の姿に戻る方法として、①術を使う、②虎皮から脱する、③特定の人を食うという条件を満たすという 3 つの方法が挙げられる。また、虎皮は、変身の方向に関わらず、変身上重要な道具であり、虎皮の脱着は虎の変身譚における独特な変身方法である。この点については、第 8 章で詳しく論じる。

## 5.2 日本における虎の変身譚

日本の虎の変身譚を調査するために、ジャンパンナレッジの「日本古典文学全集」データベースを用いて、「虎」をキーワードとして検索した。その結果、虎の出現回数は多いにも関わらず、虎の変身譚は存在しなかった。また、大系本文（日本古典文学）データベースを用いて検索しても、虎の変身譚は見当たらなかった。日本の変身譚を博捜した中村（1984）も、虎の変身譚は見当たらなかったという。

このような調査結果から、日本において、虎の変身譚はほとんど書かれていなかったことがわかる。

ただし、江戸時代前期の浄土真宗の僧・仮名草子作家である浅井了意によって著された『新語園』においては、いくつかの中国の虎の変身譚が紹介されている。

そこで本節では、『新語園』に紹介された中国の虎の変身譚を取り上げ、元の中国の物語と比較し、選ばれた物語の中に共通するパターンについて考察する。

なお、ほかの動物の変身譚と大きく異なり、日本オリジナルの虎の変身譚はないので、浅井了意個人が中国の物語をどう改変したのか、という問題は、本論文全体の方向性から考えると、主題としての位置づけはできない。このことを念頭に置いたうえで、浅井了意に選ばれた虎の変身譚を考察していきたい。

### 5.2.1 『新語園』に紹介された中国の虎の変身譚

『新語園』の編述の意図は、「自序に述べている通り、かつて一条兼良が、初学童稚のために異国中国の故事を和訳して編述し、『語園』とした（寛永四年刊。古典文庫 337 参照）ここに倣って、それと同様な方法で漢籍の中から中国故事説話の要所を摘出して、一に出典を記した上に、読学の者のためにと、仮名まじり文に訳出して「新語園十巻」とした、というのである」[333]とされている、つまり、「読学の者が、古今の事実を知ることができるよう、その啓蒙教化に資せんとしたものと見ることができる」[334]である。

『新語園』の中の虎の変身譚は、巻 6 と巻 8 に集中しており、この部分はほとんど『太平廣記』に依拠しているとされる[335]。では、『新語園』には、『太平廣記』から、どのような虎の変身譚を選んだか、以下では、これらの話を取り出してみる。

[333] 吉田幸一（1981）、p. 374。
[334] 同上。
[335] 吉田幸一（1981）、p. 376。

巻 6-25「佐史為虎　五行志」[336]は、『太平廣記』巻 426 引『五行志』「郴州佐史」に依拠した話である。話の前後は少々異なるが、あらすじはほとんど同様である。話の要約は以下のとおりである。

中国の唐の時代、柳州（『太平廣記』は「郴州」とする）の小役人が病気で虎になった。虎は兄嫁を襲って食おうとしたが、駆けつけた村人たちに捕えられ、庭の木につながれた。十日間あまりたつと元の人間の姿に戻り、以前とはかわらなかった。柳州の官に尋問されると、小役人は「虎になったばかりの頃、一頭の虎が来て、私を華麗な服を着た婦人のところへ連れて行った。その婦人の前には常に多くの虎が集まり、順番にその日の婦人の食物を獲って来る。私は新たに虎になり、まだ完全な虎になっていないため、遠くまで行って食物を獲ることができない。そのため兄嫁を獲って、当番の役に備えようとした。しかし捕えられ、木につながれた。虎になることができなかったが、まだ虎の声は出すことができる」という。柳州の官は声を出せと要求した。すると役人は虎のように吠えた。左右の人は驚き倒れ、軒の瓦までも震動して地に落ちた。〔5.2-1〕

この話は、人間が虎に変身するパターンで、病気によって変身した話である。人の姿に戻る方法は明示されておらず、またこの回復は能動的であるか、受動的であるかも曖昧である。

巻 6-26「安陸師道宣　斉諧記」[337]の話は、『太平廣記』巻 426『齋諧記』「師道宣」に依拠した話である。虎になった後、山に入り谷を渡るなどの描写は『太平廣記』の記述より詳しいが、あらすじはほぼ同様である。この話の要約は以下のとおりである。

師道宣という人は突然病気で発狂し、虎になった。そのまま山に入り、谷を渡り、野を走り、里に出て、かぎりなく人を食べた。人々は恐れて、窓をふさぎ戸を閉ざして暮らした。ある日、一人の女子が桑の樹の下に立って桑を取っていたとき虎が現れ、女子を食べた。そして彼女のかんざしを持ち去って、山中の石の間に隠した。虎はの

[336] 浅井了意　吉田幸一編『新語園』＜下＞（寛文十二年板複製）、古典文庫 420 冊、帝都印刷製本株式会社、1981 年、pp. 35-36。現代日本語の要約は筆者による。
[337] 浅井了意　吉田幸一編『新語園』＜下＞（寛文十二年板複製）、古典文庫 420 冊、帝都印刷製本株式会社、1981 年、pp. 36-37。現代日本語の要約は筆者による。

ちに元の道宣の姿に戻ったが、かんざしの隠し場所を覚えており、取りに行って自分の物にした。数年後、道宣はかつて病気で発狂し、虎になって人を食べたことを告げた。そして、食べた人の名を一々挙げた。同席の人の中に、親や子、兄弟、妻や妾を食われた人が多くいた。このことで道宣を恨んで腹を立てる人もいた。道宣は天を仰いで号泣したが、ただちに捕縛され、官に送られた。最後は建康（地名）の牢獄で餓死した。〔5.2-2〕

この話も、人間が虎に変身するパターンで、病気によって変身した話である。人の姿に戻る方法については言及されていない。

巻 8-6「袁雙惑虎婦　五行記」[338]の話は、『太平廣記』巻 426 引『五行記』「袁雙」に依拠した話である。話の最後に、袁雙の妻は実は虎の化けものであることが知られた後、虎は家から出て、再び戻ってこない記述があるが、『太平廣記』では、このような家から出るなどの記述がなく、ただ県境を越えた地の墓地で死人を食べるようになったとされる。話の最後の部分は中国と異なるが、前の内容はほぼ同様である。話の要約は以下のとおりである。

袁雙という貧しい人がいて、他人の家の田を小作して暮らしていた。日暮れに、家へ帰る途中で、袁雙は歳十五、六の美しい女に出逢った。直ちに妻とし、家に連れ帰った。五、六年後、家は豊かになって、2 人の子供も生まれた。上の子が十歳になったころには、富み栄えて何一つ不足ないようになった。やがて村の中で新たに死んだ者があって、葬儀を行い墓に埋めた。その夜、袁雙の妻は逃げて家を出て墓所へ行った。衣を脱ぎ、かんざしをはずして木の枝に掛けると、たちまち虎に変身した。虎は墓を崩し、屍骸を引き出して食べた。飽食した後また人の姿の戻り、家へ帰ったが、それを人に見られていた。目撃した人はひそかに袁雙に言った。「あなたの妻は人ではない。この目で見たから確かだ。このままでは、あなたはきっと害に遭う」。しかし袁雙は信じなかった。村の中でまた死人が出た。死人を埋めた後、また袁雙の妻は墓へ行って、屍骸を食った。ひそかに尾行した袁雙はすべてを目撃して、ひどく恐れた。妻も自分が虎であることがばれたことに気づき、家から出て、県境を越えた地に

[338] 浅井了意　吉田幸一編『新語園』＜下＞（寛文十二年板複製）、古典文庫 420 冊、帝都印刷製本株式会社、1981 年、pp.162-163。現代日本語の要約は筆者による。

行った。それからひたすら墓を掘って死人を食べたという。〔5.2-3〕

この話は、虎が人間に変身するパターンで、虎が人と通婚する話である。中国の話においては、最後に正体がばれた後、「乃越縣趨墟，還食死人」とされ、つまり虎は県境を越えた地に行き、依然として屍骸を食べると述べている。それに対し、日本の話においては、虎であることがばれた後、「遂ニ其實ヲ知リテ志薄ク成行ケルヲ婦即チ此事ノ露タリト覺エ其家ヲ出テ縣ヲ超テ佗所ニ至リ一向虎ニ作テ塚ヲ發テ死人ヲ食ト云フ」と記述している。つまり、日本の場合では、夫が寄りつかなくなったので、妻も自分が虎であることがばれたことに気づき、家から出て、県境を越えた地に行ったとされる。日本における狐、蛇の嫁入りの話の考察から、日本における動物の嫁入りの話のほとんどは、嫁は実は動物であることが知られた後、男性と別れる結末を迎える話であることがわかる。上記の虎の嫁入りの話は中国では最後の記述が簡潔であり、男性と別れる記述はないが、恐らく浅井了意はこの部分にすでに広く受け入れられた動物の嫁入りの結末を加え、完成度の高い物語に作り上げたと思われる。

巻 8-7「呉道宗母作虎　斉諧記」[339]の話は、『太平廣記』巻 426 引『齋諧記』「呉道宗」に依拠した話である。2 話のあらすじはほぼ同様である。話の要約は以下のとおりである。

呉道宗という人は父が亡くなって、母と一緒に住んでいた。まだ嫁を迎えていない。ある日、道宗は別のところに行って、母一人が家にいた。道宗の家で音が聞こえたため、隣の人がこっそりのぞいた。家の中に、道宗の母は見えず、ただ大きな烏斑虎一頭がいた。隣の人は、道宗の母がこの虎に食われたことを恐れて、鼓を鳴らし、村の人を集めてともに道宗の母を救おうとした。戸を開くと、虎はいなくなっており、母一人がそこにいた。聞けば、道宗の母は横になって寝ていたため何も知らないという。以前と変わらないように見えるので、集まった人はその原因がわからなかった。道宗が家に帰ると、母はこのことを告げ、「宿世の罪業に責められたので、変化のことがあるはずだ。生きながらあなたと離れても仕方がない」と泣いた。道宗はその意味が分からなかった。一か月後、母は突然行方不明となり、この日より、県境に虎が現れて人を取り、その虎は烏斑虎だという。百姓が恐れてともに虎を打たんとしたところ、

[339] 浅井了意　吉田幸一編『新語園』＜下＞（寛文十二年板複製）、古典文庫 420 冊、帝都印刷製本株式会社、1981 年、pp.164-165。現代日本語の要約は筆者による。

数十人がけがをし、半死半生の人もいた。後に、矢で虎を射る人がいた。膺のほどをさされて、虎は家に帰って人の形に回復できず、床の上で死んだ。道宗は号泣し、虎を母として埋葬した。〔5.2-4〕

この話は、人間が虎に変身するパターンで、前世の罪業（罪）によって虎になった話である。話の中で、一度虎から人の姿に回復したが、回復の方法や原因は明示されていない。この部分はストーリーの発展の下地として見ることができると思われる。

巻 8-8「鄭襲門下作虎　太平廣記」[340]の話は、『異苑』巻 8 の鄭襲の馬丁[341]の話に依拠した話である。この話の中では、虎になった人について、「鄭襲ト云フ人晋太康年中ニ太守トノ官ニ至ル其ノ門下ニ騶忽ト云フ者アリ」と記述し、鄭襲という太守の門下である「騶忽」という人とされる。ところが、『異苑』の中では、虎に変身した人は鄭襲という太守の馬丁[342]である。虎に変身した人の身分は異なるが、話のあらすじはほぼ同様である。また、『新語園』では、「鄭襲門下作虎　太平廣記」の題目の下に、鄭襲の門下の話以外に、『淮南子』の牛哀の話と前掲の「柳州佐史」の話の要約も記されている。『淮南子』の牛哀の話は、『淮南子』俶真訓に依拠した話であり、あらすじは同様である。『太平廣記』では、鄭襲の馬丁に関する話、および「郴州佐史」の話は異なる話である。また、牛哀の話は『太平御覧』巻 888・巻 891 で引かれており、前述の 2 つの話とは別のものである。つまり、もともと『太平廣記』では、この 3 つの話を 1 つの題目の下で引いたのではなく、『新語園』の作者は、この 3 つの話を 1 つの題目の下に配置して紹介したのである。

「鄭襲門下作虎　太平廣記」の話の要約は以下のとおりである。

鄭襲という太守の門下が、ある時、俄かに狂乱の如く、家を走り出て行方不明になった。何日もたってから、山の下に赤裸で倒れて呻っているのを見つけだし、家へ連れ帰った。皮膚があちこち破れて出血しているのを、治療してやった。こんなことになった原因を聞くと、門下は「土地神に囚われて、虎にされた。斑模様の虎皮を着せられ、たちまち虎となり、毎日虎の動作を練習した。私は跳躍に堪えられないため、

[340] 浅井了意　吉田幸一編『新語園』＜下＞（寛文十二年板複製）、古典文庫 420 冊、帝都印刷製本株式会社、1981 年、pp. 165-166。
[341]『太平廣記』巻 426「鄭襲」にも見られる。あらすじはほぼ同様である。
[342]『異苑』巻 8 では、「榮陽鄭襲為廣陵太守，門下騶，忽如狂，」と記している。「騶」の注はないが、話の展開では、「辭以執鞭之士，不堪虓躍」とされ、鞭を使う仕事をしているため、ほえ跳びあがることに堪えられないという記述から、虎に変身した人は馬丁であることがわかる。

神が怒って、皮を剥いで追放した。皮はすでに肉についていたため、皮膚が破れ、傷となった。その痛みは堪えがたかった。皮膚が損じ、肉も潰れ、血が噴き出た」という。十日後、傷が癒えて、もとの人に戻った。

『淮南子』には、「牛哀という者が病んで、七日にして虎に変じ、その兄を食った」とある。これもまた根拠のないうわさではない。

「柳州の佐史が病んで虎となり、その兄嫁を食おうとした。後にまた正気の人に戻った」と『五行志』にいうものも、また実説である。〔5.2-5〕

「鄭襲門下作虎」の話は、人間が虎に変身するパターンで、神の指示（5.1 では神の指示および神が下された罰による変身を「神罰」に分類した）による変身である。人の姿に戻る方法として、神に毛皮を剥がされたことが考えられる。

「牛哀」の話は、人間が虎に変身するパターンで、病気による変身である。

巻 8-12「譙本不孝為虎　野人閑話」[343]の話は、『太平廣記』巻 430 引『野人閑話』「譙本」に依拠した話である。話のあらすじはほぼ同様である。この話の要約は以下のとおりである。

譙本という人は、極めて凶暴で非道・不孝・不義な人だという。村の中の隣人は皆彼を嫌って遠ざけていた。小さい頃に父が亡くなったが、常に母を罵った。母は涙を流しながら日々を送った。ある日、譙本は別のところに行って、帰りが遅かった。母は慈悲深く、譙本を待ちわびて、門に寄りかかって迎えようとした。譙本は遥かに母を見て、門に立って見苦しいと罵った。母は、「私にはあなたしかいない。帰りが遅かったため心配して堪えられなかった。ゆえに門に寄りかかってあなたを迎えようとした。なぜ返って私を罵るのか」と言った。譙本は怒って、母を門の中に突き入れた。母は大いに泣き、嘆き、怨んだ。譙本はいよいよ怒って、家から走り出て、路に出て地上に座った。大声をあげ、衣服を脱ぎ、虎になった。直ちに去り、城に上がった。ほえ声が地を震い、城中の男女が恐れて窓と門を閉じて一晩籠った。夜が明けてみると、虎はまだ城の上にいた。四方を臨み、その両目は光っていた。蜀王が趙庭隠という人に虎を射ることを命じた。一発で虎の口の中に射こんだ。虎は倒れて死んだ。兵

[343] 浅井了意　吉田幸一編『新語園』＜下＞（寛文十二年板複製）、古典文庫 420 冊、帝都印刷製本株式会社、1981 年、pp. 171-173。

士たちはその虎の肉を分けて食べた。蜀王は一方の覇になった。この年、天より毛が降ってきて、人が虎となり、地震の災いがあったという。〔5.2-6〕

この話は、人間が虎に変身するパターンで、変身の理由は不明である。

### 5.2.2 物語の中の共通的なパターン

この 7 つの物語の中で、虎が人間に変身するパターンは 1 例、人間が虎に変身するパターンは 6 例である。虎が人間に変身する話「袁雙惑虎婦」は、虎が女性に化けて人と通婚する話であり、その展開も日本の変身譚によく見られる動物女房の話と同様である。5.2.1 で述べたように、この話の依拠となる『太平廣記』の中の話の最後において、虎女房が家から出たという記述はないが、浅井了意によって完成度の高い物語に作り上げられたのである。

人間が虎に変身するパターンを、人が虎になった理由の面から見ると、病気による変身が半分を占めており、そのほか、神罰が 1 例、罪による変身が 1 例である。

選ばれた話の時代として、「牛哀」は漢代に書かれた話である。「安陸師道宣」・「呉道宗母作虎」・「鄭襲門下作虎」という 3 つの話は南北朝時代に書かれた話である。「佐史為虎」は唐代の話、「譙本」は宋代の話である。

「牛哀」と「譙本」の話を除き、4 例の話の中に虎の姿からまた人の姿に回復するシーンがある。ところが、回復の方法が明示された話はわずか 1 例しかない。

虎の変身譚が多く書かれた唐代に、何回も変身を繰り返す長い物語が存在するが、この本では選ばれなかった。このことから、浅井了意は物語の怪異に着目したのではないことがわかる。また、読学の啓蒙教化に用いるという編述の目的を改めて感じ取ることができる。人が虎に変身する理由が明示された物語が選ばれたこと、特に、漢代から出現し久しく流布した、人が虎に変身する「病気」という原因が多く選ばれたことからも、浅井了意の苦心が読み取れた。

# 第 6 章 犬の変身譚

## 6.1 中国における犬の変身譚

データベースおよび手作業で調査した結果、漢代から清代までの間に書かれた 21 例の犬の変身譚を抽出した。うち、犬が人間に変身するパターンは 16 例、人間が犬に変身するパターンは 5 例である。

表 6.1 各時代における犬の変身譚の例数

| 時代 | 犬が人間に変身 | 人間が犬に変身 | 時代別合計 |
|---|---|---|---|
| 漢代 | 3 | 0 | 3 |
| 晋代 | 4 | 0 | 4 |
| 南北朝 | 4 | 0 | 4 |
| 唐代 | 4 | 0 | 4 |
| 宋代 | 0 | 3 | 3 |
| 明代 | 1 | 0 | 1 |
| 清代 | 0 | 2 | 2 |
| パターン別合計 | 16 | 5 | 21 |

漢代から唐代の間に多数書かれた犬の変身譚は、すべては犬が人間に変身するパターンである。宋代以降に書かれた犬の変身譚の 6 例の中にこのパターンはわずか 1 例しかなく、宋代以降に書かれた犬の変身譚は人間が犬に変身するパターンに集中していることがわかる。犬が人に変身するパターンの総例数は多いが、漢代・晋代・南北朝・唐代に集中しており、それ以降はあまり書かれていない。

### 6.1.1 犬が特定の人に変身する話の変遷

動物が特定の人（知り合い）に変身して、人を惑わし・騙し・あるいは混乱させる話は、中国における狐と虎の変身譚にも見られるが、割合が少ない。また、狐と虎が変身した特定の人は生きている人間であるのに対して、犬は死んだ人にも変身する。人間とともに生活し、人間の行動を知り尽くした犬であるから、人間を摸倣することも考えつくのであろう。変身譚を書いた知識人たちはおそらくこのような発想に基づいて、数多くの犬が家中の人に変身する話を創作したと思われる。

犬の変身譚の初登場は、漢代に著された『新論』においてである。『新論』に犬の変身譚が 2 例ある。

1 つ目の話の要約は以下のとおりである。

呂仲子という人の下女が死に、4 歳の子供が残った。下女が埋葬された後、下女と同じような姿の人が何回も子供を慰めにきて、子供の頭を洗ってあげた。家中の人がそれを忌み嫌い、道士に告げた。道士は「それは犬が下女に化けたのだ」と言った。犬が変身した下女は、その後二度と来ることはなかった。[344]〔6.1-1〕

2 つ目の話の要約は以下のとおりである。

楊仲文という人の母親が死んだ後、遺骸が納棺されたが、まだ葬られていなかった。突然母親の姿をしている人が棺の前の床の上に座ったが、酒を飲んで酔っぱらいになって、犬の姿を現した。そして犬は人に殺された。[345]〔6.1-2〕

この話の中では、酒を飲んだ死者の正体が犬であった。つまり、犬は死者の姿に変身したが、酒を飲んで酔っぱらったため、もとの犬の姿を現したのである。

犬が人間に変身するパターンの中で、このように犬が特定の人（家中の死者・人の夫、以下「家中の人」）に変身する話は 8 例あり、死者に変身する話は 5 例、生者（人の夫）に変身する話は 3 例ある。

上記の 2 例は死者に変身する例であるが、その後晋代になると、犬が家中の生者（人の夫）にも変身できるようになった。『搜神記』巻 18(432)「田琰」[346]の話においては、犬が田琰という人の姿に変身し、田琰と偽り、彼の妻と交わった。最後に、本物の田琰が犬が自分の姿に変身したところを目撃し、犬を打ち殺した〔6.1-5〕。犬が家中の死者だけでなく、夫に変身し、妻と交わる話の登場は、犬の変身先の選択肢を広げたのである。

それ以降の犬の家中の人に変身する話は、上記の 3 つの話を下地にして発展させた話と見做すことができる。例えば、『搜神記』巻 18(433)「狗」[347]は、変身先は死んだ母親から死んだ亭主に変わってはいるが、『新論』の 2 つ目の話と似ている。話の要約は以下の

344 李昉等撰『太平御覧』〈全四冊〉、中華書局出版、第四冊、1960 年 2 月第一版 1995 年 10 月第 5 次印刷、p. 4012。現代日本語の要約は筆者による。
345 同上。
346 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985 年、p. 226。
347 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985 年、p. 226-227。現代日本語の要約は筆者による。

とおりである。

来季德という亭主が死んだ後、遺骸が納棺されたが、まだ葬られていなかった。彼は突然現れ、棺の前の床の上に座った。その後、数年間家中で家族を言いつけて使い、家族を困らせた。ある日、彼は酒を飲んで酔っぱらいになって突然犬の姿を現したところを皆に打ち殺された。〔6.1-6〕

この話は、犬が死んで納棺された亭主の姿に変身して、家族を悩ませた話である。

犬が家中の生者に変身する場合は、すべて男女の交わりをするために人の夫に変身している。このパターンの話は前掲の「田琰」の話に基づいて作られた話だと考えられる。そして、犬の結末も「田琰」の話と同様に、最後に偽物が本人に遭遇し、打ち殺される。

例えば、『搜神後記』巻 9（104）「老黃狗」[348]の要約は以下のとおりである。

王氏という六十歳の男が若くて美しい庾氏を嫁にしたが、夜にあまり家に帰らなかった。ある日の夕方に、王氏が家に帰って来て、その晩庾氏と一緒に寝た。次の日、下男が帰り、家にいる王氏を見て大いに驚き、このことを本物の王氏に告げた。本物の王氏が家に入り、偽物の王氏が家から出たところで、2 人は対面した。本物の王氏は杖を挙げ偽物を打ったが、偽物も同じように本物の王氏を打った。王氏の息子が突然前へ出て偽物の王氏を打つと、黄色の犬が現れたので、犬を打ち殺した。妻の庾氏は恥ずかしくなり、病気になって死んでしまった。〔6.1-9〕

このような、夫に変身して妻と寝る話は犬が死者に変身する話と結びつき、南北朝時代に死んだ夫に変身して妻と寝る話が作られた。『太平廣記』巻 438 引『幽明錄』「溫敬林」[349]はこの話と類似している。

溫敬林という人が死んでから 1 年経ったある日、彼が家に帰ってきた。妻である柏氏と一緒に寝たが、その後お酒を飲んで酔っぱらって黄色の犬の姿を現したとこ

[348] 陶潛撰・汪紹楹校注『搜神後記』、古小說叢刊、中華書局、1981 年、p.61。現代日本語の要約は筆者による。
[349] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第九冊、pp.3564。現代日本語の要約は筆者による。

ろを打ち殺された。〔6.1-10〕

上記のように、家中の生者に変身する場合は、人の夫に限られるのに対し、家中の死者に変身する場合は、変身先が死んだ下女・死んだ母・死んだ亭主・死んだ夫に及んでいる。

上記をまとめると、犬が家中の人に変身する話は、①死者に変身する、②生者に変身するという 2 つの変身先が存在する。死者に変身する話の登場は漢代であり、下女・母親に変身した。それ以降も受け継がれ、変身先は下女・母親・家の亭主・夫にまたがる。具体的には、漢代では死んだ下女・死んだ母親に（2 例)、晋代では死んだ亭主に（1 例)、南北朝では死んだ夫に（1 例)、唐代では死んだ母親に（1 例）変身している。それに対し、生者に変身する話の登場は晋代であり、変身先は人の夫に限られている。具体的には、晋代に 1 例、南北朝に 1 例、明代に 1 例ある。中でも、南北朝に登場した死んだ夫と偽り妻と寝る話は、上記の 2 つの変身先が結び付けられて作り上げられた話であると考えられる。

### 6.1.2 犬が人間に変身するパターン

犬（犬の形の神 2 例を含む）が人間に変身するパターンは合計 16 例ある。以下の表 6.1.2 では、変身後の性別の割合を時代順に示す。なお、狐と同じように、性別が示されていない場合および男女の両方を含む場合は、「その他」に分類する。

**表 6.1.2 犬が人間に変身するパターン（括弧内は変身譚の例数）**

| 時代 | 男性 | 女性 | その他 |
|---|---|---|---|
| 漢代 | 0%（0) | 67%（2) | 33%（1) |
| 晋代 | 75%（3) | 0%（0) | 25%（1) |
| 南北朝 | 50%（2) | 25%（1) | 25%（1) |
| 唐代 | 50%（2) | 25%（1) | 25%（1) |
| 明代 | 100%（1) | 0%（0) | 0%（0) |
| 合計 | 50%（8) | 25%（4) | 25%（4) |

犬が人間に変身する初出の変身譚は女性に変身する話であるが、晋代および晋代以降に

は犬が基本的に男性に変身するようになった。

犬が人間に変身する変身譚において、もっとも多い変身の目的は「男女の交わり」と「人をからかうこと」であり、それぞれ 5 例ある。それ以外には、恩返しを目的とした変身が 2 例、変身の目的がはっきりしていない話が 4 例ある。

6.1.1 で述べた変身先が家中の人である 8 例の中に、人の夫に変身する 4 例は男女の交わりを目的とした変身であり、それ以外に、『異苑』巻 8[350]の話は、犬が女性に変身して沈覇という男性の夢に現われ、彼と交わるという話である。〔6.1-11〕

変身先が家中の人であるパターンにおいて、残りの 4 例は結果的に人に変身した犬が家を混乱させたり、家中の人を困らせたりしたため、犬が人に変身する目的は人をからかうことと考えてよかろう。変身先の人が家中の人ではない 8 例の中に、人をからかうことを目的とする変身は『搜神記』巻 18(434)「白衣吏」[351]だけである。話の要約は以下のとおりである。

> 夜中に白衣を着ている小役人が孟璉という人のドアを叩き、ドアを開けると小役人の姿が消える。このようなことが何年も続いたが、人がひそかに覗いたところ、体が白い犬がドアの前に来て人に変身するところを目撃し、このことを孟璉に告げた。犬が殺された後、このようなことは二度と起こることはなかった。〔6.1-7〕

犬が恩返しするために変身する話は唐代に登場した。『太平廣記』巻 309 引『博異記』「張遵言」[352]と『太平廣記』巻 449 引『紀聞』「鄭宏之」[353]において、犬は実は犬型の神であり、人に恩返しするために人間に変身した。犬の恩返しの話は、唐代以降書かれていない。

また、変身の目的がはっきりしておらず、怪異として記録された話は、『漢書』巻 27 中之上五行志第七中之上[354]における、人間に変身した犬が人の家に来て人に打ち殺された話

---

[350] 劉敬叔撰　陽松玠撰・範寧點校『異苑　談藪』、古小說叢刊、中華書局、1996 年、p.75。
[351] 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985 年、p.227。現代日本語の要約は筆者による。
[352] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1961 年第一版 1986 年 3 月第 3 次印刷、第六冊、pp.2448-2450。
[353] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1961 年第一版 1986 年 3 月第 3 次印刷、第九冊、pp.3669-3670。
[354] 班固撰・顔師古注『漢書』（全十一冊）、第五冊、中華書局、1962 年 6 月第 1 版、1964 年第 2 次印刷、p.1399。

〔6.1-3〕、『抱朴子内篇』巻 17「登渉」[355]における、夜に亭に来た数十人が鏡に映ると、すべてが犬であった話〔6.1-4〕、『宣室志』巻 3(81)「犬怪」[356]における、犬が毎晩人間に変身し墓に入る話〔6.1-15〕、『搜神後記』巻 7(86)「狗變形」[357]犬が突然恐ろしい様子をしている人間に変身した話〔6.1-8〕がある。

### 6.1.3 人間が犬に変身するパターン

中国における犬の変身譚の中では、人間が犬に変身するパターンの登場は遅く、宋代である。また、このパターンが登場した後、あまり書かれていない。人間が犬に変身する話は 5 例あり、そのうち宋代は 3 例、清代は 2 例である。

宋代の 3 例の内、男性が犬に変身する話は 2 例、女性が犬に変身する話は 1 例である。清代の 2 例の内、男性が犬に変身する話は 1 例、変身前の性別が不明な話は 1 例である。

人間が犬に変身する原因としては、宋代の 2 例は悪事の報い、1 例は執着である。宋代に書かれた 3 例の話はすべて仏教の輪廻転生の話であり、仏教の影響を反映している。清代に書かれた 2 例は神罰を受け死後犬に生まれ変わった話である。

宋代に書かれた悪事の報いによる変身の話は、『夷堅甲志』巻 11「陳大錄為犬」[358]および『夷堅三志辛』巻 2「劉和尚犬」[359]である。「陳大錄為犬」の話においては、陳生という人が生前、「冒賄稔惡（お金に対して欲張りで、罪が深い)」ため、死後湖州の顯山寺というお寺の犬に生まれ変わった〔6.1-16〕。「劉和尚犬」の話においては、法希という僧が飼っている犬は、実は劉という和尚の母親であり、その母親は生前の罪のため死後犬に生まれ変わった〔6.1-18〕。この 2 例の中には、寺や僧の要素があり、仏教の罪で犬に生まれ変わるという因果応報・輪廻転生の思想を反映している。

宋代に書かれた執着で犬に変身した話は、『夷堅丁志』巻 2「鄒家犬」[360]である。この話においては、鄒氏という人が飼っている犬は、実は自分の父親であり、父親は「以貪戀故（執着が故に)」犬に生まれ変わったのである。話の最後に、父親「私のために仏事をし

---

[355] 王明著『抱樸子内篇校釋』、新編諸子集成、中華書局、1996 年、p. 300。
[356] 李冗撰 張讀撰・張永欽 侯志明點校『獨異誌　宣室志』、古小說叢刊、中華書局、1983 年、pp. 30-31。
[357] 陶潛撰・汪紹楹校注『搜神後記』、古小說叢刊、中華書局、1981 年、p. 52。
[358] 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第一冊、中華書局、1981 年、p. 93。現代日本語の要約は筆者による。
[359] 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第三冊、中華書局、1981 年、p. 1400。現代日本語の要約は筆者による。
[360] 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第二冊、中華書局、1981 年、p. 545。現代日本語の要約は筆者による。

てくれ」ということを僧の口を通して、息子に告げた〔6.1-17〕。この話においては、仏事や僧の要素があり、仏教の影響を反映している。

清代に書かれた 2 例は、『閲微草堂筆記』巻 1 交河老儒[361]、および『醉茶志怪』巻 3「人化犬」[362]である。『閲微草堂筆記』における話は、王五という人がお金を盗んだ罪で神罰を受け、死後犬に生まれ変わった話である〔6.1-20〕。「人化犬」の話では、丁という人が「贪暴霸产（貪欲・凶悪で、人の金品を強奪した)」のため、神罰を受けて死後犬に生まれ変わった〔6.1-21〕。

上記のように、人間が犬に変身するパターンの中に、宋代に書かれた 3 例は仏教思想を反映している。

中国の犬の変身譚の特徴として、以下の 2 点が挙げられる。①犬が人間に変身するパターンにおいては、犬が特定の人に変身する割合が大きい。時代が下るにつれ、変身先が多様化した。②人間が犬に変身するパターンにおいては、仏教要素が織り込まれた話の割合が大きい。

[361] 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、p. 14。現代日本語の要約は筆者による。
[362] 李慶辰著・金東点校『醉茶志怪』、歴代筆記小説叢書、斉魯書社、2004 年、p. 124。現代日本語の要約は筆者による。

## 6.2 日本における犬の変身譚

データベースを利用し、「犬」と「狗」をキーワードとし検索を行った結果、奈良時代から江戸時代までの犬の変身譚を 8 例抽出した。

抽出した人間が犬に変身するパターンの 5 例のうち、類話は 1 例ある。『今昔物語集』巻 20-16「豊前国膳広国、行冥途歸来語第十六」[363]は、『日本霊異記』上-30「非理奪他物爲惡行受報示奇事縁第卅」[364]の類話である。

上記の類話を除き、犬が人間に変身する話は 3 例、人間が犬に変身する話は 4 例あり、人間が犬に変身するパターンはやや多い。犬が人間に変身する話は、平安時代 2 例、江戸時代 1 例である。

まず、出現の早い人間が犬に変身する話について考察を行う。

日本において、犬の変身譚の出現は早く、奈良時代に著された『日本書紀』にすでに出現している。犬の変身譚の初出でもある奈良時代に著された『日本書紀』巻 14 における「文石小麻呂」[365]に関する話は、文石小麻呂が燃える火の中で犬に変身し、その後大樹臣によって斬られ、人の姿に戻った話である。話の要約は以下のとおりである。

> 播磨國の御井隈の文石小磨呂という人は、力があり、心が強かったが、行いが肆(ほしいまま)にして暴虐であった。路中で略奪し、道路の通行を妨げ、商人の船を差し止めて品物を奪い、国に租税も納めなかった。雄略天皇は春日小野臣大樹を派遣し、100 人の兵士を率いさせ、文石小麻呂の家を囲み焼かせた。すると突然、燃える火の中から馬ほどの大きさのある白い犬が飛び出し、春日小野臣大樹を追って来た。臣大樹が刀でこれを斬ると、それが文石小麻呂になったという。〔6.2-1〕

この話の中では、文石小磨呂はまず犬に変身して、その後人に斬られるとまた人の姿に戻った。奈良時代にある動物神に関する一連の変身譚とは異なり、話の中に文石小磨呂が動物神であることは示されておらず、この話は動物神が人間に変身して、本来の姿を現す話ではないように見える。また、文石小磨呂が犬に変身する原因について考えると、小野

[363] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注、訳『今昔物語集』③、新編日本古典文学全集 37、小学館、2008 年、 pp.78-82。付録〔6.2-3〕参照。
[364] 中田祝夫校注・訳『日本霊異記』、新編日本古典文学全集 10、小学館、1995 年、 pp.99-101。付録〔6.2-2〕参照。
[365] 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守校注・訳『日本書記』①＜全三冊＞、新編日本古典文学全集 2、小学館、2006 年、p.192-194。日本語の要約は同書の翻訳を参考にした。

臣大樹らに攻められ窮地に陥ったという受動的な原因や、犬に変身して力を発揮し、春日小野臣大樹を襲うという能動的な原因も考えられる。中村（1984）は、この話を人を害するために動物に変身した話としている[366]ことから、春日小野臣大樹を襲うための変身として見ていることがわかる。いずれにせよ、この話を人間が犬に変身する話として考えると、文石小磨呂は本来生きているままに変身できる人、つまり変身能力を備えた人であると考えられる。今まで見てきた日本の狐・蛇・虎の変身譚において、普通の人が生きたまま能動的に動物に変身する話は文石小磨呂の話しか存在せず、やや異色な話であると考えられる。中国において、ある地域の風土として、その地域の人は虎に変身する特別な能力があるといった話が存在しており、生きたまま能動的に変身するという面において、この話と通ずるところがあると言えよう。ここでは、中村（1984）に従い、この話は人間が犬に変身するパターンとして取り扱うこととする。

抽出した 4 例の人間が犬に変身する話は、上記の奈良時代の 1 例のほか、平安時代に 1 例、鎌倉時代に 2 例ある。

平安時代に書かれた、前世の悪業で死んだ後犬の身となった話は、『日本霊異記』上-30「非理奪他物爲惡行受報示奇事縁第卅」[367]およびその類話『今昔物語集』巻 20-16「豊前国膳広国、行冥途歸来語第十六」[368]である。この話の要約は以下のとおりである。

膳広国という人が亡くなったが、3 日後に生き返り、広国は黄泉の国で体験したことを語り始めた。「死別していた妻は、夫を憎み妬んだ罪により、仕打ちを受けていた。同じく死別していた父親にも出会って、父親は生前に犯した数々の罪のために、熱した銅柱を抱かされ、鉄釘を 37 本打ち込まれ、毎日 900 回鉄の杖で打たれていた。父親は『仏を造り、経を写し、私の罪苦を償ってくれ。私は死んだ直後、大蛇、犬、そして狸に姿を変え、三度、あなたの家に行った』などと語った。さまざまな生前の報いを見た後、幼い時に観世音経を写経した功徳により、黄泉の国の門を出て生き返った」などと語った。そして広国はこの体験談を記録し、世間に広めた。また、広国は父のために仏を造り、経を写し、三宝を供養して父の罪を償い、

366 中村（1984）、p. 25。
367 中田祝夫校注、訳『日本霊異記』、新編日本古典文学全集 10、小学館、1995 年、 pp. 99-101。現代日本語の要約は筆者による。
368 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注、訳『今昔物語集』③、新編日本古典文学全集 37、小学館、2008 年 12 月 24 日第一版第三刷発行、 pp. 78-82。現代日本語の要約は筆者による。

自分自身も正道へと赴いた。〔6.2-2〕〔6.2-3〕

この話では、写経などの功徳が強調されており、仏教思想を広めるために作られた話であるように見える。

鎌倉時代の『古今著聞集』巻 20-689「兵衛尉康忠死後犬と成りて院中に祇候の事」[369]の話において、兵衛尉康忠という人が死んだ後、院中のそばで奉仕する志が深かったため、犬になった〔6.2-6〕。この話は死んだ後の変身の話ではあるが、仏経・僧侶などの仏教要素が織り込まれていない。

同じく鎌倉時代に著された『沙石集』巻 7-9「前業ノ酬タル事」[370]は、遊女と昔交流した男 5 人がともに犬に生まれ変わった話である。話の要約は以下のとおりである。

信州の山寺の縁の下で母犬が五匹の犬の子を生んだ。しかし、母犬はそのうちの一匹だけには乳を飲ませようとしなかった。その子犬が痩せ細ったため、寺の者はその母犬を憎み、棒で殴った。その日の夜に、住職の夢の中に現れた母犬は、「私の前世は遊女だった。この子犬達はその頃、交流のあった 5 人の男である。そのうちの四人とは、気持ちも通い合い、わたしは情をもっていた。今乳を飲ませてもいとおしく、なんの煩わしさもない。しかし、一人だけ、私につきまとい苦しめるような事ばかりした。この子に乳を飲ませるのも情けなく、飲ませようとしなかった。今日、この男の甥が来てこの子を連れていくので、そのまま連れて行ってもらってください。」と言った。他の僧侶や小僧も同じ夢を見ていた。その日ある男が子犬が欲しいと寺を訪ねてきて来た。住職達が子犬の所に連れていくと、その男は痩せている子犬を抱きかかえた。住職はその男に、亡くなった叔父さんとその叔父さんが通っていた遊女の事を尋ねた。その男には亡くなった叔父がいて、自分を可愛がっていた事、その叔父には通っていた遊郭があったと言った。「その遊女には、叔父の他にも 4 人と交流があった。叔父はそれを恨んでいたが、それでも通っていた」と言って、子犬を連れて行った。〔6.2-7〕

[369] 長積安明、島田勇雄校注『古今著聞集』、日本古典文学大系 84、岩波書店、昭和 41 年 3 月 10 日第 1 刷発行、p. 518。
[370] 渡辺綱也校注『沙石集』、日本古典文学大系 85、岩波書店、昭和 41 年 5 月 6 日第一刷発行、pp. 304-306。現代日本語の要約は筆者による。

話の最後は、「先業ノ報ヒ、始テ可驚アラネドモ、正ク加様ノ事ヲ聞ニハ、彌々因果〔ノ〕理リ信ゼラル。…只昔ノ業、因縁ト可思。何事モ思ホドキテ、只妄念ナク、罪障ナクシテ、舊業ヲケシ、新シキ罪ヲ可愼」とし、仏教の前世の因縁について語っている。この話も仏教思想を広める話でもある。

次に、犬が人間に変身するパターンについて考察を行う。犬が人間に変身するパターンは 3 例ある。

平安時代に書かれた 2 例は、前世は犬であったが、『法花経』を聞いた功徳により、現世では僧に生まれ変わった話である。

まず、『今昔物語集』巻 14-21「比睿山横川永慶聖人、誦法花知前世語第二十一」[371]の要約は以下のとおりである。

永慶聖人という僧が幼い時から『法花経』を読誦して熱心に修行していた。ある日、彼の夢に、長老の僧が来て、「あなたの前世は犬であった。その犬は『法花経』の持経者の僧房にいて、僧が日夜『法花経』を読誦しているのを聞いていた。その功徳により、犬に生まれた果報を転じて人間に生まれ、僧になって『法花経』を読誦するようになった」と、永慶聖人に告げた。（以下略）〔6.2-4〕

次に、『今昔物語集』巻 14-16「元興寺蓮尊、持法花経知前世報語第十六」[372]の要約は以下のとおりである。

蓮尊という僧が『法花経』を習い、日夜読誦していた。長年読誦しているうちに、いつしか二十七品は暗誦できるようになったが、普賢品だけは暗誦できなかった。ある日、彼の夢に天童が来て、「あなたの前世は犬であった。あなたの母犬はあなたと一緒にある人の床下におったが、『法花経』の持経者が床の上にいて『法花経』を読誦していた。二十七品を読誦するのを犬はきいていた。ところが、普賢品の箇所まできて、母犬が起き出して出ていってしまった。それについてあなたも出ていったため、普賢品を聞かなかったのだ。あなたは前世で『法花経』を聞いたことによ

[371] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注、訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集 35、1999 年 4 月 20 日第一版第一刷発行、pp. 458-459。現代日本語の要約は筆者による。
[372] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注、訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集 35、1999 年 4 月 20 日第一版第一刷発行、pp. 448-449。現代日本語の要約は筆者による。

り、犬の身を変えてこの世で人間の身に生まれた。」と告げた。〔6.2-5〕

平安時代に書かれた上記の話のいずれにおいても、経を読誦する功徳が強調されているため、これらの話は仏教思想を広めるために作られた話であるように見える。平安時代に書かれた犬が人間に変身するパターンからも、仏教思想の影響が顕著にみられる。

江戸時代の『三州奇談』巻 4-7「家狗の靈妙」[373]は、犬の報恩の話である。子犬を可愛がって育てた日原喜兵衛夫婦に対し、子犬が夜に白衣の人に化けて、後ろの山が間もなく裂けるという災害を告げに来た。その後山が裂けて、数十人の人が死んだが、日原喜兵衛夫婦は子犬のおかげで災難から逃れることができた。〔6.2-8〕

上記の 8 例の話から見ると、変身前後の性別はほとんど男性である。人が犬に変身するのは、奈良時代の 1 例を除き、すべては死んだ後に犬に変身した話である。また、変身の方向を問わず、変身譚の中には、仏教要素が織り込まれた話が多く、これらの話には仏教の影響が顕著に見られる。日本の犬の変身譚の特徴として、以下の 2 点が挙げられる。①人間が犬に変身する話は先に登場し、例数もやや多い。②平安時代と鎌倉時代の変身譚は主に仏教思想を宣伝する話である。

[373] 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫第 47 編、博文館、1903 年、pp. 797-799。

## 6.3 犬の変身譚の歴史的変遷の日中比較

日本と中国の両国でも、犬の変身譚の登場は早い。ところが、日本においてはじめて登場した犬の変身譚は人間が犬に変身するパターンであり、それに対し、中国においてはじめて登場した変身譚は犬が人間に変身するパターンである。

中国において、犬の変身譚が登場した後、宋代までの間に人間が犬に変身するパターンは書かれておらず、犬が人間に変身する話が数多く書かれた。これらの話の中では、犬の変身は単なる怪異として捉えられ、犬が人間をからかって混乱させるなどのようなマイナスなイメージがほとんどである。犬の恩返しの話も書かれているが、犬型の神に限られている。また、種々の怪異を起こした人間に変身した犬に対しては、最後に打ち殺すのが一般的である。中国では、人間と一緒に暮し、人間の行動を知り尽くした犬は人間を摸倣するあるいは人間に変身することができると思われたが、この変身に対して否定的な態度をとっていたことがわかる。また、犬の習性を知り尽くした人間にとって、犬が怪異を為しても人にとってあまり脅威にならないということがうかがえる。

中国では、宋代を境目とし、犬の変身譚ははっきりと 2 つの部分に分けられる。宋代以前は犬が人間に変身するパターンを中心とする怪異の記録であり、宋代以降は人間が犬に変身するパターンに占められ、因果応報の道徳観への傾斜が顕著に見える。

日本では、中国の状況とは逆に、人間が犬に変身する話が先に登場し、例数もやや多い。平安時代と鎌倉時代の変身譚は主に仏教思想を宣伝する話である。

時間的に見れば、中国の犬が人間に変身する話の登場が格段に早く、日本の犬の変身譚に影響を与えていても不思議ではないが、日本においてこのパターンはあまり書かれていない。日本におけるこのパターンの内容から見ても、中国の犬が人間に変身するパターンが日本の犬の変身譚に全くと言ってもいいほど影響を与えていなかったと思われる。

では、犬が人間に変身するパターンにおいて、なぜ日本が中国からの影響を受けていなかったのか。

まず、海外の動物の変身譚が日本に流入し、日本において受け入れられ伝承した共通的な理由について考察する。中村（1984）は、蛇が女性に変身して人間と付き合う話[374]は中国南部から東南アジアにかけて分布した伝承が日本に移入されたと指摘している。[375]そしてこの話が奈良時代に日本に移入された後、人々の間によく迎えられ広がっていった理由

[374] 中村氏は、この一連の話を「トヨタマヒメ型の異類婚姻譚」と称する。
[375] 中村（1984）、p. 30-33。

として、以下の 2 点を挙げている。1 つ目は、これらの話が誕生した原因は、「動物祖先観という民俗がある」からである。中村氏は、「日本においても、氏族や集団を単位とした動物崇拝がかなり普及していたことはまちがいない」[376]、「外婚の（制度ではなくて）現象はもちろんありえたであろう」[377]と述べ、「王権や主神の祭祀権とは無縁の一般の日本人が、トヨタマヒメ型の異類婚姻譚をすなおに受けいれ、定着していった原因はみずからをある種の動物の子孫と同定する氏族の実在であり、そして世代から世代へながく累重する異氏族婚の体験、これにともなう愛憎の忘れがたい記憶であったろう。要するに私は、トヨタマヒメ型の異類婚姻譚は、神婚・神誕生秘儀を基盤とする神話と、信仰をことにする異氏族間の結婚の記憶との重なりによって、はじめて民間伝承として有力になりえたのだ、と考える」[378]と指摘している。また、中国の狐妖の話が平安時代に日本に流入してから、人々に受け入れられ発展してきた理由について、「九世紀初期には、特定の氏族がキツネを始祖とするという伝えが巷間に流布しており、それはキツネの変身説話をともなっていた。（中略）前後して中国から入った狐妖譚が始祖伝承系の変身説話に混交し、そのうえ時代をへるにしたがって狐妖譚の要素が強化されていく傾向があった」[379]と述べている。ただし、狐の変身譚は中国より移入された後、直ちに広く受け入れられてはいなかった。その理由について、中村氏は「しかしそれ[380]は、おそらく渡来系の氏族をめぐる伝承であり、しかも蛇信仰のばあいとちがって日本に受け入れ基盤をもっていなかったので、広く大きな力をふるうことはなかった。」

上記の分析から、以下の示唆が得られる。動物の変身譚が海外から移入されることは、奈良時代・平安時代である。これらの話が日本に受け入れられ、そして広まった条件は、これらの変身譚における動物に対して、日本では祖先崇拝が存在することである。

また、中村氏は、中世説話[381]が奈良時代・平安時代に書かれた説話を継承しつつも変型していき、「次第に自立し、ひとり歩きし始めた。」[382]と指摘している。つまり、中世になると、変身譚の海外からの移入があまりなかったのである。それは裏を返せば、海外からの変身譚を受け入れられやすい時代は基本的に奈良時代・平安時代にとどまっていると考

[376] 中村（1984）、p. 33。
[377] 中村（1984）、p. 33-34。
[378] 中村（1984）、p. 34。
[379] 中村（1984）、p. 96。
[380] 「狐を始祖とするという伝え」を指す。
[381] 中村氏が使った資料によると、主に 12 世紀～16 世紀の間、すなわち鎌倉時代、室町時代に書かれた説話を指す。
[382] 中村（1984）、p. 181-182。

えられる。

上記の 2 点は以下のようにまとめられる。海外の動物が人間に変身する変身譚が日本に伝来した時代は、主に奈良時代・平安時代であり、これらの時代の日本において、祖先崇拝の対象となった動物に関する変身譚のみが当時の人々に受け入れられたのである。

次に、奈良時代・平安時代の日本における祖先崇拝と犬の関係について考察する。

日本では、犬が非常に早い時代に家畜化されている。『日本民俗大辞典』では、犬については、「猟犬・番犬などの機能をもって飼育されてきたのは縄文時代以来のこと」であると記されている。また、同書では「弥生文化以降、犬を食用にすることは広くみられ、鷹の餌に利用されることもあった」[383]と述べられている。食用に供される動物と祖先崇拝の関係について、中村（1984）は、鹿と猪が祖神とされなかった原因について言及する際に、「シカとイノシシは容易に食用に供せられる。これは祖神として霊威をふるうには不利な条件になったかもしれない」と述べている[384]。つまり、日本では犬がこの時代にすでに家畜化されており、食用動物としても用いられていたことを踏まえると、犬を祖先として崇拝される氏族が存在しなかったとは言い切れないが、食用動物は基本的に祖先崇拝の対象となりにくいため、おそらく奈良時代・平安時代に犬を対象とする祖先崇拝は広く行われていなかっただろう。

上記の日本における海外の変身譚を受け入れる条件、および日本における奈良時代・平安時代の犬に対するイメージについての考察を合わせてみると、奈良時代・平安時代において、日本では、犬を祖先崇拝の対象として重んぜられなかった、もしくは犬を祖先とした氏族の勢力が強くなかったため、変身譚を受け入れる基盤が存在しなかった。そのため、日本の犬が人間に変身するパターンは、中国から影響を受けなかったと考えられる。

上記をまとめると、日本と中国の犬の変身譚はそれぞれ異なる道を歩んできたことがわかる。中国の犬が人間に変身するパターンは主に古来からの動物から人間へ変身する変化観に基づいて作られており、宋代以降の人間が犬に変身するパターンは主に仏教思想に基づいて作られた。日本では、犬の変身譚は主に仏教を広めるために作られ、仏教要素が織り込まれた話が多く見られる。この点については、第 8 章で詳しく述べる。

383 『日本民俗大辞典』上、p. 119。
384 中村（1984）、p. 68。

# 第 7 章 亀の変身譚

## 7.1 中国における亀の変身譚

### 変身譚の抽出と類話の処理

本節では、中国における亀類（鼈・黿を含む）の変身譚（以下、亀の変身譚と略す）を抽出し、時代順に分析していく。前述の鼈と黿は、それぞれすっぽん、アオウミガメ（大型すっぽん）となるが、形態上は亀に似ている。この 2 つの動物は、変身譚の中で亀との使い分けがされていないため、本章では亀と合わせて亀類として取り扱う。

データベースを用いて、「亀」・「龜」[385]・「鼈」・「黿」をキーワードとして調査した結果、19 例の亀の変身譚を抽出できた。なお、本章でも話の内容や主人公の名前が似ている話を類話と見なし、集計については、もっとも早く出現したもとの話だけを対象として扱い、それ以降に出現した類話は除外する。ただし、内容については類話も含めて考察する。

人間が亀に変身する話の中では、類話は 4 例ある。『搜神後記』巻 4(48)「化黿」[386]は、『搜神記』巻 14(356)「人化鼈」[387]の類話である。『太平御覧』巻 66 引『丹陽記』[388]および『太平廣記』巻 471 引『廣古今五行記』「宣騫母」[389]は、『搜神記』巻 14(357)「宣騫母」[390]の類話である。『太平廣記』巻 471 引『神鬼傳』「黄氏母」[391]は、『搜神記』巻 14(355)「人化黿」[392]の類話である。

上記の類話を除き、亀の変身譚は 15 例ある。

### 変身譚の概観

亀の変身譚にも、亀が人間に変身するパターンと人間が亀に変身するパターンが存在する。以下では、各時代における両パターンの例数を表 7.1 に示す。

---

385 「亀」の異体字である。
386 陶潛撰・汪紹楹校注『搜神後記』、古小說叢刊、中華書局、1981 年、p. 29。付録〔7.1.2-4〕参照。
387 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985 年、pp. 175-176。付録〔7.1.2-2〕参照。
388 李昉等撰『太平御覧』<全四冊>、中華書局、1995 年、p. 316。付録〔7.1.2-5〕参照。
389 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第十冊、pp. 3880-3881。付録〔7.1.2-6〕参照。
390 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985 年、p. 176。付録〔7.1.2-3〕参照。
391 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第十冊、p. 3880。付録〔7.1.2-7〕参照。
392 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985 年、p. 175。付録〔7.1.2-1〕参照。

表 7.1 各時代の亀の変身譚の例数

| パターン / 時代 | 亀が人間に変身する | 人間が亀に変身する | 時代別合計 |
|---|---|---|---|
| 晋代 | 2 | 3 | 5 |
| 南北朝 | 3 | 0 | 3 |
| 唐代 | 5 | 0 | 5 |
| 宋代 | 1 | 0 | 1 |
| 明代 | 1 | 0 | 1 |
| パターンの集計 | 12 | 3 | 15 |

表 7.1 に示したように、抽出した 15 例の亀の変身譚には、亀が人間に変身するパターンは 12 例ある。このパターンの話の多くは、唐以前に集中しており、宋代以降に書かれたものは 2 例しか存在しない。人間が亀に変身するパターンは、晋代に集中しており、その後は書かれていなかった。

### 7.1.1 亀が人間に変身するパターン

#### 7.1.1.1 各時代における亀が人間に変身する話

晋代に書かれた亀が人間に変身する話は 2 例存在する。

その中の 1 例は、美女に変身した亀が人間の男と交わる話であり、『太平廣記』巻 468 引『志怪』「謝宗」[393]に掲げられているものである。話の要約は以下のとおりである。

謝宗という人が船で呉皐橋を通った時に、同船の人が市場に行ったため、船の中で独りぼっちになってしまった。とある優しそうで美しい女性が船を訪れ、船の中で謝宗と出会った。この女性は謝宗と意気投合し、船に乗せてもらうよう頼み、許可をもらって船に乗った。その後、謝宗は、この女性と 1 年以上の付き合いがあった。謝宗と同じところに住んでいる人が覗き見ると誰もいないため、その女性が化け物であることを知り、一緒に化け物を捕まえようとした。(2 人が) 見ると、そこにいるのは、

[393] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第十冊、p. 3861。現代日本語の要約は筆者による。李剣国 (2011) pp. 430-433 によると、『志怪』は後晋の孔約によって書かれた『志怪』を指し、成立年代は『捜神記』よりやや遅れる。

枕のような大きさの亀 1 匹、こぶしのような大きさの亀 2 匹であった。謝宗は悲しんで、数日後にやっと 3 匹の亀の正体がわかった。大きな亀は謝宗と付き合った女性であり、こぶしのような大きさの 2 匹の亀は女性と謝宗の息子である。〔7.1.1-1〕

この話は、美女に変身した動物が人間の男性と交わるモチーフである。美女に変身した亀と 1 年以上付き合った謝宗は病気などにかかっておらず、美女との間に子供もできた。このことから、亀は謝宗に危害を加えるつもりはなかったことがわかる。

もう 1 例は、蛟（ミズチ）の従者に変身した黿が護符により退治された話である。この話は、『太平廣記』巻 468 引『三吳記』「姑蘇男子」[394]に掲げられている、美男に変身した蛟の従者に変身した黿に関するものである。話の中では、白衣の美男に変身した白い蛟は、人間の女性と交わり、最後に法術ができる人によって殺された。黿は蛟の従者として登場し、蛟と一緒に殺された〔7.1.1-2〕。この話では、黿の変身に関する記述が少なく、「餘六七者。皆身首異處。亦黿鼉[395]之類也。（残りの 6、7 人はみんな頭を切られた。これらの者も黿、揚子江鰐の類である。）」と述べたように、元々は水族の類であったことを示すことにとどまった。

南北朝にも、美女に変身した亀が人間の男と交わる話があり、例えば『太平廣記』巻 469 引『續異記』「朱法公」[396]が挙げられる。話の要約は以下のとおりである。

朱法公という人が出かける時に、年十六・十七歳の美女と出会った。その夜美女は朱法公と一緒に寝て、夜明けになると「明日また来る」と言い、去った。このように、美女は何日も、夜は朱法公と一緒に寝て、夜明けになると去った。ある日、夜明けに美女が朱法公のところから帰ろうとしたときに、下裳が開いてしまった。朱法公は開いた下裳の中の亀のしっぽと亀の足を見て、この美女が化け物であることに気づき、捕まえようとした。夕方に美女が来ると、朱法公は火をともして彼女を探したが、見つからなかった。〔7.1.1-5〕

[394] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第十冊、p.3855。現代日本語の要約は筆者による。
[395] 揚子江鰐である。
[396] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第十冊、p.3865。現代日本語の要約は筆者による。

この話の中では、美女に変身した亀は、人間の男性に危害を加えたことがない。

そのほか、『太平廣記』巻 469 引『廣古今五行記』「隋文帝」[397]には、人に変身した亀が宮中に仕える女房たちを訪ねる話が書かれている。皇帝は、「門番が厳しいので（人が入るはずがない）、その人はきっと化け物だ。また来たら、その人を切ろう」と女房たちに言い渡した。その後、人に変身した亀が再び来たところ、一太刀浴びせられた。亀は逃げ去って池に入ったが、その次の日に皇帝の命令で池干しが行われ、甲羅に切られた痕のある亀が捕まえられた。亀が殺された後、このようなことは二度と起こらなかった。〔7.1.1-4〕

この話においては、亀が人間に危害を加えたことに関する記述もない。

一方、南北朝時代には、人間に変身した亀が人間を惑わせ、人の精神を混乱させる話もはじめて登場した。

『太平廣記』巻 469 引『南雍州記』「蕭騰」[398]は、成年の男に変身した亀が蕭騰という人に仕える女房たちを惑わせ、彼女たちの精神を混乱させた話である。話の要約は以下のとおりである。

> 蕭騰という人は、官職につくため、彼に仕える女房たち数人と一緒に襄陽に向かった。途中、1 人の男が蕭騰を訪ね、車に乗せてもらうことを頼んだ。蕭騰はこの男の服がおかしいと思い、断った。数里[399]行って、その男はまた来て、車に乗せてもらうことを再び頼んだ。このようなことが何回も繰り返されたため、蕭騰はますます怪しいと思うようになった。それだけではなく、蕭騰に仕える女房たち数人の様子もおかしくなり、歌ったり笑ったり泣いたりするようになった。蕭騰が襄陽についた後、その怪しい男も襄陽に到着し、何日も蕭騰の家に居続けた。また、この男は、蕭騰の家で犬に乗ったり、詩を詠んだりして、自分が周瑜であると称した。蕭騰は祈祷でその男を払おうとしたが失敗した。そのため、弟子 20 人を率いてその男を刀でたたき切ろうともしたが、男の行動が速いため失敗した。趙曇義という道士はこの男に変身した亀を払いに蕭騰の家に来て、壇を設置した。すると、1 匹の亀が自ら壇の所に来て、死んでしまった。蕭騰に仕える女房たちももとの様子に戻った。〔7.1.1-3〕

[397] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第十冊、pp. 3867-3868。
[398] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第十冊、pp. 3866-3867。現代日本語の要約は筆者による。
[399] 長さの単位、1「里」は 500 メートル。

この話においては、男性に変身した亀が「魅蕭騰妓(蕭騰に仕える女房を惑わす」といったように、蕭騰に仕える女房たちを惑わし、精神を混乱させた。妖力で人に直接に危害を加える亀の変身譚としては、この話が最初だと考えられる。また、亀の退治に普通の人の祈祷や斬殺が効かず、最後に道士の力でようやく退治できたという描写から、この話の中では、男性に変身した亀は妖力が強く、厄介なものとして認識されていることがわかった。

唐代には、亀が人を助ける話、亀の恩返しの話、亀が人と雑談する話、亀が人を訓戒する話などが徐々に登場し、亀の変身譚の内容が豊かになった。

亀が人を助ける話として、『太平廣記』巻 470 引『廣異記』「謝二」[400]が挙げられる。話の要約は以下のとおりである。

出世できなかった書生が揚州で長く滞在した。同じところに住んでいる謝二という人が彼に同情し、「もし北に帰れば、お金を三百千[401]捧げる」と言い渡した。別れる時に、謝二は書生に手紙を渡し、「私の家は魏王池の東にある。池に着いたら、柳の木を叩いてください。家族が出てきたら、手紙を渡し、お金を受け取ることができる」と言った。書生は謝二の言ったとおりにし、謝二のお母さんに会い、お金を三百千もらった。書生は彼らが化け物ではないかと疑い、もらったお金を使う勇気がなく、このことを官に告げた。人々は、魏王池の中に黿の巣窟があり、書生が尋ねたところはおそらくその黿の巣窟であると言った。その後、数十人が池の中の黿の巣窟から黿を数十匹捕まえた。最後に捕まったベッドのような大きいな黿を含み、黿の一族を皆殺しにした。5 年後、書生がまた揚州に行った時に、謝二に会った。謝二は怒って「私はあなたに対して悪いことをしていなかったが、なぜ私を裏切ったのか。母と家族がみんな思いがけない災難で死んでしまったことは全部あなたのせいだ」と書生を叱って、去った。その後書生は途中で風に遭遇し、家族みんなが死んでしまった。人々はこれが謝二の復讐であると言っていた。〔7.1.1-7〕

この話においては、亀の書生に対する感情の変化が描かれている。亀は、この話の中で人のような感情を持ち、不遇の書生に同情し、彼を助けようとしたが、裏切られた後で怒

400 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第十冊、pp. 3870-3871。現代日本語の要約は筆者による。

401 「三百千」は数詞で原文によるもの。また、原文では「銭」や「貫」などのお金の単位については言及していない。

って書生および書生の家族を殺した。この話のように、唐代になると、亀の変身譚は、文章が長くなっただけではなく、亀が人間的に描かれるようになった

また、書生とその家族は「遇風（風に遭遇）」で死んだと記しており、亀は妖力で風を操ったと理解してもよかろう。亀が持つ妖力については、南北朝の変身譚では人の精神を混乱させることに対し、ここではさらに風を操って人を殺すことになり、唐代の変身譚においては亀の妖力がより一層強まったことが推測できる。

上記の話は亀が人を助けたが、人に裏切られた話である。その反対に、人が亀を助け、亀が人間に変身して恩返しする話も存在する。『太平廣記』巻 118 引『獨異志』「嚴泰」[402]の話は亀の恩返しの話である。話の要約は以下のとおりである。

> 嚴泰という人が五千のお金で漁師から亀 50 匹を買って、亀を放した。その日の夕方に、嚴泰の家に黒い服を着ている人が 50 人来て、嚴泰の両親に五千のお金を返した。その後、嚴泰が家に帰って来て、両親に聞かれた。それは嚴泰に助けられた亀がお金を返しに来たことがわかった。このような逸話があるため、嚴泰の家を寺にした。里人は嚴法寺と称した。〔7.1.1-8〕

人間に変身した亀が人と雑談する例として、『太平廣記』巻 230 引『異聞集』「王度」[403]が挙げられる。この話の要約は以下のとおりである。

> 王度の弟である王勣が石の堂に泊まったある夜に、2 人の男が彼を尋ねに来た。髭と眉毛が白く、痩せていた男は山公と自称し、色が黒くて背が低い男は毛生と自称した。雑談中、王勣はその 2 人の話を聞き、この 2 人は化け物ではないかと疑ったため、宝鏡を取り出した。鏡の光が出ると、背の低い男はただちに亀になり、髭が生えていた男は猿となった。夜明けまで鏡を掛けると、亀と猿は死んでしまった。〔7.1.1-9〕

この話は王度が手に入れた宝鏡の力を表すために作られた話である。この話では、人間

[402] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第二冊、p. 826。現代日本語の要約は筆者による。
[403] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第四冊、pp. 1765-1767。現代日本語の要約は筆者による。

に変身した亀が人と交流するなどの描写は少なく、その亀の出現は、宝鏡が持つ妖怪退治の力を証明するためだけだと考えられる。

『太平廣記』巻 470 引『瀟湘錄』「僧法志」[404]においては、漁師に変身した亀が法志という僧侶を訓戒した。話の要約は以下のとおりである。

> 法志という僧侶は、淮水の南で、1 人の漁師に食事に招待された。漁業は殺生の職業のため、法志は漁業をやめようと漁師を説得したが、漁師は法志に「私は善道[405]を聞いたが、漁業の仕事にとどまった。このことは、あなたが僧侶であるが、戒律を守るつとめことに専念していない[406]ことと似たような罪である」と言った。法志は恥ずかしく思って辞去した。振り返ってみると、漁師は黿になって淮水に入った。〔7.1.1-10〕

唐代に書かれた『九江記』「王奐」(『太平廣記』巻 469 引『九江記』「王奐」[407]) は、人間が傍観者の立場で女性に変身した亀らの対話を聞いた話である。話の要約は以下のとおりである。

> 王奐が建業から渚宮に向かう途中、江州で船を岸に着けた。夜が深くなると、川の中州から女性十数人の声が聞こえた。王奐がひそかに覗き見ると、葦の中に緑や青の服の十数人の女性が別れ話を語っていた。北風が吹き始め、潮が来る時に、彼女たちは亀になって川に入って去った。〔7.1.1-6〕

宋代の亀の変身譚は『太平廣記』巻 471 引『稽神錄』「宋氏」[408]の 1 例しかなく、亀の恩返しの話である。話の要約は以下のとおりである。

---

[404] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第十冊、p. 3876。現代日本語の要約は筆者による。
[405] 「善道」は「正しい道」の意味であるが、ここでは「仏教の道理」を指していると思われる。
[406] 原文ではどういう点で戒律を守らなかったことについては言及していない。これは、『太平廣記』が『瀟湘錄』の一部分のみを引用したからだと考えられる。『瀟湘錄』は散逸した文献である。
[407] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第十冊、p. 3865。現代日本語の要約は筆者による。
[408] 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1986 年、第十冊、pp. 3878-3879。現代日本語の要約は筆者による。

宋氏は一千のお金で漁師から黿を 1 匹買って、江に放した。数年後、宋氏が龍沙で船を岸に着けた時、元という国司が宋氏を招いた。国司は自ら自分は数年前に宋氏が放した黿であり、今は九江長という官職についていると紹介した。そして、宋氏の子供が数日後に風雨の中で溺れ死ぬことを告げ、この災いを回避する方法を宋氏に教えた。数日後、黿の言ったとおりに、風と波の害で多くの人が死んだが、宋氏の子供は助かった。〔7.1.1-11〕

この話の前半は、唐代に書かれた「嚴泰」の話と似ており、人が漁師から亀を買って、放した。それに対し、後半では、「嚴泰」の話にある「亀がお金を返した」とは異なり、上記の話では亀が宋氏の子供の命を助けたと記述している。

明代に書かれた亀の変身譚は『西湖遊覽志餘』巻 26[409]の 1 例のみである。この話は、唐代に書かれた「王奐」の話と似ており、人間が傍観者の立場で亀らの対話を聞いた話である。

1 人の船頭が西湖の断橋の下に船を停泊させた。その夜、身長が 1 尺にも満たない 3 人が話しているのを見た。3 人のうち、1 人は「張公が来ればどうする」と言い、もう 1 人は「賈平章は仁者ではない。絶対に許さない」と言い、残りの 1 人は「私はもうおしまいだ。あなたたちは賈家の衰退を見ることができる」と言い、3 人ともに水に入った。その次の日に、張公という漁師が橋の下で一匹の鼈を捕まえた。その後、賈家の勢いは衰えた。〔7.1.1-12〕

この話は最後に、「蓋物能知數而莫之逃也（物は天運を知ることができるが、天運から逃げることができないのであろう)」という一言で締めくくられている。

橋の下で話した 3 人の話から見ると、張公に捕まえられた鼈はおそらく「私はもうおしまいだ…」と言った人である。この話も「王奐」の話と同様に、人間が傍観者として人間に変身した亀の間の対話を聞いた話である。

### 7.1.1.2 亀が人間に変身する話の変遷

[409] 田汝成撰『西湖遊覽志餘』、欽定四庫全書、影印古籍、コマ番号 108－109、参照 http://ctext.org/library.pl?if=gb&file=73669&page=108。現代日本語の要約は筆者による。

### 美女に変身して男性と交際する話の登場

亀が人間に変身するパターンにおいて、亀は女性と男性のどちらにも変身できる。人と交流するために変身した話において、亀は大体美女や美男に変身する。美女に変身した亀が人間の男性と交際する話の出現は晋代であり、その後の南北朝時代にも 1 例あるが、唐代および唐代以降になるとこのような話は書かれなくなった。また、晋代と南北朝時代の 2 例の話においては、美女に変身した亀が人間の男性と交わったが、男性に危害を加えることはなかった。亀が美女に変身して人間の男性と交際・交わる話の登場は、狐・蛇などの動物の変身譚と同様に、晋代・南北朝時代に流行していた美女に変身できる動物が男性と交わるモチーフの影響を受けたと考えられる。

### 亀の妖力の増加

晋代の亀の変身譚において、亀の恐ろしい妖力についての描写はなかったが、南北朝になると、美男に変身した亀が人間の女性を惑わせ、彼女らの精神状態を混乱させるというような描写が出現した。また、亀の化け物を退治するのに道士の力を借りたという描写からも、南北朝になると人間に変身できる亀が、妖力の強いものとして認識されたことがわかる。このような認識は、唐代の変身譚からも見られる。「謝二」の話では、亀が風を操って謝二に復讐することへの言及は、亀の妖力を表現するものだと考えられる。以上をまとめると、亀の変身譚における亀の妖力について、晋代には言及されなかったが、南北朝・唐代になると、亀の妖力が強まったことが見受けられる。

### 亀の予言の能力

亀の変身譚は、唐代において、数がピークに達しており、内容から見ても人を助ける話や恩返しの話など多様な話が存在する。また、恩返しの話は宋代にも受け継がれた。宋代における亀の恩返しの話については、恩返しの原因が唐代の話と似ているが、恩返しの方法は唐代より複雑になるため、文学性が増したように見える。

宋代の「宋氏」の話における宋氏の子供に災いがあることを知ることや、明代の変身譚における「自分が張公に捕まえられる」と「賈家が衰える」を予言できたことから、亀には天運を知り、予言できる能力を持っていることがわかる。亀には予言の能力があるとい

う設定は、昔からの亀卜（キボク）[410]文化の反映であると考えられる。劉（1992）は、原始時代の「亀卜」の起源について詳しく述べている。以下では、劉の「亀卜」の起源についての考察をまとめる。

「天の意志・神の意志を伝えることを意味するため、占いで使われる道具は当時の人々に崇拝されるものに限られている。原始時代の人間は、自然に対する認識が非常に乏しい状態にあるため、大自然にある物や自然現象を神格化し、神として崇拝していた。しかし、自然崇拝とはあらゆる自然現象を崇拝するのではなく、人の生活に重大な影響を与える自然物のみを崇拝の対象としている。その中でも、動物崇拝が重要な地位を占めている。動物崇拝によって生み出された動物神たちには、亀神が含まれている。1987 年に安徽省で発掘された 4500 年から 5000 年前の玉亀[411]は、亀を崇拝した氏族が存在していたことを示している。このような亀に対する崇拝は、後世にも大きな影響を与え、皇室の印鑑の上にある亀形の装飾はこのような影響を受けている証拠になる。また、人間に崇拝されていたほかの動物と比べ、春秋時代から亀は麟・鳳・龍と並列し、「四霊」として認識されていた。また、亀は長寿の動物の象徴でもあり、当時の人々にとって占いに使う理想的な道具であった。[412]」

劉（1992）が言っているように、亀は古来から「占い」と強く結びついている。変身譚の中においては、亀が天運を知り、人に災害を回避する方法を教えることができるという描写は、おそらく亀と占いの強いつながりに関わりがあると考えられる。

### 7.1.2 人間が亀に変身する話

人間が亀に変身するパターンは晋代 3 例、南北朝 4 例存在するが、南北朝に書かれた 4 例のいずれも晋代に書かれた話の類話である。これらの類話は、あらすじおよび主人公は

[410] 亀の甲羅などを使って占いをすること。
[411] 劉（1992）は、陳剰勇「东南地区：夏文明的萌发与崛起——从中国新石器时代晚期主要文化圈的比较研究探寻夏文化」、『新華文摘』1991 年 6 月の内容を引用した。この部分の内容は以下のとおりである。日本語訳は筆者による。「1987 年，考古工作者在安徽省含山县凌家滩的新石器遗址墓地中，曾发掘出一件距今 4500 至 5000 年的精美玉龟。此龟包括背甲与腹甲两部分，均呈灰白色，体长 9.4 厘米，宽 7.5 厘米，高 4.6 厘米，厚 0.3～0.6 厘米。(1987 年、考古学者は安徽省含山県凌家灘の新石器時代の墓から、4500 年～500 年前の精妙な玉亀を発掘した。玉亀は背の甲と腹の甲両方を持っている、淡い灰色である。長さ 9.4cm、幅は 7.5cm、高さは 4.6cm、厚さは 0.3cm～0.6cm である)」
[412] 劉（1992）、pp.5-29 の内容をまとめたものである。

もとの話と同様である。

晋代に書かれた『搜神記』巻 14(356)「人化鼈」[413]の要約は以下のとおりである。

> 魏の時代に、清河の宋士宗という人の母親がある夏の日に入浴した時に、浴槽の中で鼈に変身した。母親がさしていた簪はまだその鼈の頭にある。数日後、鼈は家から逃げ出し、川に入った。しかし、数日後にまた家に帰って来て、見回りをし、一言も残さずに去った。母親の葬式を出すべきだと皆に言われたが、宋は母親が亡くなったのではなく、鼈に変身しただけだと考え、葬式を出さなかった。この話は江夏の黄氏の母親の話と似ている。〔7.1.2-2〕

上記の話の類話である『搜神後記』巻 4(48)「化黿」においては、主人公は上記の話と同様に、魏の時代の清河の宋士宗の母親である。この類話には、異なる表現が存在するが、あらすじは上記と同じで宋士宗の母親が入浴中に突然亀の類に変身し、家から去ったという展開である。ただし、変身後の状態について、「人化鼈」の話では「鼈」になったが、「化黿」の話では「黿」になった。

上記の 2 つの話では、最後に言及された江夏の黄氏の母親の話とは、晋代に書かれた『搜神記』巻 14(355)「人化黿」およびその類話である南北朝に書かれた『太平廣記』巻 471 引『神鬼傳』「黄氏母」を指している。「人化黿」の話の要約は以下のとおりである。

> 漢の時代に、江夏の黄氏の母親が入浴中に黿に変身した。その後、深い淵に入ったが、時々姿が見える。入浴した時にさしていた銀の簪はまだ頭にある。そのため黄氏は代々黿の肉を食べる勇気がなかった。〔7.1.2-1〕

この話の類話である「黄氏母」において、黄氏がそれから黿の肉を食べるのを恐れるという記述の部分がないが、あらすじは同じである。

母親が亀に変身する話について、そのほかにも、『搜神記』巻 14(357)「宣騫母」およびその類話である『太平御覧』巻 66 引『丹陽記』と『太平廣記』巻 471 引『廣古今五行記』「宣騫母」がある。いずれも丹陽の宣騫という人の母親が入浴中に黿に変身した話である。

[413] 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985 年、pp.175-176。

『搜神記』の「宣騫母」の話の要約は以下のとおりである。

丹陽の宣騫という人の 80 歳の母親が入浴して黿に変身した。この状況は黄氏と同様である。宣騫の兄弟 4 人が扉を閉め、広間で大きな穴を掘り、水を入れた。黿は穴に入って遊んだが、1 日や 2 日の間は常に首を伸ばして外を眺めた。扉がすこし開いているところを見て、広間から出て、深い淵に入って二度と戻ってこなかった。〔7.1.2-3〕

『太平御覧』巻 66 引『丹陽記』も丹陽の宣騫の 80 歳の母親が入浴の際に黿に変身した話である。上記の話と異なるところは 1 箇所のみあり、宣騫の母親は「後湖」という湖で入浴したと記されていることである。

『太平廣記』巻 471 引『廣古今五行記』「宣騫母」の話は『搜神記』の「宣騫母」と表現が異なる部分が存在するが、あらすじは同様である。

人間が亀に変身するパターンの例は、いずれも母親が入浴中に亀に変身した話である。これらの話の中で、宋士宗と黄氏は、母親が亀に変身して去ったことを生きている形を変えただけだと認識し、葬式を出さなかった。宣騫の母親の話においては、「其狀如黄氏（この状況は黄氏と同様である）」という記述から、宣騫の母親の変身と上記の 2 人の変身は同じようなコンセプトであることがわかる。

以上をまとめると、人間が亀に変身する話は 7 例しか存在しておらず、うち南北朝に出現した 4 例は、晋代に書かれた『搜神記』における 3 例の類話である。そして、これらの類話においては、新たに加えられた要素もほとんどない。このような状況から、人間が亀に変身する話は晋代に登場して以来、あまり発展していないことがわかる。

## 7.2 日本における亀の変身譚

日本における亀類（以下、亀と略す）の変身譚を調査する際に、中国の場合と同じように、「亀」・「龜」・「**鼈**」・「黿」をキーワードとして検索した。その結果、亀の変身譚は 3 例抽出できた。抽出した 3 例の話は、いずれも浦島伝説[414]に関連しており、女性に変身した亀が人間の男性と通婚する話である。浦島伝説についての研究は多数なされてきたが、本節では、中国の亀が人間に変身する変身譚と比較するために、この 3 例の話におけるモチーフおよび、新たに出現した要素・伝承され続けた要素について考察を行う。

日本において、もっとも早く登場した亀の変身譚は、奈良時代の『日本書記』巻 14「大泊瀬幼武天皇 雄略天皇」に記載された「水江浦嶋子」[415]の話である。話の要約は以下のとおりである。

> 丹波国余社郡管川の人水江浦嶋子が船に乗って釣りをしていた。すると、大きな亀が釣り上げられた。その亀は女になった。浦嶋子は彼女を妻にして、一緒に海に入った。2 人は蓬莱山に至り、仙人たちをめぐり見た。〔7.2.1-1〕

この話においては、男性は目の前の女性が亀であることを知りながらもその女性を妻にして、一緒に海に入り仙境である蓬莱山に至った。中村（1984）、村山(2004)、林（2010）[416]などの先行研究では、この話の中の「蓬莱山」や「歴覩仙衆（仙人たちをめぐり見た)」の記述に注目し、この話が中国の神仙思想[417]の影響を受けたと指摘している。話の中の亀が仙人の使いであろうと、仙人であろうと、この変身譚は亀が仙人・仙境と関連していることを反映している。

『風土記』逸文「丹後の国」に記載された「筒川の嶼子」[418]は上記の話と似ており、水江浦嶼子という男が亀を釣り上げ、女性に変身した亀を妻にした話である。前半の部分は似ているが、女性に変身した亀と男性の間の対話や後半に男性が故郷に帰る部分には詳しい描写があり、文学的叙述に富んだ作品だと感じさせられる。話の要約は以下のとおりで

---

414 漁師である浦嶋子（浦島の太郎）に関する一連の話を指す。
415 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守校注・訳『日本書記』②、新編日本古典文学全集 3、小学館、2006 年、p. 206。現代日本語の要約筆者による。
416 中村（1984）、p. 31。村山(2004)、p. 128。林（2010）、p. 4。
417 不老不死の実現を理想とする中国古代の民間思想である。神仙思想において、蓬莱山、方丈山、瀛洲山という 3 つの神山に仙人が住んでいると信じられている。
418 植垣節也校注・訳『風土記』、新編日本古典文学全集 5、小学館、2006 年、pp. 479-483。現代日本語の要約は筆者による。

ある。

与謝郡の日置里の筒川村に、水江浦嶼子という美男がいる。嶼子はある日一人で小舟に乗って海で釣りをした。3 日 3 晩釣りをしたが、一魚も得ないで、五色の亀を釣り上げた。不思議と思い、亀を船の中に置いた。そして嶼子が船の中で寝ている間に、亀が美女になり、自分は天上の仙の家の人であり、風雲に乗りやってきたと嶼子に言った。嶼子は彼女が神女であることを知り、疑念は氷解した。美女は嶼子に蓬山に行くことを誘って、嶼子の目をつぶらせた。すると、2 人は海中の大きな島に着いた。その地は玉で敷き詰められたようである。その様子は見たこともなければ、聞いたこともない。2 人は手を取り合って、一軒の立派な家の門にたどり着いた。美女は先に門に入り、嶼子は門の前で美女を待った。待っている間に、その美女の名前は亀比売であることを知った。そして亀比売が案内して門の中に入った。亀比売の両親も揃って出迎え、挨拶を交わした後に座った。両親が人の世と仙界との違いについて説明し、人と神が偶然に出会えた喜びを語り合った。亀比売の兄弟や隣人も参加した盛大な宴会となった。仙人たちが退席した後、亀比売が一人残った。2 人は夫婦になった。嶼子は仙界で 3 年を過ごし、突然望郷の念に駆られた。彼はしばらく故郷に帰り、両親の顔を見たいと亀比売に告げた。亀比売は悲しんで、涙を拭いた。亀比売とその両親、親族は悲しみをこらえ嶼子を見送った。亀比売は玉匣を嶼子に手渡し、「私のことを忘れないで。また再会しようと思うのであれば、この匣を固く握り締め決して開けないでください」と言い渡した。そして、二人は別々の船に乗った。亀比売は嶼子の目をつぶらせた。忽ち嶼子は故郷に着いた。嶼子は里の人に、「水江浦嶼子の家族は今どこにいる」と聞いた。村人は、もう 300 年前のことであるが、昔、水江浦嶼子という人が海に出て、その後再び帰ってくることはなかったと彼に告げた。嶼子は両親と会うことができなかった。嶼子は玉匣を撫でながら神女のことを思い、前の約束を忘れて玉匣を開けてしまった。たちまちかぐわしい香の匂いが風雲と共に翻って、天上に昇って行った。神女との約束に反した嶼子は、彼女と二度と会えないことを悟った。そして、涙に咽んで、ただ歩き回るしかなかった。〔7.2.1-2〕

この話においては、女性に変身した亀は、亀型の神女であることが明記されており、『日本書記』における「水江浦嶋子」の話と比べ、亀の神性が強調された。

浦島伝説のはじめの 3 書の 1 つとして知られている『万葉集』巻九の高橋虫麻呂作の長歌（歌番号 1740）「詠水江浦嶋子一首」においては、主人公は前掲の 2 つの話と同様に水江浦嶋子であり、筋立も似ているが、亀の変身の記述がない。水江浦嶋子と海神の娘の出会いについて、「海界乎　過而榜行尓　海若　神之女尓　邂尓（海の果てを　越えて漕いで行くうちに　海神の　神の娘に　偶然に　漕いで行き逢い[419]）」と記述しているが、亀が海神の娘に変身するなどの記述は存在しない。そのため、この話は亀の変身譚ではない。ところが、この話の後半部分は前掲の『風土記』逸文「丹後の国」と似ており、すなわち浦嶋子は絶対に開けてはいけない玉手箱を開けてしまい、罰を受けたのである。この部分の要約は以下のとおりである。

水江浦嶋子が海神の宮殿で海神の娘と 3 年を過ごした後、故郷に帰ることを願った。海神の娘は玉手箱を彼に渡し、それを絶対に開けてはいけないと言った。そして水江浦嶋子は玉手箱をもらい、故郷へ帰った。しかし、帰ってみたら、家や里も見当たらなかった。浦嶋子は「その箱を開けたら元どおりに家はあるだろう」と思いながら、箱を開けてしまった。すると、浦嶋子はただちに若者から老人へと変化し、死んでしまった。[420]〔7.2.2-1〕

室町時代になると、上記の「海神の娘」は亀と結びつけられるようになり、動物の恩返しのモチーフも加えられて、室町物語草紙『浦島の太郎』が作り出された。室町物語草紙『浦島の太郎』において、浦島の太郎と亀との出会いは前掲の『日本書記』・『風土記』と同様である。つまり、話は浦島の太郎が海で大きな亀を釣り上げたことから始まる。しかし、『日本書記』・『風土記』において、釣り上げられた亀はただちに女性に変身したが、『浦島の太郎』においては、その亀は浦島の太郎によって放された。『浦島の太郎』[421]において、その後の話は以下のとおりである。

亀を釣り上げた浦島太郎は、「鶴は千年、亀は万年」ということばから、亀をそのま

[419] 翻訳は小島憲之、木下雅俊校注・訳『万葉集』②＜全四冊＞、新編日本古典文学全集 7、2006 年、pp. 415 による。
[420] 現代日本語の要約筆者による。
[421] 大島建彦校注・訳『浦島の太郎』: 大島建彦　渡浩一校注・訳『室町物語草子集』、新編日本古典文学全集 63、小学館、2002 年、pp. 254-266。現代日本語の要約は筆者による。

ま海に放した。その次の日、浦島は海上で 1 人の女性と出会った。女性は浦島の船に乗り、浦島を竜宮まで連れて行った。そして、自分は浦島に放された亀であり、恩返しとして浦島と夫婦になりたいと言った。そして浦島は彼女と夫婦になり、3 年を過ごした。浦島は、家に帰りたくなり、彼女に請うた。彼女は手箱を浦島に手渡し、絶対に開けてはいけないと言って、浦島を見送った。浦島は故郷に帰り、ある 70 歳の翁に浦島のことを尋ねた。その翁は、「それはもう、700 年前のことだ」と答えた。浦島は悲しくなり、手箱の中に何かがあると思いながら、ある松の下で箱を開けた。すると、浦島は百歳の翁となり、非常に悔しかった。そののちに、浦島は鶴に生まれ変わり、亀と遊び戯れた。〔7.2.1-3〕

この話において、女性に変身した亀が住んでいるところは竜宮であることから、亀は龍女、もしくは海神の娘であることが推測できる。つまり、亀型の海神の娘が女性に変身し、浦島と夫婦になったのである。『万葉集』において、海神の娘は亀とは関係がないが、この話においては、亀の変身と海神の娘が結びついた。亀の変身と海神の娘が結びつけられたのは、『日本書記』・『風土記』における亀型の仙人が女性に変身する話が、海神の娘に使い回されたからだと考えられる。また、『浦島の太郎』における海神の娘は、恩返しのために浦島の太郎と結婚したという部分が新たに付け加えられた。これは、動物の恩返しというモチーフに影響されたからだと思われる。さらに、箱を開けた後浦島がただちに若者から老人になった部分は『万葉集』から移入されたものであるが、話の最後に浦島が死んだ後、鶴に生まれ変わったという部分は新たに付け加えられるものとなる。

## 7.3 亀の変身譚の日中比較

日本と中国において、亀の変身譚は蛇、狐、犬ほど多く書かれておらず、中国の場合は唐および唐以前に集中し、日本の場合は奈良時代と室町時代に集中している。また、日本の亀の変身譚について、奈良時代に書かれた亀の変身譚には、中国の神仙思想の影響が顕著にみられる。

中国における亀が人間に変身するパターンにおいて、晋代に初登場した「謝宗」の話と『日本書記』に初登場した変身譚はともに女性に変身した亀が男性と交わる話である。この 2 つの話は、一見似ている部分もあるが、亀のイメージには大きな違いが存在する。『日本書記』に記された話において、女性に変身した亀は仙人・仙境と関連していることが記述されている。井原（1993）は「浦島子伝承の原形の構造でその基本をなす要素は神婚伝説」と指摘している[422]。つまり、『日本書記』における女性に変身した亀は仙人あるいは神に近い存在である。

それに対して、「謝宗」の話においては、美女に変身した亀について、神性がある、あるいは神に近いというような描写はなく、その亀を「知是邪魅（妖怪であることを知った）」としている。「朱法公」の話も、「方悟是魅（やっとそれは妖怪であることを悟った）」という記述により、亀を妖怪の一種としているのである。

また、中国の「謝宗」と「朱法公」において、男性は女性が亀であることを知らずに交際しはじめ、最後に女性が亀であることに気づいてから別れた。つまり、亀は、自分の正体を隠し、男性をだまして交際・交わったのである。なぜなら、おそらく男性に正体を知られると、拒まれる可能性が高いからだと思われる。それに対し、日本の 3 例の話においては、いずれも男性は女性が亀であることを知ったうえで夫婦の契りを結んだ。このような違いから、変身できる亀は、中国の亀の変身譚において、恐ろしい化け物として認識されたが、日本の亀の変身譚においては仙人・神として認識されたことが推測できる。

日本の亀の変身譚がはじめて登場した奈良時代までに、中国ではすでに晋代・南北朝に亀の変身譚が存在していた。ところが、変身譚の内容を比較してみると、日中両国の亀の変身譚に相違が存在しており、日本の亀の変身譚は中国の亀の変身譚から直接の影響を受けていないと思われる。一方、日本における亀の変身譚は、中国の文化から、7.1 で述べた長寿・四霊・亀神のような亀の瑞祥のイメージや神仙思想などに大きく影響されたと考

[422] 井原（1993）、p. 44。

えられる。

また、上記の相違点以外にも、中国の変身譚に登場したのは淡水亀であるのに対し、日本の変身譚に登場したのは海亀であるという相違点も存在している。日本の 3 例の変身譚はいずれも海亀の変身であるが、中国の 19 例の変身譚においては、海亀の変身は 1 例もない。このような相違が生じた原因として、以下のことが考えられる。まず、中国において、亀の変身譚の中に記された地名の多くは、晋代・南北朝時代・唐代の文化の中心地である「江夏・襄陽（武漢周辺）」「丹陽・建業（南京周辺）」「揚州」となり、海から離れている、川や湖に近い地域である。文人にとって、淡水亀は海亀より身近な存在であり、素材として変身譚に織り込みやすいと思われる。それに対し、日本は海に囲まれた国であり、中村（1984）も古くから「海の向こうにあって祖霊が去来し、穀物や富や愛をもたらす常世の国の信仰がなされていた」[423]と述べている。海の彼方の常世の国と人間の世界をつなげる橋のような役割を果たした亀は、淡水亀ではあり得ないと考えられる。

日中両国の亀の変身譚に関する歴史的変遷の共通点として、中国では唐代、日本では室町時代に、亀の恩返しというモチーフが登場したことが挙げられる。また、亀が人間に恩返しをする原因も共通しており、いずれも亀が人によって放されたためである。

中国では人間が亀に変身する話があったが、日本には存在しない。その理由として、以下のことが考えられる。

狐・蛇・犬の変身譚から見ると、日本において、人間が動物に変身するパターンは平安時代に大いに発展してきた。しかも、そのほとんどは、仏教関係の説話集に収録されている。これらの人間が動物に変身する変身譚は、最初は、平安時代に、悪の業を積み重ねていくと、畜生道に堕ちるという仏教思想をもとに作られた話である。そして、平安時代に創作された仏教思想が含まれる変身譚は、それ以降の時代の変身譚の素材やモデルとなるものが多い。ところが、亀のイメージは、奈良時代より、すでに中国からの神仙思想の影響を受けたため、亀の「不老不死」・長寿といったイメージが日本には広く受け入れられた。そのため、仏教思想をもとに創作された人間が動物に「堕ちる」話と、既存の亀の不老不死・長寿のプラスのイメージとの間には矛盾が生じる。つまり、日本においては、亀の中国から舶来したプラスのイメージと仏教思想の「畜生道に堕ちる」イメージがかみ合わないため、人間が亀に変身する話が書かれていなかったと思われる。

[423] 中村（1984）、p. 35。

# 第 8 章 横断的考察

本章では、特定の動物の変身譚の特徴となっていること、およびすべての動物に共通することについて考察を行う。具体的には、まず、中国の狐の変身譚の独特な要素、「内丹」が狐と結びつけられた原因について考察を行う。次に、中国の虎の変身譚の特徴である虎皮の脱着による変身について考察を行う。さらに、すべての動物を取扱い、①動物が女性に変身する話の歴史的変遷、②「動物が人間に変身する」「人間が動物に変身する」両パターンの割合、③仏教要素が織り込まれた話の割合という 3 つの角度から日中における動物の変身譚の歴史的変遷の特徴を比較する。

8.1 では、狐とほかの動物と比べて、「内丹」と結びつけられた原因について考察を行う。

8.2 では、虎の変身譚の特徴となる皮の脱着による変身について考察を行う。

8.3 では、日中両国における動物が女性に変身する話の歴史的変遷について考察する。まず、中国おける動物が女性に変身する話の登場および歴史的変遷について考察し、変遷に特に影響を与えた「女色禁忌」の観念について、儒教の影響力を軸に分析する。次に、日本における動物が女性に変身する話の登場および歴史的変遷について考察し、そこに見られる特徴を中国と比較する。

8.4 では、日中両国における狐・蛇・犬・亀の「動物が人間に変身する」「人間が動物に変身する」両パターンの割合を比較し、異なりが生じた原因について考察する。また、補足として、日本ではオリジナルな話がないため、上記の比較に含まれていない虎について、中国における虎の変身譚の両パターンの割合を分析し、中国のほかの動物と異なる点を提示し、異なりが生じた原因について考察を行う。

8.5 では、まず、狐・蛇・犬・亀の日中両国における仏教要素が織り込まれた話について考察し、比較する。次に、中国の虎の変身譚における仏教要素が織り込まれた話について考察する。最後に、両国における変身譚に、仏教要素が織り込まれた話の割合に差異があった原因について考察を行う。

## 8.1 狐の変身譚の独特な要素——「内丹を錬成する」

3.1.3.5 で述べたように、ほかの動物の変身譚に見られない、狐の変身譚の独特な要素として、「内丹を錬成する」が挙げられる。内丹を錬成することは、明代の狐の変身譚に初めて現れた。明代の狐の変身譚では、内丹を錬成することは、狐が変身して人間と交わりを為す 1 つの目的である。

「内丹」の原材料となるものは「精気」、もしくは「気」であり、「内丹」の考え方の根本となる思想は、中国の「気」の思想である。「気」の思想は、中国の古代から存在していた思想であり、すべての物質や現象は「気」によって構成されているという考え方である。

「気」の思想から、「陰陽」の思想が派生した。「「気」は，軽重，清濁の性質によって，陰陽二気に大別される．陰陽は，消長作用によって季節の推移を主宰するとともに，二元論的な立場から天地，日月，寒暑，男女などをそれぞれ象徴する[424]」とされている。明代の『五雑俎』巻 9 「物部一」の「狐は陰類であり、陽を得てようやく（内丹を）作り出せる。そのため雄の狐であっても女性に変身し、男性を惑わす」における「女性は陰類、男性は陽類」の考え方は、上記のような「陰陽」の考え方に基づいて形成された考え方である。

「陰陽」の考え方以外に、「五行」という考え方が存在していた。「五行」は、「初源的に生成される基本要素として木・火・土・金・水の五行を想定し，季節を循環させる役割を賦与する[425]」とされている。

「陰陽」と「五行」の思想はその後結合した。池澤(2012)は、「「気」の思想は，（中略）原初の一「気」から別れた陰・陽の二気が相互に反応することで万物を形成するという陰陽説に発展し，さらに木火土金水の五つの位相の相互交替により，万物が変化するとする五行説が結合していく[426]」と述べている。

上記のように形成した「陰陽五行説」は、中国の伝統医学、道教の養生の身体技法などの基本的な思想となった。武田（2012）は、「陰陽五行説の展開において，鍼灸医術・本草学（薬用植物の研究）および道教の身体技法などの理論を構築するうえで，中心的な役割を果たしたことが特筆される[427]」と述べている。

「内丹」と直接に関わっているのは、「陰陽五行説」をもとに形成した①道教の身体技法、②晋代の葛洪が『抱樸子』で主張した物質的錬金術による不死の丹薬の錬成という 2 点である。

まず①道教の身体技法について、武田は以下のように説明している。「道家者流が養生思想を唱え，健康体を維持し，長生回春をめざす身体技法がさまざまに考案された．すなわち，健康体操（導引），呼吸法（行気・胎息），食事・服薬（辟穀・服餌），性愛技法（房中）

[424] 武田時昌（2012）、『世界宗教百科事典』、p. 206。
[425] 武田時昌（2012）、『世界宗教百科事典』、p. 206。
[426] 池澤優（2012）、『世界宗教百科事典』、p. 209。
[427] 武田時昌(2012)、『世界宗教百科事典』、p. 259。

などである[428]」。

次に、②の物質的錬金術による不死の丹薬の錬成は、唐代に流行したが、中毒の事例が多く、費用と手間がかかったため、一般的に普及することができなかった。宋代になって、①の身体技法と結合して、体内で「気」を材料とし、それを錬成・純粋化することで、「内丹」を作り出すという考え方が流行するようになった。具体的に、「内丹」を作り出す身体技法として、性愛技法もしくは呼吸法を駆使して、異なる気（陰陽二気、あるいは天地の精気など）を配合して「内丹」を錬成する。

3.1.3.5 で挙げた『五雑俎』巻 9 「物部一」の「狐が人を惑わす目的は人の精気を取り、それをもって（内丹を）作り出す」という記述は、上記の身体技法の中の性愛技法（房中術）で「陰陽二気」を合成し、「内丹」を錬成するという考え方を表わしている。

では、なぜ性愛技法を駆使して「内丹」を錬成するという考え方が、蛇・虎・犬・亀の変身譚に取り入れられなかったのか。これは、狐はほかの動物と比べ、淫蕩のイメージを有するからだと考えられる。3.1.2.2 で述べたように，狐が淫蕩であるという考え方は古くから存在していた。宋代に「内丹」を錬成するという考え方が流行してから、明代に「内丹」を錬成する方法としての性愛技法が、ほかの動物と比べて淫蕩のイメージを有する狐と結びつきやすかった。そのため、「内丹を錬成する」要素がその後の明代になると狐の変身譚に取り入れられるようになった。明代から狐と「内丹を錬成する」こととが結び付けられた後、清代になると、性愛技法以外に、「煉形」や「服気」などの術を使って、「内丹を錬成する」ことも可能になったが、これは明代から狐と「内丹を錬成する」こととが結び付けられたことに基づいた発展と見てもよかろう。

[428] 武田時昌(2012)、『世界宗教百科事典』、p. 259。

## 8.2 動物の変身譚における皮による変身

5.1.1.1 と 5.1.3.3 で述べたように、中国の虎の変身譚において、虎皮の脱着による変身が存在している。これは、虎の変身譚の特徴である。虎皮の脱着による変身の変身譚は、唐代において数多く書かれた。ところが、これまでの調査からは、日中における狐・蛇・犬・亀の変身譚の中に、動物の皮の脱着による変身は見当たらない。

では、なぜ動物の皮による変身方法は、狐・蛇・犬・亀の変身譚に存在せず、虎の変身譚に存在しているのだろう。その原因として、以下の 2 点が挙げられる。

①虎は大型動物であり、人間と同じくらいの大きさである。成人が虎皮をかぶる場合、身体の大きさから見ると好都合である。

②狐・蛇・犬・亀と比べ、虎皮はひときわ目立つ存在である。虎皮の紋様がきれいであり、虎は大型動物であることもあって、そのきれいな毛皮が特に動物の中で目立つ存在であろう。また、虎は古代の人々にとって捕獲しにくく、危険な動物であるため、その皮を手に入れるのも非常に困難であった。つまり、虎皮はきれいなだけでなく、希有な存在でもある。虎皮にはこのような性質があったため、変身譚の書き手の注目を引き、変身の道具として設定されたのではないかと考えられる。

また、「皮」にめぐる動物が人間へ変身する仕方は、虎の変身譚に登場する前に、すでに鳥の変身譚に出現していた。もっとも早く出現したのは、晋代の『搜神記』巻 14（354）「毛衣女」[429]である。この話において、鳥は羽衣を脱ぐことによって、女性に変身した。君島(1969)は、この話を以下のように要約している。

> 「予章新喩県の男子、田の中に六七女有るを見る。皆毛衣を着、鳥なるを知らず。匍匐して往きて其の一女解する所の毛衣を得、取りて之を蔵す。即ち往きて諸鳥に就く。諸鳥各々飛び去れども、一鳥独り去るを得ず、男子取りて以て婦となす。……[430]」

また、君島は、「さらに玄中記の方は、右の引用文（上記の「予章……となす。……」を指す。筆者注）の前に、「姑獲鳥夜飛昼蔵。蓋神鬼類。衣毛為飛鳥，脱毛為女人。云々……」とあって、「毛を衣れば飛鳥となり、毛を脱げば女人となる」という不思議な毛衣なるものの機能を明らかに示している。」と述べている。つまり、晋代において、毛衣の脱着によっ

[429] 陶潜撰・汪紹楹校注『搜神後記』、古小説叢刊、中華書局、1981 年、p. 175。
[430] 君島(1969)、p. 415。「……」は、君島の原文とおりに引用した。

て、鳥が人間に変身し、また鳥の姿に戻るという形態上の切り替えができるというような考え方がすでに存在していた。

虎の場合は、もともとは虎で、皮を脱いで人になるパターンと、もともとは人で、皮を着て虎になるパターンという 2 つの方向性がある。鳥の場合は羽毛を脱いで人間になるパターンはあるが、人間が羽毛を着て鳥になるパターンはない。しかしながら、毛皮の脱着によって、人間と動物の姿を切り替える点では共通している。つまり、虎の変身譚の先駆けとなるものが鳥の変身譚に見られるということは注目に値する。

## 8.3 日中両国における動物が女性に変身する話の変遷

### 8.3.1 中国における動物が女性に変身する話の登場と変遷

**動物が女性に変身する話の登場**

中国において、動物が人間に変身するパターンの登場は非常に早く、狐・犬は漢代、蛇・虎・亀類（以下、亀と略称する）は晋代に登場した。犬が女性に変身する話は漢代に初登場し、亀は晋代である。ところが、狐・蛇・虎が人間に変身する変身譚が初登場した時には、男性にしか変身せず、狐は晋代、蛇は唐代、虎は南北朝時代になってはじめて女性に変身するようになった。

動物が人間に変身する変身譚の中で、女性に変身して人間の男性と交わる話の初登場の時代について見ると、狐と亀は晋代、虎と犬は南北朝、蛇は唐代である。

上記の動物が女性に変身する話の登場から、2 つのポイントが見てとれる。1 つ目は、動物が人間に変身するパターンにおいて、女性に変身する話が登場するのはおおよそ晋代以降であること。2 つ目は、狐・犬を除き、動物が女性に変身する話の登場と同時期に、女性に変身した動物が人間の男性と交わるパターンが登場したことである。このパターンは動物が女性に変身する話の中でよく見られるパターンである。男性に変身した動物が人間の女性と交わる話は存在するが、動物が女性に変身する話が登場した後、男女の交わりを目的とした動物の変身は、女性に変身するほうに集中するようになった。つまり、動物が男女の交わりを目的として人間に変身する際には、女性に変身するのが主流となった。

**動物が女性に変身する話の歴史的変遷**

以下では、まず、女性に変身した動物が男性と交わる、あるいは男性を惑わせる話の各時代の特徴についてまとめ、登場と変遷の文化的背景について考察する。

上で述べたように、女性に変身した動物が男性と交わる、あるいは男性を惑わせる話の初登場は晋代である。晋代に狐と亀の変身譚に登場したこのパターンの話の例として、『捜神記』巻 18（425）「阿紫」（本論文 3.1.2.2 参照）と『太平廣記』巻 468 引『志怪』「謝宗」（本論文 7.1.1 参照）が挙げられる。物語の展開の面において、2 話は共に美女に変身した狐・亀が男性と知り合って愛し合い、しばらく共に生活し、最後に別れるというように構成されている。話の中で、男女の出会いは女性が積極的に男性を訪ねるが、妖力で男性を損なうつもりはなく、結果的にも男性を病気にさせたり、殺したりしない。また、女性は動物であることが知られると、2 人は別れを迎えるが、女性の本当の姿を見抜

いた人は道士など不思議な力がある人ではなく、普通の人である。さらに、女性の結末として、殺されることもなく、例えば、「阿紫」の話においては、狐は逃げ去り、「謝宗」の話においては、狐は捕まえられることになる。

上記の分析から、晋代における女性に変身した動物が男性と交わる話の特徴として、以下の 4 点が挙げられる。①物語の構成の面において、「知り合って愛し合う」・「共に生活する」・「別れる」といった各部分が共通している。②女性の本当の姿が見抜かれたことが別れるきっかけであるが、それを見抜いた人は道士など不思議な力がある人ではなく、普通の人である。③女性に変身した動物は妖力で人間に病気・死などの大きな危害を加えたりしない。④話の内容から見ると、女色禁忌を意図して書かれた物語ではない。また、この 2 つの話には、女性に変身した動物と人間の男性の 2 人の愛し合う幸せと喜びが描かれている。この点について、2 話においては、それぞれ「最高に楽しかった[431]」、「それから船頭が毎晩しゃべったり笑ったりする声が聞こえた[432]」と表わしている。

南北朝に書かれたこのパターンの狐・亀の話および新しく登場したこのパターンの虎・犬の話の中において、亀の変身譚である『太平廣記』巻 469 引『續異記』「朱法公」（本論文 7.1.1 参照）と虎の変身譚である『異苑』巻 3 の「徐桓」（本論文 5.1.1.1 参照）の話は構成上、知り合って愛し合う→共に生活する→別れるというようになっているが、狐の変身譚である『太平廣記』巻 447 引『洛陽珈藍記』「孫巖」（本論文 3.1.3.2 参照）および犬の変身譚である『異苑』巻 8 の「沈覇」に関する話（本論文 6.1.2 参照）の話は、知り合って愛し合う部分が欠けている。この 4 話の中で、「孫巖」においては、3 年間共に生活してきた妻が狐の化け物であることを夫に見抜かれた後、狐は彼の髪の毛を切って逃げ去ったが、共に生活していた 3 年間、男性に危害を加えるようなことはしていない。また結果的に男性を病気にさせたりもしていない。「孫巖」を除く残りの 3 話においても、女性に変身した動物は積極的に人間の男性と接触するが、妖力で男性に危害を加えたりしない。また、この 4 話において、女性の本当の姿を見抜いたのは男性自身あるいはほかの普通の人であり、道士など不思議な力がある人ではない。

上記の分析から、南北朝の女性に変身した動物が男性と交わる話の特徴として、以下の 4 点が挙げられる。①物語の構成の面において、晋代とは異なり、知り合って愛し合う→

---

431 原文は「樂無比也」、現代日本語訳は筆者による。干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985 年、p. 222。

432 原文は「自爾船人夕夕聞言笑」、現代日本語訳は筆者による。李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第十冊、p. 3861。

共に生活する→別れるという 3 つの部分の中に、知り合って愛し合うという部分が欠けている話も存在する。また、晋代とは異なり、化け物である女性と人間の男性が愛し合う喜びについてはあまり描写されていない。②晋代と同様に、女性に変身した動物は妖力で人間に危害を加えたりしない。③晋代と同様に、女性の本当の姿が見抜かれたことが別れるきっかけであるが、それを見抜いた人は道士など不思議な力がある人ではなく普通の人である。④晋代と同様に、物語は怪異の記録であり、女色禁忌の意図は読み取れない。

隋代・唐代・五代に書かれたこのパターンは晋代と南北朝よりも多様化した。まず、物語の構成が多様化した。南北朝と同様に、知り合って愛し合う→共に生活する→別れるという 3 つの部分がそろっている話も存在すれば、一部欠けている話も存在する。例えば、狐の変身譚である『太平廣記』巻 452「任氏」（本論文 3.1.4 参照）、『太平廣記』巻 450 引『廣異記』「王苞」[433]、虎の変身譚である『太平廣記』巻 426 引『五行記』「袁雙」（本論文 5.1.2.2 参照）においては、女性に変身した狐・虎が人間の男性と知り合って愛し合い、仲良く生活し、最後に別れた。ところが、蛇の変身譚である『太平廣記』巻 458 引『博異志』「李黃」の第 2 話（本論文 4.1.2.1 参照）においては、「知り合って愛し合う」と「共に生活する」の部分が欠けている。虎の変身譚である『太平廣記』巻 427 引『原化記』「天寶選人」（本論文 5.1.2.2 参照）においては、女性に変身した虎は男性と何年も共に生活してきたが、女性が男性とともに生活するようになった理由は男性の無理強いであるため、「知り合って愛し合う」の部分が欠けている。

次に、動物の化け物と交わった男性の結末として、病気になる、もしくは死んでしまうというような結末が現れた。晋代と南北朝時代においては、女性に変身した動物は人間の男性を害せず、女性と交わった男性の結末についての描写がない。ところが、唐代になると、女性に変身した動物が妖力で男性を殺す話が出現した。例えば、唐代に初登場した女性に変身した蛇の話である『太平廣記』巻 458 引『博異志』「李黃」の 2 例（本論文 4.1.1.1・4.1.2.1 参照）においては、蛇の化け物に惑わされた 2 人の男が蛇のせいで体が水になり、もしくは頭が裂けて死んでしまったというような記述がある。

また、女性の本当の姿を見抜いた人が多様化し、道士が登場した。例えば、狐の変身譚である『太平廣記』巻 450 引『廣異記』「王苞」[434]が挙げられる。この話の要約は以下の

[433] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1986 年、第九冊、p. 3677。付録 3.1.1-19 参照。
[434] 李昉等撰『太平廣記』〈全十冊〉、中華書局、1961 年第一版 1986 年 3 月第 3 次印刷、第九冊、p. 3677。

とおりである。

王苞という人が彼の家に宿を借りた婦人と付き合って、仲がよかった。葉静能という道士が王苞の体についた狐のにおいに気づき、その婦人は野狐であると言った。そして護符を書いて王苞に与え、それを婦人の口に吐くようにと指示した。王苞は家に帰って、道士の言った通りにした。すると婦人が老いた狐に変身して、道士の所に行って、道士に拝謝した。道士は狐に、今回は命を許すが、二度と王の家に来ないようにと訓戒し、狐を放した。〔3.1.1-19〕

上記の分析から、唐代の女性に変身した動物が男性と交わる、もしくは男性を惑わす話の特徴として、以下の 3 点が挙げられる。

①物語の構成が多様化した。知り合って愛し合う→共に生活する→別れるという 3 つの部分がそろっている話もあれば、一部欠けている話もある。ごく短い話の中に、化け物と男性の交際を中心に書いた晋代と南北朝時代の話と比べ、唐代には文章が長くなり、男女の交際を中心に書いたものもあれば、「王苞」の話のように、女性の本当の姿の見抜かれ方についての描写に力を入れたものもある。また、男女の別れる原因について、晋代・南北朝時代は女性が逃げ去るか、人間に捕まえられるといった原因で男性と別れるが、唐代の話においては、上記のような別れの原因もあれば、女性が病気で死んだ（『宣室志』巻 10(135)「許貞狐婚」（本論文 3.1.4 参照））、あるいは犬にかみ殺されて死んだ（『太平廣記』巻 452「任氏」）、化け物の死で別れる場合もある。

②晋代・南北朝とは異なり、女性に変身した動物が妖力で人間に危害を与える話が登場した。4.1.2.1 で述べたように、これらの話は好色漢が女に溺れて破滅したことを動物の化け物をからめて創作された話であり、人を戒める性質を持っているため、道徳的教化の意図が読み取れる。この点は、晋・南北朝時代の単なる怪異の記録とは異なる。

③女性の本当の姿を見抜いた人は普通の人もいれば道士など不思議な力がある人もいる。

上記の 3 つの変化が生じた原因として、以下の 3 点が挙げられる。

①物語の構成は多様化した原因：晋代や南北朝時代と比べ、唐代になると、話が長くなり、構成も複雑になった原因として、唐代における志怪小説の発展が挙げられる。2.1.1.2 で述べたように、魏晋南北朝において、志怪小説が成立したが、短編が多いほ

か、怪異の記録という性質が強く、文芸性豊かな作品はほとんどない。唐代に入ると、大衆文学に対する需要が増加し、仏教と道教が栄えた。このような背景の下で、変身譚の数が飛躍的に増加し、物語が長くなり、物語の内容も屈折に富むようになり、文芸性豊かな作品が多数書かれるようになった。

②女性に変身した動物が妖力で人間に危害を加える話が登場した原因として、唐代の女性禁忌の観念に関わりがあると考えられる。唐代において、女色禁忌の観念が強化されたのは、儒教の影響力が拡大しはじめたことにより、男尊女卑の観念が強くなりはじめたことに関連している。儒教の影響の拡大および女色禁忌の観念の変化については、以下の 8.3.2 で詳しく検討する。

③化け物を見抜いた人として、道士などのような不思議な力がある人が登場した原因として、唐代の仏教と道教の隆盛が挙げられる。溝口ら（2007）は、この時代の仏教と道教の影響力について、「南北朝の分裂を統一した隋の文帝は詔を発して、道教の最高神の元始天尊像と仏教の仏像を保護し、国家として道教・仏教を公認した。唐代に入ると、高祖は道教の教祖、老子の李姓と唐室の李姓とを結び付けて、老子を唐室の祖先とする説を採用した。そのため、道教は国家の特別な保護を受ける宗教となり、唐代を通じて道教は仏教の上に位置づけられた。[435]」「隋代は文帝が仏教を尊崇する政策をとったが、それは仏教を南北統一国家の精神的支柱と位置付けたためである。そこで仏教は国家興隆のための宗教という色彩を濃くした。唐代には強力な統一国家が建設され、仏教は唐室・貴族の信奉を受けて繁栄した。[436]」「唐室は高僧と密接な関係をもったが、同時に仏教の信仰と文化は民衆の間に浸透して、中国人の精神生活に深くかかわるようになった。[437]」と述べている。

宋代・元代になると、女性に変身した動物が男性と交わるパターンがさらに数多く書かれるようになった。このパターンにおいては、男性が化け物と付き合ったせいで病気になったり、死んでしまったりする話も多い。そしてこれと関連し、男女が別れた経緯として、推理で女性の本当の姿を見抜くというような話が登場した。男性は女性との付き合いが長くなるにつれ、衰弱して病気になってしまった。人（多くの場合は道士など不思議な力がある人）に頼んでその病因を突き止めると、交際している女性は化け物であると言わ

[435] 溝口ら(2007)、p. 79。
[436] 溝口ら(2007)、p. 81。
[437] 溝口ら(2007)、p. 81。

れた。そこで道士など不思議な力がある人が化け物を退治し、病気の源を断ち切った。狐の変身譚である『湖海新聞夷堅續志』后集巻 2「精怪門· 狐虎」「狐精媚人」[438]と蛇の変身譚である『夷堅志補』巻 22「錢炎書生」（本論文 4.1.2.2 参照）はこのような話である。「狐精媚人」の要約は以下のとおりである。

> 季公喜という人が、出かけていく途中で美しい女性と出会って、その日の夜から毎晩一緒に寝るようになった。それ以降、季公喜は顔色が悪く、やせていった。道士に応急処置を頼んで、婦人を退治してもらってはじめて、その婦人が狐の化け物であることを知った。婦人が退治された後、季公喜は無事であった。

宋代・元代の女性に変身した動物が男性と交わる話の特徴として、以下の 4 点が挙げられる。①物語の構成の面においては、唐代と同様に、多種多様である。②唐代と比べ、女性に変身した動物が妖力で人間に危害を加える話が多く書かれた。例えば上記の「狐精媚人」、「錢炎書生」以外に、『夷堅支乙』巻 9「宜黄老人」の第 2 話（本論文 3.1.2.2 参照)、『夷堅三志壬』巻 3「張三店女子」（本論文 3.1.2.2 参照)、『湖海新聞夷堅續志』后集巻 2「狐戀亡人」[439]が挙げられる。③ ②で言及したこれらの話は、いずれも男性が美女の色香を好んでやめられないため、死の危険にさらされた話である。これらの話は、美女は人を惑わせる化け物である可能性が大きい、女色に溺れると被害が大きくなるという女色の恐ろしさを表わしている。宋代・元代に、このような話が数多く書かれたこと、また、男性が病気になった原因について、「以理度之，必妖祟耳（推理すると、きっと妖怪の祟りだ）[440]」というような推理が話の中に出現したことから、宋代・元代に女性に変身した動物が男性と交わる話は、男性を戒める話群として確立されていたと言えよう。④女性の本当の姿を見抜いた人は普通の人もいれば道士など不思議な力がある人もいる。

明代には、女性に変身した動物が男性と交わるパターンはあまり書かれておらず、主に唐代・宋代・元代の内容を受け継いでいる。ところが、女性に変身した動物がなぜ男性と交わるかという理由について、明代以前には言及されることがなかったが、明代の狐の変

[438] 元好問撰・常振國點校　無名氏撰・金心點校『續夷堅志 湖海新聞夷堅續志』、古體小說叢刊、中華書局、2006 年、p. 250。付録 3.1.1-58 参照。
[439] 元好問撰・常振國點校　無名氏撰・金心點校『續夷堅志 湖海新聞夷堅續志』、古體小說叢刊、中華書局、2006 年、p. 249。付録 3.1.1-57 参照。
[440] 『夷堅志補』巻 22「錢炎書生」。付録 4.1.1-14。

身譚では言及されるようになった。『剪燈餘話』巻 3「胡媚娘傳」（本論文 3.1.3.5 参照）および『五雜俎』巻 9 「物部一」（本論文 3.1.3.5 参照）においては、「男性の精気を奪う[441]」、「人を惑わせる狐の多くは人の精気を取り、それをもって内丹を作り出す[442]」と述べている。さらに、必ず女性に変身することについて、『五雜俎』巻 9 「物部一」（本論文 8.1 参照）では、「狐は陰類であり、陽を得てようやく（内丹を）作り出せる。そのため雄の狐であっても女性に変身し、男性を惑わせる[443]」とし、陰類に属する狐は内丹を修練するために女性に変身し、男性の精気を奪うという原理を説明した。男性が衰弱したり病気になったりするのも精気を奪われたためであろう。しかしながら、3.1.3.5 で述べたように、「内丹を練る」という考え方は、狐の変身譚にしか存在しない、狐独特の変身の仕方である。

清代になると、女性に変身した動物が男性と交わる話において、女性が男性に危害を加える話もあるが、教養があって礼儀正しく、男性と恋愛し、男性を助けるような話も多数存在する。また、清代以前の話においては、男性は女性の本当の姿を知らない状態で付き合いはじめ、女性の本当の姿を知った後恐れて別れるのが一般的である。ところが、清代の話においては、男性は女性の本当の姿を知りながらも付き合いを続ける。また、化け物を恐れるどころか、憧れを抱く話も多数存在している。例えば『閱微草堂筆記』巻 7 裘編修超然言[444]の話と『閱微草堂筆記』巻 19 門人伊比部秉綬言[445]の話はそのような話である。清代のこのパターンの中には、女色に溺れないように戒める話も少なくなり、あるいは言及するが軽く触れる程度にとどまる場合が多い。清代に女色を戒める傾向が弱まった原因として、人の価値と欲求を肯定する陽明学が知識人の間に広まったことが挙げられる。この点については、以下の 8.3.2 で詳しく検討する。清代において、作者は物語を通して、現実を批判したり、理想的な女性像を描いたりする志向が強くなった。例えば、『閱微草堂筆記』巻 24 同年胡侍御牧亭[446]の話において、女性に変身した狐が墓の前で泣いていることを見た男が、彼女をからかおうとした。女性は「私は嘘をつかない。私は実

441 原文は「奪其精氣」、現代日本語訳は筆者による。李昌祺編撰・黃正位訂定『剪燈餘話』、古籍、年代不詳、第三冊、コマ番号：36。
442 原文は「其魅人者多取人精氣，以成内丹」、現代日本語訳は筆者による。謝肇淛撰『五雜俎』、歷代筆記叢刊、上海書店出版社、2001 年、p. 173。
443 原文は「狐陰類也，得陽乃成。故雖牡狐必托之女以惑男子也」、現代日本語訳は筆者による。謝肇淛撰『五雜俎』、歷代筆記叢刊、上海書店出版社、2001 年、p. 173。
444 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、p. 141。付録 3.1.1-91 を参照。
445 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、p. 477。付録 3.1.1-131 を参照。
446 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980 年、pp. 556-557。付録 3.1.1-143 を参照。

は狐女である。墓の中の人は私の色香に溺れて病気になって死んでしまったが、彼の恋心に心を打たれ、自分のせいで命を落とさせたことにうしろめたさを感じた。そのため神に、一生男と付き合わないことを誓った。あなたは妄念を持たないでください。ただ災いに遭うだけだから。」と言った。この話の中では、前代の影響を受け、女性の化け物と交わった男が死んでしまうというような話には軽く触れられているが、女性に変身した狐が人間のような感情をもち、節操が固いということに、より重点が置かれたと考えられる。

### 8.3.2 中国における動物が女性に変身する話の登場と変遷の背景

#### 8.3.2.1 変身譚における女色禁忌の観念

8.3.1 で述べたように、女性に変身した動物が男性と交わる話は晋代に登場し、その後多数書かれるようになった。狐・亀の変身譚以外に、晋代に書かれたとみられる『白澤圖』では、美女に変身した狼が男性と結婚する話[447]、また、『玄中記』に記載された男性が女性に変身した鳥と結婚する話[448]があり、5.1.2.2 で述べたように、当時、このような女性に変身した動物と人間の男性と交際・交わるというようなモチーフが成立し、志怪の材料として使われることが流行し始めたことがわかる。

このモチーフは南北朝において犬と虎の変身譚に取り入れられ、唐代には蛇の変身譚に取り入れられ、後世に大きな影響を与えた。このモチーフが受け継がれた原因の１つとして、晋代に書かれた『捜神記』が後世の変身譚に与えた影響が考えられる。李剣国（2011）は、「『捜神記』の中の多くの内容もその後の志怪・伝奇・話本の中に絶えずに取り入れられた」、「『捜神記』以降、それに付け足して創作されたものとそれを模倣して創作されたものが多い」[449]と述べている。また、『捜神記』の中の狐の変身譚である「阿紫」の物語は後世の狐の変身譚に大きな影響を与えたとも指摘し、「「阿紫」は女狐が人を惑わすという基本的な話型を確立し、後世の狐の化け物の話に大きな影響を与えた」[450]と、女性に変身した狐が人間の男性と交わるパターンは「阿紫」によって確立されたと述

[447]『法苑珠林』巻 45 引『白澤圖』:「又百歳狼化為女人，名曰知女，狀如美女。坐道旁，告丈夫曰，我無父母兄弟。若丈夫取為妻，經年而食人。以其名呼之，則逃走去。」。（釋道世撰・周叔迦 蘇晉仁校注『法苑珠林校注』（全六冊）、第三冊、中國佛教典籍選刊、中華書局、2003 年、pp. 1390。

[448]『太平御覽』巻 927 引『玄中記』:「昔豫章男子，見田中有六七女人，不知是鳥，扶匐往。先得其所解毛衣，取藏之，即往就諸鳥（中略）一鳥獨不得去，男子取以為婦，生三女」。李昉等撰『太平御覽』（全四冊）、中華書局、1995 年、p. 4123。

[449] 李剣国（2011）、p. 398 は「《搜神记》的许多内容也不断为以后的志怪、传奇、话本所采取」、「《搜神记》之后，续作和仿作者很多」と述べている。日本語訳は筆者による。

[450] 李剣国（2011）、p. 382 は「《阿紫》确立了女狐惑人的基本类型，对后世狐妖故事影响极大」と述べている。日本語訳は筆者による。

べている。

このモチーフは広く流布したが、唐以前において、これらの変身譚はあらすじが似ており、単なる怪異の記録としての性質が強く、女色禁忌の意図は読み取れない。唐代中期から、このモチーフに基づき、さらに「人を魅惑する・人を害する」描写に力が入れられるようになった。つまり、美女に変身した動物の化け物の恐ろしさが加えられるようになった。美女に変身した動物が、男性と交わることで男性を病気にさせるといった一連の話がこのパターンの中心となった。このような話が中心になったことは、唐代の女性観に関わりがある。唐代中期の元稹によって書かれた「鶯鶯傳」[451]において、男性の主人公である「張生」が女性の主人公である「鶯鶯」を見捨てた後、見捨てた理由についての説明から、唐代の女性観がうかがえる。廣瀬(1993)は、この部分を以下のように書き下した。

> 張曰く「大凡天の命ずる所の尤物や、その身に妖せざれば、必ず人に妖す。崔氏の子をして富貴に遇合し、寵嬌に乗ぜしめば、雲とならず雨とならずして、蛟となり螭となり、吾れその変化する所を知らざるなり。昔殷の辛、周の幽、百万の国に拠り、その勢い甚だ厚し。然れども一女子これを敗り、その衆を潰し、その身を屠り、今に至るまで天下の僇笑となる。予の徳以て妖孽に勝つに足らず。ここを用て情を忍ぶ」と。時に坐する者皆ために深く嘆ず。[452]

張生の話によると、美しい女性は化け物であり、男を惑わし、害をもたらす存在である。

このような記述から、唐代中期において、美女は人に危害を与える魔物だというような思想が存在していたことがわかる。美女を化け物・魔物と見做したことは、女色は恐ろしいもので、遠ざけるべきものであるという女色禁忌の観念の表われである。李剣国(2002)は、女色禁忌の観念を「女性に対する偏見と女色に対する歪曲した認識から生まれたもの」[453]とし、孔(2006)[454]も同じような見解を持っている。本研究では、このような女性に

---

[451] 『太平廣記』巻 488「鶯鶯傳」を指す。李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、第十冊、P. 4012-4017。

[452] 原文は「張曰。大凡天之所命尤物也。不妖其身。必妖於人。使崔氏子遇合富貴。乘寵嬌。不為雲。不為雨。為蛟為螭。吾不知其所變化矣。昔殷之辛。周之幽。據百萬之國。其勢甚厚。然而一女子敗之。潰其眾。屠其身。至今為天下僇笑。予之德不足以勝妖孽。是用忍情。於時坐者皆為深歎。」李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、第十冊、P. 4016。日本語訳は、廣瀬(1993)、pp. 122-123 の訳を引用した。

[453] 李剣国 (2002)、p. 110 では、「对女性的偏见和对女色的歪曲认识而产生的」と述べている。

[454] 孔(2006)、p. 30 では、「随着社会权利的转移，男女冲突的加剧，女性在男权社会里逐渐成为附属品，社会现象的转变必定会反映在文学作品中，所以蛇女不得不走下神坛，被男权社会妖魔化，以显示男人显赫的地位。在古代，“红颜祸水”的观念是男性批判女性时的思维定式。历史上的君子对此作了总结：“自

対する偏見、すなわち「男尊女卑」の思想は、女色禁忌の観念が形成された原因の 1 つだと考える。

また、女色禁忌が形成されたもう 1 つの原因は、男性が封建社会において倫理規範の担い手であり、女色に溺れてはいけないことだと考えられる。王(2010)は、「これまで長い間、中国は男性社会であった。男性は社会の主宰者であり、より多くの道徳的義務を担っていた。[455]」と述べている。男性が主宰者であるこのような社会においては、優れた男性はより高い倫理意識を持たなければならず、女色に溺れてはいけないと推測できる。そのため、女色に溺れてはいけないという考え方も女色禁忌観念が形成された原因の 1 つだと考えられる。

#### 8.3.2.2 女色禁忌の観念と儒学

女色禁忌の観念は、儒学の発展と関係しており、漢代にすでに存在した。漢代の儒学者である董仲舒の献策により、儒学が官学として確立され、国教として採用された。女性に対する認識も儒教倫理の確立の影響を受けた。石川(1986)は、「儒教倫理が確立すると、ここに、節義を最高の規範とする女性観が前面に押し出されてくる。『古列女伝』や歴代の史書の『列女伝』に表れる女性像は、儒教倫理に基づき、情の否定の原理に生きる、類型化された姿である。『女誡』や、『女論語』等の女訓書も、この基盤の上にうみだされる[456]」と述べている。つまり、漢代の儒教的な道徳規範において、女性の情欲は否定された。また、漢代に、夏代の君主である桀が、美人である妹喜の女色に溺れて国を滅ぼした話や、それと似たような殷紂王・周幽王が女色に溺れて国を滅ぼした話について、女色と国の滅亡との関係を着目して、女色は国を亡ぼすというような記述が出現した[457]。山川（1987）は「この類の物語（上記の桀、紂王、幽王の話を指す、筆者注）は後世の人たちが男尊女卑の観念に基づいて創り出されたものに間違いなく、おそらく漢代に入った後

古女祸，大者亡天下，其次亡家，其次亡身，身敬免矣，犹及其子孙，虽迟速不同，未有无祸者也。”……对于女人所体现出的既爱又畏得心态明显流露出父权社会下男性的道貌岸然。同时，男权社会为了将男性树立为人的规范，不惜把女人贬为“异己”或敌对的一方。」と述べている。

[455] 王(2010)、p.21 では、「长期以来，中国是一个男性社会，男性是社会的主宰者，他们也承载着更多的道德义务。」と述べている。日本語訳は筆者による。

[456] 石川(1986)、p.2。

[457] 『吳越春秋』巻 9「勾踐陰謀外傳」（勾踐十二年）では、「臣聞賢士國之寶，美女國之咎：夏亡以妹喜，殷亡以妲己，周亡以褒姒。」と述べている。『四部叢刊初編』中第 282～283 冊、上海涵芬樓借烏程劉氏嘉業堂藏明刊本景印、コマ番号：99、参照 http://ctext.org/library.pl?if=gb&file=77640&page=99。

創り出されたものである[458]」と述べ、この 3 つの話が漢代の男尊女卑の観念を反映していると指摘している。つまり、女色禁忌の観念は儒教倫理に基づいた観念であり、漢代にすでに形成されていた。また、漢代から、インドの仏教が中国に渡来し始めた。インドから伝わってきた仏教においては、従来女性は穢れ者であるという考え方が存在していた。仏教が中国に渡来した後、このような女性に対する考え方は、儒教の男尊女卑の考え方と一致したため、儒教従来の男尊女卑の観念を支持するものとなった。[459]

ところが、後漢後期になると、儒教の内部において古文学と今文学の争いが起こり、また、漢初の儒家、董仲舒が説いた天人相関と災異説[460]は後に帝王の位を奪った王莽に利用され、また王充などの無神論を唱えた思想家に非難された。外部においては、国の分裂によって思想の統一を維持する社会的基礎を失い、儒教の国教の地位が根本から揺らいだ。このような内部と外部環境の中で儒教は衰退し、儒教の衰退と同時に多種多様な思想と学術が発展した。蔡（2004）は魏晋南北朝に共存した思想について、儒教以外に、玄学、仏教、道教、范縝の神滅論などがあると述べている[461]。儒教思想は社会の秩序を重視し、秩序を維持するために人間の情熱や欲望を抑制する思想であるため、儒教の衰退につれ、個人の自然な欲求が肯定されるようになった。

上で述べたように、晋代の女性に変身した動物が男性と交わる変身譚においては、男女の恋愛の喜びが描かれ、また晋代と南北朝における変身譚の中に道徳的教化の意図が読み取れないことは、この時代の儒教の衰退および思想の自由化に関わりがあると考えられる。

隋代と五代は時間的に短く、隋代・唐代・五代の思想については主に唐代の思想について見ていく。唐代になると、中国が再統一され、思想の面において寛容な姿勢が取られた。魏晋南北朝から流行し始めた仏教は、唐代になって貴族・皇族の庇護を受け、大いに

458 山川(1987)、p. 16-18 参照。p. 17 では、「这类故事一定是后世的人们基于男尊女卑的观念而制造出来的，恐怕是在进入汉代以后制造出来的」と述べている。

459 楊（2004)、p. 86 は仏教における女性差別の考え方が、中国に伝わってきた後、中国の従来の男尊女卑の思想によって強化されたと指摘している。「中国根深蒂固的男尊女卑思想并不比印度逊色(中略)因此原始和小乘佛教中受印度社会影响的男女不平等内容在中国亦未尝有所改变，甚至得到了强化。（中国の根深い男尊女卑思想はインドと比べても遜色がない(中略)そのため、原始仏教と小乗仏教の中に、インドの社会から影響を受けた男女不平等の内容が、中国においても変わらず、更にその上強化されたのである。)」と述べている。日本語訳は筆者による。

460 溝口ら（2007)、p. 14 では、「董仲舒の天人相関説は直接的には、人つまり天子の道徳的・政治的な善悪が原因となってその結果、天の災異・瑞祥が現れるとする思想である。」と述べている。この思想では、天子による一元的支配の正当性が天に根拠づけられた。

461 蔡（2004)、p. 30 は「当时除了儒家的伦理济世之学之外，还有玄学的宇宙本源之学、佛教的思辨哲学、道教的养生之学乃至范缜的神灭论等各种思想学说。」と述べている。

栄えた。また、唐代の統治者の姓「李」は道教の始祖とされる老子の姓と同じであるため、唐代の統治者は老子を祖先と見做し[462]、道教の発展にも力を入れた。仏教と道教が重視されると同時に、儒教は国家統治の理念として用いられた。唐代には、官吏登用制度である科挙の試験科目として儒教の経典が用いられたほか、統治者が経学に力を入れ、孔穎達の『五經正義』と陸德明の『經典釋文』が世に現れたのは、当時の経学の発展を示している。

儒教倫理に基づいた女色禁忌の観念は漢代に形成されたが、漢代には動物が女性に変身する変身譚があまり書かれていなかったため、女色禁忌の観念は変身譚に反映されなかった。魏晋南北朝に動物が女性に変身するモチーフが登場したが、漢代後期から儒教が衰退したため、魏晋南北朝のこのモチーフの話において女色禁忌の観念は反映されていなかった。唐代になると、儒教が科挙の試験科目として用いられるようになり、儒教の女色禁忌の観念も文人の中に広がるようになった可能性がある。このような思想背景の下で、女色禁忌の観念が変身譚に反映され始めた。前掲の人を戒める性質をもっている、好色漢が女に溺れて破滅したことを蛇の変身譚とからめて創作された話は、儒教の女色禁忌の思想の変身譚における表れであると思われる。ただ、唐代にこのような話が作り出されるようになったが、数は少ない。その原因として、唐代において、儒教の相対的な地位が低下したことが挙げられる。溝口ら(2007)は、「一般に、魏晋南北朝時代および隋唐時代は、儒教が不振であったと見なされている。漢代に西方から伝来した仏教が本格的に中国社会に浸透して教理研究や宣教活動が盛んになったこと、また、道家思想を核にしながら儒教や仏教から思想的養分を吸収した従来の方術や民間信仰が道教教団を形成し、貴族のなかにも多くの信者を獲得していったことによって、儒教の相対的な位置が低下した。儒教自体も漢代のような活力を失い、思想的な主導権を仏教・道教に譲ってしまった観がある[463]」と述べている。また、溝口ら(2007)は、唐代において、「仏教・道教への傾倒や信仰は、必ずしも儒教的教養と矛盾対立するものではなかった。この三つの教え（三教）は並び立っていたのである[464]」と述べている。唐代において、魏晋南北朝と比べ、儒教は復活したが、道教と仏教の影響が強かったため、儒教にもとづいた女色禁忌の思想を受けた作品も少ない。

[462] 蔡（2004）、p. 31 によると、唐高宗は老子に「太上玄元皇帝」を追贈した。
[463] 溝口ら（2007）、p. 90。
[464] 同上。

宋代においては、仏教と道教も発展を遂げたが、科挙の隆盛により知識人はほぼ完全に儒教を基礎としたため、儒教思想の正統的な地位は確定された。仏教と道教は儒教の補佐となっていた。北宋の初期には、思想の面において儒教・道教・仏教は並立していたが、宋仁宗慶暦年間から、儒教思想の新たな動きが始まった。北宋の周敦頤に始まり、南宋の朱熹によって大成された朱子学は体系的な儒教となった。朱子学は仏教・道教・儒教を融合した思想であり、仏教・道教と対抗できる世界観を持った。南宋において、朱子学は思想界の大勢力の１つとなり、さらに元代に入ると朱子学は官学となり、元代の統治思想にもなった。朱子学の思想は、欲望を抑えることを唱えていた。溝口ら(2007)は、朱子学の思想における人の欲望に対する考え方を以下のようにまとめた。「朱子は『礼記』楽記篇の記述を拡大解釈し、あらゆる人に生まれつきそなわっている天理が、これまた人がみな持っている欲望によって妨害され、表にあらわれてこないのだと説いた。だからこそ、性善であるはずの人間が悪事を行なうのである。あらゆる悪の起源はこの欲望にある。欲望に打ち勝ち、本来そうあるべき姿で人と接し、よき人格者として生きていくこと、それが孔子のいった「克己復礼」の意味である、と朱子は述べる。人々の欲望を抑え、内面陶冶に導いていく手段として、礼が持ちだされる。[465]」と述べている。つまり、朱子学の思想は禁欲的な思想[466]である。朱子学の思想においては、男女間の情欲は当然に否定される対象に含まれている。言い換えると、儒教の従来の女色禁忌の観念は、朱子学になってむしろ強化された。

このような思想的背景の下で、宋代・元代になると、女性に変身した動物が妖力で人間に危害を与える話が多く書かれ、男性を戒める話群として成立した。

中国の古代では、動物の変身譚をはじめ、物語の書き手および読み手は、主に士大夫(教養人層)であり、男性であった。溝口ら(2007)は、唐以前および宋代の文化の担い手である士大夫について、以下のように説明している。「宋以降の士大夫が唐までの貴族的士大夫とどう違うのかについて、説明が必要である。本書の枠組からこれに答えるならば、「科挙試験での合格を目標とする者や科挙によって官僚に登用された者たちがもつ、強烈な自信と選良意識が一体感を抱かせて生みだされた文化的階層」ということになろうか。彼らは経済的な意味で利害を共有する特権階級なのではなく、身につけた文化・教養によ

[465] 溝口ら（2007)、p. 124。
[466] 蔡（2004）も同じ観点を示している。蔡（2004)、p. 35 は「简言之，按照理学的道德修养要求，人们不仅要彻底驱除各种自然欲望，还要严格控制各种情感。」と指摘している。ここの「理学」は朱子学を指している。

って連帯する「士大夫」なのである(もちろん、経済的な富裕層と実際にはかなり重なる)[467]」と述べている。

男性の書き手が、男性の読み手を意識し、女色に溺れることは、自分自身に大きな災いを招くという訓戒を動物の化け物の話に結びつけ、女色の恐ろしさをいきいきと表現した。これは、儒教が士大夫の中で影響力を強めるにつれて、儒教の女色禁忌の観念の影響が広まったことを反映している。

宋代・元代に続く、明代・清代においても、仏教と道教は一定程度の影響力を持っているが、思想の発展に与える影響は大きくなかった。思想の発展に大きく影響を与えたのは明代中期から登場した陽明学である。

明代に入ると、統治者は引き続き朱子学を官学とし、思想を統一しようとした。洪武帝は朱子の解説による四書を科挙の主眼とし、また、永楽帝は勅撰書である『四書大全』・『五経大全』・『性理大全』を編纂させ、朱子学の正統的地位と独尊的地位を確立した。更に、官吏を選抜するための科挙の試験内容は朱子学に限られており、朱子学は政府の思想となった。清代に入ると、引き続き朱子学を政府の思想としたため、明代・清代において、政府の思想は朱子学であると言える。朱子学を提唱すると同時に、政府は朱子学以外の思想を強く弾圧した。明代の中期になると、王陽明などが、朱子学を補完するために、南宋の陸九淵の思想を発展させ、「致良知」(自己に生まれつきそなわっているとされる良知を発揮する)などの思想を提出した。このようにして、陽明学が誕生した。陽明学は朱子学を補完し、また「致良知」などの主張は、当時の知識人の中で広く共感を得たため、知識人の中で陽明学が広く受け入れるようになった。蔡(2004)は、明代中期から清代まで、「政府の思想は朱子学であったが、知識人の階層においては陽明学が主流になって、その影響が大きかった[468]」と述べている。また、朱子学においては人の感情や欲望は抑圧される対象であったが、陽明学になると、人の感情や欲望が認められるようになった。蔡(2004)は、「前の段階である朱子学によって抑圧されていたため、この時期に爆発的に現れてきた。個性の表し方や個人の価値と自然の欲求への肯定は、人に強烈な印象を与える[469]」と指摘している。

---

[467] 溝口ら(2007)、p. 86。

[468] 蔡(2004)、p. 36 は「尽管官方思想仍然是程朱理学，但在知识阶层王学已经成了主流思想，影响极为广泛」と述べている。日本語訳は筆者による。

[469] 蔡(2004)、p. 37 は「由于前一个阶段受到理学的压抑，这时便以爆发式的方式表现出来，无论是个性的张扬还是对于个体价值和自然欲求的肯定，都给人强烈的印象」と述べている。日本語訳は筆者による。

明代・清代のこのような文化的背景の変化が女性に変身する動物の変身譚にも影響を与えた。明代には、女性に変身する動物の変身譚はあまり書かれていないが、禁欲的な朱子学の影響が残っており、また従来の女色禁忌の観念が依然として存在したため、その内容としては、化け物が男性の精気を吸って男性を病気にさせるというような部分が詳細に描写され、女色の恐ろしさと欲に溺れることの恐ろしさを表現したものが多かった。清代になると、知識人の間に禁欲的な朱子学の影響が存在する一方で、人の価値と欲求を肯定する陽明学も影響を与えはじめた。そのため、女色に溺れないように戒める話も存在するが、数が少ない、あるいは軽く触れる程度にとどまる場合が多い。また、話の中の男性は美女に変身した動物を恐れるどころか、憧れている話も多数存在している。さらに、動物が変身した美女を理想的な女性として描いたり、または対照的に人の卑しい行為を批判したりする話が存在する。このような話は、宋代・元代の男性を戒める話とは性質が異なり、知識人が自分の理想や主張を変身譚に込めて作った話であると思われる。

動物が女性に変身する変身譚の変遷と儒教の関係とをまとめると、以下のようになる。

女性に変身した動物と人間の男性と交際・交わるモチーフの登場が晋代であり、晋代・南北朝において思想が自由な社会環境の中で、このモチーフは男性を戒める意味を持たず、怪異の記録として女性に変身した動物と人間の間の交際・交わりを中心に描写された。隋・唐・五代に入ると儒教の発展とともに、女色禁忌の観念が知識人の中に広まった。そのため、女性に変身する動物の変身譚に男性を戒める意味が織り込まれるようになった。宋代に朱子学が登場し、美女に変身した動物が男性を害するというような話が数多く書かれるようになり、男性を戒める話群として成立した。明代中期以降、陽明学の発展とともに、個人の価値と自然な欲求が肯定されるようになり、女色の恐ろしさに言及する変身譚もあるが、変身譚を通して社会を批判したり、理想の女性を描いたりする変身譚も登場した。

以上のように、中国における動物が女性に変身する変身譚の変遷は、基本的に化け物（害なし）→化け物（害あり）→化け物・女性の理想像が共存するという 3 つの段階に分けることができる。

人間が動物に変身する場合は、各時代の変身譚において、女色禁忌の要素が見られなかった。その原因は、美人は化け物であり、男性に害をもたらすというような女色禁忌の典型的な考え方は、女性が動物に変身するパターンより、動物が女性に変身するパターンに織り込まれやすかったのではないかと考えられる。

### 8.3.3 日本における動物が女性に変身する話の登場と変遷

日本においては、女性に変身しない犬を除き、狐・蛇・亀の変身譚では、動物が女性に変身する話の登場は早い。初登場したこの 3 種類の動物の変身譚はいずれも女性に変身する話である。また、この 3 つの話はいずれも女性に変身した動物が人間の男と交わる話である。

奈良時代に初出した蛇が女性に変身する話『古事記』中つ巻「垂仁天皇」は、4.2.2.2 で紹介したように、蛇型の神が女性に変身する話であり、動物神の要素が混在している。中村（1984）は、このパターンの話は中国南部から東南アジアにかけて広く分布した説話を採用したものだ[470]と指摘している。また、日本において、かつて氏族集団の動物崇拝と外婚（異なる氏族集団との間に婚姻関係を結ぶこと）の習慣が存在したことは、このパターンの話が日本において広く受け入れられた理由であると述べている[471]。この話においては、女性に変身した蛇型の神である肥長比売は海原に光を照らし、船で逃げようとした垂仁天皇の子を追いかけたが、彼に危害を加えなかった。

同じく奈良時代に初出した亀が女性に変身する話である『日本書記』巻 14「大泊瀬幼武天皇 雄略天皇」に記載された「水江浦嶋子」および『風土記』逸文「丹後の国」に記載された「筒川の嶼子」の 2 つの話においては、7.2 で紹介したように、亀は女性に変身した後、男性を仙境へ案内した。この 2 つの話では、女性に変身した亀が男性に危害を加えるどころか、男性に利益をもたらしたと言えよう。

以上の奈良時代の動物が女性に変身する話から見ると、これらの話の中では、女性に変身した動物が男性と交わり、男性を害することなく、男性に利益を与えたことが見てとれる。

平安時代になると、狐が女性に変身する話が登場した。男性と交わる以外に、女性に変身した動物と人間とのかかわりが多岐にわたるようになった。例えば、動物が女性に変身して、報恩・悪戯をする話が登場した。動物が女性に変身して恩返しする例として、『今昔物語集』巻 16-15「仕観音人行竜宮得富語第十五」[472]が挙げられる（本論文 4.2.2.2 参照）。この話においては、男性に救われた蛇は男性に恩返しするために女性に変身したことがわかる。

---

[470] 中村（1984）、pp. 30-35 を参照。
[471] 中村（1984）、pp. 30-35 を参照。中村はこの話を「トヨタマヒメ型」の話に分類している。
[472] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』②、新編日本古典文学全集 36、2003 年、pp. 200-207。

また、動物が女性に変身して悪戯をする例として、『今昔物語集』巻 27-29「雅道中将家在同形乳母二人語第二十九」[473]の話が挙げられる。この話においては、

> 中将ハ北面ニ居タリケルガ、此レヲ聞テ何事トモ不知ラデ、大刀ヲ提テ走リ行テ見ケレバ、同形ナル乳母二人ガ中ニ此ノ児ヲ置テ、左右ノ手足ヲ取テ引シロフ。中将、奇異ク思テ吉ク守レバ、共ニ同乳母ノ形ニテ有リ。何レカ実ノ乳母ナラムト云フ事ヲ不知ズ。然レバ、「一人ハ定メテ狐ナドニコソハ有ラメ」ト思テ、大刀ヲヒラメカシテ走リ懸ケル時ニ、一人ノ乳母掻消ツ様ニ失ニケリ〔3.2.1-6〕

という記述があり、狐は乳母に変身して、中将を混乱させた。

女性に変身した動物が男性と交わるパターンの中に、女性と男性が婚姻関係を結び、動物の姿を見られたため男性と別れた話が存在する一方、女性に変身した動物が男性を誘惑し、男性を損なう話も存在する。例えば、『今昔物語集』巻 16-17「備中國賀陽良藤為狐夫得観音助語第十七」[474]においては、

> 今昔、備中ノ國、賀陽ノ郡、葦守ノ郷ニ、賀陽ノ良藤ト云フ人有ケリ。銭ヲ商テ家豊カ也、天性淫奔ニシテ心色メカシ。(中略)此ヲ見テ、「良藤、狐ニ被謀テ、夫ノ夫ト成テ、移シ心无クシテ、此ク云フ也ケリ」ト知テ、忽ニ貴キ僧ヲ請ジテ令祈メ、陰陽師ヲ呼テ令祓テ、度々沐浴セサセテ見ルニ、有シ人ニ不似ズ。其ノ後、漸ク本ノ心ニ成テ、何ニ耻カシク奇異也ケム。(中略) 彼ノ杖ヲ突テ入レル俗ト云ハ、造リ奉ル所ノ観音ノ變ジ給ヘル也。然バ、世ノ人、専ニ観音ヲ念ジ可奉シ。其ノ後、良藤、身ニ恙无クシテ十餘年有テ、年六十一ニシテ死ニケリ〔3.2.1-5〕

とあるように、好色漢である良藤が狐の夫となって本心を失い、最後に観音に助けられ、救われた。この話は、美しい女性は化け物かもしれない、そういう女に惑わされると被害を受けるという教訓を示している。

平安時代においては、女性に変身した動物が人を惑わして危害を加える話は、狐の変身

[473] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注、訳『今昔物語集』④、新編日本古典文学全集 38、2008 年、pp. 94-95。
[474] 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注、訳『今昔物語集』②、新編日本古典文学全集 36、2003 年、pp. 211-216。

譚のみに存在している。3.2.2.2 で述べたように、これらの話は、中国からの影響を受けて作られた話である。つまり、平安時代に、「女色禁忌」と関連する部分は、中国の影響を大きく受けた狐の変身譚のみに存在していた。

また、上記の「備中國賀陽良藤為狐夫得観音助語第十七」において、女性に変身した狐に惑わされた男性は、観音によって救われたことから、この話では観音という仏教要素が取り入れられたことがわかる。

上記をまとめると、平安時代では、女性に変身した動物の恐ろしさが描かれる話は狐の変身譚に集中しており、話の内容から、①仏教の影響を受けたこと、②中国の変身譚の影響を受けたことという 2 点が見受けられる。

鎌倉時代・室町時代においても、男性に危害を与える話も平安時代と同様に、狐の変身譚に限られている。

江戸時代になると、動物が女性に変身する話が多く書かれるようになり、中には男性を戒める意味が含まれると思われる話が蛇の変身譚に拡大したが、全体的に少なく、2 例である。1 つ目は、『耳袋』巻 4「美濃国弥次郎狐の事」である。3.2.3 で紹介したしたように、この話では、狐が女性に変身して一休和尚を誘惑しようとしたが、道徳の高い一休和尚に拒まれた。2 つ目は、中国の明代に書かれた白蛇の話の翻案とされる『雨月物語』巻 4「蛇性の婬」[475]である。この話においては、女性に変身した蛇が男性を誘惑した。蛇の危害について、

> 翁、「さればこそ。此の邪神は年経たる虵なり。かれが性は婬なる物にて、牛と孳みては麟を生み、馬とあひては竜馬を生といへり。此の魅はせつるも、はたそこの秀麗きに釁たると見えたり。かくまで執ねきをよく慎み給はずば、おそらくは命を失ひ給ふべし」といふに、人々いよよ恐れ惑ひつつ、翁を崇まへて「遠津神にこそ」と拝みあへり〔4.2.1-19〕

とあるように、蛇に惑わされると命を落とす恐れがあると記している。

上記のように、日本において、動物が女性に変身する話のパターンは時代とともに多彩になってきた。女性に変身した動物が男性と交わることで男性に危害を加える話は狐の変

[475] 中村幸彦、中村博保、高田衛校注・訳『英草紙　西山物語　雨月物語　春雨物語』、新編古典文学全集 78、2003 年、pp. 357-387。

身譚に集中しており、中国からの影響を受けて作られた話である。それに、男性に危害を加える話の中に、観音のような仏教要素が見られるため、この話は仏教の影響を受けたことがわかる。

上記をまとめると、日本には、本来、「女色禁忌」と似たような考え方が存在しなかった。日本においては、女性に変身した動物が男性と交わることで男性に危害を加える話は、中国の変身譚および仏教の影響を受けて作られた話である。

これらの話における女性のイメージは、奈良時代の神に近い女性のイメージと比べると、大きく変わったように思われる。では、なぜ奈良時代と大きく異なっている、これらの話はその後でも受け継がれてきたか。その原因として考えられるのは、平安時代以降、日本における女性の地位が変化したことである。坂元（2007）は古墳出土人骨の性別の割合および『古事記』・『日本書記』などの文献史料にある女性君長についての記述を分析し、かつて国家権利を掌握した女性君長たちが史上から姿を消したことを指摘し、さらに姿を消したことは日本古代の女性は没落したことを示していると指摘している。また、没落の原因として、①日本国家の中核となった天皇集団が男性中心の権利集団であったこと、②戦争の時代に突入した後、女性は戦闘員から排除されたため発言権が弱まったこと、③日本が中国の男尊女卑の思想の影響を受けたことという 3 つの原因[476]を挙げている。

つまり、日本において、平安時代以降の女性の地位は、奈良時代以前の女性の地位と比べ没落した。そのため、中国の変身譚および仏教の影響を受けて作られた「女色禁忌」の観念と関連する話は、日本における女性の地位の没落によって、受け入れられ、受け継がれたと考えられる。

[476] 坂元（2007）、p. 66-67。

## 8.4 日中両国における動物が人間へ、人間が動物へ変身する両パターンの割合

### 8.4.1 日中両国における両パターンの割合の比較

変身の方向を基準とし、変身譚を動物（または動物型の神）が人間に変身する変身譚・人間が動物に変身する変身譚に分類した場合、日中両国で、それぞれの動物の両パターンの割合が異なることが見受けられる。

中国の場合には、狐・蛇・犬・亀の変身譚において、動物が人間に変身するパターンの割合が大きい。それに対し、日本の場合には、狐・蛇・犬の変身譚において、人間が動物に変身するパターンの割合が大きい。

このような異なりが生じた原因として、2 点が考えられる。1 つ目は、両国において、変身譚の出典の性質が異なるという点であり、2 つ目は、両国において、土俗の変身観が異なり、そして思想的背景が異なるという点である。

まず、出典について、中国では、変身譚の多くは志怪小説集や伝奇に記載されている。つまり、変身譚を書いた知識人たちは、怪しい事としてこれらの変身譚を記録・あるいは創作したため、変身の方向はともかく、「変身」に注目していたのではないかと思われる。言い換えると、出典の性質から見ると、変身方向にこだわる必要がなかったのである。

それに対し、日本においては、変身譚の主な出典は仏教説話集である。これは、仏教思想を宣伝するのに、人間が動物に変身する話は動物が人間に変身する話より相応しいと考えられる。なお、この現象に関する詳細な議論は 8.5.3 で展開する。

次に、両国の文化的背景が異なる。

中国の場合には、①古来の自然観・変化観において、動物から人への方向の変身が基本となる変化の方向である。中国の古来の変化に対する観念について、もっとも知られているのは『荘子』外篇・至楽篇に記載された万物が「機」から始まる一文[477]である。

> 「青寧（という虫）は程（豹）を生み、程は馬を生み、馬は人を生み、そして人は死んで再び機（万物を生む造化の微妙な仕掛け）のうちに戻る。このようにして万物は機から生まれ出て、またみなそこに帰るのである。[478]」

[477] 原文は「青寧生程，程生馬，馬生人，人又反入於機。萬物出於機，皆入於機。」である。（陳鼓応注訳『荘子今注今訳（全二冊）』（修訂本）、道典詮釈書系、商務印書館、2007 年、p. 534。）
[478] 現代日本語訳は岡田（2001）、p. 70 の訳を引用した。

岡田(2001)は、「このサイクルが示す方向性からすれば、中国における変身が、動物から人への方向に向かうのは当然のことといえるのである」と述べている。また、「至楽篇の変化のサイクルは、おそらく中国古代の自然観を伝えているのである」[479]と指摘している。つまり、動物から人へという変化の方向は、中国の古来の自然観・変化観における基本的な変化の方向である。

②古代の神話の中には、人（神格化した人）の超能力や罰による変身が存在したが、周代以降、合理的現実的精神（儒教の思想につながる）によって、発展して体系化することができなかった。中野（1986）は、中国の変身譚においては人間が人間以外のものに変わることが少ないことの原因について、「中国人には、しかし、かかる「神話的状況」が起ることはまれである。かりに起こっても、中国人は、非現実の存在形態を自分たちの認識の領域に引きずりこむことを好む。髑髏や蛇や花などが艶やかな女の姿に化けて人間の男と交わるとき、男はその腕に抱いた女が化生であるとは露ほども疑っていない。つまり、化生といえども、あきらかに現実の官能の領域にいるのである。言いかえるならば、儒教的な現実主義の規範のもとでは、堅固な認識の境界の内部には鍵裂き一つできる奇蹟は起りっこないのであるから、奇蹟の原因はすべて他に委ね、奇蹟を明白な理会のほうへと引きずりこめばよいのであった」[480]と論じている。つまり、儒教的な現実主義において、人間には変身の能力があるということは想像し難しかった。

中国の文化背景とは異なり、日本の場合には、土俗の変身観が存在しない。奈良時代から記紀神話の中に登場した、動物が人間に変身する話の大多数は、動物型の神が人間の姿になるような話であり、日本古代の動物信仰を反映していると考えられる。しかし、これらの変身譚には、日本の土俗の変身観が見られない。岡田（2003）は、「変身現象を支える古代の自然観や宗教意識について述べた記載は見当たらず、日本古代の土俗的な変身観、変身原理を具体的に知ることができない」[481]と指摘している。つまり、中国には古くから植物から動物へ・動物から人への体系的な変化の観念が存在したのと異なり、おそらく日本においては、変身譚は登場したが、体系化した変身に対する観念は存在しなかった。言い換えると、変身の方向の面において、日本では在来の観念がなかったのである。

上記をまとめると、以下のようになる。

[479] 岡田（2001）、p. 71。
[480] 中野（1986）、p. 76。
[481] 岡田（2003）、p. 103。

中国の場合には、動物が人間に変身するパターンが多い原因として、①話の出典の性質から見ると、変身方向にこだわる必要がなかったこと、②動物から人へ向かうという土俗の変身観が存在し、そして儒教の合理的現実的精神の影響の下で、人間には変身の能力があるということは想像し難かったことという 2 点が挙げられる。

それに対し、日本の場合には、人間が動物に変身するパターンが多い原因として、①話の主な出典は仏教説話集であり、仏教思想を宣伝するためにもっとも相応しい変身譚のパターンは人間が動物に変身するパターンであること、②土俗の変身観が存在しておらず、変身の方向の面において、在来の観念がなかったことという 2 点が挙げられる。

### 8.4.2 中国における虎の変身譚の両パターン

中国においても、人間が動物に変身するパターンのほうが多い動物も存在する。その代表的なものは虎である。虎は狐・蛇・犬・亀と異なり、人が虎に変身する話のほうが多い。その理由として考えられるのは、以下の 2 点である。

①虎に対して、憧れのイメージが存在する。中国においては、古くから「虎＝食人」という恐怖のイメージが存在していたが、それと同時に、虎の力強さに対する憧れもあった。例えば、5.1.2.2 で述べたように、人を虎に喩える用法から、虎には勇猛や力強さなどのイメージが強かったことがわかる。つまり、狐・蛇・犬と比べて、人は虎に対して憧憬を抱いている。この点については、富永（1978）も言及している。富永は、「この虎に対する恐怖のイメージも強者への憧憬に転化し、虎を英雄として神格化したと思われるものである[482]」と述べている。虎の力などへの憧憬が存在したため、人間が虎になるという題材が変身譚の書き手である士大夫たちに好まれたのではないかと考えられる。

②狐・蛇・犬などの動物と比べ、人間が虎に変身しやすい。まず、虎の身体の大きさは人間に近い。次に、変身方法の面から見ると、「虎皮」という特別な変身道具が存在しており、虎皮をかぶる方法で人間が虎に変身する話が多数書かれた。つまり、虎皮をかぶることによって、人間は簡単に虎の姿になれる。この変身の道具が介在しているため、人間から虎への変身はほかの動物への変身より起こりやすいのではないだろうか。その逆方向の虎が虎皮を脱ぐことで人間に変身する話も存在するが、上記の①の虎に対する憧れのイメージが存在したため、人間が虎に変身するパターンほど多くはなかった。

[482] 富永（1978）、p. 1。

上記をまとめると、人間が虎に対して憧れのイメージを持っているため、「虎に変身する」という題材が好まれた。さらに、人間の大きさは虎に近く、虎皮という変身の道具が介在しているため、ほかの動物と比べ、人間から虎へは比較的に変身しやすい。これらが、人間が虎に変身するパターンが多数書かれた原因だと推測できる。

## 8.5 日中両国における変身譚の中の仏教要素

### 8.5.1 狐・蛇・犬・亀の変身譚に、仏教要素が織り込まれた話の割合の日中比較

本論文 1.3.3 で述べた判断基準をもって、以下では日中両国における狐・蛇・犬・亀の変身譚に仏教要素が織り込まれた話の割合を比較する。それぞれの動物の変身譚の中で、仏教要素が織り込まれた変身譚の例数と変身譚の総例数を括弧で示す。日中両国における狐の変身譚に仏教要素が織り込まれた物語の割合と例数を表 8.5.1.1 に示す。

**表 8.5.1.1 中国と日本の狐の変身譚に仏教要素が織り込まれた物語の割合（括弧内は変身譚の例数）**

| | 狐が人間に変身 | 人間が狐に変身 | 合計 |
|---|---|---|---|
| 中国 | 3%（4/152） | 0%（0/1） | 3%（4/153） |
| 日本 | 27%（8/ 30） | 100%（1/1） | 29%（9/ 31） |

表 8.5.1.1 に示したように、狐の変身譚に仏教要素が織り込まれた物語の割合は中国より日本の方が大きい。このような状況から、中国と比べ、日本の狐の変身譚は、仏教の影響を色濃く反映していることがわかる。

中国の仏教要素が織り込まれた狐の変身譚は唐代と宋代に集中しており、唐代に 3 例、宋代に 1 例ある。

日本の仏教要素が織り込まれた狐の変身譚は、平安時代に 3 例、室町時代に 2 例、江戸時代 4 例ある。平安時代に登場してから各時代に散在している。

上記をまとめると、中国と比べ、日本には仏教要素が織り込まれた狐の変身譚が多い。また、日本において、仏教要素が織り込まれた狐の変身譚は複数の時代にまたがっている。

**表 8.5.1.2 中国と日本の蛇の変身譚に仏教要素が織り込まれた物語の割合（括弧内は変身譚の例数）**

| | 蛇が人間に変身 | 人間が蛇に変身 | 両パターンの合計 |
|---|---|---|---|
| 中国 | 5%（1/19） | 50%（ 7/14） | 24%（ 8/34[483]） |
| 日本 | 29%（5/17） | 77%（17/22） | 56%（22/39） |

表 8.5.1.2 に示したように、蛇の変身譚に仏教要素が織り込まれた物語の割合は中国より日本の方が大きい。

中国の蛇が人間に変身するパターンの中で、仏教要素のある話は明代の 1 例のみである。人間が蛇に変身するパターンの中で、仏教要素のある話は南北朝に 1 例、唐代に 4 例、五代に 1 例、清代に 1 例ある。南北朝時代から清にかけて、隋・宋を除き、各時代に散在している。中国の仏教要素が織り込まれた蛇の変身譚は日本ほど多くはないが、話の登場は早く（南北朝）、複数の時代にまたがっている。

日本の蛇が人間に変身する変身譚の中で、仏教要素のある話は平安時代に 2 例、室町時代に 2 例、江戸時代に 1 例ある。人間が蛇に変身する変身譚の中で、仏教要素のある話は平安時代に 11 例、鎌倉時代に 4 例、室町時代に 1 例、江戸時代に 1 例ある。日本においては、仏教要素が織り込まれた蛇の変身譚の割合が多く、複数の時代にまたがっている。

**8.5.1.3 中国と日本の犬の変身譚に仏教要素が織り込まれた物語の割合（括弧内は変身譚の例数）**

| | 犬が人間に変身 | 人間が犬に変身 | 両パターンの合計 |
|---|---|---|---|
| 中国 | 0%（0/16） | 60%（3/5） | 14%（3/21） |
| 日本 | 67%（2/ 3） | 50%（2/4） | 57%（4/ 7） |

表 8.5.1.3 に示したように、例は少ないが、仏教要素が織り込まれた犬の変身譚の割合は中国より日本の方が大きい。

[483] 正体が不明で、仏教要素のない物語の 1 例を含めて 34 例になる。

中国の犬の変身譚では、仏教要素のある話は宋代に集中している。日本の犬の変身譚では、仏教要素のある話は平安時代に 3 例、鎌倉時代に 1 例ある。

### 8.5.1.4 中国と日本の亀の変身譚に仏教要素が織り込まれた物語の割合（括弧内は変身譚の例数）

| | 亀が人間に変身 | 人間が亀に変身 | 両パターンの合計 |
|---|---|---|---|
| 中国 | 0%（0/12） | 0%（0/3） | 0%（0/15） |
| 日本 | 0%（0/ 3） | 0%（0/0） | 0%（0/ 3） |

表 8.5.1.4 に示したように、中国にも日本にも、仏教要素が織り込まれた亀の変身譚はない。

上記の 4 つの動物を考察した結果、同じ動物の場合、日本の変身譚に仏教要素が織り込まれた物語の割合が大きいことがわかる。

また、中国において、狐・蛇・犬・亀の仏教要素が織り込まれた変身譚の割合を比較してみると、蛇の変身譚は仏教要素が最も多い変身譚である。蛇と比べ、狐・犬などの変身譚には仏教要素のある話は少ない。日本の場合でも、蛇の変身譚に仏教要素が織り込まれた話は 56%（表 8.5.1.2）を占め、数が多い。

日中両国において、蛇の変身譚に仏教要素が織り込まれた話が多い原因として、インドから伝わってきた仏教思想の中には、因果応報を受けて蛇になるという考え方が存在していることが挙げられる。郜（2011）は、「仏教は因果応報を宣伝するために、悪者は現在と未来ともにさまざまな苦難・苦痛を受けるべきであり、その中の一種は蛇身を受ける苦しみだ[484]」と指摘している。つまり、インドから伝わって来た仏教思想では、蛇は仏教の因果応報の思想と結びつけられていた。蛇と仏教とのつながりが中国・日本に伝わって来た後、このような蛇と仏教のつながりが両国の変身譚に取り入れられたと推測できる。

## 8.5.2 中国における虎の変身譚における仏教要素

虎が人間に変身するパターンにおいて、仏教要素が織り込まれた話は少なく、22 例の中

[484] 郜（2011）、p.98 は「佛教宣扬因果报应，为恶者现在未来都会受到种种苦难折磨，其中一种就是受蛇身之苦」と述べている。日本語訳は筆者による。

に 2 例しかない。『太平廣記』巻 429 引『傳奇』「馬拯」においては、虎は人を騙して食うため、僧侶に変身した。同じく虎が僧侶に変身した話として、『茅亭客話』「虎化為僧」が挙げられる。この 2 例は、ともに虎が仏教関係の人に変身する例である。

人間が虎に変身するパターンの中においては、5.1.3.2 で述べたように、仏教的な宿罪（前世の罪）や罪・業によって虎になった 4 例の話は、変身の原因に仏教要素が見られる。

そのほか、虎に変身した原因に仏教要素は見られないが、話自体には仏教要素が織り込まれたものがある。『太平廣記』巻 431 引『廣異記』「荊州人」の話の要約は以下のとおりである。

> ある人が山の中を歩いていた時に、倀鬼に遭遇し、倀鬼に虎皮を被らされ虎になった。それから倀鬼の言いなりになって、3、4 年の間に人や獣を捕まえて食べた。その後、彼は寺に入り、禅師の助けで人間に戻った。2 年間寺で過ごし、その後寺からしばらく離れると、また倀鬼に遭遇した。今回は、下半身に虎皮をかぶらされ虎になった。この人は急いで寺に走り込み、その後経を唱えることに力を入れ、一年あまり経ってやっと下半身が人間の姿に戻った。それから二度と寺から出る勇気がなく、死ぬまで寺で過ごした。〔5.1.2-23〕

この話の中では、虎に変身した人は、まず仏教関係の人に助けられ、その後また仏経の力によって助けられたため、仏教要素が織り込まれていると考えられる。

人間が虎に変身するパターンにおいて、上記のような仏教要素が織り込まれた話は 43 例の中に 5 例しかない。

中国において、虎の変身譚は数多く書かれてきたが、その中に仏教要素が織り込まれたものは少ないことがわかる。

### 8.5.3 日本の変身譚と仏教説話

8.4.1 で述べたように、日本においては、変身譚の多くは人間が動物に変身するパターンであり、この現象を起こす主な原因は、日本における動物の変身譚の主な出典が仏教説話集であることだと考えられる。

平安時代になると、仏教が日本に伝来し、変身譚に大きな影響を与えた。これらの変身譚にもっとも多く見られるのは、仏教の因果応報と輪廻転生である。すなわち、人間は今

世で善悪の業を積み重ねていくと、来世ではその積み重ねた業に応ずる報を得て、六道の世界を輪廻するという考え方である。また、人間が動物に変身する話による戒めは、仏教の「罪業によって畜生道に堕ちる」という考え方に当てはめやすいため、これらの話も仏教を広めるための道具となった。人間が動物に変わることも輪廻であるように、動物が人間に変わることも輪廻である。しかしながら、因果応報と輪廻転生の思想を物語に織り込み、仏教を民衆などに広める際に、対象である民衆たちの心をもっとも震え上がらせるのは、「生前に邪悪な行いをすると、悪報として、死後動物に生まれ変わり苦難を身に受ける」というパターンになるだろう。なぜなら、この変身は、人々にとって、自分自身に直接に関わってくるからである。つまり、変身譚の中の人間が悪い行いをしたため人間が動物に変身するというパターンは、おそらく仏教思想を広めるためにもっとも都合のいいパターンであると思われる。結果的にも、このようなパターンがもっとも多く書かれた。

また、日本における変身譚の多くが仏教説話であるという点も注目に値する。日本における変身譚を抽出する際に使用したジャパンナレッジ新編古典文学全集の 87 作品[485]のうち、仏教説話集は 4 作品[486]しかない。このデータベースを使用して抽出した変身譚は 43 例あるが。43 例中、29 例が仏教説話集の 4 作品に集中している。少なくとも、このデータベースを使用して変身譚を抽出した結果から見ると、日本における変身譚は仏教説話が多いと言えよう。

### 8.5.4 日中両国における仏教が変身譚に与えた影響

狐・蛇・虎・犬の変身譚を考察した結果、中国においては、仏教要素が織り込まれた話は日本より少なかった。それに対し、日本の変身譚には、仏教要素が織り込まれた話が多く、中国と比べ、仏教から受けた影響が大きく見える。特に蛇と犬の場合、奈良時代に書かれたごくわずかな変身譚以外、ほとんどの変身譚は仏教思想を広めるために書かれたものである。このことから、仏教は日本における変身譚の創作を促したと言えよう。

では、なぜ日本と比べ、中国においては仏教要素が織り込まれた変身譚が少なかったのか。その理由として、以下の 2 点が推測される。

①中国においては、仏教が渡来する前の春秋時代に、すでに文化が開花し、体系化されており、変化の観念および自然の観念は古来の文化として深く根付いていた。また、仏教

[485] 全 88 巻。
[486] 『日本霊異記』、『今昔物語集』、『宇治拾遺物語』、『沙石集』

が伝来した後、中国では仏教と並行して儒教・道教・民間俗信が存在したため、仏教が変化の観念および変身譚に与えた影響は大きくなかった。

それに対し、日本では、古来から体系化した変化の観念が見当たらない。仏教が伝来した後、仏教は日本の文化に根本から影響を与えた[487]。日本における変身と関連する輪廻転生の思想の展開について、下出（1989）は「眼前の動植物に対して輪廻転生を反映させたり、あるいは、特定人物に反映してあるものの生まれかわりとするとか、ある仏・菩薩などの化身ととらえるといった方向で展開してきました」[488]と述べている。つまり、日本に伝来してきた仏教は、日本における変身の観念に影響を及ぼしたのである。

②日中両国は、古くから外来文化に対する姿勢が異なる。日本と比べ、中国は外来文化に対して、受動的な姿勢を取る傾向がある。例えば、中国においては、国の支配層が人をインドに派遣し、仏教を学ぶことはなかった。仏教を重んじた時代もあったが、李志夫（1998）は、「歴代の王朝が仏教を尊びあがめたが、それは北方の少数民族である胡人が仏教を吸収してかなりの効果が出たため、隋・唐、ないし南方の各王朝が仏教を重視するようになったのだ[489]」と指摘している。それに対し、日本は新しい文化に対して、中国とは異なる姿勢を示している。辻(1944)は、日本文化が外来文化に対する姿勢について、「かくて世界のあらゆる文明は東から西から、二千年の間に日本へ入って來て、日本は東西文明の中心となり、世界文明の貯藏場となった譯である。かくの如く、日本は世界文明の集合地となったが、この文化の發展の跡を尋ねて見ると、何れの時代に於ても、外國文化の影響を受けて居る。これは一面から見ると、我が國民が外來文化を吸收するに敏速であることを示すものである。即ち外國文化を採取し、これを咀嚼し、これを消化するといふことが我が國文化の一つの特長である。これは我が民族の素質が優秀であることを示し、包容力の大なることを示す所以である[490]」と述べている。つまり、古来から、日本は外来文化に対して柔軟性を持ち、積極的に新しい文化を受け入れる傾向が強い。仏教思想

---

[487] 李志夫（1998）、p. 103 は「中國文化已早傳入日本 267 年，而竟未影響日本當時之文化進步，直到佛教傳入日本以後，中國文化隨著佛教才在日本生根萌芽，成為日本「大化革新」之文化背景。為什麼中國文化一定要伴著佛教才能在日本生根呢？那就如我們在前言所提，宗教才是發展文化之主要動力。雖然中國儒家思想、道家精神具有宗教情操，但畢竟不能從信仰上去體認，而要透過理性去體認，這就不是一個沒有文化的民族所能瞭解的。而佛教既是信仰的，也是人文的，所以真正根植中國文化於日本的，實應歸功於佛教。所以說，佛教之於日本文化之影響確實是根本的。由於中國本土已有根深蒂固的文化，佛教只是豐富了中國文化，對中國文化的影響在幅度上，確實也是全面的、普遍的。」と述べている。アンダーラインは筆者による。

[488] 下出（1989）、p. 64。

[489] 李志夫（1998）、p. 114 は「雖然歷代朝廷對佛教也很尊崇，但也是由於北方胡人吸收佛教已有相當成效後，隋、唐，乃至南方各朝才重視佛教」と述べている。日本語訳は筆者による。

[490] 辻（1944）、p. 2-3。

の受け入れの面においては、日本もこのような姿勢を示した。7 世紀の初頭から、聖徳太子が遣隋使を派遣し、中国の文化・制度の摂取を意識的に、また主体性をもって進めた。その結果、日本において仏教を体系的に学ぶことができるようになり、仏教は日本における変化に対する観念にまで影響を及ぼし、変身譚の創作を促した。それだけでなく、8.4.4 で述べたように、変身譚も仏教思想を広める道具として用いられ、仏教思想を広める役割を果たした。

上記をまとめると、両国の変身譚はともに仏教からの影響を受けたが、日本の変身譚には、仏教要素が織り込まれた話が多く、中国と比べ、仏教から受けた影響が大きいと言える。これは、日本が外来文化を積極的に受け入れる傾向が強く、根本から仏教に影響されたからである。それに対し、中国では、仏教が伝来する前に、古来の文化がすでに定着し、その上で中国は外来文化に対して受動的な姿勢を取る傾向が強かったからである。

## 参考文献　（日本語文献は 50 音順、中国語文献はアルファベット順）

### 【日本語文献】

浅井了意、吉田幸一編『新語園』＜下＞（寛文十二年板複製）、古典文庫 420 冊、帝都印刷製本株式会社、1981 年

石川栄吉、梅棹忠夫、大林太良、蒲生正男、佐々木高明、祖父江孝男『文化人類学事典』、弘文堂、1991 年

石川忠久編『中国文学の女性像』、汲古書院、1986 年

石田戢、濱野佐代子、花園誠、瀬戸口明久『日本の動物観：人と動物の関係史』、東京大学出版会、2013 年

市古貞次編『日本文学史年表』、学燈社、1990 年

井原七緒子「浦島伝説の起源について」、『学海』9、上田女子短期大学、1993 年、pp. 41-50

今村遥「中国文学の狐―狐妖譚の変遷と九尾狐妲己の誕生に至るまで」、『長野国文』16、長野県短期大学日本語日本文学会、2008 年、pp. 104-123

太田伸広「グリム童話と『日本の昔ばなし』の比較―変身についてー」、『人文論叢(29)』、三重大学人文学部文化学科、2012 年、pp. 39-65

岡田充博「「板橋三娘子」考（三）―中国の変身譚のなかで・上」、『東洋古典学研究』第 12 集、広島大学東洋古典学研究会、2001 年、pp. 69-103

岡田充博「「板橋三娘子」考（五）―日本の変身譚のなかで」、『東洋古典学研究』第 16 集、広島大学東洋古典学研究会、2003 年、pp. 101-153

岡田充博「先秦時代の変身譚について」、『横浜国立大学教育人間科学部紀要 II　（人文科学)』12、2010 年、pp. 66-57

笠原一男編著『歴史に見る日本人のこころ』、評論社現代選書 12、評論社、1978 年

君島久子「羽衣覚書―飛翔と変身―」、『藝文研究』127、慶應義塾大学藝文学会、1969 年、pp. 411-421

近藤良樹「昔話・神話にみる蛇の役柄：知恵・生命・異性の象徴となる蛇」、『HABITUS』16、西日本応用倫理学研究会、2012 年、pp. 1-25

坂井田ひとみ「日中狐文化の探索」、『中京大学教養論叢』第 36 巻 4 号、1996 年、pp. 1291-1330(1-40)

坂元義種「古代日本女性の栄光と没落」、『龍谷大学論集（470)』、2007 年、pp. 53-74

下出積與、圭室文雄編『日本の精神』、世界書院、1989 年

白川静訳注『詩経国風』、東洋文庫 518、平凡社、1990 年

世界宗教百科事典編集委員会『世界宗教百科事典』、丸善出版、2012 年

太平幸代「火浣布をめぐる言説―魏晋における「異物」の記録と語りの世界―」、『奈良女子大学文学部研究教育年報,』第 8 号、2011 年、pp. 1-13

辻善之助著『皇室と日本精神』、大日本出版、1944 年

鄭高詠「虎のイメージに関する一考察―中国のことばと文化」、「言語と文化」12、愛知大学語学教育研究室、2005 年、pp. 113-134

富永一登「「人虎伝」の系譜―六朝化虎譚から唐伝奇小説へ―」、『中国中世文学研究』13、中国中世文学会、1978 年、pp. 1-17

富永一登「狐説話の展開―六朝志怪から唐代小説へ」、『学大国文』29、大阪教育大学国語教育講座・日本アジア言語文化講座、1986 年、pp. 189-207

富永一登「「白蛇伝」遡源考--六朝・唐・宋の蛇説話」、『学大国文』30、大阪教育大学国語教育講座・日本アジア言語文化講座、1987 年、pp. 20-41

陶立璠著、佐野賢治監訳、上野稔弘訳『中国民俗学概論』、勉誠社、1998 年

中塚亮「妲己と狐―『封神演義』に見る、イメージ及び物語の成立に至る一過程―」、『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』第 3 輯、1999 年、pp. 65－95

長野一雄「日本霊異記上巻第二話成立の問題点－主として外婚説話上からー」、『国文学研究』、早稲田大学国文学会、1969 年、pp. 13-19

中野美代子『中国人の思考様式』、講談社現代新書、1989 年

永藤美緒「『今昔物語集』における変身譚」、『日本文學誌要』62、法政大学、2000 年、pp. 29-37

中村禎里『日本人の動物観―変身譚の歴史』、海鳴社、1984 年

林晃平「浦島伝説から見る仏教文化」、『駒澤大學佛教文學研究』13、2010 年、pp. 3-26

廣瀬玲子「西廂記または物語の謎解き」、『東洋文化研究所紀要』 第 120 冊、東京大学東洋文化研究所、1993 年 2 月、 pp. 113-168

福田アジオ、新谷尚紀、湯川洋司、神田より子、中込睦子、渡邊欣雄編集『日本民俗大辞典』（上）（下)、吉川弘文館、1999 年

堀誠「狐変妲己考」、『早稲田大学教育学部学術研究 国語・国文学編』36、1987 年、pp. 103-113

溝口雄三、池田知久、小島毅著『中国思想史』、東京大学出版会、2007 年

村山芳昭「「浦島説話」と易(陰陽)・五行、讖緯思想」、『東アジアの古代文化』119、大和書房、2004 年、pp.128-147

屋敷信晴「唐代狐妖譚と道教」、『中国中世文学研究』42、中国中世文学会、2002 年、pp.19-47

湯浅佳子「『曾呂里物語』の類話」、『東京学芸大学紀要. 人文社会科学系. I』60、2009 年、pp.307-330

吉野裕子著『蛇：日本の蛇信仰』、ものと人間の文化史 32、法政大学出版局、1979 年

吉野裕子著『狐：陰陽五行と稲荷信仰』、ものと人間の文化史 39、法政大学出版局、1980 年

魯迅著、中島長文訳注『中国小説史略 1』(全 2 巻)、平凡社、1997 年

## 【中国語文献】

蔡堂根「中国文化中的人神恋」、浙江大学博士学位论文、2004 年

郜林涛「汉译佛经中的“蛇”形象探源及其对古代小说的影响」、『名作欣赏 Masterpieces Review』 2011 年 17 期、2011 年、pp.98-104

胡湖「中国的虎故事与虎文化－－以古代文言叙事作品为中心」、上海师范大学硕士学位论文、2009 年

姬娟、張文安「中秋节形成的文化考察」、『南洋理工学院学报』第 2 卷第 5 期、2010 年、pp.46-49

紀昀著・邵海清等译『白话全本阅微草堂笔记』、十大文言短篇小说今译丛书、上海古籍出版社、1995 年

吉野裕子著、井上聡、汪平、楊華、曹峰译『神秘的狐狸－－阴阳五行与狐崇拜』、辽宁教育出版社、1990 年

孔凌霄「中日文学中的蛇女形象」、对外经济贸易大学硕士学位论文、2006 年

李志夫「佛教對中日文化影響之比較」、『中華佛學學報』第 011 期、1998 年、pp.103-117

李剣国『唐五代志怪傳奇叙録』、南開大學出版社、1993 年

李剣国『宋代傳奇叙録』、南開大學出版社、1997 年

李剣国『中国狐文化』、人民文学出版社、2002 年

李剣国『唐前志怪小说史』、人民文学出版社、2011 年

李鵬飛「试论日本古代变形题材类型作品的因袭与创造--兼论其与中国古代变形题材小说的

关联」、『汉语言文学研究』第 2 期、2010 年、pp. 29-35

李姍姍「中国古代文学作品中狐意象文化的嬗变」、『重庆邮电大学学报(社会科学版)』第 22 巻 3 号、2010 年、pp. 81-86

劉玉建著『传统文化溯源——中国古代龟卜文化』、广西师范大学出版社、1992 年

魯迅撰『中国小说史略』上海古籍出版社、1998 年

馬得禹「搜神记产生的思想文化背景」、『甘肃联合大学学报（社会科学版）』第 22 卷第 6 期、2006 年、pp. 68-71

莽萍「物我相融：早期中国人的信仰、生活和動物观」、『中国文化』2008 年第 2 期、中国艺术研究院、2008 年、pp. 53-69

銭鐘書『管錐編』第 2 冊、中華書局、1979 年

山川麗著、高大倫・范勇译『中国女性史』、三秦出版社、1987 年

田桂民「早期中国神仙信仰的形成」、『南开学报（哲学社会科学版）』2003 年第 6 期、2003 年、pp. 39-44

吳波「『阅微草堂笔记』「狐」形象的文化意蕴及其审美特征」、『清小说研究』2005 年第 2 期、2005 年、pp. 124-135

汪玢玲『中国虎文化』、中华书局、2007 年

王淑芬「妝成人間一白衣－－從題旨的演變論白蛇傳故事的文化意蘊及其劇本藝術」、『世新中文研究集刊』第八期、2012 年、pp. 139-174

王燕「挣扎与情感和理性之间——从《搜神记》女妖形象管窥魏晋时代男性对女性的矛盾心态」、『扬州职业大学学报』第 14 卷第 1 期、2010 年、pp. 19-22

謝謙「白蛇传：民间传说的三教演绎」、『四川师范大学学报（社会科学版）』第 32 卷第 6 期、2005 年 11 月、pp. 57-61

徐晓静「论中印古代文学中蛇形象的演变」、西南大学硕士学位论文、2010 年

夏秀麗「《太平广记》中的化身型虎故事」、『蒲松龄研究』2007 年第 3 期、2007 年、pp. 149-155

項裕栄「中国古代小说中“化形为蛇”情节的佛教源流探考」、『浙江大学学报（人文社会科学版）』第 35 卷第 5 期、2005 年、pp. 128-134

袁光儀「太平經承負報應思想探析」、『成大宗教與文化學報』2002 年第二期、pp. 167-209

楊孝容「佛教女性观源流辨析」、四川大学博士学位论文、2004 年

趙荷香、傅麗霞「中国古代文学中的月亮原型及其影响」、『东岳论丛』2007 年第 6 期、2007

年、pp.60-62

張美娟、張美華「《太平广记》中的唐代女性精怪与少数民族文化论考——以狐、虎、狼为例」、『黑龙江民族丛刊』2007 年第 1 期、pp.166-170

趙生軍「中国古代蛇图腾崇拜刍议」、『思茅师范高等专科学校学报』2007 年第 4 期、2007 年、pp.59-62

周振甫『诗经译注』、中国古典名著译注丛书、中华书局、2002 年

# 謝辞

本研究の遂行ならびに本論文を作成するに当たり、御多忙中にも関わらず、多くのご支援とご指導を賜りました、指導教官坂内千里教授に深く感謝しております。時に応じて、厳しくご指導いただいたこと、またやさしく励ましてくださったことを通して、私自身の至らなさを実感することができたことは今後の努力の糧になるものであります。また、研究全般にわたる多大なご支援、ご指導を賜りました中直一教授に深く感謝いたしております。博士課程後期進学以前から現在にわたり温かく見守っていただくとともに、多くのご支援ご指導を賜りました大谷晋也准教授には深く感謝しております。

最後に、これまで自分の思う道を進むことに対し、温かく見守りそして辛抱強く支援してくださった両親に対しては深い感謝の意を表して謝辞と致します。

# 【付録】本論文で使った変身譚の資料

## 凡例

一、付録 3.1.1～7.2 は、本論文で使った変身譚の資料を動物別・パターン別の資料である。表の番号は論文の章に対応できる。

［例］　6.1　中国における犬の変身譚――本論文 6.1 中国における犬の変身譚

二、付録において、変身譚の資料が特に長い場合は、本文の議論を支持するためのテキストのみを抜粋した。その場合、省略の内容が長いものを「(中略)」で示し、短いもの（2 文以内）を「…」で示した。なお、前の部分を省略する場合は、「(前略)」で示し、以下の部分を省略する場合、「(以下略)」で示した。

三、中国の文献に関する説明

①付録において、引用した中国の資料については、出典の書名および版本の情報は、繁体字に統一した。物語の表記は、旧字や異体字を含め、原則として原文通りとした。

②付録において、引用した中国の資料の出典は、基本的には、『書名』・巻数または巻名・「題目」の順で表示した。巻数はアラビア数字で表示した。なお、「題目」のない場合は、「題目」を省略した。

『捜神記』から出典した箇所の「題目」は、汪紹楹校注『捜神記』（中華書局、1985 年）の目次を参照した。『捜神記』から出典した箇所は「『捜神記』・巻数・(通し番号)・「題目」」の順で表示した。

『捜神後記』から出典した箇所の「題目」は、汪紹楹校注『捜神後記』(中華書局、1981 年)の目次を参照した。『捜神後記』から出典した箇所は「『捜神後記』・巻数・(通し番号)・「題目」」の順で表示した。

『宣室志』から出典した箇所の「題目」は、 李冗撰 張讀撰・張永欽 侯志明點校『獨異誌 宣室志』（中華書局、1983 年）の目次を参照した。『宣室志』から出典した箇所は「『宣室志』・巻数・「題目」」の順で表示した。

『閲微草堂筆記』から出典した箇所は、「巻数・原文の出だしの部分」で表示した。

［例］　『搜神後記』巻 9「老黄狗」

『搜神記』巻 12（300）「五氣變化」

『宣室志』巻 10「韋氏子遇狐」

『閲微草堂筆記』 巻 1 獻縣周氏僕周虎

③現存の文献がない、もしくは現存の文献が集本の場合は、原則的に類書のテキストを引用した。類書を引用した場合は、『類書の書名』・類書の巻数・引『原典の書名』・「類書における題目」の順で表示した。なお、「類書における題目」のない場合は、「類書における題目」を省略した。

［例］　『太平廣記』巻 438 引『幽明錄』「溫敬林」

『太平御覽』巻 905 引『新論』

④出典の版本の情報に関する補足説明

類書『古今圖書集成』を引用した場合、彙編、典、部、外編を示した上で、廣西大学古籍所の「『古今圖書集成』索引＆全書圖像」における原文の複写画像のページ数を示し、参照 URL を付した。

デジタルライブラリーの画像を利用した場合、コマ番号と参照 URL を付した。

⑤テキストについて

原文の文字が識別できない箇所、および原文の中に「□」で表記した箇所は「□」で表示した。原文において、小文字で表示される注は、括弧をつけて表示した。

四、日本の文献に関する説明

①付録において、引用した日本の資料については、出典の書名および版本の情報は、元の表記を使った。

②付録において、引用した日本の資料の出典は、基本的に、『書名』・巻数（上・中・下を含む）または巻名（通し番号のある場合は「巻数―通し番号」）・「題目」の順で表示した。巻数と通し番号はアラビア数字で表示した。「題目」のない場合は、「題目」を省略した。

［例］　『古事記』中つ巻「垂仁天皇」(〔三〕本牟智和気の御子)

『今昔物語集』巻 31-34「大和国箸墓語第三十四」

説経節および御伽草子は、「説経節：/御伽草子：　題目」で表示した。

［例］　御伽草子：『俵藤太物語』

説経節：『小栗判官』

③出典の版本の情報について

デジタルライブラリーの画像を利用した場合、コマ番号と参照 URL を付した。

説経節および御伽草子類のページ数については、引用・参考した部分のページ数のみを示した。

出典が同じ書目の物語が存在するため、各物語を区別しやすいために、「『物語の題目』: 出典書目の情報」のように表示した。

［例］

『田村の草子』:横山重、松本隆信編『室町時代物語大成』第九（全十五巻)、角川書店、1987 年

同じ書目の中に、複数の作品が収録された場合は、「『作品名』: 出典書目の情報」のように表示した。

［例］

神谷養勇軒『新著聞集』: 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫 / 博文館編輯局校訂 第 47 編、博文館、1903 年

三坂春編『老媼茶話』: 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫 / 博文館編輯局校訂 第 47 編、博文館、1903 年

『雨月物語』高田衛校注・訳：中村幸彦　中村博保　高田衛校注・訳『英草紙　西山物語　雨月物語　春雨物語』、新編古典文学全集 78、2003 年 7 月 20 日第一版第三刷発行

④テキストについて

原文の識別できない文字、および原文の中に「□」で表記した箇所は「□」で表示した。

識別できるが、Unicode にない漢字については、部首などの一部分を加減法で構成した。本論文では、左右の組み合わせしか存在しないため、すべて「□（左＋右、筆者注)」で表

示した。

［例］

『風土記』逸文「丹後の国」（筒川の嶼子（水江の浦の嶼子））：此里有筒川村。此人夫、□（日＋下、筆者注）部首等先祖、名云筒川嶼子。

原文において、小文字で表示される注は括弧をつけて表示した。

［例］

説経節：『愛護若』　「十六丈の大蛇、愛護の死骸を被き（頭にのせ）、壇の上にぞ（三重）置きにける。」

〔　〕の記号は原文テキストにある表記であり、そのままに記した。

［例］

『沙石集』巻 7-2「妄執ニヨリテ女蛇ト成ル事」：生死〔ノ〕苦ノ久ク、流転ノヤミガタキ、只此愛欲ノイタス所ナリ。

### 3.1.1 中国における狐が人間に変身する変身譚

| # | 出典 | 出典の詳細情報 | 時代 | 原文 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『西京雜記』巻6（131）「記冢中事【七】」 | 無名氏撰・程毅中點校 葛洪撰『燕丹子 西京雜記』、古小說叢刊、中華書局、1985年、p.42 | 漢代 | ●欒書冢，棺柩明器，朽爛無餘。有一白狐，見人驚走。左右逐擊之，不能得。傷其左腳。其夕，王夢一丈夫鬚眉盡白，來謂王曰，何故傷吾左腳。乃以杖叩王左腳。王覺腳腫痛，生瘡，至死不差。 |
| 2 | 『太平廣記』巻447引『玄中記』「説狐」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3652 | 晋代 | ●狐五十歳。能變化為婦人。百歳為美女。為神巫。或為丈夫與女人交接。能知千里外事。善蠱魅。使人迷惑失智。千歳即與天通。為天狐。 |
| 3 | 『抱樸子』内篇巻3「對俗」 | 王明著『抱樸子內篇校釋』、新編諸子集成、中華書局、1986年3月第二版、1996年、p.48 | 晋代 | ●狐狸豺狼，皆壽八百歳。滿五百歳，則善變為人形 |
| 4 | 『搜神記』巻12（300）「五氣變化」 | 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985年、p.146 | 晋代 | ●千歳之狐，起為美女。 |
| 5 | 『搜神記』巻18（421）「張茂先」 | 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985年、pp.219-220 | 晋代 | ●張華，字茂先，晉惠帝時為司空，於時燕昭王墓前，有一斑狐，積年能為變幻，乃變作一書生，欲詣張公。過問墓前華表曰：「以我才貌，可得見張司空否？」（中略）華見其總角風流，潔白如玉，舉動容止，顧盼生姿，雅重之。於是論及文章，辨校聲實，華未嘗聞。…乃歎曰：「天下豈有此年少。若非鬼魅則是狐狸。」（中略）華已使人防門，不得出。（中略）時豐城令雷煥，字孔章，博物士也，來訪華，華以書生白之。孔章曰：「若疑之，何不呼獵犬試之？」乃命犬以試，竟無憚色。…華聞益怒曰：「此必真妖也。聞魑魅忌狗，所別者數百年物耳，千年老精，不能復別；惟得千年枯木照之，則形立見。」（中略）乃遣人伐華表（中略）便將木歸，燃之以照書生，乃一斑狐。華曰：「此二物不值我，千年不可復得。」乃烹之。 |
| 6 | 『搜神記』巻18（425）「阿紫」 | 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985年、pp.222-223 | 晋代 | ●後漢建安中，沛國郡陳羨為西海都尉。其部曲王靈孝，無故逃去，羨欲殺之。居無何，孝復逃走。羨久不見，因其婦。其婦實對，羨曰：「是必魅將去，當求之。」因將步騎數十，領獵犬，周旋于城外求索。果見孝于空冢中。聞人犬聲，怪遂避去。羨使人扶孝以歸，其形頗象狐矣，略不復與人相應，但啼呼「阿紫」。阿紫，狐字也。後十餘日。乃稍稍了悟。云：「狐始來時，于屋曲角雞栖間，作好婦形，自稱『阿紫』，招我。如此非一，忽然便隨去。即為妻，暮輒與共還其家。遇狗不覺。」云樂無比也。道士云：「此山魅也。」《名山記》曰：「狐者，先古之淫婦也，其名曰『阿紫』，化而為狐。故其怪多自稱『阿紫』。」 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 7 | 『搜神記』巻18（428）「胡博士」 | 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985年、pp.224-225 | 晋代 | ●吳中有一書生，皓首，稱胡博士，教授諸生。忽復不見。九月初九日，士人相與登山游觀，聞講書聲；命僕尋之，見空冢中，羣狐羅列，見人即走。老狐獨不去，乃是皓首書生。 |
| 8 | 『異苑』巻8 | 劉敬叔撰　陽松玠撰・範寧點校『異苑　談藪』、古小說叢刊、中華書局、1996年、p.83 | 南北朝 | ●胡道洽者，自云廣陵人，好音樂醫術之事。體有臊氣，恆以名香自防，唯忌猛犬。自審死日，誡弟子曰：「氣絕便殯，勿令狗見我尸也。」死於山陽。殮畢，覺棺空。即開看，不見尸體。時人咸謂狐也。 |
| 9 | 『太平廣記』巻447引『洛陽珈藍記』「孫巖」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3655 | 南北朝 | ●後魏有挽歌者孫巖。取妻三年。妻不脫衣而臥。巖私怪之。伺其睡。陰解其衣。有尾長三尺。似狐尾。巖懼而出之。甫臨去。將刀截巖髮而走。隣人逐之。變為一狐。追之不得。其後京邑被截髮者一百三十人。初變為婦人。衣服淨粧。行于道路。人見而悅之。近者被截髮。當時婦人着綵衣者。人指為狐魅。出《洛陽伽藍記》 |
| 10 | 『太平廣記』巻447引『朝野僉載』「張簡」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3658 | 唐代 | ●唐國子監助教張簡。河南緱氏人也。曾為鄉學講文選。有野狐假簡形。講一紙書而去。須臾簡至。弟子怪問之。簡異曰。前來者必野狐也。講罷歸舍。見妹坐絡絲。謂簡曰。適煮菜冷。兄來何遲。簡坐。久待不至。乃責其妹。妹曰。元不見兄來。此必是野狐也。更見即殺之。明日又來。見妹坐絡絲。謂簡曰。鬼魅適向舍後。簡遂持棒。見真妹從厠上出來。遂擊之。妹號叫曰。是兒。簡不信。因擊殺之。問絡絲者。化為野狐而走。出《朝野僉載》 |
| 11 | 『太平廣記』巻454引『傳記』「姚坤」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3710-3711 | 唐代 | ●太和中。有處士姚坤不求榮達。常以釣漁自適。居於東洛萬安山南。以琴尊自怡。其側有獵人。常以網取狐兔為業。坤性仁。恒收贖而放之。如此活者數百。（中略）坤及醒。無計躍出。但饑茹黃精而已。如此數日夜。忽有人於井口召坤姓名。謂坤曰。我狐也。感君活我子孫不少。故來教君。我狐之通天者。初穴於塚。因上竅。乃窺天漢星辰。有所慕焉。恨身不能奮飛。遂凝眄注神。忽然不覺飛出。躡虛駕雲。登天漢。見仙官而禮之。君但能澄神泯慮。注眄玄虛。如此精確。不三旬而自飛出。雖竅之至微。無所礙矣。坤曰。汝何據耶。狐曰。君不聞西昇經云。神能飛形。亦能移山。君其努力。言訖而去。坤信其說。依而行之。約一月。忽能跳出於磴孔中。遂見僧。大駭。視其井依然。僧禮坤詰其事。坤告曰。但於中餌黃精一月。身輕如神。自能飛出。竅所不礙。僧然之。遣弟子。以索墜下。約弟子一月後來窺。弟子如其言。月餘來窺。僧已斃於井耳。坤歸旬日。有女子自稱夭桃。詣坤。云是富家女。誤為年少誘出。失蹤不可復返。願持箕帚。坤見其（其原作之。據明鈔本改。）妖麗冶容。至于篇什書札（書札原作等禮。據明鈔本改。）俱能精至。坤亦念之。後坤應制。挈夭桃入京。（中略）忽有曹牧遣人執良犬。將獻斐度。入館。犬見夭桃。怒目掣鎖。蹲步上階。夭姚亦化為狐。跳上犬背抉其目。大驚。騰號出館。望荊山而竄。坤大駭。逐之行數里。犬已斃。狐即不知所之。坤惆悵悲惜。盡日不能前進。及夜。有老人挈美醞詣坤。云是舊相識。既飲。坤終莫能達相識之由。老人飲罷。長揖而去。云。報君亦足矣。吾孫亦無恙。遂不見。坤方悟狐也。後寂無聞矣。出《傳記》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 12 | 『太平廣記』巻447引『廣異記』「上官翼」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3659 | 唐代 | ●唐麟德時。上官翼為絳州司馬。有子年二十許。嘗曉日獨立門外。有女子。年可十三四。姿容絕代。行過門前。此子悅之。便爾戲調。即求歡狎。因問其所止。將欲過之。女云。我門戶雖難。郎州佐之子。兩俱形迹。不願人知。但能有心。得方便。自來相就。此子邀之。期朝夕。女初固辭。此子將欲便留之。然漸見許。昏後徙倚俟之。如期果至。自是每夜常來。經數日。而舊使老婢于牖中窺之。乃知是魅。以告翼。百方禁斷。終不能制。魅來轉數。晝夜不去。兒每將食。魅必奪之盃椀。此魅已飽。兒不得食。翼常手自作啖。剖以貽兒。至手。魅已取去。翼頗有智數。因此密搗毒藥。時秋晚。油麻新熟。翼令熬兩疊。以一置毒藥。先取好者作啖。偏與妻子。末乃與兒一啖。魅便接去。次以和藥者作啖。與兒。魅亦將去。連與數啖。忽變作老狐。宛轉而仆。擒獲之。登令燒毀訖。合家歡慶。此日昏後。聞遠處有數人哭聲。斯須漸近。遂入堂後。並皆稱冤。號擗甚哀。中有一叟。哭聲每云。若痛老狐。何乃為喉嚨枉殺腔幢。數十日間。朝夕來家。往往見有衣縗絰者。翼深憂之。後來漸稀。經久方絕。亦無害也。出《廣異記》 |
| 13 | 『太平廣記』巻447引『廣異記』「大安和尚」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3660 | 唐代 | ●唐則天在位。有女人自稱聖菩薩。人心所在。女必知之。太后召入宮。前後所言皆驗。宮中敬事之。數月。謂為真菩薩。其後大安和尚入宮。太后問見女菩薩未。安曰。菩薩何在。願一見之。敕令與之相見。和尚風神邈然。久之。大安曰。汝善觀心。試觀我心安在。答曰。師心在塔頭相輪邊鈴中。尋復問之。曰在兜率天彌勒宮中聽法。第三問之。在非非想天。皆如其言。太后忻悅。大安因且置心于四果阿羅漢地。則不能知。大安呵曰。我心始置阿羅漢之地。汝已不知。若置于菩薩諸佛之地。何由可料。女詞屈。變作牝狐。下階而走。不知所適。出《廣異記》 |
| 14 | 『太平廣記』巻448引『廣異記』「楊伯成」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、pp.3664-3665 | 唐代 | ●楊伯成。唐開元初。為京兆少尹。一日有人詣門。通云吳南鶴。伯成見。年三十餘。身長七尺。容貌甚盛。引之升座。南鶴文辨無雙。伯成接對不暇。久之。請屏左右。欲有密語。乃云。聞君小娘子令淑。願事門下。伯成甚愕。謂南鶴曰。女因媒而嫁。且邂逅相識。君何得便爾。南鶴大怒。呼伯成為老奴。我索汝女。何敢有逆。慢辭甚衆。伯成不知所以。南鶴逕脫衣入內。直至女所。坐紙隔子中。久之。與女兩隨而出。女言今嫁吳家。何因嗔責。伯成知是狐魅。令家人十餘輩擊之。反被料理。多遇泥塗兩耳者。伯成以此請假二十餘日。敕問何以不見楊伯成。皆言其家為狐惱。（中略）忽有道士。形甚瘦悴。（中略）道士笑曰。身是天仙。正奉帝命。追捉此等四五輩。（中略）道士書作三字。狀如古篆。（中略）南鶴見書。匍匐而行。至樹下。道士呵曰。老野狐敢作人形。遂變為狐。異常病疥。道士云。天曹驅使此輩。不可殺之。然以君故。不可徒爾。以小杖決之一百。流血被地。伯成以珍寶贈饋。道士不受。驅狐前行。自後隨之。行百餘步。至柳林邊。冉冉昇天。久之遂滅…其女睡食頃方起。驚云。本在城中隔子裏。何得至此。衆人方知為狐所魅。精神如睡中。出《廣異記》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 15 | 『太平廣記』巻448引『廣異記』「李參軍」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、pp.3666-3667 | 唐代 | ●唐兗州李參軍拜職赴上。（中略）李與僕御偕行。既至蕭氏。（中略）少時。蕭出。著紫蜀衫。策鳩杖。兩袍袴扶側。雪髯神鑒。舉動可觀。李望敬之。再三陳謝。（中略）老人乃云。李參軍向欲論親。已蒙許諾。蕭便敍數十句語。深有士風。作書與縣官。請卜人剋日。須臾卜人至。云。卜吉。正在此宵。。蕭又作書與縣官。（借頭花釵絹明鈔本「絹」作「媚」）兼手力等。尋而皆至。其夕。亦有縣官來作儐相。歡樂之事。與世不殊。至入青廬。婦人又姝美。李生愈悅。暨明。蕭公乃言。李郎赴上有期。不可久住。便遣女子隨去。寶鈿犢車五乘。奴婢人馬三十疋。…李至任。積二年。奉使入洛。留婦在舍。婢等並妖媚蠱冶。眩惑丈夫。往來者多經過焉。異日。參軍王顒曳狗將獵。李氏群婢見狗甚駭。多騁而入門。顒素疑其妖媚。爾日心動。逕牽狗入其宅。合家拒堂門。不敢喘息。狗亦掣攣號吠。（中略）顒意是狐。乃決意排窗放犬。咋殺群狐。唯妻死。身是人。而其尾不變。顒往白貞益。貞益往取驗覆。見諸死狐。嗟歎久之…經十餘日。蕭使君遂至。入門號哭。莫不驚駭。（中略）王固執是狐。取前犬令咋蕭。時蕭陶對食。犬至。蕭引犬頭膝上。以手撫之。然後與食。犬無搏噬之意。（中略）蕭謂李曰。奴輩皆言死者悉是野狐。何其苦痛。當日即欲開瘞。恐李郎被眩惑。不見信。今宜開視。以明姦妄也。命開視。悉是人形。李愈悲泣。貞益以顒罪重。錮身推勘。顒私白云。已令持十萬。于東都取咋狐犬。往來可十餘日。貞益又以公錢百千益之。其犬既至。所由謁蕭對事。陶于正廳立待。蕭入府。顏色沮喪。舉動惶擾。有異于常。俄犬自外入。蕭作老狐。下階走數步。為犬咋死。貞益使驗死者。悉是野狐。顒遂見免此難。出《廣異記》 |
| 16 | 『太平廣記』巻449引『廣異記』「汧陽令」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、pp.3670-3671 | 唐代 | ●唐汧陽令不得姓名。在官。忽云。欲出家(中略）令因禪坐。閉門。不食六七日。家以憂懼。恐以堅持損壽。會羅道士公遠自蜀之京。途次隴上。令子請問其故。公遠笑曰。此是天狐。亦易耳。因與書數符。當愈。令子投符井中。遂開門。見父餓憊。逼令吞符。忽爾明晤。不復論修道事。（中略）遙見桑林下有貴人自南方來。前後十餘騎。狀如王者。令入門避之。騎尋至門。通云。劉成。謁令。（中略）謂令曰。蒙賜婚姻。敢不拜命。初令在任。有室女年十歲。至是十六矣。令云。未省相識。何嘗有婚姻。成云。不許我婚姻。事亦易耳。以右手掣口而立。令宅須臾震動。井厠交流。百物飄蕩。令不得已許之。婚期剋翌日。送禮成親。成親後。恒在宅。禮甚豐厚。資以饒益。家人不之嫌也。他日。令子詣京。求見公遠。公遠曰。此狐舊日無能。今已善符籙。（中略）公遠法成。求與交戰。（中略）公遠忽謂弟子云。彼擊余殪。爾宜大臨。吾當以神法縛之。及其擊也。公遠仆地。弟子大哭。成喜。不為之備。公遠遂使神往擊之。成大戰恐。自言力竭。變成老狐。公遠既起。以坐具撲狐。重之以大袋。乘驛還都。玄宗視之。以為歡笑。公遠上白云。此是天狐。不可得殺。宜流之東裔耳。書符流于新羅。狐持符飛去。今新羅有劉成神。土人敬事之。出《廣異記》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 17 | 『太平廣記』卷449引『廣異記』「李元恭」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、pp.3671-3672 | 唐代 | ●唐吏部侍郎李元恭。其外孫女崔氏。容色殊麗。年十五六。忽得魅疾。久之。狐遂見形為少年。自稱胡郎。（中略）狐乃談論。無所不至。多質疑于狐。頗狎樂。久之。謂崔氏曰。人生不可不學。乃引一老人授崔經史。前後三載。頗通諸家大義。又引一人。教之書。涉一載。又以工書著稱。（中略）復引一人至。云善彈琴。…悉教諸曲。備盡其妙。及他名曲。不可勝紀。（中略）李後問。胡郎何以不迎婦歸家。狐甚喜。便拜謝云。亦久懷之。所不敢者。以人微故爾。。是日遍拜家人。歡躍備至。李問胡郎欲迎女子。宅在何所。狐云。某舍門前有二大竹。時李氏家有竹園。李因尋行所。見二大竹間有一小孔。意是狐窟。引水灌之。初得猫狢及他狐數十枚。最後有一老狐。衣綠衫。從孔中出。是其素所著衫也。家人喜云。胡郎出矣。殺之。其怪遂絕。出《廣異記》 |
| 18 | 『太平廣記』卷449引『廣異記』「謝混之」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、pp.3675-3676 | 唐代 | ●唐開元中。東光縣令謝混之。以嚴酷強暴為政。河南著稱。混之嘗大獵于縣東。殺狐狼甚衆。其年冬。有二人詣臺。訟混之殺其父兄。兼他贓物狼籍。中書令張九齡令御史張曉往按之。兼鎖系告事者同往。曉素與混之相善。先疏其狀。令自料理。混之遍問里正。皆云。不識有此人。混之以為詐。縣令無狀。殺我父兄。今我二弟詣臺訴冤。（中略）混之驚愕久之。乃曰。吾春首大殺狐狼。得無是耶。及曉至。引訟者出。縣人不之識。（中略）有識者勸令求獵犬。獵犬至。見訟者。直前搏逐。徑跳上屋。化為二狐而去。出《廣異記》 |
| 19 | 『太平廣記』卷450引『廣異記』「王苞」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3677 | 唐代 | ●唐吳郡王苞者。少事道士葉靜能。中罷為太學生。數歲在學。有婦人寓宿。苞與結驩。情好甚篤。靜能在京。苞往省之。靜能謂曰。汝身何得有野狐氣。固答云無。能曰。有也。苞因言得婦始末。能曰。正是此老野狐。臨別。書一符與苞。令含。誡之曰。至舍可吐其口。當自來此。為汝遣之。無憂也。苞還至舍。如靜能言。婦人得符。變為老狐。銜符而走。至靜能所拜謝。靜能云。放汝一生命。不宜更至于王家。自此遂絕。出《廣異記》 |
| 20 | 『太平廣記』卷450引『廣異記』「唐參軍」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、pp.3677-3678 | 唐代 | ●唐洛陽思恭里。有唐參軍者立性修整。簡于接對。有趙門福及康三者投刺謁。唐未出見之。問其來意。門福曰。止求點心飯耳。（中略）唐引劒刺門福。不中。次擊康三。中之。猶躍入庭前池中。門福罵云。彼我雖是狐。我已千年。千年之狐。姓趙姓張。五百年狐。姓白姓康。奈何無道。殺我康三。必當修報于汝。終不令康氏子徒死也。唐氏深謝之。令召康三。門福至池所。呼康三。輒應曰。唯。然求之不可得。但餘鼻存。門福既去。唐氏以桃湯沃洒門戶。及懸符禁。（中略）忽見門福在櫻桃樹上。採櫻桃食之。唐氏驚曰。趙門福。汝復敢來耶。門福笑曰。君以桃物見欺。今聊復採食。君亦食之否。乃頻擲數四以授唐。唐氏愈恐。乃廣召僧。結壇持呪。門福遂逾日不至。其僧持誦甚切。冀其有効。以為己功。後一日。晚霽之後。僧坐楹前。忽見五色雲自西來。逕至唐氏堂前。中有一佛。容色端嚴。謂僧曰。汝為唐氏却野狐耶。僧稽首。唐氏長幼虔禮甚至。喜見真佛。拜請降止。久之方下。坐其壇上。奉事甚勤。佛謂僧曰。汝是修道。（請明鈔本請作謂）。通達。亦何須久蔬食。而為法能食肉乎。但問心能堅持否。肉雖食之。可復無累。乃令唐氏市肉。佛自設食。次以授僧及家人。悉食。食畢。忽見壇上是趙門福。舉家歎恨。為其所誤。門福笑曰。無勞厭我。我不來矣。自爾不至也。出《廣異記》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 21 | 『太平廣記』卷450引『廣異記』「薛迴」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3682 | 唐代 | ●唐河東薛迴與其徒十人于東都狎娼婦。留連數夕。各賞錢十千。後一夕午夜。娼偶求去。迴留待曙。婦人躁擾。求去數四。抱錢出門。迴敕門者無出客。門者不為啟鎖。婦人持錢尋審。至水竇。變成野狐。從竇中出去。其錢亦留。出《廣異記》 |
| 22 | 『太平廣記』卷451引『廣異記』「崔昌」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、p.3685 | 唐代 | ●唐崔昌在東京莊讀書。有小兒顏色殊異。來止庭中。（中略）小兒云。本好讀書。慕君學問爾。昌不之却。常問文義。甚有理。經數月。日暮。忽扶一老人乘醉至昌所。小兒暫出。老人醉。吐人之爪髮等。昌甚惡之。昌素有所持利劒。因斬斷頭。成一老狐。頃之。小兒至。大怒云。君何故無狀。殺我家長。我豈不能殺君。但以舊恩故爾。大罵出門。自爾乃絕。出《廣異記》 |
| 23 | 『太平廣記』卷451引『廣異記』「劉衆愛」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3686-3687 | 唐代 | ●唐劉全白說云。其乳母子衆愛。少時。好夜中將網斷道。取野猪及狐狸等。（中略）暗中聞物行聲。覘見一物。伏地窺網。因爾起立。變成緋裙婦人。行而違網。至愛前車側。忽捉一鼠食。愛連呵之。婦人忙遽入網。乃棒之致斃。而人形不改。愛反疑懼。恐或是人。因和網沒漚麻池中。夜還與父母議。及明。舉家欲潛逃去。愛竊云。寧有婦人食生鼠。此必狐耳。復往麻池視之。見婦人已活。因以大斧自腰後斫之。便成老狐。愛大喜。將還村中。有老僧見狐未死。勸令養之。云。狐口中媚珠。若能得之。當為天下所愛。以繩縛狐四足。又以大籠罩其上。養數日。狐能食。僧用小瓶口窄者。埋地中。令口與地齊。以兩胾猪肉。炙於瓶中。狐愛炙而不能得。但以口屬瓶。候炙冷。復下兩臠。狐涎沫久之。炙與瓶滿（中略）狐乃吐珠而死。珠狀如碁子。通圓而潔。愛母（「母」原作「每」。據明鈔本改。）帶之。大為其夫所貴。出《廣異記》 |
| 24 | 『太平廣記』卷32引『紀聞』「王賈」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第一冊、pp.203-205 | 唐代 | ●婺州叅軍王賈（中略）賈母之表妹。死已經年。常於靈帳發言。處置家事。兒女僮妾。不敢為非。每索飲食衣服。有不應求。即加笞罵。親戚咸怪之。賈曰。此必妖異。（中略）醉後。賈因請曰。姨既神異。何不令賈見形。姨曰。幽明道殊。何要相見。賈曰。姨不能全出。請露半面。不然。呈一手一足。令賈見之。如不相示。亦終不去。魅既被邀苦至。因見左手。於手指宛然。又姨之手也。諸子又號泣。賈因前執其手。姨驚呼諸子曰。外甥無禮。何不舉手。諸子未進。賈遂引其手。撲之於地。尚猶哀叫。撲之數四。即死。乃老狐也。形既見。體裸無毛。（以下略）出《紀聞》 |
| 25 | 『太平廣記』卷448『紀聞』「沈東美」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3663 | 唐代 | ●唐沈東美為員外郎。太子詹事佺期之子。家有青衣。死且數歲。忽還家曰。吾死為神。今憶主母。故來相見。但吾餓。請一餐可乎。因命之坐。仍為具食。青衣醉飽而去。及暮。僮發草積下。得一狐大醉。須臾。狐乃吐其食。盡婢之食也。乃殺之。出《紀聞》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 26 | 『太平廣記』巻448『紀聞』「葉法善」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、pp.3665-3666 | 唐代 | ●道士葉法善。括蒼人。有道術。能符禁鬼神。（中略）時有名族得江外一宰。將乘舟赴任。於東門外。親朋盛筵以待之。宰令妻子與親故車。先往胥溪水濱。日暮。宰至舟旁。饌已陳設。而妻子不至。宰復至宅尋之。云去矣。（中略）宰遂尋車跡。至北邙虛墓門。有大冢。見其車馬皆憩其旁。其妻與親表婦二十餘人。皆從一僧。合掌繞冢。口稱佛名。宰呼之。皆有怒色。宰前擒之。婦人遂罵曰。吾正逐聖者。今在天堂。汝何小人。敢此抑遏。至於奴僕。與言皆不應。亦相與繞冢而行。宰因執胡僧。遂失。于是縛其妻及諸婦人。皆諠叫。至第。竟夕號呼。不可與言。宰遲明問於葉師。師曰。此天狐也。能與天通。斥之則已。殺之不可。然此狐齋時必至。請與俱來。宰曰。諾。」葉師仍與之符。令置所居門。既置符。妻及諸人皆寤。謂宰曰。吾昨見佛來。領諸聖衆。將我等至天堂。其中樂不可言。佛執花前後。吾等方隨後作法事。忽見汝至。吾故罵。不知乃是魅惑也。齋時。婆羅門果至。叩門乞食。妻及諸婦人聞僧聲。爭走出門。喧言佛又來矣。宰禁之不可。乃執胡僧。鞭之見血。面縛。舁之往葉師所。（中略）師曰。速復汝形。魅即哀請。師曰。不可。魅乃棄袈裟于地。即老狐也。師命鞭之百。還其袈裟。復為婆羅門。約令去千里之外。胡僧頂禮而去。出門遂亡。出《紀聞》 |
| 27 | 『太平廣記』巻450『紀聞』「靳守貞」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3680 | 唐代 | ●霍邑古呂州也。（中略）城既久遠。則有魅狐居之。或官吏家。或百姓子女姿色者。夜中狐斷其髮。有如刀截。所遇無知。往往而有。唐時。邑人靳守貞者。素善符呪。為縣送徒至趙城。還歸至金狗鼻。傍汾河山名。去縣五里。見汾河西岸水濱。有女紅裳。浣衣水次。守真目之。女子忽爾乘空過河。遂緣嶺躡虛。至守貞所。手攀其笠。足踏其帶。將取其髮焉。守貞送徒。手猶持斧。因擊女子墜。從而斫之。女子死則為雌狐。（中略）遂每夜有老父及媼。繞其居哭。從索其女。守貞不懼。月餘。老父及媼罵而去。曰。無狀殺我女。吾猶有三女。終當困汝。於是遂絕。而截髮亦亡。出《紀聞》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 28 | 『太平廣記』巻452「任氏」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3692-3697 | 唐代 | ●任氏。女妖也。有韋使君者。名崟。第九。信安王禕之外孫。少落拓。好飲酒。其從父妹壻曰鄭六。不記其名。早習武藝。亦好酒色。貧無家。託身於妻族。（中略）主人適悟。乃曰。吁。我知之矣。此中有一狐。多誘男子偶宿。嘗三見矣。今子亦遇乎。鄭子赧而隱曰。無。（中略）鄭子遽呼之。任氏側身周旋於稠人中以避焉。鄭子連呼前迫。方背立。以扇障其後曰。公知之。何相近焉。鄭子曰。雖知之。何患。對曰。事可愧恥。難施面目。鄭子曰。勤想如是。忍相棄乎。對曰。安敢棄也。懼公之見惡耳。鄭子發誓。詞旨益切。任氏乃迴眸去扇。光彩艷麗如初。謂鄭子曰。人間如某之比者非一。公自不識耳。無獨怪也。鄭子請之與敍歡。對曰。凡某之流。為人惡忌者。非他。為其傷人耳。某則不然。若公未見惡。願終己以奉巾櫛。鄭子許與謀棲止（中略）崟愛之發狂。乃擁而淩之。不服。崟以力制之。方急。則曰服矣。請少迴旋。既從。則捍禦如初。如是者數四。崟乃悉力急持之。任氏力竭。汗若濡雨。自度不免。乃縱體不復拒抗。而神色慘變。崟問曰。何色之不悅。任氏長歎息曰。鄭六之可哀也。崟曰。何謂。對曰。鄭生有六尺之軀。而不能庇一婦人。豈丈夫哉。且公少豪侈。多獲佳麗。遇某之比者衆矣。而鄭生窮賤耳。所稱愜者。唯某而已。忍以有餘之心。而奪人之不足乎。哀其窮餒不能自立。衣公之衣。食公之食。故為公所縶（明鈔本縶作褻。）耳。若糠糗可給。不當至是。崟豪俊有義烈。聞其言。遽置之。斂衽而謝曰。不敢。（中略）任氏不得已。遂行。（中略）任氏乘馬居其前（中略）蒼犬騰出於草間。鄭子見任氏欻然墜於地。復本形而南馳。蒼犬逐之。鄭子隨走叫呼。不能止。里餘。為犬所獲。鄭子銜涕。出囊中錢。贖以瘞之。削木為記。（中略）嗟乎。異物之情也。有人道（道字原闕。據明鈔本補）焉。遇暴不失節。徇人以至死。雖今婦人有不如者矣。惜鄭生非精人。徒悅其色而不徵其情性。向使淵識之士。必能揉變化之理。察神人之際。著文章之美。傳要妙之情。不止于賞翫風態而已。惜哉。（以下略） |
| 29 | 『太平廣記』巻453引『靈怪錄』「王生」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3699-3700 | 唐代 | ●杭州有王生者。（中略）日晚。栢林中見二野狐倚樹如人立。手執一黃紙文書。相對言笑。旁若無人。生乃叱之。不為變動。生乃取彈。因引滿彈之。且中其執書者之目。二狐遺書而走。王生遽往。得其書。纔一兩紙。文字類梵書而莫究識。遂緘於書袋中而去。其夕。宿於前店。因話於主人。方訝其事。忽有一人携裝來宿。眼疾之甚。若不可忍。而語言分明。聞王之言曰。大是異事。如何得見其書。王生方將出書。主人見患眼者一尾垂下牀。因謂生曰。此狐也。王生遽收書於懷中。以手摸刀逐之。則化為狐而走。（中略）有弟一人。別且數歲。一旦忽至。見其家道敗落。因徵其由。王生具話本末。又述妖狐事。曰。但應以此為禍耳。其弟驚嗟。因出妖狐之書以示之。其弟纔執其書。退而置於懷中。曰。今日還我天書。言畢。乃化作一狐而去。出《靈怪錄》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 30 | 『太平廣記』巻450引『集異記』「徐安」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、pp.3679-3680 | 唐代 | ●徐安者。下邳人也。好以漁獵為事。安妻王氏貌甚美。人頗知之。開元五年秋。安遊海州。王氏獨居下邳。忽一日。有一少年狀甚偉。顧王氏曰。可惜芳艶。虚過一生。王氏聞而悅之。遂與之結好。而來去無憚。安既還。妻見之。恩義殊隔。安頗訝之。其妻至日將夕。即飾粧靜處。至二更。乃失所在。迨曉方回。亦不見其出入之處。他日。安潛伺之。其妻乃騎故籠從窻而出。至曉復返。安是夕。閉婦于他室。乃詐為女子粧飾。袖短劍。騎故籠以待之。至二更。忽從窻而出。徑入一山嶺。乃至會所。（中略）安乃奮劍擊之。三少年死于座。安復騎籠。即不復飛矣。俟曉而返。視夜來所殺少年。皆老狐也。安到舍。其妻是夕不復粧飾矣。出《集異記》 |
| 31 | 『太平廣記』巻451引『集異記』「僧晏通」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、p.3691 | 唐代 | ●晉州長寧縣有沙門晏通修頭陀法。將夜。則必就藂林亂冢寓宿焉。雖風雨露雪。其操不易。雖魑魅魍魎。其心不搖。月夜。棲於道邊積骸之左。忽有妖狐踉蹌而至。初不虞晏通在樹影也。乃取髑髏安於其首。遂搖動之。儻振落者。即不再顧。因別選焉。不四五。遂得其一。岌然而綴。乃褰擷木葉草花。障蔽形體。隨其顧盻。即成衣服。須臾。化作婦人。綽約而去。乃於道右。以伺行人。俄有促馬南來者。妖狐遙聞。則慟哭于路。過者駐騎問之。遂對曰。我歌人也。隨夫入奏。今曉夫為盜殺。掠去其財。伶俜孤遠。思願北歸。無由致。脫能收採。當誓微軀。以執婢役。過者易定軍人也。即下馬熟視。悅其都冶。詞意叮嚀。便以後乘挈行焉。晏通遽出謂曰。此妖孤也。君何容易。因舉錫杖叩狐腦。髑髏應手即墜。遂復形而竄焉。出《集異記》。（明鈔本作出纂異記） |
| 32 | 『太平廣記』巻454引『酉陽雜俎』「劉元鼎」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、p.3709 | 唐代 | ●舊說。野狐名紫狐。夜擊尾火出。將為怪。必戴髑髏拜北斗。髑髏不墜。則化為人矣。（以下略）出《酉陽雜俎》 |
| 33 | 『太平廣記』巻448引『乾膰子』「何讓之」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、pp.3661-3663 | 唐代 | ●唐神龍中。廬江何讓之赴洛。遇上巳日。將陟老君廟。（中略）見一翁。姿貌有異常輩。眉鬢皓然。著賨幪巾襦袴。幘烏紗。抱膝南望。吟曰。（中略）讓之方歎棲遲。獨行踽踽。已訝前吟翁非人。翁忽又吟曰。洛陽女兒多。無奈孤翁老去何。讓之遽欲前執。翁倏然躍入丘中。讓之從焉。初入丘。曛黑不辨。其逐翁已復本形矣。遂見一狐跳出。尾有火焰如流星。讓之却出玄堂之外。門東有一筵已空。讓之見一几案。上有硃盞筆硯之類。有一帖文書。紙盡慘灰色。文字則不可曉解。略記可辨者。（中略）題云。應天狐超異科策八道。後文甚繁。難以詳載。讓之獲此書帖。喜而懷之。遂躍出丘穴。後數日。水北同德寺僧志靜來訪讓之。說云。前者所獲丘中文書。非郎君所用。留之不祥。其人近捷上界之科。可以禍福中國。郎君必能却歸此。他亦酬謝不薄。（中略）一旦。其弟至焉。與讓之話家私中外。甚有道。長夜則兄弟聯牀。經五六日。忽問讓之。某聞此地多狐作怪。誠有之乎。讓之遂話其事。而誇云。吾一月前。曾獲野狐之書文一帖。今見存焉。其弟固不信。寧有是事。讓之至遲旦。揭篋。取此文書帖示弟。弟捧而驚歎。即擲於讓之前。化為一狐矣。（以下略）出《乾膰子》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 34 | 『太平廣記』巻455引『奇事記』「咎規」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3717-3718 | 唐代 | ●唐長安咎規因喪母。又遭火。焚其家產。遂貧乏委地。兒女六人盡孩幼。規無計撫養。其妻謂規曰。今日貧窮如此。相聚受飢寒。存活終無路也。我欲自賣身與人。求財以濟君及我兒女。如何。（中略）規方允之。數日。有一老父及門。規延入。言及兒女飢凍。妻欲自賣之意。老父傷念良久。乃謂規曰。我累世家實。（明鈔本家實作富家。）住藍田下。適聞人說君家妻意。今又見君言。我今欲買君妻。奉錢十萬。規與妻皆許之。老父翌日。送錢十萬。便挈規妻去。仍謂規曰。或兒女思母之時。但携至山下訪我。當令相見。經三載後。兒女皆死。又貧乏。規乃乞食於長安。忽一日。思老父言。因往藍田下訪之。俄見一野寺。門宇華麗。狀若貴人宅。守門者詰之。老父命規入。設食。兼出其妻。與規相見。其妻聞兒女皆死。大號泣。遂氣絕。其老父驚走入。且大怒。擬謀害規。規亦怯懼走出。迴顧已失宅所在。見其妻死於古塚前。其塚旁有穴。規乃自山下共發塚。見一老狐走出。乃知其妻為老狐所買耳。出《奇事記》 |
| 35 | 『宣室志』巻8(111)「斷狐尾」 | 李冗撰 張讀撰・張永欽侯志明點校『獨異誌　宣室志』、古小說叢刊、中華書局、1983年、p.109 | 唐代 | ●唐祁縣有村民，因輦地徵芻粟至太原府，及歸，途中日暮，有一白衣婦人立路旁，告村民曰：「妾今入都城，困而且□，願寄載車中，可乎？」村民許之，乃升車。行未四五里，因脂轄，忽見一孤尾在車之隙中，垂於車轅下。村民即以鐮斷之。其婦人化為無尾白狐，鳴嗥而去。 |
| 36 | 『宣室志』巻10(133)「三狐爭治病」 | 李冗撰 張讀撰・張永欽侯志明點校『獨異誌　宣室志』、古小說叢刊、中華書局、1983年、pp.132-133 | 唐代 | ●唐貞元中，江陵少尹裴君者，亡其名。有子，十餘歲，聰敏，有文學，風貌明秀，裴君深愛之。忽被病，旬日益甚，醫藥無及。裴君方求道術士為呵禁之，冀瘳其疾。有叩門者，自稱高氏子，以符術為業。裴即延入，令視其子。生曰：「此子非他疾，乃妖狐所為爾。然某有術能愈之。」即謝而祈焉。生遂以符術考召。近食頃，其子忽起曰：「某病今愈。」裴君大喜，謂高生為真術士。具食飲，已而厚贈縉帛，謝遣之。生曰：「自此當日日來候爾。」遂去。其子他疾雖愈，而神魂不足，往往狂語，或笑哭不可禁。高生每至，裴君即以此且祈之。高生曰：「此子精魄已為妖魅所擊，今尚未還耳。不旬日當間，幸無以憂。」裴信之。居數日，又有王生者，自言有神符，能以呵禁除去妖魅疾，來謁。裴與語。（中略）裴即使見其子，生大驚曰：「此郎君病狐也。不速治，當加甚耳。」裴君因話高生，王笑曰：「安知高生不為狐？」乃坐。方設席為呵禁，高生忽至。既入，大罵曰：「奈何此子病愈，而乃延一狐於室內耶！即為病者耳。」王見高來，又罵曰：「果然妖狐！今果至，安用他術考召哉？」二人紛然，相詬辱不已。裴氏家方大駭異，忽有一道士至門，私謂家僮曰：「聞裴公有子病狐，吾善視鬼，汝但為請入謁。」家僮馳白，裴君出，具話其事。道士曰：「易愈耳。」入見二人，二人又詬曰：「此亦妖狐，安得為道士惑人？」道士亦罵之曰：「狐當處郊野墟墓中，何為撓人乎？」既而閉戶相□毆。數食頃。裴公益恐。其家僮惶惑，計無所出。及暮，忽闃然不聞其聲，開戶視之，三狐臥地而喘，不動搖矣。裴君盡鞭殺之。後其子旬月乃愈。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 37 | 『宣室志』巻10(134)「狐醉酒」 | 李冗撰 張讀撰・張永欽侯志明點校『獨異誌　宣室志』、古小說叢刊、中華書局、1983年、pp.134-135 | 唐代 | ●尹瑗者，嘗舉進士下第，後為晉陽普原尉。既罷秩，退居郊野，以文墨自適。忽一日，有白衣丈夫來謁，自稱：「吳興朱氏子，早歲嗜學，聞明公以文學自負，願質疑於執事，無見拒。」（中略）甚敏辯縱橫，詞意典雅。瑗深愛之。（中略）後至重陽日，有人以濃醞一瓶遺瑗，朱生亦至，因以酒飲之。初辭以疾，不敢飲，已而又曰：「佳節相遇，豈敢不盡主人之歡耶！」即引滿而飲，食頃，大醉，告去。未行數十步，忽仆於地，化為一老狐，酩酊不能動矣。瑗即殺之。（以下略） |
| 38 | 『宣室志』巻10(135)「許貞狐婚」 | 李冗撰 張讀撰・張永欽侯志明點校『獨異誌　宣室志』、古小說叢刊、中華書局、1983年、pp.135-137 | 唐代 | ●唐元和中，有許貞家僑青齊間。（中略）妻色甚姝，且聰敏柔婉。生留旬月，乃挈妻孥歸青齊。（中略）又十餘年。李有七子二女，才質姿貌。皆居衆人先。而李容色端麗，無殊少年時。生益鍾念之。無幾，被疾且甚，生奔走醫巫，無所不至，終不愈。一日，屏人握生手，嗚咽涕泣，言曰：「妾自知死至，然忍羞以心曲告君，幸君寬罪宥戾，使得盡言己意。」悲不自勝。生亦為之泣，因慰之。乃曰：「一言誠自知受責於君，顧九稚子猶在側，以為君累，尚感一發口。且妾非人間人，天命當與君偶，得以狐狸賤質，奉箕帚二十年，未嘗纖芥獲罪。懼以他類貽君憂。一女子血誠自謂竭盡。今日永去。不敢以妖幻餘氣託君。念稚弱滿眼，皆世間人為嗣續，及某氣絕，願少念弱子心。無以枯骨為讐。得全肢體，瘞之土中，乃百生之賜也。」言終，又悲慟，淚百行下。生驚恍傷感，咽不能語。相對泣良久，以被蒙首，背壁而臥，食頃無聲。生遂發被，見一狐死被中。生特感悼之，為之殯殮，葬之，制皆如人。禮畢，生徑至陝。訪李氏居，墟墓荊棘，闃無所見，惆悵而還。居歲餘。七子二女相次而卒。視其骸骨皆人也，而貞終不以為異。 |
| 39 | 『宣室志』巻10(136)「韋氏子遇狐」 | 李冗撰 張讀撰・張永欽侯志明點校『獨異誌　宣室志』、古小說叢刊、中華書局、1983年、p.138 | 唐代 | ●杜陵韋氏子，家于韓城，有別墅在邑北十餘里。開成四年秋，自邑中遊焉。日暮，見一婦人，素衣，挈一瓢，自北而來，謂韋曰：「妾居邑北里中有年矣，家甚貧，今為里胥所辱，將訟於官。幸吾子紙筆書其事，妾得以執詣邑長，冀雪其恥。」韋諾之。婦人即揖韋坐田野，衣中出一酒巵，曰：「瓢中有酒，願與吾子盡醉。」於是注酒一飲韋。韋方舉巵，會有獵騎從西來，引數犬。婦人望見，即東走數十步，化為一狐。韋大恐，視手中巵，乃一髑髏，酒若牛溺之狀。韋因病熱，月餘方瘳。 |
| 40 | 『北夢瑣言』逸文巻4「犬逐狐」 | 孫光憲撰・賈二強點校『北夢瑣言』、歷代史料筆記叢刊・唐宋史料筆記、中華書局、2002年、pp.442-443 | 五代 | ●江南無野狐，江北無鷓鴣，舊說也。晉天福甲辰歲，公安縣滄渚村民辛家犬逐一婦人，登木而墜，為犬嚙死，乃老狐也，尾長七八尺。則正首之妖，江南不謂無也，但稀有耳。（以下略） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 41 | 『云齋廣錄』巻5「西蜀異遇」 | 李獻民撰・程毅中 程有慶點校『云齋廣錄』、古小說叢刊、中華書局、1997年、p.25-32 | 宋代 | ●宣德郎李褒，字聖與，於紹聖間調眉州丹稜縣令。（中略）其子達道，每進修之暇，以為宴息之地。達道一日獨坐其間，忽於花陰柳影之中，聞撫掌軽謳，其音韻清婉可愛。生遂潛往觀焉。見一女子，年十四五許…臉瑩紅蓮，眉勻翠柳，真蓬島之仙子也。（中略）生謂之曰：「娘子誰氏之家，而獨遊於此地？」曰：「妾君之近鄰也，姓宋，名媛，敍行第六。（中略）攀花折柳，誤踰短垣，入君之圃。不為從者在茲，豈勝羞愧。」（中略）媛逡巡有赧色，乃謂生曰：「妾未嘗嫁也。然則君嘗娶乎？」（中略）而星斗燦然。生忽聞異香馥郁，乃拭目而忘焉，則媛冉冉而至矣。（中略）雲雨聲低，曲盡人間之歡。及曉，媛乃辭去。自是晨隱而往，暮隱而來，宿於生之第者，幾一月矣。（中略）客曰：「君嘗與會遇之女子，非人類也。還欲察其狀否？」 生曰：「唯。」客乃敕左右使擒來。少頃，則媛為衣力士驅至矣。（中略）客乃叱之，則媛化為一大狐，狼狽而去。生起謝之，客乃出一符，留於几上（中略）父驚異之，乃謂生曰：「見夢於汝者，自謂李二秀才，又稱尊丈見待，得非吾所事灌口神君者呼？」褒遂詣其祠，觀其殿陛廊宇，悉皆頹毀，命工葺焉。生乃佩其符而不敢暫捨。後常見媛，雖咫尺之間，卒不能相近。生亦不與之語，媛但揮涕而已。如是者旬日，生乘閑獨步後圃，於小徑旁得花牋一幅。生覽之，乃媛所作之詞也。詞寄《蝶戀花》：（中略）生諷咏甚久，愛其才而復思其色。方躊躇之間，忽見媛映立於垂楊之下（中略）遂毀其符而再與之合。媛喜且愧，乃謂生曰：「妾之醜惡，君已備悉。分甘委棄，望絕攀緣。豈意君子不以鄙陋見疎，猶能終始為念。戴天履地，恩可忘乎。」<br>（中略）媛後誕一子，已及晬矣。一夕，媛忽悲跪，哽咽不能語。生怪而問之，媛乃洒涕，默而不答。生再四叩之，徐謂生曰：「妾與君相遇，事非偶然。今冥數已盡，當與子別」（中略）又叮寧復謂生曰：「君方少年，可力學問，親師友，以榮宗族，以顯父母，則盡人子之道。顧勿以妾為意，餘冀自愛。」(中略）敍話久之，乃各就枕。達旦，生起晨省，復歸於室。則媛與其子俱不復見矣。生不勝感恨歎息（以下略） |
| 42 | 『夷堅丁志』巻16「玉真道人」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第二冊、中華書局、1981年、pp.675-676 | 宋代 | ●高子勉荷世居荊渚，多貲而喜客。嘗損錢數十（上七字原闕，今從陸本補）萬買美妾。置諸別圃，作竹樓居之。居曰玉真道人。（中略）當寒食拜掃。子勉邀與家人同出，辭不肯。強之至再三。則曰，主公有命。豈得終違。我此出必凶。是亦命也。子勉怪其言。（中略）少頃。雙鷹往來掠簾外。雙犬即轎中曳出之。齧其喉，立死。子勉奔救，已無及。容質儼然如生。將舉尸歸，始見尾垂地。蓋野狐云。此事絕類唐鄭生也。（王齊賢說。） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 43 | 『夷堅支乙』巻4「衢州少婦」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第二冊、中華書局、1981年、pp.820-821 | 宋代 | ●衢州人李五七，居城中，本巨室子弟，後生計淪落，但為人家管當門戶。（中略）乃一少婦，約年十八九，自攜小燈籠，倚柱獨立，姿態絶艷，含笑迎揖曰，郎君萬福。（中略）曰，我即城東丘秘校妻也。嫁纔數月，不幸夫亡，居室一區，遭鄰裏淩暴，欺我孀婦不能訴，故不免告官。儻非冒夜以來，必將為所邀阻，於勢當爾。李正悦其貌，又言語楚楚可聽，四顧無他人，情不能遏，試出微詞挑之。欣然相就，攜手入室繾綣。少焉東方巳白，郡既領訟牒矣，兩人俟判畢別去，婦約今夕再用此時來。及期復遇，遂荏苒踰三旬。（中略）得於班春堂後，恰與婦寢。呼噪共前，皆就擒。婦掣臂呦呦作聲，化為青狐，奔而出。眾駭追之，茫無所覩矣。 |
| 44 | 『夷堅支乙』巻9「宜黄老人」（1話） | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第二冊、中華書局、1981年、p.861 | 宋代 | ●紹興中，撫州宜黄縣宰徐君聽訟，有老人曰侯林，哀哭陳牒，云居于社壇之旁，遭弓手夏生縱火焚蕩所居，遂並三子為灰燼。徐受詞駭愴，即捕夏送獄，訊鞫之甚苦。夏不知所對，泣涕弗食。縣吏共言：“夏為人素循理，安得有白晝放火殺人之事，願追詞首究其本末，仍委佐官往本處驗實，當可得情。”徐用其說。及詣壇下物色，並無侯老住止與火煬之跡，乃夏生以祀社之故，奉尉命汛掃壇宇，翦除榛穢，悉輦枯藁，置一空穴而焚之，蓋妖狐所窟也，三雛死，老狐因是假公力以復怨云。夏始得釋。 |
| 45 | 『夷堅支乙』巻9「宜黄老人」（2話） | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第二冊、中華書局、1981年、p.861 | 宋代 | ●又別有牝者，化形為美女，往來令丞廳，民吏盡見之。女面左頰有黒痣如豆大，為所惑以死者非一，多據丞廳碧瀾堂，小史屢見其從事於針紉，聞人聲則沒。庚辰歳，衢人祝君為丞，時至此堂獨寢，逢之而喜，挾與同衾，已而並其子相繼隕命。 |
| 46 | 『夷堅支丁』巻6「烏江魏宰」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第三冊、中華書局、1981年、p.1016 | 宋代 | ●烏江縣後有狐狸洞，時時出有小妖。淳熙四年，魏昌賢作宰，因坐聽事，家人於看（呂本作簾。）幕内，遙望見美女在其側，以告魏妻。時官妓王道奴以色稱，頗蒙邑僚顧眄。妻不復審其實，呼之入宅，痛加杖笞。明日，自往幕内，所睹如初，但不能辨其容狀。又呼道奴，則正病創困卧，始知其非。疑洞狐為厲，以語魏。魏往後園，於竹林中得土穴，穴口才徑尺許，而陰沉暗塞，深不可計。於是集道流設醮祛逐，輦瓦石謹築之，凡用十力，經日乃填平。自後妥貼，不復見。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 47 | 『夷堅支庚』巻6「譚法師」（目錄作「海口譚法師」） | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第三冊、中華書局、1981年、pp.1180-1181 | 宋代 | ●德興海口近市處居民黃翁有二子，（中略）翁念其勤苦，時時攜酒或烹茶往勞之。（中略）自後其來愈密。正當天寒，二子共議，使老人跋陟如此，於心終不安。捨之而歸。翁問何以去彼，具以誠告。翁曰，後生作農業是本分事，我元不曾到汝邊，常以念念，可惜有頭無尾。二子疑驚，詢其妻，皆曰，□翁不曾出。始大駭，復為翁述所見。翁曰，聞人說此地亦有狐狸作怪，化形為人。汝如今再往原上，若再敢弄汝，但打殺了不妨。子復去。迨晚翁至，持斧迎擊於路。即死，埋諸山麓。明日歸，翁曰，夜來有所見乎。曰，殺之矣。（中略）家有兩犬（中略）翁惡之，犬亦常懷搏噬之意。其一乘其（原無其字，據周本補）迎吠，翁使婦餌以糟胾，運椎擊其腦。既又曰，吠我者乃見存之犬，不可恕。婦引留之，不聽。皆死焉。固已竊訝。且頻與婦□謔，將呼使侍寢。里中譚法師者，俗人也，能行茅山法（中略）是時訪翁，辭以疾作不出，凡三至皆然。已而又過門，徑登床引被自覆。譚曰，此定有異。就房外持呪捧杯水而入，覺被內戰灼，形軀漸低，噀水揭視，拳然一老狐也，執而鞭殺之。而尋父所在弗得。試發葬處，則父尸存焉，已敗矣。蓋二子再入原時，真父往視，既戕之，狐遂據其室。予記唐小說所書黎丘人張簡等事，皆此類云。 |
| 48 | 『夷堅支庚』巻7「雙港富民子」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第三冊、中華書局、1981年、p.1187 | 宋代 | ●鄱陽近郭數十裏多陂湖，富家分主之。（中略）雙港一富子守舍（中略）俄有推戶者，狀如倡女，服飾華麗，而遍體沾濕。攜一復來曰，我乃路岐（原作妓，今改）散樂子弟也，知市上李希聖宅親禮請客，要去打窠地。家眾既往，我獨避雨，趕趁不上。願容我寄宿。富子曰，舍中甚窄，只著得一小床。若留汝過夜，我爺娘性嚴，必定嗔責。李宅去此不遠，早去尚可及。女懇祈再三，雜以笑謔，進步稍前，子毅然不聽。徐言：既不肯教我宿，只暫就火烘衣，俟乾而行可乎。許之。子登床，女坐其下，半卸紅裙，（呂本作袖）露其腕，白如酥。復背身挽羅裙，不覺裙裏一尾出。子引手拈杖擊之，成一狐而走。衣裳如蛻，皆汙泥敗葉也。 |
| 49 | 『夷堅支庚』巻7「應氏書院奴」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第三冊、中華書局、1981年、pp.1188-1189 | 宋代 | ●德興吳良史…奴子戴先，因負水灌蔬，跌而傷足。久之乃能起，嘆曰，我幾夜做怪夢，元是有此厄。…曰，自四月以來，有人夜入所寢室，著揉藍花纈，妝澤明媚，丫鬟綽約，相視而笑。便為自獻之態，共榻至曉而去。問其姓氏居止處，曰，只是下頭人。從此每夜必來，漸覺情密。但令脫衣，則堅然不肯，欲捫其胸，亦固拒。或時拊弄其髻，則曰，布發也，所以多硬。經十餘日，解頭編于（呂本作與）我綰同心髻，許嫁焉，而云，我有母在，元未知此一段因緣，明當邀他來，汝自告懇。（中略）吳疑為妖魅所作，投牒驅邪院。其弟明甫，習行正法，為結壇於室，布灰滿之。夜聞兵馬喧沸，搦一物，其聲可駭。視壇上，得兩狐印跡，一小一大，所謂母子之驗云。時五月二十有八日也。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 50 | 『夷堅三志己』巻2「東鄉僧園女」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第三冊、中華書局、1981年、pp.1312-1313 | 宋代 | ●慶元三年，浮梁東鄉寺僧法淨…見林深處，一美女未及笄歲，長裙大髻，衣服光赫。兩丫鬟從於後，色貌妍麗，嘻怡含笑，斂袖前揖曰，和尚萬福。法淨應喏。既而思之曰，此間四向無居人，山前谷畔縱有兩三家，其婦女皆農樵醜惡，豈得如是綽約華姿者。茲為鬼魅何疑。不可領略，以招蠱媚。遂袖手掐印，誦楞嚴呪，大聲咄叱以威之。女嗚嗚大笑，斥法淨名曰，和尚，你也好笑，縱然念得楞嚴神呪數百千遍，又且如何。我不是鬼，怕甚神呪。（中略）淨使從左方出。…乃穿踐叢薄中，不避荊棘。良久，三人俱化為狐，嗥聲可怖。淨駭懼，執童行手，大呼而奔。徑還舍喘臥，心不寧者累日。 |
| 51 | 『夷堅三志己』巻3「劉師道醫」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第三冊、中華書局、1981年、p.1322 | 宋代 | ●漣水軍醫者劉師道（中略）劉思向來不曾與接識，駐馬問之。答曰，我是魏師誠之妻，相與為姻戚。緣丈夫久伏枕，遣我詣君，欲扳屈至敝廬診視。適爾值遇，真非偶然也。劉意不願行，婦強之甚力，不得已而隨往。並馳三十裏，膂力疲倦，而婦無怠色。（中略）遂入宅，見魏元無半面之雅。伸手求脈，覺骨節硬如木石，全無暖氣，心怪之。投以湯劑，且施鍼。婦在傍，忽鼓掌笑曰，劉郎中細審此病，不可醫也。劉曰，娘子拉我來，何得卻如此。婦曰，郎中試看。轉盼間，俄化為狐狸，奔而出。劉與僕怖叫，室宇俱不見，正坐古冢上，所鍼者一朽骸耳。即疾驅而歸。及家，則婦已在門內，曰，說道醫不得，郎中不信，奈何。劉大怒取長矛將刺之，復化為狐，躍出戶，登屋鳴嗥。劉喚集弓矢，叢射之，遽失所向。劉由是得心疾，累歲始愈。 |
| 52 | 『夷堅三志辛』巻2「宜城客」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第三冊、中華書局、1981年、pp.1400-1401 | 宋代 | ●襄陽宜城劉三客，本富室（中略）樵曰，曾讀碑記乎。緣向來鬼魅縱橫，慮傷人性命，遂立石示人，以暗包四字，合成古墓狐精，君當了然，何不速反。吾見之多矣，不暇謂談說君。…又進數里許，與十七八歲女子遇，服布素之衣，顏容嫻雅，誦一絕句，音聲悲切云（中略）遂邀轉山背，得大宅。梁棟宏偉，簾幕華潔，婢妾佳麗成行，置酒對飲。命引五仆於別舍，饌具亦腆盛。數酌之後，天色斂昏，女曰，鴛衾久寂，鳳枕長虛，今宵得侍劉郎，真為天幸，請締一夕夫婦之好可乎。劉謝曰，正所願。於是攜手入室，驩合極意。酒醒遲明，乃臥一墓上草叢內，僕跲伏石畔小穴中，方知正墮狐祟，賴性命不遭傷害耳。（右七事徐謙說。） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 53 | 『夷堅三志壬』巻3「張三店女子」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第四冊、中華書局、1981年、pp.1489-1490 | 宋代 | ●建昌南城坊羊馬城下民李七，舍故居徒寓丞應後張三客邸樓房安止。慶元三年六月十日夜歸，見房門半掩，睹一女子，著單衣，穿翠鞋而不襪。李驚疑之際，女頫怒曰：「汝若不相容，我便呼廂巡誣（呂本作證）汝以誘引之罪。」李懼曰：「敢不唯命是聽。」良久，笑語無間，始云：「我只鄰近家女子，年二十九歲，良人遊宕不歸，聞死於降。（呂本作隆興。）父母知之，略不以為意，不免自出，尋雇夫力，前去審訪。不慣識路途，遲回抵此，夜色既闌，故不可反舍，就此借宿，得乎。」李諾之，即登床並寢。過五鼓，穿牖而去。（中略）李震駭，方知必鬼魅（中略）李辭往它處，取向所遺絹償僦金，乃芭蕉葉爾。李夢女戟手叱罵曰：「汝真負心漢，與我昵比而盡以告人，何也。吾且治汝。」覺而神思憒憒，不能飲啄（按啄字似啖字之誤）。景德寺寓士趙十二官…曾遇至人授神霄法箓，濟人頗多，趙率李往下拜投懇，葉令隨口供狀，餌以符，使納膳飲，仍牒城隍司拘捕孽祟。是夜四鼓，李夢黃衣吏領劊子十人，押女子荷枷，亦驅李同去，見女容服如前，而後有尾（中略）及階下，傳呼曰：「李七、狐娘分左右立。」（中略）其上一人厲聲云：「李七是生人，先放還；野狐當死，送獄訊勘。」旋押李出，正行間，墜於巖石之下，悸而寤，的的能記說。自此漸甦，凡涉再旬，始平復。 |
| 54 | 『夷堅志補』巻22「姜五郎二女子」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第四冊、中華書局、1981年、pp.1753-1754 | 宋代 | ●建昌新城縣人姜五（中略）遙聞婦人悲泣，穴窗窺之，素衣女挈衣包，正扣其戶。姜問何人，曰，我只是鄆（葉本作軍，從明抄鈔本改。）城董二娘，隨夫作商他處，不幸夫死，又無父母兄弟可依，今將還鄉乞食，趕路不上，望許寄（明鈔本無寄字。）留一宿。姜納之，使別榻而臥。明日，不肯去，願充妾御，姜復從之，遂荏苒兩月。（中略）潛於暗壁守視，果見董變狐身，攫雞而食，急取刀（明鈔本作刃）刺殺。（以下略） |
| 55 | 『夷堅志補』巻22「王千一姐」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第四冊、中華書局、1981年、pp.1754-1755 | 宋代 | ●隆興府樵舍鎮富人周生，頗能捐貲財以歌酒自娛樂。（中略）女容色美（明鈔本作姝）麗，善鼓琴弈棋，書（葉本無書字，從明鈔本補）大字，畫梅竹。命之歌詞，妙合音律。周悅其貌，且兼負技藝過絕人。（中略）女為妾踰歲，五年八月，有行客如道人狀，過門言曰，（明鈔本作造門而言）。是家怪氣露現，吾當為去之。閽僕入報，周遽（明鈔本作遂。）出，將百錢與之，不肯接，與之酒，亦不飲，問曰，君家有若干人口。無論老少男女，盡教來當前，（上五字明鈔本作盡數來前，當）。為相何人合貴。周一門二十七口，悉至廳上，道人熟視一女，只引手掐訣，吹氣喝曰，速疾。俄雷火從袖出，霹靂震響，煙氛蔽面，頃之豁然。千一姐化為白面狐貍，已仆地而隕。道人不見矣。 |
| 56 | 『湖海新聞夷堅續志』後集巻2「精怪門 ・狐虎」「狐精嫁女」 | 元好問撰・常振國點校 無名氏撰・金心點校『續夷堅志 湖海新聞夷堅續志』、古體小說叢刊、中華書局、1986年第1版2006年第2版、p.248 | 元代 | ●浦城縣橫歷村，忽有一白服道人到一人家，稱為官司追併所苦…特來販投主人（中略）道人謂有三女，愿妻之令似，主喜而納之。須臾，道人偕妻與三女俱來（中略）方知為狐入屋。鄰人聚犬逐之，見一老狐正睡，為犬所斃。（以下略） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 57 | 『湖海新聞夷堅續志』後集巻2「精怪門・狐虎」「狐戀亡人」 | 元好問撰・常振國點校 無名氏撰・金心點校『續夷堅志 湖海新聞夷堅續志』、古體小說叢刊、中華書局、1986年第1版2006年第2版、p.249 | 元代 | ●陳承務家貧無取資，獨處小室，曾見一村婦有色，心常思慕。一夕婦忽至榻前（中略）陳喜與合，情義稠密，莫知其為人鬼也。朝暮往來，面色黃瘁，感疾而卒。及其死也，為治喪事，但見老狐扶頭坐於陳喪之側，嗚嗚聲有悲哀之狀。舉棺就火，狐（狐原作婦，據明刻本改。）亦隨之，至火滅方不見其蹤影。 |
| 58 | 『湖海新聞夷堅續志』後集巻2「精怪門・狐虎」「狐精媚人」 | 元好問撰・常振國點校 無名氏撰・金心點校『續夷堅志 湖海新聞夷堅續志』、古體小說叢刊、中華書局、1986年第1版2006年第2版、p.250 | 元代 | ●宋咸淳乙丑，溫州季公喜投充胡家僕。一日胡令往宏山庵幹事，路逢女子，妖嬈顧盼，動心，遂為所惑。夜宿門房，女子忽然在前，相得甚歡，是夜同寢。自後暮來朝往（中略）公喜形體黃瘦，不知為妖魅所惑（中略）遂投請法官行持救治，追攝祟婦，乃知一狐精為怪，斷治後無事。 |
| 59 | 『湖海新聞夷堅續志』後集巻2「精怪門・狐虎」「剝皮狐狸」 | 元好問撰・常振國點校 無名氏撰・金心點校『續夷堅志 湖海新聞夷堅續志』、古體小說叢刊、中華書局、1986年第1版2006年第2版、pp.250-251 | 元代 | ●成都府萬景樓（中略）未幾，見一大狐狸來坐於椅上。左拔一毛，一燈光、一丫鬟出。右拔一毛，亦然。向尾拔一毛，竟成美婦人。自脫皮為衣，貼坐二丫鬟相與下樓，往往入市迷惑男子。（中略）四更中，只婦人回，尋皮不見，跳梁久之，哭聲哀甚。（中略）遂墜樓下。（中略）眾往樓下尋著，乃一剝皮狐狸。 |
| 60 | 『湖海新聞夷堅續志』後集巻2「精怪門・狐虎」「妖狐陳狀」 | 元好問撰・常振國點校 無名氏撰・金心點校『續夷堅志 湖海新聞夷堅續志』、古體小說叢刊、中華書局、1986年第1版2006年第2版、pp.251-252 | 元代 | ●安成周居安，少年登科，初任江陵松滋簿尉。之任未數月，乃父周洪伯夜夢所事佑聖真武告之曰，汝子初任仕少年，來日有妖狐化作七婦人告狀，以惑汝子。可治之。翌早，洪伯以所夢告其子。（中略）忽有婦女七人來陳狀詞，簿尉判事自若。未幾喧嘩之甚，遂喝兵使縛之，枷鎖入獄，已失其二。五人盡變為狐。（中略）竟杖死之。（以下略） |
| 61 | 『古今圖書集成』博物彙草木典菊部外編引『瑯嬛記』 | 『古今圖書集成』『古今圖書集成』正文圖像コマ番号：65826（第65826頁） 参照 URL:http://gjtsjc.gxu.edu.cn/image.aspx | 元代 | ●曹昊字太虛武林人也（中略）而有老父至菊前拊掌歎息曰我無緣哉何至之遲也昊方問故忽變一老狐馳去數日後諸菊盡死此地方百里三年無菊昊始悟仙家所謂菊實者即此物也 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 62 | 『剪燈餘話』巻3「胡媚娘傳」 | 李昌祺編撰・黄正位訂定『剪燈餘話』、古籍、年代不詳、第三冊、コマ番号：32-37 | 明代 | ●黄興者，新鄭驛卒也。偶出，夜歸，倦憩林下。見一狐拾人髑髏戴之，向月拜。俄化為女子，年十六七，絕有姿容，哭新鄭道上（中略）對曰：“奴杭州人，姓胡，名媚娘（中略）隨至興家，複以前語告興妻。妻見女婉順，亦善視之，而興終不言其故。時進士蕭裕者，（中略）數令媚娘汲水井上，使裕見之。裕果喜其豔也，即求娶為妾。（中略）裕自詫得内助，而僚寀之間，亦信其為賢婦人也。（中略）道士尹澹然見之，私語裕吏周榮曰，爾官妖氣甚盛，不治將有性命之憂。（中略）時屆春暮，而裕病矣，面色萎黄，身體消瘦，所為顛倒，舉止倉皇。（中略）澹然屏人告守曰，此事吾久已知。彼之宅眷，乃新鄭北門老狐精也，化為女子，惑人多矣，若不亟去，禍實叵測。（中略）奪其精氣。（中略）<br>俄而黑云滃墨，白雨翻盆，霹靂一聲，媚娘已震死闐闐矣。守卒僚屬往視，乃真狐也，而人髑髏猶在其首。（中略）眾乃信狐之善惑，而神澹然之術焉。 |
| 63 | 『古今圖書集成』博物彙禽蟲典狐貍部外編二引『昌平州志』 | 『古今圖書集成』『古今圖書集成』正文圖像コマ番号：63725（第63725頁） 参照URL:http://gjtsjc.gxu.edu.cn/image.aspx | 明代 | ●辟寒魯獵者能以計得狐設竹穿於茂林縛鴿穿上而敞其戶獵者疊樹葉為衣棲於樹以索繫機竢狐入取鴿輒引索閉穿遂得狐一夕月微朗有老翁幅巾縞裳支一笻傴僂而來且行且詈曰何讎而掩取我子孫殆盡也獵初以為人至穿所徘徊久之月墮而暝乃亦入取鴿急引索閉穿則一白毳老狐也為裘比常倍溫 |
| 64 | 『七修類稿』巻48「狐狸」（1話） | 郎瑛著『七修類稿』、歷代筆記叢刊、上海書店出版社、2001年、pp.509-510 | 明代 | ●土人曰:狐每夜半即潛入貧家破屋，至臥榻中，出口受人鼻息。人覺，聞其氣，駭曰：“打皮狐，打皮狐。”然不知其去幾許矣。如此久之，便能縮形，地不可進處亦能以進。俞久便能變化，遂與民間男婦相淫亂，各尋其雌雄以合。 |
| 65 | 『七修類稿』巻48「狐狸」（2話） | 郎瑛著『七修類稿』、歷代筆記叢刊、上海書店出版社、2001年、pp.509-510 | 明代 | ●有上工宋留，暮遇一夫，自言欲為人役，話間隨宋至家，出錢沽酒對飲，醉後睡去，乃一純黑狐也，宋亦不驚破，明發語宋曰：“汝無福，吾之西關李某氏也。”李乃青州府吏，其妻遂為所染。 |
| 66 | 『七修類稿』巻48「狐狸」（3話） | 郎瑛著『七修類稿』、歷代筆記叢刊、上海書店出版社、2001年、pp.509-510 | 明代 | ●又張姓者乘車出西郭，見一犬追婦人飛來，顧間婦人乞以附車逐犬，自言某地人，張遂載以去，抵家復求假宿，張不拒而遂同寢焉。間數月，自言：“我狐也，今當去君。明年此日見我於臨清某市。”（中略）張回，不知所向。 |
| 67 | 『猶園』巻14「狐妖一」 | 銭希言撰『猶園』、長塘鮑氏知不足斎、古籍、参照URL:http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko19/bunko19_f0191/bunko19_f0191_0007/bunko19_f0191_0007_p0054.jpg | 明代 | ●老狐取髑髏戴其首，望月而拜，數百下畢。夜半後，便變為好婦形，或美少年狀。（中略）天曉而形復如舊矣 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 68 | 『獪園』巻14「狐妖七」 | 銭希言撰『獪園』、長塘鮑氏知不足斎、古籍、参照URL: http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko19/bunko19_f0191/bunko19_f0191_0007/bunko19_f0191_0007_p0060.jpg | 明代 | ●山西饒指揮郊行，路逢一麗人，自云喪夫，求寄載。饒云，我方喪妻，可諧伉儷。遂同歸，生三子，長為大…一日香車經過往昔相逢處，亟命止之，潛行至大坎下，有穴，便從穴入。明日往視，有牝狐殪焉。 |
| 69 | 『獪園』巻14「狐妖八」 | 銭希言撰『獪園』、長塘鮑氏知不足斎、古籍、参照URL: http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko19/bunko19_f0191/bunko19_f0191_0007/bunko19_f0191_0007_p0060.jpg | 明代 | ●癸丑春，杭州貓兒橋有一雄狐，每日至晚變為美少年，迷惑往來淫夫，有獨行者便隨之去。…見輒引歸。淫狎日漸，□瘠成病，乃知狐祟所為。 |
| 70 | 『古今圖書集成』博物彙編禽蟲典 巻72　狐狸部 外編2引『陳州志』 | 『古今圖書集成』正文圖像 コマ番号：63724（第63724頁）参照 URL:http://gjtsjc.gxu.edu.cn/image.aspx | 明代 | ●陳州志張子和，在陳負醫名。有老狐變人形求診。和曰，此獸脈也。狐跪告曰，我狐精，因病來就君醫耳。投劑輒愈。狐酬以金帛。曰，此盜得之物不受。狐自稱無報，告以城將陷，宜遷江西以避之。和如其言，得免於難。 |
| 71 | 『五雜俎』巻9 「物部一」 | 謝肇淛撰『五雜俎』、歴代筆記叢刊、上海書店出版社、2001年、pp.172-173 | 明代 | ●元至正間，范益者精于醫術，一日，老嫗扣門求醫其女，問所居，曰：“在西山。”益憚其遠，曰：“曷與之來？”翌日，二女至，診之，驚曰：“此非人脈，必異類也，當實告我。”嫗拜曰：“某實西山老狐也。”問：“何以能入天子都城？”曰：“真命天子自在濠州，諸神往護，此間空虚久矣。”益乃與之藥而去，無何而高皇帝起淮右，益聞即棄官去。 |
| 72 | 『五雜俎』巻9 「物部一」 | 謝肇淛撰『五雜俎』、歴代筆記叢刊、上海書店出版社、2001年、p.173 | 明代 | ●狐千歳始與天通不為魅矣。其魅人者多取人精氣，以成內丹。然則其不魅婦人何也。曰狐陰類也，得陽乃成。故雖牡狐必托之女以惑男子也。 |
| 73 | 『閲微草堂筆記』 巻1　獻縣周氏僕周虎 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.4 | 清代 | ●獻縣周氏僕周虎，為狐所媚、二十餘年如伉儷，嘗語僕曰：「吾煉形已四百餘年，過去生中，於汝有業緣當補。一日不滿，即一日不得生天。緣盡，吾當去耳。」一日，囅然自喜，又泫然自悲，語虎曰：「月之十九日，吾緣盡當別，已為君相一婦，可聘定之。」因出白金付虎，俾備禮。自是狎昵嬿婉，逾於平日，恒形影不離。至十五日，忽晨起告別，虎怪其先期，狐泣曰：「業緣一日不可減，亦一日不可增。惟遲早則隨所遇耳。吾留此三日緣，為再一相會地也。」越數年，果再至，歡洽三日而後去。臨行嗚咽曰：「從此終天訣矣。」 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 74 | 『閱微草堂筆記』 巻1 寧波吳生 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.6 | 清代 | ●寧波吳生，好作北里游。後昵一狐女，時相幽會。然仍出入青樓間。一日，狐女請曰：「吾能幻化，凡君所眷，吾一見即可肖其貌。君一存想，應念而至，不逾於黃金買笑乎？」試之，果頃刻換形，與真無二。（中略）後數歲，狐女辭去，吳竟絕迹於狎游。 |
| 75 | 『閱微草堂筆記』 巻2 外祖張雪峰先生 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.24-25 | 清代 | ●外祖張雪峰先生（中略）舅氏健亭公，年十一二時，乘外祖他出，私往院中樹下納涼。聞室內似有人行，疑外祖已先歸，屏息從窗隙窺之，見竹椅上坐一女子，靚妝如畫。椅對面一大鏡，高可五尺，鏡中之影，乃是一狐。懼弗敢動，竊窺所為。女子忽自見其影，急起繞鏡，四圍呵之，鏡昏如霧。良久歸坐，鏡上呵跡亦漸消。再視其影，則亦一好女子矣。恐為所見，躡足而歸。後私語先姚安公。（以下略） |
| 76 | 『閱微草堂筆記』 巻2 景城有劉武周墓 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.30-31 | 清代 | ●景城有劉武周墓，獻縣誌亦載。按武周山後馬邑人，墓不應在是。疑為隋劉炫墓。炫景城人，一統志載其墓在獻縣東八十里。景城距城八十七里，約略當是也。舊有狐居之，時或戲嬲醉人。里有陳雙，酒徒也。聞之憤曰：「妖獸敢爾！」詣墓所，且數且詈。時耘者滿野，皆見其父怒坐墓側，雙跳踉叫號，竟前呵曰：「爾何醉至此，乃詈爾父？」雙凝視，果父也，大怖叩首。父逕趨歸。雙隨而哀乞，追及於村外，方伏地陳說。忽婦媼環繞，嘩笑曰：「陳雙何故跪拜其妻？」雙仰視，又果妻也，愕而癡立。妻亦逕趨歸。雙惘惘至家，則父與妻實未嘗出，方知皆狐幻化戲之也。慚不出戶者數日，聞者無不絕倒。余謂雙不詈狐，何至遭狐之戲。雙有自取之道焉。 |
| 77 | 『閱微草堂筆記』 巻3 先太夫人乳媪廖氏言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.45 | 清代 | ●先太夫人乳媪廖氏言（中略）滄州馬落坡，有婦以賣麵為業，得餘麵以養姑。貧不能畜驢，恒自轉磨，夜夜徹四鼓。姑歿後，上墓歸，遇二少女於路，迎而笑曰：「同住二十餘年，頗相識否？」婦錯愕不知所對。二女曰：「嫂勿訝，我姊妹皆狐也，感嫂孝心，每夜助嫂轉磨，不意為上帝所嘉，緣是功行，得證正果。今嫂養姑事畢，我姊妹亦登仙去矣。敬來道別，並謝提攜也。」言訖，其去如風，轉瞬已不見。婦歸，再轉其磨，則力幾不勝，非宿昔之旋運自如矣。 |
| 78 | 『閱微草堂筆記』 巻3 何勵庵先生言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.51-52 | 清代 | ●何勵庵先生言：相傳明季有書生（中略）尋之，則一老翁坐墟墓間，旁有狐十餘，各捧書蹲坐。老翁見而起迎，諸狐皆捧書人立（中略）老翁曰：「吾輩皆修仙者也。凡狐之求仙有二途，其一採精氣，拜星斗，漸至通靈變化，然後積修正果，是為由妖而求仙。然或入邪僻，則干天律，其途捷而危；其一先煉形為人，既得為人，然後講習內丹，是為由人而求仙。雖吐納導引，非旦夕之功，而久久堅持，自然圓滿。其途紆而安。顧形不自變，隨心而變。故先讀聖賢之書，明三綱五常之理，心化則形亦化矣。」書生借視其書，皆五經、《論語》、《孝經》、《孟子》之類。（中略）姑問其壽，曰：「我都不記。但記我受經之日，世尚未有印板書。」（中略）後於途間遇此翁，欲與語，掉頭逕去。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 79 | 『閱微草堂筆記』 巻４ 再從兄旭升言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.65-66 | 清代 | ●再從兄旭升言（中略）村南舊有狐女，多媚少年，所謂二姑娘者是也。…一日，於廢圃見美女，疑其即是。戲歌豔曲，欣然流盼。折草花擲其前，方俯拾，忽卻立數步外，曰：「君有惡念。」踰破垣竟去。後有二生讀書東岳廟僧房，一居南室，與之昵；一居北室，無睹也。（中略）姚安公曰：「向亦聞此，其事在順治末年。居北室者，似是族祖雷陽公。雷陽一老副榜，八比以外無寸長，只心地樸誠，即狐不敢近。知為妖魅所惑者，皆邪念先萌耳。」 |
| 80 | 『閱微草堂筆記』 巻４ 董曲江遊京師 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.73 | 清代 | ●董曲江遊京師時，與一友同寓，非其侶也，姑省宿食之貲云爾。友徵逐富貴，多外宿。曲江獨睡齋中，夜或聞翻動書冊，摩弄器玩聲。知京師多狐，弗怪也。一夜以未成詩稿置几上，乃似聞吟哦聲，問之弗答。比曉視之，稿上已圈點數句矣。然屢呼之，終不應。至友歸寓，則竟夕寂然，友頗自詫有祿相，故邪不敢干。偶日照李慶子借宿，酒闌以後，曲江與友皆就寢。李乘月散步空圃，見一翁攜童子立樹下。心知是狐，翳身竊睨其所為。童子曰：「寒甚，且歸房。」翁搖首曰：「董公同室固不礙，此君俗氣逼人，那可共處。寧且坐淒風冷月間耳。」李後洩其語于他友，遂漸為其人所聞。銜李次骨，竟為所排擠，狼狽負笈返。 |
| 81 | 『閱微草堂筆記』 巻４ 沈觀察夫婦并故 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.81 | 清代 | ●沈觀察夫婦并故（中略）有孀婦病臥，不能自炊，哀呼鄰媼代炊，亦不能時至。忽一少女排闥入曰：「吾新來鄰家女也。聞姊困苦乏食，意恒不忍。今告於父母，願為姊具食，且侍疾。」自是日來其家，凡三四月。孀婦病癒，將詣門謝其父母。女泫然曰：「不敢欺，我實狐也。與郎君在日最相昵，今感念舊情，又憫姊之苦節，是以託名而來耳。」置白金數錠於牀，嗚咽而去。 |
| 82 | 『閱微草堂筆記』 巻５ 張鉉耳 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.88-89 | 清代 | ●張鉉耳先生之族，有以狐女為妾者（中略）入室相晤，舉止嫻雅，貌似三十許人。詰以室中寒凜之故，曰：「娘子自心悸耳，室故無他也。」後張詰以獨見是人之故，曰：「人陽類，鬼陰類。狐介于人鬼之間，然亦陰類也，故出恒以夜。白晝盛陽之時，不敢輕與人接也。某娘子陽氣已衰，故吾得見。」張惕然曰：「汝日與吾寢處，吾其衰乎？」曰：「此別有故。凡狐之媚人有兩途，一曰蠱惑，一曰夙因。蠱惑者，陽為陰蝕則病，蝕盡則死。夙因則人本有緣，氣自相感，陰陽翕合，故可久而相安。然蠱惑者十之九，夙因者十之一。其蠱惑者，亦必自稱夙因。但以傷人不傷人，知其真偽耳。」後見之人，果不久下世。 |
| 83 | 『閱微草堂筆記』 巻５ 三叔儀南公 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.93 | 清代 | ●三叔儀南公，有健僕畢四，善弋獵。（中略）一夜，月明之下，見老叟來作禮曰：「我狐也，兒孫與北村狐搆釁，舉族械戰。彼陣擒我一女，每戰必反接驅出以辱我。我亦陣擒彼一妾，如所施報焉。由此仇益結，約今夜決戰于此。聞君義俠，乞助一臂力，則沒齒感恩。持鐵尺者彼，持刀者我也。」畢故好事，忻然隨之往，翳叢薄間。兩陣既交，兩狐血戰不解，至相抱手搏。畢審視既的，控弦一發，射北村狐踣。不虞弓勁矢銛，貫腹而過，並老叟洞腋殪焉。兩陣各惶遽奪屍，棄俘囚而遁。畢解二狐之縛，且告之曰：「傳與爾族，兩家勝敗相當，可以解冤矣。」先是北村每夜聞戰聲，自此遂寂。此與李冰事相類。然冰戰江神為捍災禦患，此狐呈其私憤，兩鬥不已，卒至兩傷。是亦不可以已乎！ |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 84 | 『閱微草堂筆記』 巻6 先祖有莊 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.108-109 | 清代 | ●先祖有莊（中略）場中一柴垛，有年矣。云狐居其中，人不敢犯。偶佃戶某，醉臥其側，同輩戒勿觸仙家怒。某不聽，反肆詈。忽聞人語曰：「汝醉，吾不較，且歸家睡可也。」次日詣園守瓜，其婦擔飯來饁，遙望團焦中，一紅衫女子與夫坐，見婦驚起，倉卒踰垣去。婦故妒悍，以為夫有外遇也，憤不可忍，遽以擔痛擊。某百曰不能自明，大受箠楚。婦手倦稍息，猶喃喃毒詈。忽聞樹梢大笑聲，方知狐戲報之也。 |
| 85 | 『閱微草堂筆記』 巻7 先兄晴湖曰 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.127 | 清代 | ●先兄晴湖曰：「飲鹵汁者，血凝而死，無藥可醫。里有婦人飲此者，方張皇莫措，忽一媼排闥入，曰：『可急取隔壁賣腐家所磨豆漿灌之，鹵得豆漿，則凝漿為腐而不凝血。我是前村老狐，曾聞仙人言此方也。』語訖不見，試之果得蘇。劉涓子有鬼遺方，此可稱狐遺方也。」 |
| 86 | 『閱微草堂筆記』 巻7 從兄垣居言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.135 | 清代 | ●從兄垣居言：昔聞劉馨亭談二事。其一，有農家子為狐媚，延術士劾治，狐就擒，將烹諸油釜，農家子叩額乞免，乃縱去。後思之成疾，醫不能療。狐一日復來相見，悲喜交集，狐意殊落落，謂農子家曰：「君苦相憶，止為悅我色耳，不知是我幻相也，見我本形，則駭避不遑矣。」欻然撲地，蒼毛修尾，鼻息咻咻，目睒睒如炬，跳擲上屋，長嗥數聲而去。農家子自是病痊。 |
| 87 | 『閱微草堂筆記』 巻7 其一亦農家子為狐媚 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.135 | 清代 | ●其一亦農家子為狐媚，延術士劾治。法不驗，符箓皆為狐所裂，將上壇毆擊。一老媼似是狐母，止之曰：「物惜其羣，人庇其黨。此術士道雖淺，創之過甚，恐他術士來報復。不如且就爾婿眠，聽其逃避。」此狐可謂能慮遠。 |
| 88 | 『閱微草堂筆記』 巻7 朱竹坪御史 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.138 | 清代 | ●朱竹坪御史，嘗小集閭梨材尚書家。酒次，竹坪慨然曰：「清介是君子分內事，若恃其清介以凌物，則殊嫌客氣不除。昔某公為御史時，居此宅，坐間或言及狐媚，某公痛詈之。數日後，月下見一盜踰垣入，內外搜捕，皆無跡，擾攘徹夜。比曉，忽見廳事上臥一老人（中略）一笑而逝。蓋無故侵狐，狐以是戲之也。豈非自取侮哉。 |
| 89 | 『閱微草堂筆記』 巻7 裘編修超然言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.141 | 清代 | ●裘編修超然言：豐宜門內玉皇廟街，有破屋數間，鎖閉已久，云中有狐魅。適江西一孝廉與數友過夏（中略）夜中聞牀前窸窸有聲，心知狐至。暗中舉手引之，縱體入懷，遽相狎昵，冶蕩萬狀，奔命殆疲。比月上窗明，諦視，乃一白髮媼，黑陋可憎（中略）自云：「本城樓上老狐，娘子怪我饕餮而慵作，斥居此屋，寂寞已數載，感君垂愛，故冒恥自獻耳。」孝廉怒搏其頰，欲縛箠之。撐拄擺撥間，同舍聞聲，皆來助捉，忽一脫手，已琤然破窗遁。次夕，自坐屋簷，作軟語相喚，孝廉詬詈，忽為飛瓦所擊。又一夕，揭帷欲寢，乃裸臥牀上，笑而招手，抽刃向擊，始泣罵去。懼其後至，移寓避之。 |
| 90 | 『閱微草堂筆記』 巻7 一宦家子 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.145 | 清代 | ●一宦家子，資巨萬（中略）有書生昵一狐女，病瘵死，家人清明上塚，見少婦奠酒焚楮錢，伏哭甚哀。其妻識是狐女，遙罵曰：「死魅害人，雷行且誅，汝尚假慈悲耶。」狐女襝衽徐對曰：「凡我輩女求男者，是為採補，殺人過多，天理不容也；男求女者，是為情感，耽玩過度，以致傷生。正如夫婦相悅，成疾夭折，事由自取。鬼神不追理其衽席也，姊何責耶。」 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 91 | 『閱微草堂筆記』 巻８ 宗室瑤華道人言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.165 | 清代 | ●宗室瑤華道人言（中略）李太僕敬堂，少與一狐女往來。其太翁疑為鄰女，布灰於所經之路。院中足印作獸跡，至書室門外，則足印作纖纖樣矣。 |
| 92 | 『閱微草堂筆記』 巻８ 族祖黃圖公言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.167 | 清代 | ●族祖黃圖公言（中略）某甲陰為吳三桂諜（中略）一日，散步田間，遇老父對語，怪附近村落無此人。老父曰：「不相欺，我天狐也。君固有罪，然乙逼君亦太甚，吾竊不平。今盜君秘札奉還，彼無所挾，不驅自去矣。」因出十餘紙付甲，甲驗之良是，即毀裂吞之，歸而以實告乙。乙防甲女竊取，密以鐵瓶瘞他處，潛往檢視，果已無存，乃踉蹌引女去。 |
| 93 | 『閱微草堂筆記』 巻9 朿州邵氏子 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.181 | 清代 | ●朿州邵氏子，性佻蕩。聞淮鎮古墓有狐女甚麗，時往伺之。一日，見其坐田塍上，方欲就通款曲，狐女正色曰：「吾服氣煉形，已二百餘歲，誓不媚一人，汝勿生妄想。且彼媚人之輩，豈果相悅哉。特攝其精耳。精竭則人亡，遇之未有能免者，汝何必自投陷井也。」舉袖一揮，淒風颯然，飛塵瞇目，已失所在矣。先姚安公聞之曰：「此狐能作此語，吾斷其必生天。」 |
| 94 | 『閱微草堂筆記』 巻9 故城刁飛萬言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.185-186 | 清代 | ●故城刁飛萬言：其鄉有與狐女生子者，其父母怒誶之。狐女涕泣曰：「舅姑見逐，義難抗拒。但子未離乳，當且攜去耳。」越兩歲餘，忽抱子詣其夫曰：「兒已長，今還汝。」其夫遵父母戒，掉首不與語。狐女太息，抱之去。 |
| 95 | 『閱微草堂筆記』 巻9 吳江吳林塘言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.189-190 | 清代 | ●吳江吳林塘言：其親表有與狐女遇者，雖無疾病，而惘惘恒若神不足，父母憂之。聞有遊僧能劾治，試往祈請。僧曰：「此魅與郎君夙緣，無相害意，郎君自耽玩過度耳。然恐魅不害郎君，郎君不免自害，當善遣之。」乃夜詣其家，趺坐誦梵咒。家人遙見燭光下似繡衫女子，冉冉再拜，僧舉拂子曰：「留未盡緣，作來世歡，不亦可乎。」欻然而隱，自是遂絕。 |
| 96 | 『閱微草堂筆記』 巻10 滄州瞽者蔡某 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.203 | 清代 | ●滄州瞽者蔡某，每過南山樓下，即有一叟邀之彈唱，且對飲。漸相狎，亦時至蔡家共酌，自云：「姓蒲，江西人，因販磁到此。」久而覺其為狐。然契合甚深，狐不諱，蔡亦不畏也。會有以閨闥蜚語涉訟者，眾議不一，偶與言及，曰：「君既通靈，必知其審。」狐艴然曰：「我輩修道人，豈干預人家瑣事。（中略）」投盃逕去，從此遂絕。蔡愧悔，自批其頰，恒述以戒人，不自隱匿也。 |
| 97 | 『閱微草堂筆記』 巻10 汪御史泉香言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.213 | 清代 | ●汪御史泉香言：布商韓某，昵一狐女，日漸尪羸。其侶求符籙劾禁，暫去仍來。一夕，與韓共寢，忽披衣起坐曰：「君有異念耶。何忽覺剛氣砭人，刺促不寧也。」韓曰：「吾無他念。惟鄰人吳某，逼於償負，鬻其子為歌童。吾不忍其衣冠之後淪下賤，措四十金欲贖之，故轉輾未眠耳。」狐女蹶然推枕曰：「君作是念，即是善人。害善人者有大罰，吾自此逝矣。」以吻相接，噓氣良久，乃揮手而去。韓自是壯健如初。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 98 | 『閱微草堂筆記』 卷10 人物異類 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.216-217 | 清代 | ●人物異類，狐則在人物之間(中略）蓋舊滄州南一學究與狐友，師退因介學究與相見，軀幹短小，貌如五六十人，衣冠不古不時，乃類道士。拜揖亦安詳謙謹。寒溫畢，問枉顧意。師退曰：「世與貴族相接者，傳聞異詞，其間頗有所未明。聞君豁達，不自諱，故請祛所惑。」狐笑曰：「天生萬物，各命以名。狐名狐，正如人名人耳。呼狐為狐，正如呼人為人耳，何諱之有？至我輩之中。好醜不一，亦如人類之內，良莠不齊，人不諱人之惡，狐何諱狐之惡乎？第言無隱。」師退問：「狐有別乎。」曰：「凡狐皆可以修道，而最靈者曰貍狐，此如農家讀書者少，儒家讀書者多也。」問：「貍狐生而皆靈乎？」曰：「此係乎其種類。未成道者所生，則為常狐。已成道者所生，則自能變化也。」問：「既成道矣，自必駐顏，而小說載狐，亦有翁媼，何也？」曰：「所謂成道，成人道也。其飲食男女，生老病死，亦與人同。若夫飛升霞舉，又自一事。此如千百人中，有一二人求仕宦，其煉形服氣者，如積學以成名；其媚惑採補者，如捷徑以求售。然遊仙島，登天曹者，必煉形服氣乃能。其媚惑採補，傷害或多，往往干天律也。」(中略）師退憮然自失。蓋師退崖岸太峻，時或過當云。 |
| 99 | 『閱微草堂筆記』 卷10 嘗與杜少司 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.227 | 清代 | ●嘗與杜少司寇凝臺同宿南石槽，聞兩家轎夫相語曰：「昨日怪事。我表兄朱某在海淀為人守墓，因入城未返，其妻獨宿。聞園中樹下有鬥聲，破窗紙竊窺，見二人攘臂奮擊，一老翁舉杖隔之不能止。俄相搏仆地，並現形為狐，跳踉擺撥，觸老翁亦仆，老翁蹶起，一手按一狐，呼曰：「逆子不孝，朱五嫂可助我。」朱伏不敢出，老翁頓足曰：「當訴諸土神。」恨恨而散。次夜聞滿園鈴鐺聲，似有所搜捕，覺几上瓦瓶似微動，怪而視之，瓶中小語曰：「乞勿言，當報恩。」朱怒曰：「父母恩且不肯報，何有於我。」舉瓶擲門外碑趺上，訇然而碎，即聞嗷嗷有聲，意其就執矣。 |
| 100 | 『閱微草堂筆記』 卷11 吳林塘言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.241 | 清代 | ●吳林塘言：曩游秦隴，聞有獵者在少華山麓，見二人儻然臥樹下（中略）其一曰：「吾等皆為狐魅者也。…有一少女絕妍麗，伺隙調我，我意不自持，即相媟狎。（中略）半載後，病瘵，夜嗽不能寢，散步林下。聞有笑語聲，偶往尋視，見屋數楹，有人擁我婦坐石看月。不勝恚忿，力疾欲與角。其人亦怒曰：「鼠輩乃敢瞰我婦。」亦奮起相搏。幸其亦病憊，相牽並仆。婦安坐石上，嬉笑曰：「爾輩勿鬥，吾明告爾：吾實往來於兩家，皆托云上直，使爾輩休息五日，蓄精以供採補耳。今吾事已露，爾輩精亦竭，無所用爾輩，吾去矣。」奄忽不見。兩人迷不能出，故餓踣於此，幸遇君等得拯也。」（中略）二人乃憫默而止。 |
| 101 | 『閱微草堂筆記』 卷11 林塘又言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.241-242 | 清代 | ●林塘又言：有少年為狐所媚，日漸羸困，狐猶時時來。後復共寢，己疲頓不能御女，狐乃披衣欲辭去。少年泣涕挽留，狐殊不顧。怒責其寡情，狐亦怒曰：「與君本無夫婦義，特為採補來耳。君膏髓已竭，吾何所取而不去。此如以勢交者，勢敗則離。以財交者，財盡則散。當其委曲相媚，本為勢與財，非有情於其人也。君於某家某家，皆向日附門墻，今何久絕音問耶。乃獨責我。」其音甚厲，侍疾者聞之皆太息。少年乃反面向內，寂無一言。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 102 | 『閱微草堂筆記』 巻12 馮平宇言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.262-263 | 清代 | ●馮平宇言：有張四喜者，家貧傭作。流轉至萬全山中，遇翁嫗留治圃。愛其勤苦，以女贅之。越數歲，翁嫗言往塞外省長女，四喜亦挈婦他適。久而漸覺其為狐。恥與異類偶，伺其獨立，潛彎弧射之，中左股。狐女以手拔矢，一躍直至四喜前，持矢數之曰：「君太負心，殊使人恨！雖然，他狐媚人，苟且野合耳，我則父母所命，以禮結婚，有夫婦之義焉。三綱所繫，不敢仇君，君既見棄，亦不敢強住聒君。」握四喜之手，痛哭。逾數刻，乃蹶然逝。四喜歸，越數載病死，無棺以斂。狐女忽自外哭入，拜謁姑舅，具述始末。（中略）去後，於四喜尸旁得白金五兩，因得成葬。後四喜父母貧困，往往於盎中篋內，無意得錢米，蓋亦狐女所致也。皆謂此狐非惟形化人，心亦化人矣。或又謂狐雖知禮，不至此，殆平宇故撰此事，以愧人之不如者。 |
| 103 | 『閱微草堂筆記』 巻12 壬申七月 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.269 | 清代 | ●壬申七月，小集宋蒙泉家，偶談狐事，聶松巖曰：「貴族有一事，君知之乎？曩以鄉試在濟南，聞有紀生者…嘗暮遇女子獨行，泥濘顛躓，倩之扶掖。念此必狐女，姑試與昵，亦足以知妖魅之情狀。因語之曰：「我識爾，爾勿誑我。然得婦如爾亦自佳，人靜後可詣書齋，勿在此相調，徒多迂折。」女子笑而去。夜半果至。狎媟者數夕。覺漸為所惑，因拒使勿來。狐女怨詈不肯去，生正色曰：「（中略）況爾為盜我精氣來，非以情合，我不為負爾情；爾閱人多矣，難以節言，我亦不為墮爾節。始亂終棄，君子所惡，為人言之，不為爾曹言之也。爾何必戀戀於此，徒為無益？」狐女竟詞窮而去。 |
| 104 | 『閱微草堂筆記』 巻12 法南野又說一事 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.269-270 | 清代 | ●法南野又說一事，曰：里有惡少數人，聞某氏荒塚有狐，能化形媚人。夜攜置罟布穴口，果掩得二牝狐。防其變幻，急以錐刺其髀，貫之以索，操刃脅之曰：「爾果能化形為人，為我輩行酒，則貸爾命。否則立磔爾。」…惡少怒，刺殺其一，其一乃人語曰：「我無衣履，及化形為人，成何狀耶。」又以刃擬頸，乃宛轉成一好女子，裸無寸縷。眾大喜，迭肆無禮，復擁使侑觴，而始終掣索不釋手。狐妮妮軟語，祈求解索。甫一脫手，已瞥然逝。歸未到門，遙見火光，則數家皆焦土，殺狐者一女焚焉。知狐之相報也。狐不擾人，人乃擾狐，多行不義，其及也宜哉。 |
| 105 | 『閱微草堂筆記』 巻12 清遠先生 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.270-271 | 清代 | ●清遠先生亦說一事，曰：朱某一婢（中略）朱以漸裕，寵之專房。一日（中略）曰：「（中略）我本狐女（中略）煉形數百年，幸得成道。然坐此負累，終不得升仙。（中略）今尸解去矣。我去之後，必現狐形。」（中略）俄化狐仆地，有好女長數寸，出頂上，冉冉去；其貌，則別一人矣。朱不忍而自埋之。 |
| 106 | 『閱微草堂筆記』 巻12 郭石洲言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.276-277 | 清代 | ●郭石洲言:朱明經靜園，與一狐友。一日，飲靜園家，狐大醉，睡花下，醒而靜園問之曰：「吾聞貴族醉後多變形，故以衾覆君而自守之，君竟不變，何也。」曰：「此視道力之淺深矣。道力淺者能化形幻形耳，故醉則變，睡則變，倉皇驚怖則變；道力深者能脫形，猶仙家之尸解，已歸人道，人其本形矣，何變之有。」靜園欲從之學道，曰：「公不能也，凡修道，人易而物難，人氣純，物氣駁也；成道，物易而人難，物心一，而人心雜也。煉形者先煉氣，煉氣者先煉心，所謂志氣之帥也。（中略）」朱乃止。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 107 | 『閱微草堂筆記』 卷12 石洲又言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.277-278 | 清代 | ●石洲又言:一書生家有園亭，夜雨獨坐。忽一女子搴簾入（中略）女詞窮，自承為狐。（中略）狐倉卒不能對，囁嚅久之，曰：「子千百日不坐此，今適坐此；我見千百人不相悅，獨見君相悅。其為前緣審矣，請勿拒。」書生曰：「有前緣者必相悅。吾方坐此，爾適自來，而吾漠然心不動，則無緣審矣，請勿留。」女趑趄間，聞窗外呼曰：「婢子不解事，何必定覓此木強人。」女子舉袖一揮，滅燈而去。或云：「是湯文正公少年事。」余謂：「狐魅豈敢近湯公。當是曾有此事，附會于公耳。」 |
| 108 | 『閱微草堂筆記』 卷13 濟南朱青雷言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.298 | 清代 | ●濟南朱青雷言:其鄉民家一少年，與鄰女相悅。時相窺也，久而微露盜香跡，女父疑焉。夜伏墻上，左右顧視兩家，陰伺其往來，乃見女室中有一少年，少年室中有一女，衣飾形貌皆無異，始知男女皆為狐媚也。此真黎邱之伎矣。青雷曰：「以我所見，好事者當為媒合，亦一佳話。」然聞兩家父母皆恚甚，各延巫驅狐。時方束裝北上，不知究竟如何也。 |
| 109 | 『閱微草堂筆記』 卷13 交河有姊妹二妓 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.308-309 | 清代 | ●交河有姊妹二妓，皆為狐所媚，羸病欲死。其家延道士劾治，狐不受捕。道士怒，趣設壇，牒雷部。狐化形為書生，見道士曰：「煉師勿苦相仇也。夫採補殺人，誠干天律，然亦思此二女者何人哉。飾其冶容，蠱惑年少。無論其破人之家，不知凡几。廢人之業，不知凡幾。間人之夫婦，不知凡幾，罪皆當死。即彼攝人之精，吾攝其精。彼致人之疾，吾致其疾。彼戕人之命，吾戕其命，皆所請君入甕，天道宜然。煉師何必曲庇之。且煉師之劾治，謂人命至重耳。夫人之為人，以有人心也。此輩機械萬端，寒煖暖百變，所謂人面獸心者也。既已獸心，即以獸論，以獸殺獸，事理之常。深山曠野，相食者不啻恒河，可一一上瀆雷部耶。」道士乃舍去。論者謂道士不能制狐，造此言也。然其言則深切著明矣。 |
| 110 | 『閱微草堂筆記』 卷13 宋村廠 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.313-314 | 清代 | ●宋村廠…倉中舊有狐，余家未析箸時，姚安公從王德庵先生讀書是莊。僕隸夜入倉院，多被瓦擊，而不見其形，惟先生得納涼其中，不遭擾戲。然時見男女往來，且木榻藤枕，俱無纖塵，若時拂拭者。一日，暗中見一人循墻走，似是一翁，呼問之曰：「吾聞狐不近正人，吾其不正乎。」翁拱手對曰：「凡興妖作祟之狐，則不敢近正人，若讀書知禮之狐，則樂近正人。先生君子也，故雖少婦稚女，亦不相避，信先生無邪心也。先生何反自疑耶。」先生曰：「雖然，幽明異路，終不宜相接。請勿見形可乎？」翁磬折曰：「諾。」自是不復睹矣。 |
| 111 | 『閱微草堂筆記』 卷13 先太夫人乳母廖媼言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.314 | 清代 | ●先太夫人乳母廖媼言:四月二十八日，滄州社會也，婦女進香者如雲。有少年於日暮時，見城外一牛車向東去，載二女，皆妙麗，不類村妝。疑為大家內眷，又不應無一婢媼，且不應坐露車。正疑思間，一女遺紅帕於地，其中似裹數百錢，女及御者皆不顧。少年素朴愿，恐或追覓為累，亦未敢拾。歸以告母，譙訶其癡。越半載，鄰村少年為二狐所媚，病瘵死。有知其始末者，曰：「正以拾帕索帕，兩相調謔媾合也。」母聞之，憬然悟曰：「吾乃知癡是不癡，不癡是癡。」 |
| 112 | 『閱微草堂筆記』 卷14 董曲江言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.330 | 清代 | ●董曲江言:一儒生頗講學（中略）一日，其婦歸寧，約某日返。乃先期一日，怪而詰之。曰：「吾誤以為月小也。」亦不為訝。次日，又一婦至，大駭愕，覓昨婦，已失所在矣。然自是日漸伾瘠，因以成癆。蓋狐女假形攝其精，一夕所耗已多也。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 113 | 『閱微草堂筆記』 巻14 胡厚庵先生言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.337 | 清代 | ●胡厚庵先生言:有書生昵一狐女，初遇時，以二寸許壺盧授生，使佩於衣帶，而自入其中。欲與晤，則拔其楔，便出嫵婉，去則仍入而楔之。一日，行市中，壺盧為偷兒剪去。從此遂絕，意恒悵悵。偶散步郊外，以消鬱結，聞叢翳中有相呼者，其聲狐女也。就往與語，匿不肯出，曰：「妾已變形，不能復與君見矣。」怪詰其故，泣訴曰：「採補煉形，狐之常理。近不知何處一道士，又搜索我輩，供其採補（中略）妾入壺盧，蓋避此難，不意仍為所物色，攘之以歸。妾畏罹湯鑊，已獻其丹，幸留殘喘。然失丹以後，遂復獸形，從此煉形，又須二三百年始能變化。天荒地老，後會無期，感念舊恩，故呼君一訣。努力自愛，毋更相思也。」（以下略） |
| 114 | 『閱微草堂筆記』 巻14 一奴子 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.343 | 清代 | ●一奴子，業針工，其父母鬻身時未鬻此子，故獨別居於外。其婦年二十餘，為狐所媚，歲餘病瘵死。初不肯自言，病甚，乃言：「狐初來時為女形，自言新來鄰舍也。留與語，漸涉謔，繼而漸相逼，遽前擁抱，遂昏昏如魘。自是每夜輒來，必換一形，忽男忽女，忽老忽少，忽醜忽好，忽僧忽道，忽鬼忽神，忽今衣冠，忽古衣冠。歲餘，無一重複者。至則四肢緩縱，口噤不能言，惟心目中了了而已。狐亦不交一言，不知為一狐所化，抑眾狐更番而來也。其尤怪者，婦小姑偶入其室，突遇狐出，一躍即逝。小姑所見是方巾道袍人，白鬚鬖鬖；婦所見則黯黑垢膩，一賣煤人耳。同時異狀，更不可思議耳。」 |
| 115 | 『閱微草堂筆記』 巻14 梅村又言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.352 | 清代 | ●梅村又言:有姜挺者，以販布為業，恒攜一花犬自隨。一日獨行，途遇一叟呼之住。問：「不相識，何見招。」叟遽叩首有聲，曰：「我狐也。夙生負君命，三日後，君當嗾花犬斷我喉。冥數已定，不敢逃死。（中略）曰：「君但手批一帖，曰：「某人夙負，自原銷除。」我持以告神，則犬自不噬。冤家債主，解釋須在本人，神不違也。」適攜記簿紙筆，即批帖予之。叟喜躍去。後七八載，姜販布渡大江，突遇暴風，帆不能落，舟將覆。見一人直上檣竿杪，掣斷其索，騎帆俱落。望之，似是此叟，轉瞬已失所在矣。 |
| 116 | 『閱微草堂筆記』 巻14 舅氏實齋安公言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.356 | 清代 | ●舅氏實齋安公言：程老，村夫子也。女頗韻秀，偶門前買脂粉，為里中少年所挑。泣告父母，憚其暴，弗敢較；然恚憤不可釋，居恒鬱鬱。故與一狐友，每至輒對飲。一日，狐怪其慘沮，以實告。狐默默去。後此少年復過其門，見女倚門笑，漸相軟語，遂野合于小圃空屋中。臨別，女涕不捨，相約私奔。少年因夜至門外，引以歸。防程老追索，以刃擬婦曰：「敢泄者死。」越數日，無所聞，知程老諱其事。意甚得，益狎昵無度。後此女漸露妖迹，乃知為魅，然相悅甚，弗能遣也。歲餘病瘵，惟一息僅存，此女乃去，百計醫藥，幸得不死，貲產已蕩然。夫婦露棲，又伾弱不任力作，竟食婦夜合之資，非復從前之悍氣矣。程老不知其由，向狐述說。狐曰：「是吾遣黠婢戲之耳，必假君女形，非是不足餌之也。必使知為我輩，防敗君女之名也。瀕危而捨之，其罪不至死也。報之已足，君無更怏怏矣。」此狐中之朱家、郭解歟。其不為己甚，則又非朱家、郭解所能也。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 117 | 『閲微草堂筆記』 巻14 從孫樹寶言 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.356-357 | 清代 | ●從孫樹寶言（中略）昨見滄州張君輔，言南皮某甲，年二十餘未娶。忽二豔女夜相就，詰所從來，自云：「是狐。以夙命當為夫婦，雖不能為君福，亦不至禍君。」某甲眙呢其色，為之不婚。有規戒之者，某甲謝曰：「狐遇我厚，相處日久，無疾病，非相魅者。且言當為我生子，于似續亦無害，實不忍負心也。」後族眾強為納婦，甲聞其女甚姣麗，遂頓負舊盟。迨洞房停燭之時，突聲若風霆，震撼簷宇，一手破窗而入，其大如箕，攫某甲以去。次日，四出覓訪，杳然無迹。七八日後，有數小兒言某神祠中有聲如牛喘。北方之俗，凡神祠無廟祝者，慮流丐棲息，多以土墼墐其戶，而留一穴置香爐。自穴窺之，似有一人裸體臥，不辨為誰。啟戶視之，則某甲在焉。已昏昏不知人矣。多方療治，僅得不死。自是狐女不至，而婦家畏狐女之報，亦竟離婚。此二詩記此事也。」夫狐已通靈，事與人異。某甲雖娶，何礙倏忽之往來。乃逞厥凶鋒，幾戕其命，狐可謂妒且悍矣。然本無夙約，則曲在狐。既不慎於始而與約，又不善其終而背之，則激而為祟，亦自有詞。是固未可罪狐也 |
| 118 | 『閲微草堂筆記』 巻15 哈密屯軍 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.381-382 | 清代 | ●哈密屯軍，多牧馬西北深山中。屯弁或往考牧，中途恒憩一民家。主翁或具瓜果，意甚恭謹。久漸款洽。然竊怪其無鄰無里，不圃不農，寂歷空山，作何生計。一日，偶詰其故，翁無詞自解，云：「實蛻形之狐。」（中略）曰：「修道必世外幽棲，始精神堅定。如往來城市，則嗜慾日生，難以煉形服氣，不免於媚人採補，攝取外丹。儻所害過多，終干天律。至往來墟墓，種類太繁，則蹤跡彰明，易招弋獵，尤非遠害之方，故均不為也。」屯弁喜其朴誠，亦不猜懼，約為兄弟。翁亦欣然。因出便旋，循墻環視。翁笑曰：「凡變形之狐，其室皆幻；蛻形之狐，其室皆真。老夫尸解以來，久歸人道，此並葺茅伐木，手自經營，公毋疑如海市也。」 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 119 | 『閲微草堂筆記』 巻16 李蟠木言 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.389-390 | 清代 | ●李蟠木言:其鄉有灌園叟，年六十餘矣。與客作數人同屋寢。忽聞其啞啞作顫聲，又呢呢作媚語，呼之不應。一夕，燈未盡，見其布衾蠕蠕掀簸，如有人交接者，問之亦不言。既而白晝或忽趨僻處，或無故閉門，怪而覘之，輒有瓦石飛擊。人方知其為魅所據。久之不能自諱，言初見一少年至園中，似曾相識，而不能記憶；邀之坐，問所自來。少年言：「有一事告君，祈君勿拒。君四世前與我為密友，後忽藉胥魁勢豪奪我田。我訴官，反遭笞，鬱結以死。愬於冥官，主者以契交隙末，當以歡喜解冤，判君為我婦二十年。不意我以業重，墜墮狐身，尚有四年未了。比我煉形成道，君已再入輪回，轉生今世。前因雖昧，舊債難消；夙命牽纏，遇於此地。業緣湊合，不能待君再墮女身，便乞相償，完此因果。」我方駭怪，彼遽噓我以氣，惘惘然如醉如夢，已受其污。自是日必一兩至，去後亦自悔恨。然來時又帖然意肯，竟自忘為老翁，不知其何以故也。一夜，初聞狎昵聲，漸聞呻吟聲，漸聞悄悄乞緩聲，漸聞切切求免聲；至雞鳴後，乃噭然失聲。突梁上大笑曰：「此足抵笞三十矣。」自是遂不至。後葺治草屋，見梁上皆白粉所畫圈，十圈為一行，數之，得一千四百四十，正合四年之日數。乃知為所記淫籌。計其來去，不滿四年，殆以一度抵一日矣。或曰：「是狐欲媚此叟，故造斯言。」然狐之媚人，悅其色，攝其精耳，雞皮鶴髮，有何色之可悅。有何精之可攝。其非相媚也明甚。且以扶杖之年，講分桃之好，逆來順受，亦太不情。其為身異性存，夙根未泯，自然相就，如磁引針，亦明甚。狐之所云殆非虛語，然則怨毒糾結，變端百出，至三生之後而未已，其亦慎勿造因哉。 |
| 120 | 『閲微草堂筆記』 巻16 交河及友聲言 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.394 | 清代 | ●交河及友聲言（中略）:一人見狐睡樹下，以片瓦擲之，不中。瓦碎有聲，狐驚躍去。歸甫入門，突見其婦縊樹上，大駭呼救。其婦狂奔而出，樹上縊者已不見。但聞簷際大笑曰：「亦還汝一驚。」此亦足為挑達者戒也。 |
| 121 | 『閲微草堂筆記』 巻16 周密庵言 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.396 | 清代 | ●周密庵言:其族有孀婦（中略）女故端麗，孀婦以千錢聘之。手書婚帖，留一宿而去。（中略）夫詰所自來，女低回良久，曰：「實告君，我狐之避雷劫者也。凡狐遇雷劫，惟德重祿重者，庇之可免。然猝不易逢，逢之又皆為鬼神所呵護，猝不能近。此外惟早修善業，亦可以免。然善業不易修，修小善業亦不足度大劫。因化身為君婦，黽勉事姑。今藉姑之庇，得免天刑，故厚營葬禮以申報，君何疑焉。」子故孱弱，聞之驚怖，竟不敢同居。女乃泣涕別去。後遇祭掃之期，其姑墓上必先有焚楮酹酒迹，疑亦女所為也。是特巧於逭死，非真有愛於其姑。然有為為之，猶邀神福，信孝為德之至矣。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 122 | 『閱微草堂筆記』 卷16 李阿亭言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.402 | 清代 | ●李阿亭言：灤州民家，有狐據其倉中居，不甚為祟，或偶然拋擲磚瓦，盜竊飲食耳。後延術士劾治，殪數狐，且留符曰：「再至則焚之。」狐果移去。然時時幻形為其家婦女，夜出與鄰舍少年狎，甚乃幻其幼子形，與諸無賴同臥起。大播醜聲，民固弗知。一日，至佛寺，聞禪室嬉笑聲，穴紙竊窺，乃其女與僧雜坐。憤甚，歸取刃，其女乃自內室出，始悟為狐復仇。再延術士，術士曰：「是已竄逸，莫知所之矣。」夫狐魅小小擾人，事所恒有，可以不必治，即治，亦罪不至死。遽駢誅之，實為己甚，其銜冤也固宜。雖有符可恃，狐不能再逞，而相報之巧，乃卒生於所備外。然則君子於小人，力不足勝，固遭反噬；即力足勝之，而機械潛伏，變端百出，其亦深可怖已。 |
| 123 | 『閱微草堂筆記』 卷16 嵩輔堂閣學言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.403 | 清代 | ●嵩輔堂閣學言：海淀有貴家守墓者，偶見數犬逐一狐，毛血狼藉。意甚憫之，持杖擊犬散，提狐置室中。俟其蘇息，送至曠野，縱之去。越數日，夜有女子款扉入，容華絕代。駭問所自來，再拜曰：「身是狐女。昨遘大難，蒙君再生，今來為君拂枕席。」守墓者度無惡意，因納之。往來狎昵兩月餘，日漸瘵瘦，然愛之不疑也。一日，方共寢，聞窗外呼曰：「阿六賤婢。我養創甫愈，未即報恩，爾何得冒託我名，魅郎君使病。脫有不諱，族黨中謂我負義，我何以自明。即知事出於爾，而郎君救我，我坐視其死，又何以自安。今偕姑姐來誅爾。女子驚起欲遁，業有數女排闥入，掊擊立斃。守墓者惑溺已久，痛惜恚忿，反斥此女無良，奪其所愛。此女反覆自陳，終不見省。且拔刃躍起，欲為彼女報冤。此女乃痛哭越墻去。守墓者後為人言之，猶恨恨也。此所謂「忠而見謗，信而見疑」也歟！ |
| 124 | 『閱微草堂筆記』 卷17 族姪竹汀言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.415 | 清代 | ●族姪竹汀言:文安有傭工古北口外者，久無音問。其父母值歲荒，亦就食口外，且覓子。（中略）忽有女子整衣出，延入上坐，拜而侍立，促老嫗督婢治酒肴，意甚親昵。莫測其由，起而固詰。則失聲伏地曰：「兒不敢欺翁姑，兒狐女也。嘗與翁姑之子為夫婦，本出相悅，無相媚意。不虞其愛戀過度，竟以瘵亡。心恒愧悔，故誓不別適，依其墓以居。今無意與翁姑遇，幸勿他往，兒尚能養翁姑。」初甚駭怖，既而見其意真切，相持涕泣，留共居。狐女奉事無不至，轉勝於有子，如是六七年。狐女忽遣老嫗市一棺，且具鍤畚。怪問其故。欣然曰：「翁姑宜賀兒。兒奉事翁姑，自追念逝者，聊盡寸心耳。不期感動土神，聞於嶽帝。岳帝憫之，許不待丹成，解形證果。今以遺蛻合窆，表同穴意也。」引至側室，果一黑狐臥榻上，毛光如漆；舉之輕如葉，扣之乃作金石聲。信其真仙矣。葬事畢，又啟曰：「今隸碧霞元君為女官，當往泰山，請共往。」故相偕至此，僦屋與土人雜居。狐女惟不使人見形，其供養仍如初也。」後不知其所終。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 125 | 『閲微草堂筆記』 巻17 張鉉耳先生家 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.421-422 | 清代 | ●張鉉耳先生家，一夕覓一婢不見，意其逋逃。次日，乃醉臥宅後積薪下。空房鎖閉，不知其何從入也。沃髮漬面，至午乃蘇。言昨晚聞後院嬉笑聲，稔知狐魅，習慣不懼，竊從門隙窺之。見酒炙羅列，數少年方聚飲。俄為所覺，遽躍起擁我踰墻入。恍惚間如睡如夢，噤不能言，遂被逼入坐。陳釀醇濃，加以苛罰，遂至沉酣，不記幾時眠，亦不知其幾時去也。鉉耳先生素剛正，自往數之曰：「相處多年，除日日取柴外，兩無干犯。何突然越禮，以良家婢子，作娼女侑觴。子弟猖狂，父兄安在？為家長者，寧不愧乎。」至夜半窗外語曰：「兒輩冶蕩，業已笞之。然其間有一線乞原者，此婢先探手入門，作謔詞乞肉，非出強牽。且其月下花前，採蘭贈芍，閲人非一，碎璧多年，故兒輩敢通款曲。不然，則某婢某婢，色豈不佳，何終不敢犯乎。防範之疏，僕與先生似當兩分其過，惟俯察之。」先生曰：「君既笞兒，此婢吾亦當痛笞。」狐哂曰：「過摽梅之年，而不為之擇配偶；鬱而橫決，罪豈獨在此婢乎。」先生默然。次日，呼媒媪至，凡年長數婢盡嫁之。 |
| 126 | 『閲微草堂筆記』 巻17 狐魅 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.424-425 | 清代 | ●狐魅，人之所畏也。里有羅生者，讀小說雜記，稔聞狐女之姣麗，恨不一遇。近郊古塚，人云有狐，又云時或有人與狎昵。乃詣其窟穴，具贄幣牲醴，投書求婚姻。（中略）一夕，獨坐凝思，忽有好女出燈下（中略）生大欣慰，即於是夜定情，自以為彩鸞甲帳，不是過也。婢善隱形，人不能見，雖遠行別宿，亦復相隨。益愜生所願，惟性饕餮，家中食物多被竊食，物不足則盜衣裳器具，鬻錢以買，亦不知誰為料理。（中略）以是家為之凋，體亦為之敝。久而疲於奔命，怨詈時聞，漸起釁端，遂成仇隙，呼朋引類，妖祟大興，日不聊生。延正一真人劾治，婢現形抗辯曰：「始緣祈請，本異私奔；繼奉主命，不為苟合。…至於盜竊淫佚，狐之本性，振古如是，彼豈不知。既以耽色之故，捨人而求狐，乃又責狐以人理，毋乃誖歟。（中略）」真人曰：「鳩眾肆擾，又何理乎？」曰：「嫁女與人，意圖求取。不滿所欲，聚黨喧哄者，不知凡幾。未聞有人科其罪，乃科罪於狐歟？」真人俯思良久，顧羅生笑曰：「君所謂求仁得仁，亦復何怨。老夫耄矣，不能驅役鬼神，預人家兒女事。」後羅生家貧如洗，竟以瘵終。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 127 | 『閱微草堂筆記』 巻18 丁藥園言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.445-446 | 清代 | ●丁藥園言:有孝廉，四十無子，買一妾，甚明慧。嫡不能相安，旦夕詬誶。越歲，生一子。益不能容，竟轉鬻於遠處。孝廉惘惘如有失。獨宿書齋，夜分未寐，妾忽搴帷入。驚問：「何來。」曰：「逃歸耳。」孝廉沉思曰：「逃歸慮來追捕，妒婦豈肯匿。且事已至此，歸何所容。」妾笑曰：「不欺君，我實狐也。前以人來，人有人理，不敢不忍詬；今以狐來，變幻無端，出入無迹，彼烏得而知之。」因嫵婉如初。久而漸為童婢洩。嫡大恚，多金募術士劾治。一術士檄將拘妾至，妾不服罪，攘臂與術士爭曰：「無子納妾，則納為有理。生子遣妾，則夫為負心。無故見出，罪不在我。」術士曰：「既見出矣，豈可私歸。」妾曰：「出母未嫁，與子未絕；出婦未嫁，於夫亦未絕。況鬻我者妒婦，非見出於夫。夫仍納我，是未出也，何不可歸。」術士怒曰：「爾本獸類，何敢據人理爭。」妾曰：「人變獸心，陰律陽律皆有刑。獸變人心，反以為罪，法師據何憲典耶。」術士益怒曰：「吾持五雷法，知誅妖耳，不知其他。」妾大笑曰：「妖亦天地之一物，苟其無罪，天地未嘗不並育。上帝所不誅，法師乃欲盡誅乎。」術士拍案曰：「媚惑男子，非爾罪耶。」妾曰：「我以禮納，不得為媚惑。倘其媚惑，則攝精吸氣，此生久槁矣。今在家兩年，復歸又五六年，康強無恙，所謂媚惑者安在。法師受妒婦多金，鍛煉周內，以酷濟貪耳，吾豈服耶。」問答之頃，術士顧所召神將，已失所在。無可如何，瞋目曰：「今不與爾爭，明日會當召雷部。」明日，嫡再促設壇，則宵遁矣。蓋所持之法雖正，而法以賄行，故魅亦不畏，神將亦不滿也。 |
| 128 | 『閱微草堂筆記』 巻18 表兄安伊在言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.452 | 清代 | ●表兄安伊在言:河城秋獲時，有少婦抱子行塍上，忽失足仆地，臥不復起。獲者遙見之，疑有故，趨視，則已死。子亦觸瓦角腦裂死。駭報田主，田主報里胥。辨驗死者，數十里內無此婦，且衣飾華潔，子亦銀釧紅綾衫，不類貧家，大惑不解。且覆以葦箔，更番守視，而急聞於官。河城去縣近，官次日晡時至，啟箔檢視，則中置槁稭一束，二尸已不見。壓箔之磚固未動，守者亦未頃刻離也。官大怒，盡拘田主及守者去，多方鞫治，無絲毫謀殺棄尸狀。糾結繳繞至年餘，乃以疑案上。上官以案情恍惚，往返駁詰。又歲餘，乃姑俟訪，而是家已蕩然矣。此康熙癸巳、甲午間事。相傳村南墟墓間，有黑狐夜夜拜月，人多見之。是家一子好弋獵，潛往伏伺，彀弩中其股。嗷然長號，化火光西去。搜其穴，得二小狐，縶以返，旋逸去。月餘，而有是事。疑狐變幻來報冤。然荒怪無據，人不敢以入供，官亦不敢入案牘，不能不以匿屍論。故紛擾至斯也。 |
| 129 | 『閱微草堂筆記』 巻18 賈公霖言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.461 | 清代 | ●賈公霖言:有貿易來往於樊屯者，與一狐友。狐每邀之至所居，房舍一如人家，但出門後，回顧則不見耳。一夕，飲狐家，婦出行酒，色甚妍麗。此人醉後心蕩，戲挼其腕。（中略）中途，遇少年與婦摩肩過，手觸婦足。婦怒詈少年，惟笑謝，語涉輕薄。此人憤與相搏，致驢驚逸入歧路。蜀秫方茂，斯須不見。此人捨少年追婦，尋蹄跡行一二里。驢陷淖中，婦則不知所往矣。野田連陌，四無人蹤，徹夜奔馳。彷徨至曉，姑騎驢且返，再商覓婦。未及數里，聞路旁大呼，曰：「賊得矣！」則鄰村驢昨夜被竊，方四出緝捕也。眾相執縛，大受箠楚。賴遇素識，多方辯說始得免。懊喪至家，則紡車琤然，婦方引線。問以昨事，茫然不知。始悟婦與客作及少年，皆狐所幻，惟驢為真耳。狐之報復惡矣，然釁則此人自啟也。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 130 | 『閱微草堂筆記』 巻18 門人郝瑗 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.462 | 清代 | ●門人郝瑗（中略）聞其少時，值春社，遊人如織。見一媼將二女，村妝野服，而姿致天然。瑗與同行，未嘗側盼。忽見媼與二女踏亂石，橫行至絕澗，鵠立樹下。怪其不由人徑，若有所避，轉凝睇視之。媼從容前致詞曰：「節物暄妍，率兒輩踏青，各覓眷屬。以公正人不敢近，亦乞公毋近兒輩，使刺促不寧。」瑗悟為狐魅，掉臂去之。然則花月之妖，為人心自召，明矣。 |
| 131 | 『閱微草堂筆記』 巻19 門人伊比部秉綬言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.477 | 清代 | ●門人伊比部秉綬言:有書生赴京應試，寓西河沿旅舍中。壁懸仕女一軸，風姿豔逸，意態如生。每獨坐，輒注視凝思，客至或不覺。一夕，忽翩然自畫下，宛一好女子也。書生雖知為魅，而結念既久，意不自持，遂相與笑語嫵婉。比下第南歸，竟買此畫去。至家懸至書齋，寂無靈響，然真真之喚弗輟也。三四月後，忽又翩然下。與話舊事，不甚答。亦不暇致詰，但相悲喜。自此狎媟無間，遂患羸疾。其父召茅山道士劾治。道士熟視壁上，曰：「畫無妖氣，為祟者非此也。」結壇作法。次日，有一狐殪壇下。知先有邪心，以邪召邪，狐故得而假借。其京師之所遇，當亦別一狐也。 |
| 132 | 『閱微草堂筆記』 巻19 吳茂鄰 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.478 | 清代 | ●吳茂鄰，姚安公門客也。見二童互詈，因舉一事曰：交河有人，嘗於途中遇一叟，泥滑失足，擠此人幾仆。此人故暴橫，遂辱詈叟母。叟怒欲與角，忽俯首沉思，揖而謝罪，且叩其名姓居址，至歧路別去。此人至家，其母白晝閉房門，呼之不應，而喘息聲頗異。疑有他故，穴窗窺之，則其母裸無寸絲，昏昏如醉，一人據而淫之。諦視，即所遇叟也。憤激叫呶，欲入捕捉，而門窗俱堅固不可破。乃急取鳥銃，自櫺外擊之。嗷然而仆，乃一老狐也。鄰里聚觀，莫不駭笑。此人詈狐之母，特託空言，竟致此狐實報之，可以為善詈者戒。此狐快一朝之憤，反以隕身，亦足為睚眥必報者戒也。 |
| 133 | 『閱微草堂筆記』 巻19 舅氏張公夢徵言 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.483-484 | 清代 | ●舅氏張公夢徵言（亦字尚文，諱景說。）：滄州吳家莊東一小庵，歲久無僧，恒為往來憩息地。有月作人，每於庵前遇一人招之坐談，頗相投契。漸與赴市沽飲，情益款洽。偶詢其鄉貫居址，其人愧謝曰：「與君交厚，不敢欺，實此庵中老狐也。」月作人亦不怖畏，來往如初。一日復遇，挈鳥銃相授曰：「余狎一婦，余弟亦私與狎，是盜嫂也。禁之不止，毆之則余力不敵。憤不可忍，將今夜伺之於路歧，與決生死。聞君善用銃，俟交鬥時，乞發以擊彼，感且不朽。月明如晝，君望之易辨也。」月作人諾之，即所指處伏草間。既而私念曰（中略）因乘其糾結不解，發一銃而兩殺之。（中略）舅氏恒舉此事為子侄戒，蓋是人負兩狐歸，嘗目睹也。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 134 | 『閲微草堂筆記』 巻20 李南澗言 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.490-491 | 清代 | ●李南澗言:其鄰縣一生，故家子也。少年挑達，頗漁獵男色。一日，自親串家飲歸，距城稍遠，雲陰路黑，度不及入，微雪又簌簌下。方躊躇間，見十許步外有燈光，遣僕往視，則茅屋數間，四無居人，屋中惟一童一嫗。（中略）童年約十四五，衣履破敝，而眉目極姣好。試挑與言，自吹火煮茗不甚答。漸與諧笑，微似解意。忽乘間悄語曰：「此地密邇祖母房，雪晴，當親至公家乞賞也。」生大喜慰，解繡囊玉玦贈之。亦羞澀而受。軟語長久，乃掩門持燈去。生與僕倚壁倦憩，不覺昏睡。比醒，則屋已不見，乃坐人家墓柏下，狐裘貂冠，衣褲靴襪，俱已褫無寸縷矣。裸露雪中，寒不可忍。二馬亦不知所在。幸僕衣未褫，乃脱其敝裘蔽上體，蹩躠而歸，詭言遇盜。俄二馬識路自歸，已盡剪其尾鬣。衣冠則得於溷中，並狼籍污穢。灼然非盜，無可置詞。僕始具泄其情狀。乃知輕薄招侮，為狐所戲也。 |
| 135 | 『閲微草堂筆記』 巻21 程編修魚門言 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.506-507 | 清代 | ●程編修魚門言:有士人與狐女狎，初相遇即不自諱，曰：「非以採補禍君，亦不欲託詞有夙緣，特悦君美秀，不自持耳。然一見即戀戀不能去，儻亦夙緣耶。」不數數至，曰：「恐君以耽色致疾也。」至，或遇其讀書作文，則去，曰：「恐妨君正務也。」如是近十年，情若夫婦。士人久無子，嘗戲問曰：「能為我誕育否耶。」曰：「是不可知也（中略）」（中略）後士人年過三十，鬚暴長。狐歎曰：「是鬚鬣者如芒刺，人何以堪。見輒生畏，豈夙緣盡耶。」初謂其戲語，後竟不再來。魚門多髯，任子田因其納姬，說此事以戲之。魚門素聞此事，亦為失笑。既而曰：「此狐實大有詞辯，君言之未詳。」遂具述其論如右。以其頗有理致，因追憶而錄存之。 |
| 136 | 『閲微草堂筆記』 巻21 《呂覽》稱 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.507-508 | 清代 | ●《呂覽》稱黎邱之鬼，善幻人形。是誠有之。余在烏魯木齊，軍吏巴哈布曰，甘肅有杜翁者，饒於貲。所居故曠野，相近多狐獾穴。翁惡其終夜嗥呼，悉薰而驅之。俄而其家人見內室坐一翁，廳外又坐一翁，凡行坐之處，又處處有一翁來往，殆不下十餘。形狀聲音衣服如一，摒擋指揮家事，亦復如一。合門大擾，妻妾皆閉門自守。妾言：「翁腰有素囊可辨。」視之，無有。蓋先盜之矣。有教之者曰：「至夜，必入寢。不納即返者翁也，堅欲入者即妖也。」已而皆不納即返。（中略）有一妓，翁所昵也，十日恆三四宿其家。聞之，詣門曰：「妖有黨羽，凡可以言傳者必先知，凡可以物驗者必幻化。盍使至我家（中略）我呼曰斲，即速斫，妖必敗矣。」眾從其言。一翁啟衾甫入，妓呼曰：「斲。」斧落，果一狐，腦裂死。再一翁，稍趔趄，妓呼曰：「斲！」果驚竄去。至第三翁，妓抱而喜曰：「真翁在此，餘並殺之可也！」刀杖並舉，殪其大半，皆狐與獾也。其逃者遂不復再至。 |
| 137 | 『閲微草堂筆記』 巻21 表兄安伊在言 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.508 | 清代 | ●表兄安伊在言:縣人有與狐女昵者，多以其婦夜合之資，買簪珥脂粉贈狐女。狐女常往來其家，惟此人見之，他人不見也。一日，婦詬其夫曰：「爾財自何來，乃如此用。」狐女忽闇中應曰：「汝財自何來，乃獨責我。」 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 138 | 『閲微草堂筆記』 巻22 姚安公言 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.522-523 | 清代 | ●姚安公言:（中略）吾鄉有愛蒔花者，一夜偶起，見數女子立花下，皆非素識。知為狐魅，遽擲以塊，曰：「妖物何得偷看花。」一女子笑而答曰：「君自晝賞，我自夜遊，於君何礙。夜夜來此，花不損一莖一葉，於花又何礙。遽見聲色，何鄙吝至此耶。吾非不能揉碎君花，恐人謂我輩所見，亦與君等，故不為耳。」飄然共去，後亦無他。狐尚不與此輩較，我乃不及狐耶。」後此人終不自安，移家莫知所往。 |
| 139 | 『閲微草堂筆記』 巻22 族叔育萬言 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.527 | 清代 | ●族叔育萬言:張歌橋之北，有人見黑狐醉臥場屋中場中守視穀麥小屋，俗謂之場屋。初欲擒捕，既而念狐能致財，乃覆以衣而坐守之。狐睡醒，伸縮數四，即成人形。甚感其護視，遂相與為友。狐亦時有所饋贈。（中略）古詩曰：「利旁有倚刀，貪人還自戕。」信矣。 |
| 140 | 『閲微草堂筆記』 巻23 又聃先生又言 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.537 | 清代 | ●又聃先生又言:有安生者，頗聰穎。忽為眾狐女攝入承塵上，吹竹調絲，行肴勸酒，極媟狎冶蕩之致。隔紙聽之，甚了了，而承塵初無微隙，不知何以入也。燕樂既終，則自空擲下，頭面皆傷損，或至破骨流血。調治稍愈，又攝去如初。毀其承塵，則攝置屋頂，其擲下亦如初。然生殊不自言苦也。生父購得一符，懸壁上。生見之，即戰慄伏地，魅亦隨絕。問生：「符上何所見。」云：「初不見符，但見兵將猙獰，戈甲晃耀而已。」此狐以為仇耶。不應有燕昵之歡；以為媚耶。不應有撲擲之酷。忽喜忽怒，均莫測其何心。或曰：「是仇也，媚之乃死而不悟。」然媚即足以致其死，又何必多此一擲耶。 |
| 141 | 『閲微草堂筆記』 巻23 雲舉又言 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.544 | 清代 | ●雲舉又言:有人富甲一鄉，積粟千餘石。遇歲歉，閉不肯糶。忽一日，徵集僕隸，陳設概量，手書一紅箋，榜於門曰：「歲歉人饑，何心獨飽。今擬以歷年積粟，盡貸鄉鄰，每人以一石為律。即日各具囊篋赴領，遲則粟盡矣。」附近居民聞聲雲合，不一日而粟盡。有請見主人申謝者，則主人不知所往矣。皇遽大索，乃得於久鏽敝屋中，酣眠方熟。人至，始欠伸。眾驚愕掖起，於身畔得一紙曰：「積而不散，怨之府也；怨之所歸，禍之叢也。千家饑而一家飽，剽劫為勢所必至，不名實兩亡乎。感君舊恩，為君市德。希恕專擅，是所深禱。」不省所言者何事。詢知始末，太息而已。然是時人情洶洶，實有焚掠之謀。得是博施，乃轉禍為福。此幻形之妖，可謂愛人以德矣。所云舊恩，則不知其故。或曰：「其家園中有老屋，狐居之數十年，屋圮乃移去。」意即其事歟。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 142 | 『閲微草堂筆記』 巻24 姜慎思言 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.554 | 清代 | ●姜慎思言:乾隆己卯夏，有江南舉子，以京師逆旅多湫隘，乃稅西直門外一大家墳院讀書。偶晚涼樹下散步，遇一女子，年十五六，頗白晳。挑與語，不嗔不答，轉墻角自去。夜半睡醒，似門上了鳥微有聲，疑為盜，呼僮不應，自起隔門罅窺之，乃日間所見女子也。知其相就，急啟戶，擁以入。女子自言：「為守墳人女，家酷貧，父母並拙鈍，恒恐嫁為農家婦。頃蒙顧盼，意不自持，故從墻缺至君處。君富貴人，自必有婦，儻能措百金與父母，則為妾媵無悔。父母嗜利，亦必從也。」舉子諾之，遂相繾綣，至雞鳴乃去。自是夜半恆至，妖媚冶蕩，百態橫生。舉子以為巫山洛水不是過也。（中略）舉子頓悟，曰：「汝毋乃狐耶。」女子殊不自諱，笑而應曰：「初恐君駭怖，故託虛詞。今情意已深，不妨明告。（中略）」舉子思之，計良得。自是潛住書室，不待夜度矣。然每至秉燭則外出，夜半乃返；或微露髻亂釵橫狀。舉子疑之而未決。既而與其孌童亂；旋為二僕所窺，亦並與亂。庖人知之，亦續狎焉。一日，晝與孌童寢。舉子潛扼殺之，遂現狐形；因埋於墻外。半月後，有老翁詣舉子曰：「吾女託身為君妾，何忽見殺。」舉子憤然曰：「汝知汝女為吾妾，則易言矣。夫兩雄共雌，爭而相戕，是為妒姦，於律當議抵。汝女既為我妾，明知非人而我不改盟，則夫婦之名分定矣。而既淫於他人，又淫於我僕，我為本夫，例得捕姦。殺之，又何罪耶。」（以下略） |
| 143 | 『閲微草堂筆記』 巻24 同年胡侍御牧亭 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.556-557 | 清代 | ●同年胡侍御牧亭（中略）有輕薄子見少婦獨哭新墳下，走往挑之。少婦正色曰：「實不相欺，我狐女也。墓中人耽我之色，至病瘵而亡。吾感其多情，而愧其由我而殞命，已自誓於神，此生決不再偶。爾無妄念，徒取禍也。」 |
| 144 | 『閲微草堂筆記』 巻24 田白巖言 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.560-561 | 清代 | ●田白巖言：濟南濟南朱子青與一狐友（中略）一日，有請見其形者（中略）一人曰：「當龐眉皓首。」應聲即現一老人形。又一人曰：「當仙風道骨。」應聲即現一道士形。又一人曰：「當星冠羽衣。」應聲即現一仙官形。又一人曰：「當貌如童顔。」應聲即現一嬰兒形。（中略）即應聲現一美人形。又一人曰：「應聲而變，是皆幻耳，究欲一睹真形。」狐曰：「天下之大，孰肯以真形示人者，而欲我獨示真形乎。」大笑而去。子青曰：「此狐自稱七百歳，蓋閲歷深矣。」 |
| 145 | 『醉茶志怪』 巻1 「苏某」 | 李慶辰著『醉茶志怪』、歷代筆記小説叢書、斉魯書社、2004年、pp.3-4 | 清代 | ●苏某（中略）夜有奔女，红裙蓝帔，貌殊娴雅。自云为狐，请独居后楼，妾当就之。如其言，夜果至。与之寝，樱口喷香，花容含笑，旷世真无其偶。从此遂为琴瑟。（中略）又半载，形容憔悴。（中略）女曰：“妾蓄有灵丹，明日携来服之，又何虑焉。”（中略）次日女来，取温水半瓯，吐口中红丸，对烛润化，将饮病者。苏急引动铃响，甲乙猝至。（中略）女云：“疾病，人之常事，医之则健壮如初，何以云杀。”（中略）甲乘间取瓯中药汁，一吸而尽。女视之失色曰：“尔真杀我夫也！”忿以手推乙倒地，遂失所在。苏视，爽然悔悟，大詈二人无良。二人惭退。女来，握苏手痛哭云：“妾恃有妙药，贪欢不已，致君如此狼狈。若能服丹，寿同金石，且换凡骨，伉俪不仅百年。孰意君生疑忌，彼施计巧，是殆命也。五日后君必死，妾以君故，亦不免于雷殛。奈何奈何。”（中略）至期，苏亡，女出金易棺殓已，遂杳。后，甲须发苍而转黑，八十余犹能夜御数女，颜如童子焉。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 146 | 『醉茶志怪』 巻1 「王建屏」 | 李慶辰著『醉茶志怪』、歷代筆記小説叢書、斉魯書社、2004年、pp.7-8 | 清代 | ●王建屏，晋之世家子。（中略）忽布帘一展，有女子自外入，縞素衣裳，面无脂粉，虚鬟笼雾，膩颊凝花，淡雅别饶风韵。王知其狐仙，毛发几竖，曰：“素无不敬，何故来扰？”盖商最敬仙，堂中常设仙位，王虔拜尤勤，故云然也。（中略）女大笑曰：“君非学究，何太腐气？岂日居市井，尚未忘之乎者也耶。实告君，妾与君有前缘，故来燕好。君宜秘之，保不为君祸也。”（中略）既而灭烛共寝，极尽欢娱。及晓始去，人无知者。如此二三年，恩爱备至。（中略）王再三询故，女曰：“缘尽矣，此别筵也。”王闻言大痛。女拭泪曰：“黄鹤一去，非无再见之期。他年会于苏州，当为君脱急难，志之勿忘也。”（中略）一如女言。仙能前知，信夫。 |
| 147 | 『醉茶志怪』 巻1 「狐伏妖」 | 李慶辰著『醉茶志怪』、歷代筆記小説叢書、斉魯書社、2004年、pp.46-48 | 清代 | ●刘生者，直隶人（中略）见有一女子，青衫素裙，其貌袅娜，（中略）女始言为仙。刘溺之，情倍笃。未几病作，居停遣归其家。女随至，家人俱未睹。刘托言养静，独居一室，渐渐惫不能起。有刘之表戚王某，无业游手（中略）见石窟中卧一物，似猫而巨，毛撬光泽可爱。近前抚之，物酣睡未醒，抱之归，缚以绳。物醒，作人语曰：“予天狐也，其事甚忙，偶贪杯酒，误为尔获。速释我，不然，两俱无益！”曰：“闻狐仙善能致财，厚赠我，则释之。”狐曰：“我不敢妄以福泽加人，请与君结为昆弟。有急事呼我即至，代君分忧。此即所以报厚德也。”（中略）次日，王设香酒，如法祈请，飘然自室堕，则白须老叟也。（中略）王诣刘家，见刘憔悴，询其家人。云：“巫医乏术，旦夕人也。”因泣下。王慨然曰：“予有盟兄，可生之。”（中略）嘱众设香案。王举酒拜祷，叟果至，引至病所。叟云：“易耳，尔辈俱回避，惟吾与病者在室，则可除其患。”（中略）叟持利剑作法（中略）赠以药，出门不见。刘服药后，健壮如初。 |
| 148 | 『醉茶志怪』 巻2 「杜生」 | 李慶辰著『醉茶志怪』、歷代筆記小説叢書、斉魯書社、2004年、pp.93-94 | 清代 | ●河间杜生（中略）仆右目如常人，左目能见鬼怪（中略）见阶前二狐语曰：“肉食生脑满肠肥，盍往采补。”仆伪睡，以观其变。相将至寝门，各以白髑髅戴头上。徐揭帘入，则成二好女，一可二十余，一可十七八，服饰容光，并皆佳妙。至案前夺生所读书。（中略）生狂喜，遽近。女拒之，生不听，遂相欢合。仆视以左目，则髑髅横陈榻上，狐以口含生下体，不觉毛发俱悚。次日，仆以情告，劝其速绝，生不从。于是二女此往彼来，从无虚夕。生渐羸瘦。（中略）仆浩叹曰：“奴报主无日矣。”乃忿而去。越半载余，生卒。 |
| 149 | 『醉茶志怪』 巻2 「陈翁」 | 李慶辰著『醉茶志怪』、歷代筆記小説叢書、斉魯書社、2004年、pp.90-91 | 清代 | ●遵化陈翁…夜归，离村三里许，月明如昼，过大树下。有数人聚饮，见陈，遽邀入座。肴馔精奇，味穷水陆。痛饮辞归。大作吐泻。次日往视其处，有破陶器盛马矢数枚而已，殆狐鬼所化也。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 150 | 『醉茶志怪』 巻3 「林承嗣」 | 李慶辰著『醉茶志怪』、歷代筆記小説叢書、斉魯書社、2004年、pp.156-157 | 清代 | ●林生承嗣，闽之士人，侨居于邑之古刹。夜有长须叟，自称胡髯，与之谈，言词渊奥，遂订为忘年交。每见翁来，重门未启，辄自入，归去亦然。固诘之，始知为有道之狐仙。莫逆既久，尽倾胸膈。生以贫故，屡求周急，翁不许，生有愠色。翁曰：“凡人之享厚福者，大半皆有前因，君前生为士人，无功过于世。今生饥躯奔走，强欲富贵，不能也。”林殊睥睨，不以为然。翁云：“明日请与仆偕往，洞观其故，当信仆言不诬。”乃出玄巾一顶，眼镜一具授生。（中略）翁曰：“予所假君之玄巾，隐身宝也；眼镜，阅世宝也。世事如此，君固欲富乎！”乃索其巾与镜，一笑而去，后不复来。 |
| 151 | 『醉茶志怪』 巻4 「狐师」 | 李慶辰著『醉茶志怪』、歷代筆記小説叢書、斉魯書社、2004年、pp.183-186 | 清代 | ●宫生斯和，浙人。（中略）至晚，生归寝室，挑灯独坐。举首则女子立几前…生曰：“此塾也，非女郎所宜到处（中略）”（中略）女曰：“（中略）幸君救免，兹来特报此德。”生曰：“此尔辈之故智耳，非云有缘，即云报德，其实意在苟合。”女正色曰：“此何言也？予所谓报德者，非床第之爱，乃衣钵之传。君有夙根，前程甚远，顾质美未学，犹璞玉未琢。自揣学问固陋，然教君尚觉有余。君肯师我，当竭力诲之。”生踯躅有难色。（中略）历指其疵，宛如目睹。生大惊曰：“君未见吾文，何以指谬如是之不爽耶？君真神人，敢不拜服！”言毕再拜，执弟子礼。女曰：“君服我之神耶，抑服我之识耶。若服我之神，是我以术取；若服我之识，是我以学胜也。圣人之道，不过平易近人，愿君勿以奇异视我。则子之学日益进矣。”生曰：“今而后敬聆师训。”女喜曰：“孺子真可教，从此呼为姊弟可也。”因呼为“胡姊”，遂独居静室，夜为生讲贯，剖疑析义，问无不知。（中略）一夜，有同学生起溺，闻生室中有人声，舐窗私窥，见生孤坐灯下，言犹未已。叩扃穷诘，生不能隐，具以实告。同学生曰：“妖由人兴，不早与绝，是自求祸。伊谁见古来名儒，有受业于狐者？学品果优，避之不暇，况公然敢犯函丈而居师位乎。”盖阳虽规诫，而阴怀忌妒。因与众约，次日各持利刃，突入生室，左右乱击。生见女怫然而去，乃谓众曰：“诸君不必恶作，彼已去矣。”众乃挽生同榻。生忿未眠，闻窗外女呼曰：“宫生学业已成，拾青紫如拾芥，好自为之，毋荒旧业可也。予与君缘分已满，即无诸君此举，予亦不久留。尚烦寄语诸君，如某某与我有一面缘，五年后会于石桥，志之勿忘，予去也。”（中略）至通州，经石桥，见一女子姿容绝代，自对面来。众目送之曰：“美而艳！”生审视曰：“是胡师也！”下车即不複见。众亦惊叹久之。是科宫高捷南宫，其友亦同榜登第。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 152 | 『醉茶志怪』 巻4 「樊英」 | 李慶辰著『醉茶志怪』、歷代筆記小説叢書、斉魯書社、2004年、pp.216-217 | 清代 | ●樊英者，狐女也。邑南村有刘氏子，劫孤。弱冠，美丰姿，读书颇慧。诣城内就师读，偶游街市，遇一女子，绿鬟垂鬓，绦纱短衫，裙下双翘如笋，爱好之，目不斜瞬。女微觉，红涨于面，掩袖而过。刘归，冥想废读，托故归家，眠餐顿减。忽一夕，月色昏黄，有叩扉者。出视，则向所遇女子也。延之入，倚灯坐，羞涩不语。刘惊喜，不知所措。半晌不言去。刘出视，家人皆将就寝，遂归斋，掩其扉，与共寝处。天将明，女自去。如是月余，人无知者。二人情好益笃。（中略）生每有所欲，应念辄至，因知其为狐仙。母为生议婚，力阻不愿。后为家人所窥，母令绝之，生不忍。又数载，生呕血病危，女扶持倍谨，恒终日不去，家人佥呼为娘子。未几生亡，女披麻哭泣尽礼，稽首向母曰：“母请勿忧，此后奉养，新妇之责也。”生殡后，女去，留一巨布囊，云：“如有所需，探此可得。”母晨炊取米，果不爽。由是飢求食，寒索衣，皆仰给此囊，以故家稍裕，（中略）母因往视，新妇则樊英也。母怒，责其失节，且戒其家速绝，不然狐蛊亦类吾儿。樊英泣曰：“儿三岁为妇，未敢失德，且报母不为不至。夫死再醮，亦常之事。身虽嫁而犹养姑，以视性性出门视翁姑如寇仇者，毋将何以责之。”母语塞，盖隐刺刘姥也。母归，疑女与绝，及探囊，依然得物，始喜。终母之世，供给勿衰，母死始罢。或云樊英诚贤，惜其未明大节也。 |

**補足資料1(狐が仙になる方法)**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 153 | 『閱微草堂筆記』 巻18 冠瀛久困名場 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.463-464 | 清代 | ●冠瀛久困名場，意殊抑鬱，嘗語余及雪崖曰：「聞舊家一宅，留宿者夜輒遭魘，或鬼或狐，莫能明也。一生有膽力，欲伺為祟者何物，故寢其中。二更後，果有黑影警落地，似前似卻，聞生轉側，即伏不動。知其畏人，佯睡以俟之。漸作鼾聲。俄覺自足而上，稍及胸腹，即覺昏沉，急奮右手搏之，執得其尾，即以左手扼其項。噭然一聲，作人言求釋。急呼燈視之，乃一黑狐。眾共捺制，刃穿其髀，貫以索，而自繫於左臂。度不能幻化，乃持刀問其作祟意。狐哀鳴曰：『凡狐之靈者，皆修煉求仙。最上者調息煉神，講坎離龍虎之旨；吸精服氣，餌日月星斗之華，用以內結金丹，蛻形羽化。是須仙授，亦須仙才，若是者吾不能。次則修容成素女之術，妖媚蠱惑，攝精補益，內外配合，亦可成丹。然所採少則道不成，所採多則戕人利己，不干冥譴，必有天刑。若是者吾不敢。故以剽竊之功，為獵取之計，乘人酣睡，仰鼻息以收餘氣，如蜂採蕊，無損於花，湊合漸多，融結為一，亦可元神不散，歲久通靈。即我輩是也。雖道淺術疏，積功亦苦，如不見釋，則百年精力，盡付東流，惟君子哀而恕之！』生憫其詞切，竟縱之使去。（以下略） |

補足資料2（中国における人間が狐に変身する変身譚）

| # | 出典 | 出典の詳細情報 | 時代 | 原文 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『搜神記』巻18（425）「阿紫」 | 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985年、pp.222-223 | 晋代 | ●後漢建安中，沛國郡陳羨為西海都尉。其部曲王靈孝，無故逃去，羨欲殺之。居無何，孝復逃走。羨久不見，囚其婦。其婦實對，羨曰：「是必魅將去，當求之。」因將步騎數十，領獵犬，周旋于城外求索。果見孝于空冢中。聞人犬聲，怪遂避去。羨使人扶孝以歸，其形頗象狐矣，略不復與人相應，但啼呼「阿紫」。阿紫，狐字也。後十餘日。乃稍稍了悟。云：「狐始來時，于屋曲角雞栖間，作好婦形，自稱『阿紫』，招我。如此非一，忽然便隨去。即為妻，暮輒與共還其家。遇狗不覺。」云樂無比也。道士云：「此山魅也。」《名山記》曰：「狐者，先古之淫婦也，其名曰『阿紫』，化而為狐。故其怪多自稱『阿紫』。」 |

### 3.2.1 日本における狐が人間に変身する変身譚

| # | 出典 | 出典の詳細情報 | 時代 | 原文 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『日本霊異記』上-2「狐爲妻令生子縁」 | 中田祝夫校注、訳『日本霊異記』、新編日本古典文学全集10、小学館、1995年、pp. 28-29 | 平安時代 | ●昔欽明天皇（是磯城嶋金刺宮食國天國押開広庭命也。）御世、三乃國大乃郡人応爲妻覓好嬢乗路而行。時曠野中遇於姝女。其女媚壮馴之壮睇之。言、「何行稚嬢」。嬢答、「将覓能縁而行女也。」壮亦語言、「成我妻耶」。女、「聽」答言、即將於家交通相住。比頃懐任生一男子。時其家犬、十二月十五日生子。彼犬之子毎向家室、而期尅睚眥嗥吠。家室脅惶、告家長。「此犬打殺」。雖然患告而猶不殺。於二月三月之頃、設年米舂時、其家室於稻舂女等將充間食入於碓屋。即彼犬将咋家室而追吠。即驚噪恐、成野干登篭上而居。家長見言、「汝與我之中子相生故吾不忘。毎來相寐」。故誦夫語而來寐。故名爲支都禰也。時彼妻著紅襴染裳（今桃花云、裳也。）而窈窕裳襴引逝也。夫視去容戀歌曰(中略）其子姓負狐直也（中略）三乃國狐直等根本是也。 |
| 2 | 『和名類聚抄』巻18「狐」 | 源順撰『和名類聚抄』、那波道円、元和3、古典籍、国立国会デジタルコレクション『和名類聚抄』20巻[10]、コマ番号45 | 平安時代 | ●孫愐切韻云狐能為妖恆至百歳化為女也 |
| 3 | 『法華験記』上-25「叡山西塔春命」 | 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系7、岩波書店、1974年第1刷発行、p. 524 | 平安時代 | ●沙門春命。西塔往僧也。（中略）勇猛精進。一心読経。至於天暁不睡不覚。有一天女而現半身形。其声柔軟。汝於前世受野干身。住於西塔法華堂裏。遊天井上。常聞妙法及宝螺。依其因縁。今得人身。作此山僧。持法華経。人身希有。仏法難遇。（以下略） |
| 4 | 『法華験記』下-127「朱雀大路野干」 | 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系7、岩波書店、1974年第1刷発行、p. 567 | 平安時代 | ●有一善男。從朱雀大路漸々歩行往。迨日暮時。遇一女人。其女面貌端厳。衣服美麗。言音優美。聞銘肝胆。見増歓悦。（中略）男子告女言。宿世相催。今日遇君。共欲交通。女人語此人。此事非難。雖可随君情。若与我交通。君命当損死。是故不受也。男曰。予不思臨死。只望交臥耳。女云。吁莫生此念。君帯官位。家有妻子。命一生財。婬刹那樂。依仮借戯。失永年命。男曰。我雖知此理。迷君容粧。夫婦之愛天然至性也。猶垂哀憐。当順我情。女曰。懇切芳言。誠以難遁。我代言君死全保君命。為救我苦。応書写供養妙法華経。男大喜悦。捨我財宝。可報君恩。即以交通。終夜結契。至於天曉。各以相別。男曰。君語代我死。虚実難知。我還來家。当図写仏経。女言欲知死時。以明朝見武徳殿辺。乞取男緒扇。以此扇可為指南。各揮涙別去。男至明旦。往武徳殿巡検之時。殿裏有一野干。以扇覆面以死去。男明見之。毎至七日。写一部法華。供養演説。未及七々日。夢此女来。天女荘厳。備具身上。及百千天女囲遶。語男言。依一乗威力。抜劫々苦。今往忉利天。此恩無量。世々酬報。即昇天上。楽音満空。香気留空矣。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 5 | 『今昔物語集』巻16-17「備中國賀陽良藤為狐夫得観音助語第十七」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注、訳『今昔物語集』②、新編日本古典文学全集36、2003年7月20日第一版第二刷発行、pp.211-216 | 平安時代 | ●今昔、備中ノ國、賀陽ノ郡、葦守ノ郷ニ、賀陽ノ良藤ト云フ人有ケリ。銭ヲ商テ家豊カ也、天性淫奔ニシテ心色メカシ。而ルニ、寛平八年ト云フ年ノ秋、其ノ妻、京ニ上レル間、良藤、やもめニシテ独リ家ニ有ルニ、夕暮方ニ、外ニ出デヽ、イミテ行クニ、忽ニ美麗ナル女ノ年若キヲ見ル。良藤、未ダ不見ザリツル者ニテ、愛欲ノ心ヲ発シテ触バヽムト為ルニ、女逃ヌベキ氣色ナレバ、良藤歩ビ寄テ、女ヲ捕ヘテ、「何ナル人ゾ」ト問ヘバ、女氣ハヒ花□ヤカニテ、「誰ニモ非ズ」トモ答フル様労タ気也。良藤、「我ガ有ル所へ去来」ト云フニ、女、「見苦シキ事」ト云テ、引キ離レムカ為レバ、良藤、「然ハ、何コニ有ルゾ。我レ、具シテ行カム」ト云ヘバ、女、「只彼コニ」トテ歩ビ行クニ、良藤女ヲ捕ヘテ乍ラ行ク。糸近キ所ニ清気ニ造タル家ニ、又内ヲ見レバ可有カシク□タリ。良藤、「何デ、此ル所有ツラム」ト思ニ、家ノ内ニ上中下ノ男女、様々ニ有テ、「君御坐シニタリ」ト騒ギ合タリ。「此ノ女ハ、此ノ家ノ娘也ケリ」ト思フニ、喜シクテ、其ノ夜通ジヌ。明ル朝ニ、家主ト思ユル人出来テ、良藤ニ云ク、「可然キニテコソ此クテ御シツラメ、今ハ此クテ御セ」ト云テ、目安ク持成シテ有ルニ、良藤、此ノ女ニ心移リ畢テヽ、永ク契ヲ成シテ、起キ臥シ過スニ、「我ガ家子共、何ナラム」ト不思エズ。（中略）彼ノ良藤ガ有ル所ニハ、年月ヲ経テ其ノ妻、既ニ懐任シヌ。月満テ平ニ子ヲ産ツ。（中略）本ノ家ニハ、良藤失テ後、尋ネ求ムト云ヘドモ、値フ事不得ズシテ（中略）十一面観音ノ像ヲ造ラムトシテ、栢ノ木ヲ伐テ、良藤ガ長等シク造テ、此レニ向テ礼拝シテ、「屍ヲダニ見ム」ト祈リ請。亦、彼ノ失ニシ日ヨリ始メテ、念仏読経ヲ始メテ、良藤ガ後世ヲ訪フ。而ル間、彼ノ良藤ガ有ル所ニ、俄ニ一人ノ俗杖ヲ突テ来ル。家ノ人主ヨリ始メテ、此レヲ見テ、恐ヂ怖ル、事無限シ、皆逃ゲ去ヌ。俗杖ヲ以テ良藤ガ背ヲ突キテ、狭キ所ヨリ令出シム。而ル間、良藤、失セテ後十三日ト云フ夕暮ニ、人々、良藤ヲ恋ヒ悲ムデ、「然テモ奇異ニ失セニシカナ。只今許ノ事ゾカシ」ナド云ヒ合ツル程ニ、前ナル蔵ノ下ヨリ、怪ク黒キ者ノ猿ノ様ナルガ、高這ヲシテ這出デヽ来レバ、「何ゾ、此レハ」ト有ル限リ、見ルニ、「我也」ト云フ音、良藤ニテ有リ。（中略）即チ、人ヲ以テ蔵ノ下ヲ令見レバ、多ノ狐有テ、逃テ走リ散ニケリ。其ノ所ニ良藤ガ臥ス所有ケリ。此ヲ見テ、「良藤、狐ニ被謀テ、夫ノ夫ト成テ、移シ心无クシテ、此ク云フ也ケリ」ト知テ、忽ニ貴キ僧ヲ請ジテ令祈メ、陰陽師ヲ呼テ令祓テ、度々沐浴セサセテ見ルニ、有シ人ニ不似ズ。其ノ後、漸ク本ノ心ニ成テ、何ニ耻カシク奇異也ケム。良藤、倉ノ下ニ居テ十三日也。而ルニ、良藤、十三年ト思エケリ。亦、倉ノ桁ノ下纔ニ四五寸許也。而ルニ、良藤、高ク廣ク思エテ、出入シテ大ナル屋ナドヽ思エケリ。皆此レ、霊狐ノ□ノ徳也。彼ノ杖ヲ突テ入レル俗ト云ハ、造リ奉ル所ノ観音ノ變ジ給ヘル也。然バ、世ノ人、専ニ観音ヲ念ジ可奉シ。其ノ後、良藤、身ニ恙无クシテ十餘年有テ、年六十一ニシテ死ニケリ。（以下略） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 6 | 『今昔物語集』巻27-29「雅道中将家在同形乳母二人語第二十九」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注、訳『今昔物語集』④、新編日本古典文学全集38、2008年12月24日第一版第三刷発行、pp.94-95 | 平安時代 | ●今昔、源ノ雅通ノ中将ト云フ人有キ。丹波中将トナム云ヒシ。…彼ノ中将、其ノ家ニ住ケル時ニ、二歳許ノ児ヲ乳母抱テ南面也ケル所ニ、只独リ離レ居テ児ヲ遊バセケル程ニ、俄ニ児ノ愕タヽシク泣ケルニ、乳母モ喤ル音ノシケレバ、中将ハ北面ニ居タリケルガ、此レヲ聞テ何事トモ不知ラデ、大刀ヲ提テ走リ行テ見ケレバ、同形ナル乳母二人ガ中ニ此ノ児ヲ置テ、左右ノ手足ヲ取テ引シロフ。中将、奇異ク思テ吉ク守レバ、共ニ同乳母ノ形ニテ有リ。何レカ実ノ乳母ナラムト云フ事ヲ不知ズ。然レバ、「一人ハ定メテ狐ナドニコソハ有ラメ」ト思テ、大刀ヲヒラメカシテ走リ懸ケル時ニ、一人ノ乳母掻消ツ様ニ失ニケリ。其ノ時ニ、児モ乳母モ死タル様ニテ臥シタリケレバ、中将、人共ヲ呼テ、験有ル僧ナド呼バセテ加持セサセナドシケレバ、暫許有テ乳母例心地ニ成テ起上タリケルニ、中将、「何ナリツル事ゾ」ト問ヒケレバ、乳母ノ云ク、「若君ヲ遊バカシ奉ツル程ニ、奥ノ方ヨリ不知ヌ女房ノ俄ニ出来テ、「此レハ我ガ子也」ト云テ、奪取ツレバ、不被奪ジト引シロヒツルニ、殿ノ御マシテ大刀ヲヒラメカシテ走リ懸ラセ給ヒツル時ニナム、若君モ打棄テ、其ノ女房奥様へ罷ツル」ト云ケレバ、中将極ク恐ケリ。然レバ、「人離レタラム所ニハ、幼キ児共ヲバ不遊マジキ事也」トナム人云ケル。狐ノ□タリケルニヤ、亦、物ノ霊ニヤ有ケム、知ル事無クテ止ニケリ、トナム語リ伝ヘタルトヤ。 |
| 7 | 『今昔物語集』巻27-32「民部大夫頼清家女子語第三十二」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注、訳『今昔物語集』④、新編日本古典文学全集38、2008年12月24日第一版第三刷発行、pp.102-104 | 平安時代 | ●今昔、民部ノ大夫□ノ頼清ト云フ者有ケリ。（中略）年来仕ケルニ、其ノ女京ニ家有ケレバ、主ノ頼清モ院ノ勘当ニテ木幡ニ入居ニケレバ、其ノ女暇有テ久ク京ニ有ケル程ニ、頼清ガ許ヨリ舎人男ヲ遣セテ、「忩グ事有リ。只今参レ。日来御マシツル木幡ノ殿ハ故ノ事有テ、昨日立セ給ヒニキ。山城ナル所ニナム人ノ家ヲ借テ渡セ給ヒタル。疾々ク参レ」ト云ケレバ、女、五ツ許ナル子ヲナム持タリケル。其レヲ掻抱テ忩テ行ニケリ。行着テ見レバ、常ヨリモ頼清ガ妻、此ノ女ヲ取饗応ジテ物ナド食セテ、忩ガシ気ニテ、何ニト無キ物染メ張リ忩ギケレバ、女モ諸共ニ忩テ四五日ニ成ニケリ。而ル間、主ノ女此ノ女ニ云ク、「木幡ニ我ガ居タリシ所ニハ、木守ニ雑色一人ヲナム置タル。其ニ行テ、忍ビテ可云キ事ノ有ルヲ、行ナムヤ」ト。女、「承ハリヌ」ト云テ、子ヲバ同僚ニ預ケテ、出立テ行ニケリ。木幡ニ行着テ家ノ内ニ入タレバ、「定メテ人無クテ、掻澄テゾ有ラム」ト思フニ、糸稔ハヽシクテ、有ツル所ニテ只今見ツル同僚共モ皆有リ。奇異クテ奥ニ入タレバ、主モ有リ。「夢カ」ト思エテ□テ立レバ、人々ノ云ク、「穴珍シ。参河ノ御許ハ坐ケルハ。何ド久クハ参リ給ハザリツルゾ。□給ツル殿ニハ院ノ勘当被免給タレバ、我レニモ告申シニ人遣タリシカバ、『此ノ二三日ハ、殿ヘ、トテ不御ズ』ト、隣ノ人ノ云ケル」トテ、返来タレバ、何コニ坐ツルゾ」ナド云合タレバ、女、糸奇異ク怖シク思テ、有ノマヽニ「然々」トワナヽキ周タル気色ニテ云フヲ、家ノ内ノ者共、主ヨリ始メテ恐合ケルニ、咲フ者モ有ケリ。女ハ我ガ子ヲ置テ来ヌルヲ、「今ハ無キ者ゾ」ト思エテ、物モ思エデ、「然ハ、人ヲ遣ハシテ見セサセ給ヘ」ト云ケレバ、人ヲ数具シテ遣タリケレバ、女行テ、有ツル所ヲ見ケレバ、遥々ト有ル野ニ、草糸高ク生タリ。人ノ形無シ。胸塞ガリテ忩テ子ヲ求ケレバ、其ノ子只独リ荻薄ノ滋タル中ニ居テ哭ケレバ、母喜乍ラ子ヲバ抱キ取テ、本ノ木幡ニ返テ「然々有ツ」ト語ケレバ、主モ此レヲ聞テ、「汝ガ虚言也」トゾ云ケル。同僚共モ糸々奇テゾ有ケル。然レドモ幼キ子ヲ野ノ中ニ将行テ棄置タラヤハ。此レヲ思フニ、狐ナドノ所為ニコソ有メレ。然ルニテコソ子ヲ不失ザリケル事、トナム、万ノ人挙テ問ヒ喤ケル。此ク奇異キ事ナム有ケル、トナム語リ伝ヘタルトヤ。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 8 | 『今昔物語集』巻27-38「狐変女形値播磨安高語第三十八」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注、訳『今昔物語集』④、新編日本古典文学全集38、2008年12月24日第一版第三刷発行、pp.118-121 | 平安時代 | ●今昔、幡磨ノ安高ト云フ近衛舎人有ケリ。（中略）九月ノ中ノ十日許ノ程ナレバ、月極ク明キニ、夜打深更テ、宴ノ松原ノ程ニ、濃キ打タル袙ニ、紫菀色ノ綾ノ袙重ネテ着タル女ノ童ノ、前ニ行ク様体頭ツキ云ハム方無ク月影ニ□テ微妙シ。（中略）安高、近ク寄テ触這ニ、薫ノ香極ク聞ユ。（中略）安高ガ思フ様、「豊楽院ノ内ニハ人謀ル狐有ト聞クゾ。若シ、此レハ然ニモヤ有ラム。此奴恐シテ試ム。顔ヲツフト不見セヌガ怪キニ」ト思テ、安高女ノ袖ヲ引ヘテ、「此ニ暫シ居給ヘレ。聞ユベキ事有リ」ト云ヘバ、女扇ヲ以テ顔ニ指隠シテカヽヤクヲ、安高、「実ニハ我レハ引剥ゾ。シヤ衣剥テム」ト云フマヽニ、紐ヲ解テ引褊ギテ、八寸許ノ刀ノ凍ノ様ナルヲ抜テ、女ニ指宛テ、「シヤ吭掻切テム」ト、「其ノ衣奉レ」ト云テ、髪ヲ取テ柱ニ押付テ、刀ヲ頸ニ指宛ツル時ニ、女艶ズ皃キ尿ヲ前ニ散ト馳懸ク。其ノ時ニ、安高驚テ免ス際ニ、女忽ニ狐ニ成テ、門ヨリ走リ出デヽ、コウくト鳴テ、大宮登ニ逃テ去ヌ。安高此レヲ見テ、「『若シ人ニヤ有ラム』ト思テコソ不殺ザリツルニ、此ク知タラマシカバ、必ズ殺テマシ」ト、妬ク悔シク思エケレドモ、甲斐無クテ止ニケリ。其後安高、夜中暁ト不云ズ、内通リニ行ケレドモ、狐懲ニケルニヤ、更ニ不値ザリケリ。狐微妙キ女ト変ジテ、安高ヲ□サムト為ル程ニ、希有ノ死ヲ不為ズシテナム有ケル。然レバ、人遠カラム野ナムドニテ独リ間ニ、吉キ女ナドノ見エムヲバ、広量ジテ不触這マジキ事也。此レモ安高ガ心バヘノ有テ、女ニ強ニ不耽ズシテ不被□ヌ也、トナム語リ伝ヘタルトヤ。 |
| 9 | 『今昔物語集』巻27-39「狐変人妻形来家語第三十九」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注、訳『今昔物語集』④、新編日本古典文学全集38、2008年12月24日第一版第三刷発行、pp.121-123 | 平安時代 | ●今昔、京ニ有ケル雑色男ノ妻、夕暮方ニ暗ク成ル程ニ、要事有テ、大路ニ出タリケルガ、良久ク返リ来ザリケレバ、夫、「何ド遅ハ来ナラム」ト怪ク思テ居タリケル程ニ、妻入来タリ。然テ暫許有ル程ニ、亦同顔ニシテ有様露許モ違タル所モ無キ妻入来タリ。夫、此レヲ見ルニ、奇異キ事無限シ。「何ニマレ、一人ハ狐ナドニコソハ有ラメ」ト思ヘドモ、何レヲ実ノ妻ト云フ事ヲ知ラネバ、思ヒ廻スニ、「後ニ入来タル妻コソ定メテ狐ニテハ有ラメ」ト思テ、男、大刀ヲ抜テ、後ニ入来タリツル妻ニ走リ懸リテ切ラムト為レバ、其ノ妻、「此ハ何カニ、我レヲバ此ハ為ルゾ」ト云テ泣ケバ、亦前ニ入来タリツル妻ヲ切ラムトテ走懸レバ、其レモ亦手ヲ摺テ泣キ迷フ。然レバ、男、思ヒ繚テ此彼騒グ程ニ、尚前ニ入来タリツル妻ノ怪ク思エケレバ、其レヲ捕ヘテ居タル程ニ、其ノ妻奇異ク皃キ尿ヲ散ト馳懸タリケレバ、夫、皃サニ不堪ズシテ打免タリケル際ニ、其ノ妻忽ニ狐ニ成テ、戸ノ開タリケルヨリ大路ニ走リ出テ、コウくト鳴テ逃去ニケリ。其ノ時ニ、男妬ク悔シク思ケレドモ、更ニ甲斐無シ。此レヲ思フニ、思量モ無カリケル男也カシ。暫ク思ヒ廻シテ、二人ノ妻ヲ捕ヘテ縛リ付テ置タラマシカバ、終ニハ顕レナマシ。糸口惜ク逃シタル也。郷ノ人共モ来集テ見喤ケル。狐モ益無キ態カナ。希有ノ命ヲ生テゾ逃ニケル。妻ノ大路ニ有ケルヲ見テ、狐ノ其ノ妻ノ形ト変ジテ謀タリケル也。然レバ、此様ノ事ノ有ラムニハ、心ヲ静メテ可思廻キ也。希有ニ実ノ妻ヲ不殺ザリケル事コソ賢ケレ、トゾ人云ケル、トナム語リ伝ヘタルトヤ。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 10 | 『今昔物語集』巻27－41「高陽川狐、變女乗馬尻語第四十一」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注、訳『今昔物語集』④、新編日本古典文学全集38、2008年12月24日第一版第三刷発行、pp.126-132 | 平安時代 | ●今昔、仁和寺ノ東ニ高陽川ト云フ川有リ。其ノ川ノ辺ニ、夕暮方ニ成レバ、若キ女ノ童ノ見目穢気無キ立リケルニ、馬ニ乗テ京ノ方ヘ過ル人有レバ、其ノ女ノ童、「其ノ馬ノ尻ニ乗テ京ヘ罷ラム」ト云ケレバ、馬ニ乗タル人、「乗レ」ト云テ乗セタリケルニ、四五町許馬ノ尻ニ乗テ行ケルガ、俄ニ馬ヨリ踊リ落テ逃テ行ケルヲ追ケレバ、狐ニ成テコウコウト鳴テ走リ去ニケリ。（中略）即チ打返テ京ノ方ヘ来ルニ、女ノ童立リ。打過ルヲ見テ、童、「其ノ御馬ノ尻ニ乗セ給ヘ」ト打咲テ（中略）其ノ時ニ、女童、狐ニ成テコウくト鳴テ逃ヌ。滝口共ノ立並タリツルモ皆掻消ツ様ニ失ヌ。火モ打消ツレバ、ツヽ暗ニ成ヌ。滝口、手迷ヲシテ従者共ヲ呼ブニ、従者一人モ無シ。見廻セバ何クトモ思エヌ野中ニテ有リ。心迷ヒ肝騒テ、怖シキ事無限シ。（中略）「早ウ、西ノ大宮ヨリ打廻ルト思ツルハ、此ヘ来ニケル也ケリ。一条ニ火燃テ値タリツルモ、狐ノ□ケル也ケリ」ト思テ、然リトテ有ルベキ事ニ非ネバ、歩ニテ漸ク返ケル程ニ、夜半許ニゾ家ニ返タリケル。次ノ日ハ、心地モ乱レテ死タル様ニテゾ臥タリケル。滝口共ハ、其ノ夜待ケルニ見エザリケレバ、「何主ノ、『高陽川ノ狐搦メム』ト云シハ、何ニ」ナド、口々ニ云咲テ、使ヲ遣テ呼ケレバ、三日ト云フ夕方、吉ク病タル者ノ気色ニテ本所ニ行タリケレバ、滝口共、「一夜ノ狐ハ何ニ」ナド云ケレバ、此ノ滝口、「一夜ハ堪ヘ難キ病ノ罷発テ候ヒシカバ、否不罷ズ候ヒキ。然ハ、今夜罷テ試候ハム」ト云ケレバ、滝口共、「此ノ度ハ二ツヲ搦メヨ」ナドゾ嘲ケレドモ、此ノ滝口言少ニテ出ニケリ。心ノ内ニ思ケル様、「初被謀タレバ、今夜ハ狐、ヨモ不出来ジ。若シ出来タラバ、終夜也トモ、身ヲ放タバコソ逃サメ。若シ、不出来ズハ、永ク本所ヘ不指出ズシテ籠居ナム」ト思テ、今夜ハ強ナル従者共数ヲ具シテ、馬ニ乗テ、高陽川ニ行ニケリ。（中略）此レヲ思フニ、狐ハ人ノ形ト変ズル事ハ昔ヨリ常ノ事也。然レドモ此レハ掲焉ク謀テ、鳥部野マデモ将行タル也。然ルニテハ何ド後ノ度ハ、車モ無ク道モ不違ザリケルニカ。人ノ心ニ依テ翔ナメリトゾ人疑ヒケルトナム語リ伝ヘタルトヤ。 |
| 11 | 『古事談』巻1-1 | 源顕兼［他］著『古事談』、古典籍、国立国会図書館デジタルコレクション、コマ番号３ | 鎌倉時代 | ●称徳天皇道鏡之陰猶不足ニ被思食テ以薯蕷作陰形令用之給之間折籠云々仍腫塞及大事之時小手尼(百済国医師其手如嬰児)奉見云帝疾可癒手塗油欲取之爰右中弁百川霊狐也ト云テ抜劒切尼肩云々仍無療帝崩 |
| 12 | 『宇治拾遺物語』巻3-20「狐家に火つくる事」 | 小林保治、増古和子校注、訳『宇治拾遺物語』、新編日本古典文学全集50、小学館、2008年12月24日第一版第五刷発行、pp.144-145 | 鎌倉時代 | ●今は昔、甲斐国に館の侍なりける者の、夕暮れに館を出でて家ざまに行きけるに、道に、狐のあひたりけるを追ひかけて引目して射ければ、狐の腰に射当ててけり。狐、射まろばかされて、鳴きわびて、腰をひきつつ草に入りにけり。この男、引目を取りて行くほどに、この狐、腰をひきて先に立ちて行くに、また射んとすれば失せにけり。家いま四五町とて見えて行くほどに、この狐二町ばかり先だちて、火をくはへて走りければ、「火をくはへて走るはいかなる事ぞ」とて、馬をも走らせけれども、家のもとに走り寄りて、人になりて火を家につけてけり。「人のつくるにこそありけれ」とて、矢をはげて走らせけれども、つけ果ててければ、狐になりて草の中に走り入りて失せにけり。さて家焼けにけり。かかるものも、たちまちに仇を報ふなり。これを聞きて、かやうのものをば構へて調ずまじきなり。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 13 | 『古今著聞集』巻17－606「大納言泰通、狐狩を催さんとするに、老狐夢枕に立つ事」 | 橘成季撰・西尾光一、小林保治校注『古今著聞集』下、新潮日本古典集成第76回、新潮社、1986年、p.293-296 | 鎌倉時代 | ●大納言泰通の五條坊門高倉の亭は、父侍従の大納言の家にて、ふるき所なり。あひつぎてすまれけるほどに、狐おほく、つねにばけゝり。されども、ことなる事などしいだしたる事もなければ、さてすぎられけるに、としをへてますますにばけけるほどに、大納言いかり給ひて、「狐がりをして、たねをたちてん」と思ひて、侍どもにみなその様を仰てけり。あす下人どもあまた具して、独りももれずみな参るべし、面々に杖また弓矢など用意すべきよしおほせつ。あす四方をよくかためて、築地の上、屋のうへに人をたて、また天井のうへに人をいれて、みなかりいだして、いでん所を打ち殺し、射殺さん、とさだめてけり。<br>さるほどに、そのあかつきがたに、大納言の夢に見給ふやう、年たけ、しらがしろき大童子の木賊の狩衣きたる一人、西向のつぼの柑子の木のもとにかしこまりてゐたり…おそれおそれ申しけるは、「これは年比この殿の御内に候ふものなり。われ二代まであひ続きて候ふほどに、子ども孫などあまた出きて候。おのづから狼藉を振舞候ふ事など、心のおよび候ふほどは制止仕り候へども、もちゐ候はぬによりて、（中略）あやまりて御まもりとなり候ひて、今より後は、御内の御吉事などをばかならず告げしめまゐらすべく候」といひて、かしこまりゐたると見るほどに、夢さめぬ。<br>夜もあけて、しらじらとなりにければ、大納言をき給ひて、はしの遣戸あけて見いだされければ、夢にこの大童子がゐたると見つる木のもとに老狐の毛もなきが一匹あり。大納言をみたてまつりて、おそれたる体にて、やをら簀子の下へ入りにけり。ふしぎにおぼえて、その日の狐がりはとどめてけり。そののちは、ばけ物ながくなくなりぬ。家中に吉事あらんとては、必ず狐鳴きて告げければ、かねて思ひ知りけるとぞ。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 14 | 御伽草子『木幡狐』 | 市古貞次校注『御伽草子』、日本古典文学大系38、岩波書店、昭和33年、pp. 148-160 | 室町時代 | ●中ころの事にや有けん山城國、木幡の里に年をへて、久しき狐あり。稲荷の明神の、御使者たるによつて、何事も心にまかせずといふ事なし。殊には男子女子、そのかず數多もち給ふ。（中略）中にも弟姫に、あたらせ給ふは、きしゆ御前とぞ申（し）ける。いづれよりも殊にすぐれて、容顔美麗にうつくしく（中略）ころは、三月下旬のこと成（る）に、花園に立ち出給ひ、散りなん花を御覧じて、業平のけふのこよひにと、詠みけるも、かゝる折にやとながめ給ふ。折ふしかのきしゆ御前、稲荷の山より見おろして、うつくしの中將殿や、われ人間と生れなば、かゝる人にこそ逢ひ馴るべきに、いかなる戒行によりて、かやうの身とは生れけるぞや、あさましさよと思ひけるが、よしくひとまづ人間のかたちと化け、一旦の契をも、結びさふらはではとおぼしめし、めのとの少納言を近づけて、「いかに聞き給へ。われ思ふ子細あり、いざや都に上りさふらふべし。（中略）めのとゝおぼしき女房に、「これはいづくよりいづかたへ通らせ給ふ人やらん」と御尋ねさせ給ふ。めのとうれしくて申（し）けるやうは、「これはさる人の姫君にてましますが、（中略）道踏み迷ひて、是まで參りて候が、はゞかりおほく候へども、一夜の御宿を仰せ付られ候（う）て、たび給へ」と、さもありくと申（し）ければ、中將うれしくおぼしめし（中略）その後、をのくやすみたまへば、いとゞ中將殿あこがれさせ給へば、姫君の御枕に寄り添ひて、（中略）もとより姫は、たくみたることなれば、うれしさ限りなし。さりながら、いとはづかしげなる風情して、うちなびくけしきもなくて居給ひけり。夜もやうく更ければ、鴛鴦の、衾の下にたはぶれけれ。たがひに御心ざし淺からず、生きては偕老の契と思しめし、（中略）かくて思ふ事なくて、月日ををくり給ふ程に、若君三歳にならせ給ふ程に、御内の人々も、此若君の御機嫌、能やうにとたしなみ、いろく御もてなし、御あそびものなどたてまつる。ある時中將殿の御めのと、中務のもとよりとて、世にたぐひなき一物とてうつくしき犬を進上いたしけり。少納言此由を聞きて、身の毛もよだつばかりにて、急ぎ姫君の御前に參りて（し）けるは、「不思議の御大事出來さふらふぞや。この犬、かくてさふらはずは、大事これに過ぎ候はず」とて、涙にむせぶばかりなり。姫君きこしめし、「まことに、これこそ限りなれ。この内出づるよりほかのことあらじ。中將殿、若君の御名残いかがすべき。」とて、涙せきあへず、ややありて仰せけるは、「たとへ千年万年を経るとも、名残は尽くることあらじ。隙をうかがひ立ち出で、これを菩提の種として、世を厭いなんことは、いとやすきことなれども、中將殿、さこそは嘆かせ給はずらめ。若君の名残、かへすがへすも悲しいけれども、是非かなはぬことなれば。」とて、涙にむせび給ひけり。（中略）少納言もろとろに、都を出で（中略）やうく行く程に、古塚にこそ著きにけり。「きしゆ御前の歸らせ給ふ」と、はした狐の言ひければ、父母聞（き）もあへず、こはいかにとて、駈け出で（中略）さまをかへさせ、菩提の道に入らんと、案じ、また木幡の塚を立ち出でゝ、嵯峨野の方へ分け入（り）て、庵室を結び、みどりの髪を剃りおとし、この世はかりの宿、電光朝露、夢幻のことなれば、今此時、生死輪廻をまぬがれ、未來は必ず一つ蓮の臺に生れんと、願はれけり。（中略）さるほどに、かの庵室には、きしゆ御前、都の事のみ恋しくて過し給ふ。さりながら、若君の御栄へ、よそながら見給ひて、嬉しさ限りなし。（中略）かゝる畜類だにも後生菩提の道を願ふならひなり。いはんや人間としてなどか此道を歎かざらんやかやうにやさしき事なれば、書き傳へ申（す）なりく |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 15 | 御伽草子『玉水物語』 | 塚本哲三編輯『御伽草紙』、有朋堂文庫、大正7年、pp.573-592 | 室町時代 | ●中比の事にや有りけん（中略）折節此花園に狐一つ侍りしが、姫君を見奉り、あな美しの御姿や、せめて時々もか々る御有様を、餘所にても見奉らばやと思ひて、木陰に立隠れて、静心なく思ひ奉りけるこそ浅ましけれ。（中略）朝夕歎くを便りにて年十四五の容鮮かなる女に化けて、彼の家に行き、我は西の京の辺に在りし者なり、無縁の身となり頼む方なき儘に、足に任せて是れまで迷ひ出でぬれど、行くべき方も覺えねば頼み奉らむといふ。主の女房打見て、痛はしや尋常人ならぬ御姿にて、如何にして是まで迷ひ出でけん、同じくは我を親と思ひ給へ、男は數多候へども女子を持たねば朝夕ほしきにといふ。さやうの事こそ嬉しけれ、何處を指して行くべき方も侍らずといへば、斜ならず喜びて、愛しみ置き奉る。（中略）斯く語らふ所に、彼の者來りければ、此の由を語れば、其様をこそ申さめとて、立ち歸り御乳母に伺へば、「さらば唯やがて參らせよ。」と宣ふ。悦びて引装ひ參りぬ。見様容貌美しかりければ、姫君も悦ばせ給ひて、名をば玉水の前と付け給ふ。何彼につけても優にやさしき風情して、姫君の御遊び、御側に朝夕馴れ仕うまつり、御手水參らせ供御參らせ、月さえと同じく御衣の下に臥し、立去る事なく候ひける。御庭に犬などい參りけれぱ、此の人顔の色違ひ、身の毛一つ立になるやうにて、物も食ひ得ず、けしからぬ風情なれば、御心苦しく思されて、御所中に犬を置かせ給はず。（中略）玉水、理なれどしゆしやうむしやくしやう化城品と名付けたり、然りながら、業に引かれて、六道に迷ふ罪によりて、元の三途に歸る事、身より出せる焔なり、我等畜類なり、未だ業因盛んなり、然りと云へども、善根をもせば、など今度人體を受けざるべき、又人體は佛の骸なり、心違はずば、などかこんど佛にならざるべき、幾程あらぬ世の中に、一旦の念に引かれて、忽ちに此病者を失ひ給はば、彼の罪と言ひ、又多くの人の歎きを受け給ひなむ、何事も報いのものなれば、さあらば猟師の手にも掛り給ふか、然らずは三途に歸り給はむ事のはかなさよ、唯然るべくは立退きて助け給へ。」と言へば（中略）御内參りも近づく儘に、玉水熟々と思ふやう、われ畜類と言ひながら、近づき參りて契り奉らん事は痛はしさに、只斯くながら見奉り添ひ奉るに、心を慰めつる事のはかなさよ、姫君の御耳へは聞かせ參らせばやと思へども、今まで知らせ奉らで思ひの外に恐ろしとや思されん、とても御内參りあらば其の時こそ紛れ失せめ、わが化けたりし姿を、今まで見つけられざりつるこそ不思議なれと思ひ廻らして、風の心地とて我が住む局に閉ぢ籠り、初めより思ひ染め奉りし我が有様、今までの事を書き集め、小き箱に入れて姫君にもて參り、何とやらん此の頃は世の中味氣なく仇なる物と、思ひ知られて物憂く侍れば、もし夜の間にも消え失せ侍る事もやと覺えて此の箱を奉る。我いか様にも成りなん後此の箱を御覽ぜよ。と申して（中略）此の箱を受取り給ひて、互に涙に咽び給ふ。月さえも參り人々忙はしげなれば、紛らかしつゝ立ち去りぬ。姫君さらぬ様にて、此の箱を引隠し給ひけり。（中略）よき暇と思召し、忍びて開けて御覽ずれぱ、始めより終りの事を書き付けたり。こは如何になる事ぞと、御胸打騒ぎ、恐ろしくも哀れにも思しけり。我故かやうに化けたりしを、遂に色にも出さで過ぎし事の、畜類ながら無慙さよ、覺えの志を見せつゝせし事の哀れさよ、難有き心かなと、思召し續けて打涙ぐみつゝ御覽ずれば、此の巻物の奥に長歌をぞ書き付けける。（以下略） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 16 | 御伽草子『玉藻の草子』 | 京都大学附属図書館所蔵 ［玉藻の前（冊子体）］ 古典籍。あらすじはhttp://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/otogi/tamamo/tamamo.htmlを参照 | 室町時代 | ●（あらすじ：近衛院の御代、久寿二（1155）年ころ、鳥羽院の御所に一人の下女が仕えていました。後に人々からは、玉藻の前と呼ばれるようになるのですが、天下一の美女、国一番の賢女でした。不思議なことに、玉藻の前の体からは自然によい香りが漂い、一日中美しい装いをしていました。そんなわけですから院のご寵愛も並々ではなく、院の御所の人々も皆，玉藻の前に夢中でした。しかも玉藻の前は美しいだけではなく、大変な博識でもありました。年の頃はわずか二十歳くらいに見えるのですが、知らないことがないのです。何を尋ねても、にっこりと微笑みながら、わかりやすい言葉で答えます。あまりの不思議さに、院が、玉藻の前を試してみようと、難しい仏教の教えについて質問してみました。すると、彼女は、昔の偉いお坊さんたちが書物に説いておられるとおりに答えました。院をはじめ御所中の人々は、これを聞いて驚きました。（中略）院は少しそら怖ろしく思いながらも、玉藻の前の美しさにひかれて、深い契りを結びました。ところが、院は突然病気になってしまい、原因もわからぬまま、日に日に病は重くなっていきました。（中略）困った公卿たちがさらに詳しく尋ねると、何と玉藻の前の正体は、下野国那須野に住む百歳の狐だというのです。その狐は、丈は七尋（ななひろ）尾が二本。美女に化け、国王に近付いてその命を縮め、国を奪おうという魂胆なのです。（中略）さて当日、いつも以上に着飾った玉藻の前は、祭文が読み上げられる途中、さっと幣を振ったかと思うと、急に姿を消してしまいました。やはり泰成が見抜いたとおり、正体は狐だったのです。（中略）すると、少しうたた寝した三浦介の夢に、二十歳ぐらいの美しい女性が現われ、「明日あなたに命を奪われるのが恨めしい、どうぞ助けてください」と、泣きながら頼むのです。夢の中できっぱり拒否した三浦介は、目が覚めると一族郎党を招集し、今日こそ射止めんと駆け出しました。（中略）三浦介は馬に鞭を当てて狐に近寄り、矢を放ちました。矢はみごと狐に命中し、狐はもんどりうって倒れました。「やったぞ！」と馬を下りて近付いてみると、噂以上のしろものです。（以下略） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 17 | 説経節『信太妻』 | 荒木繁・山本吉左右編注『説経節 山椒太夫・小栗判官他』、東洋文庫243、1988年12月20日初版第16刷発行、pp. 275-303 | 江戸時代 | ●（前略）狐夫婦、子を引き連れ、勢、はずんで、通りしが、二匹の、親は逃げのび、後なる、子狐、あまりせつなく、保名が、幕の内へぞ、逃げ入りける。保名、もとより、慈悲深く、「さてさて、不便や。畜類なれども、せつなきゆゑ、助けてくれよと、言はぬばかり。ええむざんや、それ助けよ」と言ふところへ（中略）さて保名は、くだんの野干を取り出だし、「さぞ親どもが、嘆くらん。それそれ」と、放されける。（中略）和尚聞こしめし、「もっとも至極いたしぬれども、出家たらん者が、たとへ、鳥類、畜類なりとも、わが身に代へても、命を救うが、出家の作法なり。たとへ申し受けたりとも、男は立てさせ申すまじ。すなはち、ここにて衣を着せ、愚僧が弟子につかまつらん。（オスフシ）ひらにひらに」と申さるる。つね平、今は是非なく、「和尚、さやうに、のたまふを、いかで、否とは申さるべき。それそれ、囚人を、和尚様へ渡し申せ」。かしこまつて、相渡す。（中略）その後、保名が、縛め切りほどき、「われわれこそ、まことの人間にあらず。御身思はぬ、難に合ひ給ふも、みなわれわれがゆゑなれば、せめて、難儀を、救はんため、姿を変じて、謀り申したり。最前の命の恩、（イロオン）いつの世にかは、送るべき。ただ何事も、時節到来」と、言うかと思えば、たちまち、形を変じて、野干となり、行きがた知らず失せにけり。保名は、とかく呆れはて、しばしたたずみ、いたりけり。「ええ、（フシユリ）心なき畜類も、情けの道を忘れず、命の恩を、送りたるありさま、げに人間にまさりたり」とて、みな感ぜぬものこそなかりけれ。<br>（中略）下るところに、賤の女とうち見えて、二八ばかりの女房の、いとやさしげなるよそほひにて（中略）さればにや女房、世の常の人ならず、信太の、野干なりしが、保名に命助けられ、その報恩のため、人界に交わり、はや七年になりにける。（中略）この女房、庭前なる、籬の菊に、心を寄せしが、咲き乱れたる、色香に賞でて、（イロ）ながめ入り、仮りの姿をうち忘れ、あらぬ形と、変じつつ、（フシユリ）しばし時をぞ移しける。折ふし、童子は、うたた寝してゐたりしが、目を覚まし、母の後ろに来たりしが、顔ばせを見るよりも、「やれ恐ろしや」と、おめき叫んで嘆きける。（中略）「これぞ縁の尽きばなり。あの体ならば、父上にも語るべし。せめて、あの子が十歳になるまで、見育てたく思へども、力及ばぬ次第なり。本の棲処へ帰るべし。（イロ）ああさてかなはぬ、うき世や」と、しばし涙を流しける。さるにても、夫の保名、帰らせ給ふを待ち受け、よそながらなりとも、暇乞いとは存ずれど、いやいや、ただ御留守に立ち去り、跡を見せぬにしくはなしと、思ひ立つこそあはれなれ。<br>（中略）「恥づかしながら、みずからは、信太の、森に棲む、野干なり。君に命を、助けられ、その報恩を、送らんため、かりそめながら、縁の結び、はや七年を、送る身の、常ならぬ姿をば、幼き者に、見つけられ、もはや君にも、いかで、見見え参らせん（顔を合わせることができるでしょうか）と、思う心を、一筋に、立ち出で申すこと、心かなしと思さん。世のありさまを、人の知らねばと、詠みおきし、言の葉に、まかせ、おしはかり給うべし。かえすがへすも、幼き者、よきに、守り育て、わが畜生の、苦しみを、助けさせたび給へ」。（以下略） |
| 18 | 『本朝食鑑』巻11「狐」 | 丹岳野必大千里著『本朝食鑑』、平野氏傳左衛門・平野屋勝左衛門、元禄10年（1697年）、古典籍、国立国会図書館デジタルコレクション、12巻[11]、コマ番号23-24 | 江戸時代 | ●或曰狐化作女人與人通，則其人死。若其不死，則狐反死。然於理未詳。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 19 | 『老媼茶話』36「狐」 | 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫 / 博文館編輯局校訂 第47編、博文館、1903年、pp. 367-368 | 江戸時代 | ●加藤明成の侍川井勘十郎とふ者。（中略）中野の十文字原の藪陰に古狐前後も不知寝て居たりける。勘十郎見付鉄砲へ紙玉を込筒拂に狐の耳元にて鉄砲と打放す。狐思ひがけざる事にて大に肝をつぶし。（中略）其夜八ッ時分門けはしくたたき高提灯箱提灯おびただしく燈立。月番添番の物頭目付誰々と名乗。（中略）何も座敷へは入る。中にも其時の目付役伊東権平添番の目付片山弥平次両人進み出申様。（中略）早速腹切らせ候様にと被仰付。（中略）既に十分危き折柄。勘十郎家にしゝ狼迄能取名犬二疋有りけるが。無二無三に表より座敷へ飛込先弥平次が首骨にくらひ懸り首と胴中をくはへ喰殺し庭へふり捨て。猶残りの供者へ吠懸る。今迄物頭目付役とて立派に見えし侍供。大きにあわて騒ぎ即ち狐となって十方を失ひ出方に迷ひ十字八点に逃げ（中略）二疋の犬勇み進んで喰殺しかみ殺す間。（中略）狐十二三疋打ち殺す。是れにてこそ晝おどかされし狐の所為なりと知られし。 |
| 20 | 『新著聞集』巻17-1「鈍狐害をかふむる」 | 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫 / 博文館編輯局校訂 第47編、博文館、1903年、pp. 236-237 | 江戸時代 | ●筑前福岡の城下より一里あまり過きて。岡崎村に馬乗の高橋弥左衛といふ者あり。（中略）いかで早く帰りたまふと妻のとひしに。されは道今すこしになりて。かの方より用も足れりとてとめ侍りし。余りにつかれたるとて閨に入り。供の僕は物くふて臥せりぬ。此家に年おいたる婆ありけるが。妻の袖をひき。主人常は右の目盲たまへるに。只今は左の目盲たるこそいぶかしと告げれは。妻おどろき。さらは少し見んとて。（中略）みれは左の目盲たり。さては疑もなき妖ものなりしかば。（中略）姥は後よりたゝ見かけ打ければ。こんくくわいくと鳴し所を。つき殺しける。又家来の者共は供の狐をたゝき殺しけり。未熟の狐にや。妖損しけるこそおかしかりし。 |
| 21 | 『三州奇談』巻1-10「中代の若狐」 | 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫 / 博文館編輯局校訂 第47編、博文館、1903年、pp. 668-670 | 江戸時代 | ●大聖寺宝暦辰の大火後。（中略）火出ざることこそ。跡にて思ひ廻せば怪しけれ。かゝる所へ飛脚體の人と見えて二人連。…主人は黒羽織。下人は紺色なる単物を着て。先に行程に。（中略）心を付て窺ふに。灯も人も怪しく覚えける。実にも飛脚の此奥へ通ぶべき理にもあらず。狐などの所為にもやと能ゝ見れば。主人はいかにも化けをふせたりと覚えて。笠の着ぶり。羽織りの體。人ともみえけるが。下人は嘗て人とは見えず。時ありて大きなる尾を折々ひよろくと見えけるにぞ。（中略）下手なる化様ぞ。（中略）此後中代畷手狐の人をたぶらかすことはやみぬ。狐だも化そんじたるを恥かしく思ふこと深きにやと沙汰せり。人として爰にては方便の顕れ。彼處にてもうその尾はげても。猶厚顔に世を渡る。せめて此野狐程にも恥を知れとぞ思ふ。 |
| 22 | 『三州奇談』巻2-5「狐知誤字」 | 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫 / 博文館編輯局校訂 第47編、博文館、1903年、pp. 704-707 | 江戸時代 | ●小松泥町西照寺と云ふ門徒寺あり。今の先に住持を傳入と云ふ。（中略）高坂には国初より人をたぶらかす野干ありて。高坂狐とて人も知たる所なり。（中略）此程葬してける大島の何某の亡者にまぎるべきものなかりけるに。住持何故に来たぞと尋ねられければ。亡者かすかなる声にて。我は則ち大島の何某が幽霊にて候。法名の文字一字書違侍るがまよひとなりて。浮みがたく候。則法名の紙も取参り候なり。是を御覧して書直しあたへ給はるべしと云ふ。（中略）彼亡者の腕首を丁と握られけるに。（中略）聞ゆる大力に。丁と握られたれば。詮方なくて後には大いなる狐となりて涙をこぼし。のがれ帰るべきことを願ひければ。住持初めて寺中の人々を呼起し、庭に下り居させて。（中略）此剛気にや恐れけん。再び怪異はなかりける。（以下略） |
| 23 | 『三州奇談後編』巻3-1「七窪の禅狐」 | 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫 / 博文館編輯局校訂 第47編、博文館、1903年、pp. 901-903 | 江戸時代 | ●七窪と云ふは海邊ながら地高うして畷七つに下り上りありて高松に續く。（中略）安永初めの年。希有なる狐妖あり。（中略）能登の惣持寺へ行く僧の多き時なりし。一人の禅僧此七窪の砂道に行倦て松の古木に打もたれて一睡を快くせしに。…傍らを見れば一僧あり。（中略）関東僧弥怒て法も受けず師もなきもなき者ならば。犬に劣れる類の者ぞと云ふに。此僧又きよろくと四方を見る。関東僧寝ながら片足を松にかけて小便をみだりに放しけるに。（中略）クハイくと鳴きて三間許り飛で四足の形と変じ。小松隠れに逃失せける。（中略）其中に境の永光寺の僧ありて申されけるは。夫こそは此野邊に年経る黄蔵主と云ふ黄狐ならん。（以下略） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 24 | 『耳袋』巻3「狐猟師を欺きし事」 | 根岸鎮衛著、鈴木棠三編注『耳袋』1、東洋文庫207、平凡社、1972年、p. 228 | 江戸時代 | ●遠州のあたりにて、狐っを釣りてすぎわいをなせし者ありしが、明和のころ、御中陰の事ありて鳴り者停止なりしに、商売の事なればかの者狐を釣り居けるに、一人の役人来りて、以てのほかに憤り、「公儀御禁じの折から、かゝる業なせる事の不届きなり」とて厳重に叱り、右わななどをも取上げけるゆえ、華の者大きに驚き恐れ、しなぐ詫び言せしが、なにぶん合点せざるゆえ、酒代とて銭弐百文さしいだし嘆き詫びけるゆえ（中略）猟師つくぐ思いけるは、このあたりへ来るべき役人とは思われず、酒代など取りて帰りし始末あやしく思いて、かの者が行くえ見えざるころにいたりて又又罠を仕掛け、その身ははるかに脇なる所に忍びてうかがいしに、夜明けに至りてはたして狐を一つ釣り獲しに、縄にて帯をして、宵に与えし銭を右帯に鋏み居しを、遠州にてもっぱら話す由。（以下略） |
| 25 | 『耳袋』巻4「人間に交わる狐の事」 | 根岸鎮衛著、鈴木棠三編注『耳袋』1、東洋文庫207、平凡社、1972年、pp. 268-269 | 江戸時代 | ●丹波の国、処は忘れしが富家の百姓ありしが、数年その家にある翁の、山の岨に穴居して、衣服なども人間の通り、食事も又しかなり。年久しく仕えして幼児を介抱などし、農事家事ども手伝い、古き話などする事はさらに人間とは思われず。されども年久しくありければ、家内老少ともこれを重宝して怪しみ恐るる者もなし。（中略）かの翁別れを告ぐる時、「もし恋いしくも思い給わば、上京の節、藤の森にて、おじいと呼び給うべし。必ず出でて対面せん」といいしゆえ、初めて狐なる事を知りて、藤の森に到り、うらの山へ行きて「おじい」と呼ばりしかば、かの翁忽然と出で来りて、安否をたずね四方山の物語し、立別れける時、「御身の知遇忘れがたければ、この上、家の吉凶を前広に（あらかじめ）告げん。狐の声三声ずつ御身の吉事凶事につき鳴けば、その慎しみその心得あるべき」と言いて立ち別れしが、果たしてそのしるしの通りなりし由。 |
| 26 | 『耳袋』巻4「美濃国弥次郎狐の事」 | 根岸鎮衛著、鈴木棠三編注『耳袋』1、東洋文庫207、平凡社、1972年、pp. 285-286 | 江戸時代 | ●美濃国に弥次郎狐とて年を経し老獣ある由。郡村寺号ともに忘れたり。右老狐出家に化して、折節古き事を語りけるが、紫野の一休和尚の事を常に話しけるは、「一休和尚道徳の盛んなるという事聞き及びて、その様子をためさんと、そのころかの寺の門前に親子住みける婦人、聟をとりしが、親子夫婦合いも穏やかならずして離縁しけるを聞きて、かの女に化けて一休のもとへ来りて、『夫とは離れぬ。母の勘気を受けて詮方なし。今宵はこの寺にとめ給われ』といいければ、一休答えて、『我々門前の者ゆえこれまでは対面もなしぬ。その門前を出でぬれば、若き女を寺にはとめがたし』と断りければ、『出家の御身なれば何かほかの疑いもあるべき。女の闇夜に迷わんを捨て給うは情けなし』と恨みかこちければ、『さあらば台所のすみになりとも、客殿の縁ばなになりとも夜をあかし給え。 座敷内には入れがたし』と申されけるゆえ、その意に任せて宿しけるが、元来道徳を試みんとの心なれば、夜に入りて一休の臥所へ忍び入りて戯れ寄りければ、一休『不届き』の由声をかけ、あり合う扇ようの物にて背を打たれしに、まことに絶入（ぜつにゅう）もすべきほどに身にこたえ苦しかりし。げにも道徳の高き人なり」と、かの老狐語りし由。そのほか古き事など常に語りしが、今も活けるやと人の語りける。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 27 | 『耳袋』巻5「狐痛所を外科に頼みその恩を報ぜし事」 | 根岸鎮衛著、鈴木棠三編注『耳袋』1、東洋文庫207、平凡社、1972年、pp.317-319 | 江戸時代 | ●田安（徳川三郎の一。吉宗の次子宗武が享保十六年、田安門内に邸を与えられたので田安家と称する）の御外科に横尾道益と言える（中略）或時一人の男来りて療治をこいしゆえ、その病を見しに、肩に打ち庇ありければ、すなわち薬を与えけるに日数過ぎて癒えければ、厚く礼をのべて金子二百疋持参せしを、道益断りて（中略）かの男申けるは、「今はなにをかつゝみ侍らん。某は狐なり。江戸市ケ谷茶の木稲荷（中略）の辺りより、はるぐこの所へ使に来たる者なるが、途中にて石瓦を打ちつける者ありて、思わぬ怪我をなしたり。御かげにて快気いたし明日は帰り侍るなり。御身は江戸表へ出府の心願あれど、今まで事とゝのはざりしが、来年来り給う長崎奉行の因縁にて江戸へ出で給うべし。江戸へ出で給わば市ケ谷の何屋の裏に何某といえる者、これはたのもしき者なれば、これへよりて安危をきめ給え」といいて立去りぬ。（中略）いよいよかの稲荷を信じけるに、ほどなく田安へ召出され、今は心安く医業なして有りしが、かの妻、まのあたり狐と物言かわせし事を、予が知る望月氏に語りしと話しぬ。 |
| 28 | 『耳袋』巻5「狐婚媒をなす事」 | 根岸鎮衛著、鈴木棠三編注『耳袋』1、東洋文庫207、平凡社、1972年、pp.376-377 | 江戸時代 | ●（前略）長兵衛といえる者旅商いなどして、鴻巣宿の伊勢屋といえる旅籠屋に心安くなせしが、…かの旅籠屋の娘とふと密通なして、互いに偕老の契りをなし、始終夫婦になるべしと厚くかたらいしが、（中略）長兵衛と道を隔てぬれど娘はかの契りを思い忘れず、人づてをもって頻りに長兵衛方へ申遣わし、千束に余る文の通路なれど、一度いなせの返事もせざれば、かの娘、大きに恨み、かの百姓の山に稲荷の祠ありしに、一日一夜丹誠をこらし祈りて、「かの長兵衛取殺し給わるべし」と肝胆を砕き祈りし由なり。これはさておき長兵衛は、かの女の事も、信州へ引越せしと聞きて、うち忘れ過ぎしに、或日外より帰りける川の辺にて、かの娘に行き合いて、大きに驚き、「いかゞして御関所を越し信濃より来たるや」と、或いは恐れ或いは疑いてたずねければ、かの娘、大きに恨み、「かねての約に違いし」とて胸ぐらを取り怒り歎き、「いずれ夫婦にならん」と申しけるゆえ、まず我が宿へともなわんと、門より内をのぞき見れば、親仁と近所の知る人話して居たるゆえ、ひそかに右近所の人を片影へ呼び寄せ、「しかぐの事なり、今宵は裏のあき部屋になりとも、かの女をさし置くべき間、親仁の前を味よく取計らいくれ候よう」申してかの女をたずねしに見えず。驚きて、又は戸口を出でなどせしが、「こん」と言いて悶絶なせしゆえ、音に驚き家内残らず立ちいで、「湯よ、水よ」と介抱なせしが、いろく口走り、あらぬ事のみ申し散らし、まったく狐の付きたる様子にて、「殊のほか空腹に候間、粥をたべさせ候よう」申すゆえ、粥など与えければ、したゝか喰いて、さて「何故にこの男に付きたるぞ」と、家内近隣の者うち寄りたずねしに、「我らは信州何村の狐なり。しかるにいせ屋何某鴻巣宿に居たりし時、この男かのいせ屋の娘と契りて比翼連理のかたらいをなし、末々は夫婦にならんと約せしに、娘は親に従い信州へ引っ越したれど、文をもってたびく心を通ぜしに、この男一度のいなせもなきゆえ、娘恨み怒りて我が社頭へ丹精をこらし、うき男を取殺しくるべきよし祈りけれど、年若の者にあるまじき事にもあらず、これによりはるぐと下りて女と化して男の心を引き見、又男にのりうつりて、かく語るなり。似合いの縁にもあるなれば、男を信州へ遣し候とも、女子を引取り候とも、縁を取り結びしかるべし」と（以下略） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 29 | 『耳袋』巻9「親友の狐祟りを去り工夫の事」 | 根岸鎮衛著、鈴木棠三編注『耳袋』2、東洋文庫208、平凡社、1972年、pp. 213-214 | 江戸時代 | ●米沢の家士なる由（中略）後ろの稲むらの陰に何かひそく話すものあり。ひそかに窺うに狐二つ居たりしが、「近日何某の妻病死すべし。それにつきひと慰みせんと思う」というを聞きて…一両日過ぎて傍輩某が妻、果して死しけるが、野辺送りなど営みて後、日がらもたちぬれどとり籠りありしかば、いと不思議に思いて見舞いけるが、色あしく衰えもありけるゆえ（中略）かの者答えけるは、「（中略）亡妻野辺送りし後、ありし姿にて夜毎にまかり越し、病をたずね、茶など自分とわかして我に与うるさま、昔に変る事なし。我も疑わしく思うゆえ、帰る跡をつけんと思うに、その身木石のごとく動く事ならず、無念もってのほかと思えどもせん方なく、それ故にこそ顔色も衰えつらん」と答えけるゆえ、（中略）亡者わっといいて驚き騒ぎ、かき消して失せぬ。…かの秘符ば「いあかなるもの」とたずねしに、玉薬をよく包みていれ置きしとなり。狐狸の恐るべき、尤もの工夫と、人の話しける。 |
| 30 | 『耳袋』巻9「狐に欺かれて漁魚を失う事」 | 根岸鎮衛著、鈴木棠三編注『耳袋』2、東洋文庫208、平凡社、1972年、pp. 230-231 | 江戸時代 | ●大久保原町に肴商う滝介といえる者ありしが、或夜目白下水神橋の下へ、友どち両人連れにて鰻を釣りに出でしに、思いしよりも獲物多く（中略）水神橋の上を、若き女あわたゞしくあとへ行き先へ行き、幾遍ともなく往来せる間、「有様を見るにかれは必定身投げなるべし。止めとらせん」と、両人ながら陸へ上がり（中略）「遠からざる」由にて、先に立ち待合わする体ゆえ、かたえに置きし畚釣り道具をたずね、…畚には獲物一つもなし。両人とも同様なれば、驚きてかの女をたずぬるに行く方なし。「全く狐に誑かされしならん。惜しき事」と、かの滝介、我が知れるもとに来りて語りけるとぞ。 |
| | **3.2.2 日本における人間が狐に変身する変身譚** | | | |
| 1 | 『新著聞集』10－17「人活ながら狐となる」 | 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫 / 博文館編輯局校訂 第47編、博文館、1903年、pp. 141-142 | 江戸時代 | ●（前略）老たる狐一匹出。大鳥居をあなたこなたへ飛こへけり。此者おもしろく思ひ見ほれ居ければ。かの狐汝もこへよとありしに。中く我はなりがたしといふに左あらば。我教んとて。着たる羽織をぬがせ。繩を長くつけて。鳥居の上へ打かけ。あなたこなたへ引ければ。その者も飛越るこゝちして。茫然と成たり。扨本國へかへりて。只今歸りたるとて我宿の戸を叩けば。妻子戸をきびしく立て扨もおそろしき古狐なり。内へ入らすなといふ。イヤ我は亭主なり。親なりといへば。中々わめき噪ぎて入れざれば。自ら件の事をおもひ出し。さあぐと泣。我は活ながら畜生道に墮けるよとて。それより是非なくたち去。（以下略） |

### 4.1.1 中国における蛇の変身譚(蛇が人間に変身するパターン)

| # | 出典 | 出典の詳細情報 | 時代 | 原文 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『搜神記』巻14（348）「撅兒」 | 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985年、pp.171-172 | 晋代 | ●晉懷帝永嘉中，有韓媼者，於野中見巨卵。持歸育之，得嬰兒。字曰撅兒。方四歲，劉淵築平陽城不就，募能城者。撅兒應募。因變為蛇，令媼遺灰誌其後，謂媼曰：「憑灰築城，城可立就。」竟如所言。淵怪之，遂投入山穴間，露尾數寸，使者斬之，忽有泉出穴中，匯為池，因名金龍池。 |
| 2 | 『搜神記』巻19（442）「揚州二蛇」 | 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985年、pp.232-233 | 晋代 | ●漢武帝時，張寬為揚州刺史。先是有老翁二人爭地山，詣州訟疆界，連年不決。寬視事，復來，寬窺二翁形狀非人。今卒持戟將入。問汝何等精。翁走，寬呵格之，化為二蛇。 |
| 3 | 『搜神後記』巻10（116)「女嫁蛇」 | 陶潛撰・汪紹楹校注『搜神後記』、古小說叢刊、中華書局、1981年、p.68 | 南北朝 | ●晉太元中，有士人嫁女於近村者。至時，夫家遣人來迎，女家好遣發，又令女乳母送之。既至，重門累閣，擬於王侯。廊柱下有燈火，一婢子嚴粧直守，後房帷帳甚美。至夜，女抱乳母涕泣，而口不得言。乳母密於帳中，以手潛摸之，得一蛇，如數圍柱，纏其女，從足至頭。乳母驚走出外，柱下守燈婢子，悉是小蛇，燈火乃是蛇眼。 |
| 4 | 『太平廣記』巻457引『廣古今五行記』「薛重」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3735-3736 | 南北朝 | ●會稽郡吏鄖縣薛重。得假還家。夜至家。戶閉。聞婦牀上有丈夫眠聲。（中略）見一蛇隱在牀脚。酒醉臭。重研蛇寸斷 擲於後溝。經日而婦死。數日。重又死。後忽然而生。說始死。有人桎梏之。將到一處。有官寮問曰。何以殺人。重曰 實不行兇。曰。爾云不殺者。近寸斷擲著後溝。此是何物。重曰。正殺蛇耳。府君愕然有悟曰。我當用為神。而敢婬人婦 又訟人。敕左右持來。吏將一人。著平巾幘。具詰其婬妄之罪。命付獄。重為官司便遣將出。重倏忽而還。出《廣古今五行記》 |
| 5 | 『太平廣記』巻456引『集異記』「朱覲」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、p.3733 | 唐代 | ●朱覲者。（中略）時主人鄧全賓家有女。姿容端麗。常為鬼魅之幻惑。凡所醫療。莫能愈之。覲時過友人飲。夜艾方歸。乃憩歇於庭。至二更。見一人着白衣。衣甚鮮潔。而入全賓女房中。逡巡。聞房內語笑甚歡。不成寢。執弓矢於黑處。以伺其出。候至雞鳴。見女送一少年而出。覲射之。既中而走。覲復射之。而失其跡。曉乃聞之全賓。遂與覲尋血跡。出宅可五里已來。其跡入一大枯樹孔中。令人伐之。果見一蛇。雪色。長丈餘。身帶二箭而死。女子自此如故。全賓遂以女妻覲。出《集異記》 |
| 6 | 『太平廣記』巻456引『廣異記』「忻州刺史」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3731--3732 | 唐代 | ●唐忻州刺史是天荒闕。前後歷任多死。（中略）刺史問為何神。答云。我是大蛇也。刺史令其改貌相與語。蛇遂化作人形。來至廳中。乃問何故殺人。蛇云。初無殺心。其客自懼而死爾。又問。汝無殺心。何故數見形軀。曰。我有屈滯。當須府主謀之。問有何屈。曰。昔我幼時。曾入古冢。爾來形體漸大。求出不得。狐兔狸狢等。或時入冢。方得食之。今長在土中。求死不得。故求於使君爾。問若然者。當掘出之。如何。蛇云。我逶迤已十餘里。若欲發掘。城邑俱陷。今城東有王村。村西有楸樹。使君可設齋戒。人掘樹深二丈。中有鐵函。開函視之。我當得出。言畢辭去。及明。如言往掘。得函。歸廳開之。有青龍從函中飛上天。逕往殺蛇。首尾中分。蛇既獲死。其怪絕矣。出《廣異記》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 7 | 『太平廣記』巻458引『博異志』「李黄」（1話） | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3750-3752 | 唐代 | ●元和二年。隴西李黄。鹽鐵使遜之猶子也。因調選次。乘暇於長安東市。瞥見一犢車，侍婢數人于車中貨易。李潛目車中。因見白衣之姝。綽約有絕代之色。李子求問。侍者曰。娘子孀居。袁氏之女。前事李家。今身依李之服。方除服。（除服原作外餘。據明鈔本改。）所以市此耳。又詢可能再從人乎。乃笑曰。不知。李子乃出與錢（錢字原空闕。據明鈔本補）帛。貨諸錦繡。婢輩遂傳言云。且貸錢買之。請隨到莊嚴寺左側宅中。相還不負。（中略）已晚。遂逐犢車而行。礙夜方至所止。（中略）女郎旋至。命坐。拜姨而坐。六七人具飯。食畢。命酒歡飲。一住三日。飲樂無所不至。第四日。姨云。李郎君且歸。恐尚書怪遲。後往來亦何難也。李亦有歸志。承命拜辭而出。上馬。僕人覺李子有腥臊氣異常。遂歸宅。問何處許日不見。以他語對。遂覺身重頭旋。命被而寢（中略）謂妻曰。吾不起矣。口雖語。但覺被底身漸消盡。揭被而視。空注水而已。唯有頭存。家大驚懾。呼從出之僕。考之。具言其事。及去尋舊宅所。乃空園。有一皁莢樹。樹上有十五千。樹下有十五千。餘了無所見。問彼處人云。往往有巨白蛇在樹下。便無別物。姓袁者。蓋以空園為姓耳。出《博異志》 |
| 8 | 『太平廣記』巻458引『博異志』「李黄」（2話） | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、p.3752 | 唐代 | ●復一說。元和中。鳳翔節度李聽。從子琯。任金吾參軍。自永寧里出遊。及安化門外。乃遇一車子。通以銀裝。頗極鮮麗。駕以白牛。從二女奴。皆乘白馬。衣服皆素。而姿容婉媚。琯貴家子。不知檢束。即隨之。將暮焉。二女奴曰。郎君貴人。所見莫非麗質。某皆賤質。又麤陋。不敢當公子厚意。然車中幸有姝麗。誠可留意也。琯遂求女奴。乃馳馬傍車。笑而迴曰。郎君但隨行。勿捨去。某適已言矣。琯既隨之。聞其異香盈路。日暮。及奉誠園。二女奴曰。娘子住此之東。今先去矣。郎君且此迴翔。某即出奉迎耳。車子既入。琯乃駐馬於路側。良久。見一婢出門招手。琯乃下馬。入坐於廳中。但聞名香入鼻。似非人世所有。琯遂令人馬入安邑里寄宿。黄昏後。方見一女子。素衣。年十六七。姿艷若神仙。琯自喜之心。所不能諭。及出。已見人馬在門外。遂別而歸。纔及家。便覺腦疼。斯須益甚。至辰巳間。腦裂而卒。其家詢問奴僕。昨夜所歷之處。從者具述其事。云。郎君頗聞異香。某輩所聞。但蛇臊不可近。舉家冤駭。遽命僕人。於昨夜所止之處覆驗之。但見枯槐樹中。有大蛇蟠屈之跡。乃伐其樹。發掘。已失大蛇。但有小蛇數條。盡白。皆殺之而歸。出《博異志》 |
| 9 | 『太平廣記』巻456引『小說』「顔回」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3724-3725 | 唐代 | ●顔回、子路共坐於夫子之門。有鬼魅求見孔子。其目若合日。其狀（狀原作時，據明鈔本改。）甚偉。子路失魄。口噤不得言。顔淵乃納履杖劒前。捲握其腰。於是形化成蛇。即斬之。孔子出觀。歎曰。勇者不懼。智者不惑。智者不勇。勇者不必有智。出《小說》 |
| 10 | 『太平廣記』巻456引『瀟湘錄』「王真妻」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3732-3733 | 唐代 | ●華陰縣令王真妻趙氏者。燕中富人之女也。美容貌。少適王真。洎隨之任。近半年忽有一少年。每伺真出。即輒至趙氏寢室。既頻往來。因戲誘趙氏私之。忽一日。王真自外入。乃見此少年與趙氏同席。飲酌歡笑。甚大驚訝。趙氏不覺自仆氣絕。其少年化一大蛇奔突而去。真乃令侍婢扶掖起之。俄而趙氏亦化一蛇。奔突俱去。王真遂逐之。見隨前出者俱入華山。久之不見。出《瀟湘錄》 |
| 11 | 『北夢瑣言』逸文巻4「張蜑子神」 | 孫光憲撰・賈二強點校『北夢瑣言』、歷代史料筆記叢刊・唐宋史料筆記、中華書局、2002年、pp.443 | 五代 | ●梓潼縣張蜑子神，乃五丁拔蛇之所也。或云嵩州張生所養之蛇，因而祠，時人謂為張蜑子。其神甚靈，偽蜀王建世子名元膺，聰明博達，騎射絕倫，牙齒常露，多以袖掩口，左右不敢仰視。蛇眼而黑色，兇惡鄙褻，通夜不寐，竟以作逆伏誅。就誅之夕。梓潼廟祝亟為蜑子所責。言：「我久在川，今始方歸，何以致廟宇荒穢如是耶？」由是蜀人乃知元膺為廟蛇之精矣。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 12 | 『夷堅丁志』巻20「巴山蛇」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第二冊、中華書局、1981年、pp.705-706 | 宋代 | ●崇仁縣農家子婦，頗少艾，因往屋後暴衣不還，求之鄰裏其父母家，皆不見。（中略）聞樂安詹生素善術，亟招致之。（中略）婦人仰臥。大蛇纏其身。奮起欲鬥。（中略）婦色黃如梔，瞑目垂死。詹為毒氣熏觸，困臥久乃蘇，含水噀婦，婦即活。歸之，明日始能言。云，初暴衣時，為皂袍（原本字形不全，今據陸本補）人隔籬相誘，不覺與俱行，亦不知登山履危，但在高堂華屋內與共寢處，饑則以物如餳與我食，食已即飽，心常迷蒙，殊不悟其為異類也。鄉人共請詹盡蛇命。詹曰，吾只能禁使勿出，不能殺也。乃施符穴口鎮之，自是亦絕。 |
| 13 | 『夷堅支戊』巻2「孫知縣妻」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第三冊、中華書局、1981年、pp.1062-1063 | 宋代 | ●丹陽縣外十里間，土人孫知縣，娶同邑某氏女，（中略）其顏色絕艷。（中略）容儀意態，全如圖畫中人。但每澡浴時，必施重幃蔽障，不許婢妾輒至，雖揩背亦不假手。孫數扣其故，笑而不答。歷十年，年且三十矣，孫一日因微醉，伺其入浴，戲鑽隙窺之。正見大白蛇堆盤于盆內，轉盼可怖。急奔詣書室中，別設床睡。自是與之異處。妻蓋已知覺，才出浴，即往就之，謂曰，我固不是，汝亦錯了。切勿生他疑。今夜歸房共寢，無傷也。孫雖甚懼，而無詞可却，竟復與同衾，綢繆燕昵如初。然中心疑憚，若負芒刺，展轉不能安席。怏怏成疾，未踰歲而亡，時淳熙丁未歲也。張思順監鎮江江口鎮，府命攝邑事，實聞之。此婦至慶元三年，年恰四十，猶存。 |
| 14 | 『夷堅志補』巻22「錢炎書生」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第四冊、中華書局、1981年、pp.1755-1756 | 宋代 | ●錢炎者，廣州書生也。（中略）一夕，有美女絳裙翠袖，自外秉燭而入。（中略）即留共宿，且有伉儷之約。（中略）自是炎宿業殆廢，若病心（葉本有多字，從明鈔本刪）失惑。然歲月頗久，女懷孕。郡日者周子中，與炎善，過門見之，訝其佗嬴，問所以，炎語之故。子中曰，以理度之，必妖祟耳。正一宮法師劉守真，奉行太上天心五雷正法，扶危濟厄（中略）謁求符水，以全此生，不然　死在朝夕，將不可悔。（中略）施符術照之，一巨蟒盤旋於內。（中略）炎曰，汝原是蛇精，我知之矣。示以符。女默默不語，俄化為二蛇，一甚大，一尚小，逡巡而出。炎惶怖，俟曉走白劉，仍卜寓徙舍，怪亦絕跡。 |
| 15 | 『剪燈新話』巻３「永州野廟記」 | 『剪燈新話』、古籍、コマ番号74-82参照 URL:http://ctext.org/library.pl?if=gb&file=92520&page=74 | 明代 | ●永州之野有神廟（中略）老人拜而告曰，某實永州野廟之神也，然廟為妖蛇所據已有年矣，力不能制，廢職已久（中略）曰此物在世已及千年（中略）非神兵剿捕不可得也。（中略）事訖回途，再經其處，則殿宇神像無存。問於村甿，皆曰，某夜三更後，雲霧晦明風雨大作，殺伐之聲震動遠近。明晨往視之，則神廟蕩為灰燼，片毛不遺矣。一巨蛇長數十丈，死於林木之下，而無其首。其餘小蛇死者無數。考其日，正感夢時也。應祥歸家，白晝閑坐，忽見二鬼使徑前曰：“地府屈君對事。”即挽其臂而往。及至，見王坐于大廳，廳下以鐵籠罩一白衣絳幘丈夫，其形甚偉。自陳，在世無罪，為書生畢應祥枉告於南嶽，以致神兵下伐，舉族誅夷，巢穴一空，含冤實甚。應祥聞言，知其為蛇妖，乃具述其害人禍物、興妖作孽之事，對辯於鐵籠之下，往返甚備，終不肯服。王者命吏移□南岳衡山府及下永州城隍司照勘其事。已而，衡山府回□城隍司申牒，與應祥所言略同，方始詞塞。王者大怒，叱之曰，生既為妖，死猶妄訴，將白衣妖孽押赴酆都，永不出世。即有鬼卒數人疾驅之去。王謂應祥曰，勞君一行，無以相報。命吏取畢姓簿籍來，檢於應祥名下批八字，除妖去害，延壽一紀。應祥拜謝而返。及門而悟，乃曲肱几上爾。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 16 | 『古今說海』卷75「說淵五十五 白蛇記」（1話） | 陸楫編『古今說海』：永瑢 紀昀等纂修、『景印文淵閣四庫全書』子部雜家類183、臺灣商務印書館、1986年、pp.524-526 | 明代 | ●元和二年，隴西李璜鹽鐵使遜之猶子也。因調選次乘，暇於長安東市，見一犢車，侍婢數人於車中貨易。李潛目車中，因見白衣之姝，綽約有絕代之色。李子求問。侍者曰，娘子孀居，袁氏之女，前事李家。今身衣李之服方將外除，所以市此耳。又詢，可能再從人乎。乃笑曰，不知。李子乃與出錢，貨諸錦繡。姝遂傳言云，且貸錢買之，請隨到莊嚴寺左側宅中，相還不晚。（中略）一住三日，飲樂無所不至。（（中略）遂覺身重頭旋，命被而寢。先是婚鄭氏女在側，云足下調官已成，昨日過官覓公不得，某二兄替過官已了。李荅以愧佩之辭。俄而鄭兄至責，以所往時，李已漸覺恍忽，祇對失次，謂妻曰，吾不起矣。口雖語，但覺被底身漸消盡。揭被而視，空注水而已，唯有頭存。家大驚，懾呼從者訊之。僕者具言其事。及去尋舊宅所在，乃空園。有一皂莢樹，樹上有十五千，樹下有十五千，餘無所見。問彼處人，云，徃往有巨白蛇在樹下，更無別物。姓袁者，蓋以空園為姓。 |
| 17 | 『古今說海』卷75「說淵五十五 白蛇記」（2話） | 陸楫編『古今說海』：永瑢 紀昀等纂修、『景印文淵閣四庫全書』子部雜家類183、臺灣商務印書館、1986年、pp.524-526 | 明代 | ●耳復一說，元和中，鳳翔節度李聽從子琯，在金吾參軍。自永寧里出遊 及安化門外。乃遇一車子，通以銀粧，頗極鮮麗。駕以白牛，從二女奴，皆乘白馬，衣服皆素而姿容婉媚。琯貴家子，不知檢束，即隨之。（中略）琯遂求女奴，女奴乃馳馬傍車笑而顧曰，郎君但隨行，勿捨去，某適已言矣，琯即隨之。聞其異香盈路。（中略）良久，見一婢出門招手，琯乃下馬入坐於廳中，但聞名香入鼻，似非人世所有。（中略）黃昏後方見一女子，素衣，年十五六，姿艷若神仙。琯自喜之心，所不能論。因留止宿，及明而出，已見人馬在門外，遂別而歸。纔及家，便覺腦疼，斯須益甚。至辰巳間，腦裂而卒。其家詢問奴僕昨夜所歷之處，從者具述其事，云郎君頗聞異香，某輩所聞但蛇臊不可近。舉家寃駭，遽命僕人於昨夜所止之處覆驗之。但見枯槐樹中有大蛇蟠屈之跡。乃伐其樹發掘。已失大蛇，但有小蛇數條盡白。皆殺之而歸。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 18 | 『警世通言』巻28「白娘子永鎮雷峰塔」 | 馮夢龍撰『馮夢龍全集2 警世通言』、鳳凰出版社、2007年、pp.418-446 | 明代 | ●許宣看時，是一個婦人，頭戴孝頭髻，烏雲畔插著些素釵梳，穿一領白絹衫兒，下穿一條細麻布裙。（中略）那娘子和丫鬟艙中坐定了。娘子把秋波頻轉，瞧着許宣（中略）那婦人答道，奴家是白三班白殿直之妹，嫁了張官人，不幸亡過了，見葬在這雷嶺。為因清明節近，今日帶了丫鬟，往墳上祭掃了方回，不想值雨。若不是搭得官人便船，實是狼狽。（中略）那白娘子篩一盃酒，遞與許宣，啟櫻桃口，露榴子牙，嬌滴滴聲音，帶著滿面春風，告道，小官人在上，真人面前說不得假話。奴家亡了丈夫，想必和官人有宿世姻緣，一見便蒙錯愛，正是你有心，我有意。煩小乙官人尋一個媒證，與你共成百年姻眷，不枉天生一對，却不是好。（中略）許宣見了，連聲叫道，死冤家。自被你盜了官庫銀子，帶累我喫了多少苦，有屈無伸。如今到此地位，又趕來做甚麼。可羞死人！（中略）過了數日、白娘子先自奉承好了主人的媽媽。那媽媽勸主人與許宣說合，還定十一月十一日成親，共百年諧老。光陰一瞬，早到吉日良時。白娘子取出銀兩，央王主人辦備喜筵，二人拜堂結親。（中略）只見白娘子睜一雙妖眼，到先生面前，喝一聲，你好無禮。出家人枉在我丈夫面前說我是一個妖怪，書符來捉我。那先生回言，我行的是五雷天心正法，凡有妖怪，喫了我的符，他即變出真形來。那白娘子道，眾人在此，你且書符來我喫看。那先生書一道符，遞與白娘子。白娘子接過符來，便吞下去。眾人都看，沒些動靜。眾人道，這等一個婦人，如何說是妖怪。眾人把那先生齊罵。那先生罵得口睜眼呆，半晌無言，惶恐滿面。（中略）許宣怒從心上起，惡向膽邊生，無明火焰騰騰高起三千丈，掩納不住，便罵道，你這賊賤妖精，連累得我好苦。喫了兩場官事。（中略）許宣被白娘子一騙，回嗔作喜，沉吟了半晌，被色迷了心膽，留連之意，不回下處，就在白娘子樓上歇了。（中略）白娘子答道，禪師，我是一條大蟒蛇。因為風雨大作來到西湖上安身，同青青一處。不想遇著許宣，春心蕩漾，按納不住，一時冒犯天條，却不曾殺生害命。望禪師慈悲則個。（中略）禪師道，念你千年修煉，免你一死，可現本相。（中略）看那白娘子時，也復了原形，變了三尺長一條白蛇，兀自昂頭看著許宣。禪師將二物置於缽盂之內，扯下褊衫一幅，封了缽盂口。拿到雷峰寺前，將缽盂放在地下，令人搬磚運石，砌成一塔。後來許宣化緣，砌成了七層寶塔，千年萬載，白蛇和青魚不能出世。（中略）祖師度我出紅塵，鐵樹開花始見春。化化輪回重化化，生生轉變再生生。欲知有色還無色，須識無形却有形。色即是空空即色，空空色色要分明。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 19 | 『西湖佳話』巻15「雷峰怪蹟」 | 古吳墨浪子搜輯『西湖佳話』、古籍、コマ番号：147－201、参照URL: http://ctext.org/library.pl?if=gb&file=92439&page=147 | 清代 | ●許宣看時，却是一個戴孝的婦人，一個穿青的女伴，手中捧著一個包兒，要搭船。（中略）那婦人同女伴上得船，便先向許宣深深道了個萬福。許宣慌忙起身答禮，隨掇身半邊道，請娘子艙中坐。那婦人進艙坐定，便頻把秋波偷瞧許宣。許宣雖說為人老實，然見了此等如花似玉的美人，又帶著個俊俏的丫鬟，未免也要動情。（中略）那婦人答道，奴家是白三班白殿直之妹，嫁了張官人，不幸亡過了。現葬在這邊。因今日清明，墳上祭掃而回。不期又值此雨。猶幸遇搭得官人之船，不至狼狽。（中略）白娘子見問，又斟了一杯酒，親自送到許宣面前，笑嘻嘻說道，官人在上，真人面前不敢說假話。奴家自亡過了丈夫，一身無主，想必與官人有宿緣。前日舟中一見，彼此便覺多情。官人若果錯愛，何不尋個良媒，說成了百年姻眷。許宣聽了，滿心歡喜。（中略）一時見了，不勝氣苦，因跌着腳，連聲叫道，死冤家，自被你盜了官銀，害我有屈無伸，當官喫了多少苦楚。今已到此田地，你又趕來做甚。（中略）許宣初已認真是妖是怪，今被他花言巧語辯得乾乾淨淨，竟全然不疑了。又見他標標緻致，殊覺動心，借主人媽媽之勸，便早欣欣然樂從了做親之議。白娘子囊中充足，彼此喜歡。到了做親之後，白娘子放出迷人的手段，弄得個許宣昏昏迷迷，如遇神仙，恨相見之晚。（中略）只見一簇人圍著那道人，正在那裡散符水哩。白娘子輕輕走到面前，大喝一聲道，你一個不學無術的方士小人，曉得些甚麼。怎敢在此胡言亂語，鬼畫妖符，妄言惑眾。那道人猛然聽了，喫了一驚，忙將那女娘一看，見他面上氣色古怪，知他來歷不正。因回言道，我行的乃五雷天心正法，任是毒妖惡怪，若喫了我的符水，便登時現出形來。何況你一妖女。你敢吃我的符水麼。白娘子聽了，笑道，眾人在此做個證見。你且書符來，我喫與你看。道人忙忙書符一道，遞與白娘子。白娘子不慌下忙接將過來，搓成一團，放在口中，用水吞了下去，笑嘻嘻立了半晌，並無動靜。看的人便七嘴八舌，罵將起來道，好胡說。這等一個女娘子，怎說他是妖怪。道人被罵，目瞪口呆，話也說不出一句。（中略）許宣擡頭看時，不是別人，恰正是白娘子，不覺怒從心上起，因罵道，你這賊妖婦，連累得我好苦。吃了兩場大官司，蘇州影也不見，却躲在這裡。遂走上前，一把捉住，今日決不私休了。（中略）許宣被他一頓甜言，說得滿肚皮的氣都消了，因說道，你在此住，難道是尋我。白娘子道，不是尋你，却尋那個。還不快上樓去。許宣轉過念來，竟酥酥的跟他上樓住去了。（中略）許宣回頭一看，却正是法海禪師，背馱衣缽，手提禪杖，却好走來。許宣納頭便拜道，救我弟子一命。禪師道，這孽畜如今在那裡。許宣道，現在姐夫家裡。禪師因取出缽盂遞與許宣，道，你悄悄到家，不可使婦人得知。可將此缽劈頭一罩，切勿手輕，緊緊按住，不可心慌，我自有道理。（中略）禪師喝道，是何孽畜。怎敢纏人。可說備細。白娘子道，我本是一蟒蛇，因風雨大作，來到西湖，同青魚一處安身。不想遇著許宣，春心蕩漾，按納不定，有犯天條。所幸者，實不曾傷生害命。望老師慈悲。禪師道，淫罪最大，本不當恕，姑念你千年修煉，僅免一死。快現本相。白娘子乃現了白蛇一條，青青乃現了青魚一尾。那白蛇尚昂起頭來望著許宣。禪師因將二怪置於缽盂之內，扯下褊衫一幅，封了缽盂口，拿到雷峰寺前，將缽盂放下，令人搬磚運石，砌成一塔，壓于其上。後來許宣又化緣而成了七層，使千年萬載，白蛇與青魚不能出世。 |
| 20 | 『聊齋誌異』巻 2 「海公子」 | 蒲松齡著・朱其鎧等校注『全本新注 聊齋志異』、中國古典文學讀本叢書、人民文學出版社、1989年、pp.171-172 | 清代 | ●東海古蹟島，有五色耐冬花，四時不凋。而島中古無居人，人亦罕到之。登州張生，好奇，喜游獵。聞其佳勝，備酒食，自掉扁舟而往。至則花正繁，香聞數里；樹有大至十餘圍者。反復留連，甚慊所好。開尊自酌，恨無同游。忽花中一麗人來，紅裳炫目，略無倫比。見張，笑曰，妾自謂興致不凡，不圖先有同調。張驚問何人。曰，我膠娼也。適從海公子來。彼尋勝翱翔，妾以艱於步履，故留此耳。張方苦寂，得美人，大悅，招坐共飲。女言詞溫婉，蕩人神志，張愛好之。恐海公子來，不得盡歡，因挽與亂。女忻從之。相狎未已，忽聞風肅肅，草木偃折有聲。女急推張起，曰，海公子至矣。張束衣愕顧，女已失去。（中略）張亦眩莫能起，移時方蘇。載蛇而歸。大病月餘。疑女子亦蛇精也。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 21 | 『聊齋誌異』巻 5 「花姑子」 | 蒲松齢著・朱其鎧等校注『全本新注 聊齋志異』、中國古典文學讀本叢書、人民文學出版社、1989年、pp.636-641 | 清代 | ●安幼與，陝之拔貢。（中略）未幾，女果至，笑曰，癡郎子，不謝巫耶。安喜極，抱與綢繆，恩愛甚至。已而曰，妾冒險蒙垢，所以故，來報重恩耳。實不能永諧琴瑟，幸早別圖。安默默良久，乃問曰，素昧生平，何處與卿家有舊，實所不憶。女不言，但云，君自思之。生固求永好。女曰，屢屢夜奔，固不可。常諧伉儷，亦不能。安聞言，邑邑而悲。女曰，必欲相諧，明宵請臨妾家。安乃收悲以忻，問曰，道路遼遠，卿纖纖之步，何遂能來？曰，妾固未歸。東頭聾媪我姨行，為君故，淹留至今，家中恐所疑怪。安與同衾，但覺氣息肌膚，無處不香。問曰，熏何蘼澤，致侵肌骨。女曰，妾生來便爾，非由熏飾。安益奇之。女早起言別。安慮迷途，女約相候於路。安抵暮馳去，女果伺待，偕至舊所。叟媪歡逆。酒肴無佳品，雜具藜藿。既而請客安寢。女子殊不瞻顧，頗涉疑念。更既深，女始至，曰，父母絮絮不寢，致勞久待。浹洽終夜，謂安曰，此宵之會，乃百年之別。安驚問之。答曰，父以小村孤寂，故將遠徙。與君好合，盡此夜耳。安不忍釋，俯仰悲愴。依戀之間，夜色漸曙。叟忽闖然入，罵曰，婢子玷我清門，使人愧怍欲死。女失色，草草奔去。叟亦出，且行且詈。安驚孱愆怯，無以自容，潛奔而歸。<br>數日徘徊，心景殆不可過。因思夜往，踰牆以觀其便。叟固言有恩，即令事洩，當無大譴。遂乘夜竄往，蹀躞山中，迷悶不知所往。大懼。方覓歸途，見谷中隱有舍宇。喜詣之，則閈閎高壯，似是世家，重門尚未扃也。安向門者詢章氏之居。有青衣人出，問，昏夜何人詢章氏。安曰，是吾親好，偶迷居向。青衣曰，男子無問章也。此是渠妗家，花姑即今在此，容傳白之。入未幾，即出邀安。纔登廊舍，花姑趨出迎，謂青衣曰，安郎奔波中夜，想已困殆，可伺牀寢。少間，攜手入幃。安問，妗家何別無人。女曰，妗他出，留妾代守。幸與郎遇，豈非夙緣。然偎傍之際，覺甚羶腥，心疑有異。女抱安頸，遽以舌舐鼻孔，徹腦如刺。安駭絕，急欲逃脫；而身若巨緶之縛。少時，悶然不覺矣。<br>安不歸，家中逐者窮人蹟。或言暮遇於山徑者。家人入山，則見裸死危崖下。驚怪莫察其由，舁歸。衆方聚哭，一女郎來弔，自門外噭啕而入。撫尸捺鼻，涕洟其中，呼曰，天乎，天乎。何愚冥至此。痛哭聲嘶，移時乃已。告家人曰，停以七日，勿殮也。衆不知何人，方將啟問。女傲不為禮，含涕逕出。留之不顧。尾其後，轉眸已渺。羣疑為神，謹遵所教。夜又來，哭如昨。至七夜，安忽甦，反側以呻。家人盡駭。女子入，相向嗚咽。安舉手，揮衆令去。女出青草一束，燂湯升許，即牀頭進之，頃刻能言。歎曰，再殺之惟卿，再生之亦惟卿矣。因述所遇。女曰，此蛇精冒妾也。前迷道時所見燈光，即是物也。安曰，卿何能起死人而肉白骨也。勿乃仙乎。曰，久欲言之，恐致驚怪。君五年前，曾於華山道上買獵獐而放之否。曰，然，其有之。曰，是即妾父也。前言大德，蓋以此故。君前日已生西村王主政家。妾與父訟諸閻摩王，閻摩王弗善也。父願壞道代郎死，哀之七日，始得當。今之邂逅，幸耳。然君雖生，必且痿痹不仁。得蛇血合酒飲之，病乃可除。生啣恨切齒，而慮其無術可以擒之。女曰，不難。但多殘生命，累我百年不得飛升。其穴在老崖中，可於晡時聚茅焚之，外以強弩戒備，妖物可得。言已，別曰，妾不能終事，實所哀慘。然為君故，業行已損其七，幸憫宥也。月來覺腹中微動，恐是孽根。男與女，歲後當相寄耳。流涕而去。安經宿，覺腰下盡死，爬抓無所痛癢。乃以女言告家人。家人往，如其言，熾火穴中。有巨白蛇衝燄而出。數弩齊發，射殺之。火熄入洞，蛇大小數百頭，皆焦臭。家人歸，以蛇血進。安服三日，兩股漸能轉側，半年始起。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 22 | 『聊齋誌異』巻11「三仙」 | 蒲松齢著・朱其鎧等校注『全本新注 聊齋志異』、中國古典文學讀本叢書、人民文學出版社、1989年、pp.1529-1530 | 清代 | ●一士人赴試金陵，經宿遷，遇三秀才，談論超曠，遂與沽酒款洽。各表姓字，一介秋衡，一常丰林，一麻西池。縱飲甚樂，不覺日暮。介曰，未修地主之儀，忽叨盛饌，于理不當。茅茨不遠，可便下榻。常、麻并起，捉裾喚仆，相將俱去。至邑北山，忽睹庭院，門遶清流。既入，舍宇清潔。呼童張燈，又命安置從人。麻曰，昔日以文會友，今場期伊邇，不可虛此良夜。請擬四題命鬮，各拈其一，文成方飲。眾從之。各擬一題，寫置几上，拾得者就案搆思。二更未盡，皆已脫稿，迭相傳視。秀才讀三作，深為傾倒，草錄而懷藏之。主人進良醞，巨杯促釂，不覺醺醉。主人乃導客就別院寢。客醉不暇解履，和衣而臥。及醒，紅日已高，四顧并無院宇，主仆臥山谷中。大駭。見傍有一洞，水涓涓流，自訝迷惘。探懷中，則三作俱存。下問土人，始知為三仙洞。蓋洞中有蟹、蛇、蝦蟆三物，最靈，時出游，人常見之。士人入闈，三題即仙作，以是擢解。 |

### 4.1.2 中国における蛇の変身譚（人間が蛇に変身するパターン）

| # | 出典 | 出典の詳細情報 | 時代 | 原文 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『搜神記』巻3（53）「管輅[一]」 | 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985年、pp.32-33 | 晋代 | ●管輅，字公明，平原人也。善易卜。安平太守東萊王基，字伯輿，家數有怪，使輅筮之。卦成，輅曰，君之卦，當有賤婦人，生一男，墮地便走、入竈中死。又床上當有一大蛇銜筆，大小共視，須臾便去。又烏來入室中，與燕共鬬，燕死烏去。有此三卦。基大驚曰，精義之致，乃至於此，幸為占其吉凶。輅曰，非有他禍，直客(一作官。)舍久遠，魑魅罔兩，共為怪耳。兒生便走，非能自走，直宋無忌之妖將其入竈也。大蛇銜筆者，直老書佐耳。烏與燕鬬者，直老鈴下耳。夫神明之正，非妖能害也。萬物之變，非道所止也。久遠之浮精，必能之定數也。今卦中見象，而不見其凶，故知假托之數，非妖咎之徵，自無所憂也。昔高宗之鼎，非雉所雊。太戊之階，非桑所生。然而野鳥一雊，武丁為高宗。桑穀暫生，太戊以興。焉知三事不為吉祥，願府君安身養德，從容光大，勿以神奸，污累天真。後卒無他。遷安南將軍。後輅鄉里乃太元問輅，君往者為王府君論怪，云，老書佐為蛇，老鈴下為烏，此本皆人，何化之微賤乎。輅言，…夫萬物之化，無有常形。人之變異，無有定體。或大為小，或小為大，固無優劣。（中略）如書佐、鈴下，各以微軀，化為蛇鳥，不亦過乎。 |
| 2 | 『高僧傳』巻1「安清」 | 慧皎撰『高僧傳』、『趙城金藏』本、古籍、コマ番号：3-4、参照URL:http://ctext.org/library.pl?if=gb&file=88272&page=3 | 南北朝 | ●安清字世高。安息國王正後之太子也。幼以孝行見稱。加又志業聰敏。克意好學。外國典籍。及七曜五行醫方異術。乃至鳥獸之聲。（中略）有一同學。多瞋。分衛值施主不稱。每輒懟恨。高屢加訶諫終不悛改。如此二十餘年。乃與同學辭訣雲。我當往廣州畢宿世之對。卿明經精勤不在吾後。而性多瞋怒。命過當受惡形。我若得道必當相度。既而遂適廣州值寇賊大亂。行路逢一少年。唾手拔刃曰。真得汝矣。高笑曰。我宿命負卿故遠來相償。卿之忿怒故是前世時意也。遂申頸受刃。容無懼色。賊遂殺之。觀者填陌。莫不駭其奇異。既而神識。還為安息王太子。即今時世高身是也。高游化中國宣經事畢。值靈帝之末關雒擾亂。乃振錫江南。云我當過廬山度昔同學。行達□亭湖廟。此廟舊有靈威。商旅祈禱乃分風上下各無留滯。嘗有乞神竹者。未許輒取。舫即覆沒。竹還本處。自是舟人敬憚莫不懾影。高同旅三十餘船奉牲請福。神乃降祝曰。船有沙門可便呼上。客咸驚愕。請高入廟。神告高曰。吾昔外國與子俱出家學道。好行布施。而性多瞋怒。今為□亭廟神周回千里並吾所治。以布施故珍玩甚豐。以瞋恚故墮此神報。今見同學悲欣可言。壽盡旦夕。而醜形長大。若於此舍命穢污江湖。當度山西澤中。此身滅後恐墮地獄。吾有絹千疋並雜寶物。可為立法營塔使生善處也。高曰。故來相度何不出形。神曰。形甚醜異眾人必懼。高曰。但出眾人不怪也。神從床後出頭。乃是大蟒。不知尾之長短。至高膝邊。高向之梵語數番贊唄數契。蟒悲淚如雨須臾還隱。高即取絹物辭別而去。舟侶揚帆。蟒複出身登山而望。眾人舉手然後乃滅。倏忽之頃便達豫章。即以廟物造東寺。高去後神即命過。暮有一少年。上船長跪高前受其咒願。忽然不見。高謂船人曰。向之少年。即□亭廟神。得離惡形矣。於是廟神歇末無複靈驗。後人於山西澤中見一死蟒。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 3 | 『太平御覽』巻934引『廣五行記』 | 李昉等撰『太平御覧』<全四冊>、中華書局出版、1960年2月第一版 1995年10月第5次印刷、p.4152 | 隋代 | ●又曰　東光人東方飛龍病甚　夢化為大黑蛇　以告其妻　既死　有大黑蛇入室上棟間　飛龍諸子將殺之　其母曰　此是爾父　諸子不用母言　遂殺之　既日暴雨　諸子皆震而死柩前 |
| 4 | 『太平御覽』巻933引『陳書』 | 李昉等撰『太平御覧』<全四冊>、中華書局出版、1960年2月第一版 1995年10月第5次印刷、p.4146 | 唐代 | ●陳書曰　后主末年　昏淫政亂　秘書監傅縡上書諫諍　后主逼令自盡　死后　有惡蛇上屋來靈床當前　受祭酹而去　復來百有餘日　時有彈指聲　俄而陳滅 |
| 5 | 『太平廣記』巻340引『通幽錄』「盧頊」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第四冊、pp.2695-2698 | 唐代 | ●貞元六年十月。范陽盧頊家於錢塘。妻弘農楊氏。其姑王氏。早歲出家。（中略）常有一婦人不知何來。年可四十餘，著瑟瑟裙。（中略）以手批小金，小金絕倒於地。（中略）家人至，已失婦人。而小金暝然如睡。其身殭強如束。（中略）又問小金前見車馬何人。曰。此是精魅耳。本是東鄰吳家阿嫂朱氏，平生苦毒，罰作蛇身。今在天竺寺楮樹中有穴。久而能變化通靈，故化作婦人。又問既是蛇身。如何得衣裳著。答曰。向某家塚中偷來。又問前抱來者是何物。言野狸。遂辭去。（以下略）出《通幽錄》 |
| 6 | 『太平廣記』巻459引『奇聞錄』「僧令因」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、P.3753 | 唐代 | ●僧令因者。於子午谷過山。往金州。見一竹輿先行。有女僕服綵而從之。數日。終不見其人。令因乃急引簾窺之。乃一婦。人首而蛇身甚偉。令因甚驚。婦人曰。不幸業重。身忽變化。上人何乃窺之。問其僕曰。欲送秦嶺之上。令因遂與誦功德。送及秦嶺。亦不見婦人之首。而入林中矣。出《聞奇錄》 |
| 7 | 『太平廣記』巻107引『報應記』「吳可久」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第一冊、pp.727 | 唐代 | ●吳可久。越人。唐元和十五年居長安。奉摩尼教。妻王氏。亦從之。歲餘。妻暴亡。經三載。見夢其夫曰。某坐邪見為蛇。在皇子陂浮圖下。明旦當死。願為請僧。就彼轉金剛經。冀免他苦。夢中不信。叱之。妻怒。唾其面。驚覺。面腫痛不可忍。妻復夢於夫之兄曰。園中取龍舌草。搗傅立愈。兄寤走取。授其弟。尋愈。詰旦。兄弟同往，請僧轉金剛經。俄有大蛇從塔中出。舉首偏視。經終而斃。可久歸佛，常持此經。出《報應記》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 8 | 『太平廣記』巻94引『原化記』「華嚴和尚」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第一冊、pp.624-625 | 唐代 | ●華嚴和尚學於神秀。禪宗（宗原作師，據陳校本改。）謂之北祖。（中略）一沙彌瓶鉢未足。來詣此僧。頂禮云。欲上堂。無鉢如何。暫借。明日當自置之。僧不與曰。吾鉢已受持數十年。借汝必恐損之。沙彌懇告曰。上堂食頃而歸，豈便毀損。至於再三，僧乃借之曰。吾愛鉢如命。必若有損。同殺我也。沙彌得鉢。捧持兢懼。食畢將歸。僧已催之。沙彌持鉢下堂。不意磚破蹴倒。遂碎之。少頃。僧又催之。既懼。遂至僧所。作禮承過。且千百拜。僧大叫曰。汝殺我也。怒罵至甚。因之病亟。一夕而卒。爾後經時。和尚於嵩山嶽寺與弟子百餘人。方講華嚴經。沙彌亦在聽會。忽聞寺外山谷。若風雨聲。和尚遂招此沙彌。令於己背後立。須臾。見一大虵。長八九丈。大四五圍。直入寺來。努目張口。左右皆欲奔走。和尚戒之不令動。虵漸至講堂。升階睥睨，若有所求。和尚以錫杖止之。云。住。虵欲至坐。遂俛首閉目。和尚誡之，以錫杖扣其首曰。既明所業。今當回向三寶。令諸僧為之齊聲念佛，與受三歸五戒。此虵宛轉而出。時亡僧弟子已有登會者。和尚召謂曰。此虵汝之師也。修行累年。合證果之位。為臨終之時。惜一鉢破。怒此沙彌。遂作一蟒虵。適此來者。欲殺此沙彌。更若殺之。當墮大地獄。無出期也。賴吾止之。與受禁戒。今當捨此身矣，汝往尋之。弟子受命而出。虵行所過。草木開靡，如車路焉。行四十五里，至深谷間。此虵自以其首叩石而死矣。歸白和尚曰。此虵今以受生。在裴郎中宅作女。亦甚聰慧，年十八當亡。即却為男。然後出家修道。裴郎中即我門徒。汝可入城。為吾省問之。其女今已欲生。而甚艱難。汝可救之。時裴寬為兵部郎中。即和尚門人也。弟子受命入城。遙指裴家。遇裴請假在宅。遂令報云。華嚴和尚傳語。郎中出見，神色甚憂。僧問其故。云妻欲產。已六七日。燈燭相守，甚危困矣。僧曰。我能救之。遂令於堂門之外。淨設牀席。僧入焚香擊磬。呼和尚者三。其夫人安然而產一女。後果年十八歲而卒。出《原化記》 |
| 9 | 『太平廣記』巻459引『原化記』「衛中丞姊」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3753-3754 | 唐代 | ●御史中丞衛公有姊。為性剛戾毒惡。婢僕鞭笞多死。忽得熱疾六七日。自云。不復見人。常獨閉室。而欲至者。必嗔喝呵怒。經十餘日。忽聞屋中窸窣有聲。潛來窺之。昇堂。便覺腥臊毒氣。開牖。已見變為一大蛇。長丈餘。作赤斑色。衣服爪髮。散在牀褥。其蛇怒目逐人。一家驚駭。衆共送之於野。蓋性暴虐所致也。出《原化記》 |
| 10 | 『太平廣記』巻456引『王真妻』「瀟湘錄」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3732-3733 | 唐代 | ●華陰縣令王真妻趙氏者。燕中富人之女也。美容貌。少適王真。洎隨之任。近半年忽有一少年。每伺真出。即輒至趙氏寢室。既頻往來。因戲誘趙氏私之。忽一日。王真自外入。乃見此少年與趙氏同席。飲酌歡笑。甚大驚訝。趙氏不覺自仆氣絕。其少年化一大蛇奔突而去。真乃令侍婢扶掖起之。俄而趙氏亦化一蛇。奔突俱去。王真遂逐之。見隨前出者俱入華山。久之不見。（出《瀟湘錄》） |
| 11 | 『太平廣記』巻459引『玉堂間話』「徐坦」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3758-3759 | 五代 | ●清泰末。有徐坦應進士舉。下第。南遊渚宮。因之峽州。尋訪故舊。旅次富堆山下。有古店。是夜憩琴書訖。忽見一樵夫形貌枯瘠。似有哀慘之容。坦遂詰其由。樵夫濡瞜而答曰。某比是此山居人。姓李名孤竹。有妻先遘沈疴。歷年不愈。昨因入山採木。經再宿未返。其妻身形忽變。恐人驚悸。謂隣母曰。我之身已變矣。請為報夫知之。及歸語曰。我已弗堪也。唯尸在焉。請君託鄰人舁我。置在山口為幸。如其言。遷至於彼。逡巡。忽聞如大風雨聲。衆人皆懼之。又言曰。至時速迴。慎勿返顧。遂敍訣別之恨。俄見群山中。有大蛇無數。競湊其妻。妻遂下牀。伸而復屈。化為一蟒。與群蛇相接而去。仍於大石上捽其首，迸碎在地。至今有蛇種李氏在焉。出《玉堂閒話》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 12 | 『太平廣記』巻459引『玉堂閒話』「張氏」（1話） | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、p.3759 | 五代 | ●王蜀時。杜判官妻張氏。士流之子。與杜齊體數十年。誕育一子。壽過六旬而殂歿。泊殯于家。累旬後。方窆于外。啟攢之際。覺其秘器搖動。謂其還魂。剖而視之。見化作大蛇。蟠蜿屈曲。骨肉奔散。俄頃。徐徐入林莽而去。 |
| 13 | 『太平廣記』巻459引『玉堂閒話』「張氏」（2話） | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、p.3759 | 五代 | ●又與元靜寺尼曰王三姑。亦於棺中化為大蛇。其杜妻。即晚年不敬夫。老病視聽步履。皆不任持。張氏顧之若犬彘。凍餒而卒。人以為化蛇其應也。 出《玉堂閒話》 |
| 14 | 『閲微草堂筆記』巻1 滄州城南上河涯 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.3 | 清代 | ●滄州城南上河涯，有無賴呂四，兇横無所不為，人畏如狼虎。一日薄暮，與諸惡少村外納涼，忽隱隱聞雷聲，風雨且至。遙見似一少婦，避入河千古廟中。呂語諸惡少曰，彼可淫也。時已入夜，陰雲暗黑。呂突入，掩其口（中略）呂大恚，欲提妻擲河中。妻大號曰，汝欲淫人，致人淫我，天理昭然，汝尚欲殺我耶。（中略）呂無可置對，竟自投于河。（中略）後妻夢呂來曰：「我業重，當永墮泥犁。緣生前事母尚盡孝，冥官檢籍得受蛇身，今往生矣。汝後夫不久至。善視新姑嫜，陰律不孝罪至重，毋自蹈冥司湯鑊也。」至妻再醮日，屋角有赤練蛇，垂首下視，意似眷眷。妻憶前夢，方舉首問之，俄聞門外鼓樂聲。蛇於屋上跳擲數回，奮然去。 |

### 4.1.3 中国における蛇の変身譚（変身方向が不明のパターン）

| # | 出典 | 出典の詳細情報 | 時代 | 原文 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『太平御覧』巻388、巻497引『世説』 | 李昉等撰『太平御覧』<全四冊>、中華書局出版、1960年2月第一版 1995年10月第5次印刷、p.1793・p.2275 | 南北朝 | ●又曰杜預為荊州刺史鎮襄陽時有讌集大醉輒閉齋獨眠不聽人前後常醉聞齋中嘔吐其聲甚苦莫不側足悚懆有一小吏便開戸看之正見床上有大虵垂頭牀邊吐都不見人<br>●又曰杜預為荊州刺史鎮襄陽時有讌集大醉閉齋獨眠或見一大虵垂頭牀邊吐 |
| 2 | 『太平御覧』巻933引『晉書』 | 李昉等撰『太平御覧』<全四冊>、中華書局出版、1960年2月第一版 1995年10月第5次印刷、p.4146 | 唐代 | ●晉書曰杜預先在荊州因宴集醉臥齋中外人聞嘔吐聲竊窺於戸而見一大蛇垂頭而吐聞者異之 |
| 3 | 『太平廣記』巻456引『劉氏小說』「杜預」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3727-3728 | 唐代 | ●杜預為荊州刺史。鎮襄陽時。有讌集。大醉。閉齋獨眠。不聽人前。後嘗醉。外聞（聞原作有。據明鈔本改。）齋中嘔吐。其聲甚苦。莫不悚慄。有一小吏。私開戸看之。正見牀上一大蛇。垂頭牀邊吐。都不見人。出密道如此。出《劉氏小說》 |

### 4.2.1 日本における蛇の変身譚（蛇が人間に変身するパターン）

| # | 出典 | 出典の詳細情報 | 時代 | 原文 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『古事記』中つ巻「垂仁天皇」（〔三〕本牟智和気の御子） | 山口佳紀、神野志隆光校注・訳『古事記』、新編日本古典文学全集1、小学館、2007年8月5日第一版第七刷発行、pp. 208 | 奈良時代 | ●爾、其御子、一宿、婚肥長比売。故、窃伺其美人者、蛇也。即、見畏遁逃。爾、其肥長比売、患、光海原自船追來。故、益見畏以、自山多和、（此二字以音。）引越御船、逃上行也。 |
| 2 | 『古事記』中つ巻「垂仁天皇」（〔三〕本牟智和気の御子） | 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守校注・訳『日本書記』①＜全三冊＞、新編日本古典文学全集2、小学館、2006年6月20日第一版第四刷発行、p. 282-283 | 奈良時代 | ●是後倭迹迹日百襲姫命爲大物主神之妻。然其神常昼不見、而夜来矣、倭迹迹姫命語夫曰、君常昼不見者、分明不得視其尊顔。願暫留之。明旦仰欲覲美麗之威儀。大神対曰、言理灼然。吾明旦入汝櫛笥而居。願無驚吾形。爰倭迹迹姫命、心裏密異之。待明以見櫛笥、遂有美麗小蛇。其長大如衣紐。則驚之叫啼。時大神有恥忽化人形、謂其妻曰、汝不忍令羞吾。吾還令羞汝。仍踐大虚、登于御諸山。爰倭迹迹姫命、仰見而悔之急居（急居、此云菟岐于）。則箸撞陰而薨。乃葬於大市。故時人号其墓謂箸墓也(以下略) |
| 3 | 『風土記』「肥前国風土記」（[八]松浦の郡） | 植垣節也校注・訳『風土記』、新編日本古典文学全集5、小学館、2006年8月20日第一版第五刷発行、p. 330－331 | 奈良時代 | ●褶振峰。（在郡東。烽処名曰褶振烽。）大伴狭手彦連、発船渡任那之時、弟日姫子、登此、用褶振招。因名褶振峰。然弟日姫子、與狭手彦連相分、経五日之後、有人毎夜来、與婦共寝、至暁早帰。容止形貌、似狭手彦。婦抱其恠、不得忍默、窃用纻麻、繋其人襴。隨麻尋往、到此峰頭之沼辺、有寝蛇、身人而沈沼底、頭蛇而臥沼脣。忽化為人、即語云:志怒波羅能、意登比売能古素、佐比登由母、為禰弖牟志太夜、伊幣爾、久太佐牟也。于時、弟日姫子之從女、走告親族。親族発眾、昇而看之、蛇并弟日姫子、並亡不存。於茲、見其沼底、但有人屍。各謂:「弟日女子之骨。」即就此峰南、造墓治置。其墓見在。 |
| 4 | 『風土記』「常陸国風土記」([八]那賀の郡) | 植垣節也校注・訳『風土記』、新編日本古典文学全集5、小学館、2006年8月20日第一版第五刷発行、p. 404 | 奈良時代 | ●茨城里、自此以北、高丘、名曰晡時臥之山、<br>古老曰:有兄妹二人、兄名努賀毗古、妹名努賀毗咩、時妹在室、有人、不知姓名、常就求婚、夜来昼去、遂成夫婦、一夕懐妊、至可產月、終生小蛇、明若無言、闇與母語、於是、母伯驚奇、心挾神子、即盛淨杯、設壇安置、一夜之間、已滿杯中、更易瓮而置之、亦滿瓮內、如此三四、不敢用器、母告子云:「量汝器宇、自知神子、我屬之勢、不可養長、宜從父在、不合有此者、」時子哀泣、拭面答云:「謹承母命、無敢所辭、然、一身獨去、無人共右、望請、矜副一小子、」母云:「我家所有、母與伯父、是亦、汝明所知、當無人可相從、」爰、子含恨而事不吐之、臨決別時、不勝怒怨、震殺伯父而昇天、時母驚動、取盆投之、觸子不得昇、因留此峰、所盛瓮・甕、今存片岡之村、其子孫、立社致祭、相續不絕 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 5 | 『法華験記』下-123「山城国久世郡女人」 | 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系7、岩波書店、1974年第1刷発行、p.565 | 平安時代 | ●山城国久世郡有一女人。（中略）深有善心。（中略）即得此蟹。以憐愍放入河中。其女人父翁。耕作田畠。有一毒蛇。追蝦蟇来。即為済之。翁不意曰。汝蛇当免蝦蟇。若免捨者。以汝為聟。（中略）臨初夜時。有叩門人。翁知此蛇来。語女女言語。過三日来。可作約束。翁開門見。五位形人云。依今朝語所参来也。（中略）至初夜時。五位来。開門入来。見女籠蔵代。生忿恨心。現本蛇形。囲巻蔵代。（中略）及明朝見之。大蟹為上首。千万蟹集。螫殺此蛇。諸蟹皆還去。（中略）為救蛇苦及他蟹罪苦。其地建寺。造仏写経。供養恭敬。其寺名蟹満多寺（以下略） |
| 6 | 『法華験記』下-93「金峰山転乗法師」 | 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系7、岩波書店、1974年第1刷発行、p.554-555 | 平安時代 | ●沙門転乗。（中略）天性剛急。有恚憤心。…誦法華経。既得誦六巻。昼夜不退誦之。於七八巻無暗誦志。（中略）有竜冠夜叉形人。天衣瓔珞而厳身。…語転乗言。依無宿因。不誦二巻也。汝於先世受毒蛇身。（中略）毒蛇聞経。止毒害心。閉目納毒氣。一心聞経。至第六巻夜至天暁。不誦七八二巻。聖人出去。而其毒蛇者汝身是也。止欲害心聞法華故。転於多劫輪廻毒身。今得人身。作法華者。（以下略） |
| 7 | 『今昔物語集』巻14-17「金峰山僧転乗持法花知前世語第十七」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集35、1999年4月20日第一版第一刷発行、pp.450-452 | 平安時代 | ●今昔、金峰山ニ僧有ケリ。名ヲバ転乗トゾ云ケル。大和国ノ人也ケリ。心極テ猛クシテ、常ニ嗔恚ヲ発シケリ。幼ノ時ヨリ法花経ヲ受ケ習テ日夜ニ読誦シテ、暗ニ思エ奉ラムト思フ志有テ年来誦スルニ、既ニ六巻ヲバ思エヌ。其レニ、七八ノ二巻ヲバ思エ奉ラムト為ル心無シ。而ルニ、「尚、七八ノ二巻ヲ思エム」ト思テ、誦シ浮ブルニ、年月ヲ経ト云ヘドモ更ニ思ユル事無シ。（中略）安居ノ畢ノ比ニ成テ、転乗夢ニ、竜ノ冠シタル夜叉形ノ人ノ天衣瓔珞ヲ以テ身ヲ荘テ、手ニ金剛ヲ取リ、足ニ花薬ヲ踏テ、眷属ニ被囲遶レテ来テ、転乗ニ告テ云ク、汝ヂ縁無ニ依テ此ノ七八ノ二巻ヲ暗ニ不思エズ。汝ヂ前世ニ毒蛇ノ身ヲ受タリキ。其ノ形チ長ク大ニシテ、三尋半也。播磨ノ国赤穂ノ郡ノ山駅ニ住シキ。其ノ時ニ、一人ノ聖人有テ其ノ駅ノ中ニ宿ス。毒蛇棟ノ上ニ有テ思ハク、「我レ、飢渇ニ会テ、久ク不食ズ。而ルニ、希ニ此ノ人此ノ駅ニ来宿セリ。今此ノ人ヲ我レ可食シ」ト。爰ニ、聖人蛇ニ被食ナムト為ル事ヲ知テ、手ヲ洗ヒ口ヲ濯ギ、法花経ヲ誦ス。毒蛇経ヲ聞テ、忽ニ毒害ノ心ヲ止メテ、目ヲ閉テ一心ニ経ヲ聞ク。第六ノ巻ニ至ル時、夜暫ヌレバ、七八ノ二巻ヲ不誦ズシテ、聖人其ノ所ヲ出デ、去ヌ。其ノ毒蛇ト云フハ今ノ汝ガ身也。害ノ心ヲ止メテ法花ヲ聞シニ依テ、多劫ヲ転ジテ人身ヲ得テ、僧ト成テ法花ノ持者ト有リ。但シ、七八ノ二巻ヲ不聞ザリキ。故ニ今生ニ暗ニ誦スル事ヲ不得ズ。亦、汝ヂ心猛クシテ常ニ嗔恚ヲ発ス事ハ、毒蛇ノ習気也。汝ヂ一心ニ精進シテ法花経ヲ可読誦シ。今生ニハ求メム所ヲ皆得テ、後生ニハ生死ヲ離レム」ト云フ、ト見テ夢メ覚ヌ。転乗深ク道心ヲ発シテ、弥ヨ法花ヲ誦ス。遂ニ、転乗嘉祥二年ト云フ年、貴クシテ失ニケリトナム語リ伝ヘタルトヤ。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 8 | 『今昔物語集』巻16-16「山城国女人依観音助遁蛇難語第十六」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』②、新編日本古典文学全集36、2003年7月20日第一版第二刷発行、pp.207-211 | 平安時代 | ●今昔、山城ノ国、久世ノ郡ニ住ケル人ノ娘、年七歳ヨリ観音品ヲ受ケ習テ読誦シケリ。毎月ノ十八日ニハ精進ニシテ、観音ヲ念ジ奉ケリ。十二歳ニ成ルニ、遂ニ法花経一部ヲ習ヒ畢ヌ。幼キ心也ト云ヘドモ、慈悲深クシテ人ヲ哀ビ、悪キ心無シ。而ル間、此ノ女家ヲ出デヽ、遊ビ行ク程ニ、人蟹ヲ捕ヘテ結テ持行ク。（中略）女蟹ヲ得テ、河ニ持行テ放チ入レツ。其ノ後、女ノ父ノ翁、田ヲ作ル間ニ、毒蛇有テ、蝦ヲ呑ガ為ニ追テ来ル。翁此レヲ見テ、蝦ヲ哀テ、蛇ニ向テ云ク、「汝ヂ、其蝦ヲ免セ。我ガ云ハムニ随テ免シタラバ、我レ汝ヲ聟ト為ム」ト不意ズ騒ギ云ヒツ。蛇、此レヲ聞テ、翁ノ顔ヲ打見テ、蝦ヲ弃テ、藪ノ中ニ這入ヌ。翁、「由無キ事ヲモ云テケルカナ」ト思テ、家ニ返テ、此ノ事ヲ歎テ、物ヲ不食ズ。妻幷ニ此ノ娘、父ニ問テ云ク、「何ニ依テ物ヲ不食シテ、歎タル氣色ナルゾ」ト。父ノ云ク、「然々ノ事ノ有ツレバ、我レ、不意ニ騒テ然カ云ツレバ、其レヲ歎ク也」ト。娘ノ云、「速ニ物可食シ。歎キ給フ事無カレ」ト。然レバ、父娘ノ云ニ随テ物ヲ食テ不歎ズ。而ル間、其ノ夜ノ亥時ニ臨テ、門ヲ叩ク人有リ。父、「此ノ蛇ノ来タルナラム」ト心得テ、娘ニ告ルニ、娘ノ云ク、「『今三日ヲ過テ来レ』ト約シ給ヘ」ト。父、門ヲ開テ見レバ、五位ノ姿ナル人也ド、云ク、「今朝ノ約ニ依テ参リ来レル也」ト。父ノ云ク、「今ヲ三日ヲ過テ可来給シ」ト。五位、此ノ言ヲ聞テ、返ヌ。其ノ後、此ノ娘、厚キ板ヲ以テ倉代ヲ令造メテ、廻ヲ強ク固メ拈テ、三日ト云フタニ、其ノ倉代ニ入居テ、戸ヲ強ク閇テ、父ニ云ク、「今夜、彼ノ蛇来テ門ヲ叩カバ、速ニ可開シ。我レ偏ニ観音ノ加護ヲ憑ム也」ト云ヒ置テ、倉代ニ籠居ヌ。初夜ノ時ニ至ルニ、前ノ五位来テ門ヲ叩クニ、即チ、門ヲ開ツ。五位入来テ女ノ籠居タル倉代ヲ見テ、大ニ怨ノ心ヲ発シテ、本ノ蛇ノ形ニ現ジテ、倉代ヲ囲ミ巻テ、尾ヲ以テ戸ヲ叩ク。（中略）夜明テ見レバ、大ナル蟹ヲ首トシテ、千万ノ蟹集リ来テ、此ノ蛇ヲ螫殺テケリ。蟹共皆這去ヌ。<br>（中略）此レ偏ニ観音ノ加護ニ依テ、此ノ難ヲ免レヌル也」ト。父母、此ヲ聞テ、喜ブ事無限シ。其ノ後、蛇ノ苦ヲ救ヒ、多ノ蟹ノ罪報ヲ助ケムガ為ニ、其ノ地ニ握テ、此ノ蛇ノ屍骸ヲ埋テ、其ノ上ニ寺ヲ立テヽ、仏像ヲ造リ、経巻ヲ寫シテ、供養シツ。其ノ寺ノ名ヲ蟹満多寺ト云フ。其ノ寺于今有リ。其レヲ、世ノ人、和カニ紙幡寺ト云フ也ケリ、本縁ヲ不知ザル故也。此レヲ思ニ、彼ノ家ノ娘、糸、只者ニハ非ズトゾ思ユル。観音ノ霊験不可思議也トゾ世ノ人貴ビケル、トナム語リ伝ヘタルトヤ。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 9 | 『今昔物語集』巻31-34「大和国箸墓語第三十四」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』④、新編日本古典文学全集38、2008年12月24日第一版第三刷発行、pp.575-577 | 平安時代 | ●今昔、□天皇ト申ケル帝一人ノ娘御ケリ。形チ有様端正也ケレバ、天皇母后悲ビ、傅キ給フ事無限シ。此ノ娘未ダ娶給フ事モ無キ間ニ、誰トモ不知ヌ人ノ極ク気高キ、娘ノ御許ニ忍テ来テ云ク、「我レ、君ト夫婦ト成ラムト思フ」ト。娘ノ宣ハク、「我レ未ダ男ニ觸這フ事無シ。何カ輒ク君ノ言バニ随ハム。亦父母ニ此ノ由ヲ不申シテハ不可有ズ」ト。男ノ云ク、「譬ヒ父母知給ヘリトモ、悪キ事不有ジ」ト。如此ク夜々来テ語フト云ヘドモ、近付ク事無シ。而ル間、娘、天皇ニ申シ給フ、「然々有ル人ナム夜々来テ如此ク申ス」ト。天皇ノ宣ハク、「其レハ人ニハ非ジ、神ノ来宣フ事ナヽリ」ト。然ル程ニ、娘遂ニ近付キ給ヒニケリ。其後ハ互ニ相思テ過給ヒケルニ、誰人トモ不知ネバ、女男ニ申シ給フ様、「我レ、君ヲ誰トモ不知ネバ、極テ不審シ。何クヨリ御スルゾ。我レヲ實ニ思ヒ給ハヾ、隠シ無ク誰人ト宣ヘ、亦御スラム所ヲモ知セ給ヘ」ト。男ノ云ク、「我レハ此ノ近キ辺ニ侍ル也。我ガ体ヲ見ムト思サバ、明日其ノ持給ヘル櫛ノ箱ノ中ニ有ル油壷ノ中ヲ見給ヘ。然テ其レヲ見給フトモ、恐チ怖ルヽ心無クテ御セ。若シ愕給ハヾ我ガ為ニ極テ難堪カリナム」ト。女、「更ニ不愕ジ」ト宣テ、明ヌレバ男返リ給ヌ。其ノ後、女櫛ノ箱間テ油壷ノ中ヲ見給フニ、壷ノ内ニ動ク者リ。「何ノ動クゾ」ト思テ持上テ見給ヘバ、極テ小キ蛇蟠テ有リ。油壷ノ内ニ有ラム蛇ノ程ヲ思ヒ可遣シ。女此レヲ見給フマヽニ、然コソ「不愕ジ」ト契シカドモ、大キニ愕テ音ヲ挙テ弃テ逃去ヌ。其ノ宵男来レリ。例ニ非ズ氣色糸悪クテ、女ニ□事無シ。女、「怪シ」ト思テ寄給ルニ、男ノ宣ハク、「然許申シ事ヲ不用給ズシテ愕給フ事、極テ情無キ事也。然レバ我レ今ハ参リ不来ジ」トテ、極ク半無氣ナル氣色ニテ返リ給フヲ、女、「然許ノ事ニ依テ『不来』ト有ルコソ口惜ケレ」トテ、引カヘ給フ時ニ、女ノ前ニ箸ヲ々立テ、女即チ死給ヌレバ、天皇・后歎キ給フト云ヘドモ更ニ甲斐無クテ止ニケリ。然テ其ノ墓ヲバ大和国ノ城下ノ郡ニシタリ。箸ノ墓トテ于今有ル其レ也トナム語リ伝ヘタルトヤ。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 10 | 『今昔物語集』巻16-15「仕観音人行竜宮得富語第十五」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』②、新編日本古典文学全集36、2003年7月20日第一版第二刷発行、pp. 200-207 | 平安時代 | ●今昔、京ニ有ケル年若キ男有ケリ。誰人ト語リ不伝ヘス。侍ナルベシ。身貧クシテ、世ヲ過スニ便無シ。而ルニ、此ノ男毎月ノ十八日ニ持斉シテ、殊ニ観音ニ仕ケリ。亦、其ノ日、百ノ寺ニ詣デヽ、仏ヲ礼シ奉ケリ。<br>(中略) 年五十許ナル男値タリ。杖ノ崎ニ物ヲ懸テ持タリ。「何ヲ持タルゾ」ト見レバ、一尺許ナル小蛇ノ斑ナル也。行キ過ル程ニ見レバ、此ノ小蛇動ク。<br>(中略) 若キ男ノ云ク、「然ラバ、此ノ着タル綿衣ニ替ヘヨ」ト。蛇持、「其レニハ替ヘテム」ト云ヘバ、男衣ヲ脱テ与フルニ、衣ヲ取テ蛇ヲ男ニ与ヘテ去ルニ、男ノ云ク、「此ノ蛇ハ何コニ有ツルゾ」ト問ヘバ、「彼シコナル小池ニ有ツル也」ト云テ、遠ク去ヌ。其ノ後、其ノ池ニ持行テ、可然キ所ヲ見テ砂ヲ崛リ遣テ、冷シク成シテ放タレバ、水ノ中ニ入ヌ。心安ク見置テ、男、寺ノ有ル所ヲ差テ行ケバ、二町許行キ過ル程ニ、年十二三許ノ女ノ形チ美麗ナル、微妙ノ衣・袴ヲ着タル、来リ會ヘリ。男、此レヲ見テ、山深ク此レ値ヘレバ「奇異也」ト思フニ、女ノ云ク、「我レハ、君ノ心ノ哀レニ喜ケレバ、其ノ喜ビ申サムガ為ニ来ル也」ト。男ノ云ク、「何事ニ依テ喜ビハ宣ハムゾ」ト。女ノ云ク、「己レガ命ヲ生ケ給ヘルニ依テ、我レ、父母ニ此ノ事ヲ語ツレバ、『速ニ迎ヘ申セ。其ノ喜ビ申サム』ト有ツレバ、迎ニ来レル也」ト。男、「此ハ有ツル蛇カ」ト思フニ、哀ナル物カラ怖シクテ、「君ノ父母ハ何ニゾ」ト問ヘバ、「彼也。我レ、将奉ム」ト云テ、有ル池ノ方ニ将行クニ、怖シケレバ、遁レムト云ヘドモ、女、「世モ御為ニ悪キ事ハ不有ジ」ト強ニ云ヘバ、懃ニ池ノ辺ニ具シテ行ヌ。(中略) 既ニ行畢テ、中殿ト思シキ所ヲ見レバ、色々ノ玉ヲ以テ荘テ、微妙ノ帳・床ヲ立テヽ、耀キ合ヘリ。「此ハ極樂ニヤ」ト思フ程ニ、暫ク有テ、氣高ク怖シ氣ニシテ、鬢長ク年六十許ナル人、微妙ニ身ヲ荘リテ、出来テ云ク、「何ラ、此方ニ上リ給ヘ」ト。(中略) 男、「此レハ、蛇ノ祖也ケリ」ト心得ツ。此ノ人、人ヲ呼ブニ、氣高ク怖シ氣ナル者共来レリ。「此ノ客人ニ主ジ仕レ」ト云ヘバ、微妙ノ食物ヲ持来テ居ヘタリ。自モ食ヒ、男ニモ「食ヘ」ト勧ムレバ、心解テモ不思ネドモ食ヒツ。其ノ味ヒ、甘キ事無限シ。下シナド取リ上グル程ニ、主人ノ云ク、「己レハ、此レ、龍王也。此ニ住テ久ク成ヌ。此ノ喜ビニ、如意ノ珠ヲモ可奉ケレドモ、日本ハ人ノ心悪シクシテ、持チ給ハム事難シ。然レバ、其コニ有ル箱取テ来レ」ト云ヘバ、塗タル箱ヲ持来レリ。開クヲ見レバ、金ノ餅一ツ有リ、厚サ三寸許也。(中略) 其ノ後、人ニ不語ズシテ、窃ニ此ノ餅ノ片破ヲ破リツヽ要ノ物ニ替ヘケレバ、貧キ事無シ、万ノ物豊ニテ冨人ト成ニケリ。此ノ餅、破レドモ破レドモ同ジ様ニ成リ合ヒツヽ、有ケレバ、男、一生ノ間極タル冨人トシテ、弥ヨ観音ニ仕ケリ。一生ノ後ハ、其ノ餅失セテ、子ニ伝フル事無カリケリ。懃ニ観音仕レルニ依テ、龍王ノ宮ヲモ見、金ノ餅ヲモ得テ、冨人ト成ル也ケリ。此レ、何レノ程ノ事ト不知ズ、人ノ語ルヲ聞テ伝ヘテ語リ伝ヘタルトヤ |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 11 | 『平家物語』巻８「緒環」 | 市古貞次校注・訳『平家物語』②＜全2冊＞、新編日本古典文学全集46、小学館、2006年8月20日第一版第五刷発行、pp. 113-115 | 鎌倉時代 | ●彼維義はおそろしき者の末なりけり。たとへば、豊後国の片山里に昔をんなありけり。或人のひとり娘、夫もなかりけるがもとへ、母にも知らせず、男よなくかよふ程に、とし月もかさなる程に、身もただならずなりぬ。母是をあやしむで、「汝がもとへかよふ者は何者ぞ」と問へば、「くるをば見れども、帰るをばしらず」とぞいひける。「さらば男の帰らむとき、しるしを付けて、ゆかむ方をつないで見よ」とをしへければ、娘、母のをしへにしたがッて、朝帰する男の水色の狩衣を着たりけるに、狩衣の頸かみに針をさし、しづの緒環といふものをつけて、へてゆくかたをつないでゆけば、豊後国にとッても日向ざかひ、優婆岳といふ嵩の裾、大きなる岩屋のうちへぞつなぎいれたる。をんな岩屋のくちにたたずんで聞けば、おほきなる声してによひけり。「わらはこそ是まで尋ね参りたれ。見参せむ」といひければ、「我は是人のすがたにはあらず。汝すがたを見ては肝たましひも身にそふまじきなり。とうく帰れ。汝がはらめる子は男子なるべし。弓矢打物とッて九州二島にならぶ者もあるまじきぞ」とぞいひける。女重ねて申しけるは、「たとひいかなるすがたにてもあれ、此日来のよしみ何とてか忘るべき。互にすがたをも見もし見えむ」といはれて、「さらば」とて、岩屋の内より、臥だけは五六尺、跡枕べは十四五丈もあるらむとおぼゆる大蛇にて、動揺してこそはひ出でたれ。狩衣のくびかみにさすと思ひつる針は、すなはち大蛇ののウぶえにこそさいたりけれ。女是を見て、肝たましひも身にそはず。ひきぐしたりける所従十余人倒れふためき、をめきさけむでにげさりぬ。女帰て程なく産をしたれば、男子にてぞありける。母方の祖父太大夫そだてて見むとてそだてたれば、いまだ十歳にもみたざるに、せいおほきにかほながく、たけたかかりけり。七歳にて元服せさせ、母方の祖父を太大夫といふ間、是をば大太とこそつけたりけれ。夏も冬も手足におほきなるあかがりひまなくわれければ、あかがり大太とぞいはれける。件の大蛇は日向国にあがめられ給へる高知尾の明神の神体なり。此緒方の三郎は、あかがり大太には五代の孫なり。かかるおそろしき者の末なりければ、国司の仰せを院宣と号して、九州二島にめぐらしぶみをしければ、しかるべき兵ども維義に随ひつく。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 12 | 御伽草子：『田村の草子』 | 横山重　松本隆信編『室町時代物語大成』第九（全十五巻）、角川書店、昭和六十二年六月三十日四版発行（1987年）、pp.80-84 | 室町時代 | ●（前略）かゝりける所に、いつくより、きたるともしらず、いとうつくしき女の、おさよふ月に、うちむかひ、よむことの葉そ、あはれなる（中略）いは木ならぬさまにて、おなしくるまにて、帰り給ひ、ひよくのちきりを、なし給ふに、ほとなく、くわいにんし給ふ、俊祐、大きによろこひ給ひて、我すてに五十になるまて、子といふもの、なかりつるに、かゝる事こそ、うれしけれとて、いよく、かしつき給ふ<br>かくて、月日かさなるまゝに、御さんのよういう、有けれは、女房仰られけるは、いまた十つきにては、あへからず、三年といはん正月に、たんじやう成へし（中略）去程に、さん屋に入給ふとき、殿にむかひ、我さん屋に入て、七日より内に、人かよふへからす、八日にならは、かならす参るへしとて、ろう門の内へ入給ふ<br>将軍、今一日またん事、千年をふる、心ちしけれは、待かねて、七日めに、たちのそき給へは、うちには、大木の松三本、さかき七本、おひ出たり、光明かくやくとして、日月のことし<br>いかなる事やらんと、あやしく思ひて、見給ふに、百ひろあまりの、大しやなるか、二つのつのゝ間に、三さい計なる、うｔくしき子をのせて、くれなゐのしたを出して、ねふりあひしてこそ、あそひけれ、日月と見えつるは、まなこなり<br>（中略）八日と申に、ありしすかたにて、いつくしきわか君を、いたき参らせて、ろう門より、おり給ひて、仰けるは、七日をすくして、御らんさふらはゝ、日本のあるしと、なし奉るへしと思ひつれ共、我ほんたいを、御らんじたる間、かなはす<br>（中略）我はますたか池の、大しや也、しよてんせんしの、仰にしたかひ、かりにいもせのかたらひを、なしつる也、いとま申て、さらはとて、かきけす様に、うせにけり<br>かやうにおそろしき、大しやとは、しり給へ共、三とせか間、なれし名残の、おしき事、たとへん方もなくて、たゝなみたにむせひ、たち給ふ(以下略) |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 13 | 御伽草子：『俵藤太物語』 | 松本隆信校注『御伽草子集』、新潮日本古典集成（第三四回）、新潮社、昭和五十五年（1980年）、pp. 89-111 | 室町時代 | ●（前略）しかるにその頃、近江の国瀬田の橋には大蛇の横たはり臥せりて、上下の貴賤行き悩むことあり。（中略）もとより秀郷は大剛の男子なれば、少しも憚らず、かの大蛇の背中をむずむずと踏んで、あなたへ通りけり。されども大蛇は、あへて驚く気色もなし。秀郷も後ろをかへり見ず、はるかに行き隔たりぬ。（中略）さるほどに秀郷、辞退するに及ばねば、ゐたる所をつい立ちて、門外に出でて見てあれば、二十あまりの女性ただ一人佇みゐたり。そのかたちを見るに、容顔美麗にして、あたりもかがやくほどなり。髪のかかり麗はしう、さながら此の世の人とは思はれず。あやしさはかぎりなし。（中略）かの女房藤太かそばにさし寄り、小声に申すやう、「まことに、わらはを見知り給はぬこそことわりなれ。われはこれ世の常の人にあらず、今日しも、瀬田の唐橋にてまみえ申せし大蛇の、変化したる女なり。」とぞ申しける。<br>藤太此の由聞きて、さればこそと思ひ、「さて、いかなることの子細にか、変化して来り給ふ。」と申されければ、女房申すやう、「…わらは近江の湖に住むなり（中略）元正天皇と申す帝の御時に、日本第二のゐんこの神、かの湖水のほとり三上の嶽に天降らせ給ふ。それよりをちつかた、かの山に百足といふもの出で来て、野山の獣、恒河の鱗を食ること年久し。これにわらはが類、たびたびかれに服せられ、三熱の苦しみの上に、愁歎の涙乾くひまなし。いかにもしてこの敵を滅ぼし、安全の古へになさばやと、謀をめぐらすといへども、わらはが類としてたやすく平らげんこと叶ひがたし。もし人間にしかるべき器量の人ましまさば、ちなみ寄りて頼み侍らばやと思ひ、瀬田の橋に横たはつて、往来の人をうかがふに、つひにあたりへ近づく者もなし。かかるところに、今日の御辺の御振舞、まことにたへがたき御心根かな。此の上は、かの敵を滅ぼさん人は、御身にかぎりてあるべからずと、頼み申して参りたり。わが国の安危は御言葉によるべし。」とて、まことに余儀なき有様なり。<br>　藤太（中略）「時剋をめぐらさず、今夜の中にまかりて、かの敵を滅侍るべし。」と申しければ、女房なのめに悦びてかき消すやうに失せにけり。（中略）さても龍女のたまふやうは、「（中略）君を我が故郷に具し参らせばやとの願ひにて、これまで妾わらはは御迎へのために参りたり」（中略）かの龍女とうち連れ龍宮へと急ぎけり。（中略）さるほどに龍女は田原藤太秀郷をさまざまにもてなし、慰め給ひけるほどに、やうやう時刻も移りければ、藤太は大王に暇を乞ひ龍宮を出でられける。（中略）「それに就き龍王の引出物に、黄金作りの剣、黄金札の鎧、赤銅の釣鐘を賜はりたり。剣鎧は武士の重宝なれば、末代子孫に相伝すべし、鐘は梵刹の物なれば俗の身にしたがへ詮もなし、三宝へ供養すべし。されば南郡へや奉らん。比叡山へや奉らん」と申されければ（以下略） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 14 | 御伽草子：『天稚彦草子』 | 松本隆信校注『御伽草子集』、新潮日本古典集成（第三四回）、新潮社、昭和五十五年（1980年）、pp. 77-85 | 室町時代 | ●昔、長者の家の前に、女、物洗ひてありける。大きなる蛇出で来て言ふやう、「わが言はんこと聞きてんや、聞かぬものならば、押し巻きてん」といへば、女、「何事にか侍らん、身に耐へんほどのことは、いかでか聞き侍らでは」といへば、蛇、口より文を吐き出だして、「この内の長者に、この文を取らせよ」と言ふ。持ちて往ぬ。やがて開けて見るに、「三人の娘賜べ。取らせずば、父をも母をもとり殺してん、その設けの屋には、そこそこの池の前に釣殿をして、十七間の家を作りたるに、わが身はそれにはばかるぞ」と言ひたり。これを父母見て、泣く事かぎりなし。<br>大娘を呼びて言へば、「あな思ひかけず。死ぬる色なりとも、さる事はし候はじ」と言ふ。中娘にいへば、それも同じことに言ふ。三の娘は、一の愛し子にてありければ、泣く泣く呼びて言へば、「父母とらせんよりは、われこそいかにもならめ」と言ふ。あはれさかぎりなくて、泣く泣く出だし立つ。蛇は言ひたりし池の前に家を造りて、出で往ぬ。（中略）姫君、生きたる死にたるかと思ひて、恐ろしさせん方なく、あるかなきかにて居たるに、十七間にはばかるほどの蛇来て言ふやう、「われを恐ろしと思ふことなかれ、もし刀や持ちたる。わが頭斬れ」と言へば、恐ろしさ、悲しけれども、爪切り刀にて易く斬れぬ。直衣着たる男の、まことに美しきが走り出でて、皮をばかいまとひて、小唐櫃に入りて、二人臥しぬ。恐ろしさも忘れて、語らひ臥しぬ。かくあひ思ひて住む程に、よろづの物多くてありける所なりければ、取り出して無き物なく、楽しきことかぎりなし。従者眷属、多くあるほどに、この男言ふやう、「われは、まことには、海龍王にてありしが、又、空にも通ふことのあり、この程に行くべき事あれば、明日明後日ばかり、空へ昇りなんずるぞ。（中略）<br>「さても心苦しき事のあるべきをば、いかがし侍るべき。父にて侍る人は鬼にて侍る。かくておはすると聞きては、いかがしきこえんと、わびしき」とのたまふに、いとあさましけれど、思うのか辛いと宣ふに、いと浅ましけれど、「よしや、さまざま心つくしなりける身の契りなれば、それもさるべきにこそ。ここを憂しとても、また立ち帰るべきならねば、あるにまかせて」と、おぼしけり。（中略）「しかるべきにこそあるらめ、もとのやうに天稚彦と住み逢はんことは、月に一度ぞ」と言ひけるを、女房悪しく聞きて、「年に一度とおほせらるるか」と言へば、「さらば年に一度ぞ」とて、嵐をもちて、投げ打ちに打ちたりけるが、これが天の川となりて、七夕、彦星とて、年に一度、七月七日に逢ふなり。 |
| 15 | 御伽草子：『浄瑠璃十二段草紙』 | 松本隆信校注『御伽草子集』、新潮日本古典集成（第三四回）、新潮社、昭和五十五年一月十日発行、pp. 11-15 | 室町時代 | ●（前略）かくて、百日満ずる暁がたに、仏は八十ばかりなる老僧に現じ給ひつつ、皆水晶の数珠つまぐり、長者御前の枕上に立ち寄り、「（中略）子種のなきいはれを語り聞かせ候ふべし。たかの沼と申す所に池あり。かの池の深さ八万由旬なり。汝が丈を申せば十六丈なり、この大蛇多く人を取り、生き物、鳥類を亡ぼしたるにより、汝に子種はなきぞよ。矢矧の長者に生るるころは、かの池のほとりに観音堂あり。この御堂に貴き御僧一人まします。かの池の主成仏せよとて、夜昼法華妙典を行ひ、汝に回向し給ふ。かの御経を聴聞したりし功力により、ほどなく矢矧の長者に生れたり」（以下略） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 16 | 御伽草子：『法妙童子』 | 横山重、松本隆信編『室町時代物語大成』第十二（全十四巻）、角川書店、昭和五十九年二月二十九日初版発行（1984年）、pp. 380-383 | 室町時代 | ●（前略）まことに、しよぶつぼさつも、かのどうじを、あはれとやおぼしめし、こくうに、をんがくのこゑひゞきしか、あつとおもひ、目をひらき、御らんずれはぢやうやのごとく、くらかりし、いはやのうち、たちまちに、くわうみやうの、ひかりさして<br>しうんそらに、たなひき、いきやうくんじ、さもおそろしかりつる、いはやも、たちまち、じやうどゝへんじ、かの大じやも、らいかうのうちに、十六の角をれ、かうべをうなだれて、いたりけり<br>しやうじゆ、たちより給ひて、御そでをもつて、どくじやがたを、たちまちに、ひるかへし<br>おそろしかりつる、ありさまも、いつくしき十七八の、をのことなり、どうじのまへに、かしこまり、なみたを、はらくとながし、申けるは<br>さてもありがたき、しだひかな、われいかなる、ざいどうふかき身にて、あるやらん、此とし月、此いはやに、すみなれまいらせて、人をとり、ぶくする事、をよそ九百九十九人なり<br>いま仙人にあたり申とき、かやうにたつとき、せうじんにあひたてまつり、御ゐんだうに、あづかりけり<br>（中略）また、わか身も、たりきほんぐわんの、にうかうにうくわうちに、おもきざいこうの身を、ひがんのもつて、いまははや、ほんがくのみやこにいたるなり、ありがたしくとて、三ど、らひしけり<br>此うへは、せうじんも、いそき、こきやうへ帰らせ給へ、われは、九ほんのじやうどに、むまるゝなりと、申せは、どうじ、うれしく、おもひ、たがひに、なみたを、ながしけり（以下略） |
| 17 | 説経節：『小栗判官』 | 荒木繁・山本吉左右編注『説経節　山椒太夫・小栗判官他』、東洋文庫243、1988年初版第16刷発行、pp. 204-205 | 江戸時代 | ●深泥が池の大蛇は、この笛の音を聞き申し、「あらおもしろの笛の音や、この笛の男を、一目拝まばや」と思いつつ、十六丈の大蛇は、二十丈に伸び上がり、小栗殿を拝み申し、「あらいつくしの（美しい）男や。あの男と、一夜の契りを、こめばや」と、思いつつ、年の齢、数うれば、十六七の美人の姫と、身を変じ、鞍馬の一の階に、よしあり顔にて、立ちいたる。小栗、このよし御覧じて、これこそ、鞍馬の利生とて、玉の輿に、とって乗せ、二条の屋形に、御下向なされ、山海の珍物に、国土の菓子を、調えて、御喜びは、かぎりなし。しかれども、好事、門を出でず、悪事、千里を走る。錐は、袋を通すとて、都童もれ聞いて、二条の屋形の小栗と、深泥が池の大蛇夜な夜な通い、契りをこむるとの、風聞なり。父兼家殿は、聞こしめし、（中略）壱岐、対馬へも流そう」との、御諚なり。（以下略） |
| 18 | 『新著聞集』巻10-26「蛇變じて人に交り懐胎して初て知る」 | 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫 / 博文館編輯局校訂 第47編、博文館、1903年、pp. 146-147 | 江戸時代 | ●豫州宇和郡藤田村の庄屋六兵衛。未進の事に付て。一里半隔てし城下に來りて。心ならず逗留せしに。宿へは夜ごとに夫歸りて女房と同じ床に臥ぬ。女はじめは實の男なりとおもひしに。後懐胎して殊に悩みしに。傍らに蛇來りて守り居けるを。人々おどろき追ちらせば。病人それ殺すな。由あるぞといふ。やうやく產をせしに。繩の様につゞきて蛙の子に齊しき物を一斗ばかり產で死しけり。かの女病中に下女にかたりしは吾夫夜なく歸りとおもひしに。夫にはあらで蛇にてありしをしらざる事のかなしさよ。我は活ながら畜生道に墮なんとて泣けるとかや。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 19 | 『雨月物語』巻4「蛇性の婬」 | 中村幸彦、中村博保、高田衛校注・訳『英草紙　西山物語　雨月物語　春雨物語』、新編古典文学全集78、2003年7月20日第一版第三刷発行、pp. 357-387 | 江戸時代 | ●いつの時代なりけん、紀の国三輪が崎に、大宅の行助といふ大往りけり。（中略）長月下旬、けふはことになごりなく和たる海の、暴に東南の雲を生して小雨そぼふり来る。（中略）外の方に麗しき声して、「此軒しばし恵ませ給へ」といひつつ入り来るを、奇しと見るに、年は廿にたらぬ女の、顔容髪のかかりいと艶ひやかに、遠山ずりの色よき衣着て、丫鬟の十四五ばかりなるの清げなるに、包みし物もたせ、しとどに濡れてわびしげなるが、豊雄を見て、面さと打ち赤めて恥かしげなる形の貴やかなるに、不慮に心動きて且思ふは、「此の辺にかうよろしき人の住むらんを今まで聞かぬことはあらじを、此は都人の三つ山詣せし次に、海愛らしくここに遊ぶらん。さりとて男だつ者もつれざるぞいとはしたなる事かなと思ひつつ、すこし身退きて、「ここに入らせ給へ、雨もやがてぞ休なん」といふ。（中略）「此一杯に千とせの契をはじめなん」といふ。（中略）其の志の篤きに愛でて、豊雄をすすめてつひに婚儀をとりむすぶ。豊雄も日々に心とけて、もとより容姿のよろしきを愛でよろこび、千とせをかけて契るには、葛城や高間の山に夜々ごとにたつ雲も、初瀬の寺の暁の鐘に雨収まりて、只あひあふ事の遅きをなん恨みける。（中略）
翁、豊雄にむかひ、「熟そこの面を見るに、此隠神のために悩まされ給ふが、吾救はずばつひに命をも失ひつべし、後よく慎み給へ」といふ。豊雄地に額着て、此の事の始よりかたり出で、「猶命得させ給へ」とて、恐れみ敬まひて願ふ。翁、「さればこそ。此の邪神は年経たる虵なり。かれが性は婬なる物にて、牛と孳みては麟を生み、馬とあひては竜馬を生といへり。此の魅はせつるも、はたそこの秀麗きに奸たると見えたり。かくまで執ねきをよく慎み給はずば、おそらくは命を失ひ給ふべし」といふに、人々いよよ恐れ惑ひつつ、翁を崇まへて「遠津神にこそ」と拝みあへり。翁打ち笑みて、おのれは神にもあらず、大倭の神社に仕へまつる当麻の酒人といふ翁なり、道の程見立てまゐらせん。いざ給へ」とて出でたてば、人々後につきて帰り来る。
（中略）小松原の道成寺に法海和尚とて貴き祈の師おはす。（中略）法海和尚の輿やがて入り来る。庄司の人々に扶けられてここにいたり給ひ、口のうちつぶつぶと念じ給ひつつ、豊雄を退けて、かの袈裟とりて見給へば、富子は現なく伏したる上に、白き蛇の三尺あまりなる蟠りて動だもせずてぞある。老和尚これを捉へて、徒弟が捧げたる鉄鉢に納れ給ふ。猶念じ給へば、屏風の背より、尺ばかりの小蛇はひ出づるを、是をも捉りて鉢に納れ給ひ、かの袈裟をもてよく封じ給ひ、そがままに輿に乗らせ給へば、人々掌をあはせ涙を流して敬ひ奉る。蘭若に帰り給ひて、堂の前を深く掘らせて、鉢のままに埋めさせ、永劫があひだ世に出づることを戒しめ給ふ。今猶蛇が塚ありとかや。庄司が女子はつひに病にそみてむなしくなりぬ。豊雄は命恙なしとなんかたりつたへける。 |

### 4.2.2 日本における蛇の変身譚（人間が蛇に変身するパターン）

| # | 出典 | 出典の詳細情報 | 時代 | 原文 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『日本書紀』巻11「大鷦鷯天皇　仁徳天皇」（〔八〕新羅との紛争、蝦夷の反逆） | 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守校注・訳『日本書記』①＜全三冊＞、新編日本古典文学全集2、小学館、2006年6月20日第一版第四刷発行、p.64-66 | 奈良時代 | ●五十五年、蝦夷叛之。遣田道令撃、則爲蝦夷所敗、以死于伊峙水門。時有從者、取得田道之手纏、与其妻。乃抱手纏而縊死、時人聞之流涕矣。是後、蝦夷亦襲之略人民、因以掘田道墓、則有大蛇、発瞋目自墓出以咋、蝦夷悉被蛇毒、而多死亡、唯一二人得免耳。故時人云、田道雖既亡、遂報讎。何死人之無知耶。 |
| 2 | 『日本霊異記』上-30「非理奪他物為悪行受悪報示奇事縁」 | 中田祝夫校注・訳『日本霊異記』、新編日本古典文学全集10、小学館、1995年、pp.99-100 | 平安時代 | ●膳臣広国者、豐前国宮子郡少領也。藤原宮御宇天皇之代。慶雲二年乙巳秋九月十五日庚申、広国忽死。逕之三日、戊日申時、更甦之而語之曰、「使有二人、一頂髮挙来、一少子也。伴副往程、二駅度許、路中有大河。度椅之以金塗厳。自其椅、行至彼方、有甚□（言＋慈、筆者注）国。問使人曰、『是何国矣』、答『度南国也』。至其京時、有八官人、佩兵追往。前有金宮。入宮門、見有王、坐乎黄金之坐。王詔広国曰、『今召汝者、依汝妻憂申之事』。即召一女。見之昔死妻。以鉄釘打頂通尻、打額通項。以鉄縄縛四枝、八人懸挙而将來。王問之言、『汝知是女耶』。広国白言、『実我之妻也』。復問『汝知鞫罪耶』。答『不知』。問女之答、『我実知之。擯吾而自家出遣。故、悋惻厭媚』。王詔広国曰、『汝无罪、可還於家。然慎以黄泉之事、勿忘宣伝。若欲見父、往於南方』。往而見之、実有我父。抱甚熱熱銅柱而立。鉄釘卅七於其身打立、以鉄打。夙三百段、晝三百段、夕三百段、合九百段、毎日打迫。広国見之悲而言、『嗚呼何図之。受是苦也』。父言、『我受是苦、吾子、汝知不也。我為養妻子故、或殺生物、或貸八兩綿、強倍十兩徵、或貸小斤稻而強太斤取、或人物強奪取、或他妻姧犯。不孝養父母、不恭敬師長、不奴婢者罵慢。如是罪故（中略）汝忽為我造仏写経、贖罪苦。慎々莫忘矣。我飢七月七日成大蛇到汝家、将入屋房時、以杖懸棄。又五月五日成赤狗到汝家之時、喚犬而相之、唯追打者飢熱還。我正月一日、成狸入於汝家之時、飽供養宍種物、是以継三年之糧。我无兄弟上下次第而失理、成犬噉白出汁。我必可成赤狗。』凡布施米一升之報、得卅日之糧。布施衣服一具之報、得一年分衣服。令読経者、住東方金宮、後隨願生天。造仏菩薩者、生西方无量寿浄土。放生之者、生北方无量浄土。一日斎食者、得十年之糧。乃至見造善悪所受報等出。広国暫徘徊、少子出來。時守門人、見其少子而長跪礼。少子喚広国、将至片方脇門、押其門而開之。将出告曰、『速往』。広国問少子云、『汝誰之子』。答、『欲知我者、汝幼稚時奉写観世音経是也。』還之焉、即見甦還』。広国至黄泉、善悪之報顕錄流布也。（以下略） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 3 | 『日本霊異記』中-38「因慳貪成大蛇縁」 | 中田祝夫校注・訳『日本霊異記』、新編日本古典文学全集10、小学館、1995年、pp. 227-228 | 平安時代 | ●聖武天皇御世、諾楽京馬庭山寺、一僧常住。其僧臨命終時、告弟子言、 我死之後、至于三年、室戸莫開。 然死後、経七々日、在大毒蛇、伏其室戸。弟子知因、教化而開室戸見之。銭卅貫隠蔵也。取其銭以為誦経、修善贈福矣。誠知、貪銭因隠、得大蛇身、反護其銭也。雖見須弥頂、不得見欲山頂者、其斯謂之矣。 |
| 4 | 『法華験記』下-86「天王寺別当道命阿闍梨」 | 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系7、岩波書店、1974年第1刷発行、p. 551 | 平安時代 | ●道命阿闍梨。（中略）悪霊顕云。我是汝夫。雖無欲悩心。依身苦難堪。自然付悩耳。我存生時。只好衆悪。殺生放逸。取用仏物。無悪不造。更無一毫善。死後当堕阿鼻獄。…而主人共詣法輪寺。一夜侍寺道命阿闍梨誦法花経。我聞彼経。其音貴妙。一心隨喜。依此善根。滅無間苦。今受軽苦。得蛇道形。若又聞彼経。必脱蛇身。得生善處。汝当将我詣闍梨所。令我聞経。（中略）霊又顕云。善哉善哉。我又得聞闍梨誦経。既脱蛇身。当生天上云云。（以下略） |
| 5 | 『法華験記』下-129「紀伊国牟婁郡悪女」 | 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系7、岩波書店、1974年第1刷発行、p. 568-569 | 平安時代 | ●有二沙門。一人年若。其形端正。一人年老。共詣熊野至牟婁郡。宿路辺宅。其宅主寡婦。（中略）爰家女夜半至若僧辺。覆衣並語僧言。（中略）有交臥之志。…僧大驚怪。起居語女言。（中略）更不承引。女大恨怨。…僧以種々詞誘う。…還向之次。可随君情。作約束了。（中略）女人念僧還向日時。致種々儲相待。僧不來過行。女待煩僧。出路邊尋見往還人。有從熊野出僧。女問僧曰。着其色衣。若老二僧來否。僧云。其二僧早還向。既經兩三日。女聞此事。打手大瞋。還家入隔舎。籠居無音。即成五尋大毒蛇身。追此僧行。時人見此蛇。生大怖畏。告二僧言。有希有事。五尋計大蛇。過山野走來。二僧聞了定知。此女成蛇追我。即早馳去。到道成寺。事由啓寺中。欲遁蛇害。諸僧集會。議計此事。取大鐘。件僧籠居鐘内。令閉堂門。（中略）蛇入堂内。囲巻大鐘。以尾叩竜頭両三時計。（中略）諸僧見大鐘為蛇毒所焼。炎日熾燃。敢不可近。即汲水浸大鐘冷炎熱。見僧皆悉焼尽。…<br>経数日之時。一臈老僧夢。前大蛇直来。白老僧言。我是籠居鐘中僧也。遂為悪女被領成其夫。感弊悪身。今思抜け苦。我力不及。（中略）清浄書写法華経如来寿量品。為我等二蛇抜苦。（中略）<br>聖人夢覚即発道心。観生死苦。手自書写如来寿量品。捨衣鉢蓄。（中略）供養既了。其夜聖人夢。一僧一女。（中略）我等二人遠離邪道。趣向善趣。女生忉利天。僧昇都率天。（以下略） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 6 | 『法華験記』下-129「紀伊国牟婁郡悪女」 | 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系7、岩波書店、1974年第1刷発行、p.568-569 | 平安時代 | ●有二沙門。一人年若。其形端正。一人年老。共詣熊野至牟婁郡。宿路辺宅。其宅主寡婦。（中略）爰家女夜半至若僧辺。覆衣並語僧言。（中略）有交臥之志。…僧大驚怪。起居語女言。（中略）更不承引。女大恨怨。…僧以種々詞誘。…還向之次。可随君情。作約束了。（中略）女人念僧還向日時。致種々儲相待。僧不來過行。女待煩僧。出路邊尋見往還人。有從熊野出僧。女問僧曰。着其色衣。若老二僧來否。僧云。其二僧早還向。既經兩三日。女聞此事。打手大瞋。還家入隔舎。籠居無音。即成五尋大毒蛇身。追此僧行。時人見此蛇。生大怖畏。告二僧言。有希有事。五尋計大蛇。過山野走來。二僧聞了定知。此女成蛇追我。即早馳去。到道成寺。事由啓寺中。欲遁蛇害。諸僧集會。議計此事。取大鐘。件僧籠居鐘内。令閉堂門。（中略）蛇入堂内。囲巻大鐘。以尾叩竜頭両三時計。（中略）諸僧見大鐘為蛇毒所焼。炎日熾燃。敢不可近。即汲水浸大鐘冷炎熱。見僧皆悉焼尽。…<br>経数日之時。一臈老僧夢。前大蛇直来。白老僧言。我是籠居鐘中僧也。遂為悪女被領成其夫。感弊悪身。今思抜け苦。我力不及。（中略）清浄書写法華経如来寿量品。為我等二蛇抜苦。（中略）<br>聖人夢覚即発道心。観生死苦。手自書写如来寿量品。捨衣鉢蓄。（中略）供養既了。其夜聖人夢。一僧一女。（中略）我等二人遠離邪道。趣向善趣。女生忉利天。僧昇都率天。（以下略） |
| 7 | 『法華験記』上-37「六波羅密寺定読師康仙法師」 | 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系7、岩波書店、1974年第1刷発行、p.528 | 平安時代 | ●沙門康仙。（中略）入滅已後霊託人云。我住是寺定読師康仙也。依年来聴聞法。依随分行業。当生極楽也。而依少事受於蛇身。我存生時。房前殖橘。逕年之間。漸々生長。枝葉滋茂。開花結菓。我朝夕見橘。從二葉当初于結果実時。治養将護常愛翫之。雖念非重。由愛護執心。得作蛇形。（中略）微少罪業堕蛇道。（中略）書写法華。開講供養。僧夢見康仙威儀痒序。面貌有喜。拝諸僧曰。依知識慈悲善力。得離蛇道。得生浄土。夢覚已後見蛇死了矣。 |
| 8 | 『法華験記』上-29「定法寺別当法師」 | 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系7、岩波書店、1974年第1刷発行、p.525 | 平安時代 | ●法性寺南有一小寺。名定法寺。有別当僧。形雖似僧。所行如俗。専貪瞋痴。行殺盗婬妄飲酒。放逸発諸狂言。習諸雑芸。作無益事。（中略）生涯自尽。即入死門。依悪業故。感得極悪大蛇身。（中略）妻子発悲写経供養。其後化示苦息矣。 |
| 9 | 『法華験記』上-7「無空律師」 | 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系7、岩波書店、1974年第1刷発行、p.517 | 平安時代 | ●律師無空。（中略）竊以万銭置于天井之上。欲支葬斂。律師臥病言不及銭。忽以退世。枇杷左大臣与律師有旧契。大臣夢。律師衣装垢穢。形容枯槁。来相語曰。我以有伏蔵兼銭貸。不度而受蛇身。願以其銭可書写法華経。大臣自到旧坊捜得万銭。銭之中有小蛇。見人逃去。大臣忽令書写供養法華経一部畢。他日夢。律師衣服鮮明。顔色悦澤。手持香炉来。語大臣曰。吾以相府之恩。得免蛇道。今詣極樂。謂了西向飛去矣。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 10 | 『今昔物語集』巻20-16「豊前国膳広国行冥途帰来語第十六」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』③、新編日本古典文学全集37、小学館、2008年12月24日第一版第三刷発行、pp.78-82 | 平安時代 | ●今昔、文武天皇ノ御代ニ、膳ノ広国ト云者有ケリ。豊前ノ国宮子ノ郡ノ小領也。其人ノ妻前ニ死テ後、慶雲二年ト云フ年ノ九月十五日、広国忽ニ死ス。而ルニ、三日ヲ経テ活テ、傍ナル人ニ語テ云ク、「我死シ時ニ、使二人来レリキ。一人ハ髪ヲ挙タリ、一人ハ髪ヲ束ネタル小子也。我、此ノ二人ニ副テ行ク程ニ、二ノ駅ヲ渡テ行ニ路ノ中ニ大ナル河有リ。橋ヲ渡セリ、金塗リ以テ厳レリ。其レヲ渡テ行ニ、彼方ニ極テ□（言＋慈、筆者注）キ所有リ。我此ノ使ニ問テ云ク、『此、何ナル所ゾ』ト。使ノ云ク、『渡レル南ノ国也』ト。而ル間、其ノ所ニ八ノ官人有リ、皆釼ヲ佩タル兵也。猶進ミ行バ、金ノ宮有リ。門ニ入テ見バ、王在、黄金ノ座ニ居給ヘリ。<br>王広国ヲ見テ問テ宣ハク、『今汝ヲ召ツル事ハ、汝ガ妻ノ愁ハ申セルニ依也』。然即チ妻ヲ召タリ。此ヲ見バ、我ガ昔ノ死セル妻也ケリ。鉄釘ヲ以頂ニ打リ、釘ノ尻、額ニ通ル。額ニ打テル釘ハ頂ニ通ル。又鉄ノ縄ヲ以テ、四ノ枝ヲ縛テ、八人シテ掻挙テ持来レリ。王、広国ニ問テ宣ハク、『汝、此ノ女ヲバ知レリヤ否』ト。広国申ク、『此、我昔ノ妻也』ト。王又宣ク、『此罪ヲ蒙レルヲバ知リヤ否』。広国申ク、『我不知』ト。然バ女ニ問ニ、女答テ云ク、『我昔シ死セシ時、汝我ヲ不惜シテ、家ヨリ出シ遺シガ故ニ、我其レヲ恨テ愁ヘル也』ト。王此ヲ聞テ、広国ニ宣ク、『汝ヂ罪無ケリ、速ニ家ニ可還ベシ。汝ガ妻死シ時ノ事ヲ以猥ニ愁フ。不当ズ』ト宣テ、又宣ク、『若、汝ガ父ヲ見ムト思バ、此ヨリ南方ニ行テ可見』ト。然バ行テ見ニ、実ニ我ガ父在リ、甚ダ熱キ銅ノ柱ヲ令抱テ、立タリ。鉄ノ釘三十七ヲ其身ニ打立タリ。又鉄ノ杖ヲ以テ、朝ニ三百段、昼三百段、夕ニ三百段、合テ九百段、毎日ニ打迫ム。広国、此ヲ見テ悲テ、父ニ問テ云ク、『君、何ナル罪ヲ造テ、此苦ヲ受給ヘルゾ』ト。父ノ云ク、『我此苦ヲ受ル事汝知レリヤ。我生タリシ時、妻子ヲ養ハムガ為ニ、或ハ生命ヲ殺シ、或ハ八両ノ綿ヲ人ニ借シテ強ニ十両ニ倍シテ責メ取リ、或ハ小サキ斤ノ量ヲ以テ稲ヲ人ニ借シテ、大斤ヲ以テ徴リ取リ、或ハ人ノ物ヲ奪ヒ取リ、或ハ他ノ女ヲ奸犯シ、或ハ父母ニ不孝養ズ、師長ヲ不敬、或ハ奴婢ニ非ザル者ヲ奴婢ト称シテ詈リ打バ、如此ノ罪ノ故ニ、我ガ小サシト云ヘドモ、三十七ノ釘ヲ被打立、毎日ニ九百段ノ鉄ノ杖ヲ負テ破打迫ル。痛哉、悲哉、何ナラム時ニカ、我、此罪ヲ被免テ、安キ身ヲ得ム。汝ヂ返テ、速ニ我為ニ仏ヲ造リ、経ヲ写テ、我罪ヲ除ク事ヲ令得ヨ。又我、大蛇トシテ、七月ノ七日、汝ガ家ニ入シ時、汝杖ヲ以テ懸テ弃テキ。又我、赤キ犬トシテ、五月ノ五日、汝ガ家ニ入シ時、汝、他ノ犬ヲ呼テ令咋テ打追シカバ、飢テ還ニキ。又我、猟トシテ、正月ノ一日ニ汝ガ家ニ入シ時、飯及ビ種々ノ味物ヲ与ヘテ |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 11 | 『今昔物語集』巻20-24「奈良馬庭山寺僧依邪見受蛇身語第二十四」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』③、新編日本古典文学全集37、小学館、2008年12月24日第一版第三刷発行、pp.102-103 | 平安時代 | ●今昔、奈良ニ馬庭山寺ト云フ所有リ。其ノ山寺ニ一人ノ僧住ケリ。年来其ノ所ニ住テ勲ニ勤メ行フト云ヘドモ、智リ無ガ故ニ邪見ノ心深クシテ、人ニ物ヲ惜テ与フル事無カリケリ。此クテ年来ヲ経ルニ、僧既ニ老ニ臨テ、身ニ病ヲ受テ、遂ニ命終ラムト為ル時ニ、弟子ヲ呼テ、告テ云ク、「我レ死テ後、三年ニ至ラムマデ、此坊ノ戸ヲ開ク事無カレ」ト云テ、即チ死ヌ。<br>其後、弟子、師ノ遺言ノ如ク坊ノ戸ヲ開ク事無クシテ、見ルニ、七日ヲ経テ、大ナル毒蛇有テ、其坊ノ戸ニ蟠レリ。弟子、此レヲ見テ、恐ヂ怖レテ思ク、「此ノ毒蛇ヲ必ズ我ガ師ノ邪見ニ依テ、成リ給ヘル也ケリ。師ノ遺言有テ、『三年ハ坊ノ戸ヲ不可開ズ』ト云ヘドモ、師ヲ教化セム」ト思ニ、忽ニ坊ノ戸ヲ開テ見レバ、壷屋ノ内ニ、銭三十貫ヲ隠シ納タリケリ。弟子、此レヲ見テ、其銭ヲ以テ、忽ニ大寺ニ持行テ、誦経ニ行テ、師ノ罪報ヲ訪フ。実ニ、「師ノ、銭ヲ貪テ此レヲ惜ムニ依、毒蛇ノ身ヲ受テ、返テ其ノ銭ヲ守ル也ケリ」ト知ヌ。此レニ依テ、「三年、坊ノ戸ヲ不可開ズ」トハ遺言シケル也ケリ。此ヲ思フニ、極テ愚ナル事也。「生タリシ時、銭ヲ惜シト思フト云トモ、其ノ銭ヲ以テ、三宝ヲ供養シ功徳ヲ修タラバ、当ニ毒蛇ノ身ヲ受ケムヤ」トゾ人語ケルトナム語リ伝ヘタルトヤ。 |
| 12 | 『今昔物語集』巻12-36「天王寺別当道命阿闍梨語第三十六」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集35、1999年4月20日第一版第一刷発行、pp.269-274 | 平安時代 | ●今昔、道命阿闍梨ト云フ人有ケリ。此レ、下姓ノ人ニ非ズ。傅ノ大納言道綱ト申ケル人ノ子也。天台座主慈恵大僧正ノ弟子ニナム有ケル。幼ニシテ山ニ登テ仏ノ道ヲ修行ジ、法花経ヲ受持ス。初メ心ヲ一ツニシテ、他ノ心ヲ不交ズシテ法花経ヲ誦スルニ、一年ニ一巻ヲ誦シテ、八年ニ一部ヲ誦畢ル。就中ニ、其ノ音微妙ニシテ、聞ク人皆首ヲ々ケ不貴ズト云フ事無シ。（中略）亦、一人ノ女有テ、此ノ堂ニ籠レリ。強キ邪気ニ煩テ籠レル也、月来悩テ、更ニ可為キ方無シ。而ルニ、病女此ノ阿闍梨ノ経誦スルヲ聞テ、悪霊忽ニ現ハレテ云ク、「我レハ此レ、汝ガ夫也。強ニ汝ヲ悩マサムト思フ事無シト云ヘドモ、身ノ苦ビ難堪シ。依テ、自然ラ託キ悩マス也。我レ、生タリシ時、諸ノ悪キ事ヲノミ好テ、生類ヲ殺シ、仏ノ物ヲ犯セリキ、一塵ノ善根ヲ不造ズ。此レニ依テ、地獄ニ堕テ、苦ヲ受ル事隙無シ。而ル間、此ノ道命阿闍梨ノ法花経ヲ誦スルヲ聞テ、地獄ノ苦ヲ免レテ、忽ニ軽キ苦ヲ受ク。所謂ル蛇身ノ形ヲ受タル也。若シ、亦彼ノ経ヲ聞カバ、必ズ、蛇ノ身ヲ棄テヽ、善所ニ生ルヽ事ヲ得ム。汝ヂ速ニ、我レヲ彼ノ阿闍梨ノ所ニ将行テ、経ヲ令聞メヨ」ト。女、此レヲ聞テ、阿闍梨ノ住所ヲ尋テ、詣デヽ、経ヲ令聞ム。阿闍梨、此レヲ聞テ、心ヲ々シテ、彼ノ霊蛇ノ為ニ法花経ヲ誦スルニ、霊亦タ現ハレテ云ク、「我レ、亦、此ノ経ヲ聞クニ依テ、既ニ蛇身ヲ免レテ、天上ニ生レヌ」トナム云ケル。其ノ後、彼ノ女人、塵許モ煩フ事無クシテ久ク有ケリ。（以下略） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 13 | 『今昔物語集』巻14-3「紀伊国道成寺僧写法花救蛇語第三」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集35、1999年4月20日第一版第一刷発行、pp. 406-412 | 平安時代 | ●今昔、熊野ニ参ル二人ノ僧有ケリ。一人ハ年老タリ、一人ハ年若クシテ形貌美麗也。牟婁ノ郡ニ至テ、人ノ屋ヲ借テ、二人共ニ宿ヌ。其ノ家ノ主、寡ニシテ若キ女也。女従者二三人許有リ。此ノ家主ノ女、宿タル若キ僧ノ美麗ナルヲ見テ、深ク愛欲ノ心ヲ発シテ、懃ニ労リ養フ。而ルニ、夜ニ入テ、僧共既ニ寝ヌル時ニ、夜半許ニ家主ノ女、窃ニ此ノ若キ僧ノ寝タル所ニ這ヒ至テ、衣ヲ打覆テ並ビ寝テ、僧ヲ驚カス。僧驚キ覚テ、恐レ迷フ。女ノ云ハク、「我ガ家ニハ更ニ人ヲ不宿ズ。而ルニ、今夜、君ヲ宿ス事ハ、昼、君ヲ見始ツル時ヨリ、夫ニセムト思フ心深シ。然レバ、『君ヲ宿シテ本意ヲ遂ム』ト思フニ依テ、近キ来ル也。我レ、夫無クシテ寡也。君哀ト可思キ也」ト。僧、此レヲ聞テ、大キニ驚キ恐レテ起居テ、女ニ答テ云ク、「我レ、宿願有ルニ依テ、日来身心精進ニシテ、遥ノ道ヲ出立テ、権現ノ宝前ニ参ルニ、忽ニ此ニシテ願ヲ破ラム、互ニ恐レ可有シ。然レバ、速ニ君、此ノ心ヲ可止シ」ト云テ、強ニ辞フニ、女、大キニ恨、終夜僧ヲ抱テ擾乱シ戯ルト云ヘドモ、僧、様々ノ言ヲ以テ、女ヲ誘ヘテ云ク、「我、君ノ宣フ事辞ブルニハ非ズ。然レバ、今、熊野ニ参テ、両三日ニ御明シ、御幣ヲ奉テ、還向ノ次ニ、君ノ宣ハム事ニ随ハム」ト約束ヲ成シツ。（中略）女、此ヲ事ヲ聞テ、手ヲ打テ、「既ニ他ノ道ヨリ逃テ過ニケリ」ト思フニ、大ニ瞋テ、家ニ返テ寝屋ニ籠居ヌ、音セズシテ暫ク有テ、即チ、死ヌ。家ノ従女等、此レヲ見テ泣キ悲ム程ニ、五尋許ノ毒蛇、忽ニ寝屋ヨリ出ヌ、家ヲ出デヽ道ニ趣ク。熊野ヨリ還向ノ道ノ如ク走リ行ク。人(中略)<br>其ノ後、老僧、此ノ事ヲ思フニ、忽ニ道心ヲ発シテ、自ラ、如来寿量品ヲ書写シテ、衣鉢ヲ投テ諸ノ僧ヲ請ジテ、一日ノ法会ヲ修テ、二ノ蛇ノ苦ヲ抜カムガ為ニ供養シ奉ツ。其ノ後、老僧ノ夢ニ、一ノ僧一ノ女有リ。皆咲ヲ含テ喜タル気色ニテ、道成寺ニ来テ、老僧ヲ礼拝シテ云ク、「君ノ清浄ノ善根ヲ修シ給ヘルニ依テ、我等二人、忽ニ蛇身ヲ棄テヽ善所ニ趣キ、女ハ忉利天ニ生レ、僧ハ都率天ニ昇ヌ』ト。如此ク告畢テ、各別レ、空ニ昇ヌ」ト見テ、夢覚ヌ。<br>（中略）<br>此ヲ思フニ、彼ノ悪女ノ僧ニ愛欲ヲ発セルモ皆前生ノ契ニコソハ有ラメ。<br>然レバ、女人ノ悪心ノ猛キ事、既ニ如此シ。<u>此ニ依テ、女ニ近付ク事ヲ仏強ニ誡メ給フ</u>。此ヲ知テ可止キ也トナム語リ伝ヘタルトヤ。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 14 | 『今昔物語集』巻14-3「紀伊国道成寺僧写法花救蛇語第三」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集35、1999年4月20日第一版第一刷発行、pp. 406-412 | 平安時代 | ●今昔、熊野ニ参ル二人ノ僧有ケリ。一人ハ年老タリ、一人ハ年若クシテ形皃美麗也。牟婁ノ郡ニ至テ、人ノ屋ヲ借テ、二人共ニ宿ヌ。其ノ家ノ主、寡ニシテ若キ女也。女従者二三人許有リ。此ノ家主ノ女、宿タル若キ僧ノ美麗ナルヲ見テ、深ク愛欲ノ心ヲ発シテ、懃ニ労リ養フ。而ルニ、夜ニ入テ、僧共既ニ寝ヌル時ニ、夜半許ニ家主ノ女、窃ニ此ノ若キ僧ノ寝タル所ニ這ヒ至テ、衣ヲ打覆テ並ビ寝テ、僧ヲ驚カス。僧驚キ覚テ、恐レ迷フ。女ノ云ハク、「我ガ家ニハ更ニ人ヲ不宿ズ。而ルニ、今夜、君ヲ宿ス事ハ、昼、君ヲ見始ツル時ヨリ、夫ニセムト思フ心深シ。然レバ、『君ヲ宿シテ本意ヲ遂ム』ト思フニ依テ、近キ来ル也。我レ、夫無クシテ寡也。君哀ト可思キ也」ト。僧、此レヲ聞テ、大キニ驚キ恐レテ起居テ、女ニ答テ云ク、「我レ、宿願有ルニ依テ、日来身心精進ニシテ、遥ノ道ヲ出立テ、権現ノ宝前ニ参ルニ、忽ニ此ニシテ願ヲ破ラム、互ニ恐レ可有シ。然レバ、速ニ君、此ノ心ヲ可止シ」ト云テ、強ニ辞フニ、女、大キニ恨、終夜僧ヲ抱テ擾乱シ戯ルト云ヘドモ、僧、様々ノ言ヲ以テ、女ヲ誘ヘテ云ク、「我、君ノ宣フ事辞ブルニハ非ズ。然レバ、今、熊野ニ参テ、両三日ニ御明シ、御幣ヲ奉テ、還向ノ次ニ、君ノ宣ハム事ニ随ハム」ト約束ヲ成シツ。女、約束ヲ憑テ、本ノ所ニ返ヌ。夜暁ヌレバ、僧、其ノ家ヲ立テ熊野ニ参ヌ。（中略）大鍾、蛇ノ毒熱ノ気ニ被焼テ炎盛也、敢テ不可近付ズ。然レバ、水ヲ懸テ鍾ヲ冷シテ、鍾ヲ取去テ僧ヲ見レバ、僧皆焼失テ、骸骨尚シ不残ズ、纔ニ灰許リ有リ。老僧、此レヲ見テ、泣キ悲ムデ返ヌ。<br>其ノ後、其ノ寺ノ上臈タル老僧ノ夢ニ、前ノ蛇ヨリモ大キニ増レル大蛇、直ニ来テ、此ノ老僧ニ向テ申シテ云ク、「我ハ此レ、鍾ノ中ニ籠メ置シ僧也、悪女、毒蛇ト成テ、遂ニ、其ノ毒蛇ノ為ニ被領テ、我レ、其ノ夫ト成レリ。幣ク穢キ身ヲ受テ、苦ヲ受ル事量無シ。今此苦ヲ抜カムト思フニ、我ガ力更ニ不及ズ。（中略）殊ニ、無縁ノ大慈悲ノ心ヲ発シテ、清浄ニシテ法花経ノ如来寿量品ヲ書写シテ、我等二ノ蛇ノ為ニ供養シテ、此ノ苦ヲ抜キ給ヘ。法花ノ力ニ非ズハヽ何カ免ルヽ事ヲ得ム」ト云ト返去ヌ、ト見テ、夢覚ヌ。<br>其ノ後、老僧、此ノ事ヲ思フニ、忽ニ道心ヲ発シテ、自ラ、如来寿量品ヲ書写シテ、衣鉢ヲ投テ諸ノ僧ヲ請ジテ、一日ノ法会ヲ修テ、二ノ蛇ノ苦ヲ抜カムガ為ニ供養シ奉ツ。其ノ後、老僧ノ夢ニ、一ノ僧一ノ女有リ。皆咲ヲ含テ喜タル気色ニテ、道成寺ニ来テ、老僧ヲ礼拝シテ云ク、「君ノ清浄ノ善根ヲ修シ給ヘルニ依テ、我等二人、忽ニ蛇身ヲ棄テヽ善所ニ趣キ、女ハ忉利天ニ生レ、僧ハ都率天ニ昇ヌ』ト。如此ク告畢テ、各別レ、空ニ昇ヌ」ト見テ、夢覚ヌ。（以下略） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 15 | 『今昔物語集』巻13-42「六波羅僧講仙聞説法花得益語第四十二」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集35、1999年4月20日第一版第一刷発行、pp. 389-391 | 平安時代 | ●今昔、京ノ東ニ六波羅蜜寺ト云フ寺有リ。其寺ニ年来住ム僧有ケリ。名ヲバ講仙ト云フ。（中略）漸ク年老テ、遂ニ命終ル尅ニ、悪縁ニ不値ズシテ失ヌレバ、見聞ク人皆「講仙ハ終リ正念ニシテ定メテ極樂ニモ参リ、天上ニモ生ヌラム」ト思フ間ニ、月日ヲ経テ、霊人ニ付テ云ク、「我ハ此レ、此寺ニ住シ定読師ノ講仙也。（中略）小事ニ依テ、我小蛇ノ身ヲ受タリ。其ノ故ハ、我、生レタリシ時、房ノ前ニ橘ノ木ヲ殖タリシヲ、年来ヲ経ルニ随テ、漸ク生長シテ、枝滋リ葉栄エテ、花栄キ菓ヲ結ブヲ、我レ、朝夕ニ此ノ木ヲ殖立テヽ、二葉ノ当初ヨリ菓結ブ時ニ至ルマデ、常ニ護リ此レヲ愛シキ。其ノ事重キ罪ニ非ズト云ヘドモ、愛執ノ過ニ依テ、小蛇ノ身ヲ受テ、彼ノ木ノ下ニ住ス。願クハ、我ガ為ニ法花経ヲ書写供養シテ、此ノ苦ヲ抜テ善所ニ生ルヽ事ヲ令得メヨ」ト。<br>（中略）其ノ後、忽ニ、寺ノ僧共、皆、心ヲ同ジクシテ、知識ヲ引テ、力ヲ合セテ法花経ヲ書写シ奉テ、供養ジテケリ。其ノ後、寺ノ僧ノ夢ニ、講仙直シク法服ヲ着シテ咲ヲ含テ、寺ノ僧共ヲ礼拝シテ、告テ云ク、「我レ、汝等ガ知識ノ善根ノ力ニ依テ、忽ニ蛇道ヲ離レテ、浄土ニ生ルヽ事ヲ得タリ」ト。夢覚テ後、此ノ事ヲ他ノ僧共ニ告テ、彼ノ房ノ橘ノ木ノ下ニ行テ見レバ、小蛇既ニ死テ有リ。僧共、此レヲ見テ、泣キ悲ムデ、法花経ノ霊験ヲ貴ム事無限シ。此レヲ思フニ、由無キ事ニ依テ、愛執ヲ発ス、如此クゾ有ケルトナム語リ伝ヘタルトヤ。 |
| 16 | 『今昔物語集』巻13-44「定法寺別当聞説法花得益語第四十四」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集35、1999年4月20日第一版第一刷発行、pp. 395-398 | 平安時代 | ●今昔、法性寺ノ南ノ方ニ定法寺ト云フ寺有リ。其ノ寺ノ別当ナリケル僧有ケリ。形ハ僧也ト云ヘドモ、三宝ヲ不敬ズ、因果ヲ不悟ラズシテ、常ニ碁双六ヲ好テ、其ノ道ノ者ヲ集メテ遊ビ戯ル。亦、諸ノ遊女傀儡等ノ歌女ヲ招テ詠ヒ遊ブヲ常ニ業トス。恣ニ仏物ヲ取リ仕ヒテハ、一善ヲ不修ズシテ、肉食酒□ヲ以テ日ヲ送ル。<br>而ル間、年月漸ク積テ、別当、身ニ病ヲ受テ死ヌ。其ノ後、程ヲ経テ、別当ガ妻ニ悪霊託テ、涙ヲ流シテ泣キ悲テ云ク、「我ハ此レ、汝ガ夫也。前生ニ悪業ヲノミ好テ、善根ヲ修スル事無カリキ。此ニ依テ、我レ、大毒蛇ノ身ヲ受テ、苦ヲ受ル事量無シ。（中略）汝等、我ガ此苦ヲ救ハムガ為ニ、法花経ヲ書写供養シ奉テ、我ヲ助ケヨ。我レ、此ノ事ヲ示サムガ為ニ、汝ニ託テ告グル也」ト云フ。<br>妻子、此レヲ聞テ泣キ悲ムデ、随分ノ貯ヲ投棄テヽ、心ヲ至シテ法華経一部ヲ書写供養シ奉リツ。其ノ後、亦、悪霊、妻ニ託テ云ク、「我レ、汝等ガ法花経ヲ書写供養シ奉レル力ニ依テ、苦ヲ受ル事、多ク助カリニケリ。我レ、喜ブ所也、更ニ、此ノ恩難忘シ」トゾ云ヒケル。此レヲ思フニ、実ニ仏物ヲ恣ニ欺用シテ、功徳ヲ不修ズシテ此レヲ不償ザル事、極テ愚也。如此ク三悪道ニ堕テ悔ヒ悲マムヤハ。心有ラム人ハ此レヲ知テ専ニ功徳ヲ修シテ永ク罪障ヲ可止シトナム語リ伝ヘタルトヤ。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 17 | 『今昔物語集』巻14-1「為救無空律師枇杷大臣写法花語第一」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集35、1999年4月20日第一版第一刷発行、pp. 401-403 | 平安時代 | ●今昔、比叡ノ山ニ無空律師ト云フ人有リケリ。（中略）此レ一生ノ間ノ勤也。亦、常ニ衣食ニ乏クシテ、更ニ憑ム方無シ。何況ヤ、房ニ一塵ノ貯ヘ有ラムヤ。<br>而ルニ、律師銭万ヲ自然ラ得タリ。其ノ時ニ、律師ノ思ハク、「我レ死ナム時ニ、弟子共必ズ煩ヒ有リナム。然レバ、此ノ銭ヲ人ニ不令知ズシテ、隠シ置テ、没後ノ料ニ充テム。只、死ナム時ニ臨テ、弟子共ニ令告知ム」ト思テ、房ノ天井ノ上ニ窃ニ隠シ置。其ノ後、弟子共、敢テ此ノ事ヲ不知ズ。而ル間、律師、身ニ病ヲ受テ懇ミ煩フ間、此ノ銭隠シ置タル事ヲ忘レテ、弟子共ニ不告知ズシテ、遂ニ死ヌ。<br>其時ニ、枇杷ノ大臣ト云フ人在マス、名ヲバ仲平ト云フ。此ノ人、彼ノ律師ト年来師檀ノ契リ深クシテ、万事ヲ憑テ過ギ給ヒケル間、律師ノ失タル事ヲ殊ニ歎キ思給ケルニ、大臣ノ夢ニ、律師、衣服穢気ニ（中略）銭万ヲ没後ノ料ニ充テムガ為ニ、房ノ天井ノ上ニ隠シ置タリキ。（中略）事忘レテ、不告ズシテ死ニキ。于今、其ノ事ヲ知ル人無シ。己レ、其ノ罪ニ依テ、蛇ノ身ヲ受テ、銭ノ所ニ有テ苦ヲ受ル事量無シ。己レ、生タリシ時、君ト契ヲ成ス事深リキ。願クハ、君、彼ノ銭ヲ尋ネ取リ給テ、法花経ヲ書写供養シテ、我ガ此ノ苦ヲ救ヒ給ヘ」ト云フ、ト見テ、夢覚ヌ。<br>其ノ後、大臣、歎キ悲テ、忽ニ、使ヲバ不遣ズシテ、自ラ山ニ登テ、律師ノ房ニ行テ、人ヲ以テ天井ノ上ヲ令見メ給フニ、実ニ、夢ノ告ノ如ク銭有リ。銭ノ中ニ、蛇、銭ヲ々テ有リ、人ヲ見テ逃去ヌ。（中略）<br>大臣、京ニ返テ、忽ニ、此ノ銭ヲ以テ法花経一部ヲ書写供養シ給テ、其後、程ヲ経テ、大臣ノ夢ニ、（中略）大臣ニ向テ云ク、「我レ君ノ恩徳ニ依テ、蛇道ヲ免ルゝ事ヲ得テ、年来ノ念仏ノ力ニ依テ、今、極樂ニ参レル也」ト云テ、西ニ向テ飛ビ去ヌ、ト見テ夢覚ヌ。<br>其ノ後、大臣喜ビ貴ビ給テ普ク世ニ語ルヲ聞キ継テ、語リ伝ヘタルトヤ |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 18 | 『今昔物語集』巻13-43「女子死受蛇身聞法花得脱語第四十三」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集35、1999年4月20日第一版第一刷発行、pp.392-395 | 平安時代 | ●今昔、西ノ京ニ住ム人有ケリ。品不賤ヌ人也。一人ノ女子有リ。其ノ女子、形皃端正ニシテ心性柔和也。然レバ、父母此レヲ愛シテ、傅ク事無限シ。年十□歳許ニ成ルニ、手ヲ書ク事人ニ勝テ、和歌ヲ読事並ビ無シ。亦、管絃ノ方ニ心ヲ得テ、箏ヲ弾ズル事極メテ達レリ。<br>（中略）而ル間、父母、此ノ女子ヲ愛シテ過グルニ、女子、花ニ目出、葉ヲ興ズルヨリ外ノ事無シ。（中略）只紅梅ニ心ヲ染テ、此レヲ翫ビケリ。東ノ臺ノ前ヘ近ク紅梅ヲ殖ヘテ、花ノ時ニハ、早旦ニ々子ヲ上ゲテ、只獨リ此レヲ見ツヽ、他ノ心無ク此ヲ愛シケリ。夜ニ至ルマデ媚キ匂ヲ目出デヽ、内ニ入ル事ヲセズ。木ノ辺ニハ草ヲモ不生サズ、鳥ヲモ不居ズシテ、花散ル時ニ成ヌレバ、木ノ下ニ落タル花ヲ拾ヒ集テ、塗タル物ノ盖ニ入テ、程ド過ルマデ匂ヲ愛ス。風吹ク日ハ、木ノ下ニ疊ヲ敷テ、花ヲ外ニ不散ズシテ取リ集メテ置ク。切ナル思ヒニハ、花枯ヌレバ取集テ薫ニ交ゼテ匂ヲ取レリ。其ノ中ニモ、小キ木ヲ殖テ、此レガ花栄タルヲ見テ、他ノ事無ク興ジケリ。<br>而ル間、此ノ女子、何ニトモ無クゝマシ気ニテ、態トニハ無ケレドモ、日来煩ヒケリ。日員積リテ病ヒ重ク成ヌレバ父母、此レヲ無限ク歎クト云ヘドモ、墓無クシテ失ニケリ。父母無限ク泣キ悲テ惜ムト云ヘドモ、事限リ有レバ、葬送シテ後、人々別レニケリ。其ノ後、此ノ紅梅ノ木ノ下ヲ見ルニ付ケテモ、惜ミ悲ム事無限シ。<br>而ル間、此ノ木ノ下ニ小サキ蛇ノ一尺許ナル有リ。「只有ル蛇ナメリ」ト人思フ程ニ、明ル年ノ春、此ノ木ノ下ニ去年ノ蛇出来ヌ。木ヲ纏テ不去シテ、花栄テ散ル時ニ、蛇、口ヲ以テ花ヲ食ヒ集テ一所ニ置ケルヲ、父母見テ、「此ノ蛇ハ、早ウ、昔ノ人ノ成リタルニコソ有ケレ。哀ニ悲シキ事カナ」ト思ヘドモ、「姿替テ有ルガ踈キ事」ト歎キ悲テ、清範、厳久ナド云フ止事無キ智者共ヲ請ジテ、此ノ木ノ下ニシテ法花経ヲ講テ、八講ヲ行ヒケリ。而ルニ、此ノ蛇、木ノ下ヲ不去ズシテ、初メノ日ヨリ講ヲ聞ク。五巻ノ日、清範其ノ講師トシテ、竜女ガ成仏ノ由ヲ説キケルニ、実ニ聞ク人モ、涙ヲ流テ、「哀レ也」ト聞ケルニ、其ノ蛇、木ノ下ニ有テ其ノ座ニシテ死ニケリ。父母ヨリ始テ諸ノ人ノ此レヲ見テ、涙ヲ流シテ哀ブ事無限シ。其ノ後、父ノ夢ニ、有リシ女子、極テ穢ク汚タル衣ヲ着テ、心ニ思ヒ歎キタル気色ニテ有ル程ニ、貴キ僧来テ、其ノ衣ヲ令脱メタレバ、膚ハ金ノ色ニシテ透キ通レルニ、微妙ノ衣及ビ袈裟ヲ令服メテ、僧自ラ、女ヲ引キ立テヽ、紫ノ雲ニ乗セテ去ヌ」ト見テ、夢覚ヌ。誠ニ此レ、偏ニ法花ノ力也。「蛇ノ身也ト云ヘドモ、法花経ヲ説ク座ニ有テ死ヌレバ、疑ヒ無ク法花聴聞ノ功徳ニ依テ、蛇身ヲ棄テ、浄土ニ生ズル也」ト皆人云ヒ、貴ビケリ。何況ヤ、五巻ノ日、竜女成仏ノ |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 19 | 『今昔物語集』巻14-4「女依法花力転蛇身生天語第四」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集35、1999年4月20日第一版第一刷発行、pp. 412-417 | 平安時代 | ●今昔、奈良ノ京ノ時、聖武天皇ノ御代ニ、京東ニ一人ノ女有ケリ。形チ有様端正也ケレバ、帝王其ノ女ヲ召テ一夜懐抱シ給ヒニケルニ、労タクヤ思シ食ケム、金千両ヲ銅ノ筥ニ入テ給ヒテケリ。女此ヲ給ハリテ後、帝王、幾ノ程不経ズシテ失給ニケリ。亦、女モ其ノ後不久ズシテ死ニケルニ、女ノ云ヒ置ケル様、「此ノ千両ノ金ヲ、我レ死ナム後ニハ必ズ墓ニ埋メ」ト。然レバ、遺言ノ如ク、此ノ金ノ筥ヲ金ネ入リ乍ラ墓ニ埋テケリ。<br>而ル間、東山ニ石渕寺ト云フ寺有リ。其ノ寺ニ参ル人、返ル事無クシテ死ヌ。然レバ、世ノ人不参ズ。人極テ此レヲ怪ミ思ヒケルニ、其ノ時ニ、吉備ノ大臣ト云フ人有ケリ。其人、彼ノ石渕寺ニ参テ、此ノ事ヲ試ムト思テ参ニケリ。（中略）御明ノ光ニ見ルニ、実ニ怖シキ物カラ、有様美麗也、指去テ奇ミテ居ヌ。暫許有テ、女、大臣ニ語テ云ク、「我レ、年来可申キ事ト有ルニ依テ此ノ堂ニ来ルニ、人、我ガ身ヲ見テ怖レテ、皆、命ヲ失フ。我ハ更ニ人ヲ々サムト不思ネドモ、人自然ラ憶気シテ死ヌル事既ニ度々也。而ルニ、君、憶気シ不給ズシモ御マス。我レ、甚、喜ブ所也。我ガ、年来思ヒ願フ事ヲ、君ミニ可語シ」ト。大臣ノ云ク、「思願フ所何事ゾ」ト。女霊ノ云ク、「我レハ其々ニ有シ人也、生タリシ時、帝王ノ召ニ依テ、只一度懐抱シタリキ。帝王、我レニ千両ノ金ヲ々ヘ給ヘリキ。我レ、生タリシ時其ノ金ヲ仕フ事無シテ、死ニシ時、我レ『其ノ金ヲ墓ニ埋テ置ケ』ト遺言セシニ依テ、金ヲ墓ニ埋メリ。我レ、其ノ罪ニ依テ、毒蛇ノ心ヲ受テ、其ノ金ヲ守テ墓ノ所ニ其辺ヲ不離ズシテ有リ、苦ヲ受ル事無量クシテ、難堪キ事無限シ。其ノ墓、其々ニ有リ。年来ヲ経ト云フトモ、蛇身ヲ可免キ方無シ。然レバ、君、彼ノ墓ヲ堀テ、其ノ金ヲ取出シテ、五百両ヲ以テハ法花経ヲ書写供養シテ我ガ此ノ苦ヲ救ヒ給ヘ、五百両ヲ以テハ其ノ功ニ君ノ財トシテ仕ヒ給ヘ。（中略）然レドモ、大臣、不憚ズ、墓ヲ壊チ地ヲ堀テ見ルニ、土ノ下ニ大キナル蛇、墓ヲ纏テ有リ。大臣蛇ニ向テ云ク、「正シク今夜示シ給フ事有テ、其ノ約ヲ不違シテ墓ヲ壊ツニ、何ノ故□蛇此ヲ不去ザルゾ」ト。蛇、大臣ノ言ヲ聞テ、忽ニ、其ノ所ヲ去テ這隠レヌ。其ノ後、見ルニ、一ノ銅ノ筥有リ。筥ヲ開テ見レバ、筥ノ中ニ沙金千両有リ。<br>即チ、大臣、此レヲ取テ、忽ニ、法花経ヲ書写シテ、大キニ法花ヲ行ヒテ法ノ如ク供養シツ、更ニ、其ノ功ヲ不残ズ。<br>其ノ後、大臣ノ夢ニ、彼ノ石渕寺ニテ来レリシ女霊、身ヲ微妙ニ荘厳シテ、光ヲ放チ、大臣ノ前ニ来テ、咲ヲ含テ大臣ニ告テ云ク、「我レ、君ノ広大ノ恩ニ法花経ヲ書写供養シ給ヘルニ依テ、今、蛇身ヲ棄テヽ兜率天上ニ生レヌ。此ノ恩、世々ニモ難忘シ」ト云テ、大臣ヲ礼拝シテ虚空 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 20 | 『今昔物語集』巻20-23「比叡山横川僧受小蛇語第二十三」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』③、新編日本古典文学全集37、小学館、2008年12月24日第一版第三刷発行、pp.98-101 | 平安時代 | ●今昔、比叡ノ山ノ横川ニ僧有ケリ。道心発シテ、年来阿弥陀ノ念仏ヲ唱ヘテ、偏ニ極楽ニ生ト願ヒケリ。（中略）<br>聖人、「死期ノ近ク成ヌル也ケリ」ト思取テ、弥ヨ道心ム深ク染ムデ、念仏ヲ唱フル事、員副テ緩ミ無シ。（中略）没後ノ事皆畢テ、七々日モ過ヌレバ、弟子共皆散々ニ去キヌ。而ルニ、一人ノ弟子、其ノ坊ヲ伝ヘテ住ケルニ、師ノ聖人ノ常ヽ酢入レテ置タリケル、白地ノ小瓶ノ有ケルガ、壷屋ノ棚ニ有ケルヲ、房主見付テ、「故聖人ノ持給ヘリシ酢瓶ハ此ニコソ有ケレ。『失ニケルカ』ト思ヒツルニ」ト云テ、取出テ、令洗ハシムト為ル程ニ、瓶ノ内ニ動ク者有リ。臨テ見レバ、五寸計ナル小蛇蟠テ有リ。恐テ離レタル方ノ間木ノ上ニ捧テ置ツ。<br>其ノ夜ノ坊主ノ夢ニ、故聖人来テ、告テ云ク、「（中略）死ヌル剋ニ臨テ、他ノ念無ク、念仏ヲ唱ヘテ、絶入ラムト思ヒシ程ニ、棚ノ上ニノ□酢ノ瓶ノ有シヲ、不意ニ目ニ見付テ、『此レヲ誰取ラムト為ラム』ト許、口ニハ念仏ヲ唱ヘ乍ラ、心ニ只一度思ヒシニ、其ヲ罪トモ不思ズシテ、悪ク思ヒケリトモ思ヒ不返ズシテ、絶入ニキ。其ノ罪ニ依テ、此瓶ノ内ニ小蛇ノ身ヲ受テ有ル也。速ニ此ノ瓶を以テ誦経ニ行ヘ。又懃ニ我ガ為ニ仏経ヲ可供養シ。然ラバ極楽ニ可生シ」ト云テ失ヌ、ト見テ夢覚ヌ。<br>（以下略） |
| 21 | 『宇治拾遺物語』巻4-5（57）「石橋下の蛇の事」 | 小林保治、増古和子校注・訳『宇治拾遺物語』、新編日本古典文学全集50、小学館、2008年12月24日第一版第五刷発行、pp.152-157 | 鎌倉時代 | ●おのれは人を恨めしと思ひし程に、かく蛇の身を受けて、石橋の下に多くの年を過して、 わびしと思ひゐたる程に、昨日おのれが重石を踏み返し給ひしに助けられて、石のその苦をまぬかれて嬉しと思ひ給しかば、この人のおはし着かん所を見置き奉りて悦びも申さんと思ひて、御供に参りし程に、菩提講の庭に参り給ひければその御供に参りたるによりて、あひがたき法をうけたまはりたるによりて、多く罪をさへ滅して、その力にて人に生れ侍るべき功徳の近くなり侍れば、いよいよよろこびをいただきて、かくて参りたるなり。 （以下略） |
| 22 | 『古今著聞集』巻20-720「或僧の妻嫉妬して蛇と化し夫の件物に喰付く事」 | 橘成季撰・西尾光一、小林保治校注『古今著聞集』（下）、新潮日本古典集成第76回、新潮社、1986年、pp.408-409 | 鎌倉時代 | ●白拍子ふとだまわうが家にある女に、ある僧かよひけるを、本妻あさましく物ねたみの物にて、いかにせむとねたみけれども、なをもちゐずかよひけるほどに、建長六年二月二日の夜、又此僧彼女に合宿して、ことゞもくはだてけるが、その女をこそするに、本妻をする心ちにおぼえければ、あやしうおそろしくおぼえて、ひきはなれてみれば、この愛物の女也。又すれば本妻をする心ちなり。なをおそろしくおぼえければ、はいおりたりけるに、五六尺ばかりなるくちなわ、いづくよりかきたりつらん、件のかしらにあやまたずくいつきにけり。ふりはなたんとすれども、いよくくひつきて、口はさけゝれどもはなれざりける時に、しかねてかたなをぬきて、蛇の口をさきてけり。さかれてやがてくちなわはしぬ。そのゝちこの僧件はれて、心身もなやみて、いける正体もなかりけり。件くちなわをば、堀川にながしたりければ、京わらはべあつまり見けり。まことにや、この本妻も、その夜よりなやみて、やがてうせにけると申侍り。おそろしき事也。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 23 | 『沙石集』巻7-2「妄執ニヨリテ女蛇ト成ル事」 | 渡辺綱也校注『沙石集』、日本古典文学大系85、岩波書店、昭和41年5月6日第一刷発行、pp. 296-297 | 鎌倉時代 | ●鎌倉ニ或人ノ女、若宮ノ僧正坊ノ兒ヲ戀テ病ニナリヌ。母ニカクトツゲタリケレバ、彼兒ガ父母モ知人ナリケル儘ニ、此由申合テ、時々兒ヲモカヨハシケレドモ、志モナカリケルニヤ、ウトク成ユク程ニ、ツイニ思ヒ死ニ死ヌ。父母悲ミテ、彼骨ヲ善光寺ヘ送ラムトテ、箱〔ニ入テ〕置テケリ。其後此兒又病付テ、大事ニ成テ物狂ケレバ、一間ナル所ニヲシコメテ置タルニ、人ト物語ル聲シケルヲ怪ミテ、父母物ノヒマヨリ見ケレバ、大ナル蛇ト向テ物ヲ云ケルナルベシ。ツイニ失ニケレバ、入棺シテ、若宮ノ西〔ノ〕山ニテ葬スルニ、棺ノ中ニ大ナル蛇アリテ、兒トマトハル。ヤガテ蛇ト共〔ニ〕葬テケリ。サテ彼父母、女ガ骨ヲ善光寺ヘ送ル次ニ取分テ、鎌倉ノ或寺ニ置ントテ見ケレバ、骨ノサナガラ小蛇ニ成リタルモアリ、中ラ斗成リカヽリタルモアリケリ。此事ハ、彼父母、或僧ニ孝養シテタベトテ、アリノ侭ニ此様申ケルトテ、同法ノ僧、慥ニ聞テ語リキ。僅ニ十年ガ中ノ事也。名モ承シカドモ、憚リテ注サズ。此物語ハ、多クハ当世ノ事ヲ記スル故ニ、其所ソノ名ヲ隠ス事アリ。不定ノ故ニハ非ズ。慥ノ事共也。凡ソ一切ノ萬物ハ、一心ノ變ズルイハレ、始而不可驚ト云ヘドモ、此事近キ不思義ナレバ、カワユクコソ覚ヘ侍レ。執着愛念ホドニ恐ルベキ事ナシ。生死〔ノ〕苦ノ久ク、流転ノヤミガタキ、只此愛欲ノイタス所ナリ。仏神ニモ祈念シ、聖教ノ中ノ對治ヲモ尋テ、此愛欲ヲタチ、此敵ヲ打テ、眞實ニ解脱ノ道ニ入リ、自性清淨ノ体ヲ見ルベキナリ。愛執ツキザレバ、欲網ヲ不出。可恐々々。何ノ國トカヤ、或尼公、女ヲ我夫ニアハセテ、我身ハ家ニ居テ、女ニカヽリテ侍ルガ、指ノ蛇ニ成リタルヲ包、当時アリト云ヘリ。昔モ斯ル事、發心集ニ見ヘタリ。 |
| 24 | 『沙石集』巻7-3「繼女ヲ蛇二合セムトシタル事」 | 渡辺綱也校注『沙石集』、日本古典文学大系85、岩波書店、昭和41年5月6日第一刷発行、pp. 279-298 | 鎌倉時代 | ●下聰國ニ、或女人、繼女ノ十二三斗ナルヲ、大ナル沼ノ畔ヘ具シテ行テ、此沼ノ主ニ申ス。「此女ヲ參テ、聟ニシマイ〔ラ〕セ〔ン〕」ト、タビ〴〵イヒケリ。或時、世間スサマジク風吹キ、沼アレタル時、又例ノ様ニイフニ、此女殊ニ恐シク、身ノ毛イヨ立。沼モ水浪タテ、風荒クシテ、世間モ暗ク覚ヘケレバ、急ギ逃テ家ヘ歸ルニ、物ノ追心地シケレバ、彌ヲソロシナンド云バカリナシ。サテ、父ガアリケルニトリ付テ、斯ル事コソアリツレト云。サル程ニ母モ内ヘ逃入ヌ。其後、大ナル蛇來テ、頭ヲアゲ、舌ヲウゴカシテ、此女ヲ見ル。父下臈ナレドモ、サカ＋＋シキ物ニテ、蛇ニ申シケルハ、「此女ハ我女也。母ハ繼母ナリ。我ガユルシナクテハ、爭カ取ルベキカ。母ガ詞ニ不可依、妻ハ夫ニ隨フ物ナレバ、母ヲバ心ニ任ス。トルベシ」ト云時、蛇、女ヲバ、捨テ、母ガ方ヘハイユキヌ。其時父此女ヲ具シテ逃ヌ。此蛇、母ニマトヒ付キヌ。母モ物狂シク成テ、既ニ蛇ニ成リカヽリタルト聞エキ。文永年中ノ夏比、此事申出テ、來八月三日大雨大風吹テアレタラム時、可出ト申ト沙汰シキ。實ニ彼日ヲビタヽシクアレテ、雨風烈ク侍リキ。正ク出ケル事ハ聞ザリキ。人ノ爲ニ腹惡キハ、ヽテ我身ニヲイ侍ルニコソ。因果不可疑フ。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 25 | 御伽草子：『地蔵堂草子』 | 松本隆信編『室町時代物語大成』補遺二、角川書店、1988年、pp. 14-17 | 室町時代 | ●（前略）僧をは、人あまたつけて、ありし海の、浜はたまて、をくりてけり、それより僧は、ひとり、まとのすか野へそ、かへりける。<br>僧、ありし地蔵堂に、行て見れば、いくはくの、年をへたりとも、…内に入って、礼盤を枕にして、ねたるに（中略）村里の人、きをひあつまりて、これを見るに、なかさ六七丈はかりある、大虵の、ふしたけ、二三尺はかりなるか、わたかまりて、礼盤に、かしらをもたせてそ、ありける<br>かゝりければ、この僧、こはいかなる、事やらん、ありし錦のやうな物を、きせられして、思ひしより、はや虵に成にけりと、口惜く覚て<br>彼地蔵に、むかひたてまつりて、心中に、発露涕泣して、罪障を、くひかなしみて、如法経を、如説に書奉るへき、願をおこして、慙愧、懺悔しけるほとに<br>その夜ふくるほとに、この大虵のせなか、はたとわれて、その背より、此僧、はひ出て、ぬけからをみるに、まことに、おそろしき事、たとへていはんかたなし、ぬけからはすなはち、死てふしたあり |
| 26 | 説経節：『愛護若』 | 荒木繁・山本吉左右編注『説経節　山椒太夫・小栗判官他』、東洋文庫243、1988年初版第16刷発行、pp. 190-191 | 江戸時代 | ●（前略）御涙書きてあり。まず一番のその筆に、「父御様は御存じなきは道理なり。知らで思いかけ給う、その恋がかなわぬとて、筋なき謀反を企みかけ、いろいろ讒言なさるれば、わが屋形にはたまられず、叡山に上りしが、情けなきは伯父の御坊、都に甥を待たぬとて、さんざんに打ち給う。四条河原の細工夫婦が心ざし、田畑之介兄弟が情けのほど、生生世世に至るまで、いかでか忘れ申すべし。万雑公事を許してたべ。父御様。愛護の若」と書きとどめ（中略）いたわしや清平殿、「愛護が敵目の前にありけるを、知らでくらす無念なり。わが子の教養に、いかにいかに」と仰せける。「承り候」とて、雲井の局を簀巻きにし、月小夜を搦めたり、やがて車に乗せ、都の内をぞ引きにける。後には稲瀬が淵に沈めける。（中略）祈らせ給えば、不思議や池の水揺り上げ揺り上げ、黒雲北へ下がり、十六丈の大蛇、愛護の死骸を被き（頭にのせ）、壇の上にぞ（三重）置きにける。「ああ恥ずかしや、かりそめに思いをかけ、ついには、一念とげてあり。阿闍梨の行力つよくして、ただ今死骸を返すなり。わが跡問いて（弔って）たび給へ」と、言うかと思えば、水の底にぞ（三重）失せにけるは、身の毛もよだつばかりなり。（以下略） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 27 | 『諸国百物語』巻3-4「江州、白井介三郎が娘の執心、大蛇になりし事」 | 高田衛編・校注『江戸怪談集』（下）［全3冊］、岩波文庫30-257-3、岩波書店、1989年、pp. 52-57 | 江戸時代 | ●江州喜多郡、とちう村、りうげ峠と云ふ所に、高橋新五郎といふ大百姓あり。五歳になる男子を一人持てり。その向いに白井介三郎とて、これも劣らぬ百姓なるが、三歳になる娘を持てり。互ひの親、ねんごろの余りに、のちのちは夫婦にもせんとて、いひなづけの盃をさせ（中略）介三郎、はじめの契約をちがへ、娘十五になるとき、隣在所の、有徳なる百姓と縁組して、すでに祝言の当日にもなりければ、この娘（中略）下女を頼み、ひそかに向いの男子を呼びよせ、「（中略）祝言も今宵に極まり候ふ也。我をいづかたへも連れて退き給はれ」と云ふ。（中略）男子（中略）娘とともに、よるにまぎれ立ち退きぬ。（中略）夫婦もろとも手を取り組み、底の水屑となりけるが、何とかしたりけん、男子は木の枝にかかりて、え沈まず。その間に道行人、見つけて、救ひ上げければ、男子は助かりぬ。（中略）さて男子の母は、宿願の事ありて、石山の観音へ詣られけるが、瀬田の橋のほとりに、十四、五なる娘、さめざめと泣きゐたり。（中略）此の娘を伴なひ帰り、男子と夫婦になしけるが、男子も過ぎにして悲しみも打ち忘れ、今は比翼の語らひ深くして、男子一人もうけたりしが、はや三歳になりにける。（中略）部屋に行き見れば、女房、たけ一丈あまりの大蛇となりて、余念もなく臥しゐたり。夫、恐ろしくおもひ、呼び起こしければ、また元の女の姿となりて、夫にむかひ、「（中略）我はそのむかしの介三郎が娘也。その方様に添ひ申したき執心、死しても晴れやらず、今また女に様をかへ、年頃相ひなれ申したり。今はこれまで也。御名残をしく候ふ」とて、かき消すやうに失せにけり。（中略）その後（中略）池のうちより忽ち、女のすがた、現れ出で、子を受けとり、しばしがほど、乳をのませ、暇乞ひして池にいりぬ。その後（中略）この度は、池のうちより大蛇の姿となり、現れいで、紅の下をふりまはし、此の子を呑まんとして（中略）その後、親子もろともに、かの池に身を投げて、つひに空しくなりけると、所の人語り侍る。 |
| 28 | 『諸国百物語』巻2-12「遠江の国堀越と云ふ人、婦に執心せし事」 | 高田衛編・校注『江戸怪談集』（下）［全3冊］、岩波文庫30-257-3、岩波書店、1989年、pp. 32-34 | 江戸時代 | ●遠江の国に、堀越の何がしと云ふ人有りけるが、年十六にて、男を一人、儲けけるが、ほどなく此の子、十六才になりければ、妻を呼び迎へける。そのとき堀越は卅歳にてありしと也。この新婦、眉目かたち麗はしく、よろづ才覚なる女なれども、堀越は、逢ふてもものをもしかじか云はず、差し俯きて居けるほどに、みな人不審して、「此の婦御気に入り申さぬにや」ととへば、「いや、夫婦の間さへよくは、別のことあらじ」と云ふて、三年があいだ、何とやらん、ふらふらと心地あしく見えて、次第に病ひおもくなりければ（中略）婦、堀越の枕もとに寄り、手足をさすりて看病せられけるほどに、姑もつぎの間にいで、少しくつろぎ給ふが、（中略）堀越、蛇になりて、婦を三まとひ纏ひけるが、足元より、水、ざざと出で、その屋敷、淵となり、婦ともに沈みぬ。近き頃まで、天気よきときは、堀越が池のなかに、家の柱などと見えけると也。今は蛇身も住まざるにや、淵も浅く、小さくなりけると也。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 29 | 『新著聞集』巻10-28「二蛇頸をまとひ人家淵に變ず」 | 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫 / 博文館編輯局校訂 第47編、博文館、1903年、pp. 147-148 | 江戸時代 | ●阿州の二宮久太夫といふ人薩摩へ使者に行けるに。日向の國にて行暮し宿をかりけるに。（中略）亭主使を出 していはく。罷出見參に入たく候得共重病にかゝりて力なし。（中略）寢室に入て見るに。色青ざめたる男敷物厚くかさね。夜の物身にまとひ。苦しげに息をつぎ 。（中略）承度候とて首筋に卷たる衣をとれば。細き蛇二ツ頭をそろへてまとひ。（中略）かゝる病は聞だに及ばずと云しに。かたはらに十八九の女二人双六をうち居たりし。この蛇はこれなる女の執心にや。壹人嗔る事あれば一すちの蛇しむる。二人ともに嗔れば二ツながらしむる。（中略）されば御宿めされし後三日經て。この所地震風雨大かたならぬ難儀にて。（中略）夫がやしき殘る所なく淵となり。家にありし男女一人ものこらず失候とかたりし。 |
| 30 | 『新著聞集』巻12-12「恨婦蛇となる潜妾家を去る」 | 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫 / 博文館編輯局校訂 第47編、博文館、1903年、pp. 166-167 | 江戸時代 | ●江戸芝田町八町目紙屋太兵衛妻夫を恨むる事のつもり。煩ひて終に身まかりしを。そのまゝむかひの成覺寺におくりつかはし 。跡の寢道具を取除しかば。蒲團の下に六七尺ばかりの黒蛇死してありしを。おそろしと思ひながら。熊手にかけて。瀬戸の海に棄させければ。蛇たちまち生かへりて。棄し男より先へ家に入しを見て噪ぎ合りしかど 。家の內迄はその形見えざりし。四十九日過るとひとしく。異方におもひて置し女を呼入れしに。翌朝女迯かへりしをさまざま言とめしかど。戻らざりしは。定ておそろしき事もありけるにやと申あへり。 |

### 5.1.1 中国における虎の変身譚（虎が人間に変身するパターン）

| # | 出典 | 出典の詳細情報 | 時代 | 原文 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『太平御覧』巻888引『博物志』 | 李昉等撰『太平御覧』<全四冊>、中華書局出版、1960年2月第一版1995年10月第5次印刷、p.3944 | 晋代 | ●又曰江漢有貙人能為虎俗云貙虎化為人好著葛衣其足無踵有五指者皆貙也 |
| 2 | 『搜神後記』巻9（96）「虎卜吉」 | 陶潛撰・汪紹楹校注『搜神後記』、古小說叢刊、中華書局、1981年、p.57 | 南北朝 | ●丹陽人沉宗，在縣治下，以卜為業。義熙中，左將軍檀侯鎮姑孰，好獵，以格虎為事。忽有一人，著皮袴，乘馬，從一人，亦著皮袴；以紙裹十餘錢，來詣宗卜。云：「西去覓食好，東去覓食好？」宗為作卦，卦成，占之：「東向吉，西向不利。」因就宗乞飲，內口著甌中，狀如牛飲。既出，東行百餘步，從者及馬皆化為虎。自此以后，虎暴非常。 |
| 3 | 『太平御覧』巻165引『敦煌實錄』 | 李昉等撰『太平御覧』<全四冊>、中華書局出版、1960年2月第一版1995年10月第5次印刷、p.804 | 南北朝 | ●劉昞敦煌實錄曰晉安帝隆安元年涼州牧李暠微服出城逢虎道邊虎化為人遙呼暠為西涼君暠因彎弧待之又遙呼暠曰有事告汝無疑也暠知其異投弓於地人乃前曰敦煌空虛不是福地君之子孫王於西涼不如徙酒泉言訖乃失暠乃移都酒泉 |
| 4 | 『異苑』巻3 | 劉敬叔撰　陽松玠撰・範寧點校『異苑　談藪』、古小說叢刊、中華書局、1996年、p.16 | 南北朝 | ●晉太元末，徐桓以太元中出門，仿佛見一女子，因言曲相調，便要桓入草中，桓悅其色，乃隨去。女子忽然變成虎，負桓着背上，徑向深山。其家左右尋覓，惟見虎跡。旬日虎送徐桓下著門外。（太元中三字誤） |
| 5 | 『太平廣記』巻426引『五行記』「袁雙」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3467 | 隋代 | ●晉孝武太元五年。譙郡譙縣袁雙家貧客作。暮還家。道逢一女。年十五六。姿容端正。即與雙為婦。五六年後。家資甚豐。又生二男。至十歲，家乃巨富。後里有新死者。葬後。此女逃往至墓所。乃解衣脫釧挂樹。便變形作虎。發冢。曳棺出墓外。取死人食之。食飽後。還變作人。有見之者。竊語其壻。卿婦非人。恐將相害。雙聞之不信。經時。復有死者。輒復如此。後將其壻共看之。述知其實。後乃越縣趨墟，還食死人。出《五行記》 |
| 6 | 『太平廣記』巻427引『廣異記』「虎婦」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3475 | 唐代 | ●唐開元中。有虎取人家女為妻。於深山結室而居。經二載。其婦不之覺。後忽有二客携酒而至。便於室中群飲。戒其婦云。此客稍異。慎無窺覘。須臾皆醉眠。婦女往視。悉虎也。心大驚駭。而不敢言。久之。虎復為人形。還謂婦曰。得無窺乎。婦言初不敢離此。後忽云思家。願一歸覲。經十日。夫將酒肉與婦偕行。漸到妻家。遇深水。婦人先渡。虎方褰衣。婦戲云。卿背後何得有虎尾出。虎大慚。遂不渡水。因爾疾馳不返。出《廣異記》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 7 | 『太平廣記』巻431引『廣異記』「王太」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3499 | 唐代 | ●海陵人王太者與其徒十五六人野行。忽逢一虎當路。其徒云。十五六人決不盡死。當各出一衣以試之。至太衣。吼而隈者數四。海陵（陵字原闕。據明鈔本補。）多虎。行者悉持大棒。太選一棒。脫衣獨立。謂十四人。卿宜速去。料其已遠。乃持棒直前。擊虎中耳。故悶倒。尋復起去。太背走惶懼。不得故道。但草中行。可十餘里。有一神廟。宿于梁上。其夕。月明。夜後聞草中虎行。尋而虎至廟庭。跳躍變成男子。衣冠甚麗。堂中有人問云。今夕何爾纍悴。神曰。卒遇一人。不意勁勇。中其健棒。困極迫死。言訖。入座上木形中。忽舉頭見太。問是何客。太懼墮地。具陳始末。神云。汝業為我所食。然後十餘日方可死。我取爾早。故中爾棒。今以相遇。理當佑之。後數日。宜持猪來。以己血塗之。指庭中大樹。可繫此下。速上樹。當免。太後如言。神從堂中而出為虎。勁躍。太高不可得。乃俯食猪。食畢。入堂為人形。太下樹再拜乃還。爾後更無患。出《廣異記》 |
| 8 | 『太平廣記』巻427引『廣異記』「稽胡」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3475-3476 | 唐代 | ●慈州稽胡者以弋獵為業。唐開元末。逐鹿深山。鹿急走投一室。室中有道士。朱衣凭案而坐。見胡驚愕。問其來由。胡具言姓名。云。適逐一鹿。不覺深入。辭謝衝突。道士謂胡曰。我是虎王。天帝令我主施諸虎之食。一切獸各有對。無枉也。適聞汝稱姓名。合為吾食。案頭有朱筆及盃兼簿籍。因開簿以示胡。胡戰懼良久。固求釋放。道士云。吾不惜放汝。天命如此。為之奈何。若放汝。便失我一食。汝既相遇。必為取免。久之乃云。明日可作草人。以己衣服之。及猪血三斗、絹一匹。持與俱來。或當得免。胡遲回未去。見群虎來朝。道士處分所食。遂各散去。胡尋再拜而還。翌日。乃持物以詣。道士笑曰。爾能有信。故為佳士。因令胡立立字原闕。據明鈔本補。草人庭中。置猪血於其側。然後令胡上樹。以下望之高十餘丈。云。止此得矣。可以絹縛身着樹。不爾。恐有損落。尋還房中。變作一虎。出庭仰視胡。大嗥吼數四。向樹跳躍。知胡不可得。乃攫草人。擲高數丈。往食猪血盡。入房復為道士。謂胡曰。可速下來。胡下再拜。便以朱筆勾胡名。於是免難。出《廣異記》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 9 | 『太平廣記』巻433引『集異記』「崔韜」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3514-3515 | 唐代 | ●崔韜。蒲州人也。旅遊滁州。南抵歷陽。曉發滁州。至仁義舘。宿舘。吏曰。此舘凶惡。幸無宿也。韜不聽。負笈昇廳。舘吏備燈燭訖。而韜至二更。展衾方欲就寢。忽見舘門有一大足如獸。俄然其門豁開。見一虎自門而入。韜驚走。於暗處潛伏視之。見獸於中庭。脫去獸皮。見一女子。奇麗嚴飾。昇廳而上。乃就韜衾。出問之曰。何故宿余衾而寢。韜適見汝為獸入來。何也。女子起謂韜曰。願君子無所怪。妾父兄以畋獵為事。家貧。欲求良匹。無從自達。乃夜潛將虎皮為衣。知君子宿於是舘。故欲託身。以備灑掃。前後賓旅。皆自怖而殞。妾今夜幸逢達人。願察斯志。韜曰。誠如此意。願奉懽好。來日韜取獸皮衣。棄廳後枯井中。乃挈女子而去。後韜明經擢第。任宣城。時韜妻及男將赴任。與俱行。月餘。復宿仁義舘。韜笑曰。此舘乃與子始會之地也。韜往視井中。獸皮衣宛然如故。韜又笑謂其妻子曰。往日卿所著之衣猶在。妻曰。可令人取之。既得。妻笑謂韜曰。妾試更著之。妻乃下階。將獸皮衣著之。纔畢。乃化為虎。跳躑哮吼。奮而上廳。食子及韜而去。出《集異記》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 10 | 『太平廣記』巻429引『河東記』「申屠澄」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3486-3487 | 唐代 | ●申屠澄者。貞元九年。自布衣調補濮州什邡尉。之官。至真符縣東十里許遇風雪大寒。馬不能進。路旁茅舍中有煙火甚溫煦。澄往就之。有老父嫗及處女環火而坐。其女年方十四五。雖蓬髮垢衣。而雪膚花臉。舉止妍媚。父嫗見澄來。遽起曰。客衝雪寒甚。請前就火。澄坐良久。天色已晚。風雪不止。澄曰。西去縣尚遠。請宿於此。父嫗曰。苟不以蓬室為陋。敢不承命。澄遂解鞍。施衾幬焉。其女見客。更修容靚飾。自帷箔間復出。而閑麗之態。尤倍昔時。有頃。嫗自外挈酒壺至。於火前煖飲。謂澄曰。以君冒寒。且進一杯。以禦凝冽。因揖讓曰。始自主人。翁即巡行。澄當婪尾。澄因曰。座上尚欠小娘子。父嫗皆笑曰。田捨家所育。豈可備賓主。女子即回眸斜睨曰。酒豈足貴。謂人不宜預飲也。母即牽裙。使坐於側。澄始欲探其所能。乃舉令以觀其意。澄執盞曰。請徵書語。意屬目前事。澄曰。厭厭夜飲。不醉無歸。女低鬟微笑曰。天色如此。歸亦何往哉。俄然巡至女。女復令曰。風雨如晦。雞鳴不已。澄愕然歎曰。小娘子明慧若此。某幸未昏。敢請自媒如何。翁曰。某雖寒賤。亦嘗嬌保之。頗有過客。以金帛為問。某先不忍別。未許。不期貴客又欲援拾。豈敢惜。即以為託。澄遂修子婿之禮。祛囊以遺之。嫗悉無所取。曰。但不棄寒賤。焉事資貨。明日。又謂澄曰。此孤遠無隣。又復湫溢。不足以久留。女既事人。便可行矣。又一日。咨嗟而別。澄乃以所乘馬載之而行。既至官。俸祿甚薄。妻力以成其家。交結賓客。旬日之內。大獲名譽。而夫妻情義益浹。其於厚親族。撫甥姪。洎僮僕厮養。無不歡心。後秩滿將歸。已生一男一女。亦甚明慧。澄尤加敬焉。常作贈內詩一篇曰。一官慙梅福。三年愧孟光。此情何所喻。川上有鴛鴦。其妻終日吟諷。似默有和者。然未嘗出口。每謂澄曰。為婦之道。不可不知書。倘更作詩。反似嫗妾耳。澄罷官。即罄室歸秦。過利州。至嘉陵江畔。臨泉藉草憩息。其妻忽悵然謂澄曰。前者見贈一篇。尋即有和。初不擬奉示。今遇此景物。不能終默之。乃吟曰。琴瑟情雖重。山林志自深。常尤時節變。辜負百年心。吟罷。潸然良久。若有慕焉。澄曰。詩則麗矣。然山林非弱質所思。倘憶賢尊。今則至矣。何用悲泣乎。人生因緣業相之事。皆由前定。後二十餘日。復至妻本家。草舍依然。但不復有人矣。澄與其妻即止其舍。妻思慕之深。盡日涕泣。於壁角故衣之下。見一虎皮。塵埃積滿。妻見之。忽大笑曰。不知此物尚在耶。披之。即變為虎。哮吼拿攫。突門而去。澄驚走避之。携二子尋其路。望林大哭數日。竟不知所之。出《河東記》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 11 | 『太平廣記』巻427引『原化記』「天寶選人」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3479 | 唐代 | ●天寶年中。有選人入京。路行日暮。投一村僧房求宿。僧不在。時已昏黑。他去不得。遂就榻假宿。鞍馬置於別室。遲明將發。偶巡行院內。至院後破屋中。忽見一女子。年十七八。容色甚麗。蓋虎皮。熟寢之次。此人乃徐行。掣虎皮藏之。女子覺。甚驚懼。因而為妻。問其所以。乃言逃難至此藏伏。去家已遠、載之別乘赴選。選既就。又與同之官。數年秩滿。生子數人。一日俱行。復至前宿處。僧有在者。延納而宿。明日未發間。因笑語妻曰。君豈不記余與君初相見處耶。妻怒曰。某本非人類。偶爾為君所收。有子數人。能不見嫌。敢且同處。今如見耻。豈徒為語耳。還我故衣。從我所適。此人方謝以過言。然妻怒不已。索故衣轉急。此人度不可制。乃曰。君衣在北屋間。自往取。女人大怒。目如電光。猖狂入北屋間。尋覓虎皮。披之於體。跳躍數步。已成巨虎。哮吼回顧。望林而往。此人驚懼。收子而行。出《原化記》 |
| 12 | 『太平廣記』巻434引『傳奇』「甯茵」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3525-3527 | 唐代 | ●大中年。有甯茵秀才假大寮莊於南山下。棟宇半墮。墻垣又缺。因夜風清月朗。吟咏庭際。俄聞叩門聲。稱桃林斑特處士相訪。茵啟關。睹處士形質瓌瑋。言詞廓落。曰。某田野之士。力耕之徒。向畎畝而辛勤。與農夫而齊類。巢居側近。睹風月皎潔。聞君吟咏。故來奉謁。茵曰。某山林甚僻。農具為鄰。蓬蓽既深。輪蹄罕至。幸此見訪。頗慰羈懷。遂延入。（中略）俄又聞人扣關曰。南山斑寅將軍奉謁。茵遂延入。氣貌嚴聳。旨趣剛猛。及二斑相見。亦甚忻慰。寅曰。老兄知得姓之根本否。（中略）尤增慰悅。寅因覩棊局在牀。謂特曰。願接老兄一局。特遂欣然為之。良久。未有勝負。茵翫之。教特一兩著。寅曰。主人莫是高手否。茵曰。若管中窺豹。時見一斑。兩斑笑曰。大有微機。真一發兩中。茵傾壺請飲。及局罷而飲。數巡。寅請備脯修以送酒。茵出（茵出原作寅設。據明鈔本改。）鹿脯。寅嚙決。（中略）寅怒。拂衣而起曰。甯生何黨此輩。自古即有班馬之才。豈有斑牛之才。且我生三日。便欲噬人。此人況偷我姓氏。但未能共語（明鈔本共語作明言。）者。蓋惡傷其類耳。耳原作而。據明鈔本改。遂怒曰。終不能搖尾於君門下。乃長揖而去。特亦怒曰。古人重者白眉。君今白額。豈敢有人言譽耳。（明鈔本有人言譽耳作要譽於人耶。）何相怒（明鈔本怒作欺。）如斯。特遂告辭。及明。視其門外。唯虎跡牛踪而已。甯生方悟。尋之數百步。人家廢莊內。有一老牛臥。而猶帶酒氣。虎即入山矣。茵後更不居此而歸京矣。出《傳奇》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 13 | 『太平廣記』巻430引『傳奇』「馬拯」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3492-3494 | 唐代 | ●唐長慶中。有處士馬拯性冲淡。好尋山水。不擇嶮峭。盡能躋攀。一日居湘中。因之衡山祝融峰。詣伏虎師。佛室內道場嚴潔。果食馨香。兼列白金皿于佛榻上。見一老僧眉毫雪色。朴野魁梧。甚喜拯來。使僕挈囊。僧曰。假君僕使。近縣市少鹽酪。拯許之。僕乃挈金下山去。僧亦不知去向。俄有一馬沼山人亦獨登此來。見拯。甚相慰悅。乃告拯曰。適來道中。遇一虎食一人。不知誰氏之子。說其服飾。乃拯僕夫也。拯大駭。沼又云。遙見虎食人盡。乃脫皮。改服禪衣。為一老僧也。拯甚怖懼。及沼見僧曰。只此是也。拯白僧曰。馬山人來云。某僕使至半山路。已被虎傷。奈何。僧怒曰。貧道此境。山無虎狼。草無毒螫。路絕蛇虺。林絕鴟鴞。無信妄語耳。拯細窺僧吻。猶帶殷血。向夜。二人宿其食堂。牢扃其戶。明燭伺之。夜已深。聞庭中有虎。怒首觸其扉者三四。賴戶壯而不隳。二子懼而焚香。虔誠叩首於堂內土偶賓頭盧者。良久。聞土偶吟詩曰。寅人但溺欄中水。午子須分艮畔金。若教特進重張弩。過去將軍必損心。二子聆之而解其意。曰。寅人虎也。欄中即井。午子即我耳。艮畔金即銀皿耳。其下兩句未能解。及明。僧叩門曰。郎君起來食粥。二子方敢啟關。食粥畢。二子計之曰。此僧且在。我等何由下山。遂詐僧云。井中有異。使窺之。細窺次。二子推僧墮井。其僧即時化為虎。二子以巨石鎮之而斃矣。二子遂取銀皿下山。近昏黑。而遇一獵人。於道旁張窩弓。樹上為棚而居。語二子曰。無觸我機。兼謂二子曰。去山下猶遠。諸虎方暴。何不且上棚來。二子悸怖。遂攀緣而上。將欲人定。忽三五十人過。或僧。或道。或丈夫。或婦女。歌唫者。戲舞者。前至窩弓所。衆怒曰。朝來被二賊殺我禪和。方今追捕之。又敢有人張我將軍。遂發其機而去。二子並聞其說。遂詰獵者。曰。此是倀鬼。被虎所食之人也。為虎前呵道耳。二子因徵獵者之姓氏。曰。名進。姓牛。二子大喜曰。土偶詩下句有驗矣。特進乃牛進也。將軍即此虎也。遂勸獵者重張其箭。獵者然之。張畢登棚。果有一虎哮吼而至。前足觸機。箭乃中其三班。貫心而踣。逡巡。諸倀奔走却回。伏其虎。哭甚哀曰。誰人又殺我將軍。二子怒而叱之曰。汝輩無知下鬼。遭虎齧死。吾今為汝報仇。不能報謝。猶敢慟哭。豈有為鬼。不靈如是。遂悄然。忽有一鬼答曰。都不知將軍乃虎也。聆郎君之說。方大醒悟。就其虎而罵之。感謝而去。及明。二子分銀與獵者而歸耳。出《傳奇》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 14 | 『太平廣記』卷430引『傳奇』「王居貞」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3495 | 唐代 | ●明經王居貞者下第。歸洛之潁陽。出京。與一道士同行。道士盡日不食。云。我咽氣術也。每至居貞睡後。燈滅。（滅原作灯。據明鈔本、許本、黃本改。）即開一布囊。取一皮披之而去。五更復來。他日。居貞佯寢。急奪其囊。道士叩頭乞。居貞曰。言之即還汝。遂言吾非人。衣者虎皮也。夜即求食於村鄙中。衣其皮。即夜可馳五百里。居貞以離家多時。甚思歸。曰。吾可披乎。曰。可也。居貞去家猶百餘里。遂披之暫歸。夜深。不可入其門。乃見一豬立於門外。擒而食之。逡巡回。乃還道士皮。及至家。云。居貞之次子夜出。為虎所食。問其日。乃居貞回日。自後一兩日甚飽。並不食他物。出《傳奇》 |
| 15 | 『太平廣記』卷431引『瀟湘錄』「趙倜」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3501 | 唐代 | ●荊州有一商賈。姓趙名倜。多南泛江湖。忽經歲餘未歸。有一人先至其家。報趙倜妻云。趙倜物貨俱沒于湖中。倜僅免一死。甚貧乏在路。即當至矣。其妻驚哭不已。後三日。有一人。一如趙倜儀貌。來及門外大哭。其妻遽引入家內。詢問其故。安存經百餘日。欲再商販。謂趙倜妻曰。我慣為商在外。在家不樂。我心無聊。勿以我不顧戀爾。當容我却出。投交友。俄而倜輦物貨。自遠而至。及入門。其妻反乃驚疑走出。以投鄰家。其趙倜良久問其故。知其事。遂令人喚其人。其人至。既見趙倜。奔突南走。趙倜與同伴十餘人共趁之。直入南山。其人回顧謂倜曰。我通靈虎也。勿逐我。我必傷爾輩。遂躍身。化為一赤色虎。叫吼而去。出《瀟湘錄》 |
| 16 | 『太平廣記』卷431引『瀟湘錄』「周義」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3502 | 唐代 | ●周義者。鄭人也。性倜儻。好急人之患難。忽有一人年可弱冠已來。衣故錦衣。策杖而詣周義。謂義曰。我是孟州使君之子也。偶出獵於郊坰。既獲兔後。其鷹犬與所從我十餘少年。與所乘馬。皆無故而死。我亦有一流矢。不知自何至。傷我右足。我是以不敢返歸。恐少年家父母不捨我。今聞君急人之患難。故特來投君。幸且容我。我他日必厚報君之惠也。義遂藏之於家。經百餘日。義既不聞孟州有此事。乃夜與少年對酌。問之曰。君子始投我。言是使君之子。因出獵有死傷。不敢返歸。今何不傳聞此事。我疑君子。君子必以實告我。我必無貳。少年沉吟移時。方起拜而言曰。我始設此異詞者。蓋欲憫念納我。今若必問我。我實不敢更設詐也。君當不移急人之心。我即以實告君。義曰。我終無貳。但言之。少年曰。我孟州境內虎也。傷人多矣。刺史發州兵搜求我。欲殺我。聞君廣義。因變形質以投君。君憐恤我。待之如賓。但我已誓報君之惠不忘。今夜既言。誠實事也。我不可住。遂叫吼數聲。化為一虎走去。後月餘。夜有一少年踰垣入義家。拋下一金枕。高聲告周義。我是昔受恩人也。今將此枕。答君之惠。言訖。復化為一虎去。出《瀟湘錄》 |
| 17 | 『太平廣記』卷433引『錄異記』「姨虎」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3514 | 五代 | ●劒州永歸葭萌劒門益昌界。嘉陵江側有婦人。年五十已來。自稱十八姨。往往來民家。不飲不食。每教論於人曰。但作好事。莫違負神理。居家和順。孝行為上。若為惡事者。我常令猫兒三五箇巡檢汝。語未畢遂去。或奄忽不見。每歲。約三五度有人遇之。民間知其虎所化也。皆敬懼之焉。出《錄異記》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 18 | 『茅亭客話』「虎化為僧」 | 東京大学東洋文化研究所所蔵漢籍善本全文影像資料庫、『茅亭客話』一巻（舊小説所収）、舊小説丁集宋、p.93、参照 URL:http://shanben.ioc.u-tokyo.ac.jp/main_p?nu=B2813100&order=rn_no&no=00416&im=010005 0&size=small&pg=4 | 宋代 | ●武都人姓徐失其名以商賈為業開寶初往巴逢興販其路危狹猿徑鳥道人烟杜絶猛獸羣行村甿皆於細路中設檻穽以捕之為常矣時徐至一村安泊中夜報云機發村人炬火照之見一老僧困憊在穽中自陳曰夜來入村教化迴誤落穽中望諸檀越慈悲解救村甿輩共愍開檻而出之躍跳數十成一巨虎奮迅騰躑而逝斯畜也以人言誘喻村甿得脱其難亦智矣 |
| 19 | 『夷堅志補』巻4「荊南虎」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第四冊、中華書局、1981年、pp.1586-1587 | 宋代 | ●唐小說多載虎將食人，而皮為人所牽，不能去，或作道士僧與言語。南城鄧秉，見故山陰宰離巨源說一事，大與古類，而微有不同者。建炎間，荊南虎暴甚，白晝博人，城外民家，多遷入以避。張四者，徒居甫畢，未及閉門，而虎突然遽至，急登梁喘伏，虎未之見也。升堂脫其皮，變為男子，長吁而呼曰：吾奉天符取汝，汝安所逃死邪 ！遍歷室內及居側林莽間尋之。張度其已遠，乃下取所留皮，縛置梁上。日暮虎還，視皮，失之矣！意緒窘擾，大叱曰：汝既避匿，又竊我皮，吾奉取十七人，今已得十有六，獨汝未耳。倘不信吾，看我懷中丹書。遂探出，陳於地，曰：此天符也，十六人姓名已勾了，正餘汝在，善還我皮，當捨汝，能指示我筆墨處乎？張念久不使去，患將益生，應之曰：還皮易耳，汝即食我，奈何？曰：我雖異類，不忍負信，豈有相誤理。張指示之，則徑往拈筆，勾其名。張乃擲皮下，虎蒙於體復故形，哮吼奮迅，幾及於梁。張戰慄膽落，欲墜（明鈔本作墮）再三，虎忽跳出，不反顧。明日，聞六十里外耆長報縣，言昨日夜大雷，震死一虎。 |
| 20 | 『湖海新聞夷堅續志』後集巻2「精怪門・狐虎」「虎謝老娘」 | 元好問撰・常振國點校　無名氏撰・金心點校『續夷堅志 湖海新聞夷堅續志』、古體小說叢刊、中華書局、1986年第1版2006年第2版、pp.252 | 宋代 | ●至元甲申，州城外有老娘姓吳，夜二更有荷轎者立於門首，敲門曰：請老娘收生。老娘開門，喜而入轎。但見輿夫二人行步甚速，雖荊棘亦不顧也。到一所，屋宇高敞，燈燭明麗，一女子坐蓐。老娘與之收生，得一男子，洗畢而歸，到家已中矣。其家問之，老娘如夢，亦不知為何人之家。忽見二虎咆哮于門，驚甚。次日開門，見籬之有豬肉一邊，牛肉一腳，左右鄰里莫不怪之。蓋虎以此來謝老娘也，誰謂禽獸無人心哉！ |
| 21 | 『瀛涯勝覽』「滿剌加國」 | 馬歡原著 萬明校注『明鈔本瀛涯勝覽校注』、海洋出版社、2005年、pp.40-41 | 明代 | ●山出黑虎，比中國黃虎略小，其毛黑色，亦有暗色花紋。黃虎亦有。內有虎為人入市混人而行，自有識者擒而殺之。 |
| 22 | 『閱微草堂筆記』巻17「壬午順天鄉試」 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、pp.437-438 | 清代 | ●壬午順天鄉試…延彬曰：「里有入山樵采者，见一美妇隔涧行，衣饰华丽，不似村妆，心知为魅，伏丛薄中觇所往。适一鹿引麂下涧饮，妇见之，突扑地化为虎，衣饰委地如蝉蜕，迳搏二鹿食之。斯须仍化美妇，整顿衣饰，款款循山去。临流照影，妖媚横生，几忘其曾为虎也。」秦涧泉前辈曰：「妖媚蛊惑，但不变虎形耳，捕噬之性则一也。偶露本质，遽相惊讶，此樵何少见多怪乎？」 |

### 5.1.2 中国における虎の変身譚（人間が虎に変身するパターン）

| # | 出典 | 出典の詳細情報 | 時代 | 原文 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『太平御覧』巻892引『括地圖』 | 李昉等撰『太平御覧』<全四冊>、中華書局出版、1960年2月第一版 1995年10月第5次印刷、p.3960 | 漢代 | ●括地圖曰越俚之民老者化為虎 |
| 2 | 『淮南子』巻2「俶真」 | 何寧撰『淮南子集釋』（上冊）、新編諸子集成第一輯、中華書局、1998年、p.99-100 | 漢代 | ●昔公牛哀轉病也，七日化為虎。其兄掩戸而入覘之，則虎搏而殺之。是故文章成獸，爪牙移易，誌與心變，神與形化。方其為虎也，不知其嘗為人也；方其為人，不知其且為虎也。 |
| 3 | 『太平御覧』巻888引『博物志』 | 李昉等撰『太平御覧』<全四冊>、中華書局出版、1960年2月第一版 1995年10月第5次印刷、p.3944 | 晋代 | ●又曰江漢有貙人能為虎俗云貙虎化為人好著葛衣其足無踵有五指者皆貙也 |
| 4 | 『太平御覽』巻172引『郡國志』 | 李昉等撰『太平御覧』<全四冊>、中華書局出版、1960年2月第一版 1995年10月第5次印刷、p.838 | 晋代 | ●郡國志曰俗以青石為刀劍如銅鐵法婦人亦為環玦代珠玉也夷人往往化為貙。（貙，小虎也。） |
| 5 | 『水經注』巻37「葉榆河」引『交州記』 | 酈道元原著・陳橋驛 葉光庭 葉揚譯註『水經注全譯』中國歷代名著全譯叢書、貴州人民出版社、1996年、p.1265 | 晋代 | ●劉欣期《交州記》曰：龍編縣功曹左飛，曾化為虎，數月，還作吏。 |
| 6 | 『太平廣記』巻11引『神仙傳』「欒巴」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第一冊、p.75-76 | 晋代 | ●欒巴者。蜀郡成都人也。少而好道。不修俗事。時太守躬詣巴。請屈為功曹。待以師友之禮。巴到。（到原作陵。據明鈔本改。）太守曰。聞功曹有道。寧可試見一奇乎。巴曰。唯。即平坐。却入壁中去。冉冉如雲氣之狀。須臾。失巴所在。壁外人見化成一虎。人並驚。虎徑還功曹舍。人往視虎。虎乃巴成也。（以下略）出《神仙傳》 |
| 7 | 『搜神記』巻12（307）「貙虎化人」 | 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985年、p.152 | 晋代 | ●江漢之域，有貙人。其先，稟君之苗裔也。能化為虎。長沙所屬蠻縣東高居民，曾作檻捕虎。檻發，明日，眾人共往格之，見一亭長，赤幘大冠，在檻中坐。因問「君何以入此中？」亨長大怒曰：「昨忽被縣召，夜避雨，遂誤入此中。急出我。」曰：「君見召，不當有文書耶？」即出懷中召文書。於是即出之。尋視，乃化為虎，上山走。或云：「貙，虎化為人，如著紫葛衣，其足無踵，虎，有五指者，皆是貙。」 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 8 | 『搜神後記』巻4（47）「虎符」 | 陶潛撰・汪紹楹校注『搜神後記』、古小說叢刊、中華書局、1981年、p.28 | 南北朝 | ●魏時，尋陽縣北山中蠻人有術，能使人化作虎，毛色爪牙，悉如真虎。鄉人周畛有一奴，使入山伐薪。奴有婦及妹，亦與俱行。既至山，奴語二人云：「汝且上高樹，視我所為。」如其言。既而入草，須臾，見一大黃斑虎從草中出，奮迅吼喚，甚可畏怖。二人大駭。良久，還草中，少時，復還為人。語二人云：「歸家慎勿道。」後遂向等輩說之。周尋得知，乃以醇酒飲之，令熟醉。使人解其衣服及身體，事事詳悉，了無他異；唯於髻髮中得一紙，畫作大虎，虎邊有符。周密取錄之。奴既醒，喚問之。見事已露，遂具說本末云：「先嘗於蠻中告糴，有蠻師云有此術，乃以三尺布，數升米糈，一赤雄雞，一升酒，授得此法。」 |
| 9 | 『太平廣記』巻426引『齊諧記』「 師道宣」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3468 | 南北朝 | ●晉太元元年。江夏郡安陸縣師道宣。…後忽發狂。變為虎。食人不可紀。後有一女子樹上採桑。虎取食之。竟。乃藏其釵釧於山石間。後復人形。知而取之。經年還家。復為人。遂出仕。官為殿中令史。夜共人語。忽道天地變怪之事。道宣自云。吾嘗得病發狂。遂化作虎啗人。言其姓名。同坐人或坐人。或有食其父子兄弟者。於是號哭。捉送赴官。遂餓死建康獄中。出《齊諧記》 |
| 10 | 『太平廣記』巻426引『齊諧記』「吳道宗」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3467-3468 | 南北朝 | ●晉義熙四年。東陽郡太末縣吳道宗少失父。與母居。未娶婦。一日。道宗他適。隣人聞屋中窣磕之聲。窺不見其母。但有烏斑虎在屋中。隣人恐虎食道宗母。遂鳴鼓會里人共救之。圍宅突進。不見有虎。但見其母。語如平常。不解其意。兒還。母語之曰：「宿罪見譴。當有變化事。」後一月。忽失母。縣界內虎災屢起。皆云烏斑虎。百姓患之。衆共格之。傷數人。後人射虎。箭帶膺。並戟刺中其腹。然不能即死。經數日後。虎還其家。不能復人形。伏床上而死。其兒號泣。葬之如母。出《齊諧記》 |
| 11 | 『太平廣記』巻426引『齊諧記』「牧牛兒」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3468 | 南北朝 | ●晉復陽縣里民家兒常牧牛。牛忽舐此兒。舐處肉悉白。兒俄而死。其家葬此兒。殺牛以供賓客。凡食此牛肉。男女二十餘。人悉變作虎。出《廣異記》 |
| 12 | 『異苑』巻5 | 劉敬叔撰　陽松玠撰・範寧點校『異苑　談藪』、古小說叢刊、中華書局、1996年、p.41 | 南北朝 | ●秦時中宿縣十里外有觀亭江神祠壇甚靈異。經過有不恪者，必狂走入山，變為虎（以下略） |
| 13 | 『異苑』巻8 | 劉敬叔撰　陽松玠撰・範寧點校『異苑　談藪』、古小說叢刊、中華書局、1996年、pp.82-83 | 南北朝 | ●晉太康中，滎陽鄭襲為廣陵太守，門下騶，忽如狂，奄失其所在。經日尋得。裸身呼吟，膚血淋漓。問其故云，社公令其作虎，以斑皮衣之。辭以執鞭之士，不堪虓躍。神怒，還使剝皮。皮已着肉。瘡毀慘痛。旬日乃差。 |
| 14 | 『異苑』巻8 | 劉敬叔撰　陽松玠撰・範寧點校『異苑　談藪』、古小說叢刊、中華書局、1996年、p.83 | 南北朝 | ●晉太元十九年，鄱陽桓闡殺犬祭鄉裡綏山，煮肉不熟。神怒，即下教於巫曰，桓闡以肉生貽我，當謫令自食也。其年，忽變作虎。作虎之始，見人以斑皮衣之，即能跳躍噬逐。 |
| 15 | 『異苑』巻8 | 劉敬叔撰　陽松玠撰・範寧點校『異苑　談藪』、古小說叢刊、中華書局、1996年、p.83 | 南北朝 | ●晉時豫章郡吏易拔，義熙中受番還家，遠遁不返。郡遣追，見拔言語如常，亦為設食。使者催令束裝，拔因語曰：「汝看我面。」乃見眼目角張，身有黃斑色，便豎一足，徑出門去。家先依山為居，至林麓，即變成三足大虎。所豎一足，即成其尾也。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 16 | 『太平廣記』巻426引『述異記』「封邵」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3466 | 南北朝 | ●漢中有虎生角。道家云，虎千歲則牙蛻而角生。漢宣城郡守封邵，一日忽化為虎，食郡民。民呼曰封使君。因去不復來，故時人語曰。無作封使君。生（生字原闕。據明鈔本、陳校本補。）不治民死食民。出《述異記》 |
| 17 | 『太平御覧』巻910引『述異記』 | 李昉等撰『太平御覧』<全四冊>、中華書局出版、1960年2月第一版 1995年10月第5次印刷、p.4033 | 南北朝 | ●述異記曰南康營民伍考之伐舡材忽見太社樹上有一猴懷孕考植點登木逐猴騰赴如飛樹既孤迫下又有人猴知不脫因以左手抱樹枝右手撫腹考之擒得遙擺地殺之割其腹有一子形狀垂產爾夜夢見一人稱神以殺猴責讓之后考之病鞠挾初如狂因漸化為虎毛鬢爪牙悉生音聲亦變遂逸走入山永無蹤跡 |
| 18 | 『太平廣記』巻433引『高僧傳』「僧虎」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3512-3513 | 南北朝 | ●袁州山中。有一村院僧忘其法名。偶得一虎皮。戲被於身。搖尾掉頭。頗克肖之。或於道旁戲。鄉人皆懼而返走。至有遺其所携之物者。僧得之喜。潛於要衝。伺往來有負販者。歛自草中躍出。昂然虎也。皆棄所賫而奔。每蒙皮而出。常有所獲。自以得計。時時為之。忽一日被之。覺其衣着于體。及伏草中良久。試暫脫之。萬方皆不能脫。自視其手足虎也。爪牙虎也。乃近水照之。頭耳眉目。口鼻尾毛。皆虎矣。非人也。心又樂于草間。遂捕狐兔以食之。拏攫飲啖。皆虎也。是後常與同類遊處。復為鬼神所役使。夜則往來于山中。寒暑雨雪不得休息。甚厭苦之。形骸雖虎。而心歷歷然人也。但不能言耳。周歲餘。一旦餒甚。求無所得。乃潛伏道傍。忽一人過于前。遂躍而噬之。既死。將分裂而食。細視之。一衲僧也。心自惟曰。我本人也（也原作心。據明鈔本改。）幸而為僧。不能守禁戒。求出輪廻。自為不善。活變為虎。業力之大。無有是者。今又殺僧以充腸。地獄安容我哉。我寧餒死。弗重其罪也。因仰天大號。聲未絕。忽然皮落如脫衣狀。自視其身。一裸僧也。奔舊院。院已荒廢。乃用草遮身。投于俗家。得破衣數件。走于隣境佛寺。因遊方。止臨川崇壽院衆堂中。是時圓超上人居看經堂。其僧侍立不懈。上人念其恭勤。乃問爾何處人。出家幾夏臘。修習何等法。而勤勤若此。對曰。某心有悔行。願因上人決之。但不欲他僧聞耳。乃屏侍者問之。其僧言為虎之事。叩頭作禮。求讖罪業。上人謂曰。生死罪福。皆由念作。剎那之間。即分天堂地獄。豈在前生後世耶。爾惡念為虎。善念為人。豈非證哉。苟有志乎脫離者。趣無上菩提。還元反本。念不著。則人不為虎。虎不為人矣。方今閩中。大善知識比肩。爾其往哉。僧乃奉教。上人尋話于智作長老。長老往見之。以上人向者事問。皆無異同。雙目猶赤。耽然可畏也。後入嶺。不知所適。出《高僧傳》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 19 | 『太平廣記』巻426引『五行記』「黄乾」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3470 | 隋代 | ●梁末。始興人黄乾有妹小珠。聘同縣人李肅。小妹共嫂入山採木實。過神廟。而小珠在廟戀慕不肯歸。及將還。復獨走上廟。見人即入草中。乾妻來告肅。肅以為更有他意。肅被縣召。將一伴夜還。值風雨。見廟屋有火。二人向火炙衣。見神床上有衣。少間。聞外有行聲。二人惶怖。入神床屏風後。須臾。見一虎振尾奮迅。直至火邊。自脱牙爪。捲其皮。置床上。着衣向火坐。肅看乃小珠也。肅徑出抱之。與語不應。明日將歸。送向乾家。乃閉置一室。擲生肉則接食之。其恒看守。少日又成虎。郡縣檢驗。村人乃將弓弩上舍。即發屋射殺之。明日有虎暴。百姓白日閉門。太守熊基表聞之。出《五行記》 |
| 20 | 『太平廣記』巻426引『五行志』「郴州佐史」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3471-3472 | 唐代 | ●唐長安年中。郴州佐史因病而為虎。將噉其嫂。村人擒獲。乃佐史也。雖形未全改。而尾實虎矣。因縶樹數十日。還復為人。長史崔玄籌親問其故。佐史云。初被一虎引見一婦人。盛服。諸虎恒參集。各令取當日之食。時某新預虎列。質未全。不能別覓他人。將取嫂以供。遂為所擒。今雖作虎不得。尚能其聲耳。籌令試之。史乃作虎聲。震駭左右。簷瓦振落。出《五行志》 |
| 21 | 『太平廣記』巻427引『廣異記』「費忠」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3474-3475 | 唐代 | ●費州蠻人。舉族姓費氏。境多虎暴俗。皆樓居以避之。開元中。狄光嗣為刺史。其孫博望生于官舍。博望乳母堵費忠勁勇能射。嘗自州負米還家。山路見阻。不覺日暮。前程尚三十餘里。忠懼不免。以所持刃。刈薪數束。敲石取火。焚之自守。須臾。聞虎之聲。震動林藪。忠以頭巾冒（冒原作胃。據明鈔本改。）米袋。腰帶束之。立於火光之下。挺身上大樹。頃之。四虎同至。望見米袋。大虎前躩。既知非人。相顧默然。次虎引二子去。大虎獨留火所。忽爾脱皮。是一老人。枕手而寐。忠素勁捷。心頗輕之。乃徐下樹扼其喉。以刀擬頸。老人乞命。忠縛其手而詰問之。云是北村費老。被罰為虎。天曹有日曆令食人。今夜合食費忠。故候其人。適來正值米袋。意甚鬱怏。留此須其復來耳。不意為君所執。如不信。可於我腰邊看日曆。當知之。忠觀曆畢。問何以救我。答曰。若有同姓名人。亦可相代。異時事覺。我當為受罰。不過十日饑餓耳。」忠云。今有南村費忠。可代我否。老人許之。忠先持其皮上樹杪。然後下解老人。老人曰。君第牢縛其身附樹。我若入皮。則不相識。脱聞吼落地。必當被食。事理則然。非負約也。」忠與訣。上樹。擲皮還之。老人得皮。從後脚入。復形之後。大吼數十聲。乃去。忠得還家。數日。南村費忠鋤地遇噉也。出《廣異記》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 22 | 『太平廣記』巻432引『廣異記』「范端」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3506-3507 | 唐代 | ●涪陵里正范端者。為性幹了。充州縣任使。久之。化為虎。村隣苦之。遂以白縣云。恒引外虎入村。盜食牛畜。縣令云。此相惡之辭。天下豈有如此事。遂召問。端對如令言。久之。有虎夜入倉內盜肉。遇曉不得出。更遞圍之。虎傷數人。逸去。耆老又以為言。縣令因嚴詰端所由。端乃具伏云。常思生肉。不能自致。夜中實至于東家欄內竊食一豬。覺有滋味。是故見人肥充者。便欲噉之。但苦無伍耳。每夜東西求覓。遇二虎見隨。所有得者。皆共分之。亦不知身之將變。然察其舉措。如醉也。縣令以理喻遣之。是夜端去。凡數日而歸。衣服如故。家居三四日。昏後。野虎輒來至村外鳴吼。村人恐懼。又欲（欲原作恐。據明鈔本改。）殺之。其母告諭令去。端泣涕辭母而行。數日。或見三虎。其一者。後左足是靴。端母乃遍求于山谷。復見之。母號哭。二虎走去。有靴者獨留。前就之。虎俯伏閉目。乃為脫靴。猶是人足。母持之而泣。良久方去。是後鄉人頻見。或呼范里正。二虎驚走。一虎回視。俛仰有似悲愴。自是不知所之也。出《廣異記》 |
| 23 | 『太平廣記』巻431引『廣異記』「荊州人」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3499-3500 | 唐代 | ●荊州有人山行。忽遇倀鬼。以虎皮冒己。因化為虎。受倀鬼指揮。凡三四年。搏食人畜及諸野獸。不可勝數。身雖虎而心不願。無如之何。後倀引虎經一寺門過。因遽走入寺庫。伏庫僧床下。道人驚恐。以白有德者。時有禪師能伏諸橫獸。因至虎所。頓錫問。弟(明鈔本、陳校本弟作佛。)子何所求耶。為欲食人。為厭獸身。虎弭耳流涕。禪師手巾繫頸。牽還本房。恒以衆生食及他味哺之。半年毛落。變人形。具說始事。二年不敢離寺。後暫出門。忽復遇倀。以虎皮冒己。遽走入寺。皮及其腰下。遂復成虎。篤志誦經。歲餘方變。自爾不敢出寺門。竟至死。出《廣異記》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 24 | 『太平廣記』巻426引『解頤錄』「峽口道士」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3472-3473 | 唐代 | ●開元中。峽口多虎。往來舟船皆被傷害。自後但是有船將下峽之時。即預一人充飼虎。方舉船無患。不然。則船中被害者衆矣。自此成例。船留二人上岸飼虎。經數日。其後有一船。內皆豪強。數內有二人單窮。被衆推出。令上岸飼虎。其人自度力不能拒。乃為出船。而謂諸人曰。某貧窮。合為諸公代死。然人各有分定。苟不便為其所害。某別有懇誠。諸公能允許否。衆人聞其語言甚切。為之愴然。而問曰。爾有何事。其人曰。某今便上岸。尋其虎蹤。當自別有計較。但懇為某留船灘下。至日午時。若不來。即任船去也。衆人曰。我等如今便泊船灘下。不止住今日午時。兼為爾留宿。俟明日若不來。船即去也。言訖。船乃下灘。其人乃執一長柯斧。便上岸。入山尋虎。並不見有人蹤。但見虎跡而已。林木深邃。其人乃見一路。虎蹤甚稠。乃更尋之。至一山隘。泥極甚。虎蹤轉多。更行半里。即見一大石室。又有一石床。見一道士在石床上而熟寐。架上有一張虎皮。其人意是變虎之所。乃躡足。于架上取皮。執斧衣皮而立。道士忽驚覺。已失架上虎皮。乃曰。吾合食汝。汝何竊吾皮。其人曰。我合食爾。爾何反有是言。二人爭競。移時不已。道士詞屈。乃曰。吾有罪于上帝。被謫在此為虎。合食一千人。吾今已食九百九十九人。唯欠汝一人。其數當足。吾今不幸。為汝竊皮。若不歸。吾必須別更為虎。又食一千人矣。今有一計。吾與汝俱獲兩全。可乎。其人曰。可也。道士曰。汝今但執皮還船中。剪髮及鬚鬢少許。剪指爪甲。兼頭面脚手及身上。各瀝少血二三升。以故衣三兩事裹之。待吾到岸上。汝可拋皮與吾。吾取披已。化為虎。即將此物拋與。吾取而食之。即與汝無異也。其人遂披皮執斧而歸。船中諸人驚訝。而備述其由。遂於船中。依虎所教待之。遲明。道士已在岸上。遂拋皮與之。道士取皮衣振迅。俄變成虎。哮吼跳躑。又拋衣與虎。乃嚙食而去。自後更不聞有虎傷人。衆言食人數足。自當歸天去矣。出《解頤錄》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 25 | 『太平廣記』巻432引『原化記』「南陽士人」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3504-3506 | 唐代 | ●近世有一人寓居南陽山。忽患熱疾。旬日不瘳。時夏夜月明。暫於庭前偃息。忽聞扣門聲。審聽之。忽如睡夢。家人即無聞者。但於恍惚中。不覺自起看之。隔門有一人云。君合成虎。今有文牒。此人驚異。不覺引手受之。見送牒者手是虎爪。留牒而去。開牒視之。排印于空紙耳。心甚惡之。置牒席下。復寢。明旦少憶。與家人言之。取牒猶在。益以為怪。疾似愈。忽憶出門散適。遂策杖閒步。諸子無從者。行一里餘。山下有澗。沿澗徐步。忽于水中。自見其頭已變為虎。又觀手足皆虎矣。而甚分明。自度歸家。必為妻兒所驚。但懷憤耻。緣路入山。經一日餘。家人莫知所往。四散尋覓。比隣皆謂虎狼所食矣。一家號哭而已。此人為虎。入山兩日。覺飢餒。忽於水邊蹲踞。見水中科斗蟲數升。自念常聞虎亦食泥。遂掬食之。殊覺有味。又復徐行。乃見一兔。遂擒之。應時而獲。即噉之。覺身輕轉強。晝即於深榛草中伏。夜即出行求食。亦數得麞兔等。遂轉為害物之心。忽尋樹上。見一採桑婦人。草間望之。又私度。吾聞虎皆食人。試攫之。果獲焉。食之。果覺甘美。常近小路。伺接行人。日暮。有一荷柴人過。即欲捕之。忽聞後有人云。莫取莫取。驚顧。見一老人鬚眉皓白。知是神人。此人雖變。然心猶思家。遂哀告。老人曰。汝曹為天神所使作此身。今欲向畢。却得復人身。若殺負薪者。永不變矣。汝明日合食一王評事。後當却為人。言訖。不見此老人。此虎遂又尋草潛行。至明日日晚。近官路伺候。忽聞鈴聲。於草間匿。又聞空中人曰。此誰角駄。空中答曰。王評事角駄。又問王評事何在。答曰。在郭外。縣官相送。飯會方散。此虎聞之。更沿路伺之。一更已後。時有微月。聞人馬行聲。空中又曰。王評事來也。須臾。見一人朱衣乘馬半醉。可四十餘。亦有導從數人。相去猶遠。遂於馬上擒之。曳入深榛食之。其從迸散而走。食訖。心稍醒。却憶歸路。去家百里餘來。尋山却歸。又至澗邊却照。其身已化為人矣。遂歸其家。家人驚怪。失之已七八月日矣。言語顛倒。似沉醉人。漸稍進粥食。月餘平復。後五六（六下原有七字。據明鈔本刪。）年。遊陳許長葛縣。時縣令席上。坐客約三十餘人。主人因話人變化之事。遂云。牛哀之輩。多為妄說。此人遂陳己事。以明變化之不妄。主人驚異。乃是王評事之子也。自說先人為虎所殺。今既逢讐。遂殺之。官知其實。聽免罪焉。出《原化記》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 26 | 『太平廣記』巻429引『續玄怪錄』「張逢」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3490-3491 | 唐代 | ●南陽張逢。貞元末。薄遊嶺表。行次福州福唐縣橫山店。時初霽。日將暮。山色鮮媚。烟嵐靄然。策杖尋勝。不覺極遠。忽有一段細草。縱廣百餘步。碧藹可愛。其旁有一小樹。遂脫衣挂樹。以扙倚之。投身草上。左右翻轉。既而酣睡。若獸踧然。意足而起。其身已成虎也。文彩爛然。自視其爪牙之利。胸膊之力。天下無敵。遂騰躍而起。越山超壑。其疾如電。夜久頗饑。因傍村落徐行。犬彘駒犢之輩。悉無可取。意中恍惚。自謂當得福州鄭錄事。乃旁道潛伏。未幾。有人自南行。乃候吏迎鄭者。見人問曰。福州鄭錄事名璠。計程當宿前店。見說何時發。來人曰。吾之主人也。聞其飾裝。到亦非久。候吏曰。只一人來。且復有同行。吾當迎拜時。慮其誤也。曰。三人之中。緫綠者是。其時逢方伺之。而彼詳問。若為逢而問者。逢既知之。攢身以俟之。（伺之而彼詳問至以俟之二十三字原闕。據明鈔本、陳校本補。）俄而鄭到。導從甚衆。衣緫綠。甚肥。昂昂而來。適到。逢銜之。走而上山。時天未曙。人雖多。莫敢逐。得恣食之。唯餘腸髮。既而行於山林。孑然無侶。乃忽思曰。我本人也。何樂為虎。自囚於深山。盍求初化之地而復焉。乃步步尋求。日暮方到其所。衣服猶挂。杖亦在。細草依然。翻復轉身於其上。意足而起。即復人形矣。於是衣衣策杖而歸。昨往今來。一復時矣。初其僕夫驚失乎逢也。訪之於隣。或云策杖登山。多岐尋之。杳無形迹。及其來。驚喜問其故。逢紿之曰。偶尋山泉。到一山院。共談釋教。不覺移時。僕夫曰。今旦側近有虎。食福州鄭錄事。求餘不得。山林故多猛獸。不易獨行。郎之未回。憂負實極。且喜平安無他。逢遂行。元和六年。旅次淮陽。舍於公舘。舘吏宴客。坐有為令者曰。巡若到。各言己之奇事。事不奇者罰。巡到逢。逢言橫山之事。末坐有進士鄭遐者。乃鄭糺之子也。怒目而起。持刀將殺逢。言復父讐。衆共隔之。遐怒不已。遂入白郡將。於是送遐南行。敕津吏勿復渡。使逢西遘。且勸改名以避之。或曰。聞父之讐。不可以不報。然此讐非故殺。若必死殺逢。遐亦當坐。遂遁去而不復其讐焉。吁。亦可謂異矣。出《續玄怪錄》 |
| 27 | 『酉陽雜俎』續集巻2「支諾皐中」 | 段成式撰・方南生點校『酉陽雜俎』、中華書局、1981年、p.214 | 唐代 | ●虢州王成縣黑魚谷，貞元中，百姓王用業炭於谷中。谷中有水方數步。嘗見二黑魚，長尺餘遊水上。用伐木饑困，遂食一魚。其弟驚曰：「此魚或是谷中靈物，兄奈何殺此。」有頃，其妻餉之。用運斤不已，久乃轉面。妻覺狀貌有異，呼其弟視之。忽褫衣號躍。變為虎焉，徑入山。時時殺麞鹿類以食。如此三年。一日日昏，叩門自名曰：「我用也。」弟應曰：「我兄變為虎三年矣，何鬼假其姓名。又曰：「我往年殺黑魚，冥謫為虎。又因殺人，冥官笞余一百。今放免，傷遍體，汝第視予無疑也。」弟喜，遂開門。見一人頭猶是虎，因怖死。舉家叫呼奔避。竟為村人格殺之。驗其身有黑子，信王用也，但首未變。元和中，處士趙齊約嘗至谷中，見村人說。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 28 | 『太平廣記』巻430引『傳奇』「王居貞」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3495 | 唐代 | ●明經王居貞者下第。歸洛之潁陽。出京。與一道士同行。道士盡日不食。云。我咽氣術也。每至居貞睡後。燈滅。（滅原作灯。據明鈔本、許本、黃本改。）即開一布囊。取一皮披之而去。五更復來。他日。居貞佯寢。急奪其囊。道士叩頭乞。居貞曰。言之即還汝。遂言吾非人。衣者虎皮也。夜即求食於村鄙中。衣其皮。即夜可馳五百里。居貞以離家多時。甚思歸。曰。吾可披乎。曰。可也。居貞去家猶百餘里。遂披之暫歸。夜深。不可入其門。乃見一豬立於門外。擒而食之。逡巡回。乃還道士皮。及至家。云。居貞之次子夜出。為虎所食。問其日。乃居貞回日。自後一兩日甚飽。並不食他物。出《傳奇》 |
| 29 | 『吳地記』引『吳越春秋』 | 陸廣微撰『吳地記』、江蘇地方文獻叢書、江蘇古籍出版社、1999年、p.62 | 唐代 | ●『吳越春秋』云：「闔閭葬虎丘，以十萬人治葬，經三日，金精化為白虎，蹲其上，因號虎邱。（以下略） |
| 30 | 『太平廣記』巻430引『瀟湘記』「楊真」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3494-3495 | 唐代 | ●鄴中居人楊真者家富。平生癖好畫虎。家由甚多畫（畫字原闕。據明鈔本補。）虎。每坐臥。必欲見之。後至老年。盡令家人毀去所畫之虎。至年九十忽臥疾。召兒孫謂之曰。我平生不合癖好畫虎。我好之時。見畫虎則喜。不見則不樂。我每夢中多與群虎游。我不欲言於兒孫輩。至晚年尤甚。至於縱步遊賞之處。往往見虎。及問同遊人。又不見。我方恐懼。尋乃盡毀去所畫之虎。今臥疾後。又夢化身為虎兒。又夢覺既久。而方復人身。我死之後。恐必化為虎。兒孫輩遇虎。慎勿殺之。其夕卒。家方謀葬。其尸忽化為虎。跳躍而出。其一子逐出觀之。其虎回趕其子。食之而去。數日。忽家人夜夢真歸謂家人曰。我已為虎。甚是安健。但離家時。便得一人食之。至今猶不饑。至曙。家之人疑不識其子而食之。述於隣里。有識者曰。今為人。即識人之父子。既化虎。又何記為人之父也。夫人與獸。豈不殊耶。若為虎尚記前生之事。人奚必記前生之事也。人尚不記前生。足知獸不靈於人也。出《瀟湘記》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 31 | 『太平廣記』巻427引『宣室志』「李徵」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3476-3479 | 唐代 | ●隴西李徵。皇族子。家於虢略。徵少博學。善屬文。弱冠從州府貢焉。時號名士。天寶十載春於尚書右丞楊沒榜下登進士第。後數年。調補江南尉。徵性疎逸。恃才倨傲。不能屈跡卑僚。嘗鬱鬱不樂。每同舍會。既酣。顧謂其群官曰。生乃與君等為伍耶。其寮佐咸嫉之。及謝秩。則退歸閉門。不與人通者近歲餘。後迫衣食。乃具粧東遊吳楚之間。以干郡國長吏。吳楚人聞其聲固久矣。及至。皆開館以俟之。宴遊極歡。將去。悉厚遺以實其囊橐。徵在吳楚且周歲。所獲饋遺甚多。西歸虢略。未至。舍於汝墳逆旅中。忽被疾發狂。鞭捶僕者。僕者不勝其苦。如是旬餘。疾益甚。無何。夜狂走。莫知其適。家僮跡其去而伺之。盡一月而徵竟不回。於是僕者驅其乘馬。挈其囊橐而遠遁去。至明年。陳郡袁傪以監察御史奉詔使嶺南。乘傳至商於界。晨將發。其驛吏白曰。道有虎暴而食人。故過於此者。非晝而莫敢進。今尚早。願且駐車。決不可前。傪怒曰。我天子使。衆騎極多。山澤之獸能為害耶。遂命駕去。行未盡一里。果有一虎自草中突出。傪驚甚。俄而虎匿身草中。人聲而言曰。異乎哉。幾傷我故人也。傪聆其音似李徵。傪昔與徵同登進士第。分極深。別有年矣。忽聞其語。既驚且異。而莫測焉。遂問曰。子為誰。得非故人隴西子乎。虎呻唫數聲。若嗟泣之狀。已而謂傪曰。我李徵也。君幸少留。與我一語。傪即降騎。因問曰。李君李君。何為而至是也。虎曰。我自與足下別。音問（問字原闕。據明鈔本補。）曠阻且久矣。幸喜得無恙乎。（中略）虎曰。我前身客吳楚。去歲方還。道次汝墳。忽嬰疾發狂走山谷中。俄以左右手據地而步。自是覺心愈狠。力愈倍。及視其肱髀。則有釐毛生焉。又見冕衣而行於道者、負而奔者。翼而翾者。毳而馳者。則欲得而啗之。既至漢陰南。以饑腸所迫。值一人腯然其肌。因擒以咀之立盡。由此率以為常。非不念妻孥。思朋友。直以行負神祇。一日化為異獸。有靦於人。故分不見矣。（中略）吾妻孥尚在虢略。豈念我化為異類乎。君若自南回。為賚書訪妻子。但云我已死。無言今日事。幸記之。又曰。吾於人世且無資業。有子尚稚。固難自謀。君位列周行。素秉夙義。昔日之分。豈他人能右哉。必望念其孤弱。時賑其乏。無使殍死於道途。亦恩之大者。言已又悲泣。傪亦泣曰。傪與足下休戚同焉。然則足下子亦傪子也。當力副厚命。又何虞其不至哉。虎曰。我有舊文數十篇未行於代。雖有遺稿。盡皆散落。君為我傳錄。誠不敢列人之閾。然亦貴傳於子孫也。傪即呼僕命筆。隨其口書。近二十章。文甚高。理甚遠。傪閱而歎者再三。虎曰。此吾平生之素也。安敢望其傳乎。又曰。君銜命乘傳。當甚奔迫。今久留驛隸。兢悚萬端。與君永訣。異途之恨。何可言哉。傪亦與之叙別。久而方去。傪自南回。遂專命持書及賵賻之禮。寄於徵子。月餘。徵子自虢略來京詣傪門。求先人之柩。傪不得已。具疏其事。後傪以己俸均給徵妻子。免饑凍焉。傪後官至兵部侍郎。出《宣室志》 |
| 32 | 『太平廣記』巻430引『聞奇錄』「張昇」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3494 | 唐代 | ●唐故吏部員外張昇隨僖宗幸蜀。以年少未舉。遂就攝涪州衙推。州司差里正游章當直。他日。遂告辭。問何往。章不答。但云。有老母及妻男。乞時為存問。言訖而去。所居近隣。夜聞章家大哭。翌日。使問其由。言章夜辭其家。入山變為虎矣。二三日。又聞章家大驚叫。翼日。又問其故。曰。章昨夜思家而歸。自上半身已變。而尚能語。出《聞奇錄》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 33 | 『太平廣記』巻431引『錄異記』「蘭庭雍」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3498-3499 | 五代 | ●吉陽治在涪州南。泝黔江三十里有寺。像設靈應。古碑猶在。物業甚多。人莫敢犯。涪州裨將蘭庭雍妹因過寺中。盜取常住物。遂即迷路。數日之內。身變為虎。其前足之上。銀纏金釧。宛然猶存。每見鄉人。隔樹與語云。我盜寺中之物。變身如此。求見其母。託人為言之。母畏之。不敢往。虎來郭外。經年而去。出《錄異記》 |
| 34 | 『太平廣記』巻430引『野人閑話』「譙本」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、P.3496-3497 | 宋代 | ●偽蜀建武四五年間。有百姓譙本者。兇率人也。不孝不義。隣里衆皆惡之。少無父。常毀罵母。母每含忍。一旦。歸自晚。其母倚門而迎。本遙見。便罵。母曰。我只有汝一人。憂汝歸夜。汝反罵我也。遂撫膺大哭。且歎且怨。本在城巷住。此時便出門。近城沿路上坐。忽大叫一聲。脫其衣。變為一赤虎。直上城去。至來日。猶在城上。蜀主命趙庭隱射之。一發正中其口。衆分而食之。蜀主初覇一方。天雨毛。人變虎。地震者耳。（明鈔本。陣校本耳作再。）出《野人閑話》 |
| 35 | 『茅亭客話』「葭萌二客」 | 東京大学東洋文化研究所所蔵漢籍善本全文影像資料庫、『茅亭客話』一巻（舊小説所収）、舊小説丁集宋、p.92-93、参照<br>URL:http://shanben.ioc.u-tokyo.ac.jp/main_p?nu=B2813100&order=rn_no&no=00416&im=0100050&size=small&pg=4 | 宋代 | ●偽蜀末利州路有二客負販雜貨往葭萌市鬻之山程巉嶮竹樹荒涼時雨初霽日將暮去市十五裏餘藂林高樹上有人雲虎過溪來行人迴避二客惶忙选得一樹高枝葉蔽人形處登之逡巡有二虎迭來攫躍或作人聲曰人在樹上一虎曰我須上樹取之虎欲相及二客悸慄以拄杖搘之虎叫曰刺著我眼遂下樹號呼而逸至曙行人稍集遂下樹赴葭萌市征之所有一婦報雲任攔頭夜來醉歸刺損雙眼不來檢稅二客相顧私語衆怪而問之因說夜來以拄杖搘損虎眼是斯人偽為虎而劫路耶衆言比處近有二虎且暴四遠村莊犬彘駒犢殆將食盡市人遂相率持杖往攔頭家驗之纔及中路遇一虎虎畏人多惶怖奔逃越山哮吼而去衆至任攔頭家窺其籬隙之內但見攔頭倮形而坐兩目流血呻吟不已衆乃叱之以杖擊笆籬其攔頭驚忙踉蹌曳一尾突門而出目無所見撞落深坑吼怒攫為衆人棒及大石斃之遂舁入市向先見之虎即攔頭妻也休複見史傳人化為猿為魚為鱉為龜為蛇為虎之類多不可以智詰之矣 |
| 36 | 『茅亭客話』「好畫虎」 | 東京大学東洋文化研究所所蔵漢籍善本全文影像資料庫、『茅亭客話』一巻（舊小説所収）、舊小説丁集宋、p.92、参照<br>URL:http://shanben.ioc.u-tokyo.ac.jp/main_p?nu=B2813100&order=rn_no&no=00416&im=0100050&size=small&pg=4 | 宋代 | ●靈池縣洛帶村民郝二者不記名嚐說某祖父以醫卜為業其四遠村邑請召會無少暇晝一孫真人從以赤虎懸於縣市卜肆中已數歲因及耄年每日顓坐瞪目觀畫虎終日無倦自茲見畫虎則不樂孫兒輩將豆麥入城貨賣收市鹽酪如不協其意則怒而詬罵以至杖撻之若見畫虎則都忘前事人有召其醫療至彼家見有畫虎即為之精誌親戚往還亦隻以畫虎圖幛為餉遺之物如是不數年間村舍廳廚寢室懸掛畫虎皆遍鄉黨皆以畫虎所惑有老兄見其耽好怪而責之曰汝好此物何謂乎答雲常患心緒煩亂見之則稍間焉因是說府城有藥肆養一活虎曾見之乎曰未也因拜告其兄求偕至郡既見後頓忘寢食旬餘方誘得歸自茲一月入城看虎再三矣經年唯好食肉以熟肉不快其意則啖生肉凡一食或豬頭或豬膊食之如梨棗焉如是兒孫輩皆恐怯每入城看活虎孫兒相尋見則以杖擊至孟蜀先主建偽號之明年或一日夜分開莊門出去杳無蹤跡有行人說夜來一虎跳入羊馬城內城門為之不開半日得軍人上城射殺分而食之其祖父不歸絕無耗音則化為虎者是也遂訪諸得虎肉食者獲虎骨數塊將歸葬之 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 37 | 『七修類稿』巻50引『漁樵閑話』「人化虎」 | 郎瑛著『七修類稿』、歴代筆記叢刊、上海書店出版社、2001年、p.534 | 宋代 | ●漁樵閑話載劍州李忠因病而化为虎也，其子驚懼，虎將食事。予意世之變化者多矣，有情無情皆物也，人之一變遂失本性，哀哉！ |
| 38 | 『夷堅丁志』巻13「李氏虎首」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第二冊、中華書局、1981年、pp.649-650 | 宋代 | ●乾道五年八月。衡湘間寓居（葉本作客）趙生妻李氏。苦頭風。痛不可忍。呻呼十餘日。婢妾侍疾。忽聞咆哮聲甚厲。驚視之。首已化為虎。急報趙至。問其由。已不能言。兒女圍繞拊之。但含淚捫幼子。若憐惜狀。與飲食。略不經目。與生肉。則攫取而食。六七日後。稍搦在旁兒女。如欲啖食。自是人莫敢近。趙舁置空室。扃其戶。日飼以生肉數斤。邀其友樊三官來。告之故欲除之。樊曰：「不可。李為人無狀。眾所共知。上天以此示警。若輒去之。殃咎必至。盍與之焚章告天。使得業盡而死。亦善事也。」趙如其言。命道士作靈寶度人醮數筵，李方絕命。生時凶戾很妒。不孝翁姑。暴其親鄰，趙生不敢校。及是無人（葉本無人字）憐之者。右十事皆梅師忠說。 |
| 39 | 『夷堅支乙』巻5「趙不易妻」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第二冊、中華書局、1981年、pp.833 | 宋代 | ●趙不易為江陰軍簽判，其妻得奇疾，烟火食不向口，唯啖生肉，服飾（明鈔本呂本均作食）起居與平日無異，而與夫別室寢處。趙秩滿，調知桂陽監。妻疾愈甚，一婢供其使令，便覺瘦瘁短氣，面如蠟色，不半年輒死。又換一人往，亦然。凡死於彼者三。（葉本多一人字）每老兵持肉來，或從戟門入，必怒曰：「何得經鼓角樓下過！」棄而不納。若自後圃入，則受之。其後趙君待知封州闕，寓居衡州常寧。洎到官，妻白晝化為虎，騰吼而出。錢允直與趙為江陰交代，聞其事甚詳，及守桂陽，吏輩尚能言。判官侯孝友者，亦居於常寧，云趙妻乃中官家女，不知本何人，容貌姝美，未嘗妊娠，性好潔，夫每至其室，坐於椅上，才去即命洗滌。三婢之亡，皆遭其乘夜吮血，故浸淫絶命。 |
| 40 | 『夷堅志補』巻6「葉司法妻」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第四冊、中華書局、1981年、pp.1608 | 宋代 | ●台州司法葉薦妻，天性殘妒，婢妾稍似人者，必痛撻之，或至於死，葉莫能制。嘗以誠告之曰：「吾年且六十，豈復求聲色之奉，但老而無子，只欲買一妾為嗣續計，可乎？」妻曰：「更以數年為期，恐吾自有子。」至期，不得已勉徇其請。然常生嫉恨，與之約曰：「為我別築室，我將修道。」葉喜，即於山後創一室，使處焉。家人輩曉夕問訊，間致酒食，葉以為無復故態，使新妾往省之。抵暮不返，乃策杖自詣其處，見門戶扃鑰甚固，若無人居。命僕發關，則妻已化（明鈔本作則妻已死。）為虎，食妾（明鈔本無妾字。）心腹皆盡，僅餘頭足。急走山下，率眾秉炬視之，無所睹。時紹興十（明鈔本無十字）九年。 |
| 41 | 『古今圖書集成』博物彙禽蟲典虎部外編引『説聽』 | 『古今圖書集成』『古今圖書集成』正文圖像コマ番号：63658（第63658頁） 参照URL:http://gjtsjc.gxu.edu.cn/image.aspx | 明代 | ●寧波陳十三老人者，嚐病瘧，經年不瘥，有人教以置虎皮鎮之，乃坐臥一虎皮，十載而病如故。後忽蒙虎皮夜出，化虎食物，每銜畜豕至家，家人利其所有，不問也。一日自外負一人股至，其姥懼曰：老賊作怪矣。操桔伏門外俟焉，見其蒙虎皮欲化，即出擊之，時一手尚未變，遂躍去，竟不複還。自後山行者，往往見一虎，前一足尚是人手，有知者，則呼曰：陳十三老人，吾汝鄰也，莫作惡。虎聞之，弭耳垂尾而去。其不識者，乃食之，如是者數年。一夕暴雷，山中震死一虎，眾視之即人手之虎也。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 42 | 『七修類稿』巻50「人化虎」 | 郎瑛著『七修類稿』、歷代筆記叢刊、上海書店出版社、2001年、p.534 | 明代 | ●昨聞表兄諸二云，成化間，餘姚通德里有王三者，每與孫臥至半夜去，將曉方回，冬月則半體冷濕，孫甚不堪，因語其父。父疑其從盜也，俟其去時，蹤跡之，忽一夜開窓將出，啟燈視之，已變為虎而足尚未全，把其足則逸而去矣，遂不復回。後人於山中每遇傷足之虎，遂哀求曰：「三老官」竟咆哮去。此與《夷堅志》黎道人殺變狗婦人相類。不知一晝夜時倏忽為人獸者，此何理也？ |
| 43 | 『閱微草堂筆記』巻12「崔媼家在西山中」 | 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.282 | 清代 | ●崔媼家在西山中，言其鄰子在深谷樵采，忽見虎至，上高樹避之。虎至，昂面作人語曰：「爾在此耶，不識我矣！我今墮落作此形，亦不願爾識也。」俯首嗚咽良久。既而以爪掊地，曰：「悔不及類。」長號數聲，奮然掉首去。 |

### 5.1.3 中国における虎の変身譚（変身方向が不明のパターン）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『太平廣記』巻426引『五行記』「蕭泰」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3470 | 隋代 | ●梁衡山侯蕭泰為雍州刺史。鎮襄陽。時虎甚暴。村門設檻。機發。村人炬火燭之。見一老道士自陳云。從村丐乞還。誤落檻裏。共開之。出檻即成虎。奔馳而去。出《五行記》 |
| 2 | 『太平廣記』巻432引『廣異記』「松陽人」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3504 | 唐代 | ●松陽人入山採薪。會暮。為二虎所逐。遽得上樹。樹不甚高。二虎迭躍之。終不能及。忽相語云。若得朱都事應必捷。留一虎守之。一虎乃去。俄而又一虎細長善攫。時夜月正明。備見所以。小虎頻攫其人衣。其人樵刀猶在腰下。伺其復攫。因以刀砍之。斷其前爪。大吼。相隨皆去。至明。人始得還。會村人相問。因說其事。村人云。今縣東有朱都事。往候之。得無是乎。數人同往問訊。答曰。昨夜暫出傷手。今見頓臥。乃驗其真虎矣。遂以白縣令。命羣吏持刀。圍其所而燒之。朱都事忽起。奮迅成虎。突人而出。不知所之。出《廣異記》 |
| 3 | 『太平廣記』巻433引『原化記』「柳幷」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3511-3512 | 唐代 | ●河東柳幷為監察御史。入嶺推覆。將一書吏隨行。常所委任。至嶺下。宿孤舘中。從吏皆在廳內。席地而寢。時半夜月初上。衆皆臥。幷獨覺。忽見一小鬼長尺餘。狀若獼猴。手持一紙幡子。步上階。以幡插書吏頭邊而去。幷乃潛起。拔去之。復臥伺焉。少頃一虎入來遍嗅諸人而去。須臾小鬼又來。別以幡子插之。復又拔去之。少頃虎又來。遍嗅而去。如此者三度。而天向明。乃至旦。召吏言其事。且曰。汝當難免。自須為計。不可隨我。幷有劍。取與之。乃令逃難。此吏素強勇。携劍入山。尋逐虎穴。行二十里至一茅菴。入其中。不見有人。惟見席上案硯朱筆。有一卷文書。皆是人名。或有勾者。有未勾者。己名在焉。屋上見一領虎皮。吏懷其書。幷取皮。杖劍而去。行未數里。見一胡僧從後來趁。呼之曰。且住。君不如告某為計。即可免矣。吏即止與之言。見其人狀異。不敢殺之。僧曰。吾非彊害君者。是天配合食之。豈不見適來文簿。昨日已愆數期。今彊脫終恐無益。不如以小術厭之。吏問其術。僧令登一樹以帶自縛。用劍自刺少血塗一單衣投之我。以衣為禳之耳。吏如言登樹。投皮與僧衣之。便作虎狀。哮吼怒目光如電掣。吏懼。將欲墮者數過。即取單衣。刺血塗之。投於地。虎得衣跳躍。擘攉而吞之。良久。復為人形。曰。子免矣。乃遣去。竟無患焉。出《原化記》 |

## 5.2 日本における虎の変身譚

| # | 出典 | 出典の詳細情報 | 時代 | 原文 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『新語園』巻6-25「佐史為虎　五行志」 | 浅井了意　吉田幸一編『新語園』＜下＞（寛文十二年板複製）、古典文庫420冊、帝都印刷製本株式会社、1981年、pp. 35-36 | 江戸時代 | ●唐ノ長安ニ柳州ノ佐史久ク病テ一旦変メ虎ナル形ハ未タ全ク改メスト雖トモ尾既ニ生メ實ニ虎ナリ其ノ嫂ヲオ噉ントス村人聚リテ擒得テ庭中ノ樹ニ繫テ十餘日ヲ經タリ還テ復タ人ト為リテ平常ノ如シ長史崔玄簡乃シ召テ其故ヲ問ニ佐史荅テ曰初メ一ツノ虎有テ拽我行ク一リノ婦人偉ク装束シタルヲ見ル諸虎恒ニ此ノ婦人ノ前ニ參リ集マリ各ノ當日ノ食物ヲ取來ル我新ニ虎ノ列ニ預リ形未タ全ク虎ト成得ス遠ク索リコト能ハス嫂ヲ取テ當番ノ役ニ備フ而メ遂捕ラレ數日ノ間タ樹ニ繫レタリ今マ虎ト成得スト雖トモ尚其ノ聲ハ能スト崔玄簡試ニ聲ヲ出サシ佐史即ト虎ノ聲ヲ作ニ左右ノ人震駭テ倒レ簷ノ瓦響ノ應メ振ヒ落タリ後更ニ事故無ト |
| 2 | 『新語園』巻6-26「安陸師道宣　斉諧記」 | 浅井了意　吉田幸一編『新語園』＜下＞（寛文十二年板複製）、古典文庫420冊、帝都印刷製本株式会社、1981年、pp. 36-37 | 江戸時代 | ●晋ノ太元‥年江夏郡安陸縣師道宣ト云フ者アリ　（中略）一日忽チニ狂氣メ変メ虎ト成リ山ニ入リ谷ヲ渉リ野ニ走リ里ニ出テ人ヲ食コト限リ無シ諸人懼テ窓ヲ塞ギ戸ヲ閉ヅ後ニ一リノ女子アリ樹下ニ立テ桑ヲ取ル虎出テ取テ食ヒ乃シ其ノ叡ヲ山石ノ間ニ藏ス後ニ人ニ作復テ是ヲ覺テ取テ己レカ物トス年經テ家ニ還リ遂ニ仕テ官ニ殿中令史ト為ル或夜與諸史共ニ話メ天地変恠ノ事ニ及フ師道宣自云我曾テ病ヲ得テ狂乱シ遂ニ化虎為テ人ヲ啗フト一‥啗ル人ノ姓名ヲ言フ同坐ノ人ノ中ニ或ハ其ノ父子兄弟妻妾ヲ取リ食レタル者多シ是ニ於テ遺恨忿怒ヲ懐者アリ道宣乃シ天ニ仰テ號哭ス即チ捉テ官ニ送ル遂ニ健康ノ牢獄ニ餓死ス |
| 3 | 『新語園』巻8-6「袁雙惑虎婦　五行記」 | 浅井了意　吉田幸一編『新語園』＜下＞（寛文十二年板複製）、古典文庫420冊、帝都印刷製本株式会社、1981年、pp. 162-163 | 江戸時代 | ●晋ノ孝武帝ノ太元五年ノ頃譙郡ノ縣内ニ袁雙ト云フ者家貧メ佗ノ田地ニ客作メ日暮テ帰ル路ニメ年十五六ノ女ニ逢リ姿容艶ニ偉シ袁雙語ラヒ寄テ妻トス連テ家ニ帰リ五六年ニ及フニ家甚タ豊ニ昌エテ二人ノ子ヲ生ス兄已テニ十歳ニ至リ家富榮テ不足ナシ嘗テ里ノ中ニ新ニ死セル者アリ塋タ墓ニ埋ム其夜袁雙カ妻逃テ墓所ニ徃キ乃シ衣ヲ脱ギ釧ヲ解テ木ノ枝ニ挂テ即チ変メ虎ト作塚ヲ崩メ棺ヲ曳出シ死人ノ尸ヲ取テ食フ已テニ食飽テ後ニ還テ人ノ形チニ作テ家ニ還ル時ニ人アリ是ヲ見テ竊ニ夫ニ語ル尓ノ婦ハ人ニハ非ス恐クハ害ニ逢ベシ始終ノ事ヲ告タリ袁雙更ニ寔トモ思ハレズメ日ヲ過ス里中ニ復タ死スル者アリ輒チ墓ヲ築テ埋ニ亦タ婦徃テ是ヲ食フ夫潜ニ跡ヲ認テ是ヲ見ル怖レキコト限リナシ遂ニ其實ヲ知リテ志薄ク成行ケルヲ婦即チ此事ノ露タリト覺エ其家ヲ出テ縣ヲ超テ佗所ニ至リ一向虎ニ作テ塚ヲ發テ死人ヲ食ト云フ |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 4 | 『新語園』巻8-7「呉道宗母作虎　斉諧記」 | 浅井了意　吉田幸一編『新語園』＜下＞（寛文十二年板複製）、古典文庫420冊、帝都印刷製本株式会社、1981年、pp. 164-165 | 江戸時代 | ●晋ノ安帝ノ義熙四年ニ東陽郡ノ太末縣ト云フ處ニ吳道宗ト云フ者ノ父ヲ喪テ母ト居ス未タ婦ヲモ迎ヘズ一日道宗ハ佗所ニ適テ母一人家ニ在リ隣ノ人潜ニ聞ニ道宗カ家ノ中躁ク磕靈ク故ニ窺ニ伺フニ家ノ内ニ母ハ見エズ大ナル烏斑虎一頭アリ隣ノ人此虎ノ道宗カ母ヲ食ンコトヲ恐レテ鼓ヲ鳴メ里人ヲ會テ家ヲ取囲シ共ニ救テ戸ヲ開クニ虎ハ無メ母一人アリ其ノ事ヲ問ニ臥睡テ知ラスト云テ平生ノ如クメ替所ロナシ會集ル人更ニ其ノ由ヲ知ラズ吳道宗佗所ヨリ還ルニ其母是ニ語リテ曰宿世ノ罪業ニ遣ラレ吾既ニ変化ノ事アルヘシ□ハ汝ニモ生ナガラ離シコト更ニ亦タ力ラ無ト云テ□ニ泣ケルヲ道宗其意ヲ得ズ後ニ一月バカリメ母忽チニ之方ナク失タリ此ノ日ヨリメ太末縣ノ境ニ虎ノ荒テ人ヲ取ル其ノ虎ハ烏斑ナリト云フ百姓恐レ患テ是ヲ格トス數十人是ニ傷レテ半死半生ノ者アリ後ニ人アリ箭ヲ以テ射ル膺ノ程ヲ刺レテ虎乃シ家ニ帰リ人ノ形チニ復スルコトヲ得ズ床ノ上ニメ死ス吳道宗號泣メ葬送ヲ營コト人間ノ法ノ如クニス |
| 5 | 『新語園』巻8-8「鄭襲門下作虎　太平廣記」 | 浅井了意　吉田幸一編『新語園』＜下＞（寛文十二年板複製）、古典文庫420冊、帝都印刷製本株式会社、1981年、pp. 165-166 | 江戸時代 | ●滎陽ノ鄭襲ト云フ人晋ノ太康年中ニ太守トメ官ニ至ル其ノ門下ニ騶忽ト云フ者アリ俄ニ狂乱ノ如クメ家ヲ走リ出テ之方ナク失タリ日ヲ經テ山下ニ吟テ赤裸ナルヲ尋求テ家ニ還ル膚此彼皮剝テ血ノ流ルヲ兎角救テ痛ヲ治ス而メ其故ヲ問ニ語テ曰吾レ土地社公ノ為ニ領セラレテ変メ虎ト作シム斑ナル虎皮ヲ著セラレ忽ニ虎ト作テ毎日其ノ所作ヲ習ハス吾レ跳躍スルニ堪ズ神乃シ怒テ皮ヲ剝テ追放ツ皮既ニ肉ニ著テ瘡トナリ肌毀レテ痛コト堪難シ此故ニ肌損ジ肉潰エ血ヲ漓クト云フ十日計ニメ瘡差テ本ノ人ニ成還タリ　　淮南子ニ牛哀ト云者病デ七日ニメ変メ虎ト成テ其兄ヲ食ト書タリ是亦タ浮說ニ非ス　　柳州ノ佐史カ病テ虎ト作リ其嫂ヲ食ハントス後ニ亦タ正念ノ人ニ作還タリト五行志ニ云フモ亦タ實說ナリ |
| 6 | 『新語園』巻8-12「譙本不孝為虎　野人閑話」 | 浅井了意　吉田幸一編『新語園』＜下＞（寛文十二年板複製）、古典文庫420冊、帝都印刷製本株式会社、1981年、pp. 171-173 | 江戸時代 | ●偽蜀ノ建武年中ニ百姓譙本ト云フ者有リ極テ兇暴非道ニメ不孝不義ナルコト云フ計ナシ村内鄰里ノ人皆是ヲ悪疏ム少メ父無ク常ニ母ヲ罵戒メ憂コトニ涙ヲ落シテ月日ヲ送ル一日譙本佗所ニ徃テ晩帰ル流石ニ母ノ慈悲深ソ是ヲ待託テ門ニ倚テ迎居ニ譙本良久クメ還ル遙ニ母ヲ見テ罵テ曰女ノ身ハテモ猶憚アリ殊ニ見苦シキ體ニソ門ニ立テ我ヲ待コソ恠ケレト云フ母ノ曰我只汝一人ノミ有テ子ナリ亦頼子レハ無レハ汝ノ帰ルコトノ□ ヲ待テルニ堪兼テ門ニ立テ迎ル者ヲ何ソ反テ吾ヲ罵ヤト云フ譙本怒テ母ヲ捕テ門ヨリ内ヘ衝入タリ母乃シ膺ヲ撫テ大ニ哭且ハ嘆キ且ハ怨ム譙本愈怒テ家ヲ走リ出テ城府ノ路ニ出テ地上ニ坐ソ大聲ヲ揚ゲ一タヒ叫テ其ノ衣ヲ脱ギ忽チニ変ソ赤キ虎ト作リ直チニ城ニ上リ去ニノ哮吼メ聲已テニ地ニ振フ城中ノ男女怖レ惑テ門ヲ固メ戸ヲ閉テ終夜衛ル夜明テ見ルニ尚城ノ上ニ蹲マリ四方ヲ臨見ル其兩目照耀キテ日ノ光リニ映ズ蜀王即チ趙庭隱ト云フ者ニ命メ射之庭隱ハ大力ノ精兵強弓ノ達者ナリ大弓ニ長箭ヲ括テ一タヒ發ニ正シク其口ノ中ニ射タリ仰サマニ倒テ死ス諸將眾兵其肉ヲ分テ食フ蜀王乃シ一方ニ霸タリ此ノ年天ヨリ毛ヲ雨レ人変ソ虎ト為 リ地震ノ災アリト云フ |

## 6.1 中国における犬の変身譚

| # | 出典 | 出典の詳細情報 | 時代 | 原文 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『太平御覽』卷905引『新論』 | 李昉等撰『太平御覽』<全四冊>、中華書局出版、第四冊、1960年2月第一版 1995年10月第5次印刷、p.4012 | 漢代 | ●桓譚新論曰呂仲子婢死有兒年四歲葬后數來撫循之亦能為兒沐頭甚令人惡之以告方士曰有狗效之 婢遂不復來 |
| 2 | 『太平御覽』卷905引『新論』 | 李昉等撰『太平御覽』<全四冊>、中華書局出版、1960年2月第一版 1995年10月第5次印刷、p.4012 | 漢代 | ●又曰楊仲文家嫗死已斂未葬忽起坐棺前牀上飲酒醉而狗形見殺之 |
| 3 | 『漢書』卷27中之上五行志第七中之上 | 班固撰・顔師古注『漢書』（全十一冊）、第五冊、中華書局、1962年6月第1版、1964年第2次印刷、p.1399 | 漢代 | ●成帝河平元年，長安男子石良、劉音相與同居（師古曰二人共止一室），有如人狀在其室中，擊之，為狗，走出。去後有數人被甲持兵弩至良家，良等格擊，或死或傷，皆狗也。自二月至六月乃止。 |
| 4 | 『抱樸子內篇』卷17「登涉」 | 王明著『抱樸子內篇校釋』、新編諸子集成、中華書局、1996年、p.300 | 晋代 | ●林慮山下有一亭，其中有鬼，每有宿者，或死或病，常夜有數十人，衣色或黃或白或黑，或男或女。後郅伯夷者遇之宿，明燈燭而坐誦經。夜半有十餘人來，與伯夷對坐，自共樗蒲博戲。伯夷密以鏡照之，乃是群犬也。伯夷乃執燭起，佯誤以燭燼爇其衣，乃作燋毛氣。伯夷懷小刀，因捉一人而刺之。初作人叫，死而成犬。餘犬悉走，於是遂絕。乃鏡之力也。 |
| 5 | 『搜神記』卷18(432)「田琰」 | 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985年、p.226 | 晋代 | ●北平田琰，居母喪，恒處廬向。一暮夜，忽入婦室，密怪之曰，君在毀滅之地，幸可不甘。琰不聽而合。後琰暫入，不與婦語。婦恠無言，并以前事責之。琰知鬼魅。臨暮，竟未眠，衰服掛廬。須臾，見一白狗，攖廬銜衰服，因變為人，著而入。琰隨後逐之，見犬將升婦牀，便打殺之。婦羞愧而死。 |
| 6 | 『搜神記』卷18(433)「狗」 | 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985年、p.226-227 | 晋代 | ●司空南陽來季德，停喪在殯。忽然見形坐祭牀上，顔色服飾聲氣，熟是也，孫兒婦女，以次教戒。事有條貫，鞭朴奴婢，皆得其過。飲食既絕，辭訣而去。家人大小，哀割斷絕。如是數年。家益厭苦。其後飲酒過多，醉而形露，但得老狗。便共打殺。因推問之，則里中沽酒家狗也。 |
| 7 | 『搜神記』卷18(434)「白衣吏」 | 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985年、p.227 | 晋代 | ●山陽王瑚字孟璉，為東海蘭陵尉。夜半時，輒有黑幘白單衣吏詣縣叩閣。迎之，忽然不見。如是數年。後伺之，見一老狗白軀，猶故至閣，便為人。以白孟璉，殺之，乃絕。 |
| 8 | 『搜神後記』卷7(86)「狗變形」 | 陶潛撰・汪紹楹校注『搜神後記』、古小說叢刊、中華書局、1981年、p.52 | 南北朝 | ●宋王仲文為河南郡主簿，居緱氏縣北。得休，因晚行澤中。見車後有白狗，仲文甚愛之。欲取之，忽變形如人，狀似方相，目赤如火，磋牙吐舌，甚可憎惡。仲文大怖，與奴共擊之，不勝而走。告家人，合十餘人，持刀捉火，自來視之，不知所在。月餘，仲文忽復見之。與奴並走，未到家，伏地俱死。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 9 | 『搜神後記』巻9（104）「老黄狗」 | 陶潛撰・汪紹楹校注『搜神後記』、古小說叢刊、中華書局、1981年、p.61 | 南北朝 | ●太叔王氏，後娶庾氏女，年少色美。王年六十，常宿外，婦深無欣。後忽一夕見王還，燕婉兼常。晝坐，因共食。奴從外來，見之大驚，以白王。王遽入，偽者亦出。二人交會中庭，俱著白帢，衣服形貌如一。真者便先舉杖打偽者，偽者亦報打之。二人各敕子弟，令與手。王兒乃突前痛打，是一黄狗，遂打殺之。王時為會稽府佐，門士云，恒見一老黄狗，自東而來。其婦大恥，病死。 |
| 10 | 『太平廣記』巻438引『幽明錄』「溫敬林」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、p.3564 | 南北朝 | ●晉秘書監太原溫敬林亡一年。婦柏氏。忽見林還。共寢處。不肯見子弟。兄子來見林。林小開窗。出面見之。後酒醉形露。是隣家老黄狗。乃打死之。出《幽明錄》 |
| 11 | 『異苑』巻8 | 劉敬叔撰　陽松玠撰・範寧點校『異苑　談藪』、古小說叢刊、中華書局、1996年、p.75 | 南北朝 | ●太元中，吳興沈覇夢女子來就寢。同伴密察，唯見牝狗。每待覇眠。輒來依床。疑為魅，因殺而食之。覇復夢青衣人責之曰。我本以女與君共事，若不合懷，自可見語，何忽乃加恥殺（一作歟）。可以骨見還。明日。收骨葬岡上。從是乃平復。 |
| 12 | 『太平廣記』巻309引『博異記』「張遵言」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第六冊、pp.2448-2450 | 唐代 | ●南陽張遵言。求名下第。塗次商山山館。中夜晦黑。因起廳堂督芻秣。見東牆下一物。凝白耀人。使僕者視之。乃一白犬。大如猫。鬚睫爪牙皆如玉。毛彩清潤。悅懌可愛。遵言憐愛之。目為捷飛。言駿奔之捷甚於飛也。常與之俱。初令僕人張志誠袖之。每飲飼。則未嘗不持目前。時或飲食不快。則必伺其嗜而噉之。苟或不足。寧遵言輟味。不令捷飛之不足也。一年餘。志誠袖行。意以懈怠。由是遵言每行。自袖之。飲食轉加精愛。夜則同寢。晝則同處。首尾四年。後遵言因行於梁山路。日將夕。天且陰。未至所詣。而風雨驟來。遵言與僕等隱大樹下。於時昏晦。默無所覩。忽失捷飛所在。遵言驚歎。命志誠等分頭搜討。未獲次。忽見一人。衣白衣。長八尺餘。形狀可愛。遵言豁然如月中立。各得辨色。問白衣人何許來。何姓氏。白衣人曰。我姓蘇。第四。謂遵言曰。我已知子姓字矣。君知捷飛去處否。則我是也。君今災厄合死。我緣受君恩深。四年已來。能活我至於盡力輟味。曾無毫釐悔恨。我今誓脫子厄。然須損十餘人命耳。言訖。遂乘遵言馬而行。（中略）四郎曰。君已過厄矣。與君便別。遵言曰。某受生成之恩已極矣。都不知四郎之由。以歸感戴之所。又某之一生。更有何所賴耶。四郎曰。吾不能言。汝但於商州龍興寺東廊縫衲老僧處問之。可知也。言畢。騰空而去。天已向曙。遵言遂整轡適商州。果有龍興寺。見縫衲老僧。遂禮拜。初甚拒遵言。遵言求之不已。老僧夜深乃言曰。君子苦求。吾焉可不應。蘇四郎者。乃是太白星精也；大王者。仙府之謫官也。今居於此。遵言以他事問老僧。老僧竟不對。曰。吾今已離此矣。即命遵言歸。明辰尋之。已不知其處所矣。出《博異記》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 13 | 『太平廣記』巻449引『紀聞』「鄭宏之」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、pp.3669-3670 | 唐代 | ●唐定州刺史鄭宏之解褐為尉。（中略）宏之以為黃撅之名。乃狗號也。此中誰有狗名黃撅者乎。既曙。乃召胥吏問之。吏曰：「縣倉有狗老矣。不知所至。以其無尾。故號為黃撅。豈此犬為妖乎。宏之命取之。既至。鏁繫將就烹。犬人言曰。吾寔黃撅神也。君勿害我。我常隨君。君有善惡。皆預告君。豈不美歟。宏之屏人與語。乃釋之。犬化為人。與宏之言。夜久方去。宏之掌寇盜。忽有刼賊數十人入界。止逆旅。黃撅神來告宏之曰。某處有刼。將行盜。擒之可遷官。」宏之掩之果得。遂遷秩焉。後宏之累任將遷。神必預告。至如殃咎。常令迴避。罔有不中。宏之大獲其報。宏之自寧州刺史改定州。神與宏之訣去。以是人謂宏之祿盡矣。宏之至州兩歲。風疾去官。出《紀聞》 |
| 14 | 『太平廣記』巻438引『大唐奇事』「李義」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第九冊、pp.3566-3567 | 唐代 | ●唐李義者。淮陰人也。少亡其父。養母甚孝。…及母卒。義號泣。至於殯絕者數四。經月餘。乃葬之。及回至家。見其母如生存家內。起把義手。泣而言曰。我如今復生。爾葬我之後。潛自來。爾不見我。義喜躍不勝。遂侍養如故。仍謂義曰。慎勿發所葬之柩。若發之。我即復死。義從之。後三年。義夜夢其母。號泣踵門而言曰…豈可我死之後。三年殊不祭饗。我累來。及門。即以一老犬守門。不令我入。…言訖。號泣而去。…數日。復夢其母。及門號叫。撫膺而言曰。李義。爾是我子否。何得如此不孝之極。自葬我後。略不及我塚墓。但侍養一犬。…義…潛詣所葬之塚。祝奠曰…及葸母之日。母又還家再生。今侍養不缺。且兩端不測之事。剸裁無計。遲廻終日。何路明之。近累夢母悲言相責。即夢中之母是耶。在家之母是耶。從夢中母言。又恐傷在家之母；從在家之母言。又慮夢中之事實。哀哉。此為子之難。非不孝也。上天察之。言訖大哭。再奠而回。其在家母已知之矣。迎義而謂之曰。我與爾為母。死而復生。再與爾且同生路。奈何忽然迷忘。却於空塚前破其妖夢。是知我復死也。乃仆地而絕。義終不測之。哀號數日。復謀葸之。既開其塚。是其亡母在是棺中。驚走而歸。其新亡之母。乃化一極老黑犬。躍出。不知所之。出《大唐奇事》 |
| 15 | 『宣室志』巻3(81)「犬怪」 | 李冗撰 張讀撰・張永欽 侯志明點校『獨異誌　宣室志』、古小說叢刊、中華書局、1983年、pp.30-31 | 唐代 | ●唐貞元中，有大理評事韓生者（中略）忽見韓生所畜黑犬至廄中，且嗥且躍，俄化為一丈夫，衣冠盡黑，既挾鞍致馬上，駕而去。行至門，門垣甚高，其黑衣人以鞭擊馬，躍而過。黑衣者乘馬而去。半夜還，下馬解鞍，其黑衣人又嗥躍，還化為犬。圉人驚異，不敢洩於人。後一夕，黑犬又駕馬而去，逮曉方歸。圉人因尋馬蹤，以天雨新霽，應應可辨，直至南十餘里一古墓前，馬跡方絕。圉人乃結茅齋於墓側。來夕，先止於齋中以伺之。夜將分，黑衣人果駕馬而來。下馬，繫於野樹。其人入墓，與數輩笑言極歡。圉人在茅齋中俯而聽之，不敢動。近數食頃，黑衣人告去，數輩送出墓外。於野，有一褐衣者顧謂黑衣人曰，韓氏名藉今安在。黑衣人曰，吾已收在壕練石下。吾子無以為憂。（中略）及曉，圉者歸，遂以其事密告於韓生。生即命肉誘其犬。犬既至，因以繩繫。乃次所聞，遂窮搗練石下，果得一軸書，具載韓氏兄弟妻子家僮名氏，紀莫不具。（中略）韓生大異，命致犬於庭，鞭而殺之。（以下略） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 16 | 『夷堅甲志』巻11「陳大錄為犬」（目録無「為犬」二字。） | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第一冊、中華書局、1981年、p. 93 | 宋代 | ●秀州華亭縣吏陳生者,為錄事。冒賄稔惡。常帶一便袋,凡所謀事，皆書納其中。既死。夢于家人曰。我已在湖州顯山寺為犬矣。家人驚慘。奔詣寺省問。一犬聞客至。急避伏眾寮僧榻下。連呼不出。意若羞赧。其家不得已遂還。既去。僧語之曰，陳大錄宅中人去矣。方振尾而出。此犬腹下垂一物正方。宛如便袋狀。皮帶周匝繫其腹。猶隱隱可辨。洪慶善嘗與葛常之侍郎至寺見之。詢諸僧云然。 |
| 17 | 『夷堅丁志』巻2「鄒家犬」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第二冊、中華書局、1981年、p. 545 | 宋代 | ●筠州新昌縣民鄒氏。豢犬極馴。（中略）犬喜異常時。爪誤罥王衣。衣為之裂。鄒以為不祥。妻曰、我恰出獄。犬乃爾。遼山寺方作屋。吾欲犒匠。可殺犬烹之。副以麵五斗往。妻如其言。明日鄒詣寺。命童負一合自隨。至則僧待於門。迎白曰、勿啟合。得非以犬與麵來乎。鄒愕然。問所以。僧曰…昨夜夢檀越之父。曰、我以貪戀故。不能超脱。託生為本家犬。故見吾兒歸。必出迎。適以其釋囚係而還。喜甚。誤敗其衣。兒遂與婦謀而殺我充饋。雖然就死。亦幸舍畜身。若得免刲臠之苦。師恩厚矣。生時有銀若干。密埋於竈外。恐為人盜取。常睡臥其上。煩戒吾兒發取之。為作佛事。以資冥福。持所餘尚足營生也。鄒聞言悲慟。且云犬日夜實寢於彼。遂瘞之寺後。歸發其藏。果得銀如數。乃設水陸於寺中。 |
| 18 | 『夷堅三志辛』巻2「劉和尚犬」 | 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』第三冊、中華書局、1981年、p. 1400 | 宋代 | ●鄱陽石陂村庵僧法希，養壹黃犬，性極馴，晝不傷人，而夜吠甚警，不食葷穢。（中略）慶元元年七月，忽因早餐誤侵一角，僧拈柴杖擊之，且罵責不置，犬舍之而走，到夜不歸。石陂池畔居者陳婆，夢婦人著黃衫來相見，問為誰，曰，我是庵內劉和尚之母，為生前有罪，受罰入畜類。兒子將百五十錢買我，侍養十年，偶昨朝食粥過多，被兒打詈，思之悶絕，無處理訴，已自投溺於池。特來說過，煩老人明日報兒子使他知。陳婆駭怖而覺，旦以告僧。即領仆詣池撈漉，果得犬屍而收殮，誦經備禮，埋於故母墓側。 |
| 19 | 『庚巳編』巻9「犬精」 | 陸粲撰 顧起元撰・譚棣華 陳稼禾點校『庚巳編 客座贅語』、『元明史料筆記叢刊』、中華書局、1987年、p. 103 | 明代 | ●弘治中，兗之魚臺縣有民家畜一白犬甚馴其。其主出行，犬常隨之。他日，主商於遠方。既去，犬亦不見。經兩三日，主輒歸，妻問其故，曰，途中遇盜，財物都盡，幸逃得性命耳。妻了不疑，周旋閱歲，其真夫歸，形狀悉同，不可辨。兩人各自爭真偽，妻及鄰里不能明，乃白於縣。縣令逮兩人至，亦無如之何，皆置之獄。縣一小卒聞其事，以語其妻，妻曰，是不難辯，先歸者殆犬精也。欲驗之，當視其婦胸乳間，有爪傷血紋即是矣。蓋犬與人交，常自後以爪按其胸故也。卒以白令。令召其婦問：爾家嘗有犬乎？曰，有白犬，前隨夫出矣。裸而視其胸，有血紋甚多，令知為怪，密使人以血灑其偽夫，即成犬形，立撲殺之。令從容問卒，汝計善矣，何從得之。謝曰，吾妻所教也。令諭之曰，汝妻不與犬通，何緣知此。汝歸第密察之。卒歸，看妻亦有紋，比此婦尤多，以令語責之。妻窮吐實，乃知亦與一犬通故也。妻慚自縊死。吾鄉陳都御史，時奉使彼中，得其案牘。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 20 | 『閲微草堂筆記』巻1　交河老儒 | 紀昀撰『閲微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年、p.14 | 清代 | ●交河老儒（中略）人靜後。忽聞馬語（中略）一馬曰。 我輩多由圉人轉生。死者方知。生者不悟。可為太息。眾馬皆嗚咽。一馬曰。冥判亦不甚公。王 五何以得為 犬。一馬曰。冥卒曾言之。渠一妻二女並淫濫，盡盜其錢與所歡，當罪之半矣。一 馬曰。信然。罪有輕重。姜七墮豕身受屠割。更我輩不若也。及忽輕啾。語遂寂（以下略） |
| 21 | 『醉茶志怪』巻3「人化犬」 | 李慶辰著・金東点校『醉茶志怪』、歷代筆記小説叢書、斉魯書社、2004年、p.124 | 清代 | ●邑朱某昼寝，梦里人丁姓者造其庐，青衣白带，神色张皇，谓朱曰：“官府命予寄养君家，祈善顾也。”语毕入内去。朱骇追问，遂寤。乃步入后院，见犬生数子。中一小犬，腰间白毛周匝如带，始悟为丁之后身。稍长，送于长生院焉。<br>醉茶子曰：闻丁某贪暴霸产，无所不为，死而化犬，固所宜也。冥罚可畏已。 |

### 6.2 日本における犬の変身譚

| # | 出典 | 出典の詳細情報 | 時代 | 原文 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『日本書紀』巻14「大泊瀬幼武天皇雄略天皇」（〔一五〕鳥養部と猪名部、呉国よりの使者） | 小島憲之　直木孝次郎　西宮一民　蔵中進　毛利正守校注・訳『日本書記』①＜全三冊＞、新編日本古典文学全集2、小学館、2006年6月20日第一版第四刷発行、p. 192-194 | 奈良時代 | ●秋八月、播磨国御井隈人文石小麻呂、有力強心。肆行暴虐。路中抄劫不使通行。又断商客艖□（舟＋付、筆者注）、悉以奪取、兼違国法、不輸租賦。於是天皇遣春日小野臣大樹、領敢死士一百。並持火炬。囲宅而焼。時自火炎中、白狗暴出。逐大樹臣。其大如馬。大樹臣神色不変。抜刀斬之。即化為文石小麻呂。 |
| 2 | 『日本霊異記』上-30「非理奪他物爲惡行受報示奇事縁第卅」 | 中田祝夫校注・訳『日本霊異記』、新編日本古典文学全集10、小学館、1995年、pp. 99-101 | 平安時代 | ●膳臣広国者、豐前国宮子郡少領也。藤原宮御宇天皇之代。慶雲二年乙巳秋九月十五日庚申、広国忽死。逕之三日、戊日申時、更甦之而語之曰、「使有二人、一頂髮挙来、一少子也。伴副往程、二駅度許、路中有大河。度椅之以金塗厳。自其椅、行至彼方、有甚□（言＋慈、筆者注）国。問使人曰、『是何国矣』、答『度南国也』。至其京時、有八官人、佩兵追往。前有金宮。入宮門、見有王、坐乎黄金之坐。王詔広国曰、『今召汝者、依汝妻憂申之事』。即召一女。見之昔死妻。以鉄釘打頂通尻、打額通項。以鉄縄縛四枝、八人懸挙而将來。王問之言、『汝知是女耶』。広国白言、『実我之妻也』。復問『汝知鞫罪耶』。答『不知』。問女之答、『我実知之。擯吾而自家出遣。故、悕惻厭媚』。王詔広国曰、『汝无罪、可還於家。然慎以黄泉之事、勿忘宣伝。若欲見父、往於南方』。往而見之、実有我父。抱甚熱熱銅柱而立。鉄釘卅七於其身打立、以鉄打。夙三百段、晝三百段、夕三百段、合九百段、毎日打迫。広国見之悲而言、『嗚呼何図之。受是苦也』。父言、『我受是苦、吾子、汝知不也。我為養妻子故、或殺生物、或貸八兩綿、強倍十兩徵、或貸小斤稻而強太斤取、或人物強奪取、或他妻奸犯。不孝養父母、不恭敬師長、不奴婢者罵慢。如是罪故（中略）汝忽為我造仏写経、贖罪苦。慎々莫忘矣。我飢七月七日成大蛇到汝家、将入屋房時、以杖懸棄。又五月五日成赤狗到汝家之時、喚犬而相之、唯追打者飢熱還。我正月一日、成狸入於汝家之時、飽供養宍種物、是以継三年之糧。我无兄弟上下次第而失理、成犬噉白出汁。我必可成赤狗。』凡布施米一升之報、得卅日之糧。布施衣服一具之報、得一年分衣服。令読経者、住東方金宮、後隨願生天。造仏菩薩者、生西方无量寿浄土。放生之者、生北方无量浄土。一日斎食者、得十年之糧。乃至見造善惡所受報等出。広国暫徘徊、少子出來。時守門人、見其少子而長跪礼。少子喚広国、将至片方脇門、押其門而開之。将出告曰、『速往』。広国問少子云、『汝誰之子』。答、『欲知我者、汝幼稚時奉写観世音経是也。』還之焉、即見甦還」。広国至黄泉、善惡之報顕錄流布也。（以下略） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 3 | 『今昔物語集』巻20-16「豊前国膳広国、行冥途歸来語第十六」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注、訳『今昔物語集』③、新編日本古典文学全集37、小学館、2008年12月24日第一版第三刷発行、pp.78-82 | 平安時代 | ●今昔、文武天皇ノ御代ニ、膳ノ広国ト云者有ケリ。豊前ノ国宮子ノ郡ノ小領也。其人ノ妻前ニ死テ後、慶雲二年ト云フ年ノ九月十五日、広国忽ニ死ス。而ルニ、三日ヲ経テ活テ、傍ナル人ニ語テ云ク、「我死シ時ニ、使二人来レリキ。一人ハ髪ヲ挙タリ、一人ハ髪ヲ束ネタル小子也。我、此ノ二人ニ副テ行ク程ニ、二ノ駅ヲ渡テ行ニ路ノ中ニ大ナル河有リ。橋ヲ渡セリ、金塗リ以テ厳レリ。其レヲ渡テ行ニ、彼方ニ極テ□（言＋慈、筆者注）キ所有リ。我此ノ使ニ問テ云ク、『此、何ナル所ゾ』ト。使ノ云ク、『渡レル南ノ国也』ト。而ル間、其ノ所ニ八ノ官人有リ、皆釼ヲ佩タル兵也。猶進ミ行バ、金ノ宮有リ。門ニ入テ見バ、王在、黄金ノ座ニ居給ヘリ。王広国ヲ見テ問テ宣ハク、『今汝ヲ召ツル事ハ、汝ガ妻ノ愁ハ申セルニ依也』。然即チ妻ヲ召タリ。此ヲ見バ、我ガ昔ノ死セル妻也ケリ。鉄釘ヲ以頂ニ打リ、釘ノ尻、額ニ通ル。額ニ打テル釘ハ頂ニ通ル。又鉄ノ縄ヲ以テ、四ノ枝ヲ縛テ、八人シテ掻挙テ持来レリ。王、広国ニ問テ宣ハク、『汝、此ノ女ヲバ知レリヤ否』ト。広国申ク、『此、我昔ノ妻也』ト。王又宣ク、『此罪ヲ蒙レルヲバ知リヤ否』。広国申ク、『我不知』ト。然バ女ニ問ニ、女答テ云ク、『我昔シ死セシ時、汝我ヲ不惜シテ、家ヨリ出シ遺シガ故ニ、我其レヲ恨テ愁ヘル也』ト。王此ヲ聞テ、広国ニ宣ク、『汝ヂ罪無ケリ、速ニ家ニ可還ベシ。汝ガ妻死シ時ノ事ヲ以猥ニ愁フ。不当ズ』ト宣テ、又宣ク、『若、汝ガ父ヲ見ムト思バ、此ヨリ南方ニ行テ可見』ト。然バ行テ見ニ、実ニ我ガ父在リ、甚ダ熱キ銅ノ柱ヲ令抱テ、立タリ。鉄ノ釘三十七ヲ其身ニ打立タリ。又鉄ノ杖ヲ以テ、朝ニ三百段、昼三百段、夕ニ三百段、合テ九百段、毎日ニ打迫ム。広国、此ヲ見テ悲テ、父ニ問テ云ク、『君、何ナル罪ヲ造テ、此苦ヲ受給ヘルゾ』ト。父ノ云ク、『我此苦ヲ受ル事汝知レリヤ。我生タリシ時、妻子ヲ養ハムガ為ニ、或ハ生命ヲ殺シ、或ハ八両ノ綿ヲ人ニ借シテ強ニ十両ニ倍シテ責メ取リ、或ハ小サキ斤ノ量ヲ以テ稲ヲ人ニ借シテ、大斤ヲ以テ徴リ取リ、或ハ人ノ物ヲ奪ヒ取リ、或ハ他ノ女ヲ奸犯シ、或ハ父母ニ不孝養ズ、師長ヲ不敬、或ハ奴婢ニ非ザル者ヲ奴婢ト称シテ詈リ打バ、如此ノ罪ノ故ニ、我ガ小サシト云ヘドモ、三十七ノ釘ヲ被打立、毎日ニ九百段ノ鉄ノ杖ヲ負テ破打迫ル。痛哉、悲哉、何ナラム時ニカ、我、此罪ヲ被免テ、安キ身ヲ得ム。汝ヂ返テ、速ニ我為ニ仏ヲ造リ、経ヲ写テ、我罪ヲ除ク事ヲ令得ヨ。又我、大蛇トシテ、七月ノ七日、汝ガ家ニ入シ時、汝杖ヲ以テ懸テ弃テキ。又我、赤キ犬トシテ、五月ノ五日、汝ガ家ニ入シ時、汝、他ノ犬ヲ呼テ令咋テ打追シカバ、飢テ還ニキ。又我、狸トシテ、正月ノ一日ニ汝ガ家ニ入シ時、飯及ビ種々ノ味物ヲ与ヘテ食ヒ令飽タリキ。其ヲ以テ、三年ノ粮ヲ継グ。又我、兄弟ノ上下ノ次第无シテ理ヲ失ヘリシガ故ニ、犬ト成テ、不浄ノ物ヲ噉フ。返テ自其汁ヲ出セリ。我、必赤キ犬ト可成シ。凡、人、米一升ヲ人ニ施セリシ報ニ三 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 4 | 『今昔物語集』巻14-21「比睿山横川永慶聖人、誦法花知前世語第二十一」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注、訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集35、1999年4月20日第一版第一刷発行、pp. 458-459 | 平安時代 | ●今昔、比睿ノ山ノ横川ニ永慶聖人ト云フ僧有ケリ、覚超僧都ノ弟子也。幼ニシテ山ニ登テ、師ニ随テ法花経ヲ受習テ、日夜ニ読誦ス。後ニハ本山ヲ去テ、攝津ノ国ノ箕面ノ瀧ト云フ所ニ籠テ、法花経ヲ誦シテ勲ニ行フ。而ル間、永慶夜ル、仏前ニシテ経ヲ誦シテ礼拝スルニ、傍ニ人有テ寝タリ。其ノ人、夢ニ、老タル狗仏前ニ有テ、音ヲ高ク吼テ立居ニ仏ヲ礼拝ス、ト見テ夢覚ヌ。即チ見レバ、永慶仏前ニ居テ、音ヲ挙テ礼拝ス。如此ク一両人同ク見テ、永慶ニ語ル。永慶此レヲ聞テ、此ノ事ヲ知ラムガ為ニ、七日食ヲ断テ、堂ニ籠テ、「此ノ夢ノ告ヲ令知メ給ヘ」ト祈請フニ、第七日ノ夜、夢ニ「宿老ノ僧来テ告テ云ク、「汝ガ前生ノ身ハ耳垂犬ノ身トシテ有リキ。其ノ狗法花経ノ持者ノ房ニ有テ、昼夜ニ法花ヲ誦スルヲ聞キヽ。其ノ力ニ依テ、狗ノ報ヲ轉ジテ、人ノ身ト生レテ、僧ト成テ法花経ヲ読誦ス。但シ、前生ノ氣分、于今有テ、人ノ夢ニ狗ノ形ニテ見ユル也。我ハ此レ、竜樹菩薩也」ト宣フ」ト宣フ、ト見テ夢覚ヌ。（以下略） |
| 5 | 『今昔物語集』巻14-16「元興寺蓮尊、持法花経知前世報語第十六」 | 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注、訳『今昔物語集』①、新編日本古典文学全集35、1999年4月20日第一版第一刷発行、pp. 448-449 | 平安時代 | ●今昔、美作ノ国ニ蓮尊ト云フ僧有ケリ、本ハ元興寺ノ僧也。而ルニ、本寺ヲ去テ、生国ニ下テ住ス。幼クシテ師ニ随テ、法花経ヲ受ケ習テ日夜ニ読誦スルニ、暗ニ思エテ誦セムト思フ志有テ、年来誦スルニ、既ニ二十七品ヲ思エヌ。而ルニ、普賢品ヲ不思ズ。此ニ依テ、心ヲ盡クシテ普賢品ノ一々ノ句ヲ数万返誦シテ思エムト為レドモ、更ニ不思ズ。然レドモ、一夏九旬ノ間、普賢ノ御前ニシテ難行苦行シテ、此ノ事ヲ祈請フ。一夏既ニ過ヌル間ニ、蓮尊、夢ニ天童来テ、蓮尊ニ告テ云ク、「我ハ此レ、普賢菩薩ノ御使也、汝ガ宿業ノ因縁ヲ令知メムガ為ニ来レル也。汝ヂ、前世ニ狗ノ身ト有リキ。母汝ト共ニ人ノ家ノ板敷ノ下ニ有リキ。法花ノ持者其ノ板敷ノ上ニ有テ法花経ヲ読誦ス。初メ序品ヨリ終リ妙荘厳王品ニ至ルマデ二十七品ヲ誦スルヲ、狗聞キヽ。普賢品ニ至テ、汝ヂ母ノ起テ去シニ随テ、汝モ共ニ去ニキ。然レバ、普賢品ヲ不聞ザリキ。汝ヂ、前世ニ法花経ヲ聞奉リシニ依テ、狗ノ身ヲ轉ジテ、今人ノ身ト生レテ、僧ト成テ、法花経ヲ読誦ス。但シ、普賢品ヲ不聞ザリシニ依テ、其ノ品ヲ暗ニ不思ト云ヘドモ、勲ニ今、普賢ヲ念ジ奉ルニ依テ、暗ニ思ム事ヲ必ズ令得メム。専ニ法花ヲ持テ来世ニ諸佛ニ値遇シ奉テ、此ノ経ヲ悟ル事ヲ可得シ」ト云テ、天童失ヌ、ト見テ、夢覚ヌ。其後、蓮尊、宿因ヲ知テ、忽ニ、普賢品ヲ暗ニ思ユル事ヲ得ツ。（以下略） |
| 6 | 『古今著聞集』巻20-689「兵衛尉康忠死後犬と成りて院中に祇候の事」 | 長積安明　島田勇雄校注『古今著聞集』、日本古典文学大系84、岩波書店、昭和41年3月10日第1刷発行、p. 518 | 鎌倉時代 | ●後白川院御時、兵衛尉康忠といふもの候けり。三條烏丸殿の兵亂の夜、うせにしものなり。仁安の比、黒まだらなる男犬の異體なる、院中にみえけり。或ものゝ夢に、康忠院中に祇候の志深くて、この犬になりたるよし見たりける、あはれなる事也。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 7 | 『沙石集』巻7-9「前業ノ酬タル事」 | 渡辺綱也校注『沙石集』、日本古典文学大系85、岩波書店、昭和41年5月6日第一刷発行、pp. 304-306 | 鎌倉時代 | ●信州ノ或山寺ニ犬アリ。五ノ子ヲ生リ。此犬五ノ子ノ中ニ、一ヲ惡ミテ乳モ呑セズシテ、イガミクイケレバ、羸ガレワビシゲ也。坊中ノ人、此母犬ヲ打、惡ミケル程ニ、房主・同宿・兒共、アマタ一夜ノ中ニ夢ニミケルハ、此母犬申ケルハ、「我身ハ、先生ニナニガシト申シヽ遊女ニテアリシガ、五人ノ子夫ヲモチテ侍シガ、四人ハ事ニ觸テ情アリテ振舞シカバ、志モ互ニアサカラズ。一人ハ物ニモ覚ヘズシテ、我ヲワヅラハス事ノミ侍シカバ、惡ミ思ヒナガラスゴシ侍キ。今此五人ノ子ハ、彼五人ノ夫ナリ。四人ハ昔ノ情ケ深キ故ニ、乳ヲ呑モイトウシク、ワヅラハシクモナシ。一人ハ昔モ心ツキナク思シ故ニ、乳ヲ呑モワビシク惡ク候侭イカニイカニ人々ニクマセ給ヘドモ、斯ル心ニテ候。彼ニクカリシ夫ガヲイノ、明日此子ヲバ取テマカルベシ。カクモ申マジケレドモ、可然昔ノ因縁ニテアリケリトヲボサバ、人々ノ御不審モアラジトテ、カク申」トゾミケル。次ノ朝人々、「此事、我モカクミタリく」ト云、スコシモ違ズ。サル程ニ、或俗來テ、此犬ノ子ヲホシガリケレバ、「何ニテモ一ヱリテ取」ト云ニ、「ヤセテ候ヘドモ、此犬ハケナリゲニ見ヘ候ヘバ、イトヲシク候」トテ、惡マレ子ヲトル。此時人々、夜〔ノ〕夢ニ違ヌ事ヲ思合テ、「某ト云遊女ヤアリケル」ト云ヘバ、「サル君候キ。軈而某ガ伯父ニテ候シガ、子君ニテ、候キ」ト云。「サテ彼君ハ夫アマタアリキヤ」ト云。「伯父ガ外ニ四人候シヲ、伯父ニテ候シ物、憤猜申シヽカドモ共ニ通キ」ト云。コトぐク夢ニ違ザリケレバ、此俗ニ、シカくト申ケル時、「サテハ哀レナル事ニテ侍ルモノカナ。彼伯父、我ヲ育ミ侍シ恩ヲモムクヒ候ベシ。サテミ候モ、イトヲシク候ツル故ニコソ」トテ、抱テ去リヌ。此事近比ノ不思儀ナリ。カノ山寺ノ夢見タル者、當時モアリト聞ト、或人ノ語キ。先業ノ報ヒ、始テ可驚アラネドモ、正ク加様ノ事ヲ聞ニハ、彌々因果〔ノ〕理リ信ゼラル。サレバ人ニ惡マレムモ、ナツカシク思ハレムモ、一世ノ事ニハアラジ。ニクマ〔レ〕ムヲモ、人ノトガト不可思。只昔ノ業、因縁ト可思。何事モ思ホドキテ、只妄念ナク、罪障ナクシテ、舊業ヲケシ、新シキ罪ヲ可愼。 |
| 8 | 『三州奇談』巻4-7「家狗の靈妙」 | 田山花袋・柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫 / 博文館編輯局校訂第47編、博文館、1903年、pp. 797-799 | 江戸時代 | ●淺野川茶臼山の麓に日原喜兵衛と云ひて成瀬侯の家士あり。此戸外に白狗子を產みしを愛し育てしことあり。然るに或夜白衣の人來り云ふ。此後ろの山裂けて此邊必す泥水となるべき□近日にあり。早く立過かるべし。我は恩を蒙れる者故に告げ申すと。（中略）此犬…夜前来りて頻りに吠え。（中略）夫婦共に立退しは。（中略）茶臼山崩れて淺野川を埋め（中略）壓死の男女三十餘人（以下略） |

### 7.1.1 中国における亀の変身譚（亀が人間に変身するパターン）

| # | 出典 | 出典の詳細情報 | 時代 | 原文 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『太平廣記』巻468引『志怪』「謝宗」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、p.3861 | 晋代 | ●會稽王國吏謝宗赴假。經吳皐橋。同船人至市。宗獨在船。有一女子。姿性婉娩。來詣船。因相為戲。女即留宿歡讌。乃求寄載。宗許之。自爾船人夕夕聞言笑。後逾年。往來彌數。同房密伺。不見有人。知是邪魅。遂共掩被。良久。得一物。大如枕。須臾，又獲二物。並小如拳。視之。乃是三龜。宗悲思。數日方悟。向說如是云。此女子一歲生二男。大者名道愍。小者名道興。宗又云。此女子及二兒。初被索之時大怖。形並縮小。謂宗曰。可取我枕投之。時族叔道明為郎中令。籠三龜示之。出《志怪》 |
| 2 | 『太平廣記』巻468引『三吳記』「姑蘇男子」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、p.3855 | 晋代 | ●後漢時。姑蘇有男子。衣白衣。冠幘。容貌甚偉。身長七尺。眉目踈朗。從者六七人。遍歷人家。姦通婦女。晝夜不畏於人。人欲掩捕。即有風雨。雖守郡有兵。亦不敢制。苟犯之者。無不被害。月餘。術人趙杲在趙。聞吳患。泛舟遽來。杲適下舟步至姑蘇北堤上。遙望此妖。見路人左右奔避無所。杲曰。此吳人所患者也。時會稽守送臺使。遇。亦避之於舘。杲因謁焉。守素知杲有術，甚喜。杲謂郡守曰。君不欲見乎。因請水燒香。長嘯數聲。天風歘至。聞空中數十人響應。杲擲手中符。符去如風。頃刻。見此妖如有人持至者。甚惶懼。杲謂曰。何敢幻惑不畏。乃按劒曰。誅之。便有旋風擁出。杲謂守曰。可視之矣。使未出門。已報去此百步。有大白蛟。長三丈。斷首於路傍。餘六七者。皆身首異處。亦黿鼉之類也。左右觀者萬餘人。咸稱自此無患矣。出《三吳記》 |
| 3 | 『太平廣記』巻469引『南雍州記』「蕭騰」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3866-3867 | 南北朝 | ●襄陽金城南門外道東。有參佐廨。舊傳甚凶。住者不死必病。梁昭明太子臨州。給府寮呂休蒨。休蒨常在廳事北頭眠。鬼牽休蒨。休蒨墜地。久之悟。俄而休蒨有罪賜死。後今蕭騰初上。至羊口岸。忽有一丈夫著白紗高室帽。烏布袴。披袍造騰。疑其服異。拒之。行數里復至。求寄載。騰轉疑焉。如此數迴。而騰有妓妾數人。舉止所為。稍異常日。歌笑悲啼。無復恒節。及騰至襄陽。此人亦經日一來。後累辰不去。好披袍縛袴。跨狗而行，或變易俄頃。詠詩歌謠。言笑自若。自稱是周瑜。恒止騰舍。騰備為禳遣之術。有時暫去。尋復來。騰又領門生二十人。拔刀砍之。或跳上室梁。走入林中。來往迅速。竟不可得。（中略）頃之。有道士趙曇義為騰設壇。置醮行禁。自道士入門。諸妾並悲叫。若將遠別。俄而一龜徑尺餘。自到壇而死。諸妾亦差。騰妾聲貌悉不多。諮議叅軍韋言辯善戲謔。因宴而啟云。常聞世間人道。黠如鬼。今見鬼定是癡鬼。若黠。不應魅蕭騰妓（妓原作故。據明鈔本改。）以此而度，足驗鬼癡。出《南雍州記》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 4 | 『太平廣記』巻469引『廣古今五行記』「隋文帝」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3867-3868 | 南北朝 | ●隋文帝開皇中。掖庭宮每有人來挑宮人。司宮以聞。帝曰。門衛甚嚴。人從何而入。當妖精耳。因戒宮人曰。若來。但砍之。其後夜來登牀。宮人抽刀砍之。若中枯骨。其物走落。宮人逐之。因入池而沒。明日。帝令涸池。得一龜尺餘。其上有刀痕。殺之遂絕。出《廣古今五行記》 |
| 5 | 『太平廣記』巻469引『續異記』「朱法公」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、p.3865 | 南北朝 | ●山陰朱法公者嘗出行。憩於臺城東橘樹下。忽有女子。年可十六七。形甚端麗。薄晚。遣婢與法公相聞。方夕。欲詣宿。至人定後。乃來。自稱姓檀。住在城側。因共眠寢。至曉而云。明日復來。如此數夜。每曉去。婢輒來迎。復有男子。可六七歲。端麗可愛。女云是其弟。後曉去。女衣裙開。見龜尾及龜脚。法公方悟是魅。欲執之。向夕復來。即然火照竟。尋失所在。出《續異記》 |
| 6 | 『太平廣記』巻469引『九江記』「王奐」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、p.3865 | 唐代 | ●齊王奐自建業將之渚宮。至江州。泊舟於岸。夜深。風生月瑩。忽聞前洲上有十餘人喧噪。皆女子之音。奐異之。謂諸人曰。江渚中豈有是人也。乃獨棹小舟。取葭蘆之陰。循洲北岸。而於蓼葦中見十餘女子。或衣緑。或衣青碧。半坐半立。坐者一女子泣而言曰。我始與姊妹同居陰宅。長在江漢。不意諸娘。虚為上峽小兒所娶。乃至分離。立者一女子嘆曰。潮水有廻。而我此去。應無返日。言未竟。北風微起。立者曰。潮至矣。可以還家。奐急從蘆葦中出捕。悉化為龜。入水而去。出《九江記》 |
| 7 | 『太平廣記』巻470引『廣異記』「謝二」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3870-3871 | 唐代 | ●唐開元時。東京士人以遷歷不給。南遊江淮。求丐知己。困而無獲。徘徊揚州久之。同亭有謝二者，矜其失意。恒欲恤之。謂士人曰。無爾悲為。若欲北歸。當有三百千相奉。及別，以書付之曰。我宅在魏王池東。至池。叩大柳樹。家人若出。宜付其書。便取錢也。士人如言。逕叩大樹。久之。小婢出。問其故。云。謝二令送書。忽見朱門白壁。婢往却出。引入。見姥充壯。當堂坐。謂士人曰。兒子書勞君送。令付錢三百千。今不違其意。及人出。已見三百千在岸。悉是官家排斗錢。而色小壞。士人疑其精怪。不知何處得之。疑用恐非物理。因以告官。具言始末。河南尹奏其事。皆云。魏王池中有一黿窟。恐是耳。有敕。使擊射之。得崑崙數十人。悉持刀鎗。沉入其窟。得黿大小數十頭。末得一黿。大如連牀。官皆殺之。得錢帛數千事。其後五年。士人選得江南一尉。之任。至揚州市中東店前。忽見謝二。怒曰。於君不薄。何乃相負。以至於斯。老母家人。皆遭非命。君之故也。言訖辭去。士人大懼。十餘日不之官。徒侶所促。乃發。行百餘里。遇風。一家盡沒。時人云。以為謝二所損也。出《廣異記》 |
| 8 | 『太平廣記』巻118引『獨異志』「嚴泰」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第二冊、p.826 | 唐代 | ●陳宣帝時。揚州人嚴泰。江行逢漁舟。問之。云。有龜五十頭。泰用錢五千贖放之。（放之原作之。據明鈔本改。）行數十步。漁舟乃覆。其夕。有烏衣五十人。扣泰門。謂其父母曰。賢郎附錢五千。可領之。縉皆濡濕。父母雖受錢。怪其無由。及泰歸問。乃說贖龜之異。因以其居為寺。里人號曰嚴法寺。出《獨異志》 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 9 | 『太平廣記』巻230引『異聞集』「王度」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第四冊、pp.1765-1767 | 唐代 | ●（前略）大業十年。度弟勣。自六合丞棄官歸。又將遍遊山水。以為長往之策。度止之曰。今天下向亂。盜賊充斥。欲安之乎。且吾與汝同氣。未嘗遠別。此行也，似將高蹈。昔尚子平遊五嶽。不知所之。汝若追踵前賢。吾所不堪也。便涕泣對勣。勣曰。意已決矣。必不可留。兄今之達人。當無所不體。孔子曰。匹夫不奪其志矣。人生百年。忽同過隙。得情則樂。失志則悲。安遂其欲。聖人之義也。度不得已。與之決別。勣曰。此別也。亦有所求。兄所寶鏡。非塵俗物也。勣將抗志雲路。棲蹤煙霞。欲兄以此為贈。度曰。吾何惜於汝也。即以與之。勣得鏡遂行。不言所適。至大業十三年夏六月。始歸長安。以鏡歸。謂度曰。此鏡真寶物也。辭兄之後。先遊嵩山少室。降石梁。坐玉壇。屬日暮，遇一嵌巖。有一石堂可容三五人。勣棲息止焉。月夜二更後。有兩人。一貌胡。鬚眉皓而瘦。稱山公。一面闊。白鬚眉長。黑而矮。稱毛生。謂勣曰。何人斯居也。勣曰。尋幽探穴訪奇者。二人坐。與勣談久。往往有異義出於言外。勣疑其精怪。引手潛後。開匣取鏡。鏡光出而二人失聲俯伏。矮者化為龜。胡者化為猿。懸鏡至曉。二身俱殞。龜身帶綠毛，猿身帶白毛。（以下略）出《異聞集》 |
| 10 | 『太平廣記』巻470引『瀟湘錄』「僧法志」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、p.3876 | 唐代 | ●臺山僧法志遊至淮陰。見一漁者堅禮而命焉。法志隨至草庵中。漁者設食甚謹。法志頗怪。因問曰。弟子以漁為業。自是造罪之人。何見僧如此敬禮。答曰。我昔於會稽山遇雲遠上人為衆講法。暫曾隨喜。得悟聖教。邇來見僧。即歡喜無量。僧異之。勸令改業。漁者曰。我雖聞善道。而滯於罟網。亦猶和尚為僧。未能以戒律為事。其罪一也。又何疑焉。僧慙而退。迴顧。見漁者化為大黿，入淮，亦失草庵所在。出《瀟湘錄》 |
| 11 | 『太平廣記』巻471引『稽神錄』「宋氏」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3878-3879 | 宋代 | ●江西軍吏宋氏嘗市木至星子。見水濱人物喧集。乃漁人得一大黿。黿見宋屢顧。宋即以錢一千贖之。放于江中。後數年。泊船龍沙。忽有一僕夫至。云元長史奉召。宋恍然。不知何長史也。既往。欵至一府。官出迎。與坐曰。君尚相識耶。宋思之。實未嘗識。又曰。君亦記星子江中放黿耶。曰。然。身即黿也。頃嘗有罪。帝命謫為水族。見囚於漁人。微君之惠。已骨朽矣。今已得為九江長。相召者。有以奉報。君兒某者命當溺死。名籍在是。後數日。鳴山神將朝廬山使者。行必以疾風雨。君兒當以此時死。今有一人名姓正同。亦當溺死。但先期歲月間耳。吾取以代之。君兒宜速登岸避匿。不然不免。宋陳謝而出。不覺已在舟次矣。數日。果有風濤之害。死甚衆。宋氏之子竟免。出《稽神錄》 |
| 12 | 『西湖遊覽志餘』巻26 | 田汝成撰『西湖遊覽志餘』、欽定四庫全書、影印古籍、コマ番号108-109、参照URL:http://ctext.org/library.pl?if=gb&file=73669&page=108 | 明代 | ●咸淳壬申七月有梢人泊舟西湖斷橋下時暑熱臥於舟尾中夜不寐見三人長不盈尺集於沙際一曰張公至奈何一曰賈平章非仁者決不相恕一曰我則已矣公等及見其敗也相與哭入水中次日漁者張公于橋下獲一鼈徑二尺餘納之賈府不三四年賈敗蓋物能知數而莫之逃也 |

### 7.1.2 中国における亀の変身譚（人間が亀に変身するパターン）

| # | 出典 | 出典の詳細情報 | 時代 | 原文 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『搜神記』巻14(355)「人化黿」 | 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985年、p.175 | 晋代 | ●漢靈帝時，江夏黃氏之母，浴盤水中，久而不起，變為黿矣。婢驚走告。比家人來，黿轉入深淵。其後時時出見。初浴簪一銀釵，猶在其首。於是黃氏累世不敢食黿肉。 |
| 2 | 『搜神記』巻14(356)「人化鼈」 | 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985年、pp.175-176 | 晋代 | ●魏黃初中，清河宋士宗母，夏天於浴室裏浴，遣家中大小悉出，獨在室中良久。家人不解其意，於壁穿中窺之，不見人體，見盆水中有一大鼈。遂開戶，大小悉入，了不與人相承。嘗先著銀釵，猶在頭上。相與守之啼泣，無可奈何。意欲求去，永不可留。視之積日，轉懈，自捉出戶外，其去甚駛，逐之不及，遂便入水。後數日，忽還，巡行宅舍，如平生，了無所言而去。時人謂士宗應行喪治服。士宗以母形雖變，而生理尚存，竟不治喪。此與江夏黃母相似。 |
| 3 | 『搜神記』巻14(357)「宣騫母」 | 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985年、p.176 | 晋代 | ●吳孫皓寶鼎元年六月晦，丹陽宣騫母，年八十矣，亦因洗浴，化為黿。其狀如黃氏。騫兄弟四人，閉戶衛之，掘堂上作大坎，瀉水其中。黿入坎遊戲。一二日間，恒延頸外望，伺戶小開，便輪轉自躍，入於深淵。遂不復還。 |
| 4 | 『搜神後記』巻4(48)「化黿」 | 陶潛撰・汪紹楹校注『搜神後記』、古小說叢刊、中華書局、1981年、p.29 | 南北朝 | ●魏清河宋士宗母，以黃初中夏天於浴室裏浴，遣家中子女闔戶。家人於壁穿中，窺見浴盆水中有一大黿。遂開戶，大小悉入，了不與人相承當。先著銀釵猶在頭上。相與守之啼泣，無可奈何。出外去，甚駛，逐之不可及，便入水。後數日，忽還。巡行舍宅，如平生，了無所言而去。時人謂士宗應行喪，士宗以母形雖變而生理尚存，竟不治喪。與江夏黃母相似。 |
| 5 | 『太平御覽』巻66引『丹陽記』 | 李昉等撰『太平御覽』<全四冊>、中華書局、1960年2月第一版 1995年10月第5次印刷、第一冊、p.316 | 南北朝 | ●丹陽記曰吳孫皓寶鼎元年丹陽宣騫之母年八十浴於後湖化為黿後湖又名練湖 |
| 6 | 『太平廣記』巻471引『廣古今五行記』「宣騫母」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、pp.3880-3881 | 南北朝 | ●吳孫皓寶鼎元年。丹陽宣騫之母。年八十。因浴化為黿。騫兄弟閉戶衛之。掘堂內作大坎。實水。其黿即入坎遊戲。經累日。忽延頸外望。伺戶小開。便輒自躍。赴于遠潭。遂不復見。出《廣古今五行記》 |
| 7 | 『太平廣記』巻471引『神鬼傳』「黃氏母」 | 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷、第十冊、p.3880 | 南北朝 | ●後漢靈帝時。江夏黃氏之母浴而化為黿。入于深淵。其後時時出見。初浴簪一銀釵。及見。猶在其首。出《神鬼傳》 |

### 7.2.1 日本における亀の変身譚

| # | 出典 | 出典の詳細情報 | 時代 | 原文 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『日本書記』巻14「大泊瀬幼武天皇 雄略天皇」（〔一九〕高麗、百済を滅す） | 小島憲之 直木孝次郎　西宮一民　蔵中進　毛利正守校注・訳『日本書記』②、新編日本古典文学全集3、小学館、2006年6月20日第一版第四刷発行、p. 206 | 奈良時代 | ●秋七月、丹波国余社郡管川人水江浦嶋子、乗舟而釣、遂得大亀。便化為女。於是浦嶋子感以為婦、相遂入海、到蓬萊山、歴覩仙衆。語在別巻。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 2 | 『風土記』逸文「丹後の国」（筒川の嶼子（水江の浦の嶼子）） | 植垣節也校注・訳『風土記』、新編日本古典文学全集5、小学館、2006年8月20日第一版第五刷発行、pp.479-483 | 奈良時代 | ●（丹後國風土記曰）与謝郡。日置里。此里有筒川村。此人夫、□（日＋下、筆者注）部首等先祖、名云筒川嶼子。爲人、姿容秀美、風流無類。斯、所謂水江浦嶼子者也。是、舊宰伊預部馬養連、所記無相乖。故、略陳所由之旨。長谷朝倉宮御宇天皇御世、嶼子独乗小船、汎出海中爲釣。経三日三夜、不得一魚、乃得五色亀。心思奇異、置于船中即寐、忽爲婦人。其容美麗、更不可比。嶼子問曰、「人宅遥遠、海庭人乏、詎人忽來」。女娘微咲對曰「風流之士、独汎蒼海。不勝近談、就風雲來」。嶼子復問曰「風雲何処來」。女娘答曰「天上仙家之人也。請君勿疑。垂相談之愛」。爰嶼子知神女、鎭懼疑心。女娘語曰「賤妾之意。共天地畢。倶日月極。但君奈何、早先許不之意」。嶼子答曰「更無所言。何懈乎」。女娘曰「君宜廻棹、赴于蓬山」。嶼子従往。<br>女娘、教令眠目、即不意之間、至海中博大之嶋。其地如敷玉。闕臺晻映、樓堂玲瓏。目所不見、耳所不聞。携手徐行、到一太宅之門。女娘曰「君且立此処」、開門入内。即七竪子來、相語曰「是亀比売之夫也」。亦八竪子來、相語曰「是亀比売之夫也」。茲知女娘之名亀比売。及女娘出來。嶼子語竪子等事。女娘曰「其七竪子者、昴星也。其八竪子者、畢星也。君莫怪焉」。即立前引導、進入于内。女娘父母共相迎、揖而定坐。于斯、称説人間仙都之別、談議人神偶会之嘉。乃薦百品芳味。兄弟姉妹等、挙坏獻酥酬。隣里幼女等、紅顔戯接。（中略）但黄昏之時、群仙侶等、漸々退散、即女娘独留。双肩接袖、成夫婦之理。于時嶼子、遺旧俗遊仙都、既逕三歳。忽起懐土之心、独恋二親。故、吟哀繁發、嗟歎日益。女娘問曰「比來観君夫之皃、異於常時。願聞其志」。嶼子對曰「古人言。小人懐土。死狐首岳。僕以虚談。今斯信然也」。女娘問曰「君欲帰乎」。嶼子答曰「僕近離親故之俗、遠入神仙之堺。不忍恋眷、輒申軽慮。所望暫還本俗、奉拝二親」。女娘、拭涙歎曰「意等金石、共期萬歳、何眷郷里、棄遺一時」。即相携徘徊。相談慟哀。遂、□袂退去、就于岐路。於是、女娘父母親族。但悲別送之。女娘取玉匣、授嶼子、謂曰「君終不遺賎妾、有眷尋者、堅握匣、　慎莫開見」。即相分乗船、仍教令眠目、忽到本土筒川郷。即瞻眺村邑、人物遷易、更無所由。<br>爰問郷人曰「水江浦嶼子之家人、今在何処」。郷人答曰「君何処人、問舊遠人乎。吾聞古老等曰、先世有水江浦嶼子。独遊蒼海、復不還來、今経三百餘歳者、何忽問此乎」。即銜棄心、雖廻郷里、不会一親、既逕旬月。乃撫玉匣、而感思神女。於是嶼子、忘前日期、忽開玉匣、即未瞻之間、芳蘭之体、率于風雲、翩飛蒼天。嶼子、即乖違期要、還知復難会。廻首踟躕、咽涙徘徊。于斯、拭涙歌曰（中略）嶼子更、不勝恋望、歌曰（以下略）（前田家本『釈日本紀』巻十二「浦嶋子」条） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 3 | 室町物語草紙『浦島の太郎』 | 大島建彦校注・訳『浦島の太郎』：大島建彦　渡浩一校注・訳『室町物語草子集』、新編日本古典文学全集63、小学館、2002年9月20日第一版第一刷発行、pp. 254-266 | 室町時代 | ●昔、丹後の国に、浦島の太郎とて、朝夕釣をして、世路をいとなみけるが、ある時、ゑじまが磯といふ所にて、大きなる亀を釣りけるが、「亀は万年の齢を経ぬるもの、思ひ知れ」とて、放しける。さても、その頃に帰り、また明けの日釣をせんと思ひ、沖の方へ出でけるに、小さき船一艘見ゆる。さても、不思議や、引き寄せて見ばやと思ひ、引き寄せて、「いかなる人にてましますぞ、かほど漫々としたる海上に、一人見え給ふらん、不思議さよ」と申す。その時、浦島、ふしに思ひて、申しければ、その時、姫君のたまふやう、「みづからは、都方の者にて候ふが、ある船に便船をして候へば、にはかに大風吹きければ、船の者ども騒ぎあひ、一人女を乗せたるものよと申し、枝船降し、みづからを乗せ、流し申し候へば、いかなるゑじまが磯へも行くらんと思ひしに、御身に逢ひ申すこと、うれしく思ひ候へば、あはれ、送りて給はれかし」と嘆きける。その時、姫君、まことに、たつて申させ給へば、浦島も、こは不思議やとは思へども、「さらば、送りて参らせ候はん」とて、同じ船に乗り、いづくをさして出でけるが、船の速く行くこそ不思議なれ。さても、この女房、海の上にて降りけると思へば、こがねの浜へ落ち着き、「こなたへ入らせ給」と、内に呼び入れて申すやう、「みづからは、昨日、ゑじまが磯にて釣られまゐらせし亀にて候ふが、あまりに御身の情嬉しくて、その恩のおくらばやと思ひ、これまで参りて候ふなり。数ならぬ身にて候へども、あはれ、夫婦になり申さん」と語りければ、浦島、不思議やとは思へども、そのまま夫婦の語らひをなし契りける。かりそめとは思へども、はや三年にこそなりにける。ある時、「この竜宮浄土の四方の四季を見せ申さん」とて、立ち出でける。<br>（中略）さて、浦島は、内に帰り、女房に暇をこそ乞ほけれる。「みづからに三十日の暇を給はり候へ。故里に帰り、父母に暇乞して、やがて、帰り候はん」と語りければ、その時、女房、涙を流し、「怨めしき人の心やな。比翼連理とこそ思ひしに、力なし」とて、手箱を一つ参らせける。「御身。この箱の蓋、かまへ開けさせ給ふな」と、かたみの箱を参らせける。浦島も、これを取りて、かたみの箱を船にのせて、涙ながら立ち出でける。女房、あまりの悲しさに、一首かくなん、立ち別れまた見んこともかたければ涙を袖に包みかねけり<br>（中略）<br>たがひに別れの船に乗ると思へば、もとの海へぞあがりける。<br>さて、これや昔のすみかぞと立ち寄り、塚のあたりにて、七十ばかりの翁に行き逢ひて、浦島のことを問ひければ、「それははや、七百歳先」とこそ申しける。浦島、不思議やと思ひ、やうやう御堂を訪ねて参り、流涕焦がれ給ひける。（中略）<br>ある松の下にて、この箱の蓋開けて見ばやと思ひ、開けて見れば、箱の内より煙三筋立つと思へば、顔にかかり、そのまま百歳翁となり給ふ。それよりして、浦島が箱開けて悔しきとは申し伝へける。<br>その後、浦島は鶴に生まれ、亀に戯れをなし、朝夕遊び戯れ給ひける。<br>君が代は千代に八千代をさざれ石の巌となりて苔のむすまで苔のむすまで。 |

**7.2.2 以下の『万葉集』における記述は亀の変身譚ではないが、本論文の亀の変身譚の部分に言及したため、ここに記する。**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 『万葉集』巻九の高橋虫麻呂作の長歌（歌番号1740）に「詠水江浦嶋子一首」 | 小島憲之　木下雅俊校注・訳『万葉集』②＜全四冊＞、新編日本古典文学全集7、2006年8月20日第一版第六刷発行、pp. 413-416 | 奈良時代 | ●春日之　霞時尓　墨吉之　岸尓出居而　釣船之　得乎良布見者　古之事曾所念　水江之　浦嶋兒之　堅魚釣　鯛釣矜　及七日　家尓毛不來而　海界乎　過而榜行尓　海若　神之女尓　邂尓　伊許芸趁　相誂良比　言成之賀婆　加吉結常代尓至　海若　神之宮乃　内隔之　細有殿尓　携　二人入居而　耆不爲　死不爲而　永世尓　有家留物乎　世間之　愚人乃　吾妹兒尓　告而語久　須臾者家歸而　父母尓　事毛告良比　如明日　吾者來南登　言家礼婆　妹之答久　常世邊　復變來而　如今　将相跡奈良婆　此篋開勿勤常　曾己良久尓　堅目師事乎　墨吉尓　還來而　家見跡　宅毛見金手　里見跡　里毛見金手　恠常　所許尓念久　従家出而　三歳之間尓　垣毛無　家滅目八跡　此筥乎　開而見手歯如本　家者將有登　玉篋　小披尓　白雲之　自箱出而　常世邊　棚引去者　立走 叫袖振　反側　足受利四管　頓　情消失奴　若有之　皮毛皺奴　黒有之　髪毛白斑奴 由奈由奈波　気左倍絶而　後遂　壽死祁流　水江之　浦嶋子之　家地見 |

**一次資料（中国）（時代順）**


1 周振甫譯注『周易譯注』、中國古典名著譯註叢書、中華書局、1991年

2 『春秋左傳集解』（全五冊）、 上海人民出版社、1977年

3 陳鼓応注訳『荘子今注今訳（全二冊）』（修訂本）、道典詮釈書系、商務印書館、2007年

4 何寧撰『淮南子集釋』（全三冊）、新編諸子集成第一輯、中華書局、1998年

5 司馬遷撰・（索引）司馬貞・（正義）張守節『史記』（全十冊）、中華書局、1959年

6 無名氏撰・程毅中點校 葛洪撰『燕丹子 西京雜記』、古小說叢刊、中華書局、1985年

7 桓譚撰『新論』、『四部叢刊三編』、古籍

8 班固撰・顏師古注『漢書』（全十一冊）、中華書局、1962年6月第1版、1964年第2次印刷

9 黃暉撰『論衡校釋』（全四冊）、新編諸子集成（第一輯）、中華書局、1990年

10 許慎撰・段玉裁注『說文解字注』、上海古籍出版社、1981年

11 王明著『抱樸子內篇校釋』、新編諸子集成、中華書局、1986年3月第二版、1996年

12 酈道元原著・陳橋驛 葉光庭 葉揚譯註『水經注全譯』中國歷代名著全譯叢書、貴州人民出版社、1996年

13 干寶撰・汪紹楹校注『搜神記』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1985年

14 陶潛撰・汪紹楹校注『搜神後記』、古小說叢刊、中華書局、1981年

15 劉敬叔撰　陽松玠撰・範寧點校『異苑　談藪』、古小說叢刊、中華書局、1996年

16 慧皎撰『高僧傳』、『趙城金藏』本、古籍、参照URL:http://ctext.org/wiki.pl?if=gb&res=712646

17 唐臨撰 戴孚撰・方詩銘輯校『冥報記　廣異記』、古小說叢刊、中華書局、1992年

18 李冗撰 張讀撰・張永欽 侯志明點校『獨異誌　宣室志』、古小說叢刊、中華書局、1983年

19 段成式撰・方南生點校『酉陽雜俎』、中華書局、1981年

20 陸廣微撰『吳地記』、江蘇地方文獻叢書、江蘇古籍出版社、1999年

21 李冗撰 張讀撰・張永欽 侯志明點校『獨異誌 宣室志』、古小說叢刊、中華書局、1983年

22 孫光憲撰・賈二強點校『北夢瑣言』、歷代史料筆記叢刊・唐宋史料筆記、中華書局、2002年

23 李昉等撰『太平御覽』<全四冊>、中華書局、1960年2月第一版 1995年10月第5次印刷

24 李昉等撰『太平廣記』<全十冊>、中華書局、1961年第一版1986年3月第3次印刷

25 『茅亭客話』一巻（舊小説所収）、舊小説丁集宋、東京大学東洋文化研究所所蔵漢籍善本全文影像資料庫、参照URL:http://shanben.ioc.u-tokyo.ac.jp/main_p?nu=B2813100&order=rn_no&no=00416&im=0100050&size=small&pg=4

26 劉斧撰輯・張夢錫校『青瑣高議』、山口大学図書館「棲息堂文庫」所蔵 『青瑣高議二十巻』、参照URL:http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/collection/rb/RB00000014

27 李獻民撰・程毅中 程有慶點校『云齋廣錄』、古小說叢刊、中華書局、1997年

28 孟元老撰・鄧之誠注『東京夢華錄注』、中國古代都城資料選刊、中華書局、1982年

29 洪邁撰・何卓點校『夷堅志』＜全四冊＞、中華書局、1981年

30 元好問撰・常振國點校　無名氏撰・金心點校『續夷堅志 湖海新聞夷堅續志』、古體小說叢刊、中華書局、1986年第1版2006年第2版

31 無名氏撰 元好問撰・金心點校 常振國點校『湖海新聞夷堅續志 續夷堅志』、古體小說叢刊、中華書局、1985年

32 瞿佑撰『剪燈新話』、古籍、参照URL:http://ctext.org/library.pl?if=gb&res=81288

33 李昌祺編撰・黃正位訂定『剪燈餘話』、古籍、年代不詳

34 馬歡原著・萬明校注『明鈔本瀛涯勝覽校注』、海洋出版社、2005年

35 田汝成撰『西湖遊覽志餘』、欽定四庫全書、影印古籍、参照URL:http://ctext.org/library.pl?if=gb&res=6683

36 郎瑛著『七修類稿』、歷代筆記叢刊、上海書店出版社、2001年

37 陸楫編『古今説海』：永瑢 紀昀等纂修、『景印文淵閣四庫全書』子部雜家類183、臺灣商務印書館、1986年3月初版

38 陸粲撰 顧起元撰・譚棣華 陳稼禾點校『庚巳編 客座贅語』、『元明史料筆記叢刊』、中華書局、1987年

39 錢希言撰『獪園』、長塘鮑氏知不足斎、古籍 http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko19/bunko19_f0191/

40 謝肇淛撰『五雜俎』、歷代筆記叢刊、上海書店出版社、2001年

41 馮夢龍撰『馮夢龍全集2 警世通言』、鳳凰出版社、2007年

42 古吳墨浪子搜輯『西湖佳話』、影印古籍、参照URL:http://ctext.org/library.pl?if=gb&res=81264

43 『古今圖書集成』正文圖像、参照URL:http://gjtsjc.gxu.edu.cn/image.aspx

44 紀昀撰『閱微草堂筆記』、上海古籍出版社、1980年

45 蒲松齡著・朱其鎧等校注『全本新注 聊齋志異』＜共三册＞、中國古典文學讀本叢書、人民文學出版社、1989年

46 李慶辰著・金東点校『醉茶志怪』、歷代筆記小説叢書、斉魯書社、2004年

47 房玄齡等撰『晉書』、中華書局、1974年

**一次資料（日本）（時代順）**


1 山口佳紀　神野志隆光校注・訳『古事記』、新編日本古典文学全集1、小学館、2007年8月5日第一版第七刷発行

2 小島憲之　木下雅俊校注・訳『万葉集』②＜全四冊＞、新編日本古典文学全集7、2006年8月20日第一版第六刷発行

3 小島憲之　直木孝次郎　西宮一民　蔵中進　毛利正守校注・訳『日本書記』①②＜全三冊＞、新編日本古典文学全集2・3、小学館、2006年6月20日第一版第四刷発行

4 植垣節也校注・訳『風土記』、新編日本古典文学全集5、小学館、2006年8月20日第一版第五刷発行

5 植垣節也校注・訳『風土記』、新編日本古典文学全集5、小学館、2006年8月20日第一版第五刷発行

6 中田祝夫校注・訳『日本霊異記』、新編日本古典文学全集10、小学館、1995年

7 源順撰『和名類聚抄』、那波道円、元和3、古典籍、国立国会デジタルコレクション

8 井上光貞 大曾根章介校注『往生傳　法華験記』、日本思想大系7、岩波書店、1974年第1刷発行

9 馬淵和夫 国東文麿 稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』＜全4冊＞、新編日本古典文学全集（35－38）、小学館、①:1999年　②:2003年　③:2008年　④:2008年

10 源顕兼［他］著『古事談』、古典籍、国立国会図書館デジタルコレクション

11 小林保治 増古和子校注・訳『宇治拾遺物語』、新編日本古典文学全集50、小学館、2008年12月24日第一版第五刷発行

12 市古貞次校注・訳『平家物語』②＜全2冊＞、新編日本古典文学全集46、小学館、2006年8月20日第一版第五刷発行

13 橘成季撰、西尾光一　小林保治校注『古今著聞集』下、新潮日本古典集成第76回、新潮社、1986年

14 渡辺綱也校注『沙石集』、日本古典文学大系85、岩波書店、昭和41年(1966年)

15 『木幡狐』：市古貞次校注『御伽草子』、日本古典文学大系38、岩波書店、昭和33年(1958年)

16 『玉水物語』：塚本哲三編輯『御伽草紙』、有朋堂文庫、大正7年(1918年)

17 『浦島の太郎』（大島建彦校注・訳）：大島建彦　渡浩一校注・訳『室町物語草子集』、新編日本古典文学全集63、小学館、2002年9月20日第一版第一刷発行

18 『玉藻前の草子』：京都大学附属図書館所蔵　［玉藻の前（冊子体）］　古典籍。あらすじは http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/otogi/tamamo/tamamo.html参照

19 『田村の草子』:横山重　松本隆信編『室町時代物語大成』第九（全十五巻）、角川書店、昭和六十二年（1987年）

20 『俵藤太物語』：松本隆信校注『御伽草子集』、新潮日本古典集成（第三四回）、新潮社、昭和五十五年(1980年)

21 『浄瑠璃十二段草紙』：松本隆信校注『御伽草子集』、新潮日本古典集成（第三四回）、新潮社、昭和五十五年(1980年)

22 『天稚彦草子』：松本隆信校注『御伽草子集』、新潮日本古典集成（第三四回）、新潮社、昭和五十五年(1980年)

23 『法妙童子』：横山重　松本隆信編『室町時代物語大成』第十二（全十四巻）、角川書店、昭和五十九年二月二十九日初版発行（1984年）

24 『地蔵堂草子』：松本隆信編『室町時代物語大成』補遺二、角川書店、1988年

25 『信太妻』：荒木繁・山本吉左右編注『説経節　山椒太夫・小栗判官他』、東洋文庫243、1973年11月10日初版第１刷発行、1988年12月20日初版第16刷発行

26 高田衛編・校注『江戸怪談集』（下）［全3冊］、岩波文庫30-257-3、岩波書店、1989年

27 浅井了意　吉田幸一編『新語園』＜下＞（寛文十二年板複製）、古典文庫420冊、帝都印刷製本株式会社、1981年

28 丹岳野必大千里著『本朝食鑑』、平野氏傳左衛門・平野屋勝左衛門、元禄10年（1697年）、古典籍、国立国会図書館デジタルコレクション

29 三坂春編『老媼茶話』：田山花袋　柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫 / 博文館編輯局校訂 第47編、博文館、1903年

30 神谷養勇軒『新著聞集』：田山花袋　柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫 / 博文館編輯局校訂 第47編、博文館、1903年

31 池田屋平三郎『三州奇談』：田山花袋　柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫 / 博文館編輯局校訂 第47編、博文館、1903年

32 池田屋平三郎『三州奇談後編』：田山花袋　柳田國男校訂『校訂近世奇談全集』、續帝國文庫 / 博文館編輯局校訂 第47編、博文館、1903年

33 『雨月物語』高田衛校注・訳：中村幸彦　中村博保　高田衛校注・訳『英草紙　西山物語　雨月物語　春雨物語』、新編古典文学全集78、2003年7月20日第一版第三刷発行

34 根岸鎮衛著、鈴木棠三編注『耳袋』1,2、東洋文庫207,208、平凡社、1972年